

弟子をつくる指導者

**The Disciple-Making Minister**

デイヴィッド サーヴァントの主な著書

「キリストの驚くべき十字架」 (*Christ's Incredible Cross*)

「もっと早くこれを言いたかった！」 (*Forgive Me for Waiting so Long to Tell You This*)

「神からの試し」 (*God's Tests*)

「サタンと霊的戦いについての現代神話」

(*Modern Myths About Satan and Spiritual Warfare*)

「今までで最高の年」 (*Your Best Year Yet*)

「福音における最大のいつわり」 (*The Great Gospel Deception*)

# 弟子をつくる指導者

豊かに実り増え広がるための聖書の原則

デイヴィッド S. サーヴァント

エトノス出版社

ピッツバーグ、ペンシルヴァニア

弟子をつくる指導者

豊かに実り増え広がるための聖書の原則

第二版 2010年1月

Copyright ©2005 by David Servant. All rights reserved.

著作権保有者の書面による許可なく、この本のいかなる部分のいかなる形式による複製を禁ずる。但し、短い引用を含む書評についてはその限りではない。

原本における聖書の引用は、脚注にて説明のない限り、ロックマン財団の許可の下、同財団のNASB(ニュー・アメリカン・スタンダード訳)(©1960, 1962, 1963, 1971, 1972, 1973, 1975, and 1977 by The Lockman Foundation)を使用している。

表紙デザイン チャリティー・マックダニエル

Printed in the United States of America

ISBN: 978-0-9629625-8-5

\*本書中の聖書の引用は、日本聖書刊行会の「新改訳聖書」を使用した。

世界中の多くの献身的なクリスチャン指導者たちに捧げます。  
彼らの持つ神から頂いた情熱は、イエス・キリストの福音をそ  
の村々、町々、更には国々へと及ぼせることでしょう。

「そうすれば、大牧者が現われるときに、あなたがたは、しば  
むことのない栄光の冠を受けるのです」 (第一ペテロ 5:4)。



## 謝辞 (Acknowledgements)

特別な感謝を三世代に渡るとても特別な女性たちへ捧げます。  
校正と励ましを与えてくれた私の妻、ベッキーへ、そして全ての分離不定詞を見つけてくれた私の母であり英語専攻のラ・ヴェルナ・サーヴァントへ、更に表紙デザインと文字のレイアウトを担当してくれた私の娘、チャリティーへ。

人は一人でいるのは良くない、とは実にその通りです。

## 目次 (Contents)

はじめに (Introduction).....	i
1. 正しい目標を設定する (Setting the Right Goal).....	1
2. 正しく始める (Beginning Rightly).....	18
3. 正しく続ける (Continuing Properly) .....	39
4. 家の教会 (House Churches) .....	53
5. 教会の成長 (Church Growth).....	85
6. 教えの務め (The Ministry of Teaching).....	99
7. 聖書の解釈 (Biblical Interpretation).....	133
8. 山上の垂訓 (The Sermon on the Mount) .....	165
9. イエスの好む説教者 (Jesus' Favorite Preacher).....	215
10. 新しい誕生 (The New Birth) .....	225
11. 聖霊のバプテスマ (The Baptism in The Holy Spirit) .....	239
12. 女性のミニストリー (Women in Ministry) .....	259
13. 離婚と再婚 (Divorce and Remarriage).....	279
14. 信仰の基礎 (Fundamentals of Faith).....	309
15. 神のいやし (Divine Healing) .....	325
16. イエスのいやしのミニストリー (The Healing Ministry of Jesus) .....	343
17. 聖霊の賜物 (The Gifts of the Spirit).....	359
18. 務めの賜物 (The Ministry Gifts).....	377
19. キリストにある現実 (In-Christ Realities).....	403
20. 賛美と礼拝 (Praise and Worship) .....	411
21. クリスマンの家庭 (The Christian Family) .....	419
22. 御霊によって導かれる方法 (How to Be Led by the Spirit) .....	431
23. 礼典 (The Sacraments).....	443
24. 問題提起、赦し、そして和解 (Confrontation, Forgiveness and Reconciliation).....	451
25. 主の懲らしめ (The Discipline of the Lord).....	471
26. 断食 (Fasting) .....	477
27. 死後 (The Afterlife).....	487
28. 神の永遠のご計画 (God's Eternal Plan) .....	505
29. 携挙と後の日 (The Rapture and End Times) .....	521
30. 現代の霊的戦いについての迷信ー前篇 (Modern Myths About Spiritual Warfare, Part1) ...	563
31. 現代の霊的戦いについての迷信ー後編 (Modern Myths About Spiritual Warfare, Part2) ...	615
32. 管理責任 (Stewardship).....	671
33. 伝道の秘訣 (Secrets of Evangelism) .....	693
終わりに (Final Words) .....	717







## はじめに (Introduction)

幸いにも、私は過去三十五年間に世界五十カ国以上を旅し、三から五日間に及ぶカンファレンスの中で数万人の牧師をはじめとする指導者たちへ話す機会が与えられました。それらのカンファレンスには、キリストの御体にある様々な宗派から、多くの献身的なクリスチャン指導者たちが参加してきました。私が旅毎に痛感したのは、それぞれの場所で実際にある必要に応えるのに、このような三から五日間のカンファレンスでは到底足りないという事でした。クリスチャン指導者たちがその務めに対して十分備えられるには、まだまだ多くの必要が残されていて、本書が少しでもそれに応えられるよう試みました。

私にはまた、二十年以上に渡り複数の教会を牧する特権が与えられました。見方によっては、私は「成功」したと言えますが、実際は、聖書に書いてある務めについての極めて基本的な理解に欠けていた為に、その多くの日々を私は格闘していました。結果として、以前の私と同様にこの理解に欠け、その務めを果たす為に更なる備えが必要な、多くの敬虔な指導者たちに対して、私は重荷を持つようになりました。それらの教えには大変重要なものも含まれ、それらを一度理解すれば、指導者としての残りの人生の中で、その務めの方向性を定めてくれます。それらの教えは、自分に与えられた務めをあらゆる角度から測る基準となります。それらの基礎の教えは本書の最初の数章で記されていて、それらを理解しないまま読み進めても、実際には役に立た

## 弟子をつくる指導者

ない為、読者は見落とさないよう注意してください。

本書は特に、最も一般的なクリスチャン指導者と言える牧師向けに書きましたが、その内容は全て、伝道者、教師、宣教師、教会開拓者、預言者、日曜学校の奉仕者など、他にも多くの人に適用されます。キリストの御からだに属する人なら誰でも、神に与えられた役割を持って御からだを美しく飾っているのですから、本書を読むことが益とならないということは決してありません。

私は、主に北米、西欧、オーストラリア・ニュージーランド以外に住む指導者向けに書きました。しかし、それは本書がそれらの地域に住む指導者に適用しない訳ではありません。本書はそれらの地域の指導者にもかなり役立つでしょうが、それらの地域には既に沢山の教師が存在します。いずれにしても、あなたの知識や経験、またあなたが召されている国によって、本書のある章は他の章よりも役立つように思うかもしれません。例えば、家庭集会について書かれた章は、中国、キューバ、ベトナムで家庭集会を持つ牧師にとって、新しい内容は殆どありませんが、逆に家庭集会スタイルについてあまり知らない牧師たちにとっては、とても役立つ章となるでしょう。

本書の全ての内容に全ての読者が同意することはほぼあり得ないでしょう。10年前の私も、本書にあるいくつかの内容には同意できなかったことでしょう！ですから、ちょっとした意見の違いで、各章から最大限に習得する折角の機会を妨げられないように気を付けてください。

イエスが私たちに教えたように、誰も新しいワインを古い皮袋には入れません。そうでなければ、硬くて柔軟性のない古い皮袋は破けてしまいます。新しいワインの発酵の圧に耐えられるだけの柔軟さを持つのは、新しい皮袋だけです。本書の内容のいくつかは、新しいワインと見なされるかもしれませんが、実際はかなり古いワイン—少なくとも、新約聖書並みに古いものです。ですから、古い皮袋が破れるのは、本書の各ページから注がれるワインのせいではありません！イエスは、神がその真理を幼子たちに現し、「賢い者や知恵のある者」からは隠されていることを喜びました（マタイ 11:25）。そのように、神はへり下る者に恵みを授け、高ぶる者を退けます（ヤコ

## 弟子をつくる指導者

ブ 4:6 参照)。世界中の大勢の謙虚なクリスチャン指導者たちを神に感謝します。本書を読み進めることで、主よ、彼らを祝福してください。

デイヴィッド サーヴァント



## 第一章

### 正しい目標を設定する (Setting the Right Goal)

神の目に成功者となるには、指導者は神がその人に与えている目標について理解することが大変重要です。指導者が目標を理解していないなら、その目標を達成できたかどうか、評価しようがありません。<sup>1</sup>そのような指導者は、実際は失敗しているのに、自分は成功していると思ってしまうかもしれません。それは大変な悲劇です。それは、千六百メートル走に参加しているとは知らずに、八百メートル地点をゴールと思い込んで大喜びでダッシュし、歓声を上げる観客の前で両手を上げて、勝手に勝利を実感しているようなものです。目標の誤解は、必ず失敗を生みます。勝ったと思い込むことが、その人の負けを決定的なものとしませす。「先のものが後になる」という言葉が現実となる良い例です。

指導者が具体的な目標のいくつかを「幻」と呼ぶことがよくあります。指導者たちは、彼らの具体的な呼びと賜物に基づいて、独自に必死になって幻を現実化させようとします。それが、ある町で教会を牧することでも、ある宗教を伝道することでも、またはある真理を教えることでも、それぞれに与えられた賜物や呼びは確かにその人特有のものです。しかし、私がここでいう神に与えられた目標とは、**一般的で、すべ**

---

<sup>1</sup> 1本書を通して、単純に一貫性を保たせる為と、牧師という職業の殆どが男性である為、指導者を男性代名詞「彼(he)」に置き換えている。しかしながら、私は聖書から、神は女性を牧師職に召すことも知っており、実際に活躍する女性指導者を沢山知っている。このことについては、「女性指導者」という章で取り扱っている。

## 弟子をつくる指導者

での指導者に当てはまるものです。それは大きな幻です。それぞれに与えられた特有の幻の裏で、この一般的な幻が原動力となっているべきですが、多くの場合、そうではありません。大勢の指導者たちの持つ具体的な幻は、神の一般的な幻と合致しないだけでなく、それに反している時もあります。私自身も、かつて成長過程にある教会の牧師をしている頃、確かに一度そのようなことをしました。

神がそれぞれの指導者に与える一般的な目標または幻とは一体何でしょう。その答えはマタイ二十八章十八から二十節に見つけられます。あまりにも馴染みのある聖句で、ここで言っていることを見逃してしまいがちですが、一節ずつ見ていきましょう。

イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。（マタイ 28:18）

イエスは弟子たちに、御父がご自身に最高の権威を授けておられることを理解することを望んでいました。御父が人に権威を授ける時はいつもそうですが、御父の御旨は人がイエスに従うことでした（現在もそうです）。しかし、イエスの場合は、御父が天においても、地においても、いっさいの権威をお授けになった点で、御父が人に授ける限定的な権威とは異なり、唯一のものです。イエスこそ主なのです。

更に言うと、イエスを主として認めてない人は、イエスと正しい関係にあるとは言えません。イエスは、まず何よりも、主なのです。イエスが「主」という言葉で参照されている箇所が新約聖書の中に六百以上あることから見てもわかります。（ちなみに、「救い主」としては十五箇所しかありません。）だからこそ、パウロは手紙の中に、「キリストは、死んだ人にとっても、生きている人にとっても、その主となるために、死んで、また生きられたのです。」（ローマ14:9、一部強調）と記しました。イエスは死んで、また生き返った理由は、人々の主として君臨するためなのです。

### 本当の救いに至る信仰 (True Saving Faith)

最近の伝道者や牧師は、まだ救われていない者たちに「イエスを救い主として受



### 正しい目標を設定する

け入れる」よう招きますが(このような言葉や考えは聖書のどこにも見当たりません)、これは大抵、福音への理解に根本的な欠陥があることを表しています。例えば、ピリピの看守がパウロに救われるためには、何をしなければならないかを尋ねた時、パウロは「イエスをあなたの救い主として受け入れなさい」とは言いませんでした。むしろ、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたは救われる」(使徒16:31、一部強調)と言いました。人々は、主イエス・キリストを信じると救われます。人は救いやイエスについての教えを信じることでは救われず、主イエス・キリストという方を信じることで救われます。これこそが救いに至る信仰です。あまりにも多くの人が、イエスの死は自分の罪のための十分ないけにえであるとか、救いは信仰によるとか、イエスや救いについての他の色々なことで、自分は救いに至る信仰を得たと思い込んでいます。しかし、そうとは限りません。悪霊すらイエスや救いについてのそれら全てのことを信じています。救いに至る信仰は、イエスにある信仰から成ります。ではイエスとは誰でしょう。彼こそが主です。

私がイエスを主と信じれば当然のことながら、私はイエスを主として行動し、私は心から彼にひれ伏すこととなります。逆に私がイエスにひれ伏していないのなら、彼を信じているとは言えません。もし誰かが、「私の足元に死に至らず程恐ろしい毒蛇がいる気配がする」と言いながら、冷静にそこへ足を置くなら、自分が言っていることを本当は信じていないことは明らかです。イエスを信じていると言っておきながら、自分の罪を悔い改めず、心からイエスに服従していないのなら、その人はイエスを本当には信じていません。その人たちは想像のイエスを信じていますが、主イエス、つまり天と地にある全ての権威を持つ方を信じてはいません。

ここまででわかることは、キリスト教の最も基本的なメッセージにおいて、指導者の理解に欠陥があるなら、その指導者は初めから問題の中にいるということです。神が世に聞いて欲しい、最も基本的なメッセージを指導者が正しく示していないのなら、その人に神から見る成功はありません。その人が成長過程にある教会の牧師であっても、神がその人の務めに対して持つ大きな幻が成就されるのは、到底不可能です。

弟子をつくる指導者  
大きな幻 (The Big Vision)

マタイ二十八章十八から十九節へ戻りましょう。イエスの最高地位を宣言した後、イエスはひとつの命令を下します。

それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子と  
しなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマ  
を授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべての  
ことを守るように、彼らを教えなさい。(マタイ 28:19-20前  
半)

イエスが「それゆえ」という言葉を使ったことに注目してください。イエスは、「それゆえ、あなたがたは行って...弟子をつくりなさい」と言いました。つまり、「今私が言ったことの故に...、私には全ての権威が与えられている故に...、私が主であるが故に...、人々は当然私に従うべきである...。従って、私があなたに命ずるのことは(あなたは私に従うべきで)行って弟子をつくり、その弟子たちに私の全ての命令を守るよう教えることだ。」と語っています。

そして、一般的な目標、つまり私たちの全ての務めに対して、神が持つ偉大な幻は、簡単に言うと、私たちの責任はキリストの命令を全て守る弟子をつくるということです。

だから、パウロは「あらゆる国の人々の中に信仰の従順をもたらすため」(ローマ1:5、一部強調)使徒としての神の恵みを授かったと言いました。目標は従順でした。従順への手段は信仰でした。主イエスに対して真の信仰を持つ人は、主の命令に従います。

だから、ペテロは五旬節の日にこう説教しました。「ですから、イスラエルのすべての人々は、このことをはっきりと知らなければなりません。すなわち、神が、今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです」(使徒2:36)。ペテロは、神がイエスを主とし、キリストとしたことを、キリストを十字架につけた人々にわかって欲しかったのです。神が彼らに従って欲しかった相手を、

## 正しい目標を設定する

彼らは殺してしまいました！大きな咎めの下、彼らは「私たちはどうしたらよいでしょうか。」と尋ね、ペテロはまず最初に、「悔い改めなさい」と答えました！それは、不従順を従順に変え、イエスを主とすることです。次にペテロは、キリストが命じた通り、彼らにバプテスマを受けるよう勧めました。ペテロは弟子を一従順にキリストに従う者をつくることを、この正しいメッセージを使って、正しく始めました。

このように、全ての指導者は各々自分の成功についてきちんと評価できなくてはなりません。つまり、私たちは自分自身に、「私は務めの中で、キリストの命令の全てを守るように人々を導いているか。」と問わなくてはなりません。もしできていれば成功していると言えますが、もしできていないなら、私たちは失敗をしているということになります。

罪からの悔い改めについて教えずに、ただ「イエスを受け入れる」よう説得するような伝道者は失敗をしています。なるべく皆を喜ばせ、たくさんの社会的な活動をまとめることで、大きな会衆を建て上げようとしている牧師は失敗をしています。最近流行りのカリスマ的な教えしか教えない教師は失敗をしています。イエスを信じるという人で成る教会を植えても、その人たちにキリストへの従順がないのならその使徒は失敗をしています。人々に素晴らしい祝福がもうすぐ来るとのことしか言わないような預言者は失敗をしています。

## 私の失敗 (My Failure)

何年前に、成長過程にある教会の牧師をしていた時に、聖霊が私に語ったことは、私の霊の目を開かせました。それは、私がしてきたことが、神の大きな幻の成就にいかに程遠いかを示してくださいました。マタイ二十五章三十一から四十六節の羊と山羊を分ける、後の裁きについて読んでいた時、聖霊は私に次の質問をしました。「もしあなたの教会員全員が今日死んで、裁きの座についたら、その内の何人が羊で何人が山羊だろうか。」もしくは、更に具体的に言うなら、「過去一年間で、あなたの教会員の何人が、空腹のキリストにある兄弟姉妹に食べ物を施し、喉が渇くクリスチャンに水を与え、キリストを信じるホームレスや旅人に家を解放し、裸のクリスチ

## 弟子をつくる指導者

「ヤンに服を着せ、病に伏せる、または牢獄にいる信者を訪れただろうか。」私の民は教会に集い、賛美を捧げ、私の説教を聞き、献金もしますが、聖霊が言ったそのようなことも、それに似たようなことも、行っている人は非常に少ないことに私は気づかされました。従って、キリストの基準から見ると彼らは山羊であり、私は少なからずその責任を問われます。なぜなら、キリストにある兄弟姉妹のそのような差し迫った必要に私たちが応えることが、神にとってどれほど大切なことかということ私に民に教えていなかったからです。私は、キリストの命令の全てに従うことを民に教えていませんでした。実に、私は神にとって非常に大切な、最大の戒めの二つ目である、隣人を自分のように愛することを、あまり重要視していなかったことに気づかされました。キリストが私たちを愛したようにお互いを愛するという、イエスが私たちに与えた新しい教えについてはなおさらのことです。

それ以上に、当時とても人気のあった「繁栄の福音」を私が教会で控えめにではありますが教えていたことは、実に、弟子づくりという神の大きな目標に逆う働きとなっていたことに段々と気づかされました。神の民は地上に宝を積まないこと（マタイ6:19-24参照）、また例え食べ物と着物しかなくても、持っているもので満足すること（ヘブル13:5、第1テモテ6:7-8参照）がイエスの御旨であるにもかかわらず、私はアメリカの裕福層の民に、更なる財産の所有が神の御旨であることを教えていました。私はこの点について、（世界中にいる他の何十万人の牧師たちと同様に）人々にイエスに従わないよう教えていたのです。

自分がしていることに気づいてから、私は悔い改め、教会の民に赦しを求めました。私は、キリストの命じる全てに従うことを教えて、弟子づくりを試み始めました。私の教会員の中にはキリストの命令に本当は従いたくなく、自分側には何のいけにえも要求しない便利なキリスト教を好んでいる人がいることを薄々感じながらも、私は恐れおののきながら弟子づくりをしました。そして、私の思いは当たっていました。あらゆる点から考えて言えることは、かなりの人たちは世界中の苦しんでいる信者について気にも留めていませんでした。その人たちは、福音を聞いたことのない人たち

## 正しい目標を設定する

に福音を広めることに関心がありませんでした。むしろ、彼らは、自分の取り分を増すことに第一の関心がありました。聖さということになると、その人たちは、改心していない人たちですら非難するような、明らかに恥ずべき罪だけを避け、一般の保守的なアメリカ人となんら変わらない生活をしていました。私たちのイエスへの愛を表す、まさに愛そのものである、イエスの命令への従順を、その人たちは望まなかったことから、実のところ彼らは主を愛していませんでした（ヨハネ14:21参照）。

私が恐れたことが実証されました。すなわち、クリスチャンと明言している人たちの中に、羊の皮を被った山羊がいました。その人たちに自分を捨て、自分の十字架を負うことを働きかけると、彼らは怒りました。その人たちにとって教会は、世が酒場で楽しむのと同じように、心地良い音楽に合わせて行う社会的体験に過ぎませんでした。彼らの救いと彼らへの神の愛を保障すれば、そのような人たちは説教にも耐えますが、神が彼らに要求していることを聞くことは拒みました。そのような人たちは自分の救いを誰にも疑われたくありませんでした。彼らは、何か犠牲が伴うなら、神の御旨に沿って自分の人生を調整することを好みませんでした。そして勿論そのような人たちは、神が彼らの与える以上に返してくださることを彼らが納得し、例えば教会の施設を彼らのお金で修繕するといったような、与えることで彼ら自身に直接利益があるなら、喜んで自分のお金の一部を分けました。

## 自己評価の時 (A Time for Self-Examination)

今この本を読んでいる指導者たちは、「もし私の指導下にある人たちがたった今死に、羊と山羊に分ける裁きの御座に立つ時、何人の人が羊で、何人の人が山羊としてより分けられるだろうか。」という私が聖霊に聞かれた同じ質問を、自分自身にするのにちょうど良い時かもしれません。指導者が、山羊のように振る舞う教会員に、彼らが救われていることを指導者として保障する時、その指導者は、神が彼らに聞いて欲しいこととは全く逆のことを言っていることになります。その指導者はキリストに反した働きをしています。マタイ二十五章三十一から四十六節から、イエスがそのような人々に学んで欲しいと願っていることに、その指導者は敵対しています。イエ

## 弟子をつくる指導者

スの話の要点は、山羊を警告することにあります。イエスは山羊に、自分は天国へ行けると思って欲しくないのです。

イエスはすべての人は、お互いへの愛によってイエスの弟子だとわかると言いました（ヨハネ13:35参照）。当然のことながら、イエスは、クリスチャンではない人たちがお互いに表す愛を超える愛のことを語っていたに違いありません。さもないと、イエスの弟子と未信者の区別がつけられなかったでしょう。イエスが語った愛とは、イエスが私たちを愛したように、私たちも自分自身の命をお互いのために捧げるといふ自己犠牲の愛です（ヨハネ13:34、第一ヨハネ 3:16-20参照）。またヨハネは、私たちが死からいのちに移った、つまり生まれ変わったとわかるのは、私たちがお互いを愛する時だと書きました（第一ヨハネ 3:14）。キリストの命令を教える指導者に対して文句を言ったり、反対発言をしたり、憎んでいるような人たちは、生まれ変わりを体験した人の証拠としての愛を身に着けていると言えるでしょうか。いや、彼らは山羊であって、地獄に向かって進んでいます。

### 世界中の弟子たち (Disciples of All Nations)

先に続ける前に、イエスが弟子たちに与えた大宣教命令であるマタイ二十八章十九から二十節から、他の真理を垣間見れるか、もう一度見てみましょう。

それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子となさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。」（マタイ 28:19-20前半）

イエスはあらゆる国で弟子を作りたいことに注目してください。元のギリシャ語によると、世界中のあらゆる民族と、より正しく記されています。これをイエスが命令したのなら、私はそうなることを信じるよう導かれます。私たちは世界中のあらゆる民族、種族をイエスの弟子とできません。この仕事は最初の十一弟子だけに与えられたものではなく、その後続く弟子全員に与えられています。というのは、イエスは十一弟子にイエスが彼らに命じた全ての命令を守り行うように彼らの弟子たちに教

## 正しい目標を設定する

えるよう言ったからです。つまり、最初の十一弟子は彼らの弟子たちにあらゆる国で弟子をつくるというキリストの命令に従うよう教え、これが次々と後に続く弟子たちへの半永久命的な命令となります。イエスの弟子は一人残らず、あらゆる国で弟子をつくる働きに何かしら関わるべきなのです。

これは部分的になぜ「大宣教命令」がまだ成就していないかを説明しています。自分はクリスチャンだと明言する人は何百万人といいますが、イエスに従順で忠実な本当の弟子の数は実に少ないのです。クリスチャンであることを明言する多くの人は、キリストの命令に従うことに単に忠実でない為、全ての民族で弟子がつくられることについて気に留めていません。この議題が挙がると「それは私の務めではない」とか、「そのような導きを受けているような感じがしない」等の言い訳をよく使います。多くの牧師がそのようなことを言い、それは自分のアジェンダにちょうど合うキリストの命令だけを選ぶ、山羊がすることと同じです。

もし形だけのクリスチャンが本当に主イエス・キリストを信じれば、すぐに世界中の全ての人々が福音を聞くことになるでしょう。キリストの弟子がひとつとなって献身することでこれは可能です。そうすれば、彼らは時間やお金を一時的で世的なことに費やすことをやめ、彼らの主がせよと命じることの成就に使うようになるでしょう。しかし実際は、敬虔な牧師が、今度の礼拝で宣教師が話す予定であることを会衆に知らせると、その牧師は出席数が減少することを大抵予想できます。多くの山羊が家や他の場所にいます。彼らは、主イエス・キリストの最後の命令に忠実であることに全く関心がありません。一方羊は、あらゆる国の弟子を作る働きに関わることにある可能性にいつも興奮しています。

マタイ二十八章十八から二十節について、最後にもうひとつ言えることは、イエスは弟子たちに、彼らの弟子にもバプテスマを授けるように言い、使徒たちは忠実にその命令を守りました。彼らはすぐに、悔い改めて主イエスを信じる人々にバプテスマを授けました。バプテスマは、ご存知の通り、信者がキリストの死、埋葬、そして復活を同じように体験することを表しています。新しく信者となった人たちは死んで、

## 弟子をつくる指導者

キリストにあって新しく生まれ変わって復活しました。イエスは新しい信者一人ひとりのバプテスマの中にこの真理を劇的に表し、新しい性質を持って生まれ変わったことをその人の心の中に刻みたいのです。その人は今、キリストとひとつの霊となり、内に住むキリストによって神に従う力が与えられています。以前は罪に死んでいた者が、今は聖められ、聖霊によって生かされました。その人は、「ただ赦された」だけでなく、それ以上です。むしろ、その人は劇的に変えられました。つまり、神はここでもう一度、本当の信者が、霊的に死んでいた時とは全く違う行動をとることを示唆しています。このことは、イエスの最後の言葉、「また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」（マタイ28:20）にも確かに示されています。人々が持つキリストの絶え間ないご臨在がその人の行動に影響していると思うことは理にかなっていないでしょうか。

### イエスの弟子づくりの定義 (Jesus Defines Discipleship)

ここまでに、イエスが私たちに与える、第一の優先目標は、私たちが弟子、つまり、罪を悔い改め、主の命令に学び従う人をつくることであることがわかりました。イエスは更にヨハネ八章三十二節で弟子についてこう定義しています。

「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」

イエスによると、本当の弟子は、イエスのことばにとどまり、そこを家とする人たちのことです。イエスのことばから真理を学ぶと、その人たちは確実にどんどん「自由にされ」、その後を続けて読むと、イエスは罪からの解放を示唆していることがわかります（ヨハネ8:34-36参照）。従ってイエスの定義からも、弟子とはイエスの命令を学び、従う人たちを意味すると言えます。

後にイエスはこう言われました。

あなたがたが多くの実を結び、わたしの弟子となることによっ



## 正しい目標を設定する

て、わたしの父は栄光をお受けになるのです（ヨハネ 15:8、一部強調）。

つまり、イエスの定義によると、弟子は実を結ぶことで神に栄光を帰します。実を結ばない人はイエスの弟子とは言えません。

イエスは更に具体的に、ルカの十四章二十五から三十三節でイエスの本当の弟子かどうか分かる実について定義しています。まずは二十五節だけを読みましょう。

さて、大ぜいの群衆が、イエスといっしょに歩いていたが、イエスは彼らの方に向けて言われた。

イエスは大ぜいの群衆が、イエスと「いっしょに歩いて」いたので喜んでいたのでしょうか。大群衆を引き連れることができ、イエスは目標を達成したのでしょうか。

それは違います。大群衆がイエスに付きまとい、説教を聞き、奇跡を見て、時にはイエスと一緒に食することもありましたが、それを喜んではいませんでした。イエスが求めているのは、心と思い、知性と力を尽くして神を愛する人です。イエスは、イエスの命令に従う人を求めています。イエスは、弟子を求めています。だから、イエスは、イエスといっしょに歩いていた大ぜいの群衆に向けてこう言われました。

わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません（ルカ14:26）。

それについて間違いありません。イエスは、人にイエスの弟子となる必須要件を与えました。しかし、イエスの弟子は、肉で最も愛する人たちを本当に憎まなくてはならないのでしょうか。聖書には、両親を敬い、配偶者や子供たちを愛せよという命令が私たちに与えられていることを考えると、そうではないようです。

イエスはここで誇張して話していたに違いありません。つまり強調するための誇張表現です。しかし、最低限イエスはこれを意味しました。すなわち、もし私たちが

## 弟子をつくる指導者

イエスの弟子となるのなら、まず第一に、肉の自分が一番自然に愛する人たち以上にイエスを愛さなくてはならない、ということです。イエスは、私たちが心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして愛する神であるのだから、イエスのこのような期待は確かに理にかなっています。

これを決して忘れないでください。すなわち、指導者の仕事は弟子をつくることであり、それは、イエスを何にも増して愛する人、例えその人の妻や夫、子供たちや両親よりも多くイエスを愛するような人をつくり出すことです。この本を読む指導者は各々、「そのような人を自分はきちんとつくり出しているだろうか。」と自分自身に問いただすことは良いことです。

どうやってその人がイエスを愛しているとわかるのでしょうか。イエスはヨハネ14章21節でこう言いました。「わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛する人です。わたしを愛する人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身を彼に現わします」。従って、その人の配偶者、子供たち、両親以上にイエスを愛する人は、同時にイエスの命令を守る人であると結論づけることは確かに理にかなっています。イエスの弟子はイエスの命令に従う人です。

### 第二の必須要件 (A Second Requirement)

イエスはその日イエスといっしょに歩いていた群衆に向かって引き続き話しました。

自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。(ルカ 14:27)

これはイエスがイエスの弟子に与える第二の必須要件です。これは一体何を意味するのでしょうか。弟子たちは、文字通り太い木の梁を担ぐことを要求されているのでしょうか。そうではありません。イエスはここでも誇張表現を用いています。

当時イエスの話を聞いていたユダヤ群衆の殆どの方は、罪に定められた犯罪者が十字架にかけられて死ぬのを見たことがありました。ローマ人は犯罪を抑止する手段として、見せしめに、町の門の外の大通りに面した所で犯罪者を最も残虐な十字架刑

## 正しい目標を設定する

に処しました。

そういう背景から、当時のイエスの時代は、「自分の十字架を負う」とい表現がよく使われていたと想像できます。十字架刑に処せられる人は皆、ローマ兵が、「自分の十字架を負ってついて来い」と言うのを聞きました。その言葉が身の毛がよだつ程の苦しみの時の始まりを意味することを知っていたので、その言葉は罪に定められた者たちに非常に恐れられました。そのような表現は、「あなたに必ず訪れる困難を受け入れなさい」といった意味で、慣用句として使われていたと考えられます。

例えば、父が息子に、「息子よ、野外トイレを掘り出すのは嫌だろう。臭くて、汚い仕事だからな。でも、月に一度それをするのはお前の仕事だ。だから自分の十字架を負いなさい。」と言ったり、妻が夫に、「あなた、ローマに税金を支払うのは本当に嫌なこととはわかっているけど、納税期限は今日で、収税人が今ここに向かっているところよ。さあ、自分の十字架を負って頂戴。払いに行って来て。」と言うのを想像します。

自分の十字架を負うことは、自己否定と同義語であり、マタイ十六章二十四節では、イエスがこの言葉をその意味で用いています。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」それは、このようにも言い換えられます。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分自身のアジェンダを脇に置き、自分の決心の結果として避けて通れない困難を受け入れ、それからわたしについて来なさい」。

従って、本当の弟子はイエスに従うための犠牲を喜んで払います。その人たちは既に始める前に代価を数え、困難は不可避であることを知りながら、この競争を最後まで終わらせることの決心をもって始めました。この解釈は、イエスが次に述べる、イエスへの服従の代価を数えることと合致しています。以下の二つの描写は、まさにそのことを言っています。

塔を築こうとするとき、まずすわって、完成に十分な金があるかどうか、その費用を計算しない者が、あなたがたのうちひ

## 弟子をつくる指導者

とりでもあるでしょうか。基礎を築いただけで完成できなかったら、見ていた人はみな彼をあざ笑って、『この人は、建て始めはしたものの、完成できなかった。と言うでしょう。また、どんな王でも、ほかの王と戦いを交えようとするときは、二万人を引き連れて向かって来る敵を、一万人で迎え撃つことができるかどうかを、まずすわって、考えずにいられましょうか。もし見込みがなければ、敵がまだ遠くに離れている間に、使者を送って講和を求めましょう。（ルカ 14:28-32）

イエスが言いたいことをこれ以上明白にはできません。「私の弟子になりたいのなら、まずその代価を数えなさい。さもなければ、行く道が険しい時、あなたはやめてしまうかもしれません。本当の弟子は、私に従う結果として来る困難をも受け入れます。」

### 第三の必須要件 (A Third Requirement)

イエスはその日、もうひとつ弟子になる必須要件を挙げました。

そういうわけで、あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません(ルカ14:33)。

ここでも、イエスは誇張表現を用いていると考えるのは理にかなっていません。私たちは、家も服も食べ物も全てなくす程まで、全ての持ち物を諦める必要はありません。しかし、お金に仕えるのではなく、私たちのお金を用いて神に仕えるというレベルまで、私たちの持ち物全ての所有権を神に捧げる必要があります。結果として、不必要な所有の多くを手離し、使徒の働きで読むような初代教会のクリスチャンのように、神の御旨に沿った管理と共有による単純でつつましい生活を送ることを意味しました。キリストの弟子となることは、キリストの命令に従うことを意味し、イエスは弟子たちに地上にではなく、天に宝を積むよう命じました。

まとめると、私がイエスの弟子となるのであれば、私は実を結ばなくてはならないとイエスは言っています。私はイエスをまず第一に、他のどんな自分の家族よりも

## 正しい目標を設定する

多く愛さなくてはならなりません。イエスに従う決心をした結果伴う、避けられない困難に意欲的に立ち向かわなくてはならなりません。そして、自分の所得や所有物についてイエスが言う通りのことをしなくてはならなりません。(この点について、多くがイエスの命令の中で語られているので、「主が私の所有物に関してもし何か言ってきたら、言われた事を何でもするつもりだ」などと言って、自分をだましてはなりません。)

私たち指導者は、このようなキリストに献身的な弟子をつくることを主に求められています！これこそが神が定めた私たちへの目標です！私たちは弟子をつくる指導者と呼ばれるのです！

これが世界中の多くの指導者に欠けている基礎的真理です。もしそれらの指導者が、私がしたように自分の務めについて評価するならば、私がそうであったように、彼らは神の御旨と期待から大分かけ離れていると認めざるを得なくなるでしょう。私の教会員が実際に現しているキリストへの献身レベルを考える時、私は本当の弟子と区分される人が沢山いるようにはあまり思えませんでした。

牧師たちよ、どうか自分の会衆を良く見てみてください。ルカ十四章二十六から三十三節にあるイエスの基準による弟子がそこに何人位いるとイエスが認めるでしょうか。伝道者よ、あなたが説教するメッセージは人々をキリストの命令全てに従うことを決心に導くものでしょうか。

今私たちは、後の裁きの座でイエスの前に立たされる前に、自分で主にある務めをもう一度見直す時です。もし自分が神の目標にたちしていないのなら、私はそのことについて、後の裁きの御座でよりもむしろ今気づかせて欲しいと思いますが、あなたはどうでしょうか。

### 目覚めの警告 (A Final Sobering Thought)

ルカ十四章二十六から三十三節に記録された、群衆に対するイエスの言葉にあるように、確かにイエスは人々に彼の弟子となって欲しいと思っています。イエスの弟子になることはどれ程大切なことでしょうか。もし人がイエスの弟子になることを選

## 弟子をつくる指導者

ばなかったらどうなるのでしょうか。ルカ十四章で群衆への話の最後に、イエスはこれらの質問に答えました。

ですから、塩は良いものですが、もしその塩が塩けをなくしたら、何によってそれに味をつけるのでしょうか。土地にも肥やしにも役立たず、外に投げ捨てられてしまいます。聞く耳のある人は聞きなさい（ルカ 14:34-35）

これは関係のない話ではないことに注意してください。ここは、ですからという言葉で始まっています。

塩には塩気がなくてはなりません。それが塩です。もしその味が無くなったら、何の使い物にならず、「投げ捨て」るしかありません。

これと弟子になることと何の関係しているのでしょうか。塩が塩気を持つよう期待されているように、イエスは人々にイエスの弟子になるよう期待しています。イエスは神なので、私たちが分別をもって果たすべき唯一の責任は、神を第一に愛し、自分の十字架を負うことです。もし私たちが弟子とならないなら、私たちは神が与えた私たちの存在意義を否定することになります。私たちは役立たずで「捨てられる」運命ということです。それは天国のようとは到底言えませんが、どうでしょうか。

他の時に、イエスは弟子たちにこう言われました（マタイ5:1参照）。

あなたがたは、地の塩です。もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。（マタイ5:13）

これらは実に目を覚まさせる警告です。まず、塩気（「献身的な従順」の明白な例え）がある者だけが、神に何かしら用いられます。残りの者は「役に立たず、投げ捨てられ、踏みつけられる」だけです。第二に、「塩気のある」者が「塩気のない」者になることもあり得ます。そうでなければ、イエスは弟子たちに警告する必要はどこにもなかったはずですが。しかし、今日多くの人が、キリストの弟子になることよりも、キリストにあって天国に行ける信者だとか、救いは決して失われることはない

## 正しい目標を設定する

言って、どれ程これらの真理に矛盾したことを教えているのでしょうか。それらの間違った考えについては、後の章で更に詳しく見て行きましょう。

## 第二章

### 正しく始める (Beginning Rightly)

聖書に基づいて言うと、弟子とは主イエス・キリストにある誠実な信者であり、キリストの言葉にしっかりと根差し、結果として罪から解放されている人です。弟子は、キリストの命令全てに従うことを学び、自分の家族、快適な暮らし、財産以上にイエスを愛し、その愛がその人の生き方に現れています。イエスの本当の弟子は互いに愛し合い、実践的な方法でその愛を表しています。弟子は実を結んでいます。<sup>2</sup>イエスが望むのはこのような人たちです。

明らかに、イエスの弟子ではない人たちは、イエスの為に弟子をつくることは不可能です。つまり、イエスの為に弟子をつくろうとする前に、自分たちがまずイエスの弟子であることに確信をもっていなければなりません。多くの指導者は、聖書の定義する弟子には及びません。このような指導者が弟子をつくれる望みはなく、実際、それを試みてもいません。彼らは本当の弟子づくりに伴う困難に耐える程、イエス・キリストに自分自身を捧げてはいません。

ここから先も読み進める指導者は、その人自身が主イエス・キリストの弟子であり、キリストの命令に完全に従うことを熱心に取り組んでいる人だと思えます。もし

---

<sup>2</sup> 2 この定義は、マタイ 28:18~20、ヨハネ 8:31~32、13:25、15:8 とルカ 14:25~33 節で既に読んできたことに由来する。



## 正しく始める

そうでないなら、イエスの本当の弟子となる献身をするまでは、この本を読み進めても本当の意味がわからないでしょう。これ以上先延ばしにしないでください！ひざまずいて、悔い改めなさい！そうすればイエスの素晴らしい恵みによって、神はあなたを赦し、あなたを全く新しい者へと変えてくださいます！

### 弟子とは何かを再定義する (Redefining Discipleship)

イエスは弟子とはどんな者であるかをかなり明白にしていますが、その定義を自分自身のものと置き換えてしまっている人が多いです。例えば、自分はクリスチャンであると言っていれば誰でも弟子に当てはまると考える位、ある人たちにとってこの言葉の意味は曖昧です。そのような人たちには、弟子という言葉が持つ聖書に基づく意味は全て剥ぎ取られてしまっています。

また、ある人たちにとって、弟子になることは天国へ行く信者が任意で取る献身の第二のステップと考えています。そのような人たちは、イエスの信者として天国へは行くが、イエスの弟子とされない人がいると考えているのです！聖書に記録されているイエスの弟子となる命令を全く無視できないため、クリスチャンには二つのレベルがあると教えます。ひとつはイエスを信じる信者、もうひとつはイエスを信じ献身する弟子です。このような教えに沿って、信じる者は多くいるが、弟子は少ないと言いつつ、しかし両方共天国へ行くと教えています。

この教義は、弟子をつくるというキリストの命令を巧みに無効にし、結果として弟子づくりを進まなくさせています。もし弟子になることが、自分を無にした献身と更には困難を意味し、弟子になることは任意であるのなら、大半の人は弟子になることを選ばないでしょう。特に、弟子ではない信者として天国で歓迎されると考えるならなおさらです。

そこでとても重要な質問がいくつかあります。すなわち、イエス・キリストの弟子にならずして、天国へ行く信者となるということは聖書で教えていることなのでしょうか。また、弟子になることは信者にとって任意のステップなのでしょうか。更に、クリスチャンには、献身的でない信者と献身的な弟子というふたつのレベルがあるの

## 弟子をつくる指導者

でしょうか。

決してそうではありません。信者と弟子といったクリスチャンを二分類化する教えは新約聖書のどこにもありません。使徒の働きを読めば、弟子たちという言葉で繰り返し書かれており、より献身的な信者の更に上のレベルといった記述はどこにもないのは明らかです。イエスを信じるすべての人は弟子なのです。<sup>33</sup>事実、「弟子たちは、アンテオケで初めて、キリスト者と呼ばれるようになった」（使徒11:26、一部強調）のです。

ギリシャ語の弟子という言葉（*mathetes*）は新約聖書に二百六十一回出て、ギリシャ語の信じる者（*pistos*）（ニュー・アメリカン・スタンダード訳では*believer*と訳されている部分）はたったの九回であることを知るのは興味深いことです。ギリシャ語のキリスト者（*Christianos*）の記述は三回のみです。これらの事実だけでも、純粹に真理を求める人にとっては、初代教会でイエスを信じた者はイエスの弟子と見なされていたことについて十分納得できると思います。

### イエスの解釈 (Jesus' Commentary)

イエスにとって、信者が弟子になることは非常に重要なことで、任意ですることとは決して考えてはいませんでした。イエスがルカ十四章で言う弟子づくりの三つの要件は、更なる献身を目指すよう励ますために信者へ向けられたのではなく、むしろ、イエスの言葉は民衆一人一人に向けられたものでした。弟子となることこそ、神との関係における最初の一步なのです。さらにヨハネ八章ではこう書いてあります。

イエスがこれらのことを話しておられると、多くの者がイエスを信じた。そこでイエスは、その信じたユダヤ人たちに言われた。「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あ

---

<sup>33</sup> 弟子たちという記述は、使徒の働き 6:1, 2, 7; 9:1, 10, 19, 25, 26, 36, 38; 11:26, 29; 13:52; 14:20, 21, 22, 28; 15:10; 16:1, 18:23, 27; 19:1, 9, 30; 20:1, 30; 21:4, 16 にある。信じる者という記載は、使徒の働き 5:14; 10:45 及び 16:1 だけにとどまる。例えば、使徒の働き 14:21 では、ルカは、「彼ら[パウロとバルナバ]はその町で福音を宣べ、多くの人を弟子としてから、…」と書いている。つまり、パウロとバルナバは福音を宣べて弟子をつくり、人々は改心の時にすぐに弟子となったのであり、後に任意でということではない。

## 正しく始める

あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」（ヨハネ 8:30-32）

イエスがこの時、新しく信者に加わった人たちに向かって、イエスの弟子となることを話していたことは、紛れもない事実であり、誰も理にかなった反論はできません。イエスは新しく信者に加わった人たちに、「そのうちいつか、あなたたちも次のステップとして、私の弟子となって、更に献身することを考えたらいいかもしれない。」とはいいませんでした。そうではなく、イエスは新しい信者たちに、まるで信者と弟子が同義語であるように、まるで彼らが既に弟子となっていることを期待するように話しました。イエスは、新しい信者に、彼らがイエスの弟子であることを証明するのは、みことばに繋がることであり、その結果、罪から解放されると言いました（8:34-36 参照）。

イエスは人々の信仰の告白だけでは、本当にその人たちが信じた保証は何もないことを知っていました。イエスはまた、イエスを神の御子と本当に信じた人は、信じた通り歩み、イエスに従い、イエスを喜ばすことを切望する、つまりすぐに弟子となることも知っていました。そのような人たちは、主の命令を学び、主の御旨を発見しながら、着実に罪から解放されていきます。

イエスは人々が新たな信者に、信仰に入るや否や自分自身を試すよう挑むのはそのせいです。イエスの「もしあなたがたが、ほんとうにわたしの弟子なら」という言葉は、人々が本当の弟子ではなく、口先だけの弟子の可能性があるとイエスが考えていることを示唆しています。そのような人たちは自分自身を騙しています。イエスに試された者だけが、本当の弟子と言えます。（ヨハネ8:37-59にある残りの対話を読むと、イエスが確かに彼らの誠意について疑う十分な理由があったのがわかります。）<sup>44</sup>

---

<sup>44</sup> この節は、新しく信者に加わる人たちの救いを確証させる現代の間違った習慣についても浮き彫りにしている。イエスは、これらの新しく信者となったと明言する者たちが、短い祈りをしたからとか、イエスにある信仰の告白をしたという理由で、本当に救われているとは断言しな

## 弟子をつくる指導者

私たちの重要聖句であるマタイ二十八章十八から二十節自体、弟子とはより高いレベルの献身的信者たちである、とする教義を払いのけています。イエスは宣教命令で弟子たちが洗礼を受けるよう命令しました。使徒の働きの中に、使徒たちは、新しい信者が「キリストに熱狂的に従う次のステップ」を踏むまで、洗礼を授けるのを待ったという記録は当然どこにもありません。むしろ、使徒たちは新しい信者が改心したほぼ直後に洗礼を授けたのでした。使徒たちは、全ての真の信者は弟子であると信じていました。

この点について、弟子が特別に献身的な信者であると信じる指導者たちには、その自分たちの教義との間に矛盾があります。そのような指導者の殆どは、イエスを信じて告白した人には誰でも洗礼を授け、彼らが献身的な「弟子」のレベルに到たちするのを待つことはありません。しかし、本当に自分たちが説教していることを信じているのなら、彼らは、そのような新しい信者が弟子のレベルに到たちしてから洗礼を授けるべきであって、その数は非常に少ないでしょう。

このような理屈の合わない教義に対しては、最後の一撃で十分でしょう。もし弟子が信者と違うのなら、なぜヨハネは兄弟愛は本当に生まれ変わった信者の証であると書き（第一ヨハネ3:14参照）、またイエスは兄弟愛を本当の弟子の証であると言った（ヨハネ13:35）のでしょうか。

### この偽教義の起源 (The Origin of this False Doctrine)

この信者と弟子という二つの異なるレベルについての考えが聖書からのものでないのなら、一体どうやってこのような教義が成り立ったのでしょうか。答えは、この教義が専ら救いに関する他の間違った教義に裏付けられていることにあります。その教義は、弟子にならなければならないと言え、恵みによる救いの事実と合わなくなると主張します。この理屈に基づくと、弟子となる必須要件は、救いの必須要件ではないという結論に至ります。つまり、弟子になることは、恵みにより救われて天国へ

---

った。むしろ、イエスは彼らの告白が誠意あるものかを問い質した。私たちも主の模範に従うべきだ。

## 正しく始める

行く信者たちが任意で取る献身のステップであるということになります。

この教義の致命的な欠陥は、聖書にはそれに反する聖句が沢山あるということです。例えば、山上の垂訓で、イエスは数多くの神の命令について列挙した後、この言葉で締めくくりました。この言葉以上に明確なものはありません。

わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです（マタイ 7:21）。

ここでイエスは、聖書の他の箇所にも多くあるように、明白に、従順と救いを関連づけました。それでは、どうしたらこのような多くの聖句と、聖書が言う恵みによる救いの確約を調和することができるのでしょうか。実はかなり単純なことです。神は、その驚くばかりの恵みにより、一時的に全ての人に悔い改めて、信じ、新しく生まれ変わり、聖霊により力を得て、神に従順に生きる機会を与えています。私たちに皆罪があるために、神の恵みなしに、誰も救われることはありません。罪人は救いを受けるに値しません。だから救われるには神の恵みが必要なのです。

私たちの救いに対して、神の恵みは沢山の方法で表されています。イエスの十字架の死、神が私たちにくださった福音への招き、私たちをキリストに引き寄せてくださる神の御業、私たちの罪に対する神からの咎め、神が私たちにご与えてくださる悔い改めの機会、神によってなされる私たちの生まれ変わりと聖霊の満たし、私たちが罪を犯した時に神が与える訓戒、等がそうです。これらのどの恵みも私たち自身が獲得したものではありません。最初から最後まで、私たちは恵みによって救われるのです。

しかし、聖書によれば救いは「恵みによって」だけでなく、「信仰によって」与えられます。「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです」（エペソ 2:8前半、一部強調）。両方の要素が必要で、当然のことながら二つは相いれないものです。人々が救われるには、恵みと信仰の両方が必要です。神はその恵みを広げ、私たちは信仰によって応えます。もちろん、真の信仰が神の命令に対する従順をもたらします。ヤコブによる手紙の二章に書いてある通り、行ないのない信仰は死んだも

## 弟子をつくる指導者

のであり、使いものにならず、救いに至らせることはできません（ヤコブ 2:14-26参照）。<sup>55</sup>

事実、神の恵みは誰にも罪を犯すことを認めていません。むしろ、神の恵みは、人々に悔い改めと新しい生まれ変わりの機会を一時的に与えます。死後は、悔い改めと生まれ変わりの機会はありません。つまり、神の恵みはなくなります。神の救いの恵みは従って一時的と言えます。

### イエスが恵みのゆえに信仰によって救った女性 (A Woman Whom Jesus Saved by Grace Through Faith)

救いが恵みのゆえに信仰によって与えられることを表すのに丁度良い描写が、姦淫を犯して捕らえられた女とイエスが出くわす場面の中にあります。イエスは彼女に言いました。「わたしもあなたを罪に定めない。[これは、女は罪に定められるに値するにもかかわらず、イエスはそうしなかったのが恵みです。] 行きなさい。今からは決して罪を犯してはなりません」（ヨハネ 8:11、一部強調）。女は死に値するが、イエスは彼女を自由に行かせました。しかし、イエスは女を行かせる時に、以下の警告を与えました。今からは決して罪を犯してはなりません。イエスが世界中の罪人一人一人に言っているのはこれです。「私はあなたを罪に定めない。あなたは死と、永遠の地獄に定められているが、しかし私はあなたに恵みを与える。しかし、私の恵みはほんの一時的なものであるから、悔い改めなさい。罪を犯すのをやめなさい。あなたが裁きの日に罪人として私の前に立つ時、私の恵みは終わるから。」

姦淫の女がイエスに言われた通り悔い改めたとしましょう。もし彼女がそうしたのなら、彼女は恵みのゆえに、信仰によって救われました。彼女が恵みのゆえに救われたのは、彼女は罪人として、神の恵みなしでは救われることはあり得なかったからです。彼女は彼女自身の行ないによって救いを得たとは到底言えませんでした。また、

---

<sup>55</sup> 更に、行ないがなくても信仰によって救われることを主張する人たちに反して、ヤコブは信仰によってだけでは救われないことを言う：「人は行ないによって義と認められるのであって、信仰だけによるのではないことがわかるでしょう。」真の信仰はそれだけではなく、必ず行ないが伴うのだ。

## 正しく始める

彼女は信仰によって救われました。なぜなら、彼女はイエスを信じて、つまりイエスが彼女に言ったこと、その忠告に耳を傾け、遅すぎることなく、罪から立ち返ったからです。イエスが人は悔い改めないのなら滅びると警告しているために（ルカ 13:3 参照）、イエスに対して真の信仰がある人なら皆悔い改めます。イエスはまた、父の御旨を行う者だけが天の御国に入ると厳かに断言しました（マタイ 7:21）。イエスを信じる者は、イエスの忠告を信じ、耳を傾けます。

姦淫の女が彼女の罪を悔い改めなかったらどうなっていたのでしょうか。彼女が罪を犯し続け、死んで、イエスの裁きの御座の前に立たされました。彼女がイエスに向かって、この様に言うのを想像してみてください。「イエス様！またお会いできて嬉しいです！私が地上にいる間、あなたの前に連れて行かれた時、あなたは私を罪に定めませんでした。本当に、あなたは今も恵み深いお方ですから、私を罪に定めることはないでしょう！」

あなたはどう思いますか。イエスは彼女を天国に歓迎するのでしょうか。答えは明白です。パウロは「だまされてはいけません。不品行な者、...姦淫をする者...はみな、神の国を相続することができません。」（第一コリント 6:9-10）と警告しました。

これらは全て、イエスが求める弟子の必須要件が、イエスへの真の信仰、つまり救いに至らせる信仰以外に何もないことを言っています。そして、救いに至らせる信仰を持つ人全ては、恵みのゆえに信仰によって救われました。救いは恵みによるので、イエスの求める弟子の必須要件が、イエスの求める救いの必須要件と相いれないという主張に、聖書的土台があるとは言えません。弟子になることは天国へ行く信者たちの任意のステップではありません。むしろ、弟子になることこそ、真の救いに至る信仰の証拠なのです。<sup>66</sup>

---

<sup>66</sup> パウロがよく救いは恵みによるもので、行ないによるものではないとよく証言していた理由は、パウロは当時の真の律法主義者たちと常に論争していたからである。パウロは、彼自身天国へ行くには聖さが欠かせないという事実を信じて、認めていたために、それを教えていた人々を正そうとしていた訳ではない。むしろパウロは、救いにおける神の恵みについて全く理解のないために、イエスが死んだ理由がわからないユダヤ人を正すために書いた。神の恵みが救いを可能

## 弟子をつくる指導者

もしそうであるなら、神の目に成功するために、指導者は本当の福音を宣べ伝え、従順な信仰に人々を招き入れることで、正しく弟子づくりの工程を始めるべきです。弟子となることが天国へ行く信者が任意で取る献身のステップであるという間違った教えを指導者が助長するのは、キリストの弟子づくりについての命令に逆らっていることになり、間違った恵みや福音を主張していることになります。ただキリストの本物の弟子だけが、救いに至る信仰を持ち、天国へ行きます。それは、イエスが丁度このように約束しました。「わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。」（マタイ 7:21）。

### 新しい偽福音（The New False Gospel）

救いにおける神の恵みについての間違った考えのせいで、現代の福音は往々にして恵みのメッセージと相いれないものとなり、元々ある大切な聖書の要素を失ってしまいました。しかし偽の福音はただ偽クリスチャンをつくるだけで、現代の新しく「改心した人たち」のかなり多くの割合が「キリストを受け入れた」後、数週間の内に教会から姿を消す理由はそのためです。教会に来たとしてもその多くは、生まれ変わりの体験のない人たちと同じように、彼らの周りにはいる保守的な人たちと何ら変わらない価値観を持ち、同じ罪を行っています。それは、主イエス・キリストを本当に信じではおらず、新しい生まれ変わりの体験も実際はまだだからです。

現代の福音から消えてしまった重要な要素のひとつは、悔い改めの必要性です。もし（イエスが姦淫で捕まった女に対してしたように）指導者たちが人々に罪を犯すことをやめるよう言えば、救いは恵みによらず、行ないによると言う位悪いことをしているように感じます。しかし洗礼者ヨハネも、イエスも、ペテロも、パウロも、皆救いには悔い改めが絶対不可欠だと主張しました。もし悔い改めを説教することが、

---

とするという概念が全くないために、異邦人にも救いがあり得ると信じる人は多くなかった。割礼や血筋、律法の厳守（これは彼ら自身結局はしなかったこと）がその人に救いをもたらすと考えた人たちもいた。結果、彼らは神の恵みとキリストの死を無効にしてしまった。



## 正しく始める

救いにおける神の恵みを何らかのかたちで否定しているのなら、洗礼者ヨハネも、イエスも、ペテロも、パウロも、皆救いにおける神の恵みを否定していることとなります。しかし、彼らは神の恵みが、罪をし続けてよい機会としてではなく、悔い改めの機会として人々に一時的に注がれていることを理解していました。

例えば、洗礼者ヨハネが、ルカによって書かれた「福音」の中で宣言した話の中心は悔い改めでした（ルカ 3:1-18）。悔い改めない者は、地獄へ行ってしまいました（マタイ 3:10-12、ルカ 3:17参照）。

イエスは地上の務めの最初から悔い改めを説教しました（マタイ4:17参照）。イエスは、悔い改めなければ、人は滅びると警告しました（ルカ13:3, 5参照）。

イエスが十二弟子を色々な町へ送り出した時、「十二人が出て行き、悔い改めを説き広め」（マルコ 6:12 一部強調）しました。

イエスは復活の後、悔い改めのメッセージを世界中に持って出て行くよう十二弟子に言いました。これこそが、赦しへの扉を開けるかぎだったからです。

こう言われた。「次のように書いてあります。キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。（ルカ 24:46-47、一部強調）

使徒たちはイエスの教えに従いました。ペテロは、五旬節の日に説教をした時、聴衆は十字架に付けた人の真実について気づかされ、咎めを受け、ペテロに何をすべきかを尋ねました。ペテロの答えは、まず最初に悔い改めることでした（使徒 2:38 参照）。

ソロモンの宮の玄関で、ペテロが二回目の公の説教を行った時も、罪は悔い改めなしにはぬぐい去られないという、同じような内容が含まれていました。<sup>77</sup>

---

<sup>77</sup> 同様に、神がペテロに異邦人もイエスを単純に信じれば救われることができると啓示した時、ペテロはコルネリオの家の人たちに、このように宣言した:「これで私は、はっきりわかりました。神はかたよったことをなさらず、どの国の人であっても、神を恐れかしこみ、正義を行なう人な

## 弟子をつくる指導者

そういうわけですから、あなたがたの罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて、神に立ち返りなさい（使徒 3:19、一部強調）。

パウロは、アグリッパ王の前で証をした時、彼の福音には悔い改めのメッセージがいつも含まれていたことを示しました。

こういうわけで、アグリッパ王よ、私は、この天からの啓示にそむかず、ダマスコにいる人々をはじめエルサレムにいる人々に、またユダヤの全地方に、さらに異邦人にまで、悔い改めて神に立ち返り、悔い改めにふさわしい行ないをするようにと宣べ伝えて来たのです（使徒 26:19-20、一部強調）。

アテネで、パウロは全ての人々がキリストの裁きの御座の前に立たなくてはならず、悔い改めなかった者たちは、大いなる日の備えがないことになることになると警告しました。

神は、そのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今は、どこでもすべての人に悔い改めを命じておられます。なぜなら、神は、お立てになったひとりの人により義をもってこの世界をさばくため、日を決めておられるからです。そして、その方を死者の中からよみがえらせることによって、このことの実証をすべての人にお与えになったのです。」（使徒 17:30-31、一部強調）

エペソの教会の長老たちとの別れ際に、パウロは説教の中で、信仰の伴う悔い改めを中心に語りました。

益になることは、少しもためらわず、...ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信

---

ら、神に受け入れられるのです。」（使徒 10:34 後半-35、一部強調）。ペテロはまた、使徒の働き 5 章 32 節で、神は「ご自分に従う者たち」に聖霊をお与えになったとも宣言した。真のクリスチャンには聖霊が宿っている（ローマ 8:9; ガラテヤ 4:6 参照）。

正しく始める

仰とをはっきりと主張したのです（使徒 20:20前半、21、一部強調）。

### 悔い改めを再定義する（Repentance Redefined）

悔い改めなしに救いはないと、聖書の至る所にある証拠を用いて示しても、指導者の中には、神の恵みに関する間違った考えに辻褃を合わせようと、本来の明白な意味を捻じ曲げて、その必要性を無効にしようとする人もいます。そのような人たちが打ち出す新しい定義では、驚いたことに、悔い改めは、その人のイエスの人物像が少し変わる位のものでしかなく、行動の変化にまでは必ずしも至らないようです。

それでは、新約聖書に出てくる説教者は、人々に悔い改めを促した時に何を期待していたのでしょうか。説教者は、イエスという人物像を少し変えさせるために訴えたのでしょうか。それとも人々がその行動を変えることを求めたのでしょうか。

パウロは、真の悔い改めは行動の変化が伴うと信じています。パウロが数十年携わった神にある務めに関してアグリッパ王に証するところはもうすでに読みました。

こういうわけで、アグリッパ王よ、私は、この天からの啓示にそむかず、ダマスコにいる人々をはじめエルサレムにいる人々に、またユダヤの全地方に、さらに異邦人にまで、悔い改めて神に立ち返り、悔い改めにふさわしい行ないをするようにと宣べ伝えて来たのです（使徒26:19-20、一部強調）。

洗礼者ヨハネもまた、悔い改めが、神学的事実への考え方を変える以上のものであると信じていました。咎めを受けた聴衆は悔い改めの呼びかけに応えようと、自分たちは何をすべきか尋ねたところ、洗礼者ヨハネは、特定の行動についてどう変えてゆくかを列挙しました（ルカ 3:3、10-14参照）。洗礼者ヨハネはまた、パリサイ人やサドカイ人が、形式的に悔い改めのふりをしているに過ぎないことを嘲り、本当に悔い改めをしないのなら、地獄の火の中に投げ込まれることを忠告しました。

「まむしのすえたち。だれが必ず来る御怒りをのがれるように教えたのか。それなら、悔い改めにふさわしい実を結びな

## 弟子をつくる指導者

さい。...斧もすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます（マタイ 3:7-10、一部強調）。

イエスは、ヨハネと同じように悔い改めについて説教しました（マタイ 3:2、4:17 参照）。イエスは、かつてヨナの説教でニネベが悔いめたことを語りました（ルカ 11:32）。ヨナの箇所を読んだことのある人なら、ニネベの人々は単に考え方を換えただけではなかったことがわかるでしょう。彼らは、行動も変えて、罪から立ち返りました。イエスはこれを悔い改めと呼びました。

聖書のいう悔い改めは、心の中に生まれた真の信仰に応えるかたちで意欲的に行動を変えることです。指導者が、悔い改めが本物であると確認できる行動の変化が必要であることを語らずして、福音を語っているのなら、その人は実際キリストが自分の弟子たちに望んでいることに反して活動していることになります。更に、そのような指導者は聴衆を騙し、聴衆を悔い改めなしに救われることを信じさせ、その結果地獄に落とされることを潜在的に保障しています。そのような指導者は、その人が気づいていようが、いまいが、神に敵対し、サタンの手下となって働いています。

もしイエスが命令したように、指導者が弟子を作るなら、その工程を正しく始めなくてはなりません。指導者が人々に悔い改めと従順な信仰を訴える本物の福音を宣べ伝えていないのなら、人の目には素晴らしい成功を収めているように見えても、それは失敗の運命です。その指導者には、多くの教会員がいるかもしれませんが、その人は土台の上に木、草、わらで建物を建てているのであって、将来それが火の中を通り、その働きの質が試される時、それはきっと焼き尽くされることでしょう（第一コリント 3:12-15参照）。

### イエスが要求する献身 (Jesus' Calls to Commitment)

イエスは救われていない者たちが罪から立ち返るよう求めているだけでなく、その人たちがイエスに彼ら自身を捧げ、イエスに直ちに付き従うようにも求めています。イエスは、今日のように、軽々しく救いを与えることは決してしません。イエスは、

## 正しく始める

ご自身を「受け入れる」ように人々を招くことは決してなく、赦しを約束したり、その後で、献身的に従うことを提案することはありません。イエスは、一番最初から心からの献身を求めています。

悲しいことに、イエスが犠牲の伴う献身を要求しても、形だけのクリスチャンは単に無視するか、例えその呼びを認めても、この呼びは、おそらく未信者にではなく、神の救いに至らせる恵みを既に受けている人々に対して、より親密な関係への呼びであると、言い逃れをします。しかし、犠牲の伴う献身をイエスが要求するのは自分たちにであって、未信者にはないと主張するこのような「信者」のあまりにも多くが、その呼びの解釈に対して注意を払いません。彼らの頭では、従順に応答しなくてもよいという選択肢があり、彼らは決して応答しようとはしません。

イエスの救いへの招きのひとつについて考えてみましょう。これは、より深い歩みへの呼びと解釈されることが多く、もう既に救われた者に向けられた、と想定されています。

それから、イエスは群衆を弟子たちといっしょに呼び寄せて、彼らに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。人は、たとえ全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得がありません。自分のいのちを買い戻すために、人はいったい何を差し出すことができるでしょう。このような姦淫と罪の時代にあって、わたしとわたしのことばを恥じるような者なら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るときには、そのような人のことを恥じます」(マルコ 8:34-38)。

これは、未信者への救いの招きでしょうか、それとも信者へのより深い関係への招きでしょうか。正直に読めば、答えは明白になります。

## 弟子をつくる指導者

まず、イエスが話した対象は、「群衆」で「弟子たちといっしょに」（34節、一部強調）いたことに注意してください。そして明らかに、「群衆」が弟子たちから成っている訳ではありませんでした。彼らは、実は、イエスが言おうとしていたことを聞くためにイエスによって召集されました。イエスは皆に、信者に、求道者に、イエスがこれから教えようとする真理を理解して欲しかったのでした。イエスがまず言ったのは、「だれでも」（34節、一部強調）でした。イエスのみことばは、だれでも、全ての人に当てはまります。

読み進めると、イエスが誰に向かって話しているかが更に明らかになります。具体的には、イエスの言葉は、(1)イエスに「ついて来」たい人、(2)自分の「いのちを救い」たい人、(3)「たましいを失い」たくない人、(4) イエスが「父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るとき」イエスが恥じない人たちと一緒にいたい人、これらの人向けに語られました。これら四種類の表現には、救われたいと願う人々についてのイエスの描写が示唆されています。イエスに「ついて来」たくない、自分の「いのちを救い」たくない、けれども天国へ行くという人がいると考えるべきでしょうか。真の信者で、「たましいを失い」、イエスとイエスのみことばを恥じて、再臨の日にイエスが恥じるような人がいると考えるべきでしょうか。明白に、イエスはこれらの聖句を通して永遠の救いの獲得について話していました。

五文（訳者注：日本語では六文）で構成されるこれらの聖句の最後の四文は、いつも「なぜなら(For)」という言葉で始まっています。つまり、各文が前文を説明し、そこから発展させています。これらの聖句のどの文も、他の文がどのようにその文を修飾しているか、また他の文との兼ね合いを考慮せずにこの箇所を解釈することはできません。このことを頭に入れながら、イエスの言葉を一文ずつ見ていきましょう。

### 第一文 (Sentence #1)

それから、イエスは群衆を弟子たちといっしょに呼び寄せて、彼らに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい（マル

## 正しく始める

コ 8:34)。

イエスの言葉は、誰でもイエスについて来たい人、誰でもイエスに従いたいと望む人に向かって話されていることを、ここでもう一度注意してください。イエスに従う者となること—イエスが与えている関係は、最初からこれだけです。

多くの人がイエスに従う者とはならないで、イエスの友たちになることを望んでいます。しかしそれはあり得ません。イエスは、その人がイエスに従わないのなら、友とはみなしませんでした。かつてイエスはこう言いました。「わたしがあなたがたに命じることをあなたがたが行なうなら、あなたがたはわたしの友です (ヨハネ 15:14) 」。

多くの人がイエスに従う者とはならないで、イエスの兄弟になることを望んでいますが、それもありません。イエスは、その人がイエスに従順でないのなら、兄弟とはみなしませんでした。「天におられるわたしの父のみこころを行なう者はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです」 (マタイ 12:50、一部強調)。

多くの人がイエスに従う者とはならないで、天におられるイエスに加わりたいたと望んでいますが、イエスはそれはあり得ないと告げました。従う者だけが天国へ行くのです。「わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです」 (マタイ 7:21) 。

この聖句の中で、イエスは、人は自分を捨てない限り、いくらイエスに従いたいと願っていても、従うことはできないと伝えました。自分の思いや願いを進んで脇に置いて、イエスの御旨に自分自身を従わせることが必要です。イエスに従うには、自己否定と従順が不可欠です。そのような意味で、イエスは「自分の十字架を負い」なさいと言いました。

### 第二文 (Sentence #2)

第二文では、更にイエスは第一文の意味を明白にしています。

いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいの

## 弟子をつくる指導者

ちを失う者はそれを救うのです。(マルコ8:35)

この文章が、(英語では)「なぜなら(For)」という言葉で始まり、第一文と関連付けて、説明を加えているということ、もう一度思い出してください。ここで、イエスは、第一文にも含まれていた対照的な二種類の人を比べています。すなわち、自分を捨て、自分の十字架を負う人と、そうでない人です。ここでは更に、キリストのために、また福音のためにいのちを失う者と、そうでない者が比較されています。これらの二文を関連付けると、第一文の自分を捨てない人は、第二文のいのちを救おうと思うがそれを失う者であることがわかります。また、第一文で、自分を捨てることを心からする人は、第二文のいのちを失うが最終的にそれを救う者ということになります。

イエスは、身体的な命を失うことや救うことを話してはいませんでした。これらの聖句の後半部分で、イエスが永遠のいのちの獲得を示唆しているのがわかります。イエスは同じようなことをヨハネ十二章二十五節でも言いました。「自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎む者はそれを保って永遠のいのちに至るのです」(一部強調)。

第一文の自分を捨てない人は、第二文のいのちを救おうとする者です。つまり、「いのちを救う」とは、「その人が持つ、人生の計画を維持する」という意味と結論付けるのは妥当だと思います。これは、「キリストと福音のためにいのちを失う」人と比較すると、更に明白になります。いのちを失う人は、自分を捨て、自分の十字架を負い、自分の計画を諦めて、キリストの計画のために、また福音を広めるに生きる人です。そのような人は、最終的に「いのちを救う」人です。自分自身よりもキリストを喜ばせたい人は、最終的に神の御国で喜んでいる自分を見つけることでしょう。一方、自分自身を喜ばせ続ける人は、最終的には地獄で、自分の計画に従う自由を全て失って、惨めな思いをすることでしょう。

### 第三文と第四文 (Sentence #3 & 4)

次は第三文と第四文を見ていきます。



## 正しく始める

人は、たとえ全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得がありません。自分のいのちを買い戻すために、人はいったい何を差し出すことができるでしょう。(マルコ 8:36-37)

ここでは、自分を捨てない人が注目されています。そのような人は、いのちを救おうと思いますが、それを失います。そのような人は、この世が与えるものを求め、究極には「いのちを損じる」と言われています。全世界の価値と人のたましいの価値とを比べて、そのような人の愚かさをイエスは暴きました。もちろん、たましいの価値と比べるものはありません。人は建前としては全世界が与えられるもの全てを手に入れることができるかもしれませんが、もしその人の人生の最終的な結末が、地獄で永遠に住むことならば、その人は取り返しのつかない過ちを犯したことになります。

第三文と第四文から、何がキリストに従う者に必須である自己否定から遠ざけているのか、その実態を見抜くこともできます。それはこの世からの、自己満足を欲する思いです。キリストに従うことを拒む人たちは、自分を愛することから動機づけられ、罪深い快樂を求めますが、一方キリストに心から従う者たちは、キリストへの愛と従順のゆえにそれらから遠ざかります。この世が与える全てを得ようとする者たちは、富と力と名声を求めますが、一方キリストに心から従う者たちは、神の国とその義をまず第一に求めます。どんな富も力も名声も、キリストに従う者が得るなら、それは神からのもので、自分のためではなく、神の栄光のために用いられるべきものと考えます。

## 第五文 (Sentence #5)

ついに、第五文に到ちました。ここでも、なぜなら (*for*) という言葉で始まることで、どのように他の文章と関連付けているか注目してください。

このような姦淫と罪の時代にあって、わたしとわたしのことを恥じるような者なら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るときには、そのような人のことを恥じます」(マルコ 8:38)。

## 弟子をつくる指導者

ここでも、また自分を捨てないで、自分自身の計画に従いたい人、つまりこの世が与えるものを求め、結果的にはいのちを失う人のことが書いてあります。そのような人は、キリストとキリストの言葉を恥じると書いてあります。その恥じ入る思いはもちろん、その人の不信仰から来ています。もしその人が、イエスは神の御子と本当に信じるなら、当然イエスやイエスの言葉を恥じ入る訳がありません。しかし、その人は、「姦淫と罪の時代」の人なので、イエスが戻られる時、イエスはそのような人のことを恥じます。ここで、イエスは救われた人のことを話していないのは明らかです。

これらの結論は何でしょうか。これら聖句の全体を見ると、もう救われて天国へ行く人に更なる献身を求めて書かれているようには到底思えません。本当に救われている者とそうでない者を比較することで、救いの道を明らかに表しています。本当に救われている人は、主イエス・キリストを信じており、主のゆえに自分を捨てますが、一方救われていない者はそのような従順な信仰は一切表しません。

### 他にイエスが要求する献身 (Another Call to Commitment)

他にも色々と考慮できますが、救いと同様に、献身にあつて主イエスが他に要求する大切なものを見ていきましょう。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに  
来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたし  
は心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのく  
びきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに  
安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷  
は軽いからです」 (マタイ 11:28-30)。

伝道者はよくこの聖句を、伝道の招きの中で用いますが、それは正しいことです。これらの言葉は明白に救いへの招きです。ここで、イエスは「疲れた人、重荷を負っている人」に安らぎを提供しています。イエスは身体的な重荷を負っている人に、身体的な安らぎを与える訳ではなく、イエスはたましいへの安らぎと言っています。救

## 正しく始める

いを得ていない人は、罪悪感と恐れと罪で心が重たいので、それで疲れた人は、救われる良い候補者となります。

そのような人たちが、イエスの与える安らぎを受けたいのなら、イエスに従ってふたつのことをしなくてはなりません。その人たちは、(1) イエスのところに来なくてはなりません。そして (2) イエスのくびきを負わなくてはなりません。

偽の恵みを施す教師は、よく「イエスのくびきを負う」という言葉の明白な意味を曲げてしまっています。実際、イエスはここで、イエス自身の首の周りにあると思われるくびきのことを言っており、それ故イエスは「わたしのくびき」と名付けたのだ、と主張する人もいます。更に、そのような人は、そのくびきは二つ一組で、ひとつはイエスの首の周りに、もうひとつは空いていて、イエスは私たちが自分たちの首につけることを待っていると言います。しかし、大切なのは、イエスが、ご自分のくびきは負いやすく、荷は軽いと言っているのです。イエスがひとりで鋤を引っ張ってくださるとイエスが約束しているということです。従って、私たちの唯一の仕事は、そのような教師によると、信仰によってイエスとくびきを共にし、私たちの救いのために必要な働きをすべてイエスにして頂き、私たちはイエスの恵みによって与えられる利得をただ楽しむだけです！そのような解釈は、もう既にお気づきの通り、かなり無理があります。

イエスが、疲れた人はご自分のくびきを負うべきであると言った時、イエスはその人がイエスに服従し、イエスをその人の主とし、その人の人生を導いてもらうことを意味していました。だから、イエスは私たちにイエスのくびきを負って、イエスから学ぶべきだとイエスは言いました。救われていない人たちは、野牛のようなもので、自分勝手な道を歩み、自分の人生を自分自身で支配しています。そのような人たちがイエスのくびきを負うと、自分の人生の主権をイエスに明け渡すこととなります。そして、イエスのくびきが負いやすく、荷が軽い理由は、イエスに従う時、内住のキリストの霊が私たちに力をくれるからです。

従って、ここでもイエスが人々を救いへと招いていたのがわかりますが、この場

## 弟子をつくる指導者

合、疲れた人への安らぎとして描写されていて、イエスに全てを捧げ、イエスを自分の主とするよう呼びかけています。

### まとめ (In Summary)

本当に成功する指導者は、イエスの弟子づくりに関する命令を守り、また悔い改め、献身、弟子となることが天国へ行く信者にとって任意ではないことを知っている人です。むしろ、これらこそ救いに至る本物の信仰の現れなのです。従って、成功する指導者は、未信者に聖書に書かれた福音を説教します。そのような指導者は、未信者に悔い改め、イエスに従うことを促し、逆にそのような献身がない者たちにはその救いを保障しません。

## 第三章

### 正しく続ける (Continuing Properly)

神は私に弟子づくりという目標を目指して欲しかったにもかかわらず、長年、色々な方法で、私はそれに反した慣例に、そうとは知らずに従ってきました。しかし徐々に、聖霊があわれみ深く私の霊の目を開き、その間違いを見せてくれました。私が学んだことのひとつは、私がこれまでに教わってきたこと、神の言葉の観点から信じてきたことの一つ一つを疑問視すべきだということです。私たちの持つ伝統は、他の何よりも、神が語っていることを私たちに見えなくさせます。更に悪いことに、私たちは自分たちの伝統をととても誇りに思い、他のクリスチャンよりも自分たちは真理をよくわかっているエリートだと確信しています。ある教師が皮肉にもこのように発言しました。「今日世界には三万二千もの宗派があります。あなたは自分が正しい宗派の一員であることに幸運と思いませんか。」

その傲慢の結果、神は私たちに敵対します。というのは、神は傲慢な者に敵対するからです。もし私たちが、ここから前進して、イエスの御前に立つ準備をしっかりと行ないたいのなら、私たちは自分自身を低くしなくてはなりません。そのような者に、神は恵み深くあられます。

### 尊敬される牧師の役割 (The Role of the Pastor Considered)

## 弟子をつくる指導者

指導者にとって、弟子づくりという目標こそが、その人の務めにある全てを形作るべきです。指導者は常に、「私が今していることは、イエスの命令の全てに従う弟子をつくる過程にあって、どう貢献するだろうか。」と自問しなくてはなりません。もし正直になって、このように単純に本質を突く問いかけをするならば、クリスチャン活動という旗の下に行っている多くを排除できるでしょう。

牧師、長老、監督<sup>8</sup>という、特定の地域教会で神にある務めが任されている人について考えてみましょう。もしその人がイエスの命令の全てに従う弟子をつくろうとしているなら、第一の責任とは一体何でしょう。教えることがまず自然に頭に浮かびます。イエスは、教えることを通して弟子をつくると言いました（マタイ 28:19-20 参照）。人が長老、牧師、もしくは監督になるための要件は、「教える能力がある」ことです（第一テモテ 3:2）。「みことばと教えのためにほねおっている」者たちは「二重に尊敬を受ける」べきです。

従って、牧師は「今回の説教は弟子づくりという任務をどう果たすか」と自問して、毎回説教を自己評価すべきです。

しかし、日曜日や週の真ん中で行う説教だけで、牧師が教える責任を果たしたと言えるのでしょうか。もし、牧師がそのように考えているのなら、聖書が言う教える責任は主に、その人の人生の模範を通して果たされるという事実を見逃しています。公の場で教えることは、単に日々の生活の中で表す模範を通して教えることへの補足に過ぎません。そのような理由で、長老、牧師、監督の要件として、言葉を使ったコミュニケーション能力よりも、その人の人格や生き方の方が重要視されます。第一テ

---

<sup>8</sup> 8 牧師（ギリシャ語の名詞は *poimain*、意味は羊飼）は、長老（ギリシャ語の名詞は *presbuteros*）、更に監督（ギリシャ語の名詞は *episkopos*、英語の KJV では *bishop*（司教）と訳されている）とも同じ意味で使われている。例として、パウロは、エペソの長老たち（*presbuteros*）にむかって、聖霊が彼らを監督（*episkopos*）として、神の群れを牧する（ギリシャ語の動詞で *poimaino*）よう召したと指導した。また、パウロはまた、長老（*presbuteros*）と監督（*episkopos*）という言葉でテトス一章五から七節で同義語として使った。ペテロも、長老（*presbuteros*）に群れを牧する（*poimaino*）よう強く勧めた（第一ペテロ 5:1-2 参照）。司教（*episkopos* という言葉に対する KJV での訳）は、牧師や長老よりも更に上の務めであり、数多くの教会を監督する人という考えは、人間が作り出したものである。

## 正しく続ける

モテ三章一から七節に列挙される監督の十五の要件の内、十四項目は人格に関わることで、教える能力に関しては一項目だけです。テトス一章五から九節に列挙される長老の十八の要件の内、十七項目は人格に関わることで、教える能力に関しては一項目だけです。パウロは最初、テモテにこう注意しました。「年が若いからといって、だれにも軽く見られないようにしなさい。かえって、ことばにも、態度にも、愛にも、信仰にも、純潔にも信者の模範になりなさい」（第一テモテ 4:12、一部強調）。パウロはその後、「私が行くまで、聖書の朗読と勧めと教えとに専念しなさい」（第一テモテ 4:13）と言いました。つまり、テモテの人格という模範は、公の場で教える務めよりも先に書かれていることで、その重要性を強調しています。

同様に、ペテロはこう書きました。

そこで、私は、あなたがたのうちの長老たちに、同じく長老のひとり、キリストの苦難の証人、また、やがて現われる栄光にあずかる者として、お勧めします。あなたがたのうちにいる、神の羊の群れを、牧しなさい。強制されてするのではなく、神に従って、自分から進んでそれをなし、卑しい利得を求める心からではなく、心を込めてそれをしなさい。あなたがたは、その割り当てられている人たちを支配するのではなく、むしろ群れの模範となりなさい（第一ペテロ 5:1-3、一部強調）。

誰が自分を捨ててキリストに従うことを私たちに励ますのでしょうか。私たちの気に入る説教者の説教を通してですか、それともその人の人生を通してでしょうか。献身的ではない、曖昧な牧師は誰にも十字架を負うことを励ましません。そのような牧師がたまにキリストへの献身のメッセージをすれば、曖昧な一般論として説教するはずで、そうでなければ、聴衆はその信憑性に疑問を持つでしょう。過去の偉大なクリスチャン指導者の殆どは、その人たちの説教によってではなく、その人たちが払った犠牲によって後世の記憶に残っています。彼らの模範は彼らが天に召された後もずっと私たちを励ましています。

## 弟子をつくる指導者

牧師が、イエス・キリストの真の弟子として従順の模範を示していないのなら、そのような人がする説教は時間の無駄なだけです。牧師よ、あなたの模範はあなたの説教の十倍も雄弁に語ります。あなたは人々に自分を捨て、キリストに従う事を、自分自身がそれをする事で励ましていますか。

しかし、牧師が教会員にとって単に日曜日の朝の演説者というだけなら、どうやってその牧師の人生の模範を通して人々に教えることができるのでしょうか。教会員が牧師の人生を垣間見るのに一番近いのは、その人たちが律儀に教会を出る際に牧師と交わす五秒ほどの握手の時位でしょう。現代の牧師が表す牧師の模範にはかなり間違ったところがあるのではないのでしょうか。

### 毎週日曜日の朝の説教 (The Weekly Sunday Morning Sermon)

牧師の間違った思い込みのもうひとつは、その人の教える責任として、毎週公の場で講義することを第一と考えていることです。イエスの教える務めは、公に行った説教（それは大抵の場合、かなり短いものであったようです）だけではなく、探求心のある弟子たちと交わす個人的な会話によって行われました。しかも、そのような会話は教会で週一回三十分に限られてはおらず、海岸沿いとか家の中とか埃っぽい道を歩きながら行われていました。そして使徒たちはイエスの模範に従って教えました。五旬節の日の後、十二弟子は「宮や家々で」（使徒5:42、一部強調）で教えました。使徒たちは、毎日信者の集まりにも参加し交わりました。パウロもまた、「人々の前でも、家でも」教えました（使徒20:20、一部強調）。

この時点で、もしあなたが牧師なら、自分の教えの務めをイエスや初代教会の使徒たちのものと比べていることでしょうか。おそらく、今までしてきたことが、神があなたにすよう求めているものかどうか、疑問に思い始めたかもしれません。それとも、百年以上の教会の伝統がしてきたことを、あなたもただしているだけでしょうか。疑問を持ち始めたのならそれはいいことです。とてもいいことです。それは正しい方向への第一歩です。

あなたは更に先を見ているかもしれません。「家々を巡って教えたり、私の生活



## 正しく続ける

の中に教会員を関わらせて、私の模範を通して影響を与えるなんていう務めをする時間が一体どこで見つけられるのか。」と自問しているかもしれません。それは素晴らしい質問です。というのは、現代が考える牧師の模範に更に誤りがあることに気づき、考え続けさせるからです。

あなたはこう考えているかもしれません。「教会員とそんな近くで生活したくない。聖書学校では、教会員の牧師という職業に対する尊敬を維持するために、牧師はその民とあまり近すぎる関係を持つてはいけないと習った。牧師は教会員と親しい友たちにはなれないはずだ。」

そのような考えは、現代の教会でよく成されるやり方に非常に問題があることを現しています。イエスは十二弟子ととても近い関係にあったために、食事の際、ひとりの弟子は自分の頭をイエスの胸にもたれさせる程かなり居心地良くしていました（ヨハネ 13:23-25参照）。彼らは実際本当に数年間一緒に住んでいました。神の務めを成功させるのに、自分の弟子と職業的距離を置くという考えには、これで終止符を打てるでしょう！

### 古代と現代の方法の比較 (A Comparison of Methods, Ancient and Modern)

イエスに従い、弟子をつくることが目標であるなら、イエスの弟子づくりのやり方に従うのが賢いとは思いませんか。イエスはそれらの方法でかなりの弟子をつくりました。また、イエスに従った使徒たちにもそれらの方法で多くの弟子をつくりました。

キリストの全ての命令に従う弟子をつくるための現代の方法はどれ程のものでしょうか。例えば、アメリカのクリスチャンについての研究では、いくつかの質問を通して、また聖書を再確認して行った調査によると、自分はクリスチャンであると言っている人とそうでない人のライフスタイルに事実上違いはないという結果が繰り返し出ています。

自分自身を吟味するために自問してみてください。初代教会は教会の建物や、専門的に訓練を受けた聖職者、聖書学校や神学校、讚美歌集、プロジェクター、ワイヤ

## 弟子をつくる指導者

レスマイクや録音機器、日曜学校カリキュラムや若者向けミニストリー、賛美チームや聖歌隊、コンピューターやコピー機、クリスチャンラジオやテレビ局、何十万ものクリスチャン関連本の標題、そして個人で所有する聖書など何もなく、どうしてそこまで弟子づくりに成功したのでしょうか。初代教会も、イエスも、それらのもの何一つ、弟子づくりには必要ではありませんでした。そしてそれらが当時絶対に必要なものではなかった故に、現在でも必要ではないのです。助けになるかもしれませんが、どれも必要不可欠なものではありません。実際、それらの多くものは、私たちが弟子をつくることにあって、妨げとなり得たり、また実際になっているのです。ここでふたつの例を挙げます。

まずは、現代教会では必須とされる、聖書学校または神学校で訓練を受けた牧師だけに教会を導かせるということについて見ていきましょう。そんなことはパウロにとって聞いたこともないことでした。いくつかの町では、パウロが教会開拓をした後、そこから何週間か何カ月か離れ、それから教会を監督する長老を指名するために戻ってきました（使徒13:14-14:23を参照）。ということは、それらの教会は、パウロがいなかった間、数週間もしくは数か月間正式な長老はおらず、パウロがその後指名したのは、まだ信じてまもない若い信者でした。その務めに携わるのに、二、三年の正式な教育なんていうものは全く受けませんでした。

つまり、聖書は、牧師、長老、監督の務めを行うのに、二、三年の正式な教育を受ける必要はないと言っています。この事実を反したもつともな議論は、誰にもできません。しかし、現代の教会には、「もし教会の指導者になりたいのなら、数年間の正式な教育を受ける必要がある。」<sup>9</sup>というメッセージを要件として暗示しています。これは指導者を育てる過程を遅らせ、結果として弟子づくりと教会成長も遅らせます。

---

<sup>9</sup> 9 聖職者になるには専門的な訓練を受けるべきだという現代主流の考えは、色々な意味で、もっと大きな病気のひとつの症状に過ぎない。その病気とは、知識を得ることを霊的成長と同一視することだ。私たちは、知識がより多い人をより霊的に成熟した者と見なすが、実際そうとは限らず、むしろ習ったすべてのことで高ぶっているかもしれない。パウロは「知識は人を高ぶらせる」（第一コリント8:1）と書いた。毎日退屈な講義を二、三年聞く人は、確かに毎週退屈な説教をする準備ができることでしょう！

## 正しく続ける

アメリカのエイボン社やアムウェイ社が、もしそれぞれの営業担当に、石鹸や香水の販売に取り掛からせる前に、その人とその家族を他の町に引っ越させ、三年間正式な訓練を受けることを義務付けていたら、各社が狙う市場をどうやって飽和状態にできたことでしょうか。

「でも、牧するのはとても難しく複雑な仕事なんです！」という人もいますでしょう。「聖書には信者になったばかりの人に監督の職に就かせるのは良くないと書いてあります」（第一テモテ3:6参照）。

まずは、新しい信者の定義になりますが、パウロの考えが私たちのものとは違っていたことははっきりしています。というのは、パウロは信者になってまだ数カ月しか経っていない人たちを長老、牧師、監督の職に就かせたからです。

次に、現代の教会で牧することがとても難しく、複雑になっているひとつの理由は、教会組織やその中の務めの体制全体が聖書の模範とかけ離れていることが挙げられます。私たちはそれをとても複雑にし過ぎて、スーパー人間でない限りその要求を乗り切ることはできません！

「でも、神は聖書学校や神学校の教育を受けていない人が教会を監督することを禁じています！」という人もいますでしょう。「そんな監督ならその群れを間違った教えに導くかもしれません！

そのことについてパウロは心配していなかったようです。今日聖書学校や神学校で訓練された聖職者には、処女降誕を信じない人や、同性愛に賛成する人や、みんなが高級車を乗り回すことが神の御旨だと教える人や、神は誰が地獄に落ちる者かとあらかじめ決めていと主張する人や、キリストへの従順を表すことなく、天国に行けると何のためらいもなく言う人がいるのが事実です。現代の聖書学校や神学校は、更に間違った教義に貢献し、専門的訓練を受けた聖職者たちは、そこから更に間違った教義に貢献します。

教会の「平信徒」は、プロたちは神学校に行っており、「証拠となる言葉」をもっと出せるので、そのような人たちに挑むのを恐れています。しかも、それらの聖職



## 正しく続ける

あるべきです。11<sup>11</sup>そうすることで、教会がより管理しやすくなります。おそらくその理由で、長老、監督の要件のひとつに、自分自身の家を上手に治めていることが挙げられています（第一テモテ 3:4-5）。小さな「信仰の家」を治めることは、自分の家庭を治めることができれば、それ程難しいことではありません。

三つ目は、会衆は聖書の福音に悔い改めて応答した人たち、つまり主イエス・キリストの本物の弟子たちで構成されていなくてはなりません。そうすることによって、実際は山羊である羊を牧そうとすることで起こる様々な課題の全てを除外します。

最後に四つ目は、牧師、長老、監督は文化的な役割ではなく、彼らの聖書的な役割を追うべきです。つまり、現代の殆どの教会がしているように、自分たちの職を全ての中心で、最も重要な、脚光を浴びる地位として握りしめてはいけません。12<sup>12</sup>むしろ、彼らは御からだ全体の一部に過ぎず、模範と教訓によって教える謙虚な僕で、彼らの目的は、日曜日の朝の演説者になることによってではなく、イエスのやり方に従うことで、弟子をつくることです。

この模範に従うと、信者となって三カ月の人でも教会を監督することができます。

### 教会堂の建築 (Church Buildings)

教会堂の建築はどうでしょうか。これも現代の教会は「必要不可欠」としますが、初代教会はそれなしにうまくやっていました。教会堂は弟子づくりの過程に役立つのでしょうか。

私が牧師であった頃、自分はむしろ不動産仲介業者か、銀行員か、ゼネコンか、

---

<sup>11</sup> 11 使徒 2:2, 46, 5:42, 8:3, 12:12, 16:40, 20:20; ローマ 16:5, 第一コリント 16:19; コロサイ 4:15; ピレモン 1:2; 第二ヨハネ 1:10 を参照。

<sup>12</sup> 12 パウロが書いた教会への手紙は様々な教会の全ての人宛に書かれており、長老や監督宛ではないことは注目に値する。パウロが教会へ書いた手紙のうち、たった二通にだけ長老、牧師、監督について言及している。ひとつの例は、手紙の冒頭の挨拶文の中に、パウロが彼らを手紙の受取人から除外されていると思って欲しくないのので付け加えたようにも見受けられる（ピリピ 1:1 参照）。もうひとつの例は、パウロが聖徒たちを整える務めのリストの中に牧師を挙げている（エペソ 4:11-12 参照）。私たちが長老にも関わると考えそうな、主の晩餐の施行や、クリスチャン同士の争いの解決に関する指示をパウロが与える時、そこで長老の役割について何も触れていないことは特に注目に値する。これらのことは、現在の殆どの教会がしているようには、当時、長老、牧師が中心的に全ての重要な役割を担っていたわけではないという事実を指摘している。

## 弟子をつくる指導者

プロの資金調たち係のような感じがしました。私は教会堂を持つことを夢見て、物件を探し、古い建物を改築し、建物を貸出し、新しい建物を建て、神が雨を送れば、建物のヒビに修繕を加えました。建物によって、沢山の時間と労力が奪われました。私が、そのように建物のことを思い巡らして沢山のことをした理由は、他の殆どの牧師と同様、教会として集まる場所である教会堂なしに成功はあり得ないと確信していたからです。

教会堂はお金を、かなり浪費させます。（アメリカでは、会衆によっては教会堂のために何千万ドルもの大金をかけるところがあります。）教会堂を持つ夢が実現した後、私は教会堂のローンを支払いきって、その全てのお金を自分の務めのために使えるようになることを夢見ました。かつて、私が教会員に良き管理者となり、借金を返済することを教えていた時、私は教会全体に借金を追わせていたということがありました！（これこそ正に、私は模範によって教えていました。）

殆どの教会堂は週に一、二回、数時間だけ使われています。この世の中を見渡して、それ程までに少ない頻度で使う建物を建てる組織は一体あるのでしょうか。（あるとすれば、新興宗教か偽宗教くらいでしょう。）

そのようなお金の吸い取り穴は沢山の問題を起こします。教会堂を持つ牧師はいつも、常にお金の流れが必要となり、それは牧師の行動に影響します。牧師は、裕福層（その人たちは犠牲なく与えます）の要求に応じたくなり、その人たちの気分を害するかもしれないような教えには妥協し、その人たちの目的にかなうように聖句を曲解します。牧師の説教はお金の流れを滞らせず、それが増えることを励ます主題に傾きます。そのために、時々クリスチャンは、信者でいることの最も重要な要素は、(1) 十一献金をする事（因みに、イエスは、それ程重要でない命令として語りました）、(2) 礼拝に出席すること（そこでは毎週日曜日に十一献金が集められます）であると考えるようになりました。これは弟子づくりには程遠い描写です。しかし、多くの牧師は教会員みんながただこの二項目だけをしてくれるよう願っています。もし全体の半分でもこの二項目をする教会の牧師なら、その牧師はその秘訣を書いて本にし、他

正しく続ける

の多くの牧師に売ることもできます！

事実ははっきりしています。使徒の働きの中のどこにも、建物の購入や建設について書いてありません。殆どの箇所、信者は定期的に家で会っていました。13<sup>13</sup>教会堂の建築資金を集めませんでした。更に、キリスト教が三百年経ち、ミラノ勅令により教会が世と融合するまでは、教会堂建築という考えは誰にもありませんでした。三百年間です！かなりの長い期間です！その間、酷い迫害の中でさえも、建物はありませんが、教会は繁栄し、物凄い勢いで増え広がりました。そのような現象はその後何世紀に渡り何回も繰り返されました。中国では比較的最近起きています。中国にはおそらく百万軒以上、家の教会があります。

### **日曜日11時は最も分離された時間 (Eleven O'Clock Sunday is the Most Segregated Hour)**

アメリカに倣う現代教会の施設は、少なくとも、全ての年齢層向けにあるミニストリーを個別の部屋で行うのに十分な広さを持ってはなりません。しかし初代教会では、男性、女性、全年齢層の子供たちと特別に分類されたミニストリーなんて聞いたこともありません。教会はあらゆる意味で統一されており、寸断されていませんでした。家族の単位は保たれ、親の霊的責任は教会という組織の中で強化されていました。それが損なわれている現代の教会組織とはえらい違いです。

教会堂は弟子づくりに貢献していますか、それともそれを妨げていますか。歴史的に見て、何世紀にも渡って弟子づくりは、教会堂がない場合の方がより成功していて、それには多くの良い理由があります。

家で会うことは、最初の三百年間初代教会がやっていましたが、そこでは楽しい食事、教え、歌、そして霊の賜物がおそらく三から五時間かけて分かち合われ、信者の真の霊的成長を促す環境が提供されました。現代教会では、礼拝参加者はまるで劇場の観客のように、ステージの上の見世物を座って見ようとしつつ、他人の後頭部を

---

<sup>13</sup> 13 使徒 2:2, 46; 5:42; 8:3; 12:12; 16:40; 20:20; ローマ 16:5; 第一コリント 16:19; コロサイ 4:15; ピレモン 1:2; 第二ヨハネ 1:10 を参照。

## 弟子をつくる指導者

見ていますが、初代教会では、キリストの御からだの器官として、お互いの顔が見えるように座り、みんなが一体感を持って参加していました。普段の食事を通しての交わりは、気さくな雰囲気、透明感があり、真に互いを思いやる関係づくりがある本物の交わりでした。それは現代の教会でやっているような、牧師の合図の下、隣の席の見知らぬ人と軽く握手をする「交わり」とは比べものになりません。

教えの時はどちらかというと、同等の人たちの間で交わす質疑応答による公開討論のような感じで、変な服を着た人が、礼儀正しい（退屈な）聴衆の上に立って、大げさな声で与える講義のような感じではありませんでした。牧師は「今週の説教の準備」をしませんでした。誰でも（長老、牧師、監督を当然のことながら含めて）聖霊が与える教えを受けるのでした。

家に人がぎっしり詰まっても、長老（たち）はより大きな建物を求めませんでした。むしろ、二つの家の会合に分けなくてはならないことはみんな承知の上で、ただ新しい会合は誰の監督の下、どこで開かれるべきかを、聖霊によって探し出すだけでした。幸いにも、その人の哲学的、もしくは教義的な傾向を詳しく調べるために、教会成長に詳しい理論家を含む見知らぬ人の履歴書を集める必要はありませんでした。というのも、その集まりの只中に監督を既に目指している人がおり、その人は実地訓練済みで、将来の自分の小さな群れがどんなものかもわかっていました。その新しい家の教会は新しい地域へ伝道し、クリスチャンがどんな人たちか、そのお互いを愛し合う姿を通して未信者に証する機会がありました。未信者をその会合に誘うのは、その人たちを食事に誘う位簡単なことでした。

## 祝福された牧師（The Blessed Pastor）

家の教会の牧師、長老、監督は、現代教会で増え広がる、その神の務めの責任の重圧から来る「燃え尽き症候群」にかかる人はいませんでした。（ある調査によると、アメリカでは一カ月に千八百人も牧師がその務めから離れていると報告されています。）家の教会の牧師が世話するのは、ごく小さな群れだけで、もしその群れが牧師の経済的な必要を満たすなら、その務めは職業として成り立ち、牧師は実際自分の



## 正しく続ける

時間を祈ったり、みことばを瞑想したり、未信者に福音を聞かせたり、貧しい者を助けたり、病に伏す者を訪れ祈ったり、自分と一緒にこれらのことをする新しい弟子を整えるための深い交わりの時間に費やしたりしました。教会運営は単純でした。

牧師は、その地域の他の長老、牧師、監督たちと共に働きました。「町で一番大きな教会」になるよう必死になったり、仲間の牧師たちの間で誰が「一番良い若者向けのミニストリー」や「一番楽しい子供向けプログラム」を持てるかを競ったりということはありませんでした。集まる人も、賛美チームがどの程度上手か、または牧師の話がどの程度面白いかを吟味するために教会へ行った訳ではありませんでした。彼らは生まれ変わった者たちで、イエスとイエスの民を愛していたのでした。一緒に食べたり、神からの賜物は何でも分かち合うことを喜んでしました。彼らの目的はイエスに従い、イエスの裁きの御座の前に立つ準備をすることでした。

確かに、家の教会にも問題はありましたし、それらは使徒書簡に記録されています。しかし、現代の教会を必然的に悩ませ、弟子づくりを妨げている問題の多くは、初代教会には存在しませんでした。それは単純に、その地域教会のモデルが、3世紀の後、暗黒時代以降発展したものに比べて余りにも違ったからです。もう一度、この事実に心を留めてください。四世紀の初めまで、教会堂はありませんでした。もしあなたが最初の三世紀の間生きていたとしたら、あなたの神にある務めは今のものとどのように違っていたでしょうか。

最後に、より忠実に聖書の模範に従えば従う程、神の目的である弟子づくりをもっと効果的に達成させることができます。今日の教会において弟子づくりを妨げている最大の理由は、聖書的でない構造と習慣に教会が根ざしてしまっていることにあると言えます。



## 第四章

### 家の教会 (House Churches)

家の教会と聞くと、まず家の教会と組織的教会の唯一の違いはその大きさと「ミニストリー」の提供能力だけだと勘違いする人が多いです。時々、家の教会では、教会堂のある教会が施すミニストリーを提供できないと結論付けられます。しかし、信者をキリストに倣わせ、その務めに歩める弟子をつくることに貢献するものが「ミニストリー」の意味だとしたら、組織的教会には何ら有利な点はなく、前章でも示した通り、むしろ不利だと言えるかもしれません。確かに家の教会は、組織的教会のような多角的な活動の提供できませんが、真のミニストリーを提供するのに優れていると言えます。

実際の教会堂がないというだけで、家の教会を正式な教会と見なさない人もいます。もしそのような人たちが初代教会時代の三百年間のどこかで生きていたとしたら、当時あったどの教会をも本当の教会として見なさなかったことでしょう。実際イエスは、「ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです」(マタイ18:20)と宣言しました。イエスは信者がどこで集まらなくても、ならないかについては一切触れませんでした。例えたった二人の信者しかいなくても、その人たちがイエスの御名によって集まれば、そこに主の臨在があることを約束しま

## 弟子をつくる指導者

した。実は、キリストの弟子たちがよくレストランでやっているような、食事を分け合って、真理を語り合い、教えと訓戒を施し合うことは、日曜の朝教会堂で起きていることよりも、よっぽど新約聖書にある教会の集まりの模範に近いのです。

前章で、組織的な教会と比べて、家の教会が持ついくつかの利点を列挙しました。この章では、家の教会モデルが、なぜ弟子づくりという目的を効果的に達成させ、且つ、なぜこれが聖書的な代替策であると言えるのか、その理由をいくつか挙げていきます。しかし、まず最初に、私の目的は組織的な教会やその牧師を攻撃することではないことを覚えていてください。組織的な教会には敬虔で誠実な牧師が沢山いて、主を喜ばすために、その組織の中で最善を尽くしています。私は毎年何千人もの組織的な教会の牧師たちへのミニストリーをしていますし、彼らを心から愛し、また感謝しています。彼らは世界で最も素晴らしい人たちです。私は牧師の務めが非常に大変であることを知っているが故に、その苦勞を少しでも減らし、もっと効果的で且つ楽しい代替策を提案したいのです。家の教会モデルは、聖書的で、効果的に弟子づくりをし、御国を広げていく可能性を持っています。組織的な教会の牧師のかなり多くが、家の教会という設定でその務めを成すと、より幸せで、より効果的で、より満足感を得れると私は考えます。

私は以前組織的な教会を二十年以上牧したことがあり、私は当時私が持っていた知識を全て使ってその務めに最善を尽くしました。しかし、日曜日の朝、多くの教会を数カ月かけて訪問した時、初めて単なる「平信徒」として教会に集うことがどんなのかを体験しました。その体験は私に色々なことを気づかせ、なぜ多くの人が教会に行くことに熱心でないのかがわかり始めました。牧師以外の殆どの人がするように、私も静かに礼儀正しく礼拝が終わるのを座って待ちました。終わった時は、退屈な観衆の一人と言うよりは、少なくとも一人の参加者として、他の人と交わることができました。この体験は、もっと良いやり方はないか、考え出すひとつのきっかけとなり、家の教会モデルについての私の研究が始まりました。世界中には何百万もの家の教会が存在することを知り、驚きました。そして、家の教会には組織的な教会よりも絶対的

## 家の教会

な利点があるとの結論に至りました。

この本を読む多くの牧師は家の教会ではなく、組織的教会を牧していることと思います。ここまでに私が書いたことを受け入れるのは、最初は困難で、過激な発想のように思われているのも承知の上です。しかし、そのような牧師たちに、私の主張を思い巡らす時間を少々とって頂きたいです。すぐに全て私の言う事に共感してくれることは期待していません。私はこれを、主の愛に励まされて、牧師たちとその教会を想って書いています。

### 聖書にある唯一の教会の種類 (The Only Kind of Church in the Bible)

まず、最も重要なことは、特別な建物で集まる組織的教会というものは、新約聖書には記載がなく、家の教会というものは、初代教会の基準であったことは明確に記されています。

こうとわかったので、ペテロは、マルコと呼ばれているヨハネの母マリヤの家へ行った。そこには大ぜいの人が集まって、祈っていた。

(使徒12:12、一部強調)

益になることは、少しもためらわず、あなたがたに知らせました。

人々の前でも、[しかし、当然のことながら教会堂の中ではありませんが、]家々でも、あなたがたを教え、(使徒20:20、一部強調)

...プリスカとアクラによろしく伝えてください。...またその家の教会によろしく伝えてください。... (ローマ16:3-5、一部強調。ローマにあった他の二つの家の教会のようなものの例として、ローマ16:14-15も参照のこと)。

アジアの諸教会がよろしくと言っています。アクラとプリスカ、また彼らの家の教会が主にあって心から、あなたがたによろしくと言っています (第一コリント16:19、一部強調)。

どうか、ラオデキヤの兄弟たちに、またヌンパとその家にある教会に、よろしく言ってください (コロサイ4:15、一部強調)。

## 弟子をつくる指導者

姉妹アピヤ、私たちの戦友アルキポ、ならびにあなたの家にある教会へ（ピレモン1:2、一部強調）。

まだ当時は教会が生まれたばかりだったために、初代教会は教会堂を建てていなかったただ、という議論は昔からずっとあります。しかし、生まれたての教会の状態が、新約聖書史の記録によると数十年間（そして、そのあと2世紀以上に渡って）というかなり長い期間続いたのです。ですから、教会堂が教会成熟の印だとしたら、使徒の働きで私たちが読む使徒たちの教会は、一度も成熟しなかったということになってしまいます。

使徒が誰も教会堂を建てなかった理由は、イエスがそのような模範も指導も残さなかったので、そうすることは神の御旨とは全く思えなかったからだ、と私は思います。イエスは特別な建物なしに弟子をつくり、イエスは弟子たちに弟子をつくるよう言いました。弟子たちは、特別建物を建てる必要を感じませんでした。その位単純なことでした。イエスが弟子たちに世界中に出て行き弟子をつくりなさいと言った時、イエスの弟子たちは「イエスが命じたことは、教会堂を建てて、そこで週に一度説教をすることだ」とは思いませんでした。

### 聖書的な管理 (Biblical Stewardship)

このことは、家の教会が組織的教会よりも優れている点の二つ目に導きます。すなわち、家の教会モデルは、その教会員の持つ資源を、神にあってきちんと管理することを励ましますが、それは非常に重要な弟子づくりの要素です。<sup>14</sup>教会堂建設や、建物賃貸、修繕、拡張、改築、空調にお金を浪費しないで済みます。結果として、建物を持つことで浪費するお金を、貧しい人に衣食を与えたり、福音を広めたり、弟子をつくったりと、使徒の働きで行われていたことと同じように使うことができます。もし教会堂のために使われる何十億ドルというお金が、福音を広めるためや、貧しい人に仕えるために使われていたら、神の御国のためにどんなに良いことができていた

---

<sup>14</sup> 14 ホームページ [www.shepherdserve.org](http://www.shepherdserve.org) の聖書のトピックにある「お金についてのイエスの教え」(“Jesus on Money”)を参照。

## 家の教会

か考えてみてください！想像がつかない程です。

しかも、二十人程から成る家の教会は、「天幕づくり」の（すなわち、「報酬を教会から受け取らない」）長老、牧師、監督によって実際監督されました。そのような教会は、運営資金を全く求めませんでした。

勿論聖書では、長老、牧師、監督は、その働きに応じて報酬を支払われるべきであることを示唆しており、神にある務めをフルタイムで行う人たちは、それで生計を建てられるべきです（第一テモテ5:17-18参照）。家の教会に十人の有所得層が十一献金をすれば、その人たちの平均的な生活水準で一人の牧師を支えることができます。もしそれが五人なら、牧師の平日の半分を、その務めに費やすことができます。

家の教会モデルに従うことで、建物に費やしていたお金を牧師の支援のために使えるようになるので、組織的教会の牧師は、家の教会の普及が彼らの仕事を脅かす、と考えるべきではありません。むしろ、神にある務めを成すことを自分の職業として、神に仕えたいという熱心を、神が心に植えていることに、多くの人たちが気づくかもしれません。<sup>15</sup>それは、かえって弟子づくりという目的を達成させます。更に、家の教会に二十人の有所得層が集うなら、その半分以上を伝道活動や貧困層への施しに充てることが可能になります。<sup>16</sup>

もし、組織的教会から、家の教会のネットワークに移行して、仕事を失う人たちと言えば、教会の秘書や事務員、またプログラム支援スタッフや、特別なミニストリーに携わるスタッフ（例えば、大きな教会の子供・若者向けミニストリー）でしょう。そういった人たちは、おそらく、今彼らのしている聖書的な土台が殆どないミニスト

---

<sup>15</sup> 15 過激な発言に聞こえるかもしれませんが、教会堂を必要とする本当の理由は、小さな家の教会を監督できるリーダーがいないことにある。その原因は、組織的教会の中で、将来性のある若いリーダーが、なかなか弟子として育成されないことにある。大きな組織的教会には、その会衆の中に、神からの牧師の呼びがある人たちがいて、その人たちに丁度良い務めがあるのに、その機会が奪われているのは、そのような教会の牧師たちのせいではないだろうか。確かにその通りである。

<sup>16</sup> 16 この一人の牧師に対して、十人または二十人という割合は、イエスの十二弟子の例やモーセの十人の長の例など、聖書に示された模範を考慮すると、牧師の行き過ぎた務めとはならないはずである（出エジプト 18:25 参照）。殆どの組織的牧師は、彼ら自身が効果的に弟子とすることが可能な人数よりも、はるかに多くの民を監督している。

## 弟子をつくる指導者

リーを、聖書に基づいたミニストリーに交換したくはない、と思うことでしょう。家の教会は、子供・若者向けミニストリーは必要がなくなります。というのも、聖書によるとそのようなミニストリーの責任は親に与えられており、家の教会は、人間が作り上げてきたキリスト教の文化的標準よりも、聖書の模範に従うことに熱心だからです。親がクリスチャンではない信者の若者も、組織的教会と同様、家の教会でもその一部として組み込まれます。新約聖書で「若者向けの牧師」や「子供向けの牧師」が存在しないのはなぜかと考えたことはありますか。そのような務めは、キリスト教の最初の千九百年間には存在しませんでした。ではなぜ、今日となって突然、特に裕福な西洋の国々で重要視されるようになったのでしょうか。<sup>17</sup>

最後に、途上国では特に、牧師が建物を借りたり、所有したりすることは、西洋のクリスチャンの支援なしには無理だと考えています。この依存関係が引き起こす結果は、あまり好ましいものではなく、多様化しています。しかし、実のところ、このような問題は三百年の間キリスト教には存在しませんでした。もしあなたが途上国の牧師で、あなたの教会員の経済状況が教会堂を持つことを困難にしているのなら、寄付目当てにアメリカからの訪問客にこびへつらう必要はありません。神はもう既にあなたの問題を解決しました。弟子づくりを成功させるのに、教会堂は全く必要ありません。聖書の模範に従うべきです。

### 分裂した家族の終焉 (The End of Fragmented Families)

家の教会のもう一つの利点はこれです。すなわち、小さな子供たちや十代の若者たちを訓練する場として優れているということです。今日の組織的教会（特にアメリカの大きな教会）が犯した最大の過ちのひとつは、子供向けと若者向けの素晴らしいミニストリーを提供してしまったことです。しかし、そのような教会は、楽しい子供や若者向けプログラムに数年間参加した子供たちの大多数が、「巣立ち」という名目

---

<sup>17</sup> 17 同様に、なぜ聖書には、「主任牧師」や「副牧師」が存在しなかったのか、疑問を持ったかもしれない。現代教会そのものの構造により、重要視されているこのような肩書は、初代教会そのものの構造では必要なかった。二十人程が集まる家の教会では、主任牧師や副牧師といった人たちは必要ない。



## 家の教会

で教会に二度と戻ってこないという事実をあまり明らかにしていません。（この件に関する統計について若者向けの牧師に聞いてみてください。答えを知っているはずですよ。）

更に、若者向け、また子供向けの牧師が存在する教会は、親が子供たちの霊的な訓練をすることができない、もしくはする責任がない、といった間違っただけの考えを親たちに植え付けています。ご存知の通り、「我々があなたの御子さんの霊的な訓練を施しましょう。我々はそのための専門的な訓練を受けていますから。」といった具合です。

現在の構造では、失敗を増やすだけです。それはとめどもなく続く、妥協のサイクルを生み出します。まず、親がその子供の喜ぶ教会を探すことから始まります。十代の少年、ジョニーが帰宅途中で教会が楽しかったと言え、両親は興奮します。なぜなら、ジョニーが教会を楽しめることは、彼が霊的なことに興味を持つことと同様に考えているからです。このような両親は完全に間違っています。

成功を求める主任牧師が、自分の教会の成長を求めているが故に、若者向け、子供向けの牧師は、子供たちが楽しめて、且つ「身近」に感じられるプログラムを作らなくてはならない、という重圧から、スタッフ会議から退席することはよくあります。（「身近さ」はいつも「楽しさ」の次で、それは必ずしも「子供たちを悔い改め、イエスを信じ、イエスの命令に従うことに導く」わけではありません。）もし子供たちがプログラムを受け入れたなら、考えの甘い親たちは（お金を携えて）教会に戻り、教会は成長するという訳です。

若者の集まりが成功しているかどうかは、特にその参加人数で測ります。若者向けの牧師は、会場を人で埋めるためには何でもします。それは往々にして、真に霊的なものとの妥協を意味します。子供たちが、若者向けの牧師の話がつまらない、とか、嫌な気分にする、などと不平を言っていると、その親が主任牧師に伝言、その報告を聞かされる若者向けの牧師は、なんと可哀そうなことでしょうか。

しかし、そのような若者向けの牧師が家の教会の指導者となったら、キリストの

## 弟子をつくる指導者

御からだにとって、なんという祝福でしょう。一般的に、そのような牧師たちは、既に人と接するのが得意で、若い情熱と力でみなぎっています。彼らの多くが若者向けの牧師となっている理由は、将来主任牧師として生き残るのに必要な超人的能力を、少しずつ体得するために通らなければならない過程だからです。殆どの若者向けの牧師は、家の教会を十分牧せます。彼らが若者の集まりの中でしていることは、教会の聖所で普段していることよりも、聖書にある教会モデルによっほど近いです！同じことが、子供向けの牧師にも言えるかもしれません。彼らは子供も含めた人たちの輪の中で座って、その交わりに参加して、時には食事も共にしているという点で、主任牧師たちよりもよっほど先に進んでいると言えるでしょう。

子供たちや十代の子供たちは、本当のクリスチャン・コミュニティーを体験でき、大きなクリスチャン家族の一員として、参加し、質問し、色々な年齢層の人と関わりを持てる体系である、家の教会においては、自然に、より良い弟子訓練を受けられます。組織的教会では、子供や若者たちは常に大きなショーや「楽しい」学びの時を経験しているだけで、その中で本当のコミュニティーがあったとしても、学校で習う友人関係と何ら変わりなく、そこで自分の内に潜む邪悪な偽善に気づかせることは、殆どないのです。

しかし、あらゆる年齢層が集まる所にいる、うるさく泣く赤ん坊や、落ち着いたのらない小さな子供たちは一体どうなるのでしょうか。

そのような乳幼児や幼児たちはいつも受け入れられるべきであり、子供たちが何か問題を引き起こした時は、実際に必要な手順を踏みながら、彼らを取り扱うことができます。例えば、そのような子供たちは別の部屋で遊んでもらうために連れて出されても良いでしょうし、もしくは同じ部屋の床の上でクレヨンや紙を与えて塗り絵をさせていても良いでしょう。家の教会のコミュニティーの中では、子供を見知らぬ職員が配属されている託児所に置いていく、といった問題はありません。子供たちは、親戚のような家族の中で愛されています。組織的な教会で赤ん坊が泣くことは、礼拝の流れを乱すことになり、見知らぬ人の非難めいた眼差しを受ける親の恥となります。

## 家の教会

家の教会で泣き出す赤ん坊は、家族に囲まれているため、そのようなことが起きても、かつてみんなの腕の中に抱かれた子が、今その只中に、神からの小さな贈り物として存在していることを、みんなに思い出させるので、誰も気になりません。

しつけられていない子供を持つ親は、他の親たちから彼らに必要なことを優しく習うことができます。ここにも、信者たちの間には、純粹に互いを思いやる関係があります。これは、組織教会でよくある、互いの陰口を言うようなものではありません。彼らはお互いを良く知っていて、愛し合っているのです。

### 幸せな牧師 (Happy Pastors)

二十年間教会を牧し、世界中にいる何万人もの牧師に向かって話し、多くの牧師と個人的な友人関係にあるところで、私は現代教会を牧することにあって、何が必要であるかを知っていると云えると思います。組織的な教会の牧師がみんなそうであるように、私はミニストリーの「暗い面」を体験しました。実際にそれは非常に暗く、時として、「残忍」という言葉の方がそれを良く表している程です。

殆どの牧師に必然的に降り懸かる期待は、信じ難い程のストレスを生み出し、それにより牧師自身の家族関係を破壊させることもあります。牧師は多くの理由で失望しています。牧師たちは、同時に、政治家であり、裁判官であり、雇用主であり、心理学者であり、活動の指揮者であり、建築請負業者であり、結婚カウンセラーであり、演説家であり、経営者であり、読心術者であり、管理人でなくてはなりません。彼らは、少しでも大きなキリストの御からだを得たいと思う競争心の強い牧師たちと一緒に、自分自身もその競争に参加しています。多くの牧師は自分がその職業に閉じ込められたような気分であり、賃金も低いです。教会員は、彼らの顧客であり雇用主です。時々これらの雇用主と顧客は、牧師たちに非常に困難な時を与えます。

それと比べて、家の教会の牧師は簡単です。まず、もし牧師が真の弟子としての模範的人生を表し、イエスの命令に妥協なく従うことを教えていけば、山羊はその交わりに入ることに興味を示さないでしょう。事実、家で会うことで、おそらく多くの山羊を追い払うことになるでしょう。従って、牧するのは殆ど羊だけということにな

## 弟子をつくる指導者

ります。

次に、監督の対象が大人十二人から二十人位なら、牧師は個人的な関わりを通して、羊を愛し、弟子訓練することができます。牧師は、家庭の父親のような存在として、教会員と真に親密になれます。教会員が受けるにふさわしい時間を牧師は与えます。私が組織的な教会の牧師だった頃、私はよく孤独に感じました。教会の誰かと親しくなると、そうでない人たちが牧師と仲の良い友たちの輪に入れてくれないと私に反発したり、牧師と仲の良い人たちを嫉妬するといけないので、私は誰とも親しくなれませんでした。私は他の信者との親しい関係を求めていましたが、真の友人を得ることに潜む代価を払うことはしませんでした。

結束の強い家の教会では、教会員は牧師が親しい友であり、ステージの上の俳優ではないため、必然的に牧師に心を打ち明けることができます。

家の教会の牧師は、家の教会で将来の指導者となる人を育成できます。人数が増え、教会を増やさなくてはならない時に、既にそこにふさわしい指導者の準備ができています。最も有望な将来の指導者が、教会からどこか違う場所にある聖書学校へ、彼らの賜物もろとも行ってしまうのを、牧師は見なくて済みます。

家の教会の牧師は、おそらく自分の地域教会外に他のミニストリーを作り上げる時間が持てるでしょう。例えば、刑務所や老人ホームをに訪れたり、難民やビジネスマンを相手に一対一で伝道をすることができるかもしれません。その人の経験に基づいて、家の教会の牧師は、もしかしたら他の教会を植えたり、自分の教会で育てられた若い牧師を指導したりする働きに、自分の時間を捧げられるかもしれません。

家の教会の牧師は、日曜の朝に演技する重圧から解放されています。土曜日の夜に、様々な霊的成長のレベルにある多くの人々をどうしたら満足させることができるかと考えながら、3つの要点にまとめた説教を準備する必要も一切ありません。<sup>18</sup>牧

---

<sup>18</sup> 18 いくらその人が神が呼んでいる心優しいキリストの僕だとしても、多くの牧師は良い演説家にはなれない。実際、多くの牧師の説教は、大抵つまらないか、少なくとも時々つまらないものだと言うのは厳しすぎるだろうか。ある教会批評家が、椅子に座るだけの教会員たちの目はま

## 家の教会

師は、聖霊がそこに集まった全員を用いて、与えられた賜物が活かされるよう励ますのを見て、喜ぶことができます。会議にも欠席できるし、牧師抜きでも全てのことがうまく機能しています。

牧師を困らせる建物もなく、管理すべき従業員もいません。

同じ地域の他の牧師と競争する理由もありません。

牧師の人生を悲惨にするための「教会理事会」はなく、それによって生じる政治的な内紛もありません。

つまり、家の教会の牧師は、神の呼び通りの姿でいられ、その文化特有のキリスト教が強いてなさせる姿ではありません。牧師は主人公でもなく、会社の社長でもなく、車輪の中心でもありません。牧師は、弟子をつくる者であり、聖徒を整える役なのです。

### 幸せな羊 (Happy Sheep)

真の聖書的な家の教会こそ、真の信者が求め、楽しむことそのものです。

神の愛が彼らの心に降り注がれたために、全ての真の信者が、他の信者との純粋な関係を熱望しています。そのような関係は家の教会の要です。これこそ、聖書が交わりと呼ぶもので、自分の人生を他のキリストにある兄弟姉妹と純粋に分ち合うことです。家の教会は、信者が本来すべき、新約聖書が「互いに」という表現で語っている多くのことを実践する場です。家の教会という設定では、信者は熱心に勧め、励まし、徳を高め、慰め、教え、仕え、また互いに祈り合います。信者たちは、互いへの愛と良い働きを促し、互いに罪を言い表し、重荷を負い合い、詩と賛美と霊の歌とにより互いに戒めることができます。彼らは、泣く者と共に泣き、喜ぶ者と共に喜ぶことができます。このようなことは、信者がただ座って見ているだけの、組織的な教

---

るで、「戦争で疲弊し切った兵士の焦点が合わない目」のようだと言っている。しかし、退屈な演説家であるその同じ牧師たちは、しばしばとても話し上手で、人との会話の中では殆ど人を退屈させない。それ故に、家の教会で互いに教え合うことは、大抵いつも面白いのである。時間が経つのが早く感じられ、説教中に腕時計をちらちらと何度も見るのとは大違いである。家の教会の牧師は、人を退屈にさせる心配は不要だ。

## 弟子をつくる指導者

会の日曜日の朝の礼拝では、あまり見られません。家の教会のある教会員が私に語ったように、「私たちの御からだで誰か病んだ人がいれば、「給食ミニストリー」に名前を載せているからという理由で、どこかの知らない人へ食事を持って行く訳ではありません。私はその食事を、私が知り、愛する人へ当然持って行きます。」

真の信者は、互いのやり取りや関わりを楽しみます。毎年のように、ただ受身的に座って、無関係な、もしくは何度も聞いたような説教を聞かせることは、彼らの知性と霊性を侮辱することになります。むしろ信者は、神と神のみことばから得た個人的な洞察を分かち合う機会をより好みますが、家の教会はそのような機会を提供しません。文化的なものではなく、聖書的なモデルを追及することで、家の教会に集まるそれぞれの人が、「賛美したり、教えたり、黙示を話したり、異言を話したり、解き明かしたりします」(第一コリント14:26)。家の教会では、その群衆の中に埋もれたり、教会の派閥によって締め出されたりすることは一切ありません。

真の信者は礼拝の中で神に用いられたいという願いがあります。家の教会では、全ての人々が他の人を祝福するために用いられ、責任は皆で分かち合われ、組織的教会での奉仕者に良く見られる燃え尽き症候群になる人はいません。最低でも、聖書の言う「愛餐」(ユダ1:12)の時と同様に、皆が分かち合うための食べ物を持ってこることができます。多くの家の教会にとっては、そのような食事会は、本来の主の晩餐の模範に従っていることであり、また主の晩餐は、実際の過越の食事の一部でした。主の晩餐は、以前私が牧していた組織的な教会の小さな男の子が言う、「神様の聖なるおやつ」ではありません。礼拝の数秒間で、小さなウエハースと小さなジュースを見知らぬ人たちと食べる、という考えは、聖書には書いておらず、聖書的な家の教会にとっても極めて無縁です。互いを愛し合う弟子たちの間で食事が分かち合われる時に、聖餐式の神聖な意味は、その何倍も高められます。

家の教会では、賛美は単純で、真心を伴い、参加型で、パフォーマンスではありません。純粋な信者は神を霊と真で賛美したいと願っています。

## 教義的バランスと容認 (Doctrinal Balance and Toleration)

## 家の教会

小さな教会の集まりで行う、ざっくばらんなオープンフォーラムでは、全ての教えについて、字を読める人なら誰でも吟味できます。互いに知り、愛し合う主にある兄弟姉妹は、自分たちと違う観点を、敬意を払いながら考慮したいと思っていて、例え合意にたちしなくても、教義ではなく、その互いへの愛がひとつにします。長老、牧師、監督を含むそのグループにいる誰の教えでも、それは他の人から愛のある吟味の対象となります。なぜなら、私たちの唯一の教師が、教会員一人一人の内に宿っているからです（第一ヨハネ2:27）。聖書的モデルに備わっている抑制と均衡のメカニズムが、教義的な脱線を防いでいます。

これは現代の組織的教会の標準とはかなり対照的です。そのような教会では、教義は始めから定まっておき、そこには触れるべきではありません。結果として、悪い教義が永久に残り、教義が容認具合を判別するリトマス試験紙となります。同じ理由で、ひとつの説教の中で触れられたひとつの点が、反対者たちの緊急脱出に繋がり、その人たちは皆逃げ去って、一時的に「同じような考えを持つ信者」を見つけます。彼らは、教義上の不一致について、牧師と話したところでわかってもらえないことを知っています。例え、牧師の観点をเปลี่ยนよう牧師を説得したとしても、教会の多くの人から、またその宗派の指導者たちからそれを隠し続けなくてはなりません。組織的教会での教義上の違いは、世界で最も優れた政治家で、曖昧な一般論を話す演説家で、反論を引き起こすようなことは一切避け、皆に自分は同じ仲間であると思込ませるような牧師を生み出します。

### 現代の傾向 (A Modern Trend)

興味深いことに、組織的教会のモデルの中で、小グループ体制を持つ教会が益々増えていて、それは教会が弟子づくりに価値を見出してきたことを表しています。ある教会では、更に、その中心に小グループ体制を置き、彼らのミニストリーの最も重要な特徴と考えています。一方、大きな「祝会」の重要性は低下し、小グループに次ぐ二次的なもの（少なくとも理論上では）となっています。

これらの傾向は、教会が正しい方向へ進んでいることを表しています。私たちの

## 弟子をつくる指導者

歩みが神の御旨に沿っていればいる程、神は祝福を注ぐので、そのような傾向にある教会を神は祝福します。確かに、「セル教会」は、標準的な組織的教会が弟子づくりを進めるよりも良い体制です。セル教会は、組織的教会モデルと家の教会モデルの中間に位置する、両方の要素を取り入れた形態です。

それでは、現代の組織的教会の小グループ制と、長期に渡って存続する家の教会とを比較すると、一体どうなのでしょう。いくつか違いがあります。

例えば、小グループミニストリーが始められた本当の動機が、特に主任牧師の教会王国を建てることであるのなら、組織的教会の中の小グループは、残念ながら、その教会の多くの不正を励ますことになりかねません。牧師は結果として、自分の目的のために人を利用し、そのために小グループは丁度良く使われてしまいます。こうなると、小グループの指導者は、母教会に忠誠な人だけが選ばれます。才能が有り過ぎる、カリスマ性の強い人材は、悪霊にたぶらかされ、教会を私有化できる、と思いがるといけないので、小グループの指導者にはなれません。このような方針は小グループの良さを台無しにしてしまい、他の組織的な教会と同様、真に呼びのある意欲的な指導者を聖書学校や神学校に奪われてしまいます。つまり、そのような人材が実地訓練ではなく、講義を通しての学びの場へと連れ去られ、教会から真の賜物が奪われる結果となります。

組織的な教会の小グループは大抵、単なる交流の場以上には発展しますが、弟子づくりの場とはなりません。そこに集まる人たちは、建前上、日曜日の朝の礼拝で霊的に満たされている、という理由で、小グループの焦点が、日曜礼拝と重複しないように、神のみことばから反れることがあります。

組織的な教会の小グループは、霊的に生まれた、と言うよりは、教会のスタッフによってまとめられていることが多いです。それは、教会に数多くある、プログラムのほんのひとつにしか過ぎません。人々は、年齢や社会的地位、その人の生い立ち、興味、未婚者か既婚者か、もしくは地理的な場所等によってグループ分けされます。多くの場合、山羊が羊の中に混ざっています。これら全ての肉体的な組織は、信者に、



## 家の教会

互いの違いを超えて愛し合うことを学ばせてはいません。初代教会は、ユダヤ人と異邦人とで混ざっていたことをお忘れですか。ユダヤの伝統では禁止されていたことですが、それらのユダヤ人たちは、定期的に食事を共にしていました。そのような集まりは、何という素晴らしい学びの経験となったことでしょうか！愛によって歩むための、何という絶好の機会だったことでしょうか！福音の力について、何という証だったことでしょうか！それなのになぜ私たちは、小グループの成功を保証するために、似たような境遇の人たちで固まらせる必要があると考えるのでしょうか。

小グループを持つ組織的な教会は未だに、日曜日の朝の上演があり、そこでは観衆がプロの演技を見ます。小グループは、「本物の」礼拝がある時に集まることは許されず、それは組織的な礼拝が最も重要であることを皆に示唆しています。このことにより、大多数ではないにせよ、日曜の朝の礼拝に集う人たちの多くは、例え小グループへの参加を呼びかけられていても、それを選択することは任意だと考えています。彼らは、最も大切な週に一度の礼拝に参加したことで満足しています。それで、小グループの考え方は何となく重要であると勧められていても、日曜日の組織的な教会の礼拝程重要視されているとは到底言えません。真の交わり、弟子づくり、霊的成長の絶好の機会、見事に軽視されています。間違ったメッセージが送られています。組織的な教会の礼拝が未だ頂点にあるのです。

### 更なる違い (More Differences)

小グループを持つ組織的な教会は、未だピラミッド構造の組織であり、そこでは、皆自分がどの階級に属するのかがわかっています。頂点にいる人たちは、自分自身を「しもべの長」と言いますが、実際は最高執行官のようで、方針を立案する責任があります。教会が大きければ大きい程、牧師は群れ一人一人との距離が大きくなります。正直な牧師ならば、ふとした時に、教会がまだ小さい頃の方が牧会をしていて楽しかった、という真実を認めることでしょう。

同様に、小グループを持つ組織的な教会は、聖職者と平信徒との分裂を、今だに助長しています。小グループの指導者は、雇われて役職に就く者たちよりも、常に下

## 弟子をつくる指導者

とされています。小グループの指導者にあまり多くの権威を与えるべきではないので、聖書研究の教えは、大抵聖職者が準備するか、もしくは小グループ指導者の準備したものが良いかどうかの承認を与えます。小グループの中では、聖餐式を行ったり、洗礼を授けたりしてはいけません。このような聖なる職務は、肩書と免許状を持つエリートクラスのためにとっておかれます。御からだの中の務めを職業とする呼びのある人たちは、聖書学校か神学校に行き、そのエリート群に加わって「本当の」ミニストリーをする資格を得る必要があります。

組織的な教会の中にある小グループは、時には小規模な礼拝のようで、六十分から九十分間以内に、賛美を導く賜物がある者が導き、教える賜物がある者が承認された教えを施します。そこには、聖霊が他の人を用いたり、賜物を分配したり、指導者を育てたりする余地はあまりありません。

組織的な教会では、小グループには時々参加する程度で、それ程真剣には関わってはおらず、時にはグループが一時的なものとして作られることもあり、そのためそこでの交わりは、家の教会に比べて浅いです。

組織的な教会の小グループは通常、平日に会うことで、参加者が週末に教会の更なる集まりによって、忙しくならないよう配慮しています。結果として、週中の小グループは、参加者のために二時間以内に収めなくてはならず、就学児のいる人や、遠くに住んでいる人にとっては、高くつき過ぎて参加できません。

組織的な教会が、小グループミニストリーを奨励している時でさえ、お金を浪費させる建物は依然としてあるのです。事実、もし小グループプログラムを通して教会に新しい人が加わっても、結局のところ、更なるお金が建物に関することで浪費されることとなります。更に言えば、組織的な教会の中に組織化された小グループ制を持つことで、少なくとも、一人のスタッフを追加して雇う必要が出てきます。これは、もう一つの教会プログラムのための、更なる出費となります。

おそらく、小グループを持つ組織的な教会の牧師にとって一番最悪なことは、個人的な弟子づくりにかなり限界があることでしょう。牧師たちは多くの責任で非常に

## 家の教会

忙しいため、一対一の弟子づくりの時間は殆ど見つかりません。彼らにとって、弟子づくりに一番近いことと言えば、小グループの指導者を訓練することですが、それにしても、月に一度会う位に限られている場合が殆どです。

以上のことから、私の意見としては、家の教会の方がより聖書的で効果的に弟子をつくることができ、またその働きを広げることができると思います。しかし、私の意見が、教会の持つ何百年もの歴史を、そう簡単に変えるとは思っていません。だからこそ、組織的な教会の牧師たちに、弟子づくりをもっと聖書的なモデルの示す方向に進めるように、今何か始めることを強く勧めます。19<sup>19</sup>牧師たちは、将来の指導者たちを個人的に訓練したり、小グループミニストリーを始めることを考慮に入れてみるのもいいでしょう。また、「初代教会の日曜日」を体験しようと、教会堂を閉めて、皆が家を開いて食事の交わりをし、最初の三世紀間でクリスチャンがしていたように集まってみるのもいいでしょう。

自分の教会に小グループを持つ牧師は、今ある小グループのいくつかを、家の教会を作るために解き放ち、どうなるかを見守るのもいいでしょう。小グループが健康的で、神が呼ぶ牧師、長老、もしくは監督によって導かれているのなら、彼ら自身で運営できるはずです。単立の若い教会が母教会を必要としている程には、彼らは母教会をもう必要としてはいません。そうであるのなら、なぜ自由にさせないのでしょうか。20<sup>20</sup>母教会に集まる教会員のお金で、そのような家の教会の牧師を支援することができます。

私がこれだけ家の教会を推薦しているということは、組織的な教会には何も良いところがないと言っているのでしょうか。決してそんなことはありません。組織的教

---

<sup>19</sup> 19 精神病という言葉の定義で私が一番気に入っているのはこれである：同じことを繰り返し行ないながら、違った結果を求めること。牧師は何年もかけて教会員に弟子づくりに関わる責任について教えることができるが、牧師が様式なり構造を変えるために何か行動を起こさなければ、人々は相変わらず教会に来て座り、聞いて、家に帰るだけである。牧師よ、もし過去に行ってきたことが人々を変えていないのなら、同じことをしていても、その人たちは将来変わることはないだろう。今していることを変えなさい！

<sup>20</sup> 20 勿論、多くの牧師がこの考えに反対する一番の理由は、彼らは実際、神の王国ではなく、自分自身の王国を建てようとしているからだ。

## 弟子をつくる指導者

会で、キリストに従う弟子をつくっているのなら、推薦できます。しかし、そこにある慣例や構造が、キリストが私たちに与えた目標を達成させる助けではなく、妨げとなっていることが多く、大抵の場合、それらは牧師を苦しめているのが現状です。

### 家の教会では何が起きているのか (What Happens at a House Church Gathering?)

全ての家の教会が同じである必要はなく、多種多様であって構いません。家の教会はどこも、それ独自の文化的、社会的な差異を微妙に表すべきです。これは、家の教会が、特にキリスト教文化の伝統のない国で、効果的な伝道をしている理由のひとつです。家の教会に集う人たちは、近所の人を、全くその人にとって無縁の儀式が営まれる、教会という無縁の場所—これがキリスト教徒になることへの一番の妨げです—に招待しません。むしろ、彼らは、友たちとの会食に近所の人を誘うのです。

一般的に、食事を共にすることは家の教会の集まりで大きな部分を占めています。家の教会の多くは、その食事に主の晩餐も含めるか、あるいはその食事自体を主の晩餐とします。そして、それぞれの家の教会がその霊的な意味をどのようにして上手に引き出すかは、その教会が決めます。前にも触れたように、一番最初の主の晩餐は、実際、過越を祝うための食事から始まり、そこには霊的な意味が沢山含まれていました。主の晩餐を食事として、もしくは食事の一部として祝うことは、初代教会の集まりにおいて、明白に決まったやり方として行われていました。以下の箇所は、初代のクリスチャンが普段していたことについて書いてあります。

そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた...そして毎日、心を一つにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、(使徒 2:42, 46, 一部強調)

初代のクリスチャンは、文字通りパンを裂き、皆で分かち合っていました。それは彼らの文化では、実際に毎食行われていたことでした。その食事中にパンを裂くことは、初代のクリスチャンにとって、霊的に何か深い意味があったのでしょうか。はっきりとは聖書に書いていません。しかし、ウィリアム・バークレイは主の晩餐と

## 家の教会

いう彼の本の中で、こう書いています。「主の晩餐は、個人宅で持たれた家族の、もしくは友人同士の食事として始まったことは確実である...パンの小さな欠片と一口のワインは、元々は主の晩餐とは何ら全く関係はなかった...主の晩餐は最初は、友たちが家に集まって持たれた家族での食事だった。」現代の聖書学者は皆、バークレイに同意していることは驚きです。しかし、教会はこのことに関する神のみことばよりも、教会の伝統に従っています！

イエスは弟子たちに、イエスが命じたことの全てに従うよう、彼らの弟子に教えるよう命令しました。だから、イエスを覚えて共にパンを裂き、ワインを飲むことをイエスが命じたのなら、弟子たちは彼らの弟子に同じことをするよう教えたはずです。そのようなことが普通の食事ではなされていたのでしょうか。それは確かに、まるでパウロがコリントにいる信者宛の手紙の中で言っていることのようにです。

しかし、そういうわけで、あなたがたはいっしょに集まっても、[当時は教会堂はなかったので、教会の建物の中に集まるという意味ではありません]それは主の晩餐を食べるためではありません。食事のとき、めいめい我先にと自分の食事を済ませるので、空腹な者もおれば、酔っている者もいるというしまつです（第一コリント 11:20-21 一部強調）。

もしパウロが、現代教会で行われているように、主の晩餐について話していたとしたら、上記の言葉はどう説明がつくのでしょうか。現代教会の礼拝で、主の晩餐と関連して、誰かがまず先に夕飯を食べていて、ある人は空腹だったり、またある人は酒に酔っているといった問題を聞いたことがありますか。このような言葉は、もし主の晩餐が本当の食事と関連して行われていたのなら意味がわかります。パウロは続けてこう言っています。

飲食のためなら、自分の家があるでしょう。それとも、あなたがたは、神の教会[ここでも、パウロは教会堂について書いているのではなく、民の集まり、神の教会について書いています]を軽んじ、

## 弟子をつくる指導者

貧しい人たちをはずかしめたいのですか。私はあなたがたに何と言ったらよいでしょう。ほめるべきでしょうか。このことに関しては、ほめるわけにはいきません（第一コリント11:22）。

もし実際の食事という状況でないなら、どうやって何も持っていない人々が恥ずかしい思いをするのでしょうか。パウロはコリントの信者で、集まりに最初に着いた何人かは、他の人が来るのを待つことなく、自分の食事を取ってしまったという事実を指摘していました。共にする食事の中で、おそらく経済的な理由で分かち合うための食べ物を持って来なかった人が来たら、その人たちは単に空腹でそこを出ただけではなく、彼らが何も持って来なかったために恥じ入ったのでした。

このすぐ後に、パウロは更に主の晩餐、「主から受けた」（第一コリント11:23）聖餐について書き、最初の主の晩餐で何が起きたかについて詳しく話しました（第一コリント 11:24-25参照）。それからパウロはコリントの人々に、ふさわしくないままで主の晩餐を取ることがないように、また続けて、もしひとりひとりが自分を吟味しないで飲み食いするならば、その飲み食いが自分を裁くことになり、弱くなったり、病人が増えたり、早死者が出たりさえもした、と警告しました（第一コリント 11:26-32参照）。

パウロはこう結論付けています。

ですから、兄弟たち。食事に集まる時は、互いに待ち合わせなさい。空腹な人は家で食べなさい。それは、あなたがたが集まることによって、さばきを受けることにならないためです。その他のことについては、私が行ったときに決めましょう（第一コリント 11:33-34）。

文脈上、主の晩餐で無礼とされたことは、他の信者を思いやらない態度でした。分かち合って、共にする食事の場で、自分だけ先に食事を取っている人々を、パウロは再び、神の裁き（もしくは訓練）を受けることになる危険性について忠告しました。解決案は単純でした。ある人が空腹過ぎて他を待ちきれないのなら、その集いに来る

## 家の教会

前に何かを食べて来るべきです。また、一番最初に着いた人たちは、食事をしに後から来る人たちのことを待つべきです。この食事には当然主の晩餐も含まれていましたし、もしくはそれ自体が主の晩餐でした。

聖句全体を見ると、食しているものが主の晩餐であるのなら、それを互いに愛と思いやりを示しながら、主に喜ばれる方法で取るべきである、とパウロが言っていることは明白です。

いずれにせよ、初代教会は聖職者の司宰なしに、家での共にする食事の一部として、主の晩餐が営まれていたことは非常に明確です。私たちもそのような主の晩餐をしようではありませんか。

### パンと杯 (Bread and Wine)

主の晩餐を構成する要素の本質は、あまり重要なことではありません。一番最初に行われた主の晩餐を完全に真似ることに集中するなら、当時と全く同じパンを作るための原材料や、同じワインを作るために全く同じ種類のぶどうを知る必要が出てきます。(最初の数世紀間は、聖餐式が正しく行われるように、神父が厳しく指示をして、ワインを水で薄めていました。)

パンと杯は、古来からユダヤ人が、普段から一番良く食べていた食事のひとつでした。イエスは、毎日の生活で皆が特によく消費していた、最も一般的な食べ物であるパンとワインに深い意味を与えました。もし人間の歴史の中で、イエスが違う文化の違う時代に現れたなら、最初の主の晩餐は、チーズと山羊の乳とか、餅とパインジュースだったかもしれません。従って、どんな食べ物と飲み物でも、イエスの弟子たちの間で共に分かち合う食事ならば、キリストの体と血潮を表すことはできます。大切なのは、霊的な意味です。律法の文字をきちんと残しながら、その律法の中にある霊をなおざりにしないようにしましょう！

共にする食事を極端に厳粛に行う必要はありません。初代のクリスチャンは、これまでも読んできたように、「...家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし」(使徒 2:46、一部強調)ていました。しかし、イエスが私たちのために捧げた犠

## 弟子をつくる指導者

性を覚えながら、それらのものを口にする時に、厳粛になることは勿論ふさわしいことです。第一コリントの十一章十七から三十四節で、パウロがコリントの信者たちに与えた、厳粛な忠告の言葉の中にあるように、主の晩餐を口にする前に、いつも自己吟味をすることは正しいことです。互いを愛し合うというキリストの戒めに対する罪があるのなら、それは、神の訓練へと招かれているということです。どんな対立や分裂は、食事の前に解決されるべきです。全ての信者は、自分自身を吟味して、罪を告白するべきです。これこそ、パウロの言う「自分をさばくこと」なのです。

### 御からだを通して現れる聖霊 (The Spirit Manifested Through the Body)

共にする食事は、賛美や教えや霊的な賜物を分かち合う集まりの前あるいは後で持つことができます。それについては、それぞれの家の教会がやり方を決めて良く、そのやり方も、家の教会の個々の集まりによって、変えることができます。

聖書により極めて明白なことですが、初代教会の集いは、現代の組織的な教会の礼拝とは全く違っていました。特に、第一コリントの十一から十四章を読むと、初代のクリスチャンが集まる時、どんなことをしていたのかについて、豊かな洞察を与えてくれます。今日の教会においては、当時と同じやり方はできない、またはすべきではない、と思う理由はひとつもありません。パウロが明確に描写した、初代教会の集まりでの出来事は、小グループの設定ならば、同じようなことが起きる可能性はあります。しかし、パウロが描写したことは、大きな集まりの中では実際に起こり得ません。

まず私は、第一コリントのそれらの四つの章でパウロが書いた全てを、理解している訳ではないということを認めます。しかし、第一コリントの十一章から十四章で描写される集いの、一番際立った特徴は、人々の間にある聖霊のご臨在と、その御からだの器官を通しての聖霊の現れであることは明白です。聖霊は、御からだ全体を高めるために、その賜物を一人一人に分け与えました。

パウロは少なくとも九つの御霊の賜物を挙げています。すなわち、預言、異言、異言の解き明かし、知識の言葉、知恵の言葉、霊を見分ける力、いやしの賜物、信仰、



## 家の教会

そして奇跡を行う力です。パウロは毎回の集いでこれら全ての賜物が現れたとは言っていないですが、これらの賜物の働きの可能性を確かに暗示しています。また、第一コリント十四章二十六節では、より一般的な現れのいくつかについてまとめているようです。

兄弟たち。では、どうすればよいのでしょうか。あなたがたが集まる  
ときには、それぞれの人が賛美したり、教えたり、黙示を話したり、  
異言を話したり、解き明かしたりします。そのすべてのことを、徳  
を高めるためにしなさい。

これらの五つ全ての一般的な賜物の現れをここでは見ていきましょう。後の章で、第一コリント十二章八から十節に挙げられた九つの賜物についてはもっと詳しく見ていきます。

最初に挙げられているのは、賛美です。御霊が与える賛美については、パウロがクリスチャンの集いの中の場所を明確にして、教会に宛てた二つの手紙の中に書かれています。

また、酒に酔ってははいけません。そこには放蕩があるからです。御  
霊に満たされなさい。詩と賛美と霊の歌とをもって、互いに語り、  
主に向かって、心から歌い、また賛美しなさい（エペソ5:18-19）。

キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を  
尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感  
謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい（コロサイ3:16）。

詩と賛美と霊の歌の違いは明確ではありませんが、主な要点は、全てがキリストのみことばに基づいていて、霊が励ましたもので、互いに教え、戒め合うために信者たちによって歌われるべきものだということです。確かに、教会の歴史の中で、信者が歌ってきた賛美や斉唱の歌の多くは、これらの内の一つに分類されるでしょう。残念ながら、現代教会で歌われている歌の多くは、聖書的深みに欠け、それは浅すぎて、

## 弟子をつくる指導者

信者を教えたり、戒めたりする本当の価値が殆どないので、霊が与えた歌ではないことを示唆しています。そうは言うものの、家の教会に集まる信者たちは、聖霊の励ましにより、古くても新しくても、良く知られたクリスチャンの歌を各メンバーが導いたり、あるいは、何人かのメンバーに特別な歌が与えられ、それにより全員が共に高められる、といったことを期待すべきです。聖霊の与える独自の歌が教会にあるとは、なんと格別なことでしょう！

## 教え (Teaching)

パウロが二番目に挙げているのは教える賜物です。これもまた、誰でも霊に励まされた教えを、集いの中で分かち合えることを示唆しています。勿論、全ての教えは、使徒の教えと合ったものかどうか吟味され（みんなはそれに専念していました。使徒2:42参照）、今日も同じようにすべきです。しかし、新約聖書のどこを探しても、地域教会の集まりが持たれた時に、毎週同じ人が、会衆を支配しているかのように説教をした、というようなことを示唆する箇所は全くないことに注目してください。

エルサレムで、比較的大きな集まりが、使徒たちが教えていた宮でありました。長老たちも教会で教える責任が与えられていて、教えの務めの呼びがある人がいることも承知しています。パウロは公の場でも、家々を巡ってでも、沢山の教えを施しました（使徒20:20）。しかし、信者の小さな集まりでは、聖霊が使徒や長老や教師以外の人を用いて、教えていたかもしれません。

教えということになると、初代教会の頃と比べて、私たちは自分の聖書を持って集いに参加できる、という素晴らしい利点があるように思われます。しかし一方で、おそらく、このように聖書を簡単に利用できることは、教義をより重要視させ、神のみことばが実に教えたかった、神を心から愛し、隣人を自分自身のように愛するという生き方を、私たちから奪ってしまっています。私たちは、死ぬ程教義漬けにされています。聖書研究の小グループは、あらゆる点で、日曜日の朝の説教位、意味がなく、つまらないものが多いです。家の教会で教えるのにあたって、覚えておくと良い基準はこれです。すなわち、大きな子供たちが表情や態度で退屈さを隠さずに表している

## 家の教会

のなら、大人はおそらく隠しながら退屈しています。子供は素晴らしい真実のバロメーターです。

### 黙示 (Revelation)

パウロが三つ目に挙げたのは「黙示」です。それは、どんなことであろうと、御からだの誰かに対して、神が明らかにした何かを意味するでしょう。例えば、パウロは具体的にどのように未信者がクリスチャンの集いに訪れて、預言の賜物によって「心の秘密があらわにされ」るか述べています。結果は、その人は「罪を示され」、「みなにさばかれ」、「神が確かにあなたがたの中におられると言って、ひれ伏して神を拝むでしょう」(第一コリント14:24-25)。

ここでもまた、聖霊の本当のご臨在が、教会の集いの特徴として期待され、超自然的なことが、その聖霊のご臨在の中で起こると言えます。初代のクリスチャンは、「ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです」(マタイ18:20)というイエスの約束を本当に信じました。もしイエスご本人が只中にいるのなら、奇跡は起きます。彼らは文字通り、「神の御霊によって礼拝」しました(ピリピ3:3)。

いずれにせよ、人々の心についての黙示は預言に含まれます。預言については、後に詳しく触れます。しかし黙示は、夢や幻といった、他の手段によっても与えられます(使徒2:17参照)。

### 異言とその解き明かし (Tongues and Interpretation)

四つ目としては、パウロは相互作用する二つの賜物である、異言とその解き明かしを挙げています。コリントでは、過度に異言で話され、それが悪用されていました。すなわち、人々は教会の集いの中で異言を語り、その解き明かしがなかったため、誰も何が話されたのかわかりませんでした。聖霊が人々にその解き明かしを与えることなく、異言を与えたのだから、これは聖霊のせいであって、どうしてコリントの人々が非難されなくてはならなかったのか、と思うかもしれません。これに対しては非常に満足のゆく答えがあり、後の章で取り扱います。いずれにせよ、パウロは異言で語

## 弟子をつくる指導者

ることを（多くの組織的教会がしているようには）禁じませんでした。むしろ、異言で語ることを禁止を禁じ、これが主の命令であると宣言しました（第一コリント14:37-39）！<sup>21</sup>預言の場合、その賜物は御からだを建て上げ、神の民の只中で、神の超自然的なご臨在が本当であると認めることができました。神が人々を通して話しており、神の真実と御旨を思い出させました。

パウロは14章にて、解き明かしのない異言よりも、預言の方が優れているということを強く主張しました。パウロはコリントの人々に預言の賜物を熱心に求めることを強く勧め、聖霊の賜物はそれを求める者に現れやすいことが示されています。同様に、パウロはテサロニケの信者たちに、「御霊を消してはなりません。預言をないがしろにしてはいけません」（第一テサロニケ5:19-20）と言って戒めました。信者は預言の賜物に対する間違っただ態度を心に抱くことによって、聖霊を「消す」ことができることを示唆しています。だからきっと、預言の賜物が今日殆どの信者たちの間で、滅多に現れないのでしょう。

## 始め方 (How to Start)

家の教会は、聖霊によって、家の教会開拓者のミニストリーや、神から家の教会の幻を与えられた長老、牧師、監督を通して生まれます。聖書的な長老、牧師、監督とは、組織的教会が呼ぶいわゆる成熟した平信徒かもしれないことを覚えていてください。家の教会開拓者には、正式なミニストリーについての学びは必要ありません。

家の教会の幻が聖霊によって創設者に与えられたら、その人はどんな人が他にこ

---

<sup>21</sup> 21 勿論、私は最初の一世紀までに、聖霊の超自然的な現象のすべてを追放した人たちがいて、その位の時期にそれらの現象が止んだことを知っている。つまり、初代教会が体験したことを追い求める理由はなく、従って異言で話すことはもはや有効ではないということだ。私はそのような現代版サドカイ人のような人々に対しては、殆ど同情しない。何度か神を讃えている時に私から出てきた言葉が、聞いていた日本人の話し手によるとそれは日本語であったことから、一度も日本語を習ったことがない私からすると、これは聖霊がこのような賜物を今でも与えることを示していることがわかった。また、現代版サドカイ人たちは、聖霊がいまだに罪人を招き、咎め、新しく生まれ変わらせるという部分は擁護しながらも、なぜそれらの奇跡を超える聖霊の働きについては否定するのかを疑問に思う。この種の「理論」は人間の不信仰と不従順から来るもので、みことばによって支えられておらず、実際キリストの目的に反して働いている。これは、パウロが第一コリント十四章三十七節で書いたことによると、全くの不従順である。

## 家の教会

れに参加したいかについて、主を求める必要があります。主はその人に、同じような幻を持つ人たちと合わせてくれて、その人が導くことに対する確認を与えます。もしくは、その人は神を受け入れやすい未信者に導かれ、キリストへ導き、家の教会で弟子訓練することができます。

家の教会を建てる冒険を、ちょうど始めたところの人たちは、教会員が互いを知り合い、関係することを学び、聖霊の働きに敏感となるには時間がかかることを予想してはなりません。その途中は試行錯誤でしょう。全ての教会員が関わるという考え、聖書的な主従関係、長老たちを育てること、聖霊の導きと賜物、共同の食事、親しみ深いけれども霊的な雰囲気というものは、組織的教会の礼拝しか知らない人たちには全く無縁です。従って、家の教会が作られたばかりの時は、特に恵みと忍耐をもった対応が賢いでしょう。最初のやり方は、どちらかという、家での聖書研究会のような感じで、一人が賛美を導き、一人が準備してきた教えを分かち合い、最後は一つとなって祈り、交わり、食事をして閉じます。家の教会の聖書的なやり方を、その集まる人たちと共に研究していきながら、長老、牧師、または監督は教会員に神の最善を目指して努力するように励ますべきです。そして、その道中を楽しむことです！

家の教会の集まりは、教会員の家々を毎週巡ることもできますし、ある一人の教会員の家を解放して毎週行われることもできます。天気の良い時には、外の良い景色を楽しめる場所に、家の教会を移動して行うことも、時にはあってもよいでしょう。集う時間や場所は日曜日の朝とも限らず、教会員が一番集まりやすい時間で構いません。最後に、十二人以下の小人数で始めるのが一番良いでしょう。

### **組織的教会から家の教会への移行の仕方 (How to Transition from Institution to House Church)**

大概、読者である牧師の多くは、組織的な教会の体制の中で働いており、親愛なる読者であるあなたも、おそらくその内の一人でしょう。もし、私がここまでに記したような、家の教会に共感し、それを切望するのなら、きっとあなたは既に今、どう

## 弟子をつくる指導者

したらそこに移行できるかを考えていることでしょう。どうか慌てないでください。聖書の真実を教えることから始め、既存の体制の骨組みの中で、イエスの命令に従う弟子をつくるために、あなたができることをとにかくしてください。真の弟子ならおそらく、聖書的な教会の体制を理解するにつれて、そこへの移行を望むようになるでしょう。一方、山羊と宗教的な人たちは、このような移行を拒絶する傾向にあります。

次に、この主題について聖書は何と言っているかについて学び、家の教会という体制と、そこから来る祝福について教会員に教えてください。最終的には、週中の集まりや日曜日の夕拝を取り止め、代わりに成熟した信者の監督の下、家でのセル・ミーティングを毎週し始めることもできます。みんなが来るように励ましてください。聖書の言う、家の教会モデルのやり方になるべく近づけて、これらの集まりを徐々に形成して行ってください。そして、そこに集まる人たちが、自分たちの小グループにある祝福を十分に楽しみ出すには時間がかかることも考慮しておいてください。

皆が家での集まりを楽しむようになったら、来月のある日曜日を「初代教会日曜日」とすることを公に知らせてください。その日曜日は、教会堂は閉じられ、初代教会がやっていたように、家で集まります。食事を十分楽しみ、主の晩餐、交わり、祈り、賛美をもって、教えと霊的賜物を分かち合うのです。もし成功すれば、毎月そのような集まりを持つようにし、それから月に二回の日曜日、そして三回の日曜日と徐々に増やして行きます。最終的に、全ての家の集まりを解放し、家の教会として独立させ、自由に成長し、増やし、おそらく数カ月に一回位、大きな集まりへ一緒に参加するような感じにできると思います。

ここで私が記した移行の全過程を通るには、一、二年程かかるでしょう。

もしくは、あなたがもっと慎重に行きたいのなら、あなた自身が導きたい、あなたが一番興味のある人たちを数人集めて一つの家の集いを始めることもできます。

(もう一度言いますが、家の教会は日曜日の朝に集まる必要はありません。) それは実験として紹介され、みんなにとっての学びの体験となることは確実です。

それが成功したなら、監督を指名して、その集まりを独立した教会として開放し、

## 家の教会

月に一度だけ組織的な教会の日曜礼拝に参加するようにするとよいでしょう。そうすれば、新しい教会はまだ母教会の一部で、まだ組織的な教会の中にいる人たちもその新しい教会を否定的な思いで見ないでしょう。また、そうすることで、その教会の他の人たちに影響を与え、その組織的な教会が次の家の教会を開拓する時に、自分もそれに加わりたいと思うようになるかもしれません。

最初のグループが成長したら、祈りをもってそこを二つに分け、両方に良い指導者と十分な賜物がそれぞれのグループの民の中にあるようにします。両グループは、例えば月一度とか、三カ月に一度と言ったように合意の下決まった日に、大きな集まりへ共に参加します。

落胆するようなことも時には少しありますが、それを通してでも、どんな道を通っても、目標から目を離さないでください。家の教会は人の集まりであり、人は問題を引き起こします。諦めないでください。

組織的な教会の全ての人が、このような移行をするということは、まずないでしょう。ですから、どの地点で教会の組織を後にし、自分自身が家の教会、もしくはいくつかの家の教会に完全に専念するかを決めなくてはなりません。その日はあなたにとって大きな影響を与える日となるでしょう！

### 理想の教会 (The Ideal Church)

家の教会の牧師は、毎週日曜日大きな教会堂に何千人もの人が集うメガ・チャーチの牧師と比べて、神の目から見ると、実際はより成功している、などということはありません。あり得るのでしょうか。あり得ます。もしその牧師が、週に一回コンサートを観て、文脈の合わない二、三の聖句で満足させる、面白いスピーチを聞いているだけの霊的な山羊を単に集めるのとは対照的に、従順な弟子と、イエスの模範に従って弟子をつくる人を増やしているのならです。

家の教会モデルに従う事を決心する牧師は二度と、自分自身の大きな会衆は持ちません。しかし長い目で見ると、その牧師の弟子たちが自分自身の弟子を作ることを通して、もっと長く続く実を实らすことができます。四十人から五十人の「小さな」

## 弟子をつくる指導者

会衆を持ち、もっと人数が増えるようにと奮闘している牧師の多くは、考え方に調整が必要でしょう。彼らの教会はもう既に大きすぎるかもしれません。おそらく彼らは、より大きな教会堂のために祈ることをやめ、どの人たちを二つの新しい家の教会の指導者として指名すべきかについて祈り始めるべきです。(どうか、それが起きた時に、その新しい宗派に名前を付けたり、自分自身に「司教」という肩書を与えないようにしてください!)

教会に関して言えば、大きければ大きい程良い、といった考えを根絶させる必要があります。聖書の基礎に基づいて純粹に判断するのなら、ひとつの会衆として何百人もの人が集まっても、弟子と呼べる人はおらず、皆単に特別な建物に集まって、傍観しているだけならば、それはかなり奇妙な光景と言わざるを得ません。もし最初の使徒たちが現代の組織的な教会に訪れたのなら、頭をかいていたに違いありません!

### 最後の反論 (A Final Objection)

キリスト教が既にその文化の一部となっている西洋では、家で集まる教会という考えを人々は決して容認できないだろう、とよく言われます。従って、組織的なモデルに留まるべきだという議論の展開です。

まず、これが本当である証拠はなく、家の教会運動は、西洋で激しくその勢いを増しています。

次に、人々は既に、パーティーや食事、交わりや聖書研究、またセル・グループとして家で集まることを喜んで行っています。家の教会という考えを受け入れることは、それ程大きな考えの調整を要しません。

三つ目に、「靈的な山羊」と呼ばれる、宗教的な人たちは、家の教会という考えを決して受け入れません。彼らは、自分たちが周りから見て変に映る可能性があることとは、何の関係も持ちたくないのです。イエス・キリストの真の弟子たちは、一度その聖書の基礎を理解すれば、家の教会の考えを確かに受け入れます。彼らはすぐに、弟子づくりに教会堂はなんと不必要かということに気づきます。もしあなたが大きな教会を「木、草、わら」(第一コリント3:12参照)で建てたいのなら、建物が必要で



## 家の教会

しょう。但し、最後には全て焼き尽くされます。しかし、あなたがもし弟子と弟子をつくる人を増やしたいと願うのなら、つまり「金、銀、宝石」でイエス・キリストの教会を建てたいのなら、お金と労力と建物を浪費する必要はありません。

今日世界で一番大きな現地人による伝道活動と言える、中国の家の教会による「エルサレムに戻ろう」運動では、10/40ウィンドウを伝道するために、特別な策略を受け入れた、ということは興味深いことです。彼らは、「私たちは、どこにも教会堂を建てたいなんてひとつも思わない！建物が無いことは福音を急速に広めさせ、政府の捜査から免れやすく、自分たちの資源の全てを直接福音を広める務めに流すことができる。」<sup>22</sup>

まさに従うべき、賢く、聖書的な模範です！

---

<sup>22</sup> 22 ポール・ハッタウェイ著エルサレムに戻ろう(*Bach to Jerusalem*)(Carlisle: Piquant, 2003), p.58



## 第五章

### 教会の成長 (Church Growth)

どうやらあなたは牧師で、自分の教会を成長させたいと願っているようです。それは牧師にとって当然の願いです。しかしなぜ、あなたは自分の教会を成長させたいと思うのでしょうか。あなたの心にある正直な理由は一体何でしょうか。

あなたは、自分の成功に満足したくて、教会の成長を求めていますか。あなたは皆から尊敬され、影響力のある人と思われたいのでしょうか。人々に権力を振るいたいのでしょうか。富を得たいのでしょうか。これらは全ては、教会成長を望む、間違った動機です。

聖霊によって、より多くの人生が変えられることで、神が栄光とされて欲しいと、あなたが教会の成長を求めているのなら、それは、教会成長を望む正しい動機と言えます。

勿論、自分たち自身を騙して、実際は自分勝手な動機でも、それは純粋なものだと思いつくことはあり得ます。

どうやって本当の動機を知ることができるのでしょうか。私たちが本当に建てたいのは神の国なのか、それとも単に自分の王国なのか、どうしたらわかるのでしょうか。

ひとつの方法は、他の牧師たちの成功に対して、私たちの心がどう反応しているかを観察してみることです。もし私たちの動機が純粋だと思えば、もし私たちが神の国

## 弟子をつくる指導者

と神の教会が広がって欲しいと心から願っていると思う反面、他の教会の成長を耳にすると、自分の心の中に妬みや嫉妬があるのなら、私たちの動機はそれ程純粋なものではないことが現れています。それは、私たちが教会成長に関心がある訳ではなく、自分の教会の成長しか関心がないことを表しています。それはなぜでしょう。それは、私たちの動機が、少なくとも部分的に自分勝手だからです。

また、私たちの地域に新しい教会が始められる、と聞いた時の、自分の心の反応を観察することでも、私たちの動機を確かめることができます。もし私たちが恐れを感じるなら、神の国よりも自分の王国を気にしている証拠です。

大きな教会の牧師、もしくは成長過程にある教会の牧師でさえ、同じ方法で動機を確かめることができます。そのような牧師たちは、「自分の教会が小さくなったとしても、新しい教会を植えるために、自分の教会員から主要な指導者や人々を送ったり、手離したり、自分にはできるだろうか。」といったような自問もしているかもしれません。このような思いに抵抗する牧師は、自分の栄光のために教会を建てていることが多いです。（一方で、大きな教会の牧師は、自分の教会からどれ位多くの教会が生まれたかということに自慢するために、新しい教会を自分の栄光のために植えている場合もあります。）また他にも、「小さな教会の牧師と交わりを持ちたいと思うか、もしくは上から視線で彼らから距離を保っているのか。」、「十二から二十人だけを家で牧することをしてみたいか、それともそれは余りにも恥ずかしくてできないか。23<sup>23</sup>」といったことも自問するのにいいかもしれません。

### 教会成長活動 (The Church Growth Movement)

アメリカやカナダ全土のクリスチャン・ブックストアで、教会成長についての本だけを扱うセクションが大きく取られていることがよくあります。これらの本とその中にある考えは世界中に広まっています。牧師は、自分の教会に集う人数がどうしたら増えるかを学ぶことに必死で、彼らは建物の大きさと日曜日に集まる人数によって

---

<sup>23</sup> 23 ここに家の教会モデルの他の利点がある—教会員の数は家の大きさによって制限があるため、牧師は間違った動機で教会を大きくすることに囚われることはない。

## 教会の成長

成功していると思なされるアメリカのメガ・チャーチの牧師の助言を簡単に聞き入れてしまいがちです。

しかし、もう少し分別がある人なら、参加者の人数や建物の大きさが、必ずしも弟子づくりの質を測るのに必要な指標ではない、ということをよくわかっています。アメリカには聖書の真実を曲解して、魅力的な教義を打ち出して成長している教会もあります。世界中の牧師と色々話してきた中で、彼らが驚いていたことは、その人の人生で何を信じ、どう生きていようと、一度得た救いは失うことはないと信じて、宣言しているアメリカの牧師がとても多いということでした。同様に、多くのアメリカの牧師は、真理を薄めた、安っぽい恵みの福音を宣言しており、人々を聖くならずして天国へ行けるという思いに導いています。また、かなり多くは繁栄の福音を宣べ、地上で積んだ富をなるべく獲得したいという思いで宗教に入っている人たちの欲を駆り立てています。そのような牧師の言う教会成長の技法は、決して真似するべきではありません。

私も教会成長を主題にした本を持っていますが、それらの本については複雑な思いがあります。その多くは策略と助言が含まれており、それらはある程度は聖書的で、読むに値するものです。しかし、殆ど全てが 聖書の言う教会モデルよりもむしろ、1700 年の歴史を持つ組織的教会モデルを基礎にしています。結果として、弟子と弟子をつくる人を増やすことでキリストの御からだを建て上げることにではなく、それぞれの組織的な教会を建てることに焦点があり、それにより、より大きな建物、より専門的な教会スタッフとプログラム、また家族というよりは法人組織のようなものが必要となります。

現代の教会成長の策略はただ人数を増やすために、イエスに従いたくない人たち向けに、教会の礼拝をいかにもっと魅力的にさせるかということ提案しているようです。それは、短くて、肯定的な説教だけをし、表現豊かな賛美はせずに、沢山の社交的活動を行ない、お金のことには一切触れないといった助言です。しかしそれで、自分を捨て、キリストの命令全てに従う弟子をつくるには至りません。それでは、世

## 弟子をつくる指導者

と見分けのつかない、口ばかりのクリスチャンができるだけで、みんな地獄行きの広々とした道を歩んでいます。これは神が世に打ち勝った策略ではなく、サタンが教会を仕留めた策略です。これは「教会成長」ではなく「世の成長」です。

### 求道者に敏感なモデル (The Seeker-Sensitive Model)

最も人気のあるアメリカの教会成長の策略は、「求道者に敏感な」モデルと呼ばれています。この策略では、日曜日の朝の礼拝は、(1) クリスチャンが未信者の友たちを招待しても居心地が悪くならないように、また、(2) 未信者の人たちが、受け入れやすく理解できるような、聞こえの良い言葉を用いて福音を聞かせることで、設計されています。週中の集まりや小グループは、信者を弟子訓練するために取ってあります。

この方法により、いくつかの教会はかなり大きく成長しました。全米の組織的な教会の中にあっては、みんなが小グループに所属し(大抵はそうではありませんが)、弟子訓練され、福音が妥協に走っていないなら(真の福音は人間のプライドに不快感を与えるので、目標が未信者の気に障らないことなら大抵は妥協ですが)、これらは伝道と弟子訓練に最も適した方法と言えるかもしれません。少なくとも求道者に敏感な教会は、未信者への伝道のために、何らかの戦略を実行しており、殆どの組織的な教会はそういったことをやっていません。

しかし、アメリカの求道者に敏感なモデルは、教会成長という点で、聖書の言うモデルと比べてどうでしょうか。

使徒の働きでは、神が召した使徒と伝道者は、家から家へと福音を公に宣べ伝え、しるしと奇跡を伴って、未信者の注意を引きました。主イエスにあって悔い改め、主イエスを信じた人たちは、献身的に使徒の教えに尽くし、彼らが神のみことばを学んだ家に定期的に共に集まり、霊的な賜物を使って、主の晩餐を祝い、共に祈るなど、全て長老、牧師、監督の導きの下行われていました。神からの呼びのある教師や預言者は、それらの教会を巡りました。みんなが福音を友人や隣人と分かち合いました。建物の建設という、教会の成長を妨げ、福音と弟子づくりを広げるための御国の資源

## 教会の成長

を奪うようなものは、一切ありませんでした。指導者は神学校や聖書学校に送られることなく、実地訓練によって素早く備えられました。これら全ての結果として、ある限られた期間に、教会は飛躍的に成長し、その地域にいるすべての福音を受け入れたい人々に到たちしました。

それとは対照的に、求道者に敏感なモデルでは、しるしや不思議は通常避けるため、結果として、神のやり方で言い広めたり、人を引き付けたり、また咎めを与えたりすることに欠けています。人々が話を聞くことができる建物へ引き付けるために、マーケティングや宣伝活動といった世の方法に専ら頼るしかありません。説教者の雄弁術と説得力が咎めを与える主な手段です。パウロは、「そして、私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行なわれたものではなく、御霊と御力の現われでした。それは、あなたがたの持つ信仰が、人間の知恵にささえられず、神の力にささえられるためでした。」(第一コリント2:4-5)と書いていますが、求道者に敏感なモデルとパウロの手法とは、何という違いでしょうか。

### 更なる違い (More Differences)

求道者に敏感なモデルは、一般的に牧師が象徴的な人物なので、使徒と伝道者を含めません。そこで質問です。伝道という役割から使徒と伝道者を除き、その責任を牧師に与えることは、教会成長のために更に優れた方法なのでしょうか。<sup>24</sup>

求道者に敏感なモデルの牧師は、日曜礼拝の中で週に一度説教をし、そこにクリスチャンたちはまだ救われていない人を連れて来るように励まされています。従って、一般的に言うと、教会員のまだ救われていない友人に最低週に一回は福音を聞かせて

---

<sup>24</sup> 24 これは、今日数多くの伝道者、教師、預言者、更には使徒が教会を牧している主な理由である。非常に多くの神に与えられた務めが、正しい位置付けを与えられていないか、あるいは、組織的な教会の構造の中ではいかなる場所も与えられていないのである。それ故に、牧会以外の務めを持った者が教会を牧する結果となり、聖書の構造においてならば、牧会者は多くの御からだなる信者にとって、より大きな祝福になるはずであろうに、その祝福を教会から奪い取ってしまっている。みんな、その人の真の呼びに関係なく、組織的教会という形をとって、自分自身の王国を築き上げる方向に戻ってしまっているようだ。牧師は一般的に「自分の民」から十一献金をもらう権利があり、その殆どは建物の建設や維持に費やされるのだが、牧師以外の務めを持った人が牧師になっている場合は、結局ただその人が実際に呼ばれている務めの為の経済的支援を得る為に、教会を牧するという事になってしまう。

## 弟子をつくる指導者

いるという訳です。それらの未信者の人たちは、教会に来たいという思いを持っていて、且つその人たちは、教会員から招待されていなくてはなりません。聖書のモデルでは、使徒と伝道者は公の場でもプライベートの場でも関係なく、福音を継続的に宣べ伝え、全ての信者は自分の友人や隣人に福音を分かち合います。これら二つのモデルでは、どちらがより多くの未信者に福音を聞かせることができるのでしょうか。

求道者に敏感なモデルでは教会員がその未信者の友人を招くのにふさわしい建物が必要となります。これにより、かなり高額な資金が必要となります。福音が広まる前に、条件を満たす建物を所有するなり、建設するなりしなくてはなりません。アメリカでは、立地条件も関係し、大抵の場合、裕福層の住む郊外が好まれます。それは対照的に聖書のモデルでは、特別な建物も、場所も資金も要しません。福音を広めるのも、日曜日に集まる場所の所要人数に制限されません。

### 更なる違いの続き (Still More Differences)

いくつかの求道者に敏感な教会と聖書的なモデルを比較すると、まだ他にも違いがあります。

使徒の働きの中にある使徒と伝道者は、人々に悔い改めて、主イエスを信じ、すぐに水の洗礼を受けるよう勧めました。人々はその会話の中で、ルカ十四章二十六から三十三節やヨハネ八章三十一から三十二節に列挙される、イエスはその弟子に与える条件に見合う弟子となることを求められます。人々は、他の誰よりもイエスを愛し、十字架を背負ってイエスの言葉に生きることを始め、自分たちの所有物に対する権利も神に属することを受け入れ、主に全てを明け渡しました。

一方、求道者に敏感な教会で聞く福音は違います。神は罪人をどれ程愛しているか、その人の必要と感ずることによってどう応えるか、また「イエスを救い主として受け入れる」祈りでどう救われるか、ということを知ることがあります。彼らは、「救いのための祈り」を短く捧げるだけで、キリストの弟子になるために払う代価について一度も聞かされることなく、正真正銘救われたことを保証され、キリストにあって成長が期待できるクラスへの参加を勧誘されることが多いです。もしその人たちがそのようなク



## 教会の成長

ラスに参加するなら（その多くは二度と教会に戻ってきません）、キリストの命令にもっと従順になるというよりはむしろ、教会のある教義についての知識を更に得るための体系立った学びの過程を通らされます。この「弟子訓練」プログラムの頂点は、信者がついにその人の収入の十一献金を教会にし始めること（そしてそれは、貸付金や聖書的でないスタッフの賃金の支払いに回され、結局神が支援したいことにはではなく、神のものではないものを支援して、神の国の資源は奪い取られ、ずさんな管理下に置かれることとなります）と、その人に「神にある私の務めを見つけた」と思い込ませて、組織的な教会の中で、聖書には決して一度も書かれたことのない、何か教会を支える役割に就いて、機能し出すことです。

もしあなたの国の政府が、その国の軍隊に入隊を希望する人が十分でないことを懸念して、求道者ではなく「立候補者に敏感」になることを決めたら、一体何が起きることでしょうか。もし入隊したら、有望な新兵は何をしても構わない、ということが約束されていたということを想像してみてください。小切手は働くことなくただで与えられ、好きな時間に朝起きられ、訓練はしたければ受け、代わりにテレビを観る選択肢もあります。もし戦争が起きたら、戦場に参加しても良いし、代わりにビーチに行っても良いのです。その結果はどうなると思いますか。

上層兵たちは怒りが込み上げること間違いなしです！軍隊はもはや軍隊とは言えず、その任務を遂行することはできません。これこそ、求道者に敏感な教会が行き着くところです。標準を下げて、日曜礼拝の参加者は増えますが、弟子づくりと従順には至りません。日曜日に「福音を宣べ」、週中の集まりで「弟子訓練をする」求道者に敏感な教会は、週中の集まりで、人々にイエスの弟子だけが天国に行けるということを教えることを問題と見なします。そのようなことをしたら、人々は毎週日曜日の朝、まるで嘘をつかれていたような感覚になります。従って、そのような教会は、週中の集まりでも、弟子になることと従順はあくまでも任意であり、天国へ行くため

## 弟子をつくる指導者

の要件ではないと、人々を騙し続けなくてはなりません。<sup>25</sup>25

組織的な教会にも、聖書的モデルにある教えを取り入れているところも確かにありますが、それにしても、聖書的モデルが、弟子と弟子づくりをする人を増やすのに最も効果的であることは明白です。

ではなぜ、今日の教会でこの聖書的モデルが用いられていないのでしょうか。言い訳は限りなくあるようですが、最終的な分析によると、聖書的モデルが用いられない理由は、伝統と不信仰と不従順です。聖書的モデルは今日の私たちの世界では無理だと多くの人が言っています。しかし実際は、聖書的モデルが今日世界中の多くの場所で用いられています。例えば、過去半世紀以上に渡る中国での劇的な教会成長は、単純にこの聖書のモデルに従ったが故です。神は中国にだけ、そのように働くのでしょうか。

このことは全て、アメリカ人ではない牧師たちが、世界中に奨励されているアメリカの教会成長のやり方に対して用心すべきである、ということをも物語っています。それらの牧師たちが、もし教会成長について聖書のモデルを追及するなら、キリストの弟子づくりという目標を達成するのにもっと成功していたに違いありません。

### その影響 (The Aftermath)

私の観察によると、現代の教会成長の教えの提案者たちは、世界中の一般的な牧師たちと何の接点もありません。牧師の大多数が、百人以下の群れを牧しています。これらの牧師の多くは、教会成長の手法を試してはみますが、どれも機能しなかったり、自らの失敗からではないのに、思わぬ面倒を招いたりして、落胆させられています。教会成長を制限するいくつかの要素が、牧師の力の及ぶ範囲を超えてあることを誰も認めないようです。それらのいくつかをここで見ていきましょう。

---

<sup>25</sup> 25 ルカ 14:26-33 にある、イエスが真の弟子になるために列挙した要件を見ると、もう既に信者となった人たちに向かって、まるで彼らの霊的な歩みに第二のステップがあるように話された訳ではないことがわかる。むしろ、イエスは大衆に向かって話していた。イエスの弟子となることこそ、イエスは最初で唯一のステップとした。それは救われるためにとったステップと同じくらい重要である。この見解は、殆どの求道者に敏感な教会で教わっていることと対照的である。

## 教会の成長

まず、教会成長を制限する一番の要素は、その地域の人口です。最も大きな組織的な教会が、大都市にあるのは明白です。教会員は何百万もの人から成ります。もし人数が本当の成功の決定要因ならば、単純に来ていた人数で判断するのではなく、地域人口との割合によって判断すべきです。それに基づくと、十人から成る教会の方が、時には一万人から成る教会よりもずっと成功しているということになります。つまり、人口五十人の村で十人の人が教会に集うようになることは、人口五百万人の町で一万人の教会員がいるところよりも成功しています。(しかしながら、その十人の教会の牧師に、教会成長についての集会で話してもらおう、ということは決してありません。)

### 教会成長を制限する二つ目の要因 (A Second Limiting Factor to Church Growth)

第二に、その地域の全教会が、どれだけの人に福音を宣べ伝えてきたか、その浸透率によっても教会成長は制限されています。いかなる時点においても、ある一つの地域には、限られた不特定多数の、福音に心を開いている人々がいます。一旦それらの心を開いている全ての人々に福音が伝えられたならば、既に教会に行っている人たちが他の教会へ移動しない限り、それ以上の教会成長はありません(このようにして、他の教会を使うことにより、大きな教会の多くは成長してきました)。

勿論、現在クリスチャンである全ての人々は、ある地点では福音を受け入れなかったのですが、聖霊の働きにより受け入れるようになりました。つまり、現在受け入れていない人も受け入れるようになる可能性はまだあります。それが起きると、教会は成長します。よく私たちは、「リバイバル」が起きると、多くの心閉ざしていた人々が、突然福音を受け入れるようになると考えています。しかし、一人の人が福音を受け入れるようになれば、それは小さな規模かもしれませんが、立派なリバイバルです。大きなリバイバルは、このように一人の人が福音を受け入れるようになることから始まります。従って牧師たちよ、小さな始まりを蔑んではなりません。

イエスは弟子たちを町々へと福音を宣べ伝えるために送り出しましたが、イエスは弟子たちの行った先で、たった一人の人ですら悔い改めない、福音に対して閉ざした場所の可能性があると承知の上でした(ルカ 9:5 参照)。しかし、イエスはそ

## 弟子をつくる指導者

れでも弟子たちをそれらの場所へ送り出しました。弟子たちは失敗に終わったのでしょうか。いいえ、改心者は現れず（教会成長もありません）でしたが、イエスに従ったために彼らは成功したのです。

同様に、イエスは牧師を村や町や郊外へ、ほんの少ない割合の人しか福音を受け入れないと知っていながら、送り出します。そのような、ほんの小さな群れに忠実に仕える牧師は、ある教会成長のプロの目には失敗のように映るかもしれませんが、神の目から見ると成功しています。

あらゆる地域にいる全ての牧師は、神の偉大なあわれみによって、また神の民のとりなしに対する答えとして、神ご自身が福音に頑なな人たちが柔らかくなるように、今も働いておられるという事実からも励まされるべきです。神は、人々の良心や神の創造物、また状況や一時的な神の裁き、神の教会の生きた証、福音の宣教、そして聖霊による咎めを使って、未信者に影響を与えようとしています。ですから、牧師たちよ、元気を出しなさい。主に従い続け、祈り続け、福音を宣べ伝え続けなさい。大規模なリバイバルの前には、その大きな必要があります。そして、いつもそこには、リバイバルを夢見ている人がいます。夢を見続けていなさい！

### 教会成長を制限する三つ目の要因（A Third Limiting Factor to Church Growth）

個々の教会の成長を制限する三つ目の要因は、牧師の能力です。牧師の大半は、大きな会衆を監督するのに必要な能力を持っておらず、それは牧師自身の責任ではありません。牧師たちは、ただ単に組織上、また管理上の賜物、あるいは大きな会衆に必要な説教や教える技術の賜物がないのです。そのような牧師たちは、明白に大きな教会を牧する神からの呼びがなく、標準的な大きさの組織的な教会または家の教会を牧すること以外のことを試みるのは間違いです。

最近私は、アメリカ最大級の教会のひとつの主任牧師が書いたリーダーシップについての人気図書を読みました。現代教会の牧師たちへ、彼の経験に満ちた助言で溢れているページを読み進める中で、私がどうしても避けられない思いはこれでした。

「この人は、牧師のなり方ではなくて、大企業の最高経営責任者のなり方を教えてい

## 教会の成長

る」。アメリカの組織的なメガ・チャーチの主任牧師にとっては、他に選択はありません。彼には、数多くの助け手となるスタッフが必要ですし、それらのスタッフの管理も専任の仕事です。私が読んだこの本の著者は、世にある大企業の最高経営責任者になれるだけの能力がある人でした。（実に、彼の本の中で、有名な大企業向け経営コンサルタントの人たちの言葉を抜粋し、その助言を牧師のリーダーシップに適用していました。）しかし、殆ど、と言わないまでも、かなり多くの彼の本の読者が、その著者が持つリーダーシップも、管理能力もありません。

同じ本の中で、著者はどのようにして、彼が何度か大きな会社を立ち上げてた時、もう少しで取り返しのつかないような過ちを犯して、彼と彼の家族、彼の将来、そして神にある務めと、彼の全てが犠牲になるところであったかということをごくばらんに説明していました。彼は、神の恵みによって助かりました。しかし彼の経験は、他の組織的な教会の牧師が、同じような成功を求めて、同じような間違いを犯し、完全なる失敗に今も苦しんでいるという多くの事例を、私に思い出させました。ある者は自分の教会のことに没頭している間に、自分の子供たちを失い、また自分の結婚も危機的な状況となりました。ある者は、精神病や、激しい燃え尽き症候群に侵されました。ある者は、あまりにも幻滅してミニストリーを完全に放棄してしまいました。ある者は、なんとか生き残ってはいますが、ただそれだけで、これ以上続く死に物狂いの生活に、超人的な犠牲を払う価値が本当にあるか疑問に思っています。

その本を読むことで、私の思いは、初代教会の知恵こそが正しいとわかりました。初代教会の頃は、現代の組織的な教会のようなものはなく、牧師には、二十五人程度の群れを牧する以上の責任はありませんでした。私が前章で述べたように、自分の教会が小さすぎると思う牧師は、もう一度自分の務めを聖書の光の中で見直すべきです。もし五十人いるのなら、実際はもう多すぎるのかもしれませんが。もし教会内に能力のあるリーダーが揃っているのなら、弟子をつくり、神の国を神のやり方で建てるという目標を持ちながら、祈りをもって三つの家の教会に分け、建物を売り払うことを考慮に入れるべきかもしれません。

## 弟子をつくる指導者

もしそれが過激すぎるなら、少なくとも将来の指導者を訓練し始めたり、小グループを始めたり、もし既にあるなら、そのいくつかを家の教会として自立させてみてどうなるか見てみるのも良いでしょう。

### 他の現代教会成長のテクニック (Other Modern Church-Growth Techniques)

求道者に敏感な教会モデル以外にも、今日教会成長に大切だと促されているテクニックが他にもあります。これらの他のテクニックの多くは、聖書的ではなく、「霊的戦い」というカテゴリーに分類されます。「要塞を下ろす」とか「戦いの祈り」とか「霊的マッピング」と呼んで宣伝されています。

これらの活動については、後に、霊の戦いについて書かれた章で触れています。しかし、要点を言えば、使徒たちに全く馴染みのないそのような活動を、なぜ今日の教会成長に不可欠だと思う必要があるか、疑問です。

教会成長の新しい手段の多くは、数人の牧師が、「私はこれとあれをして、私の教会は成長しました。だからあなたも同じようにしてごらんください。きっとあなたの教会も成長しますよ。」と言った結果です。彼らは、自分の教会の成長と彼らが特別にしたこととの間に凄惨な関係があると思っていますが、真実は何の関係もありません。これは、他の牧師がそれらの特別な教えに従い、同じようなことをしても、その人たちの教会は全く成長しないことで何度も確かめられています。

「私たちの町にいる悪霊に向かって叫び出したら、私たちの教会でリバイバルが起きました。だから、あなたの教会でリバイバルが起きて欲しいなら、悪霊に向かって叫び出す必要があります。」と教会が成長した牧師が言うのを聞いたことがあるかもしれません。

でも、なぜ過去二千年の教会の歴史の中で、町にいる悪霊に向かって叫ぶ人なくして、世界中に沢山の素晴らしいリバイバルが起きてきたのでしょうか。これは、その牧師が、悪霊に向かって叫んだ結果がリバイバルだと思ったとしても、彼は間違っていたのです。もっと可能性として高いのは、教会の一致ある祈りの結果として、また人々が福音を受け入れられるようになった時に牧師がたまたま行ってそこで福音

## 教会の成長

を伝えたために、その町の人々が心を開くようになったのでしょう。大抵の場合、教会成長は、正しい時に正しい場所にいる結果です。(そして、聖霊は私たちが正しい時に正しい場所にいれるよう助けてくださいます。)

もし町にいる悪霊に向かって叫ぶことで、ある牧師の教会にリバイバルが起きたのなら、なぜいつも暫くすると、リバイバルは遅まり、やがて止むのでしょうか。もし悪霊に向かって叫ぶことがかぎだとしたら、もし私たちが悪霊に向かって叫び続けられれば、町の全ての人がキリストの下へ来ることとなります。しかしそうではありません。

真実は、よく考えれば明らかです。教会成長の聖書的手段とは、祈り、説教、教え、弟子づくり、また聖霊による助けなどです。そしてこれらの聖書的手段ですら、教会成長を保証するものではありません。なぜなら、神は人に自由意志と良心を与えました。人は悔い改めることも、悔い改めないことも選べるのです。イエスでさえ、彼が訪れた町が悔い改めなかった時があり、そのような時には、教会成長に失敗したと言えるかもしれません。

以上のことから、教会を建てるのには聖書的な手段だけを実行する必要があると言えるでしょう。それ以外のことは時間の無駄です。それらは、木、草、わらで建てることとなり、その日が火とともに現れる時、それらは焼き尽くされ、報いを受けられません(第一コリント 3:12-15 参照)。

最後に、目標は人数が増えることではなく、弟子づくりです。もし弟子をつくることで教会が成長するならば、神をたたえましょう！





## 第六章

### 教えの務め (The Ministry of Teaching)

この章では、教えの務めについて、色々な角度から見ていきます。私たちは、弟子をつくるべきであり、キリストが命じた全ての命令に従うよう弟子に教えることが要求されていますので、教えることは使徒や預言者、伝道者<sup>26</sup>、牧師、長老、監督、そして（当然のことながら）教師の責任であり、ある程度は、キリストに従う全ての人の責任と言えるでしょう。<sup>27</sup>

以前にも強調したように、弟子づくりをする牧師または指導者は、まず自分の模範を通して、次に言葉で教えます。説教することは、自分が実践していることです。使徒パウロは、弟子づくりにとても成功しましたが、このように書いています。

私がキリストを見ならっているように、あなたがたも私を見ならってください（第一コリント11:1）。

これこそ指導者全員が持つべき目標です。すなわち、自分が導く人たちに心から、「自分を見ならいなさい。キリストに従う者の人生がどういうものか知りたいたのであれば、私を見なさい。」と言えるようになることです。

それとは対照的に、私は以前牧していた教会員たちによく、「私を見習わず、

---

<sup>26</sup> 26 伝道者が福音を宣べ伝えることは、一種の教えの形と見なすことができ、伝道者は確実に聖書に忠実な福音を宣べ伝える必要がある。

<sup>27</sup> 27 全ての信者が人々の集まりの中で公に教える責任が与えられている訳ではないが、弟子づくりにおいて、一対一で教える責任は与えられている。

## 弟子をつくる指導者

「キリストを見習いなさい！」と言っていたものでした。その時は気づいていませんでしたが、私は良い模範を示していなかったと認めていました。実際、私はキリストに従う者としてあるべき姿にはないことを認めつつ、他人には自分ができていないことをするように言っていました！パウロの言っていることとは何と違うでしょう。真実は、もし自分たちが、キリストを見習う自分を見習いなさいと人に言えないのであれば、模範を表すべき立場にある指導者になるべきではありません。教会はその指導者たちを反映しています。

### 模範による一致の教え (Teaching Unity by Example)

ここで、ある一つの主題、一致ということに対して、模範によって教えることはどういうことか考えてみましょう。牧師、長老、監督は皆、民が一致を保たれて導かれることを望んでいます。地域教会の中で分裂があることは好まれません。派閥争いは主に非常に忌み嫌われることとよくわかっています。結局のところ、イエスは主が私たちが愛したように、互いを愛し合うよう命令しました(ヨハネ 13:34-35 参照)。私たちが互いに愛し合うことが、世の目には、私たちがキリストの弟子である証拠となります。だからこそ、群れの指導者たちの殆どは、羊たちが互いに愛し合い、一致を求めるよう訓戒します。

確かに、私たち指導者たちは、何よりもまず自分たちの模範を通して教えなくてはならないのですが、私たちの生き方によって愛と一致について教えるには、自分たちは余りにも欠けていることがよくあります。例えば、他の牧師に対する愛と一致をあまり表せていない時、私たちは自分たちが民に教えていることと相反するメッセージを送ってしまっています。私たちは、自分たちがしていないことを教会員にするよう求めているのです。

実際、イエスが一致について話した最も大切な言葉は、指導者たちへ、他の指導者たちとの関係という点で話されました。例えば、最後の晩餐で、イエスは弟子たちの足を洗ってから弟子たちに向かってこう言いました。

あなたがたはわたしを先生とも主とも呼んでいます。あなたがたが

## 教えの務め

そう言うのはよい。わたしはそのような者だからです。それで、主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです（ヨハネ 13:13-15）。[イエスが模範を通して教えていることにも注目してください。]

牧師はよく、この聖句を互いに愛し合うことを、自分の群れに教えるために用いますが、それは全く正しいことです。しかし、この聖句の中の言葉は、指導者である十二弟子に向かって話されました。イエスは、指導者が分裂したり、互いにいがみ合っていたら、神の教会に与えられた使命を引き継ぐことは、非常に難しいことだとよくわかっていました。それ故に、イエスは、自分の弟子となった指導者たちがへり下って互いに仕え合うことを望んでいることを明示しました。

当時の習慣に合わせて、イエスは家の給仕の最も低い仕事の一つである、弟子たちの足を洗うことで、へり下りをもって仕える姿を示しました。もし、イエスが違う時代の違う文化に現れたとしたら、野外トイレを掃除したり、弟子のごみ箱を掃除したりしていたかもしれません。現代の指導者の何人が、このような愛とへり下りを互いに示そうとしているでしょうか。

一時間以内の間に、イエスは繰り返しこの大切なメッセージを強調しました。弟子たちの足を洗ってすぐに、イエスは将来の教会の指導者たちに向かってこう言いました。

あなたがたに新しい戒めを与えましょう。あなたがたは互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。もしあなたがたの互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです（ヨハネ13:34-35）。

## 弟子をつくる指導者

これらの言葉は確かにキリストの弟子全てに当てはまりますが、元は指導者たちに向かって、他の指導者との関係について言及したものでした。

もう一度、数分後にイエスはこう言いました。

わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。人がその友のためにいのちを捨てるといふ、これよりも大きな愛はだれも持っていません（ヨハネ15:12-13）。

またここでもイエスは指導者に話していることに注目してください。

数秒後、イエスは再びこう言いました。

あなたがたが互いに愛し合うこと、これが、わたしのあなたがたに与える戒めです（ヨハネ15:17）。

そして、数分後、イエスの弟子たちは、イエスが彼らのためにこう祈っているのを聞きました。

わたしはもう世にいらなくなります。彼らは世におりますが、わたしはあなたのみもとにまいます。聖なる父。あなたがわたしに下さっているあなたの御名の中に、彼らを保ってください。それはわたしたちと同様に、彼らが一つとなるためです（ヨハネ17:11、一部強調）。

最後に、その数秒後、イエスが祈り続けていると、弟子たちはイエスがこう言っているのを聞きました。

わたしは、ただこの人々のためだけでなく、彼らのことばによってわたしを信じる人々のためにもお願いします。それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにいたるように、彼らがみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおるようになるためです。そのことによって、あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるためなのです。またわたしは、あなたがわたしに下さ

## 教えの務め

った栄光を、彼らに与えました。それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つであるためです。わたしは彼らにおり、あなたはわたしにおられます。それは、彼らが全うされて一つとなるためです。それは、あなたがわたしを遣わされたことと、あなたがわたしを愛されたように彼らをも愛されたこととを、この世が知るためです（ヨハネ17:20-23、一部強調）。

従って、一時間以内に六回も、イエスは将来の指導者たちに一つとなることと、へり下って互いに愛し合い、仕え合うことで、彼らの一致を表すことの重要性を強調しました。これはイエスにとって明らかに大切なことでした。彼らの一致は、世がイエスを信じるのに重要な要素でした。

### 私たちの出来具合 (How Well Are We Doing?)

残念ながら、私たちは自分たちの群れが、愛によって一つとなることを望んでいますが、私たちの多くは互いに競争し、道義に反するやり方で、他の教会に負担を負わせて、自分の教会を建て上げようとしています。私たちの多くは、自分とは違う教義を持つ他の牧師との交わりを避けます。私たちは、「私たちは他の教会堂にいる他のクリスチャンとは違います」といったメッセージを皆に送るため、教会堂の正面に私たちが世に示す看板で、一致の無さを宣伝してさえいます。（そして、殆どの未信者はキリスト教には沢山の宗派があることを知っているのです、私たちはしっかりと一致の無さを世に教えてきた、と言えるでしょう。）

つまり、私たちが説教していることを私たちは実践しておらず、私たちが実際表している姿の方が、私たちの一致についての説教よりも、よっぽど多くを会衆に教えています。指導者たちが違うように振る舞っているのに、標準的なクリスチャンが一致と愛を表すようになると考えることは愚かなことです。

唯一の解決の道は悔い改めです。私たちは、信者の前で、また世間にも、間違った模範を表してきたことに対して悔い改めなくてはなりません。私たちは互いを分離させる壁を取り除き、イエスが命じたように互いを愛し合うことを始めなくてはなり

## 弟子をつくる指導者

ません。

ということは、まず最初に、私たちは、違う宗派の牧師たちも含め、他の牧師や指導者と会わなければなりません。私は、生まれ変わりの体験をしてなかったり、イエスに従うことに無関心であったり、自分の利益のために主の務めをしているような牧師たちと交わりを持つようには言っていません。そのような人たちは羊の毛を着た狼であり、イエスはどのようにして彼らを正確に見分けるのか教えました。その人たちの実を見れば良いのです。

しかし、私はイエスの命令に従いたいと思っている牧師や指導者、真のキリストにある兄弟姉妹について話しています。もしあなたが牧師であるなら、あなたが他の牧師を愛することに熱心であり、またその愛を実践的な方法で自分の群れに表すことに熱心である必要があります。一つの方法は、近所の牧師たちの所へ行き、自分が聖書に書いてあるように愛せていなかったことについて許しを請うことから始められます。これにより、多少の壁は崩されます。それから、一緒に定期的に会って、食事をし、励まし合い、訓戒し合い、祈り合うことを熱心にするのです。ここまで行けば、互いを分裂させてしまいがちな教義の話をする際も、その論じ合っている全ての事についてあなたが最終的に合意する、しないという事よりも、何よりも一致を求めたいと必死であるが故に、ついには愛を持って話し合うことが可能でしょう。私が遂に、私と同じ教義に立っていない指導者の言うことを聞きたいと思うようになった時に、私の人生と主にある務めは大いに豊かなものとなりました。自分自身の殻にこもって、長い年月の間、私は沢山の祝福を逃していました。

あなたも、他の牧師を招いて、自分の教会や家の教会の集まりで説教してもらったり、他の教会や家の教会の集まりを合同で礼拝を持つことで、愛と一致を表すことができます。

あなたは、残りのキリストの御からだとも一致がないことを世に表さないために、自分の教会の名前を変えることもできます。イエスは沢山の異なる、互いに受け入れられない教会ではなく、ただ唯一の教会を建てているということを自分は信じている

## 教えの務め

と皆に伝え、宗派や教団から抜け出し、その唯一のキリストの御からだとだけひとつとなることもできます。

これは過激的なのは承知の上です。しかし、イエスが決して意図していないと、はっきりわかっていることをし続ける意味がどこにあるのでしょうか。なぜ、イエスに喜ばれないことに関わろうとするのでしょうか。聖書には宗派も特別な教団も何も書いてありません。コリント人が、どの教師を好むかで分裂があった時、パウロは彼らを強く叱り、それは彼らが肉に属し、靈的にも幼いことを表していると言いました。」（第一コリント3:1-7参照）私たちの分裂は何か違うのでしょうか。

私たちを引き離すものは何でも避けるべきです。家の教会なら、それに名前を付けたら、どこかの教団に加わったりすることは避けるべきです。聖書に出て来る教会は人々がどの家に集まっているかということだけで識別されていました。また、複数の教会はどの町にあるかということだけで識別されていました。それらの教会は、キリストの御からだという一つの教会の一部であると考えていました。

王はただ一人、王国はただ一つです。誰でも自分自身を高めて、信者や教会を自分と同一であるようにさせているのなら、その人は神の王国の中に自分自身の王国を建てていることになります。その人は、唯一の王の前に立つ時、王に「わたしはわたしの栄光を他の者には与えない」（イザヤ48:11）と言われることに準備をしていた方がよさそうです。

これら全てを通してもう一度言いたいことは、人々は主の務めをなす者の模範に従っていくので、どんな人の前でも、そのような務めに与かる者は、キリストへの従順の正しい模範を示すべきである、ということです。人々の前で人生を通して表す模範程、人々を教えるのに影響を与えられる手段はありません。パウロはピリピの信者たちにこう書きました。

兄弟たち。私を見ならう者になってください。また、あなたがたと同じように私たちを手本として歩んでいる人たちに、目を留めてください（ピリピ 3:17、一部強調）。

## 弟子をつくる指導者 何を教えるのか (What to Teach)

パウロのように、弟子をつくる指導者は目標を持っています。その目標とは、「すべての人を、キリストにある成人として立たせる」(コロサイ 1:28後半) ことです。そうすれば、その人はパウロのように、「知恵を尽くして、あらゆる人を戒め、あらゆる人を教え」(コロサイ1:28前半) るようになります。パウロは人々を教育したり、楽しませるためだけに教えなかったことに注意してください。

弟子をつくる指導者は、パウロと一緒に、「この命令は、きよい心と正しい良心と偽りのない信仰とから出て来る愛を、目標としています」(第一テモテ1:5) と言うことができます。つまり、指導者は、その人が仕える人々の人生に、真のキリストらしさと聖さが現れて欲しい、と願っています。指導者は真実を教え、「すべての人との平和を追い求め、また、(聖くなければ、だれも主を見ることができないため) 聖められることを追い求め」(ヘブル12:14) るよう聞き手を訓戒します。

イエスの弟子たちが弟子をつくる時に、彼らはイエスから、イエスの命令に部分的にではなく全て従う弟子となることを教えるよう命令を受けたことを、弟子をつくる指導者は知っています(マタイ28:19-20)。そのような指導者はキリストの命令を確実に何一つ漏れることなく教えたいと願っており、そのために、イエスの命令が記録され、再強調されている福音書や使徒書簡から一節ごと取って、定期的に教えます。

このような解説的教えは、指導者の教えのバランスが確実に保たれるようにします。私たちのメッセージがいつも何かの主題に沿ったものとなってしまうと、人々に人気のある主題に集中し、人気のないものを扱わない傾向が出てきてしまいがちです。しかし、聖書を一節ずつ扱う教師は、神の愛についてだけではなく、神の訓練や天罰についても教えます。クリスチャンとなる祝福だけでなく、その責任についても教えます。あまり大切ではないことを強調し、一番大切なことを軽視するような主題の取り扱い方はしません。(イエスによると、これこそがパリサイ人が陥った失敗でした。マタイ23:23-24参照)

### 解説的教えに対する恐れからの克服 (Overcoming Fears of Expository Teaching)



## 教への務め

牧師の多くは、聖書には理解できないことが多くあるため、節ごとに教えることを怖がります。そして牧師たちは、教会員に牧師があまりわかっていないことを知って欲しくないのです！勿論、それは彼らの傲慢です。聖書の全てを完全に理解している人などこの世には一人もいないのです。ペテロでさえ、パウロが書いたことには理解するのに困難なものがあると言いました（第二ペテロ3:16）。

節ごとに教える牧師が、よく理解できない節に辿り着いたら、牧師は群れに向かって、自分は次の箇所を理解していないと単純に伝え、そこを飛ばせばよいのです。また牧師は、群れに自分が聖霊によって理解が与えられるようにと祈りのリクエストを出すこともできます。牧師のヘリ下りは群れの前に良い模範を示すことになり、それ自体が説教となるでしょう。

家の教会の牧師、長老、監督には、普段の堅苦しくない雰囲気（注：原文「雰囲気」は「雰囲気」ではなく「雰囲気」の誤りと思われる）で小グループに教える更なる利点があります。というのは、教への最中に質問を受けられることです。これによって、聖霊がグループ内に働き、学んでいる聖書の箇所についての洞察が、教えている人以外の人々に与えられる可能性も開かれます。結果として、皆にとって更に効果的な学びの時となります。

キリストの命令についての教への始めるのに良い場所は、マタイ5から7章にある山上の垂訓です。そこで、イエスは沢山の命令を与え、ユダヤ人の弟子たちに、モーセを通して与えられた律法について正しく理解できるよう助けました。この本でも後程、山上の垂訓を節ごとに教へ、どうしたらそれをできるようになるか示します。

### 説教準備 (Sermon Preparation)

新約聖書のどこにも、牧師、長老、監督が毎週の演説または説教を準備する際に、現代の指導者の多くがしているように、箇条書きの要点とイラストが要約用の書式に綺麗にまとまって入っていた証拠はどこにもありません。勿論、イエスがそのようなことをしていたとは誰も想像できません！初代教会での教へのは、自発的で、対話式で、ユダヤ流で、ギリシャ人やローマ人がしていたような雄弁術的なものとは違いましたが、結局その雄弁術的な伝統の方が、教会が組織的なものになった時に採用されたの

## 弟子をつくる指導者

です。もしイエスが弟子たちに、最高議会に引き渡される時、聖霊によって、どんな反対者も、反論もできず、反証もできないようなことばと知恵を与えられることを約束し、どう弁明するかは、あらかじめ考えないことに、心を定めておくよう言ったのなら、牧師が教会という集まりの中で話す時、神がある程度助けてくださることを、期待できるのではないのでしょうか！

指導者が説教に対して、祈り、学び備える必要がないとは言っていません。パウロはテモテをこのように訓戒しています。

あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい（第二テモテ2:15）。

パウロの教えに従って「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ」（コロサイ3:16）ている指導者は、神のみことばにあまりにも満たされていて、「溢れ流れる」ものから人に教えることができるでしょう。ですから親愛なる牧師よ、大切なことは自分自身を聖書の中に浸すことです。あなたが、ある主題について知識があり、情熱的ならば、神の真理を伝える準備はあまり必要ではないかもしれません。更に、あなたが節ごとに教えるのなら、要約としては単純にいくつかの一連の節を使うことができます。準備としては、教える聖句の節について、祈りを持って思い巡らすことをすべきでしょう。もし家の教会を牧しているのなら、対話形式での教えとなるので、説教の要約の必要は更に減るでしょう。

指導者が教える時に、神がその人を助けてくださるという信仰があるならば、神はその指導者に助けを持って報いるでしょう。従って、自分自身や説教の準備やそのメモに頼るのではなく、もっと主に頼りましょう。少しずつ、信仰と自信が与えられ、説教準備で書くメモの数も減り、大まかな要点だけで、もしくは全く要点がなくても説教ができるようになります。

他の人を意識しすぎる人は、準備されたメモに頼りがちです。というのも、その人は公に間違えることをとても恐れているからです。そのような人は、恐れはその人

## 教えの務め

の不安感に根差し、更にそれはその人のプライドに根差しているということを知るべきです。そのような人は、他人の目に自分がどう映っているのかをあまり気にせずに、自分や自分の聴衆が神の目にどう映っているか気にする方が良いでしょう。準備された話を聞いても、聖霊の油注ぎを受けた、心からの教えを聞く時程の感動はありません。もし会話をする際に、いつも準備されたメモを使っていたら、どれ程コミュニケーションの妨げとなるか、考えてみてください！会話は死んでしまいます！下準備のない対話形式は、準備された演説よりもよっぽど誠意が伝わります。教えは演技ではありません。それは真理を分け与えることです。私たちは皆、単なるスピーチを聞いている時というのはわかるもので、そのような時は自動的に頭のスイッチが切れる傾向にあります。

### 更なる四つの思い (Four More Thoughts)

(1) 指導者の中には、他人が書いた本から説教ネタを取るオウムのような人がいます。そのような人たちは、聖霊から個人的に教わるという素晴らしい祝福を逃して、また本に書かれた間違いまで広めてしまう傾向があります。

(2) 牧師の多くは、他の説教者の説教や教えの形式を真似ていて、そのような形式は大抵の場合、純粋に伝統から来ていることが多いです。例えば、声が大きくて、話すスピードが速い説教だけが良いと考える人たちの集まりがあります。従って、そのような教会に集う人たちは、最初から最後まで叫ばれる説教にさらされています。現実には、人々がつまらない話を聞いている時の反応と同じく、繰り返される叫び声に大抵は頭のスイッチが切れます。多様な声は人をもっと魅了します。更に、説教は勧めや忠告の言葉であるため、自然に声も大きくなりますが、教えは教育であるため、大抵の場合はより会話調で行われます。

(3) 私は何百もの礼拝で、説教の聴衆を観察してきましたが、驚いたことに、多くの説教者や教師は人々が飽きていたり、話を聞いていない沢山の兆候に対して無関心です。牧師よ、飽きているように見える人々は、実際に飽きています！あなたが話している最中にあなたを見ていない人たちは、多分聞いていません。話を聞いていな

## 弟子をつくる指導者

い人たちには、少しも役立っていません。もし誠実な人たちが飽きてきていたり、話を聞いていないなら、あなたは自分の説教を改善する必要があります。ここでいくつかの例を出しましょう。関連性のある話をしてみてください。たとえ話を作ってみてください。話を単純にしてみてください。心からみことばを教えてください。誠実になってください。あなた自身であってください。声に変化をつけてみてください。なるべく多くの聞き手と目を合わせてみてください。動き回ってみてください。話が長すぎないようにしてみてください。もし小人数なら、そこに集まる人たちに丁度良い頃合いに質問がないか促してみてください。

(4) 説教はいつも三つの要点があるべきだという考えは、単に人間の発明です。目標は弟子をつくることであって、現代説教の理論に従うことではありません。イエスは、「わたしの羊を飼いなさい」と言ったのであって、「わたしの羊を感動させなさい」とは言っていません。

### 誰に教えるのか (Whom to Teach)

イエスの模範に従って、弟子をつくる指導者は、ある程度、誰に教えるのかを選びます。あなたは驚くかもしれませんが、これは事実です。イエスは群衆に向かってたとえ話を使って話しましたが、それには理由がありました。つまりイエスは、彼が言っていることを皆にわかって欲しい訳ではなかったのです。これは聖書から明らかです。

すると、弟子たちが近寄って来て、イエスに言った。「なぜ、彼らにたとえでお話しになったのですか。」イエスは答えて言われた。

「あなたがたには、天の御国の奥義を知ることが許されているが、彼らには許されていません。というのは、持っている者はさらに与えられて豊かになり、持たない者は持っているものまでも取り上げられてしまうからです。わたしが彼らにたとえで話すのは、彼らは見てはいるが見ず、聞いてはいるが聞かず、また、悟ることもしないからです (マタイ13:10-13) 。

## 教えの務め

キリストのたとえ話を理解する特権は、悔い改め、イエスに従う決心をした者にのみ用意されていました。悔い改めの機会を蹴った者、その人の人生にある神の御旨に逆らう者には、神は同じように逆らいました。神は高ぶる者に敵対し、へりくだる者に恵みを与えます（第一ペテロ5:5）。

同様に、イエスは弟子たちに教えました。「聖なるものを犬に与えてはいけません。また豚の前に、真珠を投げてはなりません。それを足で踏みにじり、向き直ってあなたがたを引き裂くでしょうから」（マタイ7:6）。明らかに、イエスはここで比喩的に話していました。イエスは、「価値あるものを、その価値がわからない人に与えてはならない」ということを意味しました。豚は真珠が価値あるものとわからないように、霊的な豚は、神の言葉を聞いてもその価値がわからないのです。もし自分たちが聞いている言葉が本当に神のものだと信じるのなら、その人たちは最大の注意を払って聞き、また従うはずです。

誰が霊的な豚かと、どうしたらわかるのでしょうか。一つの真珠をその人の前に投げて、その人がそれをどうするか見ていてください。その人がそれを無視したら、あなたはその人が霊的な豚であることがわかるでしょう。もしその人がそれに従えば、あなたはその人が霊的な豚ではないことがわかるでしょう。

残念ながら、あまりにも多くの牧師たちが、イエスがするなど言ったことをして、何度も豚に真珠を投げ、神の言葉を拒絶している人、またはしてきた人に教えようとしています。そのような指導者たちは、神に与えられている時間を無駄にしています。彼らは、イエスが命じたように、足の塵を払って、とっくの前に進んでいるはずでした。

### 羊と山羊と豚（The Sheep, Goats and Pigs）

事実、あなたは弟子となりたくない人、イエスに従いたくない人を弟子にはできません。多くの教会はそのような人で溢れ、単なる文化的クリスチャンの多くは、イエスまたはキリスト教についての聖書に基づく事実のいくつかを思いの中で受け入れたというだけで、自分は生まれ変わったクリスチャンであると思っています。その

## 弟子をつくる指導者

ような人たちは豚か山羊であって、羊ではありません。しかし、多くの牧師は九割方の時間を、それらの豚や山羊を喜ばすために費やし、靈的に助け、また仕えるべき本当の羊はないがしろになっています！牧師よ、イエスはあなたに羊を飼って欲しいのであって、山羊や豚ではありません（ヨハネ21:17）！

しかし、誰が羊かとどうしたらわかるのでしょうか。その人たちは、教会に一番早く来て、一番最後に帰ります。彼らは、イエスが彼らの主であり、イエスを喜ばせたいために、真理を学ぶことに飢え渴いています。彼らは、教会へただ毎週日曜日だけ来るのではなく、集まる時にはいつでも集まります。彼らは主に興奮しています。彼らは仕える機会を探しています。

牧師よ、あなたの時間と注意の大半をそのような人たちに捧げてください。彼らこそが弟子です。あなたの教会に来る山羊や豚には、彼らが耐えられるだけ、福音を宣べ伝えなさい。しかし、あなたが本当の福音を宣べ伝える時、彼らはそれ程長くは耐えられないでしょう。彼らは教会を去るか、もしその人たちに権力があるのなら、あなたをその地位から外すことを試みるでしょう。彼らがそれに成功したら、あなたはそこを去って足の塵を払いなさい。（家の教会という設定では、そのようなことは起こり得ません。あなたの教会があなたの家で集まっている場合は特にです！）

同様に伝道者も、福音を何度も拒絶してきた同じ人たちに繰り返し説教しなければならないという義務感を感じる必要はありません。死人たちに彼らの中の死人たちを葬らせなさい（ルカ9:60参照）。あなたはキリストの大使であり、王の王からの最も大切なメッセージを運ぶ者です！神の御国ではあなたの地位は非常に高く、責任も重大です！全ての人々が福音を一度は耳にするまでは、誰かに福音を二度伝えるような時間の浪費は止めましょう。

もしあなたが弟子づくりをする指導者になるのなら、誰を教えるかについては、自分が選ぶべきであり、イエスに従いたくない人にあなたの大切な時間を浪費しないことです。パウロはテモテにこう書きました。

多くの証人の前で私から聞いたことを、他の人にも教える力のある

## 教えの務め

忠実な人たちにゆだねなさい（第二テモテ 2:2、一部強調）。

### 目標の達成（Reaching the Goal）

ここで少し、イエスのミニストリーでは決して起こり得ませんでした。現代教会ではよくある光景を想像してみましょう。イエスが、その復活の後、地上に留まり、現代の組織的教会を始め、三十年間そこを牧すると想像してください。イエスが毎週日曜日に同じ会衆に向かって説教するのを想像してみてください。イエスの説教中、ペテロ、ヤコブ、ヨハネが十年間毎週日曜日いつも同じところである一番前の列に座っているのを想像してみてください。ペテロがヨハネに寄り掛かって、彼の耳元で、うめき声と共に「もう十回も同じ説教を聞いたよ」とささやいているのを想像してみてください。

私たちは、このような光景が馬鹿げているとわかっています。なぜなら、イエスがそのような状況にご自身を、また使徒たちを置かないことを知っているからです。イエスは弟子をつくりために、そしてそれをある限られた時間内に、ある方法で行うために来られました。三年位の期間で、イエスはペテロ、ヤコブ、ヨハネと他何人かを弟子としました。イエスは教会堂で毎週日曜日に一度彼らに向かって説教をすることで弟子づくりをした訳ではありません。イエスは、彼らの前で表す彼の生き方を通して、また質問に答えたり、弟子たちに仕える機会を与えることを通して、弟子づくりをしました。イエスはその仕事を成し遂げ、次へと進みました。

それなら、なぜ私たちはイエスが決してやらなかったことをやるのでしょうか。なぜ同じ人たちに何十年も説教することで、神が望んでおられることを成就しようとするのでしょうか。いつになったら、私たちの仕事は完成するのでしょうか。なぜ私たちの弟子は、数年経っても、自分たちの弟子をつくりに行くことができないのでしょうか。

私が言いたいのは、私たちが私たちの仕事を正しく行っているなら、私たちの弟子は成熟し、私たちが成す彼らへの務めを必要としなくなる時が来るはずです。彼らは自分たちの弟子を作るために解き放たれるべきです。私たちは、神が私たちに定め

## 弟子をつくる指導者

た目標を達成すべきであり、イエスはそのやり方を示してくださいました。因みに、成長過程にある家の教会では、弟子をつくり、指導者を育てる必要が絶え間なくあります。健康的な家の教会は、何十年も同じ人たちに同じ説教者が説教しているという終わりなき循環にはまることはありません。

### 正しい動機 (Right Motives)

弟子づくりへと導く教えを成功させるには、正しい動機を持つ以上に大切なことはありません。誰かが間違っただけの動機を持ってその務めに入っている時、その人は間違っただけの行ないをします。これこそが今日の教会で間違っただけの、バランスのない教えがはびこっている一番の原因です。指導者の動機が、人気を得ることだったり、他人の目から見て成功していると思われたかだったり、沢山の金儲けをすることなら、その人は神の目から見て失敗の運命にあります。最も悲しいことは、その人は人気を得たり、他人から見て成功したり、または沢山金儲けをしてその人は目標を達成し、成功するかもしれませんが、その間違っただけの動機がキリストの裁きの御座で明らかとされ、その人の働きに対して何の報いも受けられない日が必ず来るのです。もし、天の御国へ入ることを許されても、<sup>28</sup>28その人に報いがなく、また御国においては低い地位にあることにより、その人についての真理をそこに居る全ての人は知るので、天には異なる地位があることは疑う余地がありません。イエスはこのように忠告しました。

だから、戒めのうち最も小さいものの一つでも、これを破ったり、また破るように人に教えたりする者は、天の御国で、最も小さい者と呼ばれます。しかし、それを守り、また守るように教える者は、天の御国で、偉大な者と呼ばれます (マタイ5:19)。

勿論、キリストの命令に心から従い、またそれを教える指導者たちは、それによって地上では苦しみを受けます。イエスはイエスに従う者には迫害が伴うと言いま

---

<sup>28</sup> 28 「もし」と私がここで言うのは、羊のなりをしてやって来る狼は明らかに、自分勝手な動機を持つ「指導者」であり、そのような者たちは地獄に投げ落とされるからである。そのような者たちと、間違っただけの動機を持った真の指導者との違いは、彼らの間違っただけの動機の程度による、と私は考えている。



## 教えの務め

た（マタイ5:10-12; ヨハネ16:33参照）。それらの人たちは世の成功、名声、富を得ることは殆どないでしょう。彼らが得るものは、将来与えられる神からの報いと誉れです。あなたはどちらを得たいですか。これについてパウロはこう書きました。

アポロとは何でしょう。パウロとは何でしょう。あなたがたが信仰にはいるために用いられたしもべであって、主がおのおのに授けられたとおりのことをしたのです。私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。それで、たいせつなのは、植える者でも水を注ぐ者でもありません。成長させてくださる神なのです。植える者と水を注ぐ者は、一つですが、それぞれ自分自身の働きに従って自分自身の報酬を受けるのです。私たちは神の協力者であり、あなたがたは神の畑、神の建物です。

与えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台を据えました。そして、ほかの人がその上に家を建てています。しかし、どのように建てるかについてはそれぞれが注意しなければなりません。というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現われ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります（第一コリント 3:5-15）。

パウロは自分自身を、土台を据える賢い建築家に例えました。アポロはパウロがコリントに教会を建てた後、そこへ来た教師ですが、パウロは彼を、もう既に敷いた

## 弟子をつくる指導者

土台の上に建てる人に例えました。

パウロもアポロも、最終的には彼らの働きの量ではなく、質に基づいて報いを得たことを注意してください（3:13参照）。

例えて言うと、パウロとアポロは神の建物を六つの異なる種類の材料で建て、その内の三つは一般的で、比較的安く、燃えやすい材料で、もう三つは珍しい、とても高価な、燃えにくい材料です。いずれの日に、彼らが建物を建てるために使ったそれぞれの材料は神の裁きという火の中をくぐり、木、草、わらは火によって焼かれ、それらの価値のない、一時的な質を現しますが、一方、金、銀、宝石は神の目から見て高価で永遠に続くものであり、火の中を通っても残ります。

聖書に基づいていない教えは、キリストの裁きの座で燃やされ、灰になることは確信できます。権力や人間的な方法、肉の知恵によってなされたあらゆること、また他の間違った動機によってなされたあらゆることもその通りです。イエスは、人からの誉れを求めて行うことはどんなことでも報いは受けられないと忠告しました（マタイ6:1-6, 16-18参照）。これらの価値のない働きは、人間の目には今は明らかではないかもしれませんが、パウロが忠告したように、いずれの日に、全ての人の前に明らかにされるのは確実です。個人的には、もし私の働きが木、草、わらで作られた類のものなら、後で知らされるよりも、今知りたいです。今なら悔い改める時間があります。後では遅すぎることになります。

### 動機の確認（Checking Our Motives）

私たちはとても簡単に、自分たちの動機について騙されます。私は本当にそうでした。私たちの動機が純粹だと、どうしたらわかるのでしょうか。

一番良い方法は、神に頼んで、自分たちの動機が間違っていたら、それを示してもらい、また自分の思いや行動をよく監視することです。イエスは、祈ったり、密かに貧しい者に施したりといった良い行ないをするように言いましたが、そういったことは、人からの誉れではなく、神からの誉れを求めているので、私たちが良いことをしている証拠です。もし私たちが、人から見られている時だけ神に従順なら、それは

## 教えの務め

何かが非常に間違っているという合図です。または、万が一見つかった場合に、自分たちの名声を台無しにするような恥ずべき罪は避けながら、しかし誰にも気づかれなような比較的小さな罪にふけているのなら、私たちの動機が間違っていることを表しています。もし私たちが本当に、私たちの全ての思い、言葉、行動をご存じである神を喜ばせたいと願っているのなら、私たちは大きなことでも、小さなことでも、他の人に知られていることでも、知られていないことでも、神にいつも従おうと努力するでしょう。

同じように、私たちの動機が正しければ、私たちは、キリストの命令に全て従う弟子をつくることを犠牲にして、礼拝への参加人数の増加だけに役立つ教会成長の流行を追い求めることはしません。

私たちは、世的で、霊的ではない人たちにも受け入れられる人気の主題だけに集中するのではなく、神の言葉の全てを教えます。

私たちは、神の言葉を捻じ曲げたり、聖書全体の流れを妨げるようなやり方で聖句を教えることはしません。

私たちは、自分自身のために、肩書や上座を求めません。私たちは有名になることを求めません。

私たちは裕福層に応じません。

私たちは地上に宝を積むことをせず、単純に生き、私たちができる全てを捧げ、群れにとって良き世話役としての務めの模範を示します。

私たちは、人々が私たちの説教についてどう思うかよりも、神がそれについてどう思うかを気にします。

あなたの動機はどうでしょうか。

### **弟子づくりを駄目にする教義 (A Doctrine that Defeats Disciple-Making)**

弟子づくりをする指導者は、弟子をつくるという目標に反する行ないは、いかなるものでも決して教えることはしません。つまり、そのような指導者は、主イエスに従わないことが心地良いと人々に思わせるいかなることも口にはしません。また、弟

## 弟子をつくる指導者

子づくりをする指導者は、裁きを恐れずに、神の恵みを罪を犯す手段として伝えることは決してしません。むしろ、彼は神の恵みを罪に対する悔い改め、勝利する人生を歩む手段として伝えます。聖書は、私たちが承知の通り、勝利を得る者だけが神の国を相続すると宣言しています（黙示2:11; 3:5; 21:7参照）。

残念なことに、最近の指導者の中には、弟子づくりという目標に大きな害を与えるような聖書的でない教義に固執している人もいます。アメリカでとても人気となったそのような教義の一つは、「無条件の永遠なる保証」もしくは、「一度救われればいつも救われている」というものです。この教義は、生まれ変わりの体験をした人々は、その人たちがどんな人生を送ろうとも、決してその救いは失われないと主張します。救いは恵みによるものであるため、救いを受けるための祈りを捧げた人たちを、最初に救ったその同じ恵みが、ずっと働いてその人たちの救いを保つと言うのです。それ以外の観点は、人はその行ないによって救われると言っているに等しいと彼らは見なします。

当然、そのような考え方は神の聖さを大いに損なうものです。キリストへの従順は、その人が天へ入るのには重要ではないと想定されているため、従順が犠牲を伴う時には特に、イエスに従いたいという気が殆ど起こりません。

この本の始めに書いたように、神が人間に与えた恵みは、人が負っている神に従う責任を軽減するものではありません。聖書は、救いは単に恵みによらず、信仰にもよると書いてあります（エペソ2:8参照）。恵みと信仰の両方が、救いには必要です。信仰は神の恵みに対する正しい応答であり、真の信仰はいつも悔い改めと従順をもたらします。行ないのない信仰は死んだものであり、役に立たず、救いには至らないと、ヤコブは言っています（ヤコブ2:14-26参照）。

それ故に、聖書は何度も日々の継続的な救いは、継続的な信仰と従順によると宣言しています。聖書の多くの箇所、このことを非常に明確にしています。例えば、パウロはコロサイにいる信者たちへの手紙の中でこう言っています。

あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵となって、悪い行

## 教えの務め

ないの中にあつたのですが、今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させていただきました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。ただし、あなたがたは、しっかりとした土台の上に堅く立って、すでに聞いた福音の望みからはずれることなく、信仰に踏みとどまらなければなりません。この福音は、天の下のすべての造られたものに宣べ伝えられているのであって、このパウロはそれに仕える者となったのです（コロサイ1:21-23、一部強調）。

これ以上明白には書けません。これでも、パウロの意図するものを間違えたり、捻じ曲げるのは神学者位でしょう。イエスは私たちを非難されるところのない者としてくださいましたが、それはもし私たちが信仰に踏みとどまっていればの話です。これと同じ真理が、ローマ11章13から24節、第一コリント15章1から2節、またヘブル3章12から14節と10章38から39節で繰り返し述べられています。それらの箇所ではっきりと、最終的な救いは、信仰の継続という条件付きであることが書かれています。全てに条件を表す「もし」という言葉が含まれています。

### 聖さの必要性 (The Necessity of Holiness)

信者は罪を犯すことによって、永遠の命を失い得るのでしょうか。答えは、以下に示す多くの聖書箇所に記載されており、それら全ては様々な罪を犯す者たちは神の国を相続できないことを保証しています。もしある信者が、パウロの次に挙げる罪の内容を行う方向へ戻ることが可能ならば、その信者は最終的な救いを失うことも可能です。

あなたがたは、正しくない者は神の国を相続できないことを、知らないのですか。だまされてはいけません。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、貪欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者はみな、神の国を相

## 弟子をつくる指導者

続することができません。（第一コリント 6:9-10、一部強調）

肉の行ないは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたにあらかじめ言っておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません（ガラテヤ 5:19-21、一部強調）。

あなたがたがよく見て知っているとおおり、不品行な者や、汚れた者や、むさぼる者・・・これが偶像礼拝者です。・・・こういう人はだれも、キリストと神との御国を相続することができません。むなしことばに、だまされてはいけません。こういう行ないのゆえに、神の怒りは不従順な子らに下るのです（エペソ 5:5-6、一部強調）

全ての事例で、パウロは信者に対して書き、警告していることに注意してください。パウロは、ここに挙げた罪を犯し続けながらも、神の国を相続できると思い違える信者が出てくることを懸念して、二度も信者に向かってだまされないようにと警告しました。

イエスは、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレの親しい四人の弟子たちに、イエスの再臨の準備ができていないために、地獄に落とされる可能性について警告しました。以下の言葉は、未信者の集団に対してではなく、これらの弟子たち向けに語られた（マルコ13:1-4参照）ことに注目してください。

だから、目をさましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られるか、知らないからです。しかし、このことは知っておきなさい。家の主人は、どろぼうが夜の何時に来ると知っていたら、目を見張っていたでしろうし、また、おめおめと自分の家に押し入ら

## 教えの務め

れはしなかったでしょう。だから、あなたがた[ペテロ、ヤコブ、ヨハネとアンデレ]も用心していなさい。なぜなら、人の子は、思いがけない時に来るのですから。

主人から、その家のしもべたちを任されて、食事時には彼らに食事をきちんと与えるような忠実な思慮深いしもべとは、いったいどれでしょうか。主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。まことに、あなたがたに告げます。その主人は彼に自分の全財産を任せようになります。ところが、それが悪いしもべで、『主人はまだまだ帰るまい。』と心の中で思い、その仲間を打ちたたき、酒飲みたちと飲んだり食べたりし始めていると、そのしもべの主人は、思いがけない日の思わぬ時間に帰って来ます。そして、彼をきびしく罰して、その報いを偽善者たちと同じにするに違いありません。しもべはそこで泣いて歯ざしりするのです（マタイ24:42-51、一部強調）。

ここでの教訓は何でしょうか。「ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、そしてアンデレよ。このたとえ話の不忠実なしもべのようになってはならない。」<sup>29</sup>

イエスが親しい弟子たちにちょうど言ったことを強調するために、イエスはすぐさま十人の娘のたとえ話をしました。十人の娘全員は、最初は花婿が来る準備ができていましたが、その内の五人は準備ができなくなり、婚礼の席からは外されました。イエスは、たとえ話を次の言葉で終わらせました。「だから、[ペテロ、ヤコブ、ヨ

---

<sup>29</sup> 29 驚いたことに、教師の中には、イエスが最も親しい弟子たちに対して警告したという事実と、不忠実なしもべは明確に信者のことを指しているという事実からは逃れられないものの、泣いて歯ざしりする場所は、天国の淵である、と言う者たちがいる。そこでは、建前上は、不忠実な信者が一時的に報いを受けられないことを悲しむ場所だが、やがてイエスが彼らの涙を拭いて、彼らを天国に迎える、と言う始末だ！

## 弟子をつくる指導者

ハネ、そしてアンデレよ。]目をさましていなさい。あなたがた[ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、そしてアンデレ]は、その日、その時を知らないからです（マタイ 25:13）。つまり、「[ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、そしてアンデレよ。]五人の愚かな娘たちのようになつてはならない。」もし、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレが準備できていない可能性が全くなかったのなら、ここでイエスが彼らを警告する必要はなかったはずで

す。イエスはそれからすぐにタラントの例えを彼らに話しました。内容は同じでした。「主人が帰って来た時に主人が任せたものを何も見せられなかった、一タラント預かったしもべのようになつてはならない。」たとえ話の最後に、主人は「役に立たぬしもべは、外の暗やみに追い出さなさい。そこで泣いて歯ぎしりするのです」（マタイ 25:30）と宣言しました。イエスはこれ以上彼の言いたいことを明確にはできないという程、明確にしました。この意味を捻じ曲げられるのは神学者位でしょう。ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレも皆、イエスが戻られる時に従順でなければ、地獄に落とされる危険がありました。もしペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレにそのような可能性があったのなら、私たちにも同じ可能性があります。イエスが約束したように、御父の御旨を行う者だけが、天の御国に入ります（マタイ7:21参照）。<sup>30</sup><sup>30</sup>

無条件の永遠なる保証、という間違つた教義を教える人たちは、イエスや使徒たちが教えたことと正反対のことを教えることで、明らかにキリストに反して働き、サタンに協力していることとなります。彼らは、イエスの命令に全て従う弟子をつくる、というイエスの命令を上手く無効にし、天への狭き道を妨げ、地獄への広い道を更に広げています。<sup>31</sup><sup>31</sup>

---

<sup>30</sup> 30 勿論、ひとつの罪を犯したからといって、すぐにクリスチャンが救いを失うわけではない。自分の罪の赦しを求める者は、（もし自分に対してなされた他の人の罪を許すなら）その人には神の赦しが与えられる。神の赦しを求めない人は、神に取り扱われる危険に自分の身を置くことになる。そして信者への神の絶え間ない取り扱いに対して、自分たちの心を固くするようなことがあるならば、救いを失う危険を冒すことになる。

<sup>31</sup> 31 クリスチャンが救いを失うことがあるということについて、いまだ納得のいかない人は、以下に挙げる新約聖書の箇所を全て考慮すべきである：マタイ 18:21-35; 24:4-5, 11-13, 23-26,



弟子づくりを駄目にする他の現代教義 (Another Modern Doctrine that Defeats  
Disciple-Making)

最終的な救いを得るのに聖さは特に必要ない、と人々を惑わしているのは、無条件の永遠なる保証という教えだけではありません。神の愛は、弟子づくりを無効にするやり方でよく伝えられています。説教者たちが聴衆に向かって、「神はあなたを無条件に愛しています」と言っているのを良く耳にするでしょう。それを聞いて人々は、「神は私を受け入れ、私が主に対して従順であろうとなかろうと、私を認めてくれた」と解釈しますが、それは絶対に真理ではありません。

それらの同じ説教者たちの多くは、生まれ変わりの体験のない者たちを神は地獄に落とすと信じていて、それは確かに正しいです。これについて考えてみましょう。当然、神が地獄へ落とす人々を神は義認していません。それなのに、どうして神はそのような人たちを愛している、ということが出来るのでしょうか。地獄に落とされる人たちは神によって愛されていますか。そのような人たちが、神は自分たちを愛している、とあなたに言うと思いますか。勿論そんなことはありません。神は彼らを愛していると言うのでしょうか。勿論、言いません！そのような人たちは神にとって忌まわしく、だからこそ地獄の報いを受けています。神はそのような人たちを義認していませんし、愛してもいません。

そうであるなら、地上の罪人たちに対する神の愛は、ほんの一時的な神のあわれ

---

42:51; 25:1-30; ルカ 8:11-15; 11:24-28; 12:42-46; ヨハネ 6:66-71; 8:31-32, 51; 15:1-6; 使徒 11:21-23; 14:21-22; ローマ 6:11-23; 8:12-14, 17; 11:20-22; 第一コリント 9:23-27; 10:1-21; 11:29-32; 15:1-2; 第二コリント 1:24; 11:2-4; 12:21-13:5; ガラテヤ 5:1-4; 6:7-9; ペリピ 2:12-16; 3:17-4:1; コロサイ 1:21-23; 2:4-8, 18-19; 第一テサロニケ 3:1-8; 第一テモテ 1:3-7, 18-20; 4:1-16; 5:5-6, 11-15, 6:9-12, 17-19, 20-21; 第二テモテ 2:11-18; 3:13-15; ヘブル 2:1-3; 3:6-19; 4:1-16, 5:8-9; 6:4-9, 10-20; 10:19-39; 12:1-17, 25-29; ヤコブ 1:12-16; 4:4-10; 5:19-20; 第二ペテロ 1:5-11; 2:1-22; 3:16-17; 第一ヨハネ 2:15-2:28; 5:16; 第二ヨハネ 6-9; ユダ 1:20-21; 黙示録 2:7, 10-11, 17-26; 3:4-5, 8-12, 14-22; 21:7-8; 22:18-19。無条件の永遠なる保証という教義を教える者たちが証拠として使う聖書箇所は、単に救いにおける神の忠実を強調するもので、人間の責任については何も触れていない。つまり、それらの箇所は、上記に挙げた聖書箇所と調和して解釈されるべきである。神は忠実なるお方という約束は、他の誰の忠実をも保証していない。私が私の妻に、彼女を見捨てないと約束し、その約束を守ることを約束したからと言って、妻が私を見捨てないという保証はどこにもないのと同じだ。

## 弟子をつくる指導者

みの愛であり、義と認める愛とは違う、ということになります。神は彼らを憐れんでおられ、神の裁きが下らないよう、彼らに悔い改めの機会を与えているのです。イエスは彼らのために死なれ、彼らが赦されるための道を備えました。その点においては、神は彼らを愛していると言えます。しかし、神は決して彼らを義認した訳ではありません。父がその子を慕うように、神が彼らに愛を感じることは決してありません。むしろ聖書には、「父がその子をあわれむように、主は、ご自分を恐れる者をあわれまれる」（詩篇103:13、一部強調）と書いてあります。従って、神はご自分を恐れない者には同じあわれみを注がないということが言えます。罪人への神の愛とは、どちらかと言うと、死刑に代わって無期懲役を宣告された殺人者が裁判官から受けたあわれみと似ています。

使徒の働きを見ても、福音を宣べ伝える者たちが、まだ救われていない聴衆に向かって、神がその人たちを愛していると言った場面は一つもありません。むしろ、聖書通りの説教者たちは、神の御怒りについて聴衆を警告し、神はまだ彼らを義と認めていないこと、彼らは今危機にあること、そして人生を劇的に変える必要があることを伝え、悔い改めを求めました。もし説教者たちが聴衆に向かって（現代の多くの指導者たちがしているように）神の愛だけを伝えていたのなら、聴衆を誤って導き、彼らが、自分たちは危機に瀕してはいない、神の御怒りを自分たちの上に積み上げてもない、悔い改めの必要をもない、と考えるようになっていたのに違いありません。

### 罪人への神の憎しみ (God's Hatred of Sinners)

今日罪人に対する神の愛がよく宣べ伝えられているのとは反対に、聖書は神は罪人を憎むと言っています。

誇り高ぶる者たちは御目の前に立つことはできません。あなたは不法を行なうすべての者を憎まれます。あなたは偽りを言う者どもを滅ぼされます。主は血を流す者と欺く者とを忌みきらわれます  
(詩篇5:5-6、一部強調)。

## 教えの務め

主は正しい者と悪者を調べる。そのみこころは、暴虐を好む者を憎む（詩篇11:5、一部強調）。

私は、私の家を捨て、私の相続地を見放し、私の心の愛するものを、敵の手中に渡した。私の相続地は、私にとって、林の中の獅子のようだ。これは私に向かって、うなり声をあげる。それで、私はこの地を憎む（エレミヤ 12:7-8、一部強調）。

彼らのすべての悪はギルガルにある。わたしはその所で彼らを憎んだ。彼らの悪い行ないのために、彼らをわたしの宮から追い出し、重ねて彼らを愛さない。その首長たちはみな頑迷な者だ（ホセア 9:15、一部強調）。

上記の箇所のは、神が人々がすることを憎むだけでなく、彼らを憎んでいることに注意してください。これは神は罪人を愛し、罪を憎むという決まり文句について一石を投じます。私たちは、人をその人がすることから分離できません。その人がすることはその人がどんな者かを表しています。つまり、神は人が犯す罪だけでなく、罪を犯す人をも正しく憎むのです。もし神が、神が忌み嫌うことをする人たちを義と認めるのなら、神ご自身に一貫性がなくなってしまう。裁判でも、人の犯した罪過によってその人が告発されるのであり、その人が正しい裁きを受けるのです。私たちは犯罪ではなく、犯罪を犯す者が義と認められることを憎みます。

### 神が忌み嫌う人たち (People Whom God Abhors)

神が特定の個人を嫌がるのが聖書で明らかとなっているだけでなく、神はある種の罪深い人々を忌み嫌い、もしくは強い嫌悪感を抱いていることを聖書は示しています。もう一度念を押しますが、次に挙げる聖句の抜粋はそれらの人々のすることが神の嫌悪の対象ではなく、それらの人々自身がそうなのです。聖書は、神は彼らの罪

## 弟子をつくる指導者

を忌み嫌うとは書いておらず、彼らを忌み嫌うと書いてあります。<sup>32</sup>32

女は男の衣装を身に着けてはならない。また男は女の着物を着てはならない。すべてこのようなことをする者を、あなたの神、主は忌みきらわれる（申命記 22:5、一部強調）。

すべてこのようなことをなし、不正をする者を、あなたの神、主は忌みきらわれる（申命記 25:16、一部強調）。

あなたがたは自分たちの息子の肉を食べ、自分たちの娘の肉を食べる。わたしはあなたがたの高き所をこぼち、香の台を切り倒し、偶像の死体の上に、あなたがたの死体を積み上げる。わたしはあなたがたを忌みきらう（レビ記 26:29-30、一部強調）。

誇り高ぶる者たちは御目の前に立つことはできません。あなたは不法を行なうすべての者を憎まれます。あなたは偽りを言う者どもを滅ぼされます。主は血を流す者と欺く者とを忌みきらわれます（詩篇 5:5-6、一部強調）。

主は、よこしまな者を忌みきらい、直ぐな者と親しくされるからだ（箴言 3:32、一部強調）。

---

<sup>32</sup> 32 これらの、神は罪人を憎み、忌み嫌っていることを示す聖書箇所が、全て旧約聖書から来ているという点で異議を唱えられるかもしれない。しかし、神の罪人に対する態度は旧約から新約へ移っても変わってはいない。マタイ 15 章 22 から 28 節にあるカナン人の女に遭遇するイエスの話は、新約聖書にある神の罪人に対する態度の例として優れたものである。まずイエスは、彼女の懇願に応じることさえしなかった。イエスは彼女を犬とまで呼んだ。彼女の粘り強い信仰は、イエスが彼女に対してあわれみを見せるに至らせた。律法学者やパリサイ人へのイエスの態度は、愛を表しているとは殆ど考えられない（マタイ 23 章参照）。

## 教えの務め

心の曲がった者は主に忌みきらわれる。しかしまっすぐに道を歩む者は主に喜ばれる（箴言 11:20、一部強調）。

主はすべて心おごる者を忌みきらわれる。確かに、この者は罰を免れない（箴言 16:5、一部強調）。

悪者を正しいと認め、正しい者を悪いとする、この二つを、主は忌みきらう（箴言 17:15、一部強調）。

このような聖書箇所と、罪人に対する神の愛を支持する聖書のみことばを、どのように調和して捉えるべきなのでしょう。神は罪人を忌み嫌い、憎むが、神はまた彼らを愛するなど、どうして言えましょうか。

愛は全て同じではないことに気づかなくてはなりません。愛には無条件なものもあります。それは「あわれみの愛」と呼ばれることもあります。そのような愛は、「それでもあなたを愛する」と言っています。それは、人々の取る行動に関わらず、人々を愛します。神が罪人に対して持つ愛の種類はまさにこれです。

あわれみの愛に対して、条件付きの愛というものもあります。これは、「義認の愛」と呼ばれることもあります。そのような愛は、努力することで得るに値するものです。それは、「それだからあなたを愛する」と言っています。

条件付きの愛となると、全く愛ではないと考える人もいます。もしくは、そのような愛をけなして、全く自分勝手に、神の愛らしくない、と言います。

しかし、真理は、神は条件付きの愛をお持ちだということです。これについては、これから聖書の中で見て行くことにしましょう。従って、義認の愛を嘲笑うべきではありません。義認の愛こそ、神が真の神の子供たちに持つ最も重要な愛なのです。私たちは神のあわれみの愛よりも、神の義認の愛をもっと求めるべきです。

### 義認の愛は劣った愛なのか (Is Approving Love an Inferior Love?)

ここで少し立ち止まって、この質問について考えてみてください。「どちらの種

## 弟子をつくる指導者

類の愛を自分は人から得たいだろうか。あわれみの愛か、それとも義認の愛か。」当然、あなた「だから」という愛の方が、あなた「だけど」という愛よりも好まれるでしょう。

あなたの配偶者に、「私があなただを愛する理由は何もありません。私の愛をあなたに表したいと思わせることが、あなたには何もありません。」と言われるのと、「あなたを数多くの理由で愛します。私はあなたについて、本当に沢山のことを称賛しているから。」と言われるのは、どちらがいいですか。当然、私たちは自分の配偶者から、義認の愛を持って愛して欲しいですし、そのような愛こそ二人を引き寄せ、一つに保たせる一番大切な愛です。人が自分の配偶者を称賛できる点が一つもなく、義認の愛がもうなくなってしまった時、そのような結婚は続きません。もし続いているのなら、あわれみの愛のお陰であり、その愛はそれを与える方の神性に根差しています。

そうであるのなら、義認または条件付きの愛が何か劣った愛のように考えることは全くの間違いであることがわかつて思ひます。あわれみの愛は与えることに最も称賛を受ける愛であり、義認の愛はそれを獲得する時に最も称賛を受ける愛です。更に、義認の愛こそ、御父がイエスに対して持つ唯一の愛の種類であったという事実は、この愛を称賛に受けるにふさわしい所へと高めます。父なる神は、イエスに対してあわれみの愛を注いだことは一度もありません。なぜなら、キリストには何一つ嫌なところがなかったからです。イエスはこう証しました。

わたしが自分のいのちを再び得るために自分のいのちを捨てるか

らこそ、父はわたしを愛して下さいます（ヨハネ10:17、一部強調）。

つまり、御父はイエスが死にまでも従順であった故に、イエスを愛したことがわかります。義認の愛に間違いはなく、その愛について全ては正しいに違いありません。イエスは御父の愛を獲得し、また受けるに値しました。

イエスはまた、御父の命令を守ることで、その愛に留まるようにも言いました。

父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。

## 教えの務め

わたしの愛の中にとどまりなさい。もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです。それは、わたしがわたしの父の戒めを守って、わたしの父の愛の中にとどまっているのと同じです（ヨハネ 15:9-10、一部強調）。

更に、この箇所ですす通り、私たちはイエスの模範に従うべきであり、イエスの命令を守ることで、その愛に留まるべきです。イエスはここで明確に義認の愛について語っており、私たちはその愛を獲得でき、またすべきであることを教えると同時に、私たちはイエスの命令に対する不従順によって、自分自身がその愛から離れてしまい得ることも教えています。もしイエスの命令を守るならば、それによってのみ私たちはイエスの愛の中にとどまります。そのようなことは今日あまり教わりませんが、それはイエスが言ったことなので教わるべきです。

イエスは、イエスの命令を守る人たちにのみ、神の義認の愛を約束しました。

それはあなたがたがわたしを愛し、また、わたしを神から出て来た者と信じたので、父ご自身があなたがたを愛しておられるからです（ヨハネ16:27、一部強調）。

わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛する人です。わたしを愛する人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身を彼に現わします。...イエスは彼に答えられた。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます」（ヨハネ14:21, 23、一部強調）。

二つ目の抜粋箇所、イエスは献身的でない信者に対して、イエスの言葉を守り始めれば、神が特別な方法でその人たちをイエスに近づけてくださる、という約束はしてはいないことに注意してください。そうではなく、イエスが約束しているのは、誰でもイエスを愛し、その言葉を守り始めるなら、御父はその人を愛し、イエスと御

## 弟子をつくる指導者

父の両方がその人の中に住まわれることであり、つまりこれは生まれ変わりの体験について明確に表しています。誰でも新しく生まれ変わるなら、その人の内に、内住の聖霊によって、御父と御子の両方が住んでおられるのです(ローマ8:9参照)。従って、本当に生まれ変わった人たちというのは、悔い改め、イエスに従い出した人たちであり、そのような人たちだけが御父の義認の愛を得る、ということがここでもわかります。

勿論、イエスはイエスを信じる者にあわれみの愛もまだ残してあります。信者が従わない時も、もし彼らが自分の罪を告白し、また他人を許すのなら、イエスは彼らを赦すつもりです。

## 結論 (The Conclusion)

これらを通して言えることは、神の従順な子供たちへの愛と、神の罪人たちへの愛は異なる、ということです。神は罪人をあわれみの愛でのみ愛します。その愛は一時的であり、その人たちが死ぬまでしか持ちません。神は彼らをあわれみの愛で愛すると同時に、罪人の人格を神が義認できないことから生じる嫌悪を持って、神は罪人を憎みます。これが聖書が教えていることです。

一方で、神はその子供たちを、生まれ変わりの体験のない人たちよりもずっと愛しておられます。神の子供たちは悔い改め、その命令に従うために努力を惜しまないので、神はその子供たちを第一にその義認の愛をもって愛します。神の子供たちが聖なる者として成長すると、あわれみの愛によって愛する理由がどんどん少なくなっていく、義認の愛で愛する理由がどんどん増えていきますが、これこそ神の子供たちの心の願いなのです。

このことはまた、現代の説教者や教師たちが描写する神の愛の多くは正確ではなく、人々を誤った方向へ導くことを物語っています。聖書が言うことを踏まえて、神の愛に関して良く言われている次の事柄を時間を取って考えてみてください。

1.) 神が今あなたを愛しておられる、それ以上もしくはそれ以下に、神に愛されるためにあなたができることは何もない



## 教えの務め

2.) あなたがしたことによって、神があなたを愛さなくなるようなことはあり得ない

3.) 神の愛は無条件である

4.) 神は全ての人を同じように愛している

5.) 神は罪人を愛し、罪を憎む

6.) 神の愛を獲得したり、受けるに値するために、あなたができることは何もない

7.) 神の私たちへの愛は、私たちの行ないによるものではない

上記の全ての記述は、誤った導きを与えるか、もしくは全くの誤りです。なぜなら、上記の殆どが神の義認の愛について完全に否定しており、また多くは神のあわれみの愛について不正確に伝えているからです。

(1)については、神が信者を、更に義と認めて愛するようになることを可能とする、信者ができる何かがあります。つまり、もっと従順になることです。そして、神がより少なく義と認めて愛するようにさせる何かもあります。つまり、不従順です。罪人にとって、神にもっと愛されるために、自分のできることがあります。つまり、悔い改めです。そうすれば、彼らは神の義認の愛を得られます。また、神が自分たちを、より愛さなくなるために、罪人にできることがあります。つまり、死です。死によって、彼らが神から受けていた唯一の愛である、あわれみの愛を失います。

(2)については、クリスチャンは罪の行ないに戻ることで、神の義認の愛を失い、神のあわれみの愛だけを経験することになることは可能です。そして、未信者の場合は、再び言いますが、死んだらその人たちに注がれていた唯一の神の愛である神のあわれみの愛はなくなります。

(3)については、神の義認の愛は当然条件付きです。神のあわれみの愛ですら、その人が身体的に生きているという条件があります。死後、神のあわれみの愛も終わるという一時的なものなので、これは条件付きです。

(4)については、神は皆を同じようには愛さない可能性が高いです。なぜなら、神

## 弟子をつくる指導者

は、罪人も聖徒たちも同様に、皆を様々な異なる程度によって、義認しなかったり、義認したりします。神の愛は、罪人と聖徒に対してでは違うことは確かです。

(5)については、神は罪人とその人たちの罪を憎みます。神は罪人をあわれみの愛で愛し、彼らの罪を憎むと言う方が良いかもしれません。神の義認の愛の観点から言うと、神は罪人を憎みます。

(6)については、誰でも神の義認の愛を得ることができ、また皆それを得るべきです。勿論、神のあわれみの愛は、無条件であるため、誰もそれを得ることはできません。

最後に(7)については、神のあわれみの愛は、行ないによるものではありませんが、義認の愛は確かにそうです。

これら全てから言えることは、弟子づくりをする指導者は、誰をも騙さないように、神の愛を聖書通り、正確に表すべきだということです。神が義と認めて愛する者だけが天国に入り、神は、生まれ変わってイエスに従う者だけを、義認して愛します。弟子をつくる指導者は、人々に聖さから離れさせることを決して教えるべきではありません。弟子をつくる指導者の目標は神のものと同じで、それは、キリストの命令に全て従う弟子をつくることです。

## 第七章

### 聖書の解釈 (Biblical Interpretation)

パウロはテモテにこう書きました。

自分自身にも、教える事にも、よく気をつけなさい。あくまでそれを続けなさい。そうすれば、自分自身をも、またあなたの教えを聞く人たちをも救うことになります (第一テモテ 4:16、一部強調)。

全ての指導者はこの忠告を心に受け止め、まず最初に敬虔な模範を示せるように、自分自身に気を付けるべきです。

次に、指導者は教える事にも注意を払うべきです。なぜなら、指導者の永遠の救いも、その聴衆の永遠の救いも、パウロが上記の聖書の箇所です。33もし指導者が間違った教義にこだわったり、真理を人々に語ることをしていないのなら、結果はその指導者にとっても、他の人たちにとっても永遠に悲惨なものになりかねません。

しかし神は、弟子をつくる指導者を真理へと導く為に聖霊とみことばを既に与えているので、その指導者が偽教義を教えることには言い訳はありません。反対に、間違った動機を持つ指導者はよく、自分自身のみことばを学ぶことなく、他人による人

---

<sup>33</sup> 33 明らかに、パウロは無条件の永遠なる保証を信じていなかった。そうでなければ、パウロは救われているテモテに向かって、救いを確実にするために何かしなくてはならないとは言わなかったであろう。

## 弟子をつくる指導者

気の教えを単に真似ているだけのことが多く、その教義や教えによってつまり傾向があります。このようなことから守られる方法は、指導者は心を聖め、自分の動機が次のようであるかを確かめることです。(1) 神を喜ばすこと、そして、(2) 人々に、個人的な富、力、名声を得ることよりもむしろ、イエスの御前に立つ準備をさせることです。更に、みことばに対して深くバランスのとれた理解を持てるように、神のみことばを熱心に学ばなくてはなりません。パウロはテモテにこうも書きました。

あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい（第二テモテ 2:15）。

神のみことばを読んで、勉強し、瞑想することは、指導者が継続的に行う訓練であるべきです。聖霊は、指導者が熱心に勉強すれば、神のみことばを更に理解できるよう助けてくださり、「真理のみことばをまっすぐに説き明かす」ようにして下さいます。今日の教会で最も大きな問題のひとつは、神のみことばを誤って解釈し、結果として教わった民は誤った方向へ導かれることです。これはかなり深刻なことです。ヤコブはこう警告しています。

私の兄弟たち。多くの者が教師になってはいけません。ご承知のように、私たち教師は、格別きびしいさばきを受けるのです（ヤコブ 3:1）。

このために、弟子をつくる指導者が、聖書のどんな箇所でも、その与えられている意味を正確に理解し、人に伝えるという目標をもって、神のみことばの正しい解釈の仕方を知ることは必要不可欠です。

神のみことばの正しい解釈は、他の誰の言葉でも、それを正しく解釈するために行う同じ方法でなされます。もし私たちがある著者や話し手の意図を正確に理解したいなら、私たちは解釈上の法則、つまり常識に基づいた法則を適用しなくてはなりません。この章では、理にかなった聖書の解釈のための最も大切な三つの法則について見ていきます。それらは、(1)理にかなった読み方をする、(2)文脈を読む、(3)正直に

読む、ということです。

**第一の法則** 理にかなった読み方をする。比喩的または象徴的に理解されるように意図されていることが明らかでなければ、読んだものを文字通り解釈する。

聖書は、あらゆる文学と同様、**隠喩**、**誇張**、**擬人**といった比喩的表現が沢山含まれています。それらはそのようなものとして捉えられるべきです。

**隠喩**とは、二つの基本的に異なるものの類似点を比較することです。聖書には沢山の隠喩が含まれます。一つは、最後の晩餐でのイエスの言葉の中にあります。

また、彼らが食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福した後、これを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取って食べなさい。これはわたしのからだです。」 また杯を取り、感謝をささげて後、こう言って彼らにお与えになった。「みな、この杯から飲みなさい。これは、わたしの契約の血です。罪を赦すために多くの人のために流されるものです（マタイ26:26-28）。

イエスは、弟子たちに与えるパンは、文字通りイエスの体で、弟子たちが飲むワインは文字通りイエスの血を意味していたのでしょうか。常識がそうではないと私たちに教えます。聖書は、イエスが弟子たちに与えたものはパンとワインだったことがはっきりと言っています。聖書はそれらが、文字通り、どこかの地点で体と血に変わるとは一言も言っていません。ペテロもヨハネも、最後の晩餐に居合わせていましたが、そのようなことが起きたことは彼らの使徒書簡に一切記録はなく、また弟子たちが人食い人種の役を演じて、気楽に楽しんでいたとはとても考え難いです！

ある人は、「しかしイエスはパンと杯は、イエスの体と血潮だと言ったのだから、私はイエスの言ったことを信じます！」と反論します。

イエスはかつて、自分は門であるとも言いました（ヨハネ10:9参照）。イエスは文字通り、ヒンジと取っ手のついた門になったのでしょうか。イエスはかつて、自分はぶどうの木であり、私たちは枝であるとも言いました（ヨハネ15:5参照）。イエスは文字通り、ぶどうの木となったのでしょうか。私たちは文字通りその枝となったの

## 弟子をつくる指導者

でしょうか。イエスはかつて、自分は世の光であり、天から下ったパンであると言いました（ヨハネ9:5; 6:41参照）。イエスは日光になり、また一斤のパンにもなったのでしょうか。

当然、これら全ては隠喩と呼ばれる比喩的な表現であり、二つの基本的に異なるものが共通して持ついくつかの類似点を比較しているに過ぎません。ある意味、イエスは門のようであり、ぶどうの木のようにです。イエスが最後の晩餐で言った言葉も、明白に隠喩であります。ワインは（ある意味）イエスの血のようであり、パンは（ある意味）イエスの体のようです。

### キリストのたとえ話（Christ's Parables）

キリストのたとえ話は直喩であり、それは隠喩と同じですが、直喩はいつも、のようだという言葉が含まれます。たとえ話もまた、本質的に異なる二つのことの類似点を比較しながら、霊的なことを教えています。これは、たとえ話を解釈する上で覚えておくべき重要な点です。そうでないと、全てのたとえ話の些細な詳細に重要性を見出す、という間違いを犯しかねません。隠喩も直喩も、いつも類似点が終わり、相違点が始まる所に辿り着きます。例えば、もし私が私の妻に、「あなたの目はプールのように」と言う時、私は彼女の目が青く、深みがあり、魅力的であることを意味します。そこで魚が泳いでいるだとか、鳥が休んでいるだとか、冬に氷で覆われるとかいう事を意味しません。

イエスの三つのたとえ話を見ていきましょう。全ては直喩であり、最初は地引き網のたとえです。

また、天の御国は、海におろしてあらゆる種類の魚を集める地引き網のようなものです。網がいっぱいになると岸に引き上げ、すわり込んで、良いものは器に入れ、悪いものは捨てるのです。この世の終わりにもそのようになります。御使いたちが来て、正しい者の中から悪い者をえり分け、火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ぎしりするのです（マタイ13:47-50）。

## 聖書の解釈

天の御国と地引き網とは基本的に同じでしょうか。絶対にそんなことはありません。それらは全く異なるものですが、少しだけ類似点があります。魚は評価され、好ましいものと好ましくないものとの二つに分類されるように、神の御国でもそのようです。悪人と正しい者が今は一緒に住んでいますが、そのうち分けられます。しかし、そこで類似点が終わります。魚は泳ぎ、人間は歩きます。漁師は魚を分類し、天使は悪者たちを正しい者たちから分けます。魚は、料理されてからそれがどれだけ美味しいかで評価されます。人も神への従順、不従順で裁かれます。良い魚は入れ物に入れられ、悪い魚は捨てられます。正しい人は神の御国を受け継ぎ、悪者は地獄へ落とされます。

このたとえ話は、全ての隠喩と直喩は、比較の対象となる事柄が基本的に異なるので、最終的には不完全な比較である、ということを表す良い例です。相違点か実は類似点であると考えて、話し手の意図するところを私たちは超えたくはありません。例えば、「良い魚」は実際は最後に火で調理され食べられてしまい、「悪い魚」は水に戻され、まだ泳いでいられたことは想像が付きません。しかし、イエスはそのことを言いませんでした！そのような指摘は、イエスの目的に反してしまいます。

ここで挙げたたとえ話は、（よく耳にしますが、）良い人も悪い人も、その人たちの教会に来る意思があるかないかに関わらず、誰でも教会に引きずり込もうとする「地引き網伝道」の策略を教えるべきではありません！このたとえ話は、伝道するのに最適な場所は海岸だとも教えるべきではありません。このたとえ話は、大患難の最後に、教会を携挙があることの証拠でもありません。また、たとえ話の魚は、その魚自体に選ばれた理由がある訳ではないので、私たちの救いも、ただ神の最高権力の下で決められる、ということも教えるべきではありません。イエスのたとえ話に、何の根拠もない意味を押し付けないでください！

### いつも備えていること (Remaining Ready)

ここではイエスの良く知られている他のたとえ話、十人の娘の話を持ち上げます。

そこで、天の御国は、たとえて言えば、それぞれがともしびを持つ

## 弟子をつくる指導者

て、花婿を出迎える十人の娘のようです。そのうち五人は愚かで、五人は賢かった。愚かな娘たちは、ともしびは持っていたが、油を用意しておかなかった。賢い娘たちは、自分のともしびといっしょに、入れ物に油を入れて持っていた。花婿が来るのが遅れたので、みな、うとうとして眠り始めた。ところが、夜中になって、『そら、花婿だ。迎えに出よ。』と叫ぶ声がした。娘たちは、みな起きて、自分のともしびを整えた。ところが愚かな娘たちは、賢い娘たちに言った。『油を少し私たちに分けてください。私たちのともしびは消えそうです。』しかし、賢い娘たちは答えて言った。『いいえ、あなたがたに分けてあげるにはどうも足りません。それよりも店に行って、自分のをお買いなさい。』そこで、買いに行くとき、その間に花婿が来た。用意のできていた娘たちは、彼といっしょに婚礼の祝宴に行き、戸がしめられた。そのあとで、ほかの娘たちも来て、『ご主人さま、ご主人さま。あけてください。』と言った。しかし、彼は答えて、『確かなところ、私はあなたがたを知りません。』と言った。だから、目をさましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないからです(マタイ25:1-13)。

このたとえ話から学ぶ一番大切なこととは一体何でしょう。それは一番最後の文にあります。主の再臨にいつも備えていなさい。なぜなら、主はあなたが思っているよりも遅くなるかもしれないからです。ただそれだけです。

前章で述べたように、イエスはこのたとえ話を、当時イエスに明らかに従順に従っていた最も親しい弟子たちの何人かに話しました(マタイ24:3; マルコ13:3参照)。このたとえ話は非常に明らかに、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレがイエスが再び戻られる時に備えられていない可能性があることを示唆しています。だから、イエスは彼らに警告していました。つまり、このたとえ話は、現在キリストの再臨に備えられている人たちでも、キリストが実際この地上に戻られる時にそうでないかもしれな



## 聖書の解釈

い可能性があると教えています。十人全ての娘は最初は準備ができていましたが、その内の五人はそうでなくなりました。花婿がもっと早く来ていれば、十人全員が婚礼の祝宴に入れていたでしょう。

愚かな娘たちと賢い娘たちが五人ずついたことの意味は何でしょうか。キリストの再臨の際に、現在自分はクリスチャンであると明言する人たちの半分しか用意ができていないことを証明するのでしょうか。違います。

油の意味は何でしょうか。聖霊を表すのでしょうか。いいえ、違います。聖霊のバプテスマを受けた人だけが天国へ行けることを私たちに示しているのでしょうか。これも違います。

夜中に花婿が来たことは、イエスの再臨も夜中にあることを示しているのでしょうか。違います。

なぜ花婿は賢い娘たちに、戸の外にいる愚かの友人たちが誰なのか聞かなかったのでしょうか。もし花婿が賢い娘たちに愚かな娘たちが誰かを尋ねていたら、愚かの娘たちも最終的には祝宴に入れてしまい、このたとえ話から導きたい要点の全てを無効としてしまっていたことでしょう。

おそらく、愚かな娘たちがともしびを失い、眠りについたように、愚かな信者も霊的な暗やみを歩き始め、霊的に眠ってしまうために、最終的には自分自身が罪に定められてしまう、と言えるかもしれません。おそらく、結婚の披露宴のたとえや小羊の婚宴のたとえに類似点を見い出すこともできるでしょうが、その場合は、このたとえ話やその様々な詳細に無理と意味を押し付けない範囲でなければなりません。

### 実らせる (Bearing Fruit)

おそらく、キリストのたとえ話のひとつについて、今まで聞いた中で全く最悪な解釈は、ある説教者が施した、麦と毒麦のたとえ話についての説明です。まずは、そのたとえ話を読んでみましょう。

イエスは、また別のたとえを彼らに示して言われた。「天の御国は、

## 弟子をつくる指導者

こういう人にたとえることができます。ある人が自分の畑に良い種を蒔いた。ところが、人々の眠っている間に、彼の敵が来て麦の中に毒麦を蒔いて行った。麦が芽生え、やがて実ったとき、毒麦も現われた。それで、その家の主人のしもべたちが来て言った。

『ご主人。畑には良い麦を蒔かれたのではありませんか。どうして毒麦が出たのでしょうか。』主人は言った。『敵のやったことです。』すると、しもべたちは言った。『では、私たちが行ってそれを抜き集めましょうか。』だが、主人は言った。『いやいや。毒麦を抜き集めるうちに、麦もいっしょに抜き取るかもしれない。だから、収穫まで、両方とも育つままにしておきなさい。収穫の時期になったら、私は刈る人たちに、まず、毒麦を集め、焼くために束にしなさい。麦のほうは、集めて私の倉に納めなさい、と言いましょ』  
(マタイ13:24-30)。

これがその説教者の説明です。

麦と毒麦が芽を出すと、両方似ています。誰もそれが麦なのか、毒麦なのか見分けられません。世と教会も全くそのようなものです。真のクリスチャンと未信者は見分けが付きません。彼らの生き方を見て、見分けるということもできません。というのは、多くのクリスチャンはもはや未信者よりもキリストに従順ではないからです。

神のみがその人の心を知り、最後に神が彼らを振り分けます。

これは、勿論、麦と毒麦のたとえ話の要点ではありません！実際には、そのたとえは、信者と未信者は本当にはっきりと区別がつくことを教えています。しもべたちは、毒麦が出た時に毒麦が蒔かれていたことに気づいたことに注目してください(26節参照)。毒麦は何も実を結びません。それで毒麦であると簡単に見分けられるのです。イエスはあえて実りのない毒麦を最後に集められ、地獄に落とされる悪者たちの象徴として選んだことに、私は意味があるように思います。

## 聖書の解釈

このたとえ話の一番大切な要点は、簡単です。つまり、真に救われている者には実りがあり、救われていない者にはありません。神は悪者をまだ裁いてはおらず、彼らは救われている者たちの間に生きていますが、いつか神は彼らをその義人たちと区別して、地獄へ投げ落とします。

イエスは実際このたとえ話の説明をしてくださり、従って誰もその説明を超えて、何か重要性を求める必要はありません。

それから、イエスは群衆と別れて家にはいられた。すると、弟子たちがみもとに来て、「畑の毒麦のたとえを説明してください。」と言った。イエスは答えてこう言われた。「良い種を蒔く者は人の子です。畑はこの世界のこと、良い種とは御国の子どもたち、毒麦とは悪い者の子どもたちのことです。毒麦を蒔いた敵は悪魔であり、収穫とはこの世の終わりのことです。そして、刈り手とは御使いたちのことです。ですから、毒麦が集められて火で焼かれるように、この世の終わりにもそのようになります。人の子はその御使いたちを遣わします。彼らは、つまずきを与える者や不法を行なう者たちをみな、御国から取り集めて、火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ぎしりするのです。そのとき、正しい者たちは、天の父の御国で太陽のように輝きます。耳のある者は聞きなさい（マタイ 13:36-43）。

### 誇張法 (Hyperbole)

聖書でよく見られる比喩的表現法の二つ目は、誇張法です。誇張法は、強調のためにわざと大げさな表現を使うことです。母親が子供に、「夕飯だから帰って来なさいと、あなたのことを、もう何千回も呼んだわよ」という時、これは誇張法を用いた表現です。聖書での誇張法の一つの例は、右の手を切って捨てるというイエスの発言です。

もし、右の手があなたをつまずかせるなら、切って、捨ててしまい

## 弟子をつくる指導者

なさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに落ちるよりは、よいからです。（マタイ5:30）

イエスが文字通り、私たちの誰でも、右の手を使って何かしらの罪を犯す時、その手を切り落とさなくてはならないのなら、私たち全員右手を失っていることでしょう！もちろん、罪の問題は、私たちの手にはありません。ここでイエスは、私たちに、罪が私たちを地獄に送ることができる、また、罪を避ける方法は、私たちを誘惑するものやつまずかせるものを除くことである、と教えていたに違いありません。

### 擬人法 (Anthropomorphism)

聖書を読んでいると遭遇する比喩的表現法の三つ目は、擬人法です。擬人法とは、私たちが神を理解しやすくするために、人間の特性を神にもあるように見なした比喩的表現です。例えば、創世記11章5節を読みましょう。

そのとき主は人間の建てた町と塔をご覧になるために降りて来られた（創世記11:5）。

全知なる神が、人々が何を建てているのか調査するために、文字通り、天からバベルに降りて来られたとは考え難いので、これはおそらく擬人法を用いているということになります。

多くの聖書学者は、神の腕、手、鼻、目、髪の毛といった神の体の部位を表す聖書中の記述を擬人法と捉えます。全能なる神が、人間のような部位を実際持っていないのは確かだ、と彼らは言います。

しかし、私は多くの理由から、それには反対です。まず最初に、聖書は明白に私たちは神に似せて作られたと教えているからです。

そして神は、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう...」と仰せられた（創世記1:26、一部強調）。

私たちは自己認識、モラル的責任感、理論的な思考力、等を持っているという点においてのみ、神に似せられたかたちに作られたという人たちもいます。しかし、創世記一章二十六節にとっても似た箇所が、その数章後に出てきますが、その箇所を讀ん

でみましょう。

アダムは、百三十年生きて、彼に似た、彼のかたちどおりの子を生んだ。彼はその子をセツと名づけた（創世記5:3、一部強調）。

ここでは、セツが彼の父親に見た目がそっくりだったという意味であることは確かです。創世記五章三節が意味していることがそうなら、創世記一章二十六節にある同じような表現も、同様のことを意味していたに違いありません。常識と理にかなった解釈によると、そうであると言っています。

更に、神を見た聖書の著者による、神の描写が聖書の中にはあります。例えば、モーセ他七十三人のイスラエル人は神を見ました。

それからモーセとアロン、ナダブとアビフ、それにイスラエルの長老七十人は上って行った。そうして、彼らはイスラエルの神を仰ぎ見た。御足の下にはサファイヤを敷いたようなものがあり、透き通っていて青空のようであった。神はイスラエル人の指導者たちに手を下されなかったので、彼らは神を見、しかも飲み食いをした（出エジプト24:9-11）。

もしモーセに神には手や足があったか尋ねるなら、モーセは何と答えたでしょうか。<sup>34</sup>

預言者ダニエルもまた、神の幻、御父と御子なる神を見ました。

私が見ていると、幾つかの御座が備えられ、年を経た方[御父なる神]が座に着かれた。その衣は雪のように白く、頭の毛は混じりけのない羊の毛のようであった。御座は火の炎、その車輪は燃える火で、火の流れがこの方の前から流れ出ていた。幾千のものがこの方に仕え、幾万のものがその前に立っていた。さばく方が座に着き、幾つかの文書が開かれた。...私がまた、夜の幻を見ていると、見

---

<sup>34</sup> 34 モーセはまた、かつて神が「通り過ぎる」時、神のうしろを見た。神は御手でモーセをおおい、御顔をモーセに見られないようにした。出エジプト 33:18-23 参照。

## 弟子をつくる指導者

よ、人の子[御子なる神]のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない（ダニエル7:9-10, 13-14）。

もしダニエルに神には白い毛があり、御座に座ることができる姿を持っていたのかと尋ねたら、ダニエルは何と答えたでしょうか。

これらのことがその通りであるなら、私は御父なる神の御姿は栄光に満ちた、何となく人間の形に似たもので、しかし血や肉からはできておらず、それは霊であるということに納得します（ヨハネ4:24参照）。

聖書のどの部分が文字通り解釈され、どの部分が比喩的もしくは象徴的に解釈されるのか、一体どのようにして見分けられるのでしょうか。それは、論理的に理由づけられる人なら誰でも簡単なはずですが、もしも書かれていることを比喩的もしくは象徴的に解釈するしか、他に理にかなった解釈がない、という場合を除いては、全てを文字通り解釈すべきです。例えば、旧約聖書の預言書や黙示録は、明白に象徴的な描写で溢れています。その内説明されているものもあれば、そうでないものもあります。しかし、象徴的な描写を見分けることは難しくありません。

**第二の法則 文脈を読む。**各文はその周辺及び聖書全体を考慮して解釈されなければならない。歴史的及び文化的背景も、可能な限り考慮に入れるべきである。

聖書を読む時、その前後や全体の文脈を考慮に入れないことが、誤った解釈を生む恐らく一番の原因でしょう。

ある聖書箇所をその文脈から切り離して考えるなら、自分が好きなように解釈できてしまいます。例えば、聖書は神は存在しないと言っていることをご存知でしたか。詩篇十四篇に、「神はいない」（詩篇14:1）と書いてあります。しかし、私たちがその言葉を正確に解釈したいのなら、その前後も読まなくてはなりません。「愚か者は心の中で、「神はいない。」と言っている」（詩篇14:1、一部強調）。これで、この

## 聖書の解釈

箇所が全く違った意味を持つようになります！

別の例はこれです。かつて説教者が、クリスチャンは「火のバプテスマ」を受け  
る必要があるという説教をしているのを、私は聞いたことがあります。その人は、洗  
礼者ヨハネの言葉であるマタイ三章十一節、「私は、あなたがたが悔い改めるために、  
水のバプテスマを授けていますが、私のあとから来られる方は、私よりもさらに力の  
ある方です。私はその方のはきものを脱がせてあげる値うちもありません。その方は、  
あなたがたに聖霊と火とのバプテスマをお授けになります。」を読むことから説教  
を始めました。

この一節に基づいて、その人は説教を組み立てました。私はその人が「あなたは  
聖霊のバプテスマを受けているからといって、それで十分ではありません！洗礼者ヨ  
ハネが宣言した通り、イエスはあなたに火のバプテスマも授けたいと望んでおられま  
す。」と言っていたのを思い出します。その人は、一度私たちが火のバプテスマを受  
ければ、主に仕える熱心で溢れるようになるでしょうと、続けて説明しました。

残念ながら、その説教者はひとつの節をその文脈から離して解釈するという典型  
的な間違いをしてしまいました。

イエスが火のバプテスマを受けると洗礼者ヨハネが言った時、彼は一体何を意味  
していたのでしょうか。答えを見つけるためにしなくてはいけないことは、私たちは  
皆、その節の二つ前と一つ後の節も読むことです。では、前の二節から読んでみま  
しょう。ヨハネはこう言いました。

『われわれの先祖はアブラハムだ。』と心の中で言うような考えで  
はいけません。あなたがたに言うのが、神は、この石ころから  
でも、アブラハムの子孫を起こすことができになるのです。斧  
もすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木  
は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます（マタイ3:9-10、一部  
強調）。

私たちは、少なくともヨハネのことを聞いていた聴衆の一部は、救いは血筋よっ

## 弟子をつくる指導者

て得られると思っていたユダヤ人であったことをまず学びます。従って、ヨハネの説教は伝道のためでした。

またヨハネは、まだ救われていない者たちは火に投げ込まれる危険があると警告をしていたことも、私たちは知っています。このヨハネが十節で話した「火」は、彼が十一節で話した同じ火を表しているとは結論付けるのは、理にかなっているようです。

この事実は、十二節へ行くと更に明白になります。

手に箕を持っておられ、ご自分の脱穀場をすみずみまできよめられます。麦を倉に納め、殻を消えない火で焼き尽くされます。」（マタイ3:12、一部強調）。

ヨハネが十節でと十二節両方で話していた火とは、地獄の火についてでした。12節では、ヨハネは、イエスが人々を二つに分類し、麦を「倉に納め」、殻は「消えない火で」焼き尽くすと比喩的に言っています。

周辺の節も考慮に入れると、ヨハネは十一節で、信者ならイエスが聖霊のバプテスマを授け、未信者なら火のバプテスマを授けるといったように、二つに一つを意味していたに違いありません。実際そうであるので、誰もクリスチャンに向かって、火のバプテスマが必要だと説教すべきではありません！

この節の前後の節から離れて、私たちはまた、残りの新約聖書も見ていく必要があります。使徒の働きの中に、クリスチャンは「火のバプテスマ」を受けるべきだと記載されている例は見つけれられるでしょうか。いいえ。一番近いのは、ルカが五旬節の日に、弟子たちが聖霊によってバプテスマを受け、炎の下が一時的に彼らの頭の上に留まったという記録のところですが。しかし、ルカはこれを一度も「火のバプテスマ」とは呼びませんでした。更に、使徒書簡の中に、「火のバプテスマ」を受けるよう励ましたり、指導している箇所を見つけられるでしょうか。いいえ。従って、火のバプテスマをクリスチャンは求めるべきではない、という結論に導くことは、かなり無難なことであると言えます。

**聖書から導き出された間違った福音 (A False Gospel Derived From Scripture)**



## 聖書の解釈

福音自体も、説教者や教師によって不正確に伝えられていることが、しばしばあります。そのような説教者や教師は、文脈を考慮に入れることができていないために、聖書を誤って解釈しています。まさにこの理由で、神の恵みについての誤った教えが溢れています。

例えば、エペソ二章八節にあるように、パウロは救いは恵みによるもので、行ないによるものではないと言いましたが、この箇所は、まさに、文脈が無視されているが故に、誤った福音を助長してしまっています。パウロはこう書きました。

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるものではありません。だれも誇ることのないためです（エペソ 2:8-9）。

多くの人々は、救いは恵みによる賜物であり、行ないの結果ではないというパウロの発言にのみ集中しています。そこから、聖書の他の何百カ所で証していることに反して、救いと聖めとは何の関係もないと導き出しています。ある人たちは、更にそこから進めて、救いを得るのに、悔い改めは結局のところ必要ないとさえ言っています。これは、文脈が無視されているために、どのように聖書が間違っただけで解釈されているかという典型的な例です。

まず、全体を考慮するという場合、実際どの箇所を考慮するのか考えてみましょう。パウロは恵みのゆえに救われたとは言っていません。私たちは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。信仰は、恵みと同じ位、救いの公式に係わっています。聖書は、行ないのない信仰は役に立たず、死んだもので、それは救いへ導くことはできません、と宣言しています（ヤコブ2:14-26参照）。従って、パウロは聖さと救いは無関係であるとは教えていません。パウロは、私たち自身の努力によって救われるとは言っていません。救いの基礎は神の恵みです。私たちは、神の恵みなしには決して救われませんでした。救いは、神の恵みに信仰によって応えると、私たちの人生に救いが実際に起こります。救いの結果はいつも従順、すなわち、真の信仰の実です。そ

## 弟子をつくる指導者

の次の節との流れを見れば、更に明確になります。パウロは言いました。

私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。(エペソ2:10)。

聖霊によって生まれ変えられ、キリストにあって新しく創造された大きな理由は、それにより私たちが従順という良い行ないに歩むことができるためでした。従って、パウロの救いの公式はこのような感じでした。

**恵み + 信仰 = 救い + 従順**

恵みと信仰が合わさると、(結果として) 救いと従順を得る、ということです。信仰によって神の恵みに応える時、結果はいつも救いと良い行ないです。

しかし、パウロの言葉を文脈から引き離す人たちは、このような公式を作り上げています。

**恵み + 信仰 - 従順 = 救い**

恵みと信仰が従順なしに(もしくは従順を差し引いて) 合わさると、その結果救いを得るということです。これは、聖書の観点から言うと異端の教えです。

パウロの言葉全体の流れからもう少しよく読み取ると、エペソの状況は、パウロが福音を宣べ伝えに行った先々の状況と同じであったということに、私たちはすぐに気づくでしょう。つまり、ユダヤ人はパウロの新しい異邦人改宗者に、もし救われたいのなら、割礼を受け、モーセの律法にある儀式的特徴を、ある程度維持するよう教えていました。パウロが「行ない」によっては救われないと書いた時、パウロの頭の中には割礼や儀式の行ないが含まれていました(エペソ2:11-22参照)。

パウロが書いたエペソ人への手紙全体の流れを更に深く読むなら、パウロは聖さは救いに必要不可欠であると考えていることが大変明白にわかります。

あなたがたの間では、聖徒にふさわしく、不品行も、どんな汚れも、またむさぼりも、口にすることさえいけません。また、みだらな

## 聖書の解釈

ことや、愚かな話や、下品な冗談を避けなさい。そのようなことは良くないことです。むしろ、感謝しなさい。あなたがたがよく見て知っているとおりに、不品行な者や、汚れた者や、むさぼる者・・・これが偶像礼拝者です。・・・こういう人はだれも、キリストと神との御国を相続することができません。むなしいことばに、だまされてはいけません。こういう行ないのゆえに、神の怒りは不従順な子らに下るのです（エペソ 5:3-6、一部強調）。

悔い改めなくとも、不道德、不純、または強欲のままにいる人たちを神の恵みが究極的に救うのだと、パウロが信じていたら、このような言葉を決して書くことはしなかったでしょう。パウロがエペソ二章八から九節に意図した言葉の意味は、エペソ人への手紙全体の文脈の中でのみ、正しく理解されます。

### ガラテヤ人の失態（The Galatian Fiasco）

ガラテヤ人への手紙にあるパウロの言葉も、同じように文脈から離れて解釈されていました。結果として、福音は歪められてしまい、それこそパウロがガラテヤ人への手紙の中で正したいと願っていたことでした。

パウロがガラテヤ人へ書いた手紙全体の主旨は、「律法の行ないによるのではなく、信仰による救い」です。しかし、パウロは読み手に、聖さは神の御国へ入るのに必要ではないということを結論付けて欲しかったのでしょうか。勿論、違います。

まず、パウロはガラテヤに来て、新しい改宗者にモーセの律法を守らない限り救いはない、と教えていたユダヤ人と戦っていたことに、もう一度注目してください。パウロは手紙の中で、割礼のある特定の問題について何度も語っていたのは、ユダヤ人の律法主義者たちが一番重要視していたようだったからです（ガラテヤ 2:3, 7-9, 12; 5:2-3, 6, 11; 6:12-13, 15）。パウロは、ガラテヤ人の信者たちが、キリストの命令に従順になりすぎることを心配していたわけではありません。パウロが心配していたのは、ガラテヤの信者たちが、もはや、自分たちが救われる為に、キリストに信仰を置くことをしなくなり、代わりに、割礼と、モーセの律法を守ろうとするかすかな努力に信

## 弟子をつくる指導者

仰を置いてしまっていたことでした。

パウロが書いたガラテヤ人への手紙全体の流れを考えながら、第五章でパウロが書いたことに注目してみましょう。

しかし、御霊によって導かれるなら、あなたがたは律法の下にはいません。肉の行ないは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酪酊、遊興、そういった類のものです。前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたにあらかじめ言っておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません（ガラテヤ 5:18-21、一部強調）。

もしパウロがガラテヤ人に、聖くなくても天国へ行けるということを伝えたかったのなら、このような言葉を書いたはずはありません。パウロが言いたかったことは、聖くなくても天国へ行けることではなく、割礼やモーセの律法によって救いを得ようとすることで、神の恵みやキリストのいけにえを台無しにする人たちは救われない、ということです。割礼が救いをもたらす訳ではありません。イエスへの信仰こそ、救いをもたらし、信じる者を聖く、新しい創造へと変えるのです。

割礼を受けているか受けていないかは、大事なことではありません。

大事なのは新しい創造です（ガラテヤ 6:15）。

これらを通して、いかに聖書を解釈する際に、文脈を考慮することが重要であるかを示しています。福音が神の言葉によって歪められる唯一の方法は、流れを無視することです。「指導者」と呼ばれる人たちが、故意的以外の何ものでもなく、なんともわざとらしく聖書の流れを無視してその意味を歪める、その心情には驚かざるを得ません。

例えば、私はかつてある説教者が、福音を宣べ伝える時には、決して神の御怒りについて触れてはならないと宣言しているのを聞きました。その理由は、聖書に「神の慈愛があなたを悔い改めに導く」（ローマ 2:4）と書いてあるからだ、と言うので

## 聖書の解釈

す。つまりその説教者によると、福音の正しい宣べ伝え方は、神の愛と素晴らしさだけを語るのだそうです。それが、人々を悔い改めへと導くと言うのです。

しかし、その説教者がローマ書第二章から抜粋した単独の聖句の前後を読んでみると、神の裁きや聖なる御怒りについての聖句に囲まれていることに気づきます！前後を読めば、その説教者が聖句を使って宣言していたことを、ここでパウロが意図していたという可能性は全くありません。

私たちは、そのようなことを行なっている人々に下る神のさばきが正しいことを知っています。そのようなことをしている人々をさばきながら、自分で同じことをしている人よ。あなたは、自分は神のさばきを免れるのだとでも思っているのですか。それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現われる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。神は、ひとりひとりに、その人の行ないに従って報いをお与えになります。忍耐をもって善を行ない、栄光と誉れと不滅のものを求める者には、永遠のいのちを与え、党派心を持ち、真理に従わないで不義に従う者には、怒りと憤りを下されるのです。患難と苦悩とは、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、悪を行なうすべての者の上に下り（ローマ 2:2-9、一部強調）。

パウロが言っている神の慈愛は、御怒りを遅くしていることで神が示してくださっている慈愛のことです！公に罪人に悔い改めるよう警告した多くの説教者たちの例で満ちている聖書という、より偉大な文脈に照らし合わせる時に、どうしたらそんな馬鹿げた発言を一指導者ができるのか、と不思議に思われることでしょう。

### 聖書の一貫性 (Scripture's Consistency)

聖書の著者は、唯一の方ただお一人なので、そのメッセージには一貫性がありま

## 弟子をつくる指導者

す。それ故、神がある箇所を何を言わんとしているのかを解釈するには、全体の流れを見るのが助けになります。神はある節で何かを言い、別の節で相反することを言う、ということはしません。もしそのように見えるのなら、その両方の箇所の解釈に調和がとれるまで、私たちは学び続ける必要があります。例えば、イエスの山上の垂訓では、まるでイエスが、旧約聖書にあるモラルの規定に相反すること、更には訂正をしているかのように見えるところがいくつかあります。例えば—

『目には目で、歯には歯で。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい（マタイ 5:38-39）。

イエスはモーセの律法から直接抜粋し、その抜粋した律法に相反するような発言をしました。イエスが言ったことを私たちはどう解釈すべきでしょうか。神はモラルに関する基礎的なことについて、思いを変えたのでしょうか。復讐をすることは旧約の時は受け入れられた行動でしたが、新約では違うのでしょうか。これは文脈を読むことでわかります。

イエスは、主に自分の弟子たちに向かって話していました（マタイ 5:1-2参照）。その弟子たちが、イエスに出会う以前に、神のみことばに触れられる機会は、会堂で教える律法学者やパリサイ人を通してだけでした。会堂で彼らは、「目には目で、歯には歯で。」という神の律法が抜粋されるのを聞きましたが、その戒めの意味は、文脈を無視した解釈をする律法学者やパリサイ人によって捻じ曲げられていました。神はこの命令を、人の些細な間違いに対して神の民がいつでも個人的に復讐できると、解釈して欲しくありませんでした。神は、実際、モーセの律法の中で、復讐は主のものである（申命記 32:35参照）とも、また神の民は敵に対して善を行うべきだ、とも言っています（出エジプト 23:4-5参照）。しかし、律法学者とパリサイ人はこれらの命令を無視して、神の「目には目で」という律法から自分たちの解釈を作り出して、

## 聖書の解釈

彼ら自身に個人的復讐という便利な権利を与えました<sup>35</sup>35。彼らは文脈を無視したのです。

「目には目で、歯には歯で。」という神の戒めは、イスラエルの裁判の中で、当然あるべき正義を規定する神の戒めに関する文脈の中にあります（出エジプト 21:22-24; 申命記 19:15-21参照）。裁判制度の準備をすること自体、神が個人的復讐に反対している証拠です。証拠を検証する公平な裁判官は、気分を害して、偏見を抱く個人よりも、よっぽど正義を施行することができます。神は、裁判所と裁判官が犯罪に応じて、処罰を公正に少しずつ施すことを期待しています。従って、「目には目で、歯には歯で。」なのです。

そうであるならば、最初はともすると矛盾するよう見えることに、調和を見出すことができるのです。イエスは単に、それまでの人生でずっと不正な教えを受けてきた人たちである聴衆に、個人的復讐についての、神の真の御旨、すなわち、モーセの律法の中で既に示されているが、パリサイ人によって歪められてしまったものを理解できるように助けていました。イエスは神がモーセに与えた律法に相反していた訳ではありません。イエスは単に、その本来意図していた意味を示していただけでした。

これはまた、裁判沙汰になるような大きな不和にあって、イエスが私たちに何を期待しているのか、私たちが正しく理解できる助けにもなります。神は、イスラエル人が、他のイスラエル人から受けるいかなる、また全ての違反を見逃したくありません。そうでないなら、神は裁判制度を成立させることはなかったでしょう。同様に神は、クリスチャンが、仲間の信者（または未信者）から受けるいかなる、また全ての違反を見逃したくありません。新約聖書は、和解できないクリスチャンは、仲間の信者の仲介による助けを規定しています（第一コリント 6:1-6参照）。そして、深刻な違反による不和について、クリスチャンが未信者を世の中の裁判へ連れて行くことは

---

<sup>35</sup> 35 イエスは説教の最初の方で、聴衆の義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでなければ、天の御国には入れないと言ったことも注意すべきである（マタイ 5:20 参照）。そこから続けてイエスは、律法学者やパリサイ人が不十分であることを示す多くの具体例を挙げた。

## 弟子をつくる指導者

何も悪いことではありません。深刻な違反とは、あなたの目や歯を殴り倒されたといったようなものです！それ程深刻ではない違反とは、イエスが話したような、頬を打たれるとか、何か小さな物（例えばシャツとか）の弁償を訴えられることとか、一ミリオン無理やり行かされること等です。神はご自分の民に、神に倣って、思いやりのない罪人や悪人たちに特別な恵みを表して欲しいのです。

同様に、イエスに従っているつもりになって、人から物を盗まれても、その捕まった人たちに対して法的に告発することを拒んだ、善意ある信者たちもいました。彼らは、「ほかの頬をも向ける」つもりでしたが、実際は、犯罪に対する代価を払わないことを盗人に教え、その人が再び盗みを犯せるようにしてしまったのです。そのようなクリスチャンは、その同じ盗人に物を盗まれてしまう、他の全ての人に対して、愛によって行動しているとは言えません！神は盗人に正義と悔い改めを経験して欲しいと願っています。しかし、頬を打たれる位の小さなことで、気分を害して、相手の頬を打ち返すために、その人を裁判へ連れて行くことがないようにしてください。そのような人には神のあわれみと愛を表してください。

### 旧約を新約の観点から解釈する (Interpreting the Old in Light of the New)

私たちは新約聖書を旧約聖書の観点から解釈するべきですが、それだけでなく、いつも旧約聖書を新約聖書の観点からも解釈すべきです。例えば、誠実な信者の中には、モーセの律法の食事に関する規定の箇所を読み、クリスチャンはこれらの規定に従って食事をすべきだ、と結論付けた人たちがいました。しかし、もしその人たちが新約聖書のたった2節だけでも読めば、モーセの律法の中の食事に関する規定は、新しい契約の下にある人たちには適用しないことがわかるでしょう。

イエスは言われた。「あなたがたまで、そんなにわからないのですか。外側から人にはいって来る物は人を汚すことができない、ということがわからないのですか。そのような物は、人の心には、はいらないで、腹にはいり、そして、かわやに出されてしまうのです。」  
イエスは、このように、すべての食物をきよいとされた（マルコ



## 聖書の解釈

7:18-19)。

しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。それは、うそつきどもの偽善によるものです。彼らは良心が麻痺しており、結婚することを禁じたり、食物を断つことを命じたりします。しかし食物は、信仰があり、真理を知っている人が感謝して受けるようにと、神が造られた物です。神が造られた物はみな良い物で、感謝して受けるとき、捨てるべき物は何一つありません。神のことばと祈りとによって、聖められるからです（第一テモテ 4:1-5）。

新しい契約下では、私たちはモーセの律法ではなく、キリストの律法の支配下にあります（第一コリント 9:20-21参照）。キリストは確かにモーセの律法にあるモラル面を承認しました（つまり、キリストの律法にそれらを組み込みました）が、イエスも使徒たちも、クリスチャンはモーセの律法の食事に関する規定を厳守する義務がある、というようには教えませんでした。

初代クリスチャンは、皆ユダヤ教からの改宗者でしたが、彼らの文化的信念により、古い契約の中の食事に関する規定を、守り続けていたのは明らかです（使徒の働き10:9-14参照）。そして、異邦人がイエスを信じ始めると、初代のユダヤ人クリスチャンたちは、ただ周りのユダヤ人の気分を害さないためだけに、彼らにモーセの律法の食事に関する規定に従うよう頼みました（使徒の働き15:1-21参照）。つまり、そのような規定を守ることが救いをもたらすと信じていなければ、クリスチャンがモーセの律法の食事に関する規定を守るとは何も悪くないのです。

初代のクリスチャンの中にはまた、偶像に捧げられた肉を食べる事は良くない、と信じている人たちもいました。パウロは、「信仰の弱い」（ローマ14:1参照）兄弟が心を痛めないように決心して、そのような兄弟に対して（パウロがしているように）

## 弟子をつくる指導者

愛によって行動することを、信者たちに教えました。もし神からの咎めを受けて食べることを制している人は、（たとえそのような咎めが根拠のないものであっても）その人の誤解の部分ではなく、信仰心は称賛に値します。同様に、個人的な咎めからある食べ物を食さない人たちは、食する人たちを裁くべきではありません。両方、お互いに対して愛によって行動すべきです（ローマ14:1-23参照）。

いずれにしても、聖書は進歩的な啓示であるため、私たちはいつも一番古い啓示（旧約聖書）を一番新しい啓示（新約聖書）の観点から解釈すべきです。神が今までに与えてきた啓示は何一つ矛盾するものではなく、いつも称賛されるものです。

### 文化的且つ歴史的背景（Cultural and Historical Context）

私たちが聖書を勉強する時は、いつでも可能な限り、その聖書箇所の文化的、また歴史的背景も考慮すべきです。聖書の中の特別な文化的、地理的、また歴史的背景について何か知っていることにより、さもなくば見逃してしまうような洞察を得れるようになることが多いのです。勿論、これには聖書以外の本の助けが必要となります。この分野においては、良質なスタディ・バイブル（学習・研究用聖書）が助けとなります。

ここに、聖書を読む際、歴史的、または文化的情報がいかにして私たちに混乱から守るかについて例を挙げます。

1.) 聖書を読んでいると時々、人が屋上に上る（使徒の働き10:9参照）とか、屋根をはがす（マルコ2:4参照）といった記述を見ます。聖書の時代、イスラエルでは一般的に屋根は平らであったことや、その平らな屋根に繋がる外階段が殆どの家にあったということを知っていると助けになります。もし知らなければ、聖書の登場人物が屋根の頂上をまたがって、煙突にしがみついているところを想像してしまいそうです！

2.) マルコ十一章十二から十四節で、その時「いちじくのなる季節ではなかった」にもかかわらず、イエスは実が一つもなっていないいちじくの木を見てのろいました。いちじくの木は大抵、その実のなる季節ではなくても、二、三個の実はつけていたということを知っていると助けになります。従って、イエスの期待は理不尽なものでは

## 聖書の解釈

ありませんでした。

3.) ルカ七章三十七節から四十八節で、イエスがパリサイ人の家で食卓に着いている時に入ってきた女についての記述があります。聖書は、女が泣きながら、イエスのうしろで御足のそばに立ち、涙で御足をぬらし始め、髪の毛でぬぐい、御足に口づけして、香油を塗った、と記述しています。そこで私たちは、イエスが食卓に着いているところで、どうしたらこのような事が起こり得るのかと考えます。この女は食卓の下に潜ったのだろうか。どのようにして、他に一緒に食卓に着いていた者たちの足があるところを歩いて通り着くことができたのだろうか、と。

答えはルカの記述の中の、イエスは「食卓に着いて」いた（英語では「食卓で横たわる」（ルカ7:37））というところにあります。当時の食べ方の習慣は、低い食卓の周りに、片手で体を支えながら床に体の側面をつけて、もう片手で食べ物を口に運びました。このような姿勢で、イエスはこの女に崇拜されました。

これは、最後の晩餐でヨハネがイエスに質問するために、どのようにしてヨハネがイエスの胸に寄り掛かることができたかを理解させてくれます。ヨハネは自分の背をイエスに向けて、横たわっていて、イエスへ個々に質問するために、単純にイエスの方へ向いたら、イエスの胸元の辺りに寄り掛かった、ということを知っているとこれも、また助けになります（ヨハネ13:23-25参照）。ダ・ヴィンチの有名な絵画、「最後の晩餐」では、イエスが弟子たちと一緒に六人ずつ食卓に並んで着いていますが、それはその作者の聖書的無知を現わしています。ダ・ヴィンチは歴史的背景を知っている必要があったようです！

### 服装についての共通の質問（A Common Question About Clothes）

私が世界中の牧師たちからよく受けた質問はこれです。「聖書には女性が男性の服装を身に着けることを禁じているので、クリスチャンの女性がズボンを履くことは受け入れられることでしょうか。」

これは、私たちが理にかなった解釈を施し、また少し文化的背景を考慮して答えるのに良い質問です。

## 弟子をつくる指導者

まず、女性が男性（またその逆）の服装を身に着けることを禁じている聖書箇所を詳しく調べてみましょう。

女は男の衣装を身に着けてはならない。また男は女の着物を着てはならない。すべてこのようなことをする者を、あなたの神、主は忌みきらわれる（申命記 22:5）。

最初に「この命令を与えた神の意図は一体何か」という尋ねることから始めるべきです。神の目的は、女性を、ズボンを履くことから遠ざけるためだったのでしょうか。

いいえ、それが神の目的ではありませんでした。なぜなら、神が最初にこれと言った時のイスラエルで、男性は誰もズボンを履いていなかったからです。ズボンは男性の服でもなければ、誰の服でもありませんでした。実際、聖書の時代に男性が着ていたものは、どちらかという、今日の女性が身に着けるような服装だったようです！このようなちょっとした歴史的、また文化的背景の情報があると、神がそこで何を言わんとしているかを、正しく解釈する助けとなります。

それでは、神の意図は何だったのでしょうか。

誰でも、自分の性と反対の服装を身に着ける人を、主は忌みきらわれる、と書いてあります。かなり深刻なように聞こえます。もし男性が女性のスカーフを取って、頭の上に三秒間乗せたら、その人は神に忌み嫌われるのでしょうか。それは大変考え難いことです。

ここでの意味は、どちらかと言うと、人が意図的に自分の性とは反対に見せる為に、そのような身なりをすることに対して神は反対していたようです。なぜそんなことをしたいと思う人がいるのでしょうか。そのような人たちは、自分と同じ性の人を誘惑したい、つまり衣装倒錯と言われる、性的倒錯を望んでいるからです。これでどうしてそれが神に忌み嫌われるのかがわかると思います。

つまり、その人が衣装倒錯としてやっていない限り、申命記二十二章五節に基づいて、女性がズボンを履くことは間違っている、と正しく結論付けることはできません

## 聖書の解釈

ん。その女性が女性のような身なりであれば、その人はズボンを履くことによって罪を犯しているわけではありません。

勿論、聖書は女性がつつましい身なりでいるべきだと教えています（第一テモテ 2:9参照）から、体にぴったりフィットして、露出度の高いズボン（と、そのようなドレスやスカート）は、男性が情欲を抱くように誘惑しているので、不適切です。西洋で女性たちが公に着ている服装の多くは、発展途上国では全く不適切で、そのような恰好は売春婦しかしません。クリスチャンの女性は、「セクシー」に見せるための服を着て公の場に出るべきではありません。

### 補足 (A Few Other Thoughts)

女性がズボンを履くことに関する質問を、中国の牧師たちからは一度も受けたことがないのは興味深いです。それは、殆どの中国人女性が長年ズボンを履いてきたからかもしれません。だいたい、このような質問は、殆どの女性がズボンを履かない国の牧師だけからされます。これは、その人たちの個人的、文化的偏見と言えます。

また、ミャンマーの女性指導者からも、このような質問は一切受けたことがないことも興味深いです。ミャンマーの男性は、伝統的にロンギーと呼ばれる、私たちが言うスカートのようなものを履きます。ここでも、文化によって女性の服装、また男性の服装という考え方は様々であり、私たちは聖書に私たちの文化的理解を押し付けないよう注意が必要です。

最後に、申命記二十二章五節に基づいて、女性はズボンを履くべきではないと思っている男性たちの多くが、自分たちにレビ記十九章二十七節を適用する義務を一切感じていないのは不思議に思います。

あなたがたの頭のびんの毛をそり落としてはならない。ひげの両端

をそこなってはならない（レビ記19:27）。

どうして、レビ記十九章二十七節に反して、男性は神が与えたひげ、それは明白に女性と区別するものですが、それをそり落として、ズボンを履く女性に対して、男のような身なりをしていると責めるのでしょうか。それは、少々偽善的のように見える

## 弟子をつくる指導者

ます！

ちなみに、レビ記十九章二十七節で、神が意図していることを理解できるよう少し歴史的背景を説明しましょう。横側に生えるひげを剃り落とすことは、偶像礼拝をする異教徒の儀式の一部でした。神は、神の民が異教徒の偶像を崇拝しているように見えて欲しくなかったのです。

### 語り手は誰か (Who is Speaking?)

聖書を読む時は、誰が語り手かをいつも注意すべきです。というのも、そのような文脈上のちょっとした情報でも、私たちが正しく聖書を解釈する助けとなるからです。聖書の全ての箇所は、聖書に含まれるよう神の霊が励ましましたが、聖書の中の全てが、神の霊に励まされた神のみことばではありません。私は一体何を意味しているのでしょうか。

聖書の多くは、神の霊が励ました言葉ではなく、人の言葉が記録されています。従って、聖書の中で人々が話した全てが神によって、神の霊が励まして語らせたという訳ではないことを知っておくべきです。

例えば、ヨブとその友人たちの言葉で、それらがあたかも神の霊が励ました神の言葉のように抜粋して間違える人もいます。これが間違いだと言える二つの理由があります。まず一つ目は、ヨブとその友人たちは、三十四章の間、口論していました。彼らは合意に至っていませんでした。神はご自身には矛盾がないため、彼らが言った全てが神の霊が励ました神の言葉ではないことは明らかです。

二つ目は、ヨブ書の最後に、神ご自身が話し、神はヨブとヨブの友人たちに正しくないことを言っていたことを叱りました（ヨブ38-42参照）。

新約聖書を読む時も、同様に注意を払う必要があります。いくつかの箇所で、パウロは、自分が書いていることのある部分は単に自分の意見であると明白に述べました（第一コリント7:12, 25-26, 40参照）。

### 誰に向かって話されているのか (Who is Being Addressed?)

聖書を読む時に、誰が語り手かを気にするだけでなく、それは誰に向かって話さ

## 聖書の解釈

れているのかにも注意すべきです。そうしないと、私たちは自分たちに適用されないことを、適用するものとして、間違った解釈をするかもしれません。もしくは私たちに適用されることを、されないものとして解釈してしまうかもしれません。

例えば、詩篇三十七編四節に書いてある約束を自分のものとして受け取り、そのことは自分たちに適用すると信じている人たちがいます。

主はあなたの心の願いをかなえてくださる（詩篇 37:4）。

しかし、この約束はこの箇所を読む人や知っている人に適用するのでしょうか。いいえ、そうではありません。文脈を読むとこれは、以下に挙げる5つの条件を満たす人たちにだけ適用されるものだということがわかります。

主に信頼して善を行なえ。地に住み、誠実を養え。主をおのれの喜びとせよ。主はあなたの心の願いをかなえてくださる（詩篇 37:3-4）。

従って、誰に向かって話されているのかに注意することはとても大切です。もう一つの例です。

ペテロがイエスにこう言い始めた。「ご覧ください。私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。」イエスは言われた。「まことに、あなたがたに告げます。わたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、畑を捨てた者で、その百倍を受けない者はありません。今のこの時代には、家、兄弟、姉妹、母、子、畑を迫害の中で受け、後の世では永遠のいのちを受けます（マルコ 10:28-30）。

あるグループでは、誰かが福音を宣べ伝える人に金銭的に支援するなら、「百倍の利益」が返って来ると宣言することが、かなり人気となっています。しかし、この約束はそのような人たちに適用されるのでしょうか。いいえ、違います。ペテロは、自分とその他の弟子たちの報いは何かとイエス尋ねましたが、そのペテロがしたように、家族、畑、家を実際福音のために捨てた人たちに約束されているのです。

## 弟子をつくる指導者

興味深いことに、百倍の利益についていつも説教する人たちが、最も注目しているように見受けられるのは、家や畑であって、同様に約束されている子供たちや迫害にはありません！イエスは、家を捨てる人たちが、百の家を代わりに所有することになるとは勿論約束していません。イエスが約束したのは、家族や家を捨てる、その人の新しい霊の家族が、その人に家を開いて受け入れてくれることを約束していました。真の弟子は、実際自分たちには何も属さない、所有することを気にしません。そのような人たちが気にするのは、神のものを大切に管理することだけです。

### 最後の例 (A Final Example)

マタイによる福音書二十四章と二十五章にある、イエスの「オリーブ山の説教」として知られている箇所を私たちが読む時、ここでイエスはまだ救われていない者たちに話していると間違っている、従ってイエスが言ったことは自分には適用しないと、間違った結論を持っている人たちがいます。彼らは、不忠実なしもべのたとえ話や、十人の娘のたとえ話がまるで未信者に向かって書かれているかのように読みます。しかし、もう既に言ったことですが、この両方のたとえ話はイエスの一番近い弟子たちの何人かに向かって話されました（マタイ 24:3; マルコ 13:3参照）。従って、もしもペテロやヤコブ、ヨハネやアンデレがイエスの再臨に備えられていない可能性を警告されたのなら、私たちも同じです。イエスがオリーブ山の説教で警告したことは、全ての信者に、また、イエスが誰に向かって話されているのかに注意しないために、これを私たちへの警告として受け止めない人たちにさえ、適用されるのです。

**第三の法則 正直に読む。自分の理論を押し付けない。信じていることに反するものを読む時、聖書を変えようとしてはならない。自分の信じていることを変えなさい。**

私たちは皆、既にある偏見をもって聖書を読みます。そのため、正直に聖書を読むことが私たちにとってとても難しいことです。聖書によって、私たちの神学を形成していただくよりもむしろ、自分の信念を結局聖書に押し付けてしまいます。時として、私たちは自分たちの教義を支持する聖句を探したり、自分たちの信念に反する聖



## 聖書の解釈

句を無視したりします。このことを「立証引用 (proof-texting)」と言います。

ここに、私が最近出くわした、聖書の本文に、ある理論を押し付けている例を挙げましょう。ある教師がマタイ十一章二十八節から二十九節の、イエスの有名な言葉を読みました。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます (マタイ 11:28-29)。

その教師は続けて、イエスは二種類の異なる休息を与えていると説明しました。最初の休息は (一般に信じられているところでは) 十一章二十八節にある救いの休息であり、二つ目の休息は十一章二十九節にある弟子訓練の休息です。最初の休息はイエスが来られる際に頂けるもので、二つ目の休息はイエスに主として服従した時に、もしくは主のくびきを負う時に与えられます。

しかし、本当にイエスはそれを意味したのでしょうか。違います。これは、本文に、宣べられても暗示もされていない意味を押し付けています。イエスは二種類の休息を与えと言いませんでした。イエスは疲れた人、重荷を負っている人に一つの休息を提供し、その一つの休息を受ける唯一の方法は、イエスのくびきを負うこと、つまりイエスに服従することです。これこそがイエスの明白な意味です。

なぜ、その教師はそのような解釈に至ったのでしょうか。なぜなら、ここでの明白な意味は、その人の信念、つまり天国へ行くクリスチャンには二種類あり、信者と弟子である、ということに合致しなかったからです。従って、その教師は聖書箇所を正直に解釈しませんでした。

その特定の教義について考える際、この本の最初の方では他の聖書箇所から見ましたが、当然のことながら、その教師の解釈は、イエスが教えた残りの内容とも合致していません。新約聖書のどこにも、天国へ行くクリスチャンが信者と弟子の二種類

### 弟子をつくる指導者

あることは書いてありません。真の信者は弟子なのです。弟子でない人たちは、信者ではないのです。弟子となることこそ、真の信仰の実です。

聖書を正直に、純真な心で読むことに努めましょう。それをすると、キリストへの更なる献身と従順につながります。

## 第八章

### 山上の垂訓 (The Sermon on the Mount)

弟子をつくる指導者は、キリストの命令に全て従う弟子をつくりたい、という願いから、山上の垂訓にとっても興味を持ちます。これ程までに、イエスの記録された説教で長いものはなく、またイエスの命令で満ちたものはありません。弟子をつくる指導者は、この説教の中でイエスが命令した全てに従いたいと思い、またそれを弟子に教えたいと思います。

従って、ここではマタイ五章から七章にあるイエスの説教について、私が理解していることを分かち合っていきたいと思います。指導者たちは、自分の弟子たちに山上の垂訓を節ごとに教えることをお勧めします。ここに記すことがその役に立てば幸いです。

山上の垂訓にある大まかな流れと重要な主題についての概要を以下に示します。

I.) イエスが民衆を集める (5:1-2)

II.) 序論 (5:3-20)

A.) 幸いな者の特徴とその祝福 (5:3-12)

B.) 地の塩と世の光であり続けることの忠告 (5:13-16)

C.) キリストに従う者たちと律法との関係 (5:17-20)

III.) 説教—あなたの義を律法学者パリサイ人の義にまさるものとする (5:21-7:11)

## 弟子をつくる指導者

- A.) 律法学者やパリサイ人のようではなく、互いに愛し愛し合う (5:21-26)
  - B.) 律法学者やパリサイ人のようではなく、性的な聖さを保つ (5:27-32)
  - C.) 律法学者やパリサイ人のようではなく、正直でいる (5:33-37)
  - D.) 律法学者やパリサイ人のようではなく、復讐しない (5:38-42)
  - E.) 律法学者やパリサイ人のようではなく、敵を憎まない (5:43-48)
  - F.) 律法学者やパリサイ人のようではなく、正しい動機で良い行ないをする (6:1-18)
    - 1.) 正しい動機で貧しい者に施す (6:2-4)
    - 2.) 正しい動機で祈る (6:5-6)
    - 3.) 祈りと赦しについての余談 (6:7-15)
      - a.) 祈りの仕方 (6:7-13)
      - b.) 互いに赦し合う必要性 (6:8-15)
    - 4.) 正しい動機で断食する (6:16-18)
  - G.) 律法学者やパリサイ人のようではなく、お金に仕えない (6:19-34)
  - H.) 兄弟の小さな過ちを見つけない (7:1-5)
  - I.) 真理を感謝できない人に時間を費やさない (7:6)
  - J.) 祈ることの励まし (7:7-11)
- IV.) 結論—説教のまとめ (7:12-27)
- A.) 話のまとめ (7:12)
  - B.) 従うことの忠告 (7:13-14)
  - C.) 偽預言者や偽信者の見分け方 (7:15-23)
  - D.) 不従順に対する最後の忠告とまとめ (7:24-27)

### イエスが民衆を集める (Jesus Gathers His Audience)

この群衆を見て、イエスは山に登り、おすわりになると、弟子たちがみもとにきた。そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて、言われた (マタイ 5:1-2)。

## 山上の垂訓

まるでイエスはわざと聴衆の人数を減らすために、「群衆」から遠ざかり、山に登ったように見受けられます。また、「弟子たちがみもとに来た」という描写から、まるでイエスを聞くことに飢え渴いている者だけが、イエスが最終的に行き着いて座っていた山に、息を切らせて自ら登ってきたことを示唆しているようです。明らかにそこには多くの人がいて、七章二十八節では「群衆」と呼ばれる程です。

それからイエスは、弟子たちに語りながら説教し始め、私たちはその説教の最も重要な主題が何であるかのヒントを、その最初から得ることができます。イエスは彼らに、天に属する特性を持っていれば幸いである、ということを行っています。それが、イエスのこの説教の大まかな主題です。すなわち、*聖なる者だけが、天の御国を相続する*のです。八福の教えと呼ばれる五章三から十二節には、この主題がたくさん見受けられます。

イエスは幸いな人が持つ、様々な特性を列挙し、またそれに伴う様々な特有の祝福を約束しました。軽い読者はよく、クリスチャンはそれぞれ、八福のひとつだけでも、自分の特性として持っていればよいと考えています。しかし、注意深い読者は、ここでイエスは異なる祝福を持つ、様々な種類の信者を列挙した訳ではなく、これら全てを含むひとつの祝福、つまり、*天の御国を相続する*ということが、*全ての真の信者に将来与えられる*ことを言っていることに気づきます。これ以外に、イエスの言葉を解釈する理にかなった方法はありません。

心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。

悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。

柔和な者は幸いです。その人は地を相続するからです。

義に飢え渴いている者は幸いです。その人は満ち足りるからです。

あわれみ深い者は幸いです。その人はあわれみを受けるからです。

心のきよい者は幸いです。その人は神を見るからです。

平和をつくる者は幸いです。その人は神の子どもと呼ばれるからです。

## 弟子をつくる指導者

義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。

わたしのために、ののしられたり、迫害されたり、また、ありもしないことで悪口雑言を言われたりするとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。喜びおどきなさい。天においてあなたがたの報いは大きいからです。あなたがたより前に来た預言者たちも、そのように迫害されました(マタイ 5:3-12)。

### 祝福と性格特性 (The Blessings and Character Traits)

まず、全ての約束された祝福について考えてみましょう。イエスは幸いな者は、(1) 天の御国を相続し、(2) 慰めを受け、(3) 地を相続し、(4) 満ち足り、(5) あわれみを受け、(6) 神を見、(7) 神の子どもと呼ばれ、(8) 天の御国を相続する(一番の繰り返し)と言いました。

イエスは、心の貧しい者と義のために迫害されている者だけが、天の御国を相続すると、私たちに考えるよう促しているのでしょうか。心のきよい者だけが神を見ることができ、平和をつくる者だけが神の子どもと呼ばれますが、そのような人たちは神の御国を相続しない、ということなののでしょうか。更に言えば、平和をつくる者はあわれみを受けず、あわれみ深い者は神の子どもと呼ばれない、ということなののでしょうか。勿論、これらは全て誤った考えです。従って、ここにある多くの約束された祝福は、つまり、神の御国の相続という、ひとつの大きな祝福から分岐する多種多様な祝福であると考えの方が無難でしょう。

では、イエスが描写する様々な性格の特性、すなわち(1) 心が貧しい者、(2) 悲しむ者、(3) 柔和な者、(4) 義に飢え渴いている者、(5) あわれみ深い者、(6) 心のきよい者、(7) 平和をつくる者、(8) 迫害されている者について考えてみましょう。

イエスは、心が貧しいけれども、あわれみ深くないという人があり得ると、私たちに考えて欲しいのでしょうか。義のために迫害されている者が、義に飢え渴いていないということがあり得まじょうか。勿論、そうではありません。幸いな者の性格特性は、ある程度は、全ての幸いな者たちが共有する多種多様な特性なのです。

## 山上の垂訓

八福の教えは、イエスに真に従う者の性格特性を明白に表しています。そのような特性を弟子たちに列挙することで、イエスは彼らこそ救われて、いつか天国を楽しむ幸いな者たちとなることを、弟子たちに確信させました。その時は、弟子たちが通っていた苦難の故に、それ程幸いとは思えず、またそれを傍観している世は、彼らが幸いであるとは思えませんでした。神の目からはそうでした。

イエスの描写に当てはまらない人々は、幸いであるとは言えず、天の御国を相続しません。弟子づくりをする牧師は、自分の民にこのことをきちんと理解させる義務感を感じます。

### 幸いな者の性格特性 (The Character Traits of the Blessed)

幸いな者が持つ八つの性格特性は、ある程度の解釈は可能です。例えば、なぜ「心が貧しい」ことが高潔なのでしょう。人が救われるには、その人の霊的貧しさについて、まずきちんと自覚することが必要であり、従ってイエスは、この霊的貧しさを第一の特性として挙げているように、私は考えます。人は救われる前に、自分には救い主が必要であることをまず自覚する必要がある、イエスの聴衆の中には、イエスの話を聞きながら、自分がいかに汚れた者であるか、ということに気づかされた人たちもいました。そのような人たちは、イスラエルにいる高慢で、自分自身の罪に全く気づけない人たちと比べてなんと幸いな者だったでしょう！

この最初の特性は、全てのうぬぼれや、自分が救いに値するといった思いを全部排除します。真に幸いな者は、自分から神にお捧げできるものは何も持っておらず、自己義などは「不潔な着物」(イザヤ64:6、欽定訳)に過ぎないことがわかった者のことなのです。

イエスは、自分自身の努力によって、このような幸いな者の特性を得ることができるとは、誰にも思っただけありませんでした。そうではなく、もし人が祝福された者の特性を所有しているならば、彼らは祝福されている、すなわち、神によって祝福されているのです。全ては神の恵みから生じます。イエスが語っていた幸いな人たちは、天でその人を待っているものの故だけでなく、その人の地上の歩みにおいても、

## 弟子をつくる指導者

神がなされた業によって幸いでした。私の人生で幸いな者の特性を見つける時、それは自分がしてきたことではなく、神が御恵みによって私になされた業を思い出させます。

### 悲しむ者 (The Mournful)

もし最初に挙げた特性が、天国行きの人にとって最初に必要な特性である故に、最初に取り上げられているならば、二番目の特性も、またおそらく何か意味があって取り上げられている事でしょう。「悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです」(マタイ 5:4)。イエスはここで、心からの悔い改めと後悔の念について言っているのでしょうか。私はそう思います。というのも、聖書にははっきりと、神のみこころに添った悲しみは、救いに至る悔い改めを生じさせる、と書いてあるからです(第二コリント 7:10参照)。イエスがかつて話しかけた悲しむ収税人は、この種の幸いな人の例です。その人は宮の中で、胸をたたきながら、神のあわれみを求めて、謙虚に頭を垂れていました。近くにいたパリサイ人は、自分は十一献金をし、週に二回断食をすることを誇らしげに神に祈り、訴えていましたが、この取税人が、パリサイ人とは違って、罪を赦されて帰って行きました。この話では、取税人が幸いな人であり、パリサイ人はそうではありませんでした(ルカ18:9-14参照)。イエスの聴衆の中には、聖霊の咎めを受けて、悲しんでいた人がいたと思います。聖霊からの慰めは、間もなくその人たちのものとなったことでしょう！

もしイエスがここで、キリストのもとに来たばかりの人が、悔い改めに伴って味わう最初の悲しみについて話していたのではないとしたら、恐らく、全ての真の信者たちが、彼らを愛する神に対して反抗しているこの世の中に絶えず直面している故に感じる悲しみのことを、イエスは言っていたのでしょう。パウロはそれを、「私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります」(ローマ 9:2)と表現しました。

### 柔和な者 (The Gentle)

三つ目に挙げる特性の柔和は、御霊の実の一つとしても聖書に書かれています



## 山上の垂訓

(ガラテヤ 5:22-23参照)。柔和な性質は自然に生まれるものではありません。神の恵みを受け、聖霊が内住する者は、幸いにも柔和にされます。神の創造する新しい地には、義なる者だけが住めるので、そのような人たちはいつか地を相続します。厳しく、乱暴な口先だけのクリスチャンは知っておくべきです。彼らは幸いな者には含まれていません。

### 義に飢え渴いている者 (Hungering for Righteousness)

四つ目の特性である義への飢え渴きは、真に生まれ変わりを体験した人全てが持つ、神が与えた、内なる飢え渴きを表しています。そのような人は、世にある不義、また自分自身に残る不義をも、すべて悲しんでいます。その人は罪を憎み(詩篇97:10; 119:128, 163参照)、義を愛します。

聖書で義という言葉に出くわすと、すぐに「キリストにより、私たちに転嫁された義の法的地位」と解釈しますが、この言葉は必ずしも、そのような意味だけで使われている訳ではありません。大概の場合は、「神の基準で正しく生きることの質」といった意味で使われています。ここではイエスはこの意味で使っているのは明らかです。と言うのも、クリスチャンがもう既に持っているものに対して、飢え渴く理由はないからです。霊によって生まれた者は、正しく生きることを求め、そのような人は「満ち足りる」約束があり(マタイ5:6)、神はその恵みによって始められたことを終わらせてくださる、という確信があります(ピリピ 1:6参照)。

ここでのイエスの言葉はまた、新しい地、つまり「正義の住む新しい」地(第二ペテロ 3:13)の時をも予測しています。その時には、もはや罪はありません。皆心から神を愛し、自分自身のように隣人を愛するのです。今義に飢え渴く者は、いずれ満ち足りるようになります。その時ついに、私たちの心からの祈り、「みこころが天で行われるように地でも行われますように」(マタイ6:10)が成就するのです。

### あわれみ深い者 (The Merciful)

五つ目の特性、あわれみ深さもまた、すべての生まれ変わりを体験した人が、あわれみ深い神が内に住まわれている徳として、自然に所有しているものです。あわれ

## 弟子をつくる指導者

みのない人は、神からの祝福は得られず、神の恵みを受け取ることができないことを表しています。使徒ヤコブは、このように同意しています。「あわれみを示したことのない者に対するさばきは、あわれみのないさばきです」（ヤコブ2:13）。もし神の御前に立ち、あわれみのない裁きを神から受けるとしたら、その人は天国に行くと思いますか、それとも地獄へ行くと思いますか。<sup>36</sup>36答えは明らかです。

イエスはかつて、主人から偉大なあわれみを受けたにもかかわらず、しもべ仲間にあわれみを示さなかったしもべの話をしました。主人が事の成り行きを知った時、主人は、「借金を全部返すまで、彼を獄吏に引き渡しました」（マタイ 18:34）。以前赦された借金が、全て元に戻ってしまいました。それからイエスは、弟子たちにこう忠告しました。「あなたがたもそれぞれ、心から兄弟を赦さないなら、天のわたしの父も、あなたがたに、このようになさるのです」（マタイ 18:35）。つまり、キリストにある兄弟姉妹が赦しを請うのに、それを拒むことは、自分が以前赦された罪を元に戻すこととなります。それは、一生返せない借金を全部返すまで、自分を獄吏に引き渡すこととなります。それは天国には程遠いように、私には思えます。繰り返しますが、あわれみのない人々は、神からのあわれみは受けられません。彼らは幸いな者には含まれません。

### 心のきよい者（The Pure in Heart）

六つ目の天国行きの人の特徴は、心のきよさです。口ばかりのクリスチャンとは違って、真に従う者は外見がきよいだけではありません。神の恵みによって、その人の心もきよくされています。彼らは心から神を愛し、それはその人の思いや動機に影響します。イエスは、そのような人は神を見ると約束しました。

繰り返して尋ねますが、真のクリスチャンが、心がきよくないという理由で、神を見ることができないのでしょうか。神は、「あなたは天国に来たが、私を見ることは

---

<sup>36</sup> 36興味深いことに、ヤコブ書の次の節は、「私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行ないがないなら、何の役に立ちましょう。そのような信仰がその人を救うことができるのでしょうか。」である（ヤコブ2:14）。

## 山上の垂訓

できない」と言うのでしょうか。勿論違います。真に天国行きの方は皆、きよい心を持っているのは明らかです。

### 平和をつくる者 (The Peacemakers)

平和をつくる者が次に挙げられています。その人は神の子どもと呼ばれます。イエスはここでも、キリストに真に従う者について描写していたに違いありません。と言うのも、キリストを信じる全ての方は神の子とされるからです(ガラテヤ 3:26参照)。

霊に生まれた者は、少なくとも以下の三つの方法で平和をつくる者です。

まず、彼らは以前敵であった神と和解しました(ローマ5:10参照)。

次に、彼らはできる限り他の人と平和に過ごします。彼らに争いや分裂という特性はありません。パウロは争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派をしている者たちは、神の御国を相続できないと書きました(ガラテヤ5:19-21参照)。真の信者は、争いを避けるために、余計と思えることも行ない、友好的関係を保とうとします。兄弟を愛していない間は、神との和解を得ることはできません(マタイ5:23-24; 第一ヨハネ4:20参照)。

第三に、福音を分かち合うことにより、真にキリストに従う者は、他の人にも、神との和解を得させ、自分たちの仲間になることを助けることができます。おそらく、この山上の垂訓を暗に示しながら、ヤコブは、「義の実を結ばせる種は、平和をつくる人によって平和のうちに蒔かれます」(ヤコブ3:18)と書いたのかもしれませんが。

### 迫害されている者 (The Persecuted)

最後にイエスは、義のために迫害されている者は幸いである、言いました。当然イエスは、正しく生きている人たちのことについて言っており、キリストの義が自分に転嫁された、と単に考えるだけの人たちのことではありません。キリストの命令に従う人たちは、未信者が迫害する対象です。そのような人たちは、神の国を相続します。

ここでイエスは、どんな種類の迫害について言及していたのでしょうか。拷問でしょうか。殉教でしょうか。いいえ、イエスのために、ののしられたり、ありもしな

## 弟子をつくる指導者

いことで悪口雑言を言われたりすることだ、とイエスは具体的に言いました。このことは、再び、その人が真のクリスチャンであるならば、未信者には明らかである、ということを示しています。そうでなければ、未信者がその人に悪口を言うことはないでしょう。どれ位多くの所謂クリスチャンたちが、未信者と見分けがつかなくなっていて、未信者が誰一人として彼らの悪口を言わないことでしょうか。そのような人たちは、実際クリスチャンでは全くありません。イエスの言った通りです。「みなの人にほめられるときは、あなたがたは哀れな者です。彼らの先祖は、にせ預言者たちをそのように扱ったからです」(ルカ 6:26)。もしあなたの周りの人たちが皆、あなたについて良いことしか言わないのであるのなら、それはあなたが偽信者だ、というしるしです。世は真のクリスチャンを憎みます(ヨハネ15:18-21; ガラテヤ 4:29; 第二テモテ 3:12; 第一ヨハネ 3:13-14も参照)。

## 塩と光 (Salt and Light)

かつてイエスは従順な弟子たちに、彼らの生まれつきの姿から変えられて、幸いな者とされたこと、またそのような者たちには、天の御国が相続されることを約束した後で、ある忠告の言葉を与えました。最近の多くの説教者は、霊的な山羊たちに、一度手に入れた救いは失われることはない、といつも保証していますが、そのような説教者とは違って、イエスは真の弟子たちに、その幸いな者の枠からいつでも外れる可能性はあると忠告する程、イエスは弟子たちを愛していました。

あなたがたは、地の塩です。もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。また、あかりをつけて、それを柁の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい(マ

## 山上の垂訓

タイ 5:13-16)。

イエスは弟子たちに、塩になることや光となることを強く勧めた訳ではないことに注意してください。イエスは（比喩的に）彼らは既に塩であり、塩気を保ち続けることを強く勧めました。イエスは（比喩的に）彼らは既に光であり、その光が隠れず、光続けるように強く勧めました。これは、名ばかりクリスチャンに対する多くの説教が、塩や光となる必要が彼らにあることを教えていますが、全くそれとは異なります。もし人々が既に塩や光でないなら、その人たちはキリストの弟子ではありません。彼らは、幸いな者の中にはいません。彼らは天国にも行けません。

イエスの時代では、塩は主に肉の保存に使われていました。キリストに従順に従う者として、私たちはこの罪で溢れる世が完全に腐り、崩れ去ることがないように保っているのです。しかしもし私たちが、この世と同じようなことをし出すと、私たちはもはや「何の役にも立たなく」（13節）なります。イエスは幸いな者に、塩気を保ち、その特殊な性質を保つよう忠告しました。彼らは世との違いをはっきり保っていなければ、彼らは「塩けをなくし」、「外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけ」です。これは、真の信者に向けられている、新約でのバックスライディング（後退）に対する、明白な忠告です。もし塩が本当に塩ならば、塩気はあるはずです。同じように、イエスに従う者はそれらしく歩んでいないのなら、その人は例えかつてクリスチャンでも、もはやイエスに従う者とは言えないのです。

キリストに真に従う者は、世の光です。光はいつも輝きます。光が輝かないのなら、光ではありません。この例えでは、光は良い行ないを表しています（マタイ 5:16 参照）。イエスは行ないのない者たちに何か始めることを促しているのではなく、良い行ないのある者たちにその良さを他に隠さないよう強く勧めていました。そうすることで、その善の源である天の御父に栄光を帰すからです。ここに神の恵みの御業と、その御業に私たちが賛同するという美しいバランスがあります。人が聖くなるには、その両方が必要なのです。

**キリストに従う者と律法との関係 (The Law's Relationship to Christ's Followers)**

## 弟子をつくる指導者

さて、ここから（ニュー・アメリカン・スタンダード訳聖書では）新しい段落に入ります。ここは、キリストが残りの説教で言わんとする多くのことについての導入部分であり、非常に大切な中枢部分と言えます。

わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思っはなりません。廃棄するためではなく、成就するために来たのです。まことに、あなたがたに告げます。天地が滅びうせない限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます。だから、戒めのうち最も小さいものの一つでも、これを破ったり、また破るように人に教えたりする者は、天の御国で、最も小さい者と呼ばれます。しかし、それを守り、また守るように教える者は、天の御国で、偉大な者と呼ばれます。まことに、あなたがたに告げます。もしあなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国に、はいれません（マタイ 5:17-20）。

もしイエスが聴衆に、イエスが律法や預言者を廃棄すると思っていることに対して警告したなら、おそらく聴衆の中にそう考える人たちが何人かは少なくともいた、と考えて良さそうです。なぜそのような憶測をたてたのかは、はっきりとしたことはわかりません。おそらく、イエスの律法学者やパリサイ人に対する厳しい非難が、イエスが律法や預言者を破棄しようとしてるよう何人かには映ったのかもしれない。

とにかく、イエスは弟子たちに、そのような憶測の過ちに気づいて欲しかったのは明らかです。イエスこそ旧約全体に神の息吹を吹き込んだお方なのですから、当然モーセや預言者を通してご自分が言った全てを破棄することはありません。反対に、律法と預言者を成就するとイエスは言いました。

具体的に、イエスはどのようにして律法と預言者を成就するつもりなのでしょう。ある人たちは、イエスはメシアについての預言を成就することだけをここでは言

## 山上の垂訓

っている、と考えます。確かにイエスは、全てのメシアについての預言を成就しました(し、これからもします)が、イエスの思いはそれだけではありません。文脈から、明らかにイエスは、律法の中の「一点一画」(18節)から戒めのうち「最も小さいもの」(19節)まで、律法と預言者の書に書いてあることの全てについて語っていました。

他には、私たちに代わって、イエスが律法の要求を満たすことで、律法を成就するとイエスは意図していた、と考える人たちがいます(ローマ8:4参照)。しかしそれも、イエスの思いではなかったことが文脈から読み取れます。そこに続く節で、イエスは自分の生死が律法の成就の基準点であるとは、一言も言いませんでした。むしろ、丁度次の節で、イエスは、律法が、少なくとも「天地が滅びうせる」までは効力があり、「全部が成就される」と言っており、成就の基準点はイエスの十字架の死のずっと先でした。イエスはそれから、人々の律法に対する態度が、天の御国での地位にすら影響し(19節)、人々は律法学者やパリサイ人以上に律法によく従っていなければ、天の御国に入ることはできないであろう、と宣言しました(20節)。

当然のことながらイエスは、ご自分がメシアについての預言や律法の型や影を成就し、私たちに代わって律法にある要件を満たすこと以外に、観衆がその律法の戒めを守り、預言者たちが言ったことを行うことを求めています。ある意味でイエスは、律法を完全に支持し、説明し、観衆の律法に対する理解で欠けているところを補うことで、律法に含まれた神の本心と元々の意図を表し、律法を成就しようとしていました。

<sup>37</sup>37 この17節で成就すると訳されているギリシャ語は、他の新約聖書の箇所では

---

<sup>37</sup> 37 この律法の成就については、いわゆる「律法の儀式的側面」と「律法の道徳的側面」の両方について言えることであろう。ただし、イエスが儀式に関する律法を成就したことに関しては、イエスの復活後、イエスの聖霊によって使徒たちに、より十分な説明が与えられた。今では、私たちは、イエスこそ神の小羊なので、新しい契約の下では、動物のいけにえは必要ではないと理解している。同様に、イエスは全ての食べ物は聖いと宣言したので(マルコ 7:19)、古い契約の中の食べ物に関する規定に従わない。私たちは、イエスが私たちの大祭司なので、地上の大祭司の執り成しを必要としていない、等である。しかし、儀式に関する律法と違って、モラルに関する律法は、今までにどの箇所でも、イエスのしたこと、話したこと、死と復活の前でも後でも、何によっても決して変えられたことはなかった。むしろイエスは、神のモラルに関する律法につ

## 弟子をつくる指導者

完成する、終わらせる、満たす、完全に実行する、といった意味にも訳されています。それこそイエスがしようとしていたことであり、ここから四文後から始まります。

イエスは律法や預言者を破棄するために来たのではなく、成就するために来ました。つまり、「完全に満たすため」です。私が山上の垂訓のこの部分を教える時、律法や預言者に神が与えた啓示の例として、私はよくグラス半分の水を皆さんに見せます。イエスは律法や預言者を廃棄するために来たものではありませんでした（と、私は言いながら、このグラス半分の水を捨てるまねをします）。むしろ、イエスは律法や預言者を成就しに来たのです（と言う時に、水ボトルを取り出し、グラス一杯に水で満たします）。これによってイエスが何を意味したか人々が理解できるようになります。

### 律法を守ることの重要性 (The Importance of Keeping the Law)

律法や預言者の書に書いてある命令を守ることについて、イエスは自分の主張をこれ以上力強く言えない程はっきりと表しました。イエスは、弟子たちに命令を守ることを望みました。これ以上重要なことはありませんでした。実際、命令をどう尊重するかによって、天の御国での地位が決まるのです。「だから、戒めのうち最も小さいものの一つでも、これを破ったり、また破るように人に教えたりする者は、天の御国で、最も小さい者と呼ばれます。しかし、それを守り、また守るように教える者は、天の御国で、偉大な者と呼ばれます」(5:19)。

そして二十節に行くと、「まことに、あなたがたに告げます。もしあなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国に、はいれません」。

これは新しい考えではなく、なぜなら（英語では20節の冒頭に*For*がある）という

---

いて詳しく説明し、承認し、使徒たちもイエスの復活後、聖霊の働きによって同様に行った。モーセの律法にあるモラル面は、全てキリストの律法、つまり新しい契約の律法に含まれる。ここではイエスは、モーセの律法下にあった当時のユダヤ人に話していたことを忘れないように注意して欲しい。つまり、マタイ 5 章 17 から 20 節にあるイエスの言葉は、新約聖書の中で、表され続けているイエスの啓示に照らし合わせて、解釈される必要がある。



## 山上の垂訓

接続詞でその前に述べられてきたことに繋げられて、締めくくる文となっていることに注意してください。命令を守ることがどれ程重要なのでしょうか。天の御国に入るには、律法学者やパリサイ人よりも、命令を良く守らなくてはなりません。ここでもまた、イエスの主題は同じです。すなわち、聖なる者だけが、神の御国を相続するのです。

弟子づくりをする指導者は、キリストの教えに相反さないように、律法学者やパリサイ人の義にまさる義のない人に、救いの保証はしません。

### どのような義についてイエスは言っているのか (Of What Kind of Righteousness Was Jesus Speaking?)

イエスが、私たちの義が律法学者やパリサイ人の義にまさるものでなければならぬ、と言った時、イエスは賜物として、私たちに転嫁される義についての法的地位をほのめかしていなかったのでしょうか。いいえ、イエスは正当な理由によってそうしませんでした。まず、文脈がそのような解釈と合いません。この文章の前後（と山上の垂訓全体）から、イエスは命令を守ることについて、つまり正しく生きることについて話していました。イエスの言葉の最も自然な解釈としては、私たちは律法学者やパリサイ人よりも正しく生きなくてはならない、ということです。また、イエスが、律法学者やパリサイ人を、ある基準に持ち上げておきながら、イエス自身の弟子たちには、その同じ基準を与えない、と考えるのは、なんとぼかしていることでしょうか。律法学者やパリサイ人が罪を犯したことに對して、イエスが彼らを罪に定め、一方同じ罪を弟子たちが犯しても、「救われる為の祈り」を単に弟子たちがしただけで、弟子たちを罪に定めない、と考えるのは、なんと愚かなことでしょうか。<sup>3838</sup>

私たちの問題は、自分たちにとって律法主義的に聞こえるために、この節の明白

---

<sup>38</sup> 38 更に、もしイエスを信じたために、賜物として法的な義が転嫁されることをイエスがここで語っていたのなら、なぜそれについて、少なくともほのめかすことをしなかったのだろうか。イエスが当時話しかけていた、あまり教育を受けていない聴衆は、イエスが義の転嫁について話しているなどとは、到底想像もできないであろうが、なぜあえて誤解を招きやすいこのような言い方をするのだろうか。

## 弟子をつくる指導者

な意味を受け入れたがらないことです。しかし、真の問題は、転嫁される義と実際の義の間に、切っても切れない相互関係があることを理解していないことにあります。しかし、使徒ヨハネは理解していました。彼はこう書いています。「子どもたちよ。だれにも惑わされてはいけません。義を行なう者は、キリストが正しくあられるのと同じように正しいのです」（第一ヨハネ3:7）。また、新生と実際の義の間の相互関係についても、ヨハネのように私たちは理解できていません。「もしあなたがたが、神は正しい方であると知っているなら、義を行なう者がみな神から生まれたこともわかるはずです。」（第一ヨハネ 2:29）。

イエスは五章二十節で話したことに、こう付け加えることができたに違いありません。「もしあなたが悔い改めれば、新しく生まれ変わり、生きた信仰によって、私の賜物である義を受け、内住する私の霊の力にあなたが協力すれば、あなたの実際の義は、確かに律法学者やパリサイ人の義よりもまさるようになるであろう。」

### 律法学者やパリサイ人よりも聖となる方法 (How to be Holier than the Scribes and Pharisees)

イエスが五章二十節で言ったことへの反応として、自然に頭に浮かぶ質問はこれでしょう。すなわち、律法学者とパリサイ人の義とは、一体どれ位の義なのだろうか、というものです。答えは、大した義ではない、ということです。

他のところで、イエスは彼らを、「白く塗った墓のようなものです。墓はその外側は美しく見えても、内側は、死人の骨や、あらゆる汚れたものがいっぱい」（マタイ23:27）と呼びました。つまり、彼らは外側は義であるように見えても、内側は悪でした。彼らは律法の文字を守ることはよくしていましたが、その霊を無視して、神の命令を捻じ曲げたり、時には変えたりして、自分たちの義を立てることをよくしていました。

この律法学者とパリサイ人にある本質的な欠点は、実は、山上の垂訓の残りの部分において、イエスが最も注目している点でした。イエスは良く知られた神の命令の多くを抜粋し、その直後に、それぞれ抜粋した命令の文字を守ることと、霊を守るこ

## 山上の垂訓

との違いを明らかにしました。そのようにして、イエスは律法学者とパリサイ人の誤った教えと偽善を繰り返し暴き、また自分の弟子たちに、イエスが真に望むことを明らかにしました。

イエスは、命令の例示を「あなたがたは聞いています」という言葉で始めています。イエスの聴衆は、おそらく旧約の巻物を宮で律法学者やパリサイ人によって読まれるのを聞いたことはあっても、実際に読んだことはない人たちでしたが、イエスはそのような人たちに向かって話していました。聴衆は、律法学者やパリサイ人の神のみことばについてのねじ曲がった解説を聞かされ、彼らの汚れた生活のようを見せられてきたために、生まれて以来ずっと、その誤った教えを受けてきた、と言っても過言ではないでしょう。

**律法学者やパリサイ人のようではなく、互いに愛し合う (Love Each Other, Unlike the Scribes and Pharisees)**

第六戒をイエスの最初の基準として用いて、イエスは、神が弟子たちに望んでおられることは何かについて教え始めると同時に、律法学者とパリサイ人の偽善を暴きました。

昔の人々に、『人を殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。

しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に向かって『能なし。』と言うような者は、最高議会で引き渡されます。また、『ばか者。』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます

(マタイ 5:21-22)。

まずイエスは、人が地獄に行く原因となり得ることについて警告していることに注目してください。すなわち、**聖なる者だけが神の御国を相続するのです。**

律法学者とパリサイ人は、第六戒を引用して、殺人がいけないことであり、殺人は裁きを受ける対象であると明白に警告し、教えました。

## 弟子をつくる指導者

イエスは、しかし、律法学者とパリサイ人があまり気づいていなかったことを、弟子たちに気づいて欲しかったのです。それは、私たちが思っているよりもずっと「軽い」違反が、実は人を法廷に、すなわち、明らかに神の法廷に至らせる、ということでした。なぜなら、私たちが互いを愛すること（二番目に大切な戒め）はとても大切なので、兄弟に対して腹を立てるなら、その時点で、神の裁きの御座では、既に自分は罪に定められていると考えるべきです。もし、私たちがその兄弟に対して不親切に話し、自分の怒りを言葉で言い表すなら、私たちの違反は更に深刻なものとなり、私たちは神の最高裁で罪に定められると考えるべきです。私たちがその域を超え、再度兄弟を中傷し、憎しみをあらわにするのなら、私たちは神の御前で罪と定められ、地獄へ投げ込まれます！<sup>39</sup>39 これは深刻です！

私たちの神との関係は、私たちの兄弟との関係で測られます。もし私たちが兄弟を憎むのなら、私たちは永遠の命を持っていないことを表すのです。ヨハネはこう書きました。

兄弟を憎む者はみな、人殺しです。いうまでもなく、だれでも人を殺す者のうちに、永遠のいのちがとどまっていることはないのです（第一ヨハネ 3:15）。

神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません（第一ヨハネ 4:20）。

イエスが命じたように、互いに愛し合い、兄弟と仲たがいをしたら、和解に向けて働くことが何とも重要なことです（マタイ 18:15-17 参照）。

---

<sup>39</sup> 39 これはキリストにある兄弟姉妹と私たちの関係に適用される。聖書が一般的に愚か者について書いてあるように（箴言 1:7; 13:20 参照）、イエスは、特定の宗教指導者を愚か者と呼んだ（マタイ 23:17 参照）。

## 山上の垂訓

イエスは続けました。

だから、祭壇の上に供え物をささげようとしているとき、もし兄弟に恨まれていることをそこで思い出したなら、供え物はそこに、祭壇の前に置いたままにして、出て行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから、来て、その供え物をささげなさい（マタイ 5:23-24）。

もし私たちの兄弟との関係が正しくないのなら、私たちの神との関係も正しくないということになります。パリサイ人はあまり大事ではないことを重要視し、大事なことを過小評価して、イエスが言うように、「ぶよは、こして除くが、らくだはのみこんでいる」（マタイ23:23-24）ところに罪がありました。彼らは十一献金や捧げものの重要性を強調しましたが、更にずっと大切な、第二の偉大な戒めである、互いに愛し合うことについては軽んじていました。神への愛を表すための捧げものであるはずなのに、それをしながら二番目に大切な戒めを破るとは、何という偽善でしょうか！これこそが、正にイエスが警告していたことでした。

神の裁きの厳しさについて、イエスは更に続けました。

あなたを告訴する者とは、あなたが彼といっしょに途中にある間に早く仲良くなりなさい。そうでないと、告訴する者は、あなたを裁判官に引き渡し、裁判官は下役に引き渡して、あなたはついに牢に入れられることになります。まことに、あなたに告げます。あなたは最後の一コドラントを支払うまでは、そこから出ては来られません（マタイ 5:25-26）。

できる限り、兄弟と平和と保って一緒に暮らすことで、一層のこと、神の法廷から遠ざかるのが最善です。もし兄弟姉妹が私たちに対して怒っていて、「法廷の行く途中に」私たちがかたくなに和解の働きを拒むのなら、それは人生を通して神の御前に立つ旅に出ることとなり、私たちはきっと後悔するに違いありません。イエスがここで言ったことは、マタイ十八章二十三から三十五節にある、あわれみのないしもべ

## 弟子をつくる指導者

の例を真似てはならない、というイエスの忠告にとても似ています。自分は赦されたにもかかわらず、あわれみを人に与えることを拒んだこのしもべは、自分の持っていた借金を元に戻され、「借金を全部返すまで」（マタイ18:34）獄吏に投げ込まれました。ここでイエスは、神が望むように兄弟を愛さなければ、永遠に続く悲惨な結末を招くことになる、同じように警告しています。

## 律法学者やパリサイ人のようではなく、性的な聖さを保つ **(Be Sexually Pure, Unlike the Scribes and Pharisees)**

第七戒は、律法学者とパリサイ人がいかに律法の文字を守る反面、その霊をないがしろにしているかに関してイエスが挙げる二つ目の例を主題としています。イエスは、律法学者とパリサイ人よりも性的に聖くなることを求めました。

『姦淫してはならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。もし、右の目が、あなたをつまづかせるなら、えぐり出して、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに投げ込まれるよりは、よいからです。もし、右の手があなたをつまづかせるなら、切って、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに落ちるよりは、よいからです（マタイ5:27-30）。

イエスはここでもその最重要テーマを維持していることに注目してください。すなわち、**聖なる者だけが神の御国を相続するのです**。イエスは地獄について再び警告し、そこを避けるために何をしなくてはならないのかを教えました。

律法学者とパリサイ人は、第七戒を軽んじることはできなかったのですが、表面的にはそれに従い、自分の妻たちに忠実を保ちました。しかし、彼らは他の女性と性的な関係を持つ空想にふけていました。彼らは、市場で見かける女性の服を頭の中で脱がせていました。彼らは心で姦淫を犯す者で、従って第七戒の霊に違反していました。

## 山上の垂訓

今日の教会でもそれと変わらないことをしている人が、結構いるのではないのでしょうか。

神は、勿論、人々に性的に完全に聖くあることを望んでいました。明らかに、あなたの隣人の妻と性的な関係をつことが正しくないことなら、そのようなことを想像することも同様に正しくないことです。イエスは、モーセの律法で既に要求されていたことよりも、更に厳しい律法を付け加えた訳ではありません。第十戒は明らかに情欲を抱くことを禁じています。「あなたの...隣人の妻...を、欲しがってはならない」(出エジプト 20:17)。

イエスの聴衆の中に、咎めを受けた人はいたのでしょうか。多分、いたでしょう。彼らは何をすべきだったのでしょうか。イエスが教えた時すぐに、悔い改めるべきでした。とにかく、どんな代価を払ってでも、情欲で溢れる者はそれを止めなくてはなりません。なぜなら、その人たちは地獄へ行くからです。

勿論イエスは、情欲に燃える者が、文字通り自分の目をえぐり取ったり、手を切断することを意味していないことは、正気の人ならわかります。情欲に燃える人が目をえぐり取ったら、単に片目の情欲に燃える人となるだけです！イエスは、第七戒の霊に従う重要性をドラマチックに、また厳粛に強調していました。永遠はそれにかかっていました。

イエスの模範に従うことで、弟子をつくる指導者は、自分の弟子に、その人をつまずかせるどんなことも「切り取る」よう戒めることでしょう。もしそれがケーブルテレビならば、その接続を断つ必要があります。もし普通のテレビなら、テレビをどかす必要があります。もし購読雑誌なら、それをキャンセルすべきです。もしインターネットなら、その接続を断つべきです。もし窓を開けていることなら、雨戸を閉めるべきです。永遠に地獄にいることを考えれば、これらのどれもやる価値はあります。なぜなら、弟子をつくる指導者は、イエスがそうであったように、本当に神の民を愛しており、人々に真実を告げ、警告を与えるからです。

### 姦淫を犯す他のやり方 (Another Way to Commit Adultery)

## 弟子をつくる指導者

イエスの次の例は、その前に話したことと非常に関連深く、おそらくそのために次に挙げられているのでしょう。これは新しいテーマというよりは、その前の内容を更に深く、入念に取り扱っています。ここでのテーマは、「パリサイ人が行っている他のことで、姦淫と同等に見なされること」です。

また『だれでも、妻を離別する者は、妻に離婚状を与えよ。』とされています。しかし、わたしはあなたがたに言います。だれであっても、不貞以外の理由で妻を離別する者は、妻に姦淫を犯させるのです。また、だれでも、離別された女と結婚すれば、姦淫を犯すのです（マタイ 5:31-32）。

これは、律法学者とパリサイ人が、いかにして神の律法を曲解して、自分たちの罪深い生活を維持できるかと、便宜を図っている例です。

それではここで、イエスの時代にいる架空のパリサイ人を作ってみましょう。道の反対側に、美しい女性が住んでおり、彼は彼女に対して情欲を抱いています。彼は彼女を見かける度に浮気をします。彼女も彼に好意を寄せているようで、彼女への思いは高まります。彼は彼女が服を脱いだ姿を見たいと熱望し、彼の性的空想の中で彼女をいつも想像します。彼女さえ手に入れば、と！

しかし問題があります。彼は結婚しており、彼の宗教は姦淫を禁じています。彼は第七戒を破りたくありません（とは言っても、毎回彼が情欲を抱く時、既にそれを破っていますが）。彼はどうすべきでしょうか。

解決があります！もし彼が今の配偶者と離婚すれば、彼は心の中の愛人と結婚できるのです！しかし、離婚は律法の範囲内でしょうか。パリサイ人仲間は大丈夫だと言います。それを支持する聖句もあると！申命記二十四章一節には、妻を去らせる時に離婚状を渡すことが書いてあります。ということは、ある状況においては、離婚は合法に違いありません！でも、ある状況とはどんな状況でしょうか。神が言ったことを良く読みます。

人が妻をめとって、夫となったとき、妻に何か恥ずべき事を発見し



## 山上の垂訓

たため、気に入らなくなった場合は、夫は離婚状を書いてその女の手に渡し、彼女を家から去らせなければならない（申命記 24:1）。

なるほど！彼は彼女に何か恥ずべき事を発見すれば、彼女と離婚できません。そして、発見しました！妻は、通りの反対側にいる女性程、魅力的ではありません！（これはあり得ない例ではありません。イエスの時代の離婚について、最も評判の良い教えをしているラビ・ヒレルによると、男性は妻よりもっと魅力的な女性を見つけたら、それは彼の目には「恥ずべき事」が妻にあるということで、合法的に離婚できました。ラビ・ヒレルはまた、もし妻が食事で塩を入れすぎたり、他の男性と話したり、男の子を産まなかった、といった理由で、男性は妻と離婚できた、とも教えました。）

この情欲を抱くパリサイ人は、必要な離婚状を妻に渡すことで合法的に離婚ができ、空想の中の女性と急いで結婚するのです。神のおきてを順守してきているので、罪悪感を負うことはこれっぽっちもありません。

### 違った見解（A Different View）

勿論、神は物事を違う視点で見えています。神は申命記二十四章一から四節で書かれている「「恥ずべき事」が実際何であるか、またそれが離婚するもっともな理由かどうかすら決して明記しませんでした。実際、この箇所は離婚がどの時点で合法となり、また合法とならないのかについては、一切触れていません。ここでは単に、二度離婚した女性、あるいは、一度離婚して、二度目の夫とは死別した女性が、最初の夫と再婚することが禁じられているだけです。この箇所に基づいて、離婚を合法化することが、神の御目には何か「恥ずべき事」として映っているに違いないと言うならば、それは、この聖句に意味をこじつけていることになります。

とにかく、神の思いでは、私が描写したこの架空の男性は、姦淫をする者となんら変わりはありません。この人は第七戒を違反しています。事実、一般的な姦淫者よりも更に罪深いことに、この人は「二倍の姦淫」を犯しています。どうしてでしょうか。まず彼は、彼自身が姦淫を犯しました。イエスは後に、「まことに、あなたがたに告げます。だれでも、不貞のためでなくて、その妻を離別し、別の女を妻にする者

## 弟子をつくる指導者

は姦淫を犯すのです」(マタイ19:9)と言いました。

次に、彼が離別した妻は、生き残るためには他の主人を見つける必要があります。これは神から見ると、このパリサイ人は、自分の妻に他の男性と性的関係を強制したのと同様です。従って、彼女の「姦淫」は彼に責任があります。<sup>40</sup>イエスは、「だれであっても、不貞以外の理由で妻を離別する者は、妻に姦淫を犯させるのです」(マタイ5:32、一部強調)と言いました。

ひょっとすると、イエスの「だれでも、離別された女と結婚すれば、姦淫を犯すのです」(マタイ 5:32)という提言により、神がこのパリサイ人に、彼の元妻の新しい夫の「姦淫」の罪を課すのなら、イエスは、私たちの架空の情欲に満ちたパリサイ人を「三倍の姦淫」の罪に定めるかもしれません。<sup>41</sup>

これは、聖書の他の箇所でも、パリサイ人がイエスに、「何か理由があれば、妻を離別することは律法にかなっているのでしょうか」(マタイ19:3)と尋ねたように、イエスの時代には盛んに論じられる問題でした。彼らの質問は彼らの心を現しています。明らかに、少なくとも彼らの何人かは、理由の如何を問わず離婚が合法であると信じたかったのです。

クリスチャンが離婚について、これらの聖句を用いて誤った解釈をし、神の子供たちに重たい足かせをかけていることは、何とも恥ずかしい話でしょう、と言わざるを得ません。イエスは、まだ救われていなかった時に離婚をしたクリスチャンで、キリストを同じように愛する、素晴らしい将来の相手を見つけて、その人と結婚することになった人について、語ってはいませんでした。それは姦淫に値しません。もしそれがイエスの意味したことなら、福音はもはや、罪人の全ての罪に対して赦しを与え

---

<sup>40</sup> 40 勿論、彼女が再婚する時に、神は彼女に姦淫の責任があるとはしない。なぜなら、彼女は単に彼女の夫の罪の被害者であったのだから。もし彼女が再婚しなければ、当然のことながら、イエスの言葉は意味をなさない。つまり、彼女が姦婦と見なされることはない。

<sup>41</sup> 41 ここでも、神は新しい夫に姦淫の罪を課さない。彼は純粹に離婚した女性と結婚し、彼女を養うこと高潔なことをしているだけだ。しかし、もし男性が自分が結婚できるように、女性にその夫との離婚を励ましたのなら、その人は姦淫の罪に課される。ここでイエスが思っているのは、この罪のことであろう。

## 山上の垂訓

るものではなく、福音を変えなくてはいけなくなってしまう。「イエスはあなたのために命を捧げました。もしあなたが悔い改めて、イエスを信じるなら、あなたの罪は全て赦されます。しかし、もしあなたが離婚経験者ならば、これから二度と結婚してはなりません。さもなければ、あなたは姦淫を犯すこととなり、聖書はそのような者は、地獄へ行くと言っています。また、あなたが既に離婚し、再婚した人なら、キリストのもとへ来る前に、あなたはもう一つの罪を犯して、その現在の配偶者と離婚しなくてはなりません。そうでなければ、あなたは姦淫の中に住み続けることとなります。姦淫を犯す者は救われません。」<sup>42</sup>これが福音と言えるでしょうか。<sup>43</sup>律法学者やパリサイ人のようではなく、正直でいる (**Be Honest, Unlike the Scribes and Pharisees**)

律法学者とパリサイ人の不義なる振る舞いと聖書の悪用について、イエスが挙げる三つ目の例は、真実を言うという神の命令に関係します。律法学者やパリサイ人は、嘘をつく非常に巧妙な方法を作り出しました。マタイ二十三章十六から二十二節からわかることは、彼らは神殿や祭壇や天を指して誓うなら、その誓いを果たす義務はないと考えていました。しかし、彼らが神殿の黄金や祭壇の上の供え物や天の御座に座しておられる神を指して誓うなら、その誓いを果たす義務がありました！そんなことを考える大人は、こっそりと（中指と人差し指を十字に交差させて）幸運を祈っていれば、真実を言う必要はない、と考える子供に等しかったと言えます。

さらにまた、昔の人々に、『偽りの誓いを立ててはならない。あなたの誓ったことを主に果たせ。』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。決して誓ってはいけません。すなわち、天をさして誓ってはいけません。そこは神の御座だからです。地をさして誓ってもいけません。そ

---

<sup>42</sup> 42 勿論、他にも取り上げられる状況はある。例えば、未信者の夫に離婚されたクリスチャンの女性が、クリスチャンの男性と再婚する場合、彼女は確かに姦淫の罪には定められない。

<sup>43</sup> 43 後の章で、離婚、再婚について更に詳しく取り扱う。

## 弟子をつくる指導者

こは神の足台だからです。エルサレムをさして誓ってもいけません。そこは偉大な王の都だからです。あなたの頭をさして誓ってもいけません。あなたは、一本の髪の毛すら、白くも黒くもできないからです。だから、あなたがたは、『はい。』は『はい。』、『いいえ。』は『いいえ。』とだけ言いなさい。それ以上のことは悪いことです（マタイ 5:33-37）。

誓いを立てることに関する神の元々の命令には、別のものを指して誓うことについて何も触れませんでした。神はご自分の民にいつも真理を語ることを期待しており、それによって誓う必要もなくなります。

誓いを立てることは間違いではありません。それは単なる約束で、それ以上のものではありません。事実、神に従う誓いはとても良いことです。救いはイエスに従う誓いから始まります。しかし、別のものを指して誓って、他の人に自分を信じさせようとする時、その人は普段から嘘をつくことが明らかに認められます。いつも真実を語る人は、誓う必要は全くありません。しかし、今日の多くの教会には嘘つきが沢山いて、指導者たち自らがごまかしと狡猾さに人々を導いています。

弟子づくりをする指導者は、正直であることの模範を示し、弟子にいつも真理を語ることを教えます。そのような指導者は、すべて偽りを言う者たちの受ける分は、火と硫黄との燃える池の中にあるというヨハネの警告を知っています（黙示録 21:8 参照）。

### 律法学者やパリサイ人のようではなく、復讐しない (Don't Take Revenge, as do the Scribes and Pharisees)

次に挙げるイエスのパリサイ人たちへの抗議項目は、旧約聖書のとても有名な箇所に対して彼らが行う曲解についてです。この箇所については、「聖書の解釈」の章でも取り上げました。

『目には目で、歯には歯で。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。悪い者に手

## 山上の垂訓

向かってはいけません。あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい。あなたを告訴して下着を取ろうとする者には、上着もやりなさい。あなたに一ミリオン行けと強いるような者とは、いっしょに二ミリオン行きなさい。求める者には与え、借りようとする者は断わらないようにしなさい（マタイ5:38-42）。

モーセの律法では、他の人に危害を加えて法廷で有罪と認められると、その人の処罰は、その人が加えた危害と同等のものを受けべきであることが、提言されていました。もし人が相手の歯を折ってしまった場合、公平と義を立てるために、その人の歯も折られるべきです。この命令は、大きな犯罪についての法廷で、義が立てられることが保証されるために与えられました。神は、犯罪を防ぎ、義を確立し、復讐を阻止するために、法の下で、法廷や裁判官制度を設けました。そして神は、裁判官にえこひいきせず、判決にあっては公正であるよう命令しました。彼らは「目には目を、歯には歯を」を行うべきでしたが、この言葉と命令はいつも法廷の正義について書かれている箇所で見つかります。

しかし、律法学者とパリサイ人は、再び命令を捻じ曲げて、それを、個人的な復讐は聖なる義務であるとする命令に変えてしまいました。どうやら彼らは、どんなに些細な過ちに対しても復讐する「寛大さ皆無」ポリシーを採用してしまったようです。

しかし、神はいつもご自分の民に更なるものを要求します。復讐は神がはっきりと禁じました（申命記32:35）。旧約では、神の民が敵に対して親切にすることを教えました（出エジプト23:4-5; 箴言25:21-22参照）。イエスは弟子たちに、悪者を取り扱う時に、もう片方の頬を向け、余計に数ミリオン行くことを教えて、この真理を支持しました。私たちが悪く扱われる時に、神は私たちが、あわれみ深く、悪に代えて善を返して欲しいと思っています。

しかしイエスは、私たちの総利益を人々が剥奪することを容認し、他人が望むなら、私たちの人生を台無しにすることを許可しているのでしょうか。未信者を法廷に連れて行き、私たちに対してなされた違法行為に対して、義を求めることはいけない

## 弟子をつくる指導者

ことなのでしょう。勿論、そんなことはありません。イエスは、法廷で大きな犯罪に対して当然支払われるべき義を獲得することについてではなく、些細な違反に対して個人的な復讐をすることについて話していました。イエスは、私たちの背中をたたいた今刺した人に、今度は首を絞めさせるために首を出すように、とは言わなかったことに注意してください。イエスは、私たちの車を要求する人に家も与えよ、とは言いませんでした。イエスは単純に、自分勝手な人たちを扱うにあたり、些細な違反や、よくありがちな難題に私たちが日々直面する時に、高度の我慢と憐みを表すよう教えました。イエスは私たちに、自分勝手な人が望む以上に寛容となることを望んでいます。その標準に、律法学者とパリサイ人は全く及びませんでした。

なぜこれ程までに、多くの口だけのクリスチャンが、簡単に気分を害するのでしょうか。なぜ頬を叩かれることの十分の一にも満たないくらい些細なことに、そんなにも簡単に怒るのでしょうか。これらの人々は救われているのでしょうか。弟子づくりをする指導者は、もう片方の頬を向ける模範を表し、また弟子に同じようにやるよう教えます。

**律法学者やパリサイ人のようではなく、敵を憎まない (Don't Hate Your Enemies, as do the Scribes and Pharisees)**

最後にイエスは、律法学者とパリサイ人が彼らの憎しみに溢れた心に適合させる為に変えてしまった、もう一つの神から与えられた命令を取り上げました。

『自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。

自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです。天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。自分を愛してくれる者を愛したからといって、何の報いが受けられるでしょう。取税人でも、同じことをしているではありませんか。また、自分の兄弟にだけあ

## 山上の垂訓

いさつしたからといって、どれだけまさったことをしたのでしょうか。

異邦人でも同じことをするではありませんか。だから、あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい(マタイ 5:43-48)。

旧約聖書で神は、「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」(レビ記19:18)と言いましたが、律法学者とパリサイ人は便宜的に隣人を、自分を愛した人だけ、と定義していました。他全ては敵であり、神は隣人だけを愛するように言ったので、敵を憎むことは正しいに違いありません。しかし、イエスによると、これは神の意図したことでは全くありませんでした。

イエスはその後、良きサマリヤ人の話を通して、全ての人が私たちの隣人であることを教えました。<sup>44</sup>神は、敵を含む、全ての人を私たちが愛することを望んでおられます。それが神の子供たちに与える神の基準であり、その基準で神ご自身が存在しておられます。神は良き人々にだけでなく、悪い人々にも同様に、穀物を育てるための日光や雨を送ります。私たちは神の模範に従って、それにふさわしくない人々にも親切な心を表すべきです。その行動は、私たちが「天におられるあなたがたの父の子ども」(マタイ5:45)であることを表します。本当に新しく生まれ変わった者は、天の御父のように行動するのです。

私たちの敵に愛を示すことを神は私たちに望んでいますが、その愛は感情でもなく、彼らの悪を容認することでもありません。神は、私たちに敵対する人たちに対して温かな感情を育てることを、私たちに望んでいる訳ではありません。神は、私たちの敵が本当に素晴らしい人たちである、といった真実ではないことを告げるように、とも言っていません。しかし、神は彼らに憐み深く接し、少なくとも彼らに挨拶をしたり、彼らのために祈ったりと、意図的な行動をあちら側に対して取ることを望んで

---

<sup>44</sup> 44 ユダヤ人の律法の専門家が、自分の義を立てるために、イエスに「私の隣人とは、だれのことですか」と尋ねたが、その人は自分には既に正しい答えがあると思っていたことは間違いない。イエスは、サマリヤ人の話を用いて、その人の質問に答えた。そこでは、ユダヤ人から嫌われていた人種であるサマリヤ人が、大変な目にあつたユダヤ人にとって隣人であることがはっきりと示された(ルカ 10:25-37 参照)。

## 弟子をつくる指導者

います。

イエスはもう一度、重要テーマである、**聖なる者だけが神の御国を相続すること**を強調したことに注目してください。イエスは弟子たちに、もし自分たちを愛する者たちだけを愛するのならば、ユダヤ人が皆、絶対地獄行きであると信じていた二種類の人たち、異邦人や収税人と何ら変わらない、と教えました。それは、自分たちを愛する者たちだけを愛する人たちは地獄へ行く、という意味でもありました。

**律法学者やパリサイ人のようではなく、正しい動機で良い行ないをする (Do Good for the Right Motives, Unlike the Scribes and Pharisees)**

イエスは弟子たちが聖くあるだけでなく、その聖さに正当な根拠があることを望んでいます。神の命令に従っていても、間違った動機からその人の従順が来ているのなら、それは神には喜ばれません。律法学者とパリサイ人は、人に良い印象を与えるためだけに、良い行ないをしていました（マタイ 23:5 参照）。イエスは弟子たちにそうならないことを求めています。

人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から、報いが受けられません。だから、施しをするときには、人にほめられたくて会堂や通りで施しをする偽善者たちのように、自分の前でラッパを吹いてはいけません[イエスの聴衆はイエスが誰のことを話しているか知っていました]。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。あなたは、施しをするとき、右の手のしていることをに知られないようにしなさい。あなたの施しが隠れているためです。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます（マタイ 6:1-4）。

イエスは弟子たちに貧しい人へ施しをするよう望んでいます。律法で命じていますが、律法学者とパリサイ人は、表向きは気前の良い施しを公にするために、ラッパを吹いて貧しい人たちを呼び集め、施しをしていました。しかし、口だけのクリスチ



## 山上の垂訓

ヤンたちで、貧しい人たちへの施しを一切していない人たちが、一体どれ位いるのでしょうか。彼らは施しをする動機を吟味する必要にまで至っていません。もし、自分勝手な思いが律法学者とパリサイ人に自分たちの施しの宣伝をする動機となっているのなら、何が口だけのクリスチャンに、貧しい人たちが窮地の状態にあるのを無視させる動機なのでしょう。これについて、彼らは律法学者とパリサイ人の義を上回ることになるのでしょうか。

パウロは第一コリント三章十から十五節で繰り返しているように、私たちは間違った理由で良い行ないをすることができます。もし、私たちの動機が純粋でなければ、私たちの善行には報いがありません。パウロは、不純な動機から福音を宣べ伝えることすらできると書きました（ピリピ 1:15-17 参照）。イエスが指示したように、自分たちの施しが純粋な動機によるものかを確かめる良い方法は、自分たちの左手に右手のしていることを知らせない位、なるべく人に知られないようにして与えることです。弟子づくりをする指導者は（もし与える手段があれば）弟子たちに貧しい人たちへ施すことを教え、その人は自分が教えることを静かに実践します。

### 正しい理由での祈りと断食（Prayer and Fasting for the Right Reasons）

イエスは弟子たちが祈り、断食することを望んでいましたが、それは、人々に見られるためではなく、天の御父を喜ばすためです。そうでなければ、人からほめられるという、とても一時的な報いを受けるために、祈り、断食する地獄行きの律法学者やパリサイ人と、何ら変わらないことになります。イエスは弟子に警告しました。

また、祈るときには、偽善者たちのようであってははいけません。彼らは、人に見られたくて会堂や通りの四つ角に立って祈るのが好きだからです。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。あなたは、祈るときには自分の奥まった部屋にはいりなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。

## 弟子をつくる指導者

断食するときには、偽善者たちのようにやつれた顔つきをしてはいけません。彼らは、断食していることが人に見えるようにと、その顔をやつすのです。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。しかし、あなたが断食するときには、自分の頭に油を塗り、顔を洗いなさい。それは、断食していることが、人には見られないで、隠れた所におられるあなたの父に見られるためです。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が報いてくださいます（マタイ 6:5-6, 16-18）。

口だけのクリスチャンのどの位が、祈りも断食もしない生活を送っているのでしょうか。<sup>45</sup>これについて、このようなクリスチャンの義は、祈りと断食を（不正な理由からではあるが）きちんと両方している律法学者やパリサイ人の義よりも上回っているのでしょうか。

### 祈りと赦しに関する余談（A Digression Regarding Prayer and Forgiveness）

祈りについて語っている時に、イエスは少し本題から反れて、どのように祈るべきかについて、弟子たちに更に具体的な導きを与えました。イエスは、私たちの祈りを通して神がご自身を啓示されることを否定し、しいては御父を侮辱するようなことがないやり方で、私たちに祈って欲しいのです。例えば、私たちが神に頼む前から神は私たちの必要をご存じであるので（神は全てをご存知です）、私たちが祈る時に、意味もなく繰り返すことは全く理にかなっていません。

また、祈るとき、異邦人のように同じことばを、ただくり返してはいけません。彼らはことば数が多ければ聞かれると思っているのです。だから、彼らのまねをしてはいけません。あなたがたの父なる神は、あなたがたが願うする先に、あなたがたに必要なものを

---

<sup>45</sup> 45 この本の後の章で、断食について丸々一章費やした。

## 山上の垂訓

知っておられるからです（マタイ 6:7-8）。

本当に祈りは、どれだけよく私たちが神を知っているかを表しています。神ご自身が表れているみことばを通して神を知る者たちは、神の御旨がなるようにとか、神に栄光があるように、と言う言葉で祈りを締めくくります。そのような人たちの一番の願いは、聖くなり、神を完全に喜ばすことです。これは、「主の祈り」と呼ばれるイエスの祈りの模範に反映されていて、イエスが弟子たちに与える次の導きが含まれていました。そこには、神の視点から、私たちの優先順位や献身がどうあるべきかが明示されています。<sup>46</sup>

だから、こう祈りなさい。『天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。御国が来ますように。みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください（マタイ 6:9-11）。

キリストの弟子が最も気にすべきことは、神の御名があがめられる、つまり尊敬され、崇拜され、聖いものとして扱われることです。

勿論、神の御名があがめられるように祈る人たちは、神の御名をあがめるならば、自分たち自身も聖くあらねばなりません。そうでないことをするのなら、それは偽善となってしまいます。つまり、この祈りは、私たちがそうであるように、他の人たちも彼ら自身を神に明け渡して欲しいという私たちの願いが反映されています。

この模範の祈りにある二つ目の願いも似ています。すなわち、「御国が来ますように」というものですが、御国という考えには、王がいて、その王が自分の支配下にある王国を治めていることを暗示しています。クリスチャンの弟子たちは、それぞれの人生を治め、また全世界を治める王を切望しています。全ての者が従順なる信仰で、王なるイエスに膝を屈めることをです！

---

<sup>46</sup> 46 残念なことに、この祈りが「イエスの御名によって」祈られていないために、クリスチャンはこの祈りを用いるべきでないと主張する者がいる。しかし、この論理を適用すると、使徒の働きや使徒書簡の中に記録されている使徒たちの多くの祈りは、「クリスチャンの祈り」ではない、ということになってしまう。

## 弟子をつくる指導者

三つ目の願いは、最初の二つの願いを反映しています。すなわち、「みこころが天で行われるように地でも行われますように」です。繰り返しますが、私たちが自身自身の人生の中で、神の御旨に屈せずして、どうしてこのような祈りを心からすることができでしょうか。真の弟子は、天では神の御旨が完璧に、また完全に行われているように、地上でも神の御旨がなることを望みます。

神の御名があがめられ、みこころがなり、御国が来ることは、食物、つまり私たちの「日ごとの糧」が維持されることよりも、より重要であるとなるべきです。この四つ目の願いは、理由があって四番目に置かれています。この願いの中だけを見ても、私たちの正しい優先順位が反映されており、少しの欲もここには見つかりません。キリストの弟子は、神に仕え、お金には仕えていません。弟子は、富を地上に積むことに集中していません。

また私は、この四つ目の願いが示唆しているように思える事を付け加えたいのですが、それは、この模範の祈りが日々、特に一日の始まりに祈られるべきだ、ということなのです。

### 模範の祈りの続き (The Model Prayer Continues)

キリストの弟子は罪を犯すのでしょうか。イエスは弟子たちに、自分の罪の赦しを請うことを教えているので、当然のことながら、時々犯します。

私たちの負いめをお赦してください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。 私たちを試みに会わせないで、悪からお救いください。』〔国と力と栄えは、とこしえにあなたのものでからです。アーメン。〕 もし人の罪を赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してくださいます。 しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりません。(マタイ 6:12-15)。

イエスの弟子たちは、彼らの不従順は神への敵対であることを知っており、罪を犯す時、彼らは恥じられます。彼らはそのシミを取り除いて欲しいのですが、感謝な

## 山上の垂訓

ことに、憐み深い天の父は彼らを喜んで赦してくださいます。しかし、彼らから赦しを請う必要があります、これが主の祈りの中にある五つ目の願いです。

しかし、彼らが赦されることは、彼らが他の人を赦せるかにかかっています。彼らは多くを赦されたのですから、赦しを請う全ての人を赦す義務があります。(また、たとえ相手はしなくても、彼らは和解の為に相手を愛し、またそれに向かって働く義務があります。) 彼らが赦すことを拒むなら、神も彼らを赦しません。

六つ目の最後の願いも、明白に、真の弟子の願いが聖くなることであることを表しています。「私たちが試みに会わせないで、悪[もしくは『悪者』]からお救いください」。真の弟子は聖さを熱心に求めているため、自分が誘惑に負けないように、誘惑されるかもしれないような状況に神が導かないようお願いするのです。更に、そのような弟子は、自分を罠におとしめるようなあらゆる悪から自分を救っていただくよう神に要請します。確かに、悪と誘惑に満ちた世へ旅に出る前の一日の始まりに、最適な祈りです。当然、神が私たちに祈るように言われたこの祈りに神は答えてくださることを私たちは期待できます！

神を知る者たちは、この祈りに含まれるこれら六つ全ての願いが適切であることがわかっています。理由は祈りの一番最後に表れています。「[なぜなら]国と力と栄えは、とこしえにあなたのもものだからです」(マタイ6:13)。神は偉大な王で、私たちが仕える方がおられる王国を完全に支配しておられます。神は力に溢れ、神の御旨にあえて逆らう者など誰もいません。全ての栄光は永遠に神にあります。神は私たちの従順を受けるのにふさわしいお方です。

主の祈りの最も大切なテーマは何でしょうか。聖さです。キリストの弟子は、神の御名があがめられ、神の統治が地上でなされ、神の御旨があらゆるところで完全になることを切望します。彼らにとって、このことは日々の糧よりももっと重要です。キリストの弟子は、神の御目に喜ばれたく、失敗する時は、神からの赦しを求めます。赦された者として、彼らは他の人を赦します。彼らは誘惑は罪の機会を増やすので、誘惑を避けたいと願う程に、完全に聖くなることを切望します。弟子をつくる人は、

## 弟子をつくる指導者

弟子たちにこれらのことを教えます。

### 弟子と財産 (The Disciple and His Material Possessions)

次に挙げる山上の垂訓のテーマは、専ら人生の動機が財産を築くことにある口先だけのクリスチャンには、とても耳の痛い話になるかもしれません。

自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。からだのあかりは目です。それで、もしあなたの目が健全なら、あなたの全身が明るいが、もし、目が悪ければ、あなたの全身が暗いでしょう。それなら、もしあなたのうちの光が暗ければ、その暗さはどんなでしょう。だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということとはできません(マタイ 6:19-24)。

イエスは、自分の宝を地上にたくわえることをやめるように命じました。では、「宝」とは一体何から成るのでしょうか。文字通りの宝は、宝箱に通常収められ、どこか別の場所に保管され、実用的に使われることはありません。イエスはそこでは虫とさびできず物になり、また盗人も寄せ付けると言いました。言い換えれば、それは「不必要なもの」です。虫がつく服とは、たんすの奥にしまっているものであり、頻繁に着る服ではありません。盗人も人々があまり必要としないようなもの、例えば美術品や宝石類、高級で目新しい小物や質入れできるものを、よく盗みます。

真の弟子は、「財産全部を捨て」(ルカ14:33参照)たのです。真の弟子は、神のお金の単なる管理人であるので、お金に関わる全ての決断は霊的な決断になります。私たちが自分のお金を使ってすることは、誰が私たちの人生を支配しているかを表します。私たちがお金を貯め込み、不必要なものを買うことで「宝」を積む時、私たち

## 山上の垂訓

の人生はイエスによって支配されていないことを表します。もしイエスが支配していたなら、私たちは任されたお金をもっと上手に使っていたはずです。

もっと上手に使うとは、一体どういうことなのでしょう。イエスは、私たちの宝は、天にたくわえなさい、と命じています。でもどうしたら可能なのでしょうか。ルカの福音書の中でイエスは言いました。「持ち物を売って、施しをなさい。自分のために、古くならない財布を作り、朽ちることのない宝を天に積み上げなさい。そこには、盗人も近寄らず、しみもいためることはありません」（ルカ12:33）。

貧しい者を助け、福音を広げるためにお金を与えることで、私たちは天に宝を積むこととなります。イエスは、いずれは必ず価値がなくなるものを持って、それを決して価値の下がらないことに投資するよう教えています。これこそ弟子をつくる指導者がしていることで、その弟子たちに同じようにするよう教えています。

### 悪い目 (The Bad Eye)

目が健全なら、その人の全身が明るい、目が悪ければ、その人の全身が暗いと、イエスが話した時、何を意味していたのでしょうか。その前後の内容がそうであるように、イエスの言った言葉は、金銭や物質的なものと関係があるに違いありません。

「悪い」と訳された六章二十三節のギリシャ語は、マタイ十章十五節で「ねたましい」と訳された言葉と同じです。そこでは、主人が労務者に「私が気前がいいので、あなたの目にはねたましく思われるのですか」と書いてあります。つまり、「ねたましい（または悪い）目」という表現を通して、欲深い人について語っています。これは、マタイ六章二十二から二十三節でキリストが意味したことを更に深く理解するのに役立ちます。

目が健全な人は、心が純粋で、真理の光が入るのを妨げない人を象徴しています。つまり、そのような人は神に仕え、宝を地上にたくわえず、その人の心がある天にたくわえます。目が悪い人は、自分には既に真理があると思っており、つまり暗やみに溢れ、嘘を信じているために、真理の光が入るのを遮ります。その人は、その人の心がある地上に宝をたくわえます。人生の目的は、自分を満足させることだと信じてい

## 弟子をつくる指導者

ます。お金がその人の神なのです。そのような人は天国へは行けません。

お金が自分の神とは、一体どういう意味なのでしょう。それは、当然ながら神のみが君臨すべき、あなたの人生の王座に、お金が来ている、ということです。お金があなたの人生を導きます。お金があなたの活力も思いも時間をも奪います。お金があなたの喜びの源です。あなたはお金を愛しています。<sup>47</sup>だからパウロは、むさぼりを偶像礼拝と同等と見なし、このような欲深い人は神の御国を相続できないと言いました（エペソ5:5; コロサイ3:5-6参照）。

神もお金も、両方が私たちの人生の主人になりたいと願っているのですが、私たちは両方に仕えることはできない、とイエスは言いました。再び、イエスは最重要テーマに沿っていることがわかります。すなわち、**聖なる者だけが神の御国を相続する**のです。お金を神とし、地上に宝を積むような、暗やみに溢れる者たちは、いのちに導く狭い道にはいないことを、イエスは非常に明白にしました。

### 貪欲な貧しい者たち (The Covetous Poor)

高価なものに対してだけが悪い物欲ではありません。基本的な生活必需品に対しても、人は悪い執着心を持つ可能性があります。イエスは続けました。

だから、[つまり、わたしがたった今言ったことに基づいて]わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。いのちは食べ物よりたいせつなものの、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださ

---

<sup>47</sup> 47他の場面でも、神と金の両方に仕えることは不可能であることについて、イエスは同じ発言をした。ルカは、「さて、金の好きなパリサイ人たちが、一部始終を聞いて、イエスをあざ笑っていた」(ルカ16:14)と私たちに言っている。山上の垂訓のこの箇所でも、再びイエスは、パリサイ人の習慣と教えを明白に暴いていた。



## 山上の垂訓

るのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。なぜ着物のことで心配するのですか。野のゆりがどうして育つのか、よくわきまえなさい。働きもせず、紡ぎもしません。しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。きょうあっても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくしてくださらないわけがありませんか。信仰の薄い人たち。そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります（マタイ 6:25-34）。

この本の読者の多くは、イエスがここで指摘していることを自分に当てはめて考えられないと思います。最近あなたが食物や飲み物、また着物について心配したのは、いつのことでしたか。

しかし、イエスの言った言葉は確かに私たち全員に当てはまります。もし生活必需品に執着することが間違っているのならば、生活必需品でないものに執着することは、一体どれ程間違っていることなのでしょう。イエスは弟子たちに、二つのことだけを求めるよう、専ら注目して欲しい、と願っています。すなわち、神の国とその義です。口先だけのクリスチャンが十一献金（という古い契約、とでも言いましょう

## 弟子をつくる指導者

か) はできないが、生活必需品ではないものを買うことはできる、という時に、その人はキリストの基準である、まず神の国と神の義を求める生き方をしていると言えるのでしょうか。答えは明白です。

### 粗探しする人になるな (Don't be a Fault-Finder)

イエスが弟子に与えた次の命令は、裁きと粗探しの罪についてです。

さばいてはいけません。さばかれたいからです。あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。また、なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。兄弟に向かって、『あなたの目のちりを取らせてください。』などとどうして言うのですか。見なさい、自分の目には梁があるではありませんか。偽善者たち。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができます (マタイ 7:1-5)。

イエスは直接的にも間接的にも、この箇所ですら律法学者やパリサイ人について指摘しませんでした。彼らは確かに、ここで取り上げられている罪を犯していました。というのも彼らはイエスの粗探しをしていたのですから！

ではイエスは、他人を裁くことの忠告の中で、実際何を意味していたのでしょうか。

まず、イエスが意味しなかったことを考えて行きましょう。イエスは、私たちが人の行動を観察し、霊的に見分けて、その人の人格について基本的な判断を施すべきではない、とは意味しませんでした。それはかなり明確です。この箇所のすぐ後に、イエスは弟子たちに豚に真珠を投げたり、犬に聖なるものを与えないように注意しました (7:6参照)。イエスは明らかに、ある種の人々、つまり聖なるもの、「真珠」を与えられてもその価値を認めない人々を、比喩的に豚や犬と表現しました。そのような人たちは明らかにまだ救われていない人たちです。そして確かに、もし私たちが

## 山上の垂訓

この命令に従うのであるならば、人々が豚か犬かどうかを、判断しなければなりません。

更に、イエスはこのすぐ後に、偽教師、つまり「羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼」（7:15参照）の見分け方として、その人たちの実を見るように教えしました。イエスの命令に従うために、私たちは人々の生活スタイルをよく観察し、きちんとした判断を下さなくてはなりません。

同様に、パウロはコリントの信者たちにこう言いました。

私が書いたことのほんとうの意味は、もし、兄弟と呼ばれる者で、しかも不品行な者、貪欲な者、偶像を礼拝する者、人をそしめる者、酒に酔う者、略奪する者がいたなら、そのような者とはつきあってはいけない、いっしょに食事をしてはいけない、ということです（第一コリント5:11）。

この命令に従うためには、私たちは人の生活スタイルを観察し、それを基にその人についての判断を下すことを要求されています。

使徒ヨハネはまた、私たちは、神に属する者と悪魔に属する者を簡単に見分けることができる、と言いました。その人の生活スタイルを見れば、誰が救われており、誰がそうでないかは明白です（第一ヨハネ3:10参照）。

以上のことから、人の行動を観察して、その人が神に属するのか、それとも悪魔に属するのかを判断して、その人格を見分けることは、キリストの警告する、人を裁く罪には当てはまりません。では、イエスは一体何を意味したのでしょうか。

イエスは、兄弟の小さな過ち、すなわち、ちり、を見つけることについて話していたことに注意してください。（イエスはこの兄弟という言葉がこの箇所です。）イエスは、人々の紛れもない過ちを見て、その人たちを未信者と判断することに対して警告していた訳ではありません。（現にイエスはすぐこの後、正にこの説教の最中に、そうするように命じます。）むしろ、これらはクリスチャン同士の扱い方についての教えなのです。クリスチャンは互いの小さな過ちを見つけることは

## 弟子をつくる指導者

すべきではありません。特に、自分たちが持つもっと大きな自分自身の過ちが見えない時は尚更です。それは偽善の他ありません。イエスはかつて群衆の偽善的な裁きについてこう言いました。「あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい」(ヨハネ8:7)。

使徒ヤコブの書簡は、山上の垂訓とよく似ていますが、そこでこう書かれています。「兄弟たち。互いにつぶやき合ってははいけません。さばかれたいからです。見なさい。さばきの主が、戸口のところに立っておられます」(ヤコブ5:9)。おそらくこれも、イエスの警告、つまり、信者仲間の粗探しをし、見つけたことを言いふらし、互いに文句を言い合うことに対する警告について、何か理解の助けとなるでしょう。これは教会で最も普及した罪の一つであり、この罪を犯す者たちは、裁きの座で自分の身を危険にさらすこととなります。私たちが信者仲間の悪口を言い、その人の過ちを他人に指摘する時、私たちは黄金律に反する行動を取ったこととなります。なぜなら、私たちも自分のいないところで、他人に自分の悪口を言われたくはないからです。

私たちは愛を持って、信者仲間にその人の過ちについて話を持ち掛けることは、しても良いことです。但し、私たちに偽善がなく、また自分自身に、その正そうとしている相手が持つ同じ罪(もしくはそれよりもっと悪い罪)がないことが確かならばです。しかし、次に挙げる聖句のテーマでもありますが、未信者に対してそうすることは、完全に時間の無駄です。イエスはこう言いました。

聖なるものを犬に与えてはいけません。また豚の前に、真珠を投げ  
てはなりません。それを足で踏みにじり、向き直ってあなたがたを  
引き裂くでしょうから(マタイ 7:6)。

同様に、箴言では、「あざける者を責めるな。おそらく、彼はあなたを憎むだろう。知恵のある者を責めよ。そうすれば、彼はあなたを愛するだろう」(箴言9:8)とあります。イエスは他の場面で、福音を拒む者に対しては、足のちりを払い落すよう、弟子たちに言いました。「犬」が真理を良いものとして受け入れられない人たちを表しているとするならば、まだ一度も福音を聞いたことのない人たちがいるのに、私たち、

## 山上の垂訓

神の僕がそのように真理を受け入れない人たちへ福音を伝えようとするのは、時間の無駄であり、神はそれを神の僕に求めてはいません。

### 祈ることの励まし (Encouragement to Pray)

ついに、イエスの説教の主要部分の最後の箇所に来ました。ここでは、祈りには約束が伴うという励ましから始まります。

求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。あなたがたも、自分の子がパンを下さいと言うときに、だれが石を与えるでしょう。また、子が魚を下さいと言うのに、だれが蛇を与えるでしょう。してみると、あなたがたは、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天におられるあなたがたの父が、どうして、求める者たちに良いものを下さらないことがありましょう (マタイ 7:7-11)。

「なるほど！」どこかで読者は言っているかもしれません。「ここは山上の垂訓の中でも、聖さと関係ない箇所だ。」と。

それは、私たちが祈りの中で何を求め、たたき、求めているのかによります。「義に飢え渴く」者として、イエスが山上で教えた全ての命令に従いたい、と私たちは切望します。そして、その切望が私たちの祈りに確かに反映されます。実際、同じ説教の中でイエスはその前に分かち合った模範の祈りは、神の御旨がなることと聖くなることへの切望の表れでした。

更に、ルカによる福音書の中にある、同じ祈りの約束の箇所では、「してみると、あなたがたも、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さらないことがありましょう」 (ルカ11:13) で終わっています。イエスは「良い物」

## 弟子をつくる指導者

を私たちに約束した時に、高価な物を思い描いていた訳ではありませんでした。イエスは、聖霊を「良い物」と考えていました。なぜなら、聖霊は私たちが聖なる者とし、他の人たちをも聖なる者とさせる福音を私たちが広げる働きを助けます。聖なる者たちは天国へ行きます。

他にも、神の御旨の中にあるなら、どのようなものでも全て良い物です。神は明らかに、神の御旨と御国に最も関心を持っておられるのですから、私たちのどんな祈りも、もしそれが神の御国で私たちが更に用いられることに繋がっているのなら、そのような祈りは必ず聞かれることを期待すべきです。

### まとめの発言 (A Summarizing Statement)

さてここで、ある聖句に到たちしますが、この箇所は特に、イエスがここまで言ってきた全てをまとめる発言として、考慮されるべきです。多くの注釈者はこのことを見逃しますが、そうしないことが大切です。この箇所は、それでという言葉で始まっており、それはその前にある説明に繋がっていることを表しています。そこで質問となることは、イエスがこれまでに言ってきたことを、この聖句はどれだけまとめているのか、ということです。

それで、何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそ

のようにしなさい。これが律法であり預言者です (マタイ 7:12)。

この発言は、その前にある、祈りについて述べた、二、三の聖句だけをまとめたわけではないことは、流れを見れば明らかです。

イエスの山上の垂訓の最初の部分を覚えていますか。イエスは律法や預言者を破棄するために来たのではないと忠告していました (マタイ5:17参照)。そこからイエスの説教は、私たちが今辿り着いたこの聖句に至るまで、旧約にある神の命令を支持し、また説明することしかしませんでした。つまり、イエスはこれまでの命令全てをここでまとめ、その命令の全ては、イエスが律法と預言者から引き出したものでした。

「それで、何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。これが律法であり預言者です。」 (7:12)。「律法であり預言者」という語句は、

## 山上の垂訓

マタイ五章十七節から七章十二節の間でイエスが言った全てのことを繋げています。

ここで、イエスが説教の結論に入るところで、再び最重要テーマを繰り返します。すなわち、**聖なる者だけが神の御国を相続するのです。**

狭い門からはいりなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこからは行って行く者が多いのです。いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです(マタイ 7:13-14)。

明らかに、あまり人が見つけられない、狭い門といのちに至る道とは、救いの象徴です。滅びに至る大きな門と広い道は、大勢の人が通る、破滅の道を表しています。この発言の前にイエスが言ったことの全てには意味があり、この説教には論理的な流れがあり、イエスが人と意思疎通を図る知能をお持ちなら、ここでの最も自然な解釈は、狭い道とはイエスに従い、その命令を守ることでしょう。また広い道はその反対を表しているのでしょうか。どれ程の口先だけのクリスチャンが、この説教で言う狭い道にいるのでしょうか。弟子をつくる指導者は、確かに狭い道にいて、その弟子たちをも同じ道へ導いています。

口先だけのクリスチャンは、イエスがこの説教の中で、救いと破滅について沢山語りながらも、イエスご自身に信仰を持つことや信じることについては一切触れていないことを、不思議がります。しかし、信念と行動に切っても切れない関係があると理解する者たちにとっては、この説教に何ら問題はありませぬ。イエスに従う人たちは、その信仰をその人の行動によって示します。イエスに従わない人たちは、イエスが神の御子であることを信じていません。私たちの救いは、私たちに対する神の恵みの表れというだけでなく、私たちの人生が実際に全く違うものに変えられていることなのです。私たちの聖さは本当に神の聖さなのです。

### **偽宗教指導者の見分け方 (How to Recognize False Religious Leaders)**

イエスは、話を締めくくりながら、次は弟子たちに、破滅に至る広い道へと知らぬ間に導く偽預言者について警告しました。彼らは、真に神のものではなく、しかし

## 弟子をつくる指導者

そのように装います。偽教師や偽指導者もこの分類に入ります。どのようにして彼らを見分けることができるのでしょうか。

にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます。ぶどうは、いばらからは取れないし、いちじくは、あざみから取れるわけがないでしょう。同様に、良い木はみな良い実を結ぶが、悪い木は悪い実を結びます。良い木が悪い実をならせることはできないし、また、悪い木が良い実をならせることもできません。良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。こういうわけで、あなたがたは、実によって彼らを見分けることができるのです。わたしに向かって、『主よ、主よ。』という者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』（マタイ 7:15-23)

イエスは明白に偽教師は人の目を欺いていることを示しました。彼らは、誠実であるように見せます。彼らはイエスを主と呼び、預言し、悪霊を追い出し、奇蹟も行ないます。しかし、「羊のなり」は、単に「貪欲な狼」であることを隠しているに過ぎません。彼らは本当の羊ではありません。どのようにして、彼らが本物か偽物かがわかるのでしょうか。彼らの本性は、彼らの「実」で見分けることができます。

イエスがここで語っている実とは一体何でしょうか。明らかに、奇蹟の実ではありません。むしろ、イエスが教えた全てのことに対する従順の実です。本当の羊は御



## 山上の垂訓

父の御旨を行ないます。偽物は、「不法をなす者ども」です(7:23)。従って、私たちの責任は、その人の人生を、イエスが教え命じたことと照らし合わせることです。

偽教師は、今日教会に溢れています。イエスもパウロも、そのことについてはあらかじめ警告していましたから、驚くべきことではありません。終わりの日が近づくにつれ、益々そのようになります(マタイ24:11; 第二テモテ4:3-4参照)。現代、最も流行っている偽預言者は、聖くない者にも天国は待っている、という教えをしています。このような教えを受ける何百万もの人々が永遠の地獄に落ちる責任は、これらの偽預言者にあります。彼らについて、ジョン・ウェスリーはこう書きました。

何と酷いことだ！神の大使たる者が悪魔の遣いになるとは！

人々に天国の道を教えるよう命じられた者たちが、実際は地獄への道を教えている。もし、「なぜ、誰が一体このようなことをしたのか？」と尋ねられたら、私は、何万もの賢く、立派な者たちがした、と答える。つまり、どんな宗派に限らず、傲慢な者たち、軽薄な者たち、熱心な者たち、この世を愛する者たち、快樂にふける者たち、不正な、あるいは、不親切な者たち、気楽で、注意散漫で、無邪気で、役に立たない生き物たち、義の為に何の非難も被ることのない者たち、これらの者たちが天国へ向かっていると想像するように励ましている、全ての者たちがしたのだ。...彼らは人々を夜の領域に住まわせている。そして、彼らが滅ぼした憐れむべきたましいを見る度に、「彼らの来るのを迎えるために、地獄が地の底から向かって行くだろう！」<sup>48</sup>

興味深いことにウェスリーは、イエスがマタイ七章十五から二十三節で警告した偽教師について、特に批評していました。

---

<sup>48</sup> 48 ジョン・ウェスリーの働き(ベイカー：グラント・ラピッツ社、1996)、ジョン・ウェスリー著、ウェスリアン・メソジスト・ブック・ルーム、ロンドンによる1872年発行版の再版、441、416ページ

## 弟子をつくる指導者

今日の偽教師たちの多くが私たちに言うことに反して、イエスは再び、良い実を  
実らせない者たちは地獄に投げ落とされる（7:19参照）、と明言したことに注目して  
ください。更にこれは、ただ教師や預言者に言っているのではなく、全ての人に適用  
されます。イエスは言いました。「わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者が  
みな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者が  
はいるのです」（マタイ7:21）。預言者に当てはまることは、全ての人に当てはまり  
ます。これがイエスの主要テーマです。すなわち、**聖なる者だけが神の御国を相続す  
るのです**。イエスに従わない者は地獄へ行く運命なのです。

イエスはまた、人の内面と外見とを関連付けたことにも注目してください。「良  
い」木は良い実を实らせ、「悪い」木は良い実を实らすことはできません。外側に表  
れる良い実の源は、その人の本質です。神の恵みによって、神は心からイエスを信じ  
る人たちの本質を変えてくださいます。<sup>49</sup>

### 最後の警告とまとめ (A Final Warning and Summary)

イエスは、最後の警告と、まとめとしての例文をもって、彼の説教を閉じました。  
想像がつくと思いますが、イエスのテーマ—**聖い者だけが、神の御国を相続する**—を  
描写しています。

だから、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行なう[文字通り  
「それを行う」]者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比  
べることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてそ  
の家を打ちつけたが、それでも倒れませんでした。岩の上に建てら  
れていたからです。また、わたしのこれらのことばを聞いてそれ

---

<sup>49</sup> 49 よく他人の内に見る罪を大目に見ようとする人たちが良く使う表現、「彼らの心の中のこと  
については私たちにはわからないから」についてここで触れたい。これに反して、イエスはここ  
で外見はその人の内面の現れだと言った。他の箇所ではイエスは、「心に満ちていることを口が話す」  
(マタイ 12:34)と言った。人が憎しみの言葉を語る時、それは憎しみが心を埋めていることを  
表している。イエスはまた、「内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品  
行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさ」(マ  
ルコ 7:21-22)であると私たちに教えた。人が姦淫を犯す時、心に何があるかは明白である：姦  
淫だ。

## 山上の垂訓

を行なわない[文字通り「それを行わない」]者はみな、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいました。しかもそれはひどい倒れ方でした。」（マタイ 7:24-27）

イエスの最後の描写は、ある人たちがこの箇所を用いて語る「成功する人生」の方式、というものではありません。ここでイエスは、苦難の中にあっても神の約束に信仰を持ち続けることで、経済の繁栄を得る方法を与えようとはしていません。ここは、イエスが山上の垂訓で語った全てのまとめなのです。イエスが言うことをする人たちは、賢く、最後まで耐え抜きます。神の御怒りが下っても恐れることはありません。一方、イエスに従わない人たちは、愚かで大いに苦しみ、「永遠の滅びの刑罰」（第二テサロニケ 1:9）を受けます。

### 質疑応答（Answer to a Question）

イエスの山上の垂訓が、イエスの犠牲的な死と復活以前に生きた弟子たちだけに適用される、ということはありません。彼らは救いの一時的な手段として律法の下にいましたが、イエスがその人たちの罪のために死なれた後は、信仰によって救われることになり、それによって、説教の中でイエスが解き明かしてきたテーマは無効になるのでしょうか。

この理論は正しくありません。誰もその人の行ないによっては救われません。古い契約の前でも、その最中でも、どの時代でも、救われるのは信仰によってのみです。ローマ四章でパウロは、アブラハム（古い契約の前）もダビデ（古い契約の最中）も両方共、行ないによってではなく、信仰によって義とされたことを主張しています。

更に、イエスの聴衆が、行ないによって救われることは不可能でした。なぜなら、彼らは皆、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができません（ローマ3:23参照）。ただ神の恵みだけが私たちを救い、信仰によってのみ、神の恵みを受けることを可能にします。

残念なことに、今日の教会では、イエスの命令は、単に、罪悪感を人に与える効

## 弟子をつくる指導者

果により、行ないによって救いは得られないことがわかる為に用いるのであって、それ以上の目的はない、と考える人たちがあまりにも多いです。それは、もう「福音も聞いた」し、信仰によって救われたのだから、イエスの命令の殆どを聞く必要がない、といった具合です。もし福音を聞いていないで救われていないなら、私たちは、勿論、他の人にも「救われて」欲しいと願います。そこで、私たちは再び命令を持ち出して、いかにその人たちが罪深いかを示すことで、その人たちは行ないではなく、「信仰」によって救われるのです。

とは言っても、イエスは弟子たちに、「世界中に行って、弟子をつくりなさい。弟子たちが罪悪感を持ち、それから信仰によって救われたのなら、私の命令はその役割を彼らの人生で果たしたことになる。」と言った訳ではありませんでした。むしろ、イエスは、「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。...わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。(マタイ 28:19-20、一部強調)。弟子をつくる指導者がすることは、これだけです。

## 第九章

### イエスの好む説教者 (Jesus' Favorite Preacher)

イエスの好む説教者がいたと聞くと驚かれるかもしれません。その説教者はルター派でも、メソジスト派でも、ペンテコステ派でも、聖公会派でも、長老派でもないことを聞いて、更に驚かれるかもしれません。その人はバプテスト派です！その人は、ご存知の通り、洗礼者ヨハネとして、私たちにも馴染みがあります！イエスは彼についてこう言いました。

まことに、あなたがたに告げます。女から生まれた者の中で、バプテストマのヨハネよりすぐれた人は出ませんでした。しかも、天の御国の一番小さい者でも、彼より偉大です。（マタイ 11:11前半）

全ての人々が「女から生まれる」ことを考えると、洗礼者ヨハネは、この世に生まれた人の中で、イエスの思う一番偉大な人、という意味でした。なぜイエスがそう思ったのかは、推測の話です。しかし言えることは、ヨハネの持つ霊的な性質の故に、イエスはヨハネを高く評価していました。私は、洗礼者ヨハネが称賛されるべき、少なくとも七つの霊的性質を見つけました。ヨハネが召された務めは、預言者と伝道者が一番彼の特徴を表すものでしたが、ここに挙げる七つ全ての霊的性質は、どのような福音の務めにあっても適したものです。それでは最初の性質を見ていきましょう。

#### ヨハネの第一の性質 (John's First Quality)

ヨハネの証言は、こうである。ユダヤ人たちが祭司とレビ人をエル

## 弟子をつくる指導者

サレムからヨハネのもとに遣わして、「あなたはどなたですか。」と尋ねさせた。彼は告白して否まず、「私はキリストではありません。」と言明した。また、彼らは聞いた。「では、いったい何ですか。あなたはエリヤですか。」彼は言った。「そうではありません。」「あなたはあの預言者ですか。」彼は答えた。「違います。」そこで、彼らは言った。「あなたはだれですか。私たちを遣わした人々に返事をしたいのですが、あなたは自分を何だと言われるのですか。」彼は言った。「私は、預言者イザヤが言ったように『主の道をまっすぐにせよ。』と荒野で叫んでいる者の声です。」（ヨハネ 1:19-23）。

ヨハネは自分の呼びを知っており、それを追い求めました。

主に仕える指導者たちが自分の呼びをわきまえ知り、それを追い求めることは、なんと重要なことでしょうか。もしあなたが伝道者ならば、牧師になろうとしてはいけません。もしあなたが教師ならば、預言者になろうとしてはいけません。そうでなければ、あなたは単に欲求不満になるだけです。

あなたが自分の呼びを知るには、どうしたらよいのでしょうか。まず、あなたを召した主を求めることです。次に、あなたの賜物を吟味することです。もし神があなたを伝道者として呼んだのなら、主がその務めにふさわしくあなたを整えます。第三に、あなたの賜物をしっかりと見分ける他の人からの確認を得ることです。

あなたが自分の呼びに確信が持てたら、あなたは何ものにも邪魔されないように、心を尽くしてそれを追い求めるべきです。多くの人は、神が彼らに望むことを、神ご自身がすることを待っています。ノアは、神が箱舟を作るのをただ待っていた訳ではありません！

ミニストリーという言葉は**WORK**（働くこと）と書く、ということがよく言われています。サタンは、あなたの呼びが成就しないように色々と試みます。しかし、あなたは敵の攻撃に耐え、反撃し、少しずつ信仰によって前進しなくてはなりません。

## イエスの好む説教者

聖書には書いてありませんが、ヨハネはいつの日からか、ヨルダン地区周辺で説教を始めました。彼の説教を聞いた最初の群衆は、ヨハネの最後の頃の群衆に比べて、とても小さかったことは間違いありません。人々は彼を馬鹿にして、彼は迫害を経験したことでしょう。しかし、彼は止めませんでした。ヨハネのたった一つの目標は、彼をその務めに呼んだ神を喜ばすことだけでした。最終的に、ヨハネは目標を達成しました。

ヨハネの最初の霊的な性質として挙げられることは、ヨハネは自分の呼びを知り、それを追い求めた、ということです。これは私たちは見習い、模倣すべきです。

### ヨハネの第二の性質 (John's Second Quality)

そのころ、バプテスマのヨハネが現われ、ユダヤの荒野で教えを宣べて、言った。「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」(マタイ 3:1-2)

イエスは、ヨハネの単純なメッセージを高く評価していたことは確実で、イエスが行くところどこでも、ヨハネと同じメッセージをイエスご自身もされてきました(マタイ4:17)。ヨハネは人々に悔い改め、つまり、罪の生活から離れ、義の生活に向かうよう命じました。彼は、神との関係は、悔い改めから始まり、それをしない人は地獄へ投げ落とされることを知っていました。

現代の多くの伝道者とは違って、ヨハネは神の愛について一度も語りませんでした。また、人々が「豊かな人生」を体験し出すように、「イエスを受け入れる」祈りを無意味に祈らせて、人々の「フェルトニーズ(主観的欲求—その人が必要と感じていること)」について話して、その人たちを釣るということをヨハネはしませんでした。ヨハネは、救いは行ないではない、ということに気づきさえすれば、神は天国へ導き入りたい、と望んでおられる程、皆基本的には良い人間であることを人々に信じさせることはしませんでした。むしろ、ヨハネは神の視点で人々を見ていました。つまり、彼らは、自分の罪の結果を永遠に負うことになるかもしれないという危険にさらされている、という見方をしました。彼はただ、これから来る神の御怒りについて

## 弟子をつくる指導者

人々に警告しました。彼は、人々が心と行動を変えなければ、彼らは滅びることをきちんと理解させました。

従って、ヨハネの持っていた第二の性質として、全ての弟子をつくる指導者が模倣し、覚えておくべきことは、ヨハネは、神との関係に入る第一歩は悔い改めであることを宣べ伝えた、ということです。

### ヨハネの第三の性質 (John's Third Quality)

このヨハネは、らくだの毛の着物を着、腰には皮の帯を締め、その食べ物はいなごと野蜜であった (マタイ 3:4)。

ヨハネは、現代の「繁栄の福音を伝える説教者」の姿からは、全くかけ離れていました。実際、ヨハネのような、成功者に見えない人に講壇を明け渡すことはあり得ません。しかしヨハネは、神は心を見るお方であることを知っていたので、地上の宝を追い求めたり、外見で人から好感を得ようということには全く興味のない、真の神の人であったと言えます。彼は単純に生き、彼の動機がお金ではないことが明らかのために、その生き方は誰にもつまづきを与えませんでした。福音を自分の利益のために使うような、現代の世界中の指導者たちとは何と違うのでしょうか。そのような指導者たちはイエスを正しく表しておらず、キリストの信念から遠ざかり、害を与えています。

イエスの気に入る説教者となった一因とも言える、ヨハネの第三の性質は、ヨハネは単純に生きた、ということです。

### ヨハネの第四の性質 (John's Fourth Quality)

それで、ヨハネは、彼からバプテスマを受けようとして出て来た群衆に言った。「まむしのすえたち。だれが必ず来る御怒りをのがれるように教えたのか。それならそれで、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。『われわれの先祖はアブラハムだ。』などと心の中で言い始めてはいけません。よく言うておくが、神は、こんな石ころからでも、アブラハムの子孫を起こすことがおできになるのです



## イエスの好む説教者

(ルカ 3:7-8)。

ヨハネのミニストリーが、より多くの人々に影響を及ぼし出すと、ヨハネはそのメッセージに一切の妥協を許しませんでした。ヨハネが宣べ伝えた、洗礼を受けることが、人々にかなり受け入れられるようになると、ヨハネはむしろ、それらの人々が持つ動機を疑っていたかもしれません。律法学者やパリサイ人さえ、ヨルダン川へ旅して来ました(マタイ3:7参照)。ヨハネは、多くの人々が単に群衆に付いてやって来ていることを恐れました。従ってヨハネは、そのような人々が自分を騙すことがないように、できる限りのことをして、また自分の本当の姿を見えなくさせる色々なものを払いのけました。ヨハネは、洗礼という行為がその人を救うと、誰にも思ったくありませんでしたし、悔い改めを口にするだけで、人々が地獄から免れるとも思ったくありませんでした。彼は、真の悔い改めは、従順の実を結ばせることを忠告しました。

更に、多くのユダヤ人たちが、アブラハムの子孫であるということ自分で自分たちは救われていると考えていたので、ヨハネはその間違った確信を暴きました。

ヨハネの称賛されるべき第四の性質は、彼は人々を愛するが故に真理をそのまま語った。彼は悔い改めのない、聖くない人が天国へ行くことを決して保証しなかった、ということです。

### ヨハネの第五の性質 (John's Fifth Quality)

ヨハネは、悔い改めが見えない人には洗礼を授けないようにして、誰の自己欺瞞をも支持することはしませんでした。彼は、「自分の罪を告白する」(マタイ3:6)人に洗礼を授けました。彼は来た人たちに警告しました。

斧もすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます...手に箕を持っておられ、ご自分の脱穀場をすみずみまできよめられます。麦を倉に納め、殻を消えない火で焼き尽くされます(マタイ 3:10、12)。

よく説教者が、神の御国にたましいを勝ち取るよりも、人気を得たいが故に、避

## 弟子をつくる指導者

ける話題である地獄について、ヨハネは真実を語ることを恐れませんでした。ヨハネは同時に、私たちがキリストの山上の垂訓で学んだ、聖なる者だけが神の御国を相続する、という同じテーマから外れて宣べ伝えることは決してありませんでした。良い実を結ばない者たちは、火に投げ込まれるのです。

ヨハネがもし今日生きていたら、多くの口先だけのクリスチャンたちから、「地獄の業火説教者」とか、「終わりの日の悲観的説教者」とか、「求道者に敏感でない」と言われ、更には、「否定的」、「非難的」、「律法的」、または「独り善がり」な者として、非難を浴びせられていたことでしょう。しかしヨハネは、イエスの気に入った説教者でした。ヨハネの第五の性質は、彼は地獄について説教し、そこへ行くのはどんな人たちかということを確認にした、ということです。ルカがヨハネのメッセージを「福音」（ルカ3:18）と呼んだことは、興味深いことです。

### ヨハネの第六の性質 (John's Sixth Quality)

ヨハネは、神に大いに用いられ、群衆から人気を集めました。彼はイエスと比べれば無きに等しい者であることをわきまえており、いつも彼の主を高めていました。

私は、あなたがたが悔い改めるために、水のバプテスマを授けていますが、私のあとから来られる方は、私よりもさらに力のある方です。私はその方のはきものを脱がせてあげる値うちもありません。その方は、あなたがたに聖霊と火とのバプテスマをお授けになります（マタイ 3:11）。

ヨハネの自己評価は、今日の「指導者」が誇示しすぎる傲慢な態度とは、全く違うものです。彼らのミニストリーが出すカラー雑誌には、全ページに彼らの写真を入れていますが、イエスについては殆ど触れていません。教会の講壇上を孔雀のように自分を見せびらかして横切り、自分を支持する人たちの目の前で、自分自身を高めて見せます。そのような指導者は、触れることも、近づくこともできず、自分がいかに重要か、という思いでいっぱいです。そのような人たちの中には、天使や神にさえ、命令する人もいます！しかし、ヨハネは自分自身を、イエスのはきものをぬがせてあ

## イエスの好む説教者

げる値うちもないと、一番身分の低い奴隷がする仕事を指して言いました。イエスがヨハネから洗礼を受けるために来た時、ヨハネはそれを拒否し、イエスがキリストだとわかった時、ヨハネは全ての人にイエスを指して、「世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハネ1:29)と宣言しました。「あの方は盛んになり私は衰えなければなりません」(ヨハネ3:30)は、謙虚なヨハネのモットーとなりました。

これがヨハネをイエスの気に入る説教者にさせた第六の性質です。すなわち、彼は自分をへり下らせ、イエスを高くした。自分自身を高めようとする欲はなかった、ということです。

### ヨハネの第七の性質 (John's Seventh Quality)

現代の説教者は、誰の気分をも害さないように、曖昧な一般論でよく話します。「神は私たちに正しいことをして欲しいと願っています！」と説教することは、なんとたやすいことでしょうか。真のクリスチャンも、偽クリスチャンも同様に、そのような説教に「アーメン」と言うでしょう。また説教者は、世のスキャンダルの罪については、話をくどくどと繰り返しますが、教会内にある似たような罪については一切触れないように、避けていることが多いです。例えば、ポルノ雑誌には怒りをあらわにしても、教会員がR指定の不道德なビデオやDVDを観たり、集めたりすることに対しては、あえて触れようともしません。人への恐れで捕らえられているためです。

ヨハネは、しかし、具体的に説教することを躊躇しませんでした。ルカはこう記録しています。

群衆はヨハネに尋ねた。「それでは、私たちはどうすればよいのでしょうか。」彼は答えて言った。「下着を二枚持っている者は、一つも持たない者に分けなさい。食べ物を持っている者も、そうしなさい。」取税人たちも、バプテスマを受けに出て来て、言った。

「先生。私たちはどうすればよいのでしょうか。」ヨハネは彼らに言った。「決められたもの以上には、何も取り立ててはいけません。」兵士たちも、彼に尋ねて言った。「私たちはどうすればよいのでし

## 弟子をつくる指導者

ようか。」ヨハネは言った。「だれからも、力づくで金をゆすったり、無実の者を責めたりしてはいけません。自分の給料で満足しなさい。」（ルカ 3:10-14）

ヨハネが与えた六つの指示の内、五つがお金や物に関することであったとは、興味深いことです。ヨハネは、黄金律と第二に大切な戒めに絡めて、任されているものの管理について説教することを恐れませんでした。またヨハネは、新しい「信者たち」がこのように「重荷となる」概念に対して準備ができるまで、数年待った訳でもありませんでした。ヨハネは、神とお金両方に使えることは不可能であり、従って、任されているものの管理について知ることは、一番最初から最も重要なことと信じていました。

このことは、もう一つ別の点にも導きます。ヨハネは、ドレスコードや他の外見的聖さに関することについて、くどくどと繰り返して、いつまでも小さなことに、とらわれてはいませんでした。彼は、「律法の中ではるかに重要なもの」（マタイ23:23）に注目していました。隣人を自分自身のように愛し、自分にしてもらいたいと望むとおり、人にもそのようにするということが、最も大切なことだとヨハネは知っていました。それは、生活必需品に欠く人たちに食物や衣服を分かち合い、誠実に人に対処し、自分の持っているもので満足するということです。

イエスがヨハネを慕わしいと思うようにさせた、ヨハネの第七の性質は、*彼が曖昧な一般論で説教はせず、任されているものの管理も含め、神を喜ばせるために人々がすべきことを具体的に言及し、また最も大切なことに注目した、ということ*です。

## まとめ (In Conclusion)

牧師や教師という務めは、勿論、ヨハネのものよりも、より広範囲の事柄を取り扱うという特徴があるでしょう。ヨハネは悔い改めのない者たちに向かって説教しました。説教者と教師は、既に悔い改めた者たちを主に教えるはずで、その教えは、イエスが弟子たちに言ったことに基づき、それらは新約聖書の使徒書簡に書かれてい

## イエスの好む説教者

ます。

しかし私たちは、聴衆を正しく見分けることができず、今日罪人がまるで聖人のように説教を受けていることが多いのです。単に教会堂内に座っているだけで、私たちがその人たちの救いを保証しなくてはならない訳ではありません。特に、その人たちが世の人たちと区別がつかないような人生を送っているのなら尚更です。今日、数多くの「洗礼者ヨハネ」が講壇から説教する、差し迫った必要があります。この挑戦にあなたは立ち上がって、挑みますか。あなたはイエスの好む説教者になりたいですか。



## 第十章

### 新しい誕生 (The New Birth)

人が悔い改め、主イエス・キリストを信じる時に、その人は「生まれ変わり」ます。生まれ変わりとは、一体何を意味するのでしょうか。この章ではそのことについて見ていきます。

生まれ変わりの意味が何であるかを理解するために、人間の性質をまず理解することが助けとなります。聖書は、私たちが単に物理的な存在というだけではなく、霊的な存在でもあることを教えています。例えば、パウロはこのように書きました。

平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリストの来臨のとき、責められるところのないように、あなたがたの霊、たましい、からだを完全に守られますように（第一テサロニケ 5:23、一部強調）。

パウロの指摘通り、私たちは霊、たましい、からだの三つの部分から成ります。聖書はそれぞれの部分について厳密には定義していないので、みことば自体を理解することによって、それらの違いがわかるように最善を尽くしていきます。私たちのからだは、物理的な存在である、と大抵結論付けます。つまり、肉、骨、血などのことです。私たちのたましいは、知的、感情的な存在、つまり心のことです。私たちの霊は、明らかに霊的な存在を意味し、使徒ペテロもその部分を「心の中の隠れた人がら」（第一ペテロ3:4）を称しました。

## 弟子をつくる指導者

霊は肉の目には見えないので、まだ生まれ変わっていない人たちは、その存在を認めない傾向があります。しかし、聖書は私たちが霊的な存在であることを非常に明確にしています。聖書は、人が死ぬ時、その人のからだ機能がなくなるだけであって、その人の霊とたましいは、これまで通り機能し続けます。死によって、人はからだから離れ、神のさばきの座に立ちます（ヘブル9:27参照）。裁きの後、人は天国か地獄へ行きます。最終的には、全ての人の霊とたましいは、復活の時にその人のからだと再び一つとなります。

### 人間の霊について更なる定義（The Human Spirit More Defined）

第一ペテロ三章四節では、ペテロが霊を「隠れた人がら」と呼び、霊が人であることを示唆しています。パウロも、霊を「内なる人」と呼び、人の霊が単に概念や力ではなく、人であることを示唆しています。

ですから、私たちは勇気を失いません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。（第二コリント4:16、一部強調）

「外なる人」は明らかに物理的なからだを意味し、一方、「内なる人」は霊を意味しています。からだは年をとり、古くなっていきますが、霊は日々新しくされるのです。

パウロがからだと霊の両方を人と呼んでいることにもう一度注目してください。あなたが自分の霊を想像する時、霊的な雲を想像しないでください。あなたに似た形の人を想像する方が良いです。しかし、あなたのからだは年老いているのなら、あなたの霊も年をとっていると考えるはいけません。あなたの霊は決して年をとりませんので、全盛期の頃のあなたを想像してください！それは日々新たにされるのです。

（もしあなたが主イエス・キリストを信じたのなら）あなたの霊は、生まれ変わったあなたの部分です。あなたの霊は神の霊と一つとされ（第一コリント6:17参照）、あなたがイエスに従う時、霊はあなたを導く方です（ローマ10:14参照）。

聖書は、神もまた霊であり、また天使や悪霊もそうであることを教えています（ヨ



## 新しい誕生

ハネ4:24参照)。彼らは皆、霊の世界においては形があり、存在します。しかし、霊の世界を、物理的な感覚で測ることはできません。霊の世界を物理的な感覚で接することを試みるのは、自分たちの手で電波を感じようするのと同様です。私たちは物理的な感覚で、部屋の中を通る電波をわかることはできませんが、だからと言って電波が存在しないということにはなりません。

これは霊の世界でも同じことが言えます。霊の世界が物理的な感覚でわかることができないからと言って、その存在が否定される訳ではありません。霊は存在します。人がそれに気づこうと、そうでなかろうと、人は霊的な存在であるために、霊の世界の一員なのです。人は霊的にサタンに属するのか（悔い改めていない人の場合）、もしくは霊的に神に属するのか（生まれ変わった人の場合）のどちらかです。降霊術者は、自分の霊を通して霊の世界と関係が持てますが、そのような人たちはサタンの支配する、暗やみの世界に触れているのです。

## 永遠のからだ (Eternal Bodies)

このテーマに触れている間に、私たちのからだについて少々触れたいと思います。からだはいずれは滅びますが、物理的な死は永遠のものではありません。神ご自身が全ての死者をよみがえらせる日が来ます。イエスは言いました。

このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞いて出て来る時が来ます。善を行なった者は、よみがえっていのちを受け、悪を行なった者は、よみがえってさばきを受けるのです（ヨハネ 5:28-29）。

使徒ヨハネは、黙示録の中で、聖なる者ではないからだの復活は、少なくとも、聖なる者のからだの復活後、千年経つまでは起きない、と書きました。

彼ら[患難期に殉教した聖徒たち]は生き返って、キリストとともに、千年の間王となった。そのほかの死者は、千年の終わるまでは、

## 弟子をつくる指導者

生き返らなかった。これが第一の復活である。<sup>50</sup> 50この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。この人々に対しては、第二の死は、なんの力も持っていない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストとともに、千年の間王となる(黙示録 20:4b-6)。

聖書はまた、イエスが教会のために戻られる時、死んだ聖なる者のからだは全てよみがえり、その人たちの霊は天からイエスと共に地球空間へ下り、よみがえりのからだと霊はそこで一つとなる、ということをおっしゃっています。

私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあつて眠った[霊としての]人々をイエスといっしょに連れて来られるはずで、私たちは主のみことばのとおりにおっしゃいますが、主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。主は、号令...のうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者[のからだ]が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります(第一テサロニケ 4:14-17)。

神は地のちりから、一番最初の人をかたち造ったのですから、各人のからだの構成要素を取って、同じ要素からそれぞれを新しいからだに作り変えることは簡単でできるでしょう。

私たちのからだの復活について、パウロはこのようにおっしゃいました。

---

<sup>50</sup> 50これが「第一の復活」であるとヨハネが言っている為、これより前に、このような集団での復活は他になかった、と考えられる。第一テサロニケ 4章 13から 17節によると、イエスが天から下り、教会が携挙される時に、集団での復活があることを私たちは知っており、この第一の復活は、世界に広がる患難期の最後に、イエスが再臨する際に起こるので、患難前携挙説はこれに矛盾する。この本の後の章「携挙と後の日」で更にこのことについて詳しく学んでいく。

## 新しい誕生

死者の復活もこれと同じです。朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものによみがえらされ、卑しいもので蒔かれ、栄光あるものによみがえらされ、弱いもので蒔かれ、強いものによみがえらされ、血肉のからだで蒔かれ、御霊に属するからだによみがえらされるのです... 兄弟たちよ。私はこのことを言うておきます。血肉のからだは神の国を相続できません。朽ちるものは、朽ちないものを相続できません。聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠って[死んで]しまうのではなく、みな変えられるのです。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならぬからです（第一コリント 50:42-44前半, 50-53）。

私たちの新しいからだの際立った特徴は、不死の朽ちないものであることです。それは決して老いることなく、病むことなく、死ぬこともありません！私たちの新しいからは、イエスが復活後に受けた新しいからだのようなものです。

けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです（ピリピ 3:20-21、一部強調）。

使徒ヨハネもこの素晴らしい真理を認めています。

愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです（第一

## 弟子をつくる指導者

ヨハネ 3:2、一部強調)。

私たちの頭で完全に理解することは不可能ですが、それを信じて、この先に備えられているものにあって、喜ぶことはできます！<sup>51</sup>

### 新しい誕生について語るイエス (Jesus on the New Birth)

イエスがかつて、ユダヤ人指導者のニコデモに、聖霊の働きによって、人の霊が新しく生まれ変わる必要について語りました。

イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」ニコデモは言った。「人は、老年になっていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎にはいって生まれることができますでしょうか。」イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国にはいることができません。肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。あなたがたは新しく生まれなければならない、とわたしが言ったことを不思議に思っ  
てはなりません (ヨハネ 3:3-7)。

イエスが、人は新しく生まれなければ、神の国に入ることができないと言った時、ニコデモは最初、物理的に新しく生まれ変わることを思っていました。イエスはしかし、霊の新しい誕生について話していることを明確にしました。つまり、人の霊は、新しく生まれ変わらなくてはならないのです。

霊の新しい誕生が必要な理由は、私たちの霊は、邪悪な罪の性質に影響されているからです。その罪の性質は、聖書の中では死と呼んでいます。ここでは物理的な死 (つまり、物理的な肉のからだの機能が停止した時のこと) と区別できるように、理解のために、邪悪な性質のことを霊的な死と呼ぶことにします。

---

<sup>51</sup> 51 復活について、更に調べたい場合は、ダニエル 12:1-2; ヨハネ 11:23-26; 使徒 24:14-15; 第一コリント 15:1-57 を参照のこと。

## 新しい誕生

### 霊的な死の定義 (Spiritual Death Defined)

パウロは、エペソ二章一から三節で、霊的な死とは何を意味するのかを示しました。

あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。 私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした (一部強調)。

パウロは、物理的に生きている人たちに向かって書いていたので、当然のことながら、ここで物理的な死について言及しませんでした。しかしパウロは、彼らが「自分の罪過と罪との中に死んでいた」と言いました。罪こそが、霊的死の扉を開けるのです (ローマ5:12参照)。霊的な死は、あなたの霊に罪の性質を持つことを意味します。彼らは「生まれながら御怒りを受けるべき子ら」だと言っていることに注意してください。

更に、霊的に死ぬことは、ある意味で、まさしくサタンの性質を、あなたの霊の内に持ってしまっていることを意味します。霊的に死んでいる人たちは、「空中の権威を持つ支配者」の霊を持っていて、その霊が彼らの内に働いている、とパウロは言いました。この「空中の権威を持つ支配者」とは、紛れもなく悪魔のことで (エペソ6:12参照)、悪魔の霊は、まだ救われていない人たちの中で働いています。

イエスは、新生されていないユダヤ人に向かってこう言いました。

あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方

## 弟子をつくる指導者

をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです（ヨハネ 8:44）。

霊の観点から言うと、生まれ変わっていない人たちは、その人たちの霊に反発するサタンの性質があるだけでなく、サタンが彼らの霊的な父となっています。本質的に、そのような人たちは悪魔のように振る舞います。彼らは人殺しで偽り者です。

救われていない人たちが、皆全て殺人犯という訳ではありませんが、もし罰せられないで済むのなら、彼らも殺人犯と同じ憎しみの心で、人殺しをしていたでしょう。多くの国における墮胎の合法化は、この事実を裏付けています。救われていない人たちは、まだ生まれていない自分たちの赤ん坊を殺しているのです。

だから、人は霊の新しい誕生の体験が必要なのです。それをすると、罪に溢れたサタンの性質がその人の霊から取り除かれ、神の聖なる性質と交換されます。神の聖霊は、その人の霊の内に住まわれます。その人はもはや「霊的に死んでいる者」ではなく、「霊的に生きている者」とされます。サタンの霊的な子となる代わりに、神の霊的な子となるのです。

### 改心は新生の代わりにはならない (Reformation is No Substitute for Regeneration)

救われていない人たちは、霊的に死んでいるために、どんなに頑張っても、自己改心によってでは、救われません。救われていない人たちは、単に新しい見せかけだけの行動ではなく、新しい性質が必要なのです。豚を捕まえて、綺麗に洗って、香水を振りかけ、首の回りにピンクのリボンを付けたとしても、あなたが持っているのは綺麗にされた豚には変わりありません！その性質はまだ同じで、すぐにまた、その豚は悪臭を放ち、泥の中に横たわるようになるでしょう。

同じことが、生まれ変わりの体験をしていない宗教的な人たちにも言えます。見た目は少しばかり綺麗になったようですが、心の中は相変わらず汚れています。イエスは、当時のとても宗教的な人たちの何人かに向かって言いました。

忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは、杯や皿の外側はきよめるが、その中は強奪と放縦でいっぱいです。

## 新しい誕生

目の見えぬパリサイ人たち。まず、杯の内側をきよめなさい。そうすれば、外側もきよくなります。 忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは白く塗った墓のようなものです。墓はその外側は美しく見えても、内側は、死人の骨や、あらゆる汚れたものがいっぱいのように、 あなたがたも、外側は人に正しいと見えても、内側は偽善と不法でいっぱいです（マタイ23:25-28）。

イエスが言ったことは、宗教的で、聖霊の新生を体験していない人たち全てに当てはまります。霊の新生によって、外側だけでなく、中身も綺麗にされます。

### 霊が新生するとたましいに何が起こるのか（What Happens to the Soul When the Spirit is Reborn?）

人の霊が新生すると、その人のたましいは、（心の中でイエスに従うことを決断した以外は）基本的にはまだ影響を受けていません。しかし、私たちが神の子供とされたらすぐに、神は私たちに、たましいへの働きかけを期待します。私たちの考え方が、神が望むような考え方に変わるためには、たましい（心）が、神のみことばによって新しくされなくてはなりません。私たちの心が一新されることで、これから先ずっと私たちの人生が新しく作り変えられて行き、イエスにもっと似た者とされていきます。

この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい（ローマ 12:2、一部強調）。

ヤコブもまた、信者の人生の中で起こる、同じ過程についてこう書きました。

心に植えつけられたみことばを、すなおに受け入れなさい。みことばは、あなたがたのたましいを救うことができます（ヤコブ 1:21 後半）。

ヤコブはクリスチャン、つまり霊の生まれ変わりの体験をした人たちに向かって

## 弟子をつくる指導者

書いていたことに注目してください。まだたましいが救われる必要があり、それは「心に植え付けられたみことば」を、すなおに受け入れることによってのみ可能でした。だからこそ、新しい信者は神のみことばを教わる必要があるのです。

### 古い性質の残り (The Residue of the Old Nature)

新しい誕生の後、クリスチャンはすぐに、自分の中に二つの性質があることに気づきます。それはパウロの言う、「霊と肉」の戦いを体験しているのです。

なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです (ガラテヤ 5:17)。

古い罪の性質の残りを、パウロは「肉」と呼んでいます。私たちの内にあるこれら二つの性質は、異なる思いを生み出し、そのままにしておくと、そこから異なる行動や生き方までも生み出します。パウロが、「肉の行ない」と「御霊の実」を比較していることに注目してください。

肉の行ないは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、醜悪、遊興、そういった類のものです。前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたにあらかじめ言うておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はありません (ガラテヤ 5:19-23)。

クリスチャンが肉に従う可能性は、十分あります。さもなければ、パウロは、クリスチャンが肉に従う習慣があるなら、彼らは神の御国を相続することはできない、と警告をしなかったことでしょう。ローマ人への手紙で、パウロはクリスチャンの二つの性質について書き、肉に従う時の結果について警告しました。

もしキリストがあなたがたのうちにおられるなら、からだは罪のゆ



## 新しい誕生

えに死んでいても、霊が、義のゆえに生きています...ですから、兄弟たち。私たちは、肉に従って歩む責任を、肉に対して負ってはいません。もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。

しかし、もし御霊によって、からだの行ないを殺すなら、あなたがたは生きるのです。神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです（ローマ8:10, 12-14、一部強調）。

これは明らかにクリスチャンへの警告です。肉に従って生きている（つまり、何か肉に従った行動を繰り返し実践している）ことは、死に帰結します。パウロはここで霊的死のことを警告していたに違いありません。なぜなら、全ての人が、たとえ「からだの行ないを殺していた」クリスチャンでさえ、ゆくゆくは物理的には死ぬのですから。

クリスチャンはパウロの挙げる罪のひとつに一時的に陥るかもしれませんが、信者が罪を犯す時、彼は咎められ、願わくば悔い改めます。罪を告白し、神に赦しを求める人は誰でも、勿論きよめられます（第一ヨハネ1:9参照）。

クリスチャンが罪を犯す時、神との関係が壊れる訳ではありません。神との交わりが断たれます。その人はまだ神の子供ではありますが、しかし神の不従順な子供となりました。信者が自分の罪を告白しなければ、その人は主によってしつけてもらうこととなります。

## 戦い (The War)

もしあなたが、間違っているとわかっていることでも、したいと思っている自分に気づいたのなら、あなたは「肉の欲」を体験しています。あなたが肉によって、間違っていることをするように誘惑される時、あなたの内にある何かはその誘惑に抵抗しているのに気づくのは確実です。それは「聖霊の思い」です。また、誘惑に負ける時にあなたの内側から来る咎めの感覚をあなたが知っているのなら、あなたは自分の霊の声に、それは私たちの「良心」と呼ばれていますが、気づいていることとなります。

## 弟子をつくる指導者

神は私たちの肉の思いが私たちに間違っただけをさせるよう誘惑することを十分ご存知です。しかし、だからと言って、それは、私たちが肉の思いに負けることを私たちが正当化することの言い訳とはなりません。神は私たちに、従順と聖さの中で行動し、肉の性質を克服することを期待しています。

私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません（ガラテヤ 5:16）。

肉を克服する魔法の方法はありません。パウロは単純に、「御霊によって歩む」ことをすれば、私たちは「肉の欲望を満足させる」ことはないと言っています（ガラテヤ5:16）。このことであって、どのクリスチャンも同じです。御霊によって歩むことは、単純に私たちそれぞれが取らなくてはならない決断であり、主への献身は、私たちがどの程度肉の欲に従っていないかによって測ることができます。

パウロは単純にこう書きました。

キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです（ガラテヤ 5:24）。

パウロは、キリストにつく者は、自分の肉を十字架につけてしまった（過去形）と言いました。それは、私たちが悔い改めて、主イエス・キリストを信じた時に起こりました。ですから、今となっての問題は、肉を十字架につけることではなく、肉を十字架につけたままにしておくことです。

肉を十字架につけたままにしておくことはいつも簡単な訳ではありませんが、可能です。肉の衝動に負けずに、内なる人の導きに従って行動すれば、キリストの命を表すことになり、神の御前に聖く歩むようになります。

### 創り変えられた霊の性質（The Nature of our Recreated Spirits）

私たちの新しく創り変えられた霊の性質を一言で言い表すなら、それはキリストです。聖霊はイエスと似たご性質をお持ちですが、その聖霊を通して、私たちは、イエスのご性質を私たちの内側に実際持つようになります。パウロは、「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられる」（ガラテヤ2:20）と書

## 新しい誕生

きました。

私たちの内には、イエスの御力とご性質が備わっているので、私たちには、キリストのように生きるという素晴らしい可能性があるのです。私たちには、もっと沢山の愛や忍耐、自制が必要だ、というわけでは実際ないのです。なぜなら、最大に愛し、忍耐し、自制して下さるお方が私たちの内に生きておられるからです！私たちがすべきことは、神に私たちを通して生きていただくことです。

しかし、イエスのご性質に反して戦い、私たちを通してそのご性質が表れないようにしようとする一番の反対勢力は、実は、私たちの肉です。自分の肉を十字架につけなくてはならないと、パウロが言ったのも無理ありません。私たちの肉に対して何かをすることは私たちの責任であり、神にそのことについて何かしてもらうよう頼むのは時間の無駄です。パウロも、肉の性質で問題を抱えていましたが、しかし彼はその責任を負い、克服しました。

私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。それは、私がほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです（第一コリント 9:27）。

あなたも、主の御前に聖く歩みたいと願うのなら、自分のからだを打ちたたいてあなたの霊に従わせるのです。あなたには、それができるのです！



## 第十一章

### 聖霊のバプテスマ (The Baptism in The Holy Spirit)

使徒の働きを読むと、初代教会の中での聖霊の働きは、ページ毎に明らかです。使徒の働きから聖霊の働きを取り除けば、何も残らない、と言っても良い位です。神は、「世界をひっくり返す」(使徒17:6; KJV参照)程、初代の弟子たちに力を与えました。

今日世界各地で、教会が急速に増え広がっている所というのは、イエスの弟子たちが聖霊に委ねて、力を強められている所です。これに私たちは驚くべきではありません。人間の努力で一万年もかかって達成することを、聖霊なら十秒でそれ以上のことを達成することができます。従って、弟子をつくる指導者が、信者の人生や主にあたる務めの中に聖霊について聖書が何を教えているかを理解することは、大変重要なことです。

使徒の働きの中で、信者が聖霊のバプテスマを受け、主の務めをするために力強められる例を頻繁に見つけます。このテーマについて学び、賢くなることで、私たちも当時の信者が経験したことを経験し、彼らが聖霊の奇跡的な助けを楽しんだように、楽しめるかもしれません。ある人たちは、そのような奇跡的な聖霊の働きは初代の使徒たちの時代に限られたことである、と主張しますが、私はそのような意見の聖書的、歴史的、もしくは論理的根拠を見つけられません。これは不信仰から生まれた理論に過ぎません。神のみことばが約束していることを信じる人たちは、その約束された祝福を体験するでしょう。約束の地に入ることができなかった、不信仰なイスラエル人

## 弟子をつくる指導者

たちのように、今日神が約束することを信じられない人たちは、その人たちのために神が既に備えておられる全てには、与けれないでしょう。あなたはどちらの種類に入りますか。個人的に、私は信じる者たちの中にいたいです。

### 聖霊による二つの働き (Two Works by the Holy Spirit)

主イエスを心から信じている全ての人、その人の人生にはたらく聖霊を体験したことがあります。その内なる人、すなわち霊は、聖霊によって新しく生まれたのであり（テトス3:5）、その人の内には聖霊が住んでおられます（ローマ8:9; 第一コリント6:19参照）。その人は「御霊によって生まれた」のです（ヨハネ3:5）。

このことを理解せずに、カリスマ派やペンテコステ派のクリスチャンは、聖霊のバプテスマを受け、異言で話さない限り、聖霊を受けたことにはならない、という誤った考えを信者たちに伝えてしまっています。しかし、これが間違っていることは、聖書や経験から明白です。カリスマ派やペンテコステ派の信者に比べて、そうでない信者たちの方が、聖霊が宿っている証拠があることが多いです！パウロがガラテヤ5章22から23節で挙げている御霊の実を、より豊かに表しており、それは聖霊の助けなしでは不可能なことです。

しかし、人が御霊によって生まれたからというだけでは、その人が聖霊のバプテスマを受けたとは保証できません。聖書によると、御霊によって生まれることと、聖霊のバプテスマを受けることは、通常二つの異なる経験になります。

このテーマについて探求し始めるところで、まず最初に、イエスがかつてサマリヤの井戸のほとりで、未信者の女性に聖霊について言ったことを考えていきましょう。

イエスは答えて言われた。「もしあなたが神の賜物を知り、また、あなたに水を飲ませてくれと言う者がだれであるかを知っていたら、あなたのほうでその人に求めたことでしょうか。そしてその人はあなたに生ける水を与えたことでしょうか...イエスは答えて言われた。「この[井戸から]水を飲む者はだれでも、また渇きます。しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことがあ

## 聖霊のバプテスマ

りません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます」 (ヨハネ4:10, 13-14)。

イエスが話された、うちにある生ける水とは、信じる者の内に住まわれる聖霊を表している、と結論付けるのは妥当なようです。ヨハネによる福音書の後の方で、イエスは再び同じ言葉、「生ける水」を用いており、そこで聖霊について語られていることに疑う余地はありません。

さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立って、大声で言われた。「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおりに、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊はまだ注がれていなかったからである (ヨハネ 7:37-39、一部強調)。

この例では、イエスは生ける水が、「その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出る」とは言いませんでした。むしろここで生ける水は、その人の心の奥底から流れ出る川になっています。

ヨハネによる福音書から、これら二つの類似する聖書箇所は、御霊によって生まれることと、聖霊のバプテスマを受ける違いについて、美しく描写しています。御霊によって生まれることは、主にその生まれ変わる人の益となり、それは永遠の命を楽しむためです。人が御霊によって生まれる時、その人には御霊を貯めるタンクを内に秘め、そこからその人は永遠の命を得ます。

しかし、聖霊のバプテスマを受けることは、主に他の人の益となります。と言うのも、聖霊の力によって、他の人々に仕え、務めが果たせるように、信者を整えるからです。「生ける水の川」が心の奥底から流れ、御霊の力によって、他の人に神の祝福をもたらします。

**なぜ聖霊によるバプテスマが必要なのか (Why the Baptism in the Holy Spirit is**

**Needed)**

他の人に仕えるのに、どれ程までに聖霊の助けが必要なことでしょうか！聖霊の助けなしに、私たちがあらゆる国の人々を弟子とすることに期待はできません。それは実際、イエスが聖霊のバプテスマを信者に与える約束の紛れもない理由です。それによって、世界は福音を聞くのです。イエスは弟子たちに言いました。

さあ、わたしは、わたしの父の約束してくださったものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい。」（ルカ24:49、一部強調）。

ルカもイエスが言ったことをこのように記録しています。

イエスは言われた。「いつとか、どんなときとかいうことは、あなたがたは知らなくてもよいのです。それは、父がご自分の権威をもってお定めになっています。しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」（使徒の働き 1:7-8、一部強調）

イエスは弟子たちに、「いと高きところから力を着せられるまで」エルサレムを離れないように言いました。そうでなければ、彼らは本質的に無力であり、イエスが弟子たちに託した務めは確実に失敗に終わることを、イエスは知っていました。しかし、弟子たちが聖霊のバプテスマを受けた時、神は福音を広めるために、超自然的に彼らを用い始めました。

世界中の多くのクリスチャンは、聖霊のバプテスマを受けた後、力の新しい次元を、特に未信者に証する際に体験しています。彼らは、自分たちの言葉に説得力があり、時には、自分たちが知っているとは気づかなかった聖書箇所を抜粋していました。伝道という務めに、特に呼びと賜物があるのに気づかされた人たちもいました。他にも、神の御旨によって、様々な超自然的な聖霊の賜物が与えられ、用いられた人たちもいました。このような体験は完全に聖書的であると言えます。それに反対する人た



## 聖霊のバプテスマ

ちは、反対することに何の聖書的根拠がありません。そのような人たちは、実際神に対して戦いを挑んでいることとなります。

キリストに倣うよう呼ばれた私たちにとって、イエスの聖霊による体験にも倣うよう呼ばれていることに驚いてはなりません。イエスは、勿論、マリヤの胎に宿っている時から、御霊によって生まれたものでした（マタイ1:20参照）。御霊によって生まれたイエスは、その務めが始まる前に、聖霊のバプテスマを受けました（マタイ3:16参照）。もしイエスはその務めの備えとして、聖霊のバプテスマを受ける必要があったのなら、私たちはどれ程もっと受ける必要があるでしょうか。

### 聖霊のバプテスマの最初の証拠（The Initial Evidence of the Baptism in the Spirit）

信者が聖霊のバプテスマを受ける時、この体験の最初の証拠は、新しい言葉を話すことで、聖書では、「新しいことば」や「異言」と呼ばれています。聖書の多くの箇所がこの事実を裏付けています。

まず、イエスの昇天前の地上での最後の時に、イエスは、信者に伴う一つのしるしは、新しいことばを話すことであると言いました。

それから、イエスは彼らにこう言われた。「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。信じてバプテスマを受ける者は、救われます。しかし、信じない者は罪に定められます。信じる人々には次のようなしるしが伴います。すなわち、わたしの名によって悪霊を追い出し、新しいことばを語り、（マルコ16:15-17、一部強調）。

ある注釈には、この箇所は、新約聖書の古代の写本に含まれていないものもあった、という理由で聖書に含むべきではないと書いてあるものもあります。しかし、古代の多くの写本には実際含まれており、私が読んだ様々な英訳聖書のうち、この箇所を除くものは一つもありません。それよりも、イエスがこの箇所で言ったことと、使徒の働きに記録されている初代教会の体験とは、完全に相互関係があるのです。

使徒の働きには、信者が聖霊のバプテスマを最初に受けた五つの事例があります。

## 弟子をつくる指導者

これから全五事例を見ていきますが、以下の二つの質問を常に自問しながら読み進めてください。(1) 聖霊のバプテスマは、救いの後に起きた経験であったか。(2) 聖霊のバプテスマを受けた人は新しいことばで話したか。これは、今日の信者に対する神の御旨を、私たちが理解するのに役立つでしょう。

### エルサレム (Jerusalem)

最初の事例は、使徒の働き二章の、百二十人の弟子たちが五旬節の日に聖霊のバプテスマを受けた時の話です。

五旬節の日になって、みなが一つ所に集まっていた。すると突然、天から、激しい風が吹いてくるような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った。また、炎のような分かれた舌が現われて、ひとりひとりの上にとどまった。すると、みなが聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話した。 (使徒の働き 2:1-4、一部強調)。

この時以前に、この百二十人の信者たちは救われて、霊の生まれ変わりの体験をしたことに、疑いの余地はありません。従って、この人たちは救われた後に、聖霊のバプテスマを受けたということは確実です。逆に、この人たちがこれより以前に聖霊のバプテスマを受けたと考えることには、聖霊がその日まで与えられていなかったという単純な理由から、無理があります。

それに伴うしるしとして、他国のことばで話したことは明らかです。

### サマリヤ (Samaria)

二つ目の事例は、使徒の働き8章の、ピリポがサマリヤの町へ下り、福音を宣べ伝えた時に、信者が聖霊のバプテスマを受けた時の話です。

しかし、ピリポが神の国とイエス・キリストの御名について宣べるのを信じた彼ら[サマリヤ人]は、男も女もバプテスマを受けた。... さて、エルサレムにいる使徒たちは、サマリヤの人々が神のことばを受け入れたと聞いて、ペテロとヨハネを彼らのところへ遣わした。

## 聖霊のバプテスマ

ふたりは下って行って、人々が聖霊を受けるように祈った。彼らは主イエスの御名によってバプテスマを受けていただけで、聖霊がまだだれにも下っておられなかったからである（使徒の働き 8:12-16）。

サマリヤのクリスチャンたちは、明らかに救いの次の体験として聖霊のバプテスマを受けました。聖書には明白に、ペテロとヨハネが下っていく前に、サマリヤの人々は「神のことばを受け入れ」、福音を信じ、水の洗礼を受けたと記されています。ペテロとヨハネは祈るために下って行きましたが、それは、「人々が聖霊を受ける」ためであったと聖書に書いてあります。これ以上、明白な言い方があるでしょうか。

サマリヤの信者たちは、聖霊のバプテスマを受けた時に、新しいことばを語り出したのでしょうか。聖書にはそのことについて書いてはありませんが、何か驚くことが彼らに起きた、と書いてあります。ペテロとヨハネがサマリヤのクリスチャンたちの上に手を置いた時に、何が起きたかをシモンという人が目撃し、シモンは使徒たちからその聖霊を授ける権威をお金で買おうとしました。

ふたりが彼らの上に手を置くと、彼らは聖霊を受けた。使徒たちが手を置くと聖霊が与えられるのを見たシモンは、使徒たちのところに金を持って来て、「私が手を置いた者がだれでも聖霊を受けられるように、この権威を私にも下さい。」と言った（使徒 8:17-19）。

シモンは何を見て、それ程までに感動したのでしょうか。彼は他にも、人々が悪霊から解放されたり、中風の人、足のきかない人が奇跡的に癒されたりと、多くの奇跡を既に見てきました（使徒の働き 8:6-7参照）。シモン自身、以前魔術を行って、サマリヤの人々を驚かせていました（使徒の働き 8:9-10参照）。そうであるならば、ペテロとヨハネが祈った時にシモンが目撃したものは、かなり目を見張らせるものであったに違いありません。絶対なる確信を持っては言い切れませんが、使徒の働きの他のところで、クリスチャンが聖霊を受けた時に起こる同じ現象を、この時シモンは見た、つまり、シモンは人々が他国のことばで話すのを見たり聞いたりした、と考え

## 弟子をつくる指導者

ることはかなり妥当なようです。

### ダマスコでのサウロ (Saul in Damascus)

使徒の働きの中で、誰かが聖霊を受けたという記載の三つ目は、サウロというタルソ人、後の使徒パウロの事例です。彼は、ダマスコへ行く途中で救われ、そこで一時的に視力をも失いました。彼の改心から三日後、アナニヤという人が神によって彼のところへ送られました。

そこでアナニヤは出かけて行って、その家にはいり、サウロの上に手を置いてこう言った。「兄弟サウロ。あなたが来る途中でお現われになった主イエスが、私を遣わされました。あなたが再び見えるようになり、聖霊に満たされるためです。」するとただちに、サウロの目からうろこのような物が落ちて、目が見えるようになった。

彼は立ち上がって、バプテスマを受け、(使徒の働き 9:17-18)。

アナニヤが来てサウロのために祈る前に、サウロは生まれ変わりの体験をしていたことは明らかです。ダマスコへ行く途中で、サウロは主イエスを信じ、彼の新しい主の導きに直ちに従いました。更に、アナニヤが最初にサウロに会った時、アナニヤは彼に、「兄弟サウロ」と呼びました。アナニヤはサウロに、彼が再び見えるようになり、聖霊に満たされるために遣わされたと言いました。従ってサウロの場合は、聖霊に満たされ、もしくはバプテスマを受けたのは、彼が救われた後に起きました。聖書には、サウロが聖霊のバプテスマを受けたという実際の出来事は記録されていませんが、アナニヤがサウロの滞在先に着いて間もなく、起きたに違いありません。サウロはその後、異言で語るようになったのは、第一コリント十四章十八節に「私は、あなたがたのだれよりも多くの異言を話すことを神に感謝しています」と書いてあることから明らかです。

### カイザリヤ (Caesarea)

信者が聖霊のバプテスマを受けたという記載の四つ目は、使徒の働き十章にあります。使徒ペテロは、カイザリヤのコルネリオの家に行き、福音を宣べ伝える任命を

## 聖霊のバプテスマ

神から受けました。救いはイエスを信じる信仰を通して与えられる、とペテロが啓示したその途端に、そこにいた異邦人の聴衆はたちまち信仰によって応え、彼らの上に聖霊が下りました。

ペテロがなおもこれらのことばを話し続けているとき、みことばに耳を傾けていたすべての人々に、聖霊がお下りになった。割礼を受けている信者で、ペテロといっしょに来た人たちは、異邦人にも聖霊の賜物が注がれたので驚いた。彼らが異言を話し、神を賛美するのを聞いたからである。そこでペテロはこう言った。「この人たちは、私たちと同じように、聖霊を受けたのですから、いったいだれが、水をさし止めて、この人たちにバプテスマを受けさせないようにすることができましようか。」そして、イエス・キリストの御名によってバプテスマを受けるように彼らに命じた（使徒の働き10:44-48前半）。

ここでは、コルネリオの家の者たち、つまり最初にイエスを信じた異邦人の信者たちということですが、彼らは生まれ変わりの体験と、聖霊のバプテスマとを、まるで同時に受けたかのように見えます。

もし私たちがその周辺の聖書箇所を調べ、また歴史的背景を勉強するなら、なぜ神は、ペテロと彼といっしょに来た人たちに、異邦人の信者が聖霊を受けるよう手を置くことを待たせなかったのか、その理由は明らかです。ペテロと他のユダヤ人信者は、異邦人が救われることすら、なかなか信じることができなかつたのですから、彼らが聖霊を受けることについては尚更です！彼らはおそらく、コルネリオの家に行つて、聖霊のバプテスマを受けるように祈ることなどは決してしなかつたでしょうから、これは、唯一の主権者である神の御業であつたことがわかります。神はペテロと彼といっしょに来た人たちに、神の異邦人に対する驚くべき恵みについて、教えていました。

ペテロと他のユダヤ人信者は、コルネリオの家が本当に聖霊を受けたということ、

## 弟子をつくる指導者

どうして信じることができたのでしょうか。ルカはこう書きました。「彼らが異言を話（す）...のを聞いたからである」（使徒の働き10:46）。ペテロは、五旬節の日に百二十人が聖霊を受けたのと全く同じように、異邦人も聖霊を受けたと宣言しました（10:47参照）。

## エペソ (Ephesus)

信者が聖霊のバプテスマを受けたという記載の五つ目は、使徒の働き19章にあります。エペソ中を旅しながら、使徒パウロは弟子たちと出会い、以下の質問をしました。「信じたとき、聖霊を受けましたか。」（使徒の働き19:2）。

パウロは、新約聖書の殆どの使徒書簡を書きましたが、イエスを信じて、ある意味、聖霊をまだ受けていない、ということがあり得ることをはっきりと信じていました。そうでなければ、そのような質問をしなかったでしょう。

弟子たちは、聖霊とは一度も聞いたことがない、と答えました。実際彼らは、自分たちの洗礼を授かった洗礼者ヨハネから、これから来るメシヤについてのみ、聞いたことがありました。

パウロはすぐにもう一度彼らに水の洗礼を授け、その時、彼らは本当のクリスチャンの洗礼を体験しました。最後に、パウロは聖霊を受けるようにと、彼らの上に手を置きました。

これを聞いたその人々は、主イエスの御名によってバプテスマを受けた。パウロが彼らの上に手を置いたとき、聖霊が彼らに臨まれ、彼らは異言を語ったり、預言をしたりした。その人々は、みなで十二人ほどであった。（使徒の働き 19:5-7）

ここでも、これら十二人の人たちが、パウロに会う前に、生まれ変わりの体験をしていたかどうかにかかわらず、聖霊のバプテスマが救いの後に起こっていることは明らかです。そして、またもう一度、彼らが聖霊のバプテスマを受けたことに伴うしるしとして、異言を語ることがありました（そしてこの時は、預言もしました）。

## 最終判断 (The Verdict)

## 聖霊のバプテスマ

五つの事例を復習していきましょう。少なくとも四つの事例は、救いの後に聖霊のバプテスマの体験が起きました。

三つの事例で、聖書は明白に、聖霊のバプテスマを受けた人たちが異言を話したと書いてあります。そして、パウロがアナニヤと出会った時、パウロが聖霊のバプテスマを受けたという体験についての記述は実際にはありませんが、彼は後に異言を語るようになったことは明らかです。それは、四つ目の事例を表しています。

残りの事例では、驚くべき超自然的な何かが、サマリヤの信者が聖霊を受けた時に起き、それはシモンがその聖霊を授ける権威をお金で買おうとした程のことでした。

つまり、証拠はかなり明白です。初代教会では、生まれ変わった信者たちは、次の体験として、聖霊を授かりました。それが起きた時、彼らは異言で語り出しました。これは何も驚くべきことではありません。というのも、イエスを信じる者たちに、新しい言語で語るようイエスは言ったからです。

従って、私たちは、誰でも新しく生まれ変わった人は、聖霊のもう一つの働き、つまり、聖霊のバプテスマも体験している、という結論的証拠があります。更に、全ての信者は、聖霊のバプテスマを受ける時、異言を語るようになることを期待すべきです。

### 聖霊のバプテスマの受け方 (How to Receive the Baptism in the Holy Spirit)

神の賜物の全てがそうであるように、聖霊も信仰によって受けるものです（ガラテヤ3:5参照）。受ける信仰を得るために、信者はまず自分が聖霊のバプテスマを受けることは神の御旨であることに納得していなくてはなりません。もしその人の心の中に迷いや疑いがあるのなら、受けることはできません（ヤコブ 1:6-7参照）。

イエスははっきりと聖霊を受けることは神の御旨であると言及したので、それを信者が信じない理由は、どこにもありません。

してみると、あなたがたも、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さないことがあります

## 弟子をつくる指導者

ましょう（ルカ 11:13）。

神の子であるならば誰でも、イエスの口から出た、人が聖霊を受けることは神の御旨であるという約束を、納得すべきです。

この同じ聖句は、また、救いの後に起きる聖霊のバプテスマという真理をも支持しています。なぜなら、ここでイエスは神の子供たち（神を「天の父」とする唯一の人々）に、神は子供たちが求めれば、必ず聖霊を与えると約束したからです。もし、聖霊に関する唯一の体験が、救われた時の生まれ変わりだけであるとしたら、明らかに、イエスの約束は意味をなさなくなります。ある現代神学者たちとは違って、イエスは、生まれ変わりの体験をした人が、神に聖霊を求めることは非常に適切である、と考えます。

イエスによると、人が聖霊を受ける条件として、二つだけ挙げています。一つは、神がその人の父であること、つまり、その人が生まれ変わっていれば、神はその人の父です。二つ目は、その人が神に聖霊を求めなくてはなりません。

手を置いて聖霊を受けることは聖書に書いてあることですが（使徒の働き 8:17; 19:6）、必ずしもそうでなくてはならない、というものではありません。どんなクリスチャンでも、自分の祈りの場で、自分だけで聖霊を受けるということはありません。その人は単純に求め、信仰により受け、聖霊が話させてくださるとおり、異言で話し出すことが必要です。

### よく言われる恐れ (Common Fears)

ある人たちは、もし聖霊を求めて祈ると、代わりに悪霊に対して自分自身を開いてしまうのではないかと心配しています。しかし、そのような心配には何の根拠もありません。イエスはこう約束しました。

あなたがたの中で、子どもが魚を下さいと言うときに、魚の代わりに蛇を与えるような父親が、いったいいるのでしょうか。卵を下さいと言うのに、だれが、さそりを与えるでしょう。してみると、あなたがたも、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与



## 聖霊のバプテスマ

えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天の父が、  
求める人たちに、どうして聖霊を下さらないことがありましよう

(ルカ 11:11-13)。

もし私たちが聖霊を求めるのなら、神は聖霊を与えてくださり、何か他のものを  
受けるのではという恐れを持つべきではありません。

ある人たちは異言で語る時、聖霊に与えられた超自然的なことばではなく、自分  
たち自身で作上げた、単なる馬鹿げたことばとなるのでは、と心配しています。し  
かし、聖霊のバプテスマを受ける前に、何か証拠となるようなことばを作り出そうと  
しても、それは不可能だと気づくでしょう。一方、あなたが他国のことばで語る時、  
あなたは意識的にあなたの唇と舌と声帯を使わなくてはならないことを理解しなく  
てはなりません。聖霊はあなたのために話しません。ただあなたにことばを与えるだ  
けです。聖霊は私たちの助け主であり、実際に私たちのためにしてくださる方ではあ  
りません。以下の聖書箇所で教えている通り、実際語るのは、あなたがしなくてはな  
りません。

すると、みなが聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、  
他国のことばで話した (使徒の働き 2:4、一部強調)。

パウロが彼らの上に手を置いたとき、聖霊が彼らに臨まれ、彼らは  
異言を語ったり、預言をしたりした (使徒の働き 19:6、一部強調)。

信者が聖霊の賜物を求めたら、その人は異言で語ることを信じて、期待すべきで  
す。聖霊は信仰によって受けられるので、受ける人は、ある特定の感情や体感を期待  
すべきではありません。ただ、口を開け、新しい音声と音節によってできる聖霊がそ  
の人に与えることばを話し出すべきです。信者が信仰によって話し出さない限り、そ  
の人の口からことばは発せられません。その人が話さなくてはならず、聖霊がことば  
を与えます。

## ことばの源 (The Source of the Utterance)

## 弟子をつくる指導者

パウロによると、信者が異言で祈る時、その人の知性ではなく、むしろ霊が祈っているのです。

もし私が異言で祈るなら、私の霊は祈るが、私の知性は実を結ばないのです。ではどうすればよいのでしょうか。私は霊において祈り、また知性においても祈りましょう。霊において賛美し、また知性においても賛美しましょう（第一コリント 14:14-15）。

パウロは、異言で祈るなら、彼の知性は実を結ばない、と言いました。それは、異言で祈ることに彼の知性は何も関わっておらず、またパウロは自分が異言で何を祈っているのか理解しませんでした。従って、自分が言っていることを理解しないで異言で四六時中祈る、というよりはむしろ、パウロは自分自身の言語で、知性で祈ることもしました。彼は、異言で賛美し、自分の言語でも賛美しました。両方の種類の祈りと賛美にふさわしい場所がそれぞれあり、私たちがこのような、パウロのバランスのとれた模範に従うことは賢いことでしょう。

パウロにとって、異言で話すことは、自分が知っている言葉で話すのと同じくらい、自分の意思に服従するものであったことに注目してください。パウロは、「私は霊において祈り、また知性においても祈りましょう」と言いました。批評家たちは、現代の異言が本当に聖霊の賜物であるのなら、それを自分では制御できないはずだ、とよく主張します。それは神を支配することになり罪となる、と言うのです。しかし、そのような考えは何の根拠もありません。現代でも古代でも、異言を話すことは、神のご計画通り、それを話す人の支配下にあります。そのような主張を批評家たちがするのなら、本当に神によって創られた手を持つ人に、その手を使う制御はその人にはなく、また、意識的に判断して手をつかう人は、それを創られた神を支配しようとしているのだ、と言うのと同じではないでしょうか。

聖霊のバプテスマを一度受けると、あなたの異言のことばは、あなたの知性からではなく、あなたの霊から来ていることを自分で容易に認識できます。まず、この本を読みながら、誰かと会話をしてみてください。同時に両方はできないことに気づく

## 聖霊のバプテスマ

でしょう。しかし、この本を読み続けながら、異言で話し続けることはできることに気づくと思います。その理由は、異言を話すのに、知性を用いていないからです。ことばは、あなたの霊から来ています。ですから、あなたは祈りには霊を使い、読んだり、理解したりするのには知性を使うことができるのです。

### 聖霊のバプテスマを受けた今 (Now That You Are Baptized in the Holy Spirit)

神が聖霊のバプテスマを与えた一番の理由をいつも思い出してください。それは、御霊の実と賜物の現れにより、イエスの証人となるという大切な目的のために、力づけるためなのです（第一コリント 12:4-11; ガラテヤ5:22-23参照）。キリストのように人生を歩み、その愛、喜び、平安を世に示し、また御霊の超自然的な賜物を現わすことで、神は私たちを用いて、他の人をもご自身に引き寄せたいのです。異言を話す能力は、あなたの心の奥底から流れ出る「生ける水の川」のひとつにしか過ぎません。

また神は、私たちが地上の全ての人に福音を行き渡らせることができるように、私たちに聖霊を与えたことを思い出してください（使徒の働き1:8参照）。私たちが他国のことばで話す時、私たちが話しているそのことばは、どこか人里離れた部族や外国のことばであるかもしれないことを、知っておくべきです。異言で祈る度に、神は地上の全ての言語でイエスのことを聞かせたいと願っておられることを、私たちは意識すべきです。イエスの大宣教命令を成就するために、神は私たちにどのように係わって欲しいと願っておられるのかを、私たちは主に尋ねるべきです。

私たちは、異言で話すことをなるべく多くすべきです。霊の発電所とも言える、力溢れるパウロは、「私は、あなたがたのだれよりも多くの異言を話すことを神に感謝しています」（第一コリント14:18）と書きました。彼は、この言葉を（大抵が間違ったタイミングでしていましたが）異言を多く語る教会に向かって書きました。従って、パウロは相当多くの時を、彼ら以上に異言で語ることに費やしていたに違いありません。異言で祈ることは、私たちの内におられる聖霊を常に意識する助けとなり、第一テサロニケの5章17節でパウロが教えたように、「絶えず祈る」助けとなります。

パウロはまた、他国のことばで話すことは信者の徳を高めることであると教えま

## 弟子をつくる指導者

した（第一コリント14:4参照）。つまり、私たちが霊的に建て上げる、ということです。異言で祈ることで、私たちは、私たちがまだ完全に理解していない方法で、私たちの内なる人を強めることができます。他国のことばで話すことは、全ての信者の霊的な生活を日々豊かなものにすることができ、単に一度限りの、最初に聖霊に満たされた体験とは違います。

もう既にあなたが聖霊のバプテスマを受けたのなら、神に向かってあなたの新しいことばで祈る時間を持つように、私はお勧めします。それは、あなたの霊的な生活と成長を著しく促すこととなるでしょう。

### よくある質問に対する答え (Answers to a Few Common Questions)

一度も異言を話したことがない人は、聖霊のバプテスマをまだ受けていないと、私たちは確信を持って言うことができるのでしょうか。個人的には、私はそうは思いません。

私は、人に聖霊のバプテスマを受けるよう祈る時、その人に異言で話すことを期待するようにいつも励まします。おそらく95パーセントの人は、私がある人のために祈り始めて数秒以内に異言で話し出しました。その数は、この何年もの間で、何千人にもたちします。

しかし、聖霊のバプテスマを受けるよう祈ったクリスチャンで、まだ異言を話していないからと言って、聖霊のバプテスマをまだ受けていない、とは私は決して言いません。なぜなら、聖霊のバプテスマは、信仰によって受けるもので、異言で語ることは、自発的行為だからです。しかし、もし私が聖霊のバプテスマを受けるために祈ってはいるが、まだ異言を話したことがない、という信者と分かち合う機会があれば、私はまず、このことに関して書いてある使徒の働きの聖句を全てその人に見せます。そして、私はその信者に、パウロが異言を話す時、話さない時を自分で制御していたことを、パウロがどのように書いているかを見せます。私はパウロのように、自分が望む時に異言を話すことができ、また、もし望むなら、私はこれから二度と異言を話さないと決めることも可能なのです。そうであるのなら、私は聖霊のバプテスマを、

## 聖霊のバプテスマ

もしかしたら受けていたにもかかわらず、聖霊のことばに協力しないことにより、最初に異言で話すことは全くなかった、ということがあり得たかもしれません。

従って、もう一度言いますが、私は、信仰によって聖霊のバプテスマを求めて祈っていても、異言で話したことがないというクリスチャンと分かち合う機会がある時、その人に向かって、あなたは聖霊のバプテスマをまだ受けていない、とは言いませんし、信じません。私は単純に、異言で話すことは、自分たちの意に反して起こることではないことを、その人に説明します。聖霊はことばを与えますが、私たちは、自分の知る言語を話す時と同様に、話すという行動を取らなくてはならないことを説明します。そして、聖霊と連携して、異言を話し出すことを励まします。殆ど例外なく、全ての人々がすぐに異言で話すようになります。

**パウロは誰もが異言で語る訳ではないと書かなかったか (Didn't Paul Write that Not All Speak with Tongues?)**

パウロの誇張した質問、「みな異言を語るでしょうか。」(第一コリント12:30)に対して、答えは明白に「いいえ」ということになりますが、この部分は、新約聖書全体との調和を保たなくてはなりません。パウロの質問は、御霊の賜物についての教えの中から見つけられるもので、御霊の賜物は全て、御霊がみこころのままになすことの現われです。(第一コリント12:11参照)。パウロは、「(様々な)異言」(第一コリント12:10; ( )内は英訳に含まれる)という御霊の賜物について特記し、パウロによると、それはいつも異言を解き明かす御霊の賜物が伴うべきである、ということです。この特定の賜物は、コリントの人々がいつも彼らの教会で現わしていたものとは違っていたと思われれます。と言うのも、コリントの教会では、解き明かしなしに、公で異言が語られていたからです。そこで私たちは、考えるべきです。なぜ、聖霊は公の集まりの中で、ある人に異言の賜物を注ぎながら、誰かに解き明かしの霊を与えなかったのでしょうか。答えは、神はそうしなかった、ということです。そうでなければ、聖霊が神の御旨ではないことを促したことになってしまいます。

コリントの人々は、解き明かしをすることなく、礼拝中に異言で声を出して祈っ

## 弟子をつくる指導者

ていたに違いありません。つまり、異言で話すことには二つの異なる用途がある、ということをおたちは学びます。ひとつは異言で祈ることで、これは、パウロ曰く、個人で密かになされるべきことです。このような異言の使い方は、「私の霊は祈るが、私の知性は実を結ばない」（第一コリント14:14）とパウロは書いている通り、解き明かしは伴いません。明らかに、パウロが異言で話す時、自分が言っていることをパウロがいつも分かっていた訳ではありませんでした。彼の側には理解はありませんでしたし、解き明かしもありませんでした。

しかし、教会の公な集まりの中で、異言を話す、という使い方もあります。これは、常に異言の解き明かしが伴います。それは、聖霊が望むままに誰かに働き、解き明かしの賜物を与えます。しかし、神は皆をそのように用いる訳ではありません。ですから、パウロは皆が異言で話す訳ではない、と書いたのです。神は、異言の解き明かしの賜物を全ての人には与えなかったように、神は、突然、自然発生的に与えられる異言の賜物に全ての人を用いる訳ではありません。これこそが、パウロの誇張した質問、「みな異言を語るでしょうか。」と、残りの聖書の教えとが、調和を保てる唯一の考え方です。

パウロがそうであったように、私もいつでも望めば、異言を語ることはできます。異言で語る時はいつも、ただ「聖霊がみこころのままに」している、とは、パウロも私自身も、明らかに言い切れません。それは、私たちの意思です。ですから、私たちがいつでも望む時にしていることが、「聖霊がみこころのままに」起こす異言を話す賜物である、とは言えません。更に、私もすることですが、パウロは自分が言っていることを理解することなく、密かに異言で語りましたが、それは第一コリントで、異言の解き明かしが必ず伴う、とパウロが書いた異言の賜物とは言えません。

ごく稀に、私は公の集まりの中で異言を語ることがあります。しようと思えば、（コリントの人々がやっていたように）解き明かしなしに、いつでもしたい時に教会で、声を出して異言で祈ることはできますが、それをするのは、聖霊が私の上に臨み、そうするよう促しを感じた時だけです。聖霊が私の上にその賜物をもって臨むのを感じ

## 聖霊のバプテスマ

じた時、必ず御からだを建て上げる解き明かしが伴います。

結論として言いたいことは、私たちは、聖書のことばを調和を持って解釈しなくてはならない、ということです。第一コリント十二章三十節にあるパウロの誇張した質問のために、全ての信者が異言を話す訳ではない、と結論付けた人々は、その結論とは合わない、聖書にある他の多くの箇所を無視していることとなります。その過ちにより、神からの偉大な祝福を逃してしまっているのです。





## 第十二章

### 女性のミニストリー (Women in Ministry)

主イエス・キリストの教会の半分以上が女性から成ることは、私たちの共通知識としてあるので、女性たちに神が定める御からだの中での役割について、理解することは重要なことです。大抵の教会やミニストリーの中で、女性たちは度々ミニストリー全般の殆どを行っている為、彼女たちは貴重な働き手として見なされています。

しかし、全ての人が女性の役割について合意している訳ではありません。女性は、人前で話したり、人を指導するような分野の務めから、制限を受けていることが多いです。女性の牧師を許す教会もありますが、多くは違います。女性が教えるのを許す教会もありますが、他は違います。中には、礼拝の間中ずっと、女性は話してはいけない、とする教会もあります。

これらの不一致の殆どは、第一コリント十四章三十四から三十五節と、第一テモテ二章十一節から三章七節に見られる、女性の役割に関するパウロの言葉に対する様々な解釈によります。ここでは、これらの聖書箇所、特にこの章の最後の方で集中して学んでいきます。

#### 最初から (From the Beginning)

まず始めに、聖書の一番最初のページから女性について聖書は何を言っているか、考えてみましょう。女性は、男性と同様、神のかたちに創造されました。

神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに

## 弟子をつくる指導者

彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。（創世記 1:27）

神がエバの前にアダムを創造されたことは知っていますし、このことは、パウロによると、靈的に重要な事実であります（第一テモテ 2:3参照）。この創造された順番の重要性について、パウロは説明していて、この章の後で取り上げますが、まず言えることは、これは女性よりも男性の方が優れている、ということを証明するものではありません。神は人間を造る前に、動物を造った（創世記 1:24-28参照）ことは、皆知っていますが、誰も人間よりも動物の方が優れているとは論じません。<sup>52</sup>

女性は、夫の助け手として造られました（創世記2:18参照）。これも、女性が劣っていることを証明するものではなく、夫婦関係における女性の役割を示しているだけです。聖霊は私たちの助け主として与えられています、聖霊は私たちより劣っている訳では勿論ありません！そして、夫の助け手としての女性という神の創造は、男性には助けが必要であることを表しています！人が、ひとりであるのは良くない、とおっしゃったのは神です（創世記2:18参照）。この真理は、男性が、彼らを助ける妻なしに残された時、歴史の中で何度も証明されてきました。

最後に、創世記の最初のページから、最初の女が最初の男の肉から形づくられたことについて見ていきましょう。女は男から形づくられたということは、本来、男は女なしでは欠けた存在であり、二人は元々一人であったということです。また、神が分けたことは御旨であり、それは二人が性的に結び合わせられることで、再び一つとされるため、それは夫婦関係を守る手段としてだけでなく、愛を表し、お互いに依存しあうことで味わう、共通の喜びを楽しむ手段でもあります。

このように神の創造から学ぶ全ては、性の違いによって、一方は他方よりも優れているとか、支配する権利がある、という考えに反しています。また、夫婦関係や主にある務めにおいて、神が女性に男性とは違う役割を与えたからと言って、キリスト

---

<sup>52</sup> 52 神が人を産む女性を創造した後、アダム以降の全ての人は、神によって創造されてきた、ということにも留意すべきである。パウロが第一コリント 11 章 11 から 12 節で私たちに思い出させる通り、アダム以来、全ての男は女から生まれた。この神聖な序列が、男がその母の下位に位置していることを証明することは、論争の余地もない。

## 女性のミニストリー

にあって「男子も女子もなく」（ガラテヤ 3:28）、平等であることには、何の変わりもありません。

### 旧約聖書にみる女性のミニストリー (Women in Ministry in the Old Testament)

この基礎を敷いたところで、これから旧約聖書の中で神の目的を果たすために、神が用いた女性たちについて見ていきましょう。当たり前のことですが、新約の時代でもそうでしたが、旧約の時代には、神は職業としてのミニストリーへ、主に男性を召しました。モーセ、アロン、ヨシュア、ヨセフ、サムエル、ダビデといった人たちの話は、旧約聖書のページを埋めています。

しかし、多くの女性の例を見ると、神は御旨のままに誰でも召し出し、用いることができる、という証として際立っており、神によって整えられた女性は、神が召し出すどんな働きにも十分太刀打ちできます。

そのような女性について具体的に考えて行く前に、旧約聖書に出て来る偉大な神の人は皆女性から生まれ、育てられた、ということ覚えておくべきです。モーセはヨケベデという名の女性なくしては、存在しなかったでしょう（出エジプト 6:20参照）。同様に、他の偉大な神の人と呼ばれる人たちも、その人たちの母親なくしては存在しなかったでしょう。女性たちには、子供を育てる、という重たい責任と称賛に価する、主にある務めが神から与えられています（第二テモテ 1:5参照）。

ヨケベデは、神が召した二人、モーセとアロンの母親というだけでなく、神が召した女性、彼らの姉、女預言者、また賛美リーダーであるミリヤムの母親でもありました（出エジプト 15:20参照）。ミカ書の六章四節では、神はイスラエルの指導者として、ミリヤムをモーセとアロンと同様に分類しました。

わたしはあなたをエジプトの地から上らせ、奴隷の家からあなたを  
買い戻し、あなたの前にモーセと、アロンと、ミリヤムを送った（一  
部強調）。

勿論、イスラエルの指導者としてのミリヤムの役割には、モーセ程明白な支配力はありませんでした。しかし女預言者として、ミリヤムは神に代わって語り、彼女を

## 弟子をつくる指導者

通して語られた神のメッセージは女性に対してだけではなく、当然イスラエルの男性にも向けられていたと考えるのは、ほぼ確実でしょう。

### イスラエルの女性さばきつかさ (A Female Judge Over Israel)

神が召し出したイスラエルの、次の女指導者は、さばきつかさの時代に生きたデボラです。彼女も女預言者でした。また、ギデオン、エフタ、サムソンが、生涯イスラエルのさばきつかさであったように、彼女もさばきつかさでした。私たちは、「イスラエル人は彼女のところに上って来て、さばきを受けた」（士師記 4:5）ということをも聖書から知らされています。そのようにして、デボラは女性にだけでなく、男性にも決断を下しました。ですから、以下のように言っても過言ではないでしょう。すなわち、*女は何をすべきか男たちに伝え、神は彼女がそうできるように油を注いだ。*

神が指導者に召し出す殆どの女性たちと同様、デボラは、女性の器を通して与えられた神の言葉を、受け入れるのに苦労していた少なくとも一人の男性に、どうやら直面したようです。彼の名はバラクといい、彼はデボラが彼に与えた、カナン人の將軍シセラに対する戦に出よ、との預言的導きについて懐疑的であったために、デボラは、シセラを殺す名誉はある女に行くことをバラクに伝えました。デボラの言った通りで、ヤエルという女性の名は聖書の中で、眠っているシセラの頭に鉄のくいを打ち込んだ女性として覚えられています（士師記 4参照）。話は、バラクがデボラとデュエットを歌うところで終わります！歌詞の中には、デボラとヤエルへの称賛の言葉で溢れる箇所もあります（士師記 5参照）。おそらく、バラクは最終的に「女性のミニストーリー」を信じるようになったことでしょう。

### 三人目の女預言者 (A Third Prophetess)

とても尊敬されている女預言者として旧約聖書に出て来る、三人目の女性は、フルダです。神はフルダに信頼できる預言的洞察力と、悩める一人の男、ユダのヨシヤ王への導きを与えるために、彼女を用いました（第二列王記 22参照）。再び私たちは、男性に導きを与えるために、神が女性を用いている例をここに見ます。おそらくフルダは、神によってそのような務めに、ある程度規則的に用いられていたのだでしょ

## 女性のミニストリー

う。そうでなければ、ヨシヤはフルダが彼に言ったことに、それ程の信仰を持たなかったでしょう。

しかし、なぜ神は、ミリヤム、デボラ、またフルダを女預言者として召したのでしょうか。代わりに男性を召すことは、できなかったのでしょうか。

勿論、神はこれらの三人の女性たちがした全く同じことに、男性を召すこともできたでしょう。しかし、神はそうしませんでした。なぜだかは、誰にもわかりません。これを通して私たちが学ぶべきことは、神が誰を務めに召すかについて、神を箱に入れて限定しないよう気を付けた方がよい、ということです。神は旧約の時代において、通常男性を指導者の務めに選びましたが、時には女性を選ぶこともありました。

最後に注目すべきことは、旧約聖書に出て来た、女性指導者の卓越した例は全て、三人とも女預言者であった、ということです。旧約にある務めのいくつかには、女性は誰も召されていないものもありました。例えば、祭司には女性は選ばれませんでした。つまり、神はある務めの職を、男性に限定していたのかもしれませんが。

### 新約聖書にみる女性のミニストリー (Women in Ministry in the New Testament)

興味深いことに、新約聖書でも、神に女預言者として召された女性がいます。イエスが生後まだ数日しか経っていない頃、アンナはイエスを認識し、イエスこそがメシアであることを宣言し始めました。

また、アセル族のパヌエルの娘で女預言者のアンナという人がいた。

この人は非常に年をとっていた。処女の時代のあと七年間、夫とともに住み、その後やもめになり、八十四歳になっていた。そして宮を離れず、夜も昼も、断食と祈りをもって神に仕えていた。ちょうどこのとき、彼女もそこにいて、神に感謝をささげ、そして、エルサレムの贖いを待ち望んでいるすべての人々に、この幼子のことを語った（ルカ 2:36-38、一部強調）。

アンナは「エルサレムの贖いを待ち望んでいる」すべての人々に、イエスのことを語ったことに注目してください。それは、当然男性も含まれます。つまり、アンナ

## 弟子をつくる指導者

は、キリストについて男性たちにずっと教えてきてた、と言えるかもしれません。

新約聖書には、他にも神が預言の賜物に用いた女性たちがいます。イエスの母、マリヤは、確かにこのグループに入ります（ルカ 1:46-55）。マリヤの預言的な言葉が教会の礼拝で読まれる時はいつも、女性が教会を教えている、と言ってもよいでしょう。（そして、神はそのひとり子を、他の色々な手段でできたにもかかわらず、女性を通して世にお遣わしになったことは、疑いもなく、神は女性という存在を高く評価していた、と言えるでしょう。）

リストはまだ続きます。神は前もって、預言者ヨエルの口を通して、神がイスラエルの息子や娘両方の上に、御霊を注ぐ時のことを預言しました（ヨエル2:28参照）。ペテロは、新しい契約によって、確かにヨエルの預言が成就し、御霊が分け与えられたと確信しました（使徒の働き 2:17参照）。

使徒の働き二十一章八から九節で、伝道者ピリポは娘が四人いて、全員預言者であった、ということが書かれています。

パウロは女性が教会の集会の中で預言することについて書きました（第一コリント 11:5参照）。文脈から、そこには男性もいたことは明白です。

神が女性を預言者として預言するために用いた、という聖書の例を見ると、神が女性をそのような務めに用いるかもしれない、という考えを私たちが否定して良い理由は、確かに一つもないことは明らかです！更に、女性が神に代わって男性に預言することはあり得ない、という考えに導くものも何もありません。

### 女性牧師？ (Women as Pastors?)

女性が牧師として仕えることはどうでしょうか。牧師、長老、監督の職は、男性によってなされると、神が意図したことは明らかなようです。

「人がもし監督の職につきたいと思うなら、それはすばらしい仕事を求めることである。」ということばは真実です。ですから、監督はこういう人でなければなりません。すなわち、非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、自分を制し、慎み深く、品位が

## 女性のミニストリー

あり、よくもてなし、教える能力があり、（第一テモテ 3:1-2、一部強調）

私があなただをクレテに残したのは、あなたが残っている仕事の整理をし、また、私が指図したように、町ごとに長老たちを任命するためでした。それには、その人（英語では男性）が、非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、その子どもは不品行を責められたり、反抗的であったりしない信者であることが条件です（テトス 1:5-6、一部強調）。

パウロは、女性が職につくことを禁じる、とははっきりと言っていないので、私たちは、絶対的な全体の結論を出すことに、少し気を付けた方がよいでしょう。今日、世界中に、特に発展途上国には、大変活躍している女性の牧師、長老、監督が数多くいるようですが、また圧倒的に少数派です。おそらく、神の賢い御国の目的に役立つ時、もしくは、条件を満たす男性の指導者が足りない時、神は時々この役割に女性たちを召し出すのでしょう。また今日、キリストの御からだにいる女性牧師の多くは、預言者の職のような、女性に対して聖書的に有効な他の務めの職にも実際召されていて、現代教会の構造上、彼女たちに牧師としてしか機能させていないという可能性もあります。

なぜ、牧師、長老、監督の職は男性につかせる、とされているのでしょうか。この職の働きについて理解すると、その理由がわかるようになるかもしれません。聖書に書かれている、牧師、長老、監督になるための必要条件のひとつはこれです。

自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。「自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうし

## 弟子をつくる指導者

て神の教会の世話をすることができるでしょう。」（第一テモテ 3:4-5）。

新約時代の長老は小さな家の教会を監督していた、ということに気づくと、この必要条件は非常に辻褃が合います。長老の役割は、家全体を監督する父親の役割と似ていました。これは、なぜ牧師の職に男性がつくのか、という理由を理解させてくれます。つまり、妻ではなく、夫を筆頭とする、神が設計した家族構成に、教会は非常に似ているからです。

### 女性使徒？ (Women as Apostles?)

女性は（もし神が召したのならば）預言者の職につくことができる、という結論に至りました。では、他の職はどうでしょうか。ローマ十六章にある、神の御国のための務めに入り、仕える、多くの女性たちを讃えるパウロの挨拶文は、色々と私たちに教えてくれます。ある女性は、使徒としてさえ、挙げられていたかもしれません。次に続いて引用する、三カ所の聖書からの抜粋の中に、女性の名前には斜体で表します。

ケンクレヤにある教会の執事で、私たちの姉妹であるフィベを、あなたがたに推薦します。どうぞ、聖徒にふさわしいしかたで、主にあってこの人を歓迎し、あなたがたの助けを必要とすることは、どんなことでも助けてあげてください。この人は、多くの人を助け、また私自身をも助けてくれた人です（ローマ 16:1-2、一部強調）。

何と言う推薦の言葉でしょう。フィベが携わり、全うした務めは何であったのか、正確にはわかりませんが、パウロは彼女を「ヤンクレヤにある教会の執事」であり、またパウロ自身を含む「多くの人を助け」てくれた人と呼びました。主にあって彼女の務めが何であろうと、ローマの教会全体に、パウロが彼女についての推薦の言葉を送る必要があった程、彼女についての記述はかなり重要なことであつたに違いありません。

次はプリスカ（プリスキラ）について読みますが、彼女の夫アクラと共に、彼女



## 女性のミニストリー

は全ての異邦人の教会が彼らに感謝する程、重要な務めがありました。

キリスト・イエスにあって私の同労者であるプリスカとアクラによりよく伝えてください。この人たちは、自分のいのちの危険を冒して私のいのちを守ってくれたのです。この人たちには、私だけでなく、異邦人のすべての教会も感謝しています。またその家の教会によりよく伝えてください。私の愛するエパネトによりよく。この人はアジアでキリストを信じた最初の人です。あなたがたのために非常に労苦したマリヤによりよく。私の同国人で私といっしょに投獄されたことのある、アンドロニコとユニアス[もしくはユニアとKJVでは訳されており、それは女性]にもよろしく。この人々は使徒たちの間によく知られている人々で、また私より先にキリストにある者となったのです（ローマ 16:3-7、一部強調）。

ユニアスについてですが、「使徒たちの間によく知られている」という箇所は、単に、その人が使徒であることを意味する、と考える方が論理的に思えます。もし正しい訳がユニアであれば、彼女は女性の使徒であったということです。プリスカとマリヤは主の働き手でした。

主にあって私の愛するアムプリアトによりよく。キリストにあって私たちの同労者であるウルバノと、私の愛するスタキスとによりよく。キリストにあって練たちしたアペレによりよく。アリストブロの家の人たちによりよく。私の同国人ヘロデオンによりよく。ナルキソの家の主にある人たちによりよく。主にあって労している、ツルパナとツルゴサによりよく。主にあって非常に労苦した愛するペルシスによりよく。主にあって選ばれた人ルポスによりよく。また彼と私との母によりよく。アスクリト、フレゴン、ヘルメス、パトロバ、ヘルマスおよびその人たちといっしょにいる兄弟たちによりよく。フィロロゴとユリヤ、ネレオとその姉妹、オ

## 弟子をつくる指導者

ルンパおよびその人たちといっしょにいるすべての聖徒たちによろしく（ローマ 16:8-15、一部強調）。

女性が主にある務めの「働き手」となれることは明白です。

### 女性教師？ (Women as Teachers?)

女性の教師はどうでしょうか。新約聖書には一切出てきません。勿論、聖書にはどんな男性でも、教師と呼ばれる人について記述がありません。アクラの妻、プリスキラ（上記の通り、プリスカとしても知られている）は、少なくとも小規模な形で、教えることに携わっていました。例えば、エペソでアポロが、正確ではない福音を宣べ伝えていたのを、プリスキラとアクラが聞いた時、彼らは「彼を招き入れて、神の道をもっと正確に彼に説明」しました（使徒 18:26）。プリスキラは、彼女の夫が一人の男性、アポロを教えるのを手伝った、ということに対して誰も議論できません。また、パウロは「彼らの家の教会」（ローマ 16:3-5 — 訳者注：日本語訳では「その家」とされているが、英語では「彼らの家」となっている；第一コリント 16:19参照）と書いて、聖書の中で、二度プリスキラとアクラの二人について言及し、パウロは、ローマ十六章三節で二人を「キリスト・イエスにあつて私の同労者」と呼んでいます。プリスキラが、神にある務めの中で、彼女の夫と共に、積極的役割があったことに、疑う余地はあまりありません。

### イエスが女性に男性を教えるよう命じる時 (When Jesus Commanded Women to Teach Men)

女性は静かにして、女性が男性を教えることを禁じたパウロの言葉に触れる前に、それらを調和させる他の聖句について見ていきましょう。

イエスが復活した時、天使はイエスの男弟子たちに教えるために、少なくとも三人の女性を任命しました。その女性たちは、イエスが死人の中からよみがえられたこと、そしてイエスはガリラヤに現れることを、弟子たちに伝えるよう指示を受けました。しかし、それだけではありません。間もなく、イエスご自身がその同じ女性たちの前に現れ、弟子たちにガリラヤへ行くよう指示するように命じました（マタイ

28:1-10; マルコ16:1-7参照)。

第一に、イエスは最初に女性に現れ、その後男性に現れることをお選びになったことには意味があるように思います。第二に、もし女性が男性を教えることが何か根本的に、もしくは道徳的に間違っていたのであれば、全く些細な情報とは言えない、イエスの復活についての情報を、しかもイエス自身が伝えようと思えばできたであろう(実際後でそうされたのですが)その情報を、イエスは女性たちに先に伝え、彼女たちにそれを男性に教えるようにとは言わなかったであろう、と考えられます。従って、次の事実に対して誰も異議を唱えることはできません。すなわち、主イエスは女性たちに、とても重要な真理を教え、男性たちを霊的に導くよう命じたのでした。

### 問題箇所 (The Problem Passages)

神の務めにおける女性の役割について、聖書が教える多くを私たちが少し理解したところで、私たちはパウロの書いた「問題の箇所」を、もう少し上手に解釈できることでしょう。まず、女性が教会の中で静かにしておくことについて、彼が書いたことについて考えてみましょう。

教会では、妻たちは黙っていなさい。彼らは語ることを許されていません。律法も言うように、服従しなさい。もし何かを学びたいければ、家で自分の夫に尋ねなさい。教会で語ることは、妻にとってはふさわしくないことです(第一コリント 14:34-35)。

これらは実際パウロが教えたことなのか、それともコリントの人々がパウロに書いたことを単にパウロが抜粋したのかと、いくつかの理由を重ね合わせて、疑問に思う人たちがいます。この手紙の後半部分で、パウロはコリントの人々が彼に以前送った手紙の中で尋ねた質問について回答しているのは明らかです(第一コリント 7:1, 25; 8:1; 12:1; 16:1, 12参照)。

更に、すぐその後の聖句で、コリントの人々の、教会で女性が話すことを全面禁止する方針に対する、パウロの反応とも考えられることが書かれています。

神のことばは、あなたがたのところから出たのでしょうか。あるいは

## 弟子をつくる指導者

はまた、あなたがたにだけ伝わったのでしょうか（第一コリント 14:36）。

英語訳の一つ、欽定訳（KJV）では、パウロがコリントの人々の態度に、もっと呆れ驚いている様子を描写しています。

一体何ですか。神のことばはあなたがたのところから出たのですか。それとも、あなたがただけに伝わったとでも言うのですか（第一コリント 14:36）。

いずれにせよ、パウロはここで明らかに、二つの大げさな質問をしています。両方の質問に対する答えは、いいえです。コリントの人々が神のことばを発した訳ではありませんし、神の言葉は彼らだけに伝えられた訳でもありません。パウロの質問は、彼らの高ぶりに対しての明らかな叱責です。もしこれが直前の二節に対するパウロの反応であるのなら、言葉で表すならば、「あなた方は、何様のつもりなのか。神がみことばを語るのに誰を用いるかについて、一体いつからあなた方が決め付けるようになったのか。神は思いのままに、女性を用いることができ、従って彼女たちを黙らすあなた方は愚かである。」といった具合でしょう。

パウロが既に同じ手紙の中で、女性が教会で預言をする正しいやり方（第一コリント 11:5参照）、つまり女性が黙らないためにすべきことについて書いていたことを考慮に入れると、この解釈は論理的のように思います。更に、これらの今見てきた箇所の数節後では、パウロが女性を含めたコリントの人々全員<sup>53</sup>53に、「預言することを熱心に求めなさい」（第一コリント 14:39）と強く勧めています。つまり、もし十四章三十四から三十五節で、教会の集会の中で、女性は沈黙を保たなくてはならないという全面禁止令を、パウロが本当に出したとしたら、パウロは自分自身とかなり矛盾したことを言っていることになります。

---

<sup>53</sup> 53 パウロの奨励は、この手紙の中で彼が 27 回用いている言葉、「兄弟たち」に向かってされており、それはコリントのクリスチャンたちという御からだ全体を指しているのであって、男だけを指している訳ではない。

## 女性のミニストリー

### 他の可能性 (Other Possibilities)

第一コリント十四章三十四から三十五節にある言葉が、パウロによって発せられた言葉であり、パウロが女性に黙っていることを指導していると仮定してみましょう。彼の言っていることを私たちはどう解釈すべきでしょうか。

パウロはどうも、同じ手紙の中で、女性は礼拝の中で祈り、預言できると言っているようなので、ここでもう一度、なぜパウロは、女性が教会の集会の中で完全に黙っているべきだ、という全面禁止令を出しているかについて、考える必要があります。

更に、パウロは確かに、神は女性を用いて神のことばを公に、時には男性に対しても話す事例が、聖書の中には沢山あることを知っていました。なぜ、頻繁に語るように、と神が油を注ぐ女性たちを、パウロは完全に黙らせようをするのでしょうか。

常識的に考えれば、教会の集会の度に女性たちが完全に沈黙を保つことをパウロは意味した訳ではない、ということは当然わかります。初代教会は家で集まり、食事を共にしていたことを思い出してください。女性たちが家に入ってから、そこを出るまでの間ずっと、彼女たちが一言も話さなかったと、考えるべきでしょうか。彼女たちは食事の準備をし、共に食べている時に、一言も話さなかったと、考えるべきでしょうか。そのような考えは、馬鹿げているように思います。

「ふたりでも三人でも」イエスの御名において集まる所なら、イエスはその只中におられる（マタイ18:20参照）のであれば、教会の集まりは当然これに値しますが、二人の女性がイエスの御名によって集まる時、彼女たちはお互いに話してはならないのでしょうか。

いいえ、もし第一コリント十四章三十四から三十五節がパウロの命令であるのなら、パウロは単に、教会内の秩序に関する些細な問題を指摘していただけです。ある女性たちが質問をする際、ある意味秩序なく行っていました。パウロは彼女たちを集会の間中、完全に黙らせることを、意味したのではありませんでした。それは、その数節前に同じような導きが預言者に対して与えられていますが、パウロは彼らに集会の間中沈黙を保たせることを意味したのではないのと、同じことです。

## 弟子をつくる指導者

もしも座席に着いている別の人[預言者]に黙示が与えられたら、先  
の人は黙りなさい（第一コリント14:30、一部強調）。

この場合、「黙りなさい」という言葉の意味は、「一時的に話すことを止める」  
という意味です。

パウロはまた、異言を語る者に対しても、その集まりの中で解き明かしがないな  
らば、黙るよう教えました。

もし解き明かす者がだれもいなければ、教会ではだまっていなさい。

自分だけで、神に向かって話しなさい（第一コリント 14:28、一部  
強調）。

パウロはそのような人たちに、集会の間中完全に黙ることを教えていたのでは  
うか。いいえ、パウロはただ解き明かしがない時は、異言で語ることを慎むように言  
っているだけです。パウロは、「教会ではだまっていなさい」と彼らに言い、これは  
第一コリント十四章三十四から三十五節で、彼が女性たちに与えた指示と全く同じで  
あることに注目してください。そうであるなら、なぜパウロの女性たちに対して言っ  
た、教会では黙っていなさい、という言葉、私たちは「集会の間中、ずっと沈黙を  
保ちなさい」という意味に解釈して、パウロの異言を無秩序に語る人たちに対して言  
った言葉を、「集会の中のある特定の時間帯は、異言で語ることを禁ずる」という意  
味に解釈するのでしょうか。

最後に、ここで見てきた聖書箇所は、全ての女性に対して言っているのではない  
ことに注目してください。パウロの言葉は、既婚の女性に向けられている言葉です。  
と言うのも、もし彼女たちに質問があれば、「家で自分の夫に尋ねなさい」と指示し  
ているからです。<sup>54</sup>54おそらく、問題の一部または全ては、既婚女性が、自分の夫以

---

<sup>54</sup> 54 原語のギリシャ語では、女と妻、男と夫という言葉にそれぞれ何の違いもなかったとい  
うことを書き留めておくべきであろう。つまり、著者が男女について語っているのか、それとも夫  
婦について語っているのかを、我々は文脈から判断しなくてはならない。この聖書箇所、パウ  
ロは妻たちに向かって、彼女たちはどんな質問も、家で夫にだけ尋ねることができる、と言っ  
ている。

## 女性のミニストリー

外の他の男性に質問をしていたことだったのでしょう。このようなシナリオは、確かに不正と見なされ、また自分の夫に対してある程度の軽蔑と従順の欠如を表していたかもしれません。パウロが指摘していた問題がこれだったとすれば、これが、彼の議論が、女性は服従すべきである、という事実に基づいている理由なのでしょう。

まとめると、もしパウロが第一コリント十四章三十四から三十五節で、女性に対して本当に沈黙を保つことを教えているならば、パウロは単に既婚の女性が、ふさわしくない時や夫に尊敬を払わないやり方で質問をすることにあって、黙っているように、と言っているだけです。それ以外の場合は、女性たちは預言し、祈り、話してもよいのです。

### 他の問題箇所 (The Other Problem Passage)

ついに、私たちは二つ目の「問題箇所」に到たちます。それは、パウロがテモテに送った最初の手紙の中にある次の箇所です。

女は、静かにして、よく従う心をもって教えを受けなさい。私は、女が教えたり男を支配したりすることを許しません。ただ、静かにしていなさい。 アダムが初めに造られ、次にエバが造られたからです。 また、アダムは惑わされなかったが、女は惑わされてしまい、あやまちを犯しました (第一テモテ 2:11-14)。

勿論パウロは、神に代わって、男性たちや女性たちに対して語ったミリヤム、デボラ、フルダ、アンアの四人の女預言者が、人々に神の御旨を効果的に教えたことを知っていました。勿論パウロは、イスラエルのさばきつかさ、デボラがある程度の権力を男の上にも女の上にも遂行し、彼らに神の御旨を効果的に教えていたことを知っていました。勿論パウロは、五旬節の日に神はその御霊を注いだこと、それは、神がその御霊をすべての人に注ぎ、息子や娘は神のみことばを預言するという、後の日に起きるヨエルの預言が、部分的に成就していることを知っていました。勿論パウロは、イエスが、イエスからの伝言を男性の使徒たちに伝えるよう、女性たちを任命したことを知っていました。勿論パウロは、教会の集会の間、女性が祈ることや預言するこ

## 弟子をつくる指導者

とについて、コリントの教会宛に自分自身が書いた、承認の言葉について知っていました。勿論パウロは、コリントの人々に、誰でも御からだと分かち合うべき教えを聖霊から受けるかもしれないことを教えたことを覚えていました（第一コリント 14:26 参照）。それならば、パウロは、テモテにこのような言葉を書いた時、何を伝えたかったのでしょうか。

パウロの命令の基礎として、パウロは創世記からの二つの関連する事実に訴えていることに注目してください。すなわち、(1) アダムはエバの前に造られたこと、と(2) アダムではなく、エバが騙され、罪に陥ったことです。最初の事実は、夫と妻の間に正しい関係を築きます。創造の命令から学んだように、夫は頭となるべき存在であり、それはパウロは他の箇所でも教えています（第一コリント11:3; エペソ 5:23-24 参照）。

パウロが言及する二つ目の事実は、女性の方が男性よりも騙されやすい、ということを行っている訳ではありません。なぜなら、本当にそうではないからです。実際、キリストの御からだには男性よりも女性の方が多いため、男性の方が女性よりももっと騙されやすいと論じる人もいるかもしれません。むしろ、二つ目の事実は、神が家族に意図した命令を無視する時、サタンに入る隙を与えてしまうことを示しています。全人類の問題は、人とその妻との間の関係の秩序が壊れた時に、エデンの園で始まりました。つまり、アダムの妻は、夫に従わなかったのです。アダムは妻に、禁じられた木の実について、神が与えた命令を言うべきでした（創世記2:16-17; 3:2-3参照）。しかし、彼女は夫の命令に従いませんでした。ある意味、禁じられた木の実を食べるように、妻が夫にあげた時、彼女は彼を超えた権威の行使さえしたのです（創世記3:6 参照）。その場合、アダムがエバを率いていたのではありませんでした。エバがアダムを率いていたのです。結果は酷いものでした。

### 教会—家族のモデル (The Church – A Model of Family)

神が家族に意図した秩序は、勿論教会で実際に守られるべきです。最初に私が言った通り、教会の集まりがまだ小さかった、教会の歴史の最初の三百年間を、覚えて



## 女性のミニストリー

おくことは重要です。当時、人々は家で集まりました。牧師、長老、監督は、家の父親のような役割でした。この神が命じた教会の体制は、家族にとっても良く似ていて、実際にそれは霊の家族でした。ですから、女性がその頭となると、教会内外に間違ったメッセージを送ってしまうことになります。女性牧師、長老、または監督が定期的に家の教会にて教えていて、彼女の夫がそこに従順に座って、彼女の権威の下に入り、彼女の教えを聞いているのを想像してみてください。それは、家族にある神の命令に逆らっており、誤った模範を表していることになります。

これがパウロの言葉が示したことです。このパウロの言葉は、パウロが長老に対する必要条件として与えた内容と非常に似ており（第一テモテ 3:1-7参照）、その内の一つは、長老は男性である、と言っているところに注目してください。また、長老は教会で定期的に教えるべきである、と言っているところも注目すべきです（第一テモテ 5:17参照）。女性は静かに教えを受け、男性を超えて教えたり、権威を行使することは許されない、とするパウロの言葉は、明白に、教会の中の正しい秩序と関連しています。女性が、それが一部であれ全体であれ、長老、牧師、監督の役割を果たすことはふさわしくない、とパウロは描写しています。

これは、夫への従順の故に、女性、または妻が祈ったり、預言したり、御からだと分かち合うための簡単な教えを聖霊から受けたり、教会の集まりの中で一般的に話したりすることができなかった、ということを行っている訳ではありません。これら全てを、女性は、神の秩序に反することなく、家の中と同様、教会の中でもすることができました。女性が教会の中で禁じられていたことは、例えば夫に対して権力を行使するといったような、家の中でも同様に多かれ少なかれ、禁じられていたことでした。

また、その後の箇所から、女性は執事の務めを男性と同様できることが書いてあることにも気づきます（第一テモテ3:12参照）。執事として、もしくはその言葉の実際の意味通り、しもべ（英語では仕える者）として教会で仕えることは、夫と妻の関係に神が与えた秩序に背かないことが求められます。

## 弟子をつくる指導者

これが、私が第一テモテ二章十一から十四節にあるパウロの言葉を、聖書の他の箇所で見ていることと、調和させるために見ることができる、唯一の方法です。これまでに見てきた、神が女性を用いた聖書の他の事例でも、教会程、家のモデルとして用いられているものではなく、ですから、神の定めた秩序に逆らっているものは何もありません。ここで挙げた事例のどこにも、家族という設定の中で、妻が夫に対して権力を行使するといった不適切なモデルは、見当たりません。ここでもう一度、いくつかの家族がある家に集まる小さな集会で、妻が指導権を握り、教え、監督する傍ら、彼女の夫は静かに座って、彼女の発揮するリーダーシップの下にある、という様子を想像してみてください。神が定める家族の秩序に反するので、これは神が望んでおられるものではありません。

しかし、デボラがイスラエルのさばきつかさであったこと、アンナがキリストについて人々に知らせたこと、マリアと彼女の友人たちがキリストの復活について使徒たちに教えたことなど、これらのどの事例でも、誤ったメッセージを発信したり、家族という単位に神が与えた秩序を、どこかで乱したりはしていません。通常の教会の集まりは特別な設定であり、そこでは女性や妻が権威を行使したり、定期的に男性や夫に教えていると、誤ったメッセージが送られる危険が存在します。

### まとめ (In Conclusion)

「女性が憐みの心から他の人に仕えたり、神が与えた賜物を用いて、神にある務めに機能することについて、根本的な誤りとは一体何であるのか。どんなモラル的、もしくは道徳的原則に反しているのか。」と私たちが自問する時、私たちはすぐに、原則に反する唯一の可能性は、もし女性のミニストリーが、神の立てた男女、夫婦関係の秩序にどういう形であろうと背いた時だけであることに気づくでしょう。この章で見えてきた両方の「問題箇所」の中で、パウロの関心の基礎には、神が定める夫婦の秩序を守って欲しいというパウロ思いがあるのです。

つまり私たちは、非常に小さな意味においてのみ、女性がミニストリーから制限されていることがわかります。色々な他の方法で、神はご自身の栄光のために女性を

## 女性のミニストリー

用いたいと願っており、神はそのように何千年もの間行って来ています。聖書は、女性たちが沢山、良いかたちで神の御国に貢献してきたことを示しており、この章でそのいくつかを見てきました。イエスの親友の何人かは女性たちであったこと（ヨハネ 11:5参照）、また女性たちがイエスのミニストリーを経済的に支えていて（ルカ 8:1-3参照）、それについては、男性は一人も書かれていないことを、忘れないようにしましょう。サマリヤの井戸にいた女性は、彼女の町の男性たちにキリストを分かち合い、多くがキリストを信じました（ヨハネ 4:28-30, 39参照）。タビタという女弟子は、「多くの良いわざと施しをしていた」（使徒 9:36）とされています。イエスの埋葬の用意に、油を塗ったのは女性でしたし、ある弟子が不満を漏らした時に、イエスは彼女の行為を称賛しました（マルコ 14:3-9参照）。最後に、イエスが十字架を運んで、エルサレムの道を通った時、イエスのために嘆き悲しんだのは女性たちであったと、聖書は記録しており、それは、男性については言われていない事柄です。これらの事例と、多くのそれに似た事例は、女性たちを起き上がらせ、彼女たちに神が定めたミニストリーを全うするよう励ますに違いありません。私たちには、全ての女性が必要です！



## 第十三章

### 離婚と再婚 (Divorce and Remarriage)

離婚と再婚というテーマは、敬虔なクリスチャンたちの間でよく議論されます。その議論の基礎となる二つの質問はこれです。(1) 離婚が神の目に容認されたのなら、一体いつからか。また、(2) 再婚が神の目に容認されたのなら、一体いつからか。殆どの宗派や単立教会は、独自の聖書解釈に基づき、何が容認され、何が容認されていないのかについて、教義上の立場を公式に表明しています。それらは咎めと生きる指針を与えるものなので、私たちは全て順守すべきです。もしその咎めが、その人の持つ神に対する愛から来ているならば、です。しかし、確実に一番良いのは、私たち皆が心に抱く咎めが、完全に聖書に基づいたものであることです。弟子をつくる指導者は、神が意図しないものを教えたくはありません。また、そのような指導者は、神が意図しない重荷を人々に負わせることも望みません。私はここで、論議の的となるこのトピックについて書かれた聖書箇所解釈に、最善を尽くします。それに合意するか、しないかは、あなたに決めていただきます。

私はあなたと同様、今日世の中でこれ程までに離婚が蔓延していることを見て悲しんでいる、ということをお伝えすることから始めさせてください。更に悲しませるのは、自分はクリスチャンだと明言している、指導者も含む多くの人たちが離婚している事実があることです。これは大きな悲劇です。これ以上このようなことが起きな

## 弟子をつくる指導者

いように、私たちができる全てのことをする必要があり、離婚問題への最善の解決策は、福音を宣べ伝え、人々に悔い改めを呼びかけることです。結婚した二人がキリストにあって真に生まれ変わり、二人が共にキリストに従って歩んでいるのならば、離婚はあり得ないことです。弟子をつくる指導者は、自分自身の結婚を強めるためにできることは何でもしますが、それは、その模範こそが、その人の一番影響力のある教える手段となるからです。

また、私は三十年以上、幸せな結婚生活に恵まれ、それ以前に結婚したことはないことも付け加えさせてください。離婚するなんて、想像もつきません。従って、離婚に関する厳しい聖書の言葉を、自分の為に和らげるといった動機は一切ありません。しかし、私自身もかつて若い男でしたから、後になってとにかく離婚したい、と思うような相手と結婚してしまったり、私が実際結婚した素晴らしい女性程、私に寛容でいられないような相手と結婚してしまったり等、私の結婚の判断にあっても、いつでも失敗し得たことを十分承知していますので、私は、離婚経験者に対して多大な憐みを持っています。言い換えるなら、私も離婚するに至ったかもしれないかもしれませんが、神の恵みによって、私は未だしていないだけです。殆どの既婚者の方は、私の言っている意味がわかると思いますので、私たちは、離婚した人たちに石投げするのを抑える必要があります。そこまで苦勞しなくても結婚を維持しているような私たちが、離婚した人がずっと耐えてきたものがどのようなものかもわからずに、離婚経験者を非難をするとは、私たちは一体何様のつもりでしょうか。神は、私たちが同じような境遇にあれば、もっと早く離婚していたかもしれないのをご存知なので、神の前では、そのような離婚経験者たちの方が、私たちよりもずっと義とされるかもしれません。

結婚する人は誰一人として、最終的に離婚することを期待してはいませんし、そこを通り苦しんだ人たち程、離婚を憎む人はいない、と私は思います。従って、私たちは、既婚者には結婚に留まるよう助け、また離婚経験者には、神が既に与えているかもしれない恵みを、その人たちが見つけられるように助けるべきです。そのような霊にあって、私は書いています。

## 離婚と再婚

私はここで、聖書自体に聖書を解釈させるよう、最善を尽くします。私は、このテーマに於ける聖書箇所が、他の聖書箇所と矛盾した形で解釈されることがしばしばあることに気づきましたが、それは、これらの聖書箇所が、少なくとも部分的に長年誤解されてきていることを、確かに示唆しています。

### 基礎 (A Foundation)

まず、私たち皆が同意できる、基礎的真理から始めましょう。最も根本的なところで、神は、離婚というものに強く反対していると、聖書は明確にしています。イスラエル人男性が妻たちを離別していた頃、神は預言者マラキを通して宣言しました。

わたしは、離婚を憎む。...わたしは、暴力でその着物をおおう。...

あなたがたは、あなたがたの霊に注意せよ。裏切ってはならない

(マラキ 2:16)。

愛と義なる神という神のご性質について知っている人なら、また離婚がどれ程夫、妻、また子供たちを傷つけるものかを知っている人なら、この聖書の言葉に驚くことはないはずです。誰でも一般的に離婚を好む人については、その人のモラル面の品性を私たちは疑わなくてはならないでしょう。神は愛であり（第一ヨハネ 4:8参照）、従って、神は離婚を憎みます。

パリサイ人の中には、かつてイエスを試す為に、「何か理由があれば」離婚は合法化されるのか、聞いた人たちがいました。イエスの答えは、基本的に離婚を支持しない立場を表しています。事実、誰に対しても、離婚はイエスの御旨ではなかったのです。

パリサイ人たちがみもとにやって来て、イエスを試みて、こう言った。「何か理由があれば、妻を離別することは律法にかなっているのでしょうか。」イエスは答えて言われた。「創造者は、初めから人を男と女に造って、『それゆえ、人はその父と母を離れて、その妻と結ばれ、ふたりの者が一心同体になるのだ。』と言われたのです。それを、あなたがたは読んだことがないのですか。それで、

## 弟子をつくる指導者

もはやふたりではなく、ひとりなのです。こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。」（マタイ 19:3-6)

歴史的に言うと、イエスの時代のユダヤの宗教指導者たちの間では、二つの異なる教義がありました。これらの二つの教義については、後程詳しく見ていきますが、今言えることは、一つは保守的で、一つは自由主義的であったということです。保守派は、かなり深刻な道徳的理由の場合のみ、妻を離別できると考えていました。自由主義派は、いかなる理由であれ、例え妻以外にもっと魅力的な女性を見つけた、といった理由でさえも、妻を離別できると信じていました。これらの矛盾する信念が、パリサイ人がイエスにした質問の最も基礎にありました。

イエスは創世記の一番最初のページから、神の元来のご計画は、男女が永遠に結ばれることであり、一時的ではないことをはっきりと表しました。モーセは、神が二つの性を造られたのは、結婚を前提としており、結婚こそが、最も基礎となる人間関係として非常に重要であることを宣言しました。それが確立すれば、その関係はその人とその親との関係よりも重要なものとなります。人は親を離れ、妻とひとつとなるのです。

更に、男女の性的な結び合わせは、夫婦が一つとなるという神の定めを示しています。そのような関係、つまり結果として子孫を生み出すものは、当然ながら、神にとって一時的なものという認識はなく、永遠のものを意味しました。私は、パリサイ人に対してイエスが答えた口調は、そのような質問さえ尋ねるのか、といった非常に落胆したものであったと思います。神は、人がその妻を「いかなる理由で」離別することを意図していなかったのは確実です。

勿論、神はどんな形であっても、人が罪を犯すことを意図してはいませんが、私たちは皆罪を犯してきました。神は憐み深く、私たちが罪の奴隷とされることから救ってくださいました。更に、神は神が望んでおられないことを私たちがしてしまった後でも、何か言葉をかけてくださるお方です。同様に、神は誰にも離婚することを望



## 離婚と再婚

んではないませんが、神に服従していない人間には離婚は避けられないことです。神は最初の離婚にも、その後に続く数多くの離婚にも、驚きはしませんでした。ですから、神は、離婚を憎むことを宣言しただけではなく、離婚をしてしまった人たちに対してかける言葉をも持っておられるのです。

### はじめに (In the Beginning)

この基礎を敷いたところで、これから私たちは、神が離婚と再婚についてどう言明しているかについて、もっと詳しく探っていくことができます。離婚と再婚について、最も論議的となる発言は、イエスがイスラエル人に語られたものである為、まず私たちは、何百年も前に、この同じテーマについて神が古代イスラエル人たちに何と言っていたか、学んでみることは私たちの理解の助けとなるでしょう。神がモーセを通して言ったことと、神がイエスを通して言ったことが矛盾しているようなら、神の律法が年々変化していったか、もしくは私たちが、モーセまたはイエスどちらかの言ったことについて何か誤解をしているかのどちらかに違いありません。ですから、まず神が離婚と再婚について最初に啓示したことから始めましょう。

創世記第二章は、イエスによると、離婚のテーマと何か関係があるということについては、私はもう既に触れました。ここでは、創世記の記述から直接見ていきましょう。

こうして神である主は、人から取ったあばら骨を、ひとりの女に造り上げ、その女を人のところに連れて来られた。すると人は言った。「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。これは男から取られたのだから。」 それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである (創世記 2:22-24)。

ここに、結婚の起源があります。神は最初の男から、最初の男のために、最初の女を造られ、この最初の男に個人的に与えられました。イエスの言葉で言えば、「神が[彼らを]結び合わせた」 (マタイ 19:6、一部強調) のです。これが最初に神が定め

## 弟子をつくる指導者

た結婚で、この後に続く全ての結婚の型となりました。神は男と同じ位の数の女を造り、お互い反対の性に惹かれるように造りました。ですから、神は今も尚、非常に大きな規模で結婚のお膳立てをしておられると言えます（アダムとエバの時よりも、ずっと多くの将来の相手となる候補者が、それぞれにはいますが）。従って、イエスが指摘した通り、神が組み合わせたものを、人間は引き離してはなりません。最初の夫婦が別々の人生を生きることは、神の意図したことではなく、夫婦が相互に依存して一緒に生きることに祝福を見出すことが神の意図したことでした。神が明白に表した御旨に対する違反は、罪に繋がります。つまり、聖書の第二章から、いかなる結婚に対しても離婚は神の意図するところではなかった事が、確立した事実となっています。

### 心に刻まれた神のおきて (God's Law Written in Hearts)

私はまた、例え創世記第二章を一度も読んだことが無い人でも、生涯に渡る結婚の誓いというものは、聖書の知識が全くない、多くの異邦人文化の中でも守られている為、離婚が正しくないことは、本能的にわかっているのではないかと考えます。パウロがローマ人宛てに書いた手紙の中で言う通りです。

律法を持たない異邦人が、生まれつきのままで律法の命じる行ないをするばあいは、律法を持たなくても、自分自身が自分に対する律法なのです。彼らはこのようにして、律法の命じる行ないが彼らの心に書かれていることを示しています。彼らの良心もいっしょになってあかしし、また、彼らの思いは互いに責め合ったり、また、弁明し合ったりしています。（ローマ 2:14-15）

神の倫理規定は、一人一人の心に書かれています。事実、良心を通して語られる倫理規定は、イスラエルの民を除く、アダムからイエスの時代までの全ての人に神が与えた唯一の律法です。誰でも、離婚しようとして熟慮している人ですら、離婚をするにあたって、その人の良心と折り合いを付けなくてはならないことに気づき、その良心に打ち勝つ唯一の方法は、離婚を上手に正当化することです。もしも、上手に正当化できないまま離婚を進めてしまうと、その人は良心の咎めを、上手に抑えるかもしれ

## 離婚と再婚

ませんが、確実に受けます。

私たちの知る限り、アダムから二十七世代の間、紀元前1440年頃にイスラエルの民にモーセの律法が与えられるまで、良心という律法が、イスラエル人を含む全ての人に与えた神の啓示の全てであり、その中には離婚や再婚についても含まれました。神は、それで十分としました。（モーセは、出エジプトの時代まで、創世記第二章の執筆は行わなかったことを思い出してください。）モーセの律法前の27世代の間、そこにはノアの洪水の時代も含まれますが、その何百年もの間に、途轍もない数の結婚があり、その中には離婚で終わったものもあったと考えるのは、極めて妥当のように思えます。また、神は決して変わらぬお方であり、離婚から罪の意識を持つ人々を、その人たちが自分の罪を告白し、悔い改めるならば、神は喜んで赦してくださるお方であると結論付けることも妥当のように思えます。アブラハムが彼の信仰によってそうであったように（ローマ 4:1-12参照）、私たちは、モーセの律法が与えられる前から、人は神によって救われ、義と認められたと確信しています。もしアダムからモーセの時代まで、人々が信仰によって義と認められたのなら、人々はどんなことも、それが離婚により負わされた罪であっても、赦されたという意味です。従って、離婚と再婚のテーマについて見て行きながら、私はこう考えます。モーセの律法前に、離婚の罪を負い、神から赦しを得た人たちが、再婚した場合、（文面による律法がなかった為に）彼らの良心は罪を負っているように思い、咎めを受けるのでしょうか。ここでは問題提起だけします。

罪を自ら犯していない、自分ではなく、自分勝手な配偶者のせいで離婚した、離婚被害者たちはどうなるのでしょうか。彼らの良心が再婚させないのでしょうか。私はそのようには思いません。もしある男性が他の女性の為に、自分の妻を捨てたのなら、その捨てられた妻に再婚する権利がないなどと、どうしたら言えるのでしょうか。彼女は彼女自身の欠点からではなく、離婚させられたのです。

### モーセの律法 (The Law of Moses)

聖書の中で、離婚と再婚についての具体的な記述が始まるのは第三の書に入って

## 弟子をつくる指導者

からです。モーセの律法には、祭司が離婚した女性と結婚することを禁じる規定が、書いてあります。

彼らは淫行で汚れている女をめとってはならない。また夫から離婚された女をめとってはならない。祭司は神に対して聖であるから（レビ記 21:7）。

モーセの律法の他のどこにも、このような禁止事項がイスラエルの一般男性に向けて規定されているところはありません。更に、今抜粋した箇所は以下のことを示唆します。すなわち、(1) イスラエルには離婚女性がいた、そして (2) イスラエルの祭司以外の男性が、以前結婚していた女性と結婚することは、何も悪いことではない、ということです。上記に抜粋した律法は、祭司と、祭司と結婚しようとしている離婚経験のある女性に適用されます。モーセの律法の下で、祭司と結婚しない限り、離婚した女性が再婚することは、決して悪いことではありませんでした。また、祭司以外の男性にとって、離婚歴のある女性と結婚することは、決して悪いことではありませんでした。

大祭司（おそらく、キリストの究極の型として）普通の祭司たちよりも、より高い水準を満たして生きることが求められていました。大祭司は、やもめと結婚することすら許されませんでした。レビ記の数節後にはこう書いてあります。

やもめ、離婚された女、あるいは淫行で汚れている女、これらをめとってはならない。彼はただ、自分の民から処女をめとらなければならぬ（レビ記 21:14）。

この箇所は、イスラエルのあらゆる、全てのやもめが再婚すること、またあらゆる、全てのイスラエル人男性がやもめと結婚するは、それぞれ罪であることを証明しているのでしょうか。勿論、そうではありません。実際にこの節は、やもめは誰でも、大祭司以外とならば、男性の誰とでも結婚できるということを、強く示唆しています。他の箇所でも、やもめが再婚することは完全に合法であることが述べられています（ローマ 7:2-3; 第一テモテ 5:14参照）。

## 離婚と再婚

この箇所はまた、その前に私たちが見た箇所（レビ21:7）と合わせて、あらゆるイスラエル人男性（祭司、または大祭司は除く）にとって、離婚歴のある女性や、例え処女ではない「淫行で汚れている」女性とできえも、結婚することは、何も間違っただことではないということも示唆しています。同様に、これはモーセの律法の下、離婚歴のある女性が再婚したり、「淫行で汚れている」女性が結婚することは、相手が祭司でない限り、何も悪いことではないことを示唆しています。神は、姦淫にも離婚にも強く反対しましたが、姦淫を犯す者にも、離婚した者にも恵み深く、更なるチャンスをお与えになりました。

### 再婚に対しての二つ目の具体的な規制（A second Specific Prohibition Against Remarriage）

神は、離婚した女性に、何回「第二のチャンス」を与えたのでしょうか。神は、モーセの律法の下、離婚した女性にもう一度だけチャンスを与え、一回の再婚を許したのだと、私たちは結論付けるべきでしょうか。それは誤った結論になるでしょう。モーセの律法の後半にはこのように書いてあります。

人が妻をめとって、夫となったとき、妻に何か恥ずべき事を発見したため、気に入らなくなった場合は、夫は離婚状を書いてその女の手渡し、彼女を家から去らせなければならない。女がその家を出て、行って、ほかの人の妻となったなら、次の夫が彼女をきらい、離婚状を書いてその女の手渡し、彼女を家から去らせた場合、あるいはまた、彼女を妻としてめとったあとの夫が死んだ場合、彼女を出した最初の夫は、その女を再び自分の妻としてめとることはできない。彼女は汚されているからである。これは、主の前に忌みきらうべきことである。あなたの神、主が相続地としてあなたに与えようとしておられる地に、罪をもたらしてはならない。（申命記 24:1-4）

この箇所は、二度離婚歴のある女性（もしくは、一度離婚し、一度やもめとなっ

## 弟子をつくる指導者

た女性)が、最初の夫と再婚することを、禁ずる唯一の規定であったことに注意してください。二回再婚することが罪であるということについては、一切書かれておらず、女性が二度離別されたら（もしくは二人目の夫に先立たれやもめとなったら）、彼女は、ただ最初の夫のもとに戻ることも禁じられていました。彼女は、どの男性とも（彼女にそのような機会を与えたいと思う人なら）自由に再婚ができることを明確に表しています。もし、そのような女性が、誰とでも再婚できることが罪に値するのなら、この種の具体的な導きを神が与える必要はなかったでしょう。そうであるなら、「離婚した者は再婚してはならない」とだけ言えば良かったはずです。

更に、神がこのような女性に二度目の結婚を許したのなら、その女性が最初の離婚をした後に、彼女と結婚した男性も、罪を犯していることにはならなかったでしょう。そして、もしも彼女に三度目の結婚が許されたのなら、その女性が二度離婚をした後に、彼女と結婚した男性も、（その人が最初の夫でない限り）罪を犯していることにはならなかったでしょう。従って、離婚を憎む神は、離婚した人々を愛しておられ、深い憐みを持って、そのような人たちに次のチャンスをお与えになりました。

### ここまでのまとめ (A Summary)

ここまでにわかったことを、一度ここでまとめてみましょう。神は離婚を憎むと明言しましたが、旧約前でも、旧約の時代でも、以下の二つの例外の場合を除いて、神は、再婚が罪であるとは表明しませんでした。(1) 二度離婚した女性、もしくは、一度離婚し一度やもめになった女性が、最初の夫と再婚する場合、また、(2) 離婚した女性が祭司と結婚するケースです。更に、離婚した人と結婚することが罪であるという表明も、祭司の場合を除いて、神からは一切ありませんでした。

これは、離婚経験者の再婚や、離婚経験者との結婚についてイエスが言ったことと、明らかに反しています。イエスは、そのような人たちは姦淫していると言いました(マタイ 5:32参照)。ですから、私たちはイエスかモーセの言ったことを誤解しているか、さもなければ、神がその律法を変えたということになります。私の推測では、私たちがイエスの教えを誤解しているように思います。と言うのも、神が千五百年もの間、イ

## 離婚と再婚

スラエルの民に神が与えた律法の下で、道徳的に容認されていたものを、突然道徳上、罪であると宣言することは奇妙に思うからです。

この明らかな矛盾について、更に詳しく見ていく前に、旧約の下で、神が与えた再婚の容認は、人の離婚する理由や、離婚から受ける罪悪感の程度に左右されるものではなかったことも、ここに指摘させてください。神は、ある人たちに向かって、正当な理由からではない離婚である為、再婚してはならない、とは決して言いませんでした。またある人たちに向かって、正当な離婚の故に、特別に再婚に値する、とも言いませんでした。しかし現代の指導者たちは、一方の話だけを聞いてそのように裁きがちです。例えば、離婚した女性が、彼女は離婚の被害者である故に、再婚の許可を受けるに値すると、彼女の牧師を説得しようとしています。彼女の前の夫は、彼女を離別しました。彼女が彼を離別した訳ではありません。しかし、もし牧師に、彼女の前の夫からの話も聞く機会が与えられたとしたら、牧師は何となく彼に同情してしまうかもしれません。おそらく彼女にも非があり、彼女の分の責任を負う必要があるでしょう。

私は、自分から離婚訴訟を起こすことで罪と定められないように、相手にその訴訟を起こさせようとしていた夫婦を知っています。二人共、自分ではなく相手が離婚の訴訟を起こしたのだ、と離婚成立後に言えるようにして、次の結婚が正当であることを表したかったのです。私たちは人を騙すことができますが、神を騙すことはできません。例えば、神のみことばに不忠実で、夫との性行為を避け続け、ついに彼女が彼女に対して不忠実になった為に、彼を離別した女性に対する神の評価はどんなものでしょうか。彼女は、この離婚にあつて多少は責任があるのではないのでしょうか。

先程、申命記二十四章から読んだ、二度離婚した女性の場合についてですが、その女性の二度の離婚の妥当性については、一切触れていません。彼女の最初の夫は「何か恥ずべき事」を彼女に見つけました。もしその「恥ずべき事」が姦淫であったならば、モーセの律法によると、姦通者は石打ちされると書いてあり（レビ 20:10参照）、よって死に価するということになります。従って、姦淫が離婚をする唯一の正当な理

## 弟子をつくる指導者

由であるならば、おそらく最初の夫は、彼女を離別するのに十分な理由がなかったのでしょう。一方で、彼女は姦淫を犯したが、夫がマリアの夫、ヨセフのような正しい人であった故に、「内密に去らせよう」（マタイ 1:19）としたのかしれません。このように、色々な可能性が考えられます。

彼女の次の夫については、単に、「彼女をきらった」ということしか書いてありません。ここでも、誰が責められるべきなのか、もしくは責任は両方にあるのか、私たちにはわかりません。しかしどちらでも、余り変わりはありません。神の恵みによって、彼女は二度離婚した女性であることを受け入れてくれる相手なら、最初の夫以外の誰とでも再婚できました。

### 異論 (An Objection)

「しかし、いかなる理由であれ、離婚後再婚することが法によって認められていると言ってしまうなら、違法の理由による離婚を励ましてしまうことにならないだろうか」という主張はよく耳にします。それは、あまり心から神を喜ばそうと思っていない宗教熱心な人たちの場合にはあり得ますが、自分を神に明け渡していない人に、罪を犯さないように我慢させることは、かなり無意味なことであると考えます。しかし、神に心から従順な人は、罪を犯す方法を見つけようとはしません。彼らは、神を喜ばせようとしているのであって、このような人たちの夫婦関係は大抵強いものです。更に、再婚の自由という律法を良いことに、不正に相手を離別するような旧約の人々について、神は明らかにあまり心配はしてはいなかったようです。なぜなら、神が再婚の自由という律法をイスラエルに与えたからです。

これ以上罪を犯しても、神の赦しがあることを知っている故に、その罪をし続けるよう励ますといけないので、神はどんな罪もお赦しになる、ということの人々に教えることを、私たちは避けるべきでしょうか。もしそうであるのなら、福音を宣べ伝えることを止めなくてはなりません。繰り返しになりますが、全てはその人の心の状態によります。神を愛する人は、神に従いたいのです。私が求めれば、どんな罪を私が犯したとしても、神は赦しを与えてくださることを私はよく知っています。しかし、



## 離婚と再婚

それは罪を犯し続ける動機とは決してなりません。なぜなら、私は神を愛しており、生まれ変わったからです。私は、神の恵みによって生まれ変わったのです。私は神を喜ばせたいのです。

離婚には避けては通れない悪い結果が既に数多く伴うのに、そこに、離婚を考えている人々が結婚に留るように励ましてあげようと、更にもう一つの悪い結果をつけ加えるようなことをする必要はない、ということを神はご存知です。結婚に問題のある人たちに、再婚は決して許されることではないので、離婚しないほうが良いという事は、その人たちが結婚に留まることを少しも励ますことにはなりません。例え、それを信じたとしても、そのような辛い結婚生活を強いられている人にとっては、果てしなく続く結婚の苦悩に比べれば、独身生活の方がよっぽど天国のように思えるでしょう。

### パウロの再婚についての考え (Paul on Remarriage)

再婚について語ったイエスとモーセの言葉に調和を持たせようとする前に、私たちは、モーセの教えと調和のある、もう一人の聖書の著者がいることを忘れてはなりません。その人の名は使徒パウロです。パウロは、離婚した人が再婚することは罪ではないことを、モーセの律法で書いてあることと全く一致させて、明白に書いています。

処女のことについて、私は主の命令を受けてはいませんが、主のあわれみによって信頼できる者として、意見を述べます。現在の危急のときには、男はそのままの状態にとどまるのがよいと思います。あなたが妻に結ばれているなら、解かれないと考えてはいけません。妻に結ばれていないのなら、妻を得たいと思っははいけません。しかし、たとえあなたが結婚したからといって、罪を犯すわけではありません。たとえ処女が結婚したからといって、罪を犯すわけではありません。ただ、それらの人々は、その身に苦難を招くでしょう。私はあなたがたを、そのようなめに会わせたくないのです (第一コリ

## 弟子をつくる指導者

ント 7:25-28、一部強調)。

この箇所パウロは、離婚した人たちに向かって話していることは明らかです。彼は、当時のクリスチャンが通っていた迫害の故に、既婚者に、一度も結婚したことのない独身者に、また離婚経験者に、それぞれがそのままの状態にいるように助言しました。しかし、パウロは明白に、離婚経験者と処女が結婚しても、罪ではないことを告げました。

パウロは、離婚経験者の再婚の正当性を述べた訳ではなかったことに注意してください。離婚経験者がその離婚に関して、自分に何も非がなければ、再婚が許されるとは、パウロは言いませんでした。(また、そのようなことを判断するのにふさわしいのは、神以外に一体誰がいるのでしょうか。)パウロは、再婚は救われる前に離婚したことがある人のみ許される、とも言いませんでした。単純にパウロは、離婚した人にとって、再婚は罪ではないと言っただけです。

### パウロは離婚に対して寛容だったのか (Was Paul Soft on Divorce?)

パウロが再婚について寛容な方針を承認しているということは、パウロは離婚に関しても寛容であったのでしょうか。そんなことはありません。パウロは明白に、一般的な離婚に関して反対しました。パウロがコリント人に書いた最初の手紙の同じ章の前半に、神が離婚を憎むことと調和する、離婚に関する法をパウロは制定しました。

次に、すでに結婚した人々に命じます。命じるのは、私ではなく主です。妻は夫と別れてはいけません。・・・もし別れたのだったら、結婚せずにいるか、それとも夫と和解するか、どちらかにしなさい。・・・また夫は妻を離別してはいけません。次に、そのほかの人々に言いますが、これを言うのは主ではなく、私です。信者の男子に信者でない妻があり、その妻がいっしょにいることを承知している場合は、離婚してはいけません。また、信者でない夫を持つ女は、夫がいっしょにいることを承知しているばあいは、離婚してはいけません。なぜなら、信者でない夫は妻によって聖められて

## 離婚と再婚

おり、また、信者でない妻も信者の夫によって聖められているからです。そうでなかったら、あなたがたの子どもは汚れているわけです。ところが、現に聖いのです。しかし、もし信者でないほうの者が離れて行くのであれば、離れて行かせなさい。そのようなばあいには、信者である夫あるいは妻は、縛られることはありません。神は、平和を得させようとしてあなたがたを召されたのです。なぜなら、妻よ。あなたが夫を救えるかどうか、どうしてわかりますか。また、夫よ。あなたが妻を救えるかどうか、どうしてわかりますか。ただ、おのおのが、主からいただいた分に応じ、また神がおのおのをお召しになったときのままの状態です。私は、すべての教会で、このように指導しています（第一コリント 7:10-17）。

パウロは、まず、信者と結婚している信者に向けて話していたことに注目してください。彼らは、勿論、離婚すべきではなく、これはパウロの教えではなく、主の教えであると、パウロは言っています。そしてこれは確かに、ここまで私たちが聖書に見てきたことと全て一致しています。

私たちにとって興味深く思えるのはここからです。パウロは、信者できえも稀に離婚する可能性があることを認める程、非常に現実的な人でした。もしそうなっても、パウロは、自分の配偶者を離別する人は、結婚しないままにいるべきであること、もしくはその配偶者と和解すべきであることを言いました。（パウロはこのような具体的な導きを妻たちに与えましたが、私はこの同じ法則が夫たちにも適用されると思います。）

繰り返しになりますが、パウロが書いていることで、私たちは驚きません。パウロは離婚に関して、神の律法をまず制定しましたが、神の律法がいつも順守される訳ではないこともきちんとわかっていました。そこで、離婚の罪が二人の信者の間で起きた場合の、更なる導きをパウロは与えました。配偶者を離別した人は、結婚しない

## 弟子をつくる指導者

ままにいるか、その配偶者と和解をするというものです。それは、信者間の離婚の場合に、確かに最善なことです。両者が結婚しないままにいる限り、二人の和解の希望はあり、そうなることが最善です。勿論、一人が再婚すれば、和解の希望と可能性はそこで終わります。（当然のことながら、もし二人が離婚することで許し難い罪を犯していたのなら、パウロが二人に結婚しないままにいることや、和解することを言う理由は殆どなかったでしょう。）

あなたは、離婚した信者に向かって与えられたパウロの二番目の指示は、いつも順守される訳ではないことを、パウロは十分理解していたと思いますか。私はそう思います。おそらく、パウロは離婚した信者に更なる導きは与えなかったと思います。というのも、パウロは真の信者であれば、離婚をしないという彼の最初の命令を守ったでしょうし、従って二番目の指示が必要なケースは非常に稀であるからです。勿論、真のキリストの信者は、何か結婚に問題があれば、その結婚を維持するためにできることは何でもするでしょう。また、何度も結婚が守られるよう努力したにもかかわらず、離婚するしか道がないと感じた信者なら、個人の恥を物ともせず、キリストに栄光を帰すことを望むが故に、他の誰とも再婚は考えず、ただ和解に希望を持つでしょう。私からすると、離婚に関して現代教会が持つ本当の問題は、そこには多くの偽信者がいて、その人たちは、真に主イエスを信じることも、従ったこともないということだと思います。

第一コリント七章にあるパウロの記述から、信者、つまり聖霊の宿る人たちに対する神の期待は、未信者に対するものよりも高いということが、かなり明らかとされています。私たちが読んだ通り、信者は、未信者の配偶者が一緒に住むことを望む限り、その配偶者を離別すべきではないとパウロは書きました。この命令も、私たちが驚かすものではありません。と言うのも、それはこのテーマに関して今まで読んできた聖書箇所のと完全に一致しているからです。神は、離婚に反対しています。しかし、パウロは続けて、もし未信者側が離婚を望む場合、信者はその要求を呑むべきだと言っています。パウロは、未信者が神に服従していないのを知っており、従って、

## 離婚と再婚

未信者が信者のように振る舞うことを期待していません。また、未信者が信者と住むことに同意する場合、その未信者は福音に心を開く可能性があるか、もしくは信者が霊にあって逆戻りしているか、偽クリスチャンなのか、はっきりと示されるようになる良い兆候であることも、私から付け加えておきましょう。

では、未信者によって離婚させられた信者が、自由に再婚できないとは、誰が言っているのでしょうか。パウロは、離婚した二人の信者の場合は、自由に再婚はできないと言いましたが、そのような事を一度も言ったことはありません。私たちは、なぜ未信者によって離婚させられた信者の再婚に、神が反対しなくてはならないのか、疑問に思う必要があります。その目的とは、一体何でしょうか。しかし、そのような容認は、明らかに、再婚についてイエスが言ったこと「だれでも、離別された女と結婚すれば、姦淫を犯す」（マタイ 5:32）に反しています。これは、繰り返しになりますが、イエスがここで言わんとしていることを、私たちはずっと誤解してきていたことを示しているように、私には思えるのです。

### 問題 (The Problem)

離婚が、離婚当事者のいずれか、もしくは両方に罪があることを示唆していることについて、イエスも、モーセも、パウロも皆、明らかに同意しています。三人共、一貫して一般的に離婚には反対しています。しかし、ここに私たちの問題があります。すなわち、再婚についてモーセとパウロが言ったことと、イエスが言ったことを私たちはどう調和させるか、ということです。これら全ては神の靈感に導かれて言われたことなので、勿論全てが調和されることを期待すべきです。

イエスが実際に言ったことを正確に調べ、イエスは一体誰に向かって話しているのか考えてみましょう。マタイによる福音書の中に二度、山上の垂訓の中とパリサイ人から質問を受ける場面で、私たちはイエスが離婚と再婚のテーマに触れているのを見ます。まずは、イエスとそのパリサイ人との会話の部分から始めましょう。

パリサイ人たちがみもとにやって来て、イエスを試みて、こう言った。「何か理由があれば、妻を離別することは律法にかなっている

## 弟子をつくる指導者

でしょうか。」 イエスは答えて言われた。「創造者は、初めから人を男と女に造って、『それゆえ、人はその父と母を離れて、その妻と結ばれ、ふたりの者が一心同体になるのだ。』と言われたのです。それを、あなたがたは読んだことがないのですか。それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。」 彼らはイエスに言った。「では、モーセはなぜ、離婚状を渡して妻を離別せよ、と命じたのですか。」 イエスは彼らに言われた。「モーセは、あなたがたの心がかたくななので、その妻を離別することをあなたがたに許したのです。しかし、初めからそうだったのではありません。まことに、あなたがたに告げます。だれでも、不貞のためでなくて、その妻を離別し、別の女を妻にする者は姦淫を犯すのです。」

(マタイ 19:3-9)

このイエスとの会話の中で、パリサイ人は、私が先程挙げた、申命記24章1から4節にある、モーセの律法の一部に触れました。そこにはこう書いてあります。「人が妻をめとって、夫となったとき、妻に何か恥ずべき事を発見したため、気に入らなくなった場合は、夫は離婚状を書いてその女の手に渡し、彼女を家から去らせなければならない」(申命記 24:1、一部強調)。

イエスの時代には、何が「恥ずべき事」かについて、二つの見解がありました。その二十年程前に、ヒレルというラビが、恥ずべき事とは、和解し難い不和であると教えていました。イエスがパリサイ人と議論する頃までに、「ヒレル」の解釈は更に自由主義派寄りとなり、「いかなる理由」でも、離婚を許すというものになり、それはイエスに対するパリサイ人の質問にも表れていました。もし妻が夫の夕飯を焦がしてしまったり、食べ物に塩を入れすぎたり、公衆の面前でクルッと回った時に彼女の膝が見えてしまったり、髪の毛を下ろしたり、夫以外の他の男性と話したり、義理の母に何か不親切なことを言ったり、不妊であったりすれば、男性は妻を離別できま

## 離婚と再婚

した。更に、自分の妻よりも魅力的な人を見たら、妻は「恥ずべき事」とされ、男性は彼女を離別することさえできました。

他の有名なラビで、ヒレルより以前に活躍したシャマイが言うには、「恥ずべき事」とは、姦淫のような、単に何か非常に不道德なことであったと教えました。既に推測がつくと思いますが、イエスの時代のパリサイ人の間で、ヒレルの自由主義的な解釈は、シャマイのものよりも人気がありました。パリサイ人は、離婚はいかなる理由でも合法であると教え、そのように生きていたので、離婚は恐ろしい程蔓延していました。パリサイ人は、妻を離別する際、「モーセの律法に違反しないように」、彼らの独善的な方法で、妻に離婚状を渡す重要性を強調しました。

**イエスが話している対象はパリサイ人であることを忘れるな (Don't Forget that Jesus was Speaking to Pharisees)**

この背景を理解することで、イエスは一体何に直面していたのか、私たちはもう少し良くわかるでしょう。イエスの目の前に、偽善的な宗教の教師たちのグループがやって来て、その殆ど全員が、一度かそれ以上、おそらく他に魅力的な女性を見つけた為に離婚をしていました。(山上の垂訓で、姦淫の一種と見なされる情欲について、警告したすぐ後にイエスが離婚について語ったというのも、偶然ではないと私は考えます。)しかし、彼らは、自分たちを正当化し、モーセの律法を守っていると主張しました。

彼らの質問自体が、彼らの偏見を現わしています。彼らは、いかなる理由でもその妻を離別できると信じて疑いませんでした。イエスは、創世記二章にある結婚についてのモーセの言葉に訴えながら、神の結婚に対するご計画を彼らが正しく理解できていないことを暴きました。神はいかなる離婚でも、決してそれを意図していなかったし、「いかなる理由」による離婚は尚更のことです。しかし、イスラエルの指導者たちは、十代の子供が「決まった恋人」と別れるかのように、妻を離別していました！

イエスはそれより以前に、離婚についての見解を公の場で表していた為に、パリサイ人はこの時イエスの意見を既に知っていたと、私は考えます。つまり、彼らには

## 弟子をつくる指導者

反論の用意があったという訳です。「では、モーセはなぜ、離婚状を渡して妻を離別せよ、と命じたのですか」（マタイ 19:7）。

この質問は、再び、彼らの偏見を現わしています。これは、まるでモーセが男性に、妻の「恥ずべき事」を見つけたら彼女を離別するよう命令し、正式な離婚状を要求しているかのような言い方です。しかし、申命記24章1から4節を読むと、私たちは、それはモーセが言おうとしていたことではないことがわかります。彼は単に、女性の三度目の結婚について、最初の夫との再婚を禁ずる規制を施していただけです。

モーセが離婚について触れたということは、何らかの理由で離婚は許可されていたに違いありません。しかし、イエスはその答えの中で使った動詞が、パリサイ人たちが選んだ動詞「命じた」に対して、「許した」であったことに注目してください。モーセは離婚を許可したのであって、決してそれを命じてはいませんでした。モーセが離婚を許可した理由は、イスラエル人の心の頑なさの故です。つまり、神は罪深い人々への憐み深い譲歩として、離婚を許したのです。神は、人はその配偶者に忠実ではないことを知っていました。神は、不品行があることを知っていました。神は、人の心が傷つくことを知っていました。従って、神は離婚を容認しました。それは神が元々意図していたことではありませんでしたが、罪がそれを必要としたのです。

次に、イエスはパリサイ人に対して神の律法を制定しました。すなわち、モーセの言う「恥ずべき事」とは一体何なのかについて、恐らくイエスは、次の言葉の中で定義さえしておられます。「だれでも、不貞のためでなくて、その妻を離別し、別の女を妻にする者は姦淫を犯す」（マタイ 19:9、一部強調）。神の目には、不貞だけが、男性がその妻を離別する正当な理由であり、それを私は理解できます。男性または女性がその配偶者にできる、それ以上に屈辱的なこととは一体何でしょうか。その人が、姦淫を犯す時、もしくは浮気をする時、その人は残酷なメッセージを相手に送っています。イエスは勿論、「不貞」という言葉を使った時に、姦淫だけを意味していた訳ではありません。当然のことながら、誰か他人の相手に情熱的な口づけをしたり、抱擁したりすることは、不快な不貞行為ですし、またポルノを見る習慣や、他の



## 離婚と再婚

性的倒錯も同様です。イエスが山上の垂訓の中で、情欲を姦淫と同等に見なしたことを思い出してください。

イエスは誰に向かって語っていたのか、私たちは忘れてはなりません—パリサイ人です。彼らは、いかなる理由でも妻を離別させ、自分たちは直ちに再婚し、しかしながら、第七戒を破らないように、決して神の禁じる姦淫を犯さない、そのような人々です。イエスは、彼らはただ自分たちを騙しているに過ぎないと、彼らに言いました。彼らが行っていたことは、姦淫と何ら変わらなかったですし、そのように言うのは完全に筋が通っていることです。他の女性と結婚できるように妻を離別する男性は、正当であることを装っていますが、誰でも正直な人ならば、その人が姦通者がすることをしているということがわかります。

### 解決 (The Solution)

これこそ、イエスの言ったことと、モーセやパウロが言ったことを調和させるかぎです。イエスは、いかなる再婚をも禁ずる律法を制定してはいなかったのです。もし制定していたのならば、イエスはモーセやパウロに相反することとなり、何百万といる離婚者、再婚者に酷い混乱を引き起こすことになっていたでしょう。もし、イエスが再婚の律法を制定していたのならば、そのイエスの律法を聞く前に離婚や再婚をしてしまった人たちに、私たちは一体何を言えばよいのでしょうか。彼らは不倫関係にあり、姦通者は誰も、神の御国を相続できないと、聖書が警告していることを教え（第一コリント 6:9-10参照）、再び離婚するように彼らを導きましょうか。しかし、神は離婚を憎むのではないのですか。

私たちは、定期的に姦淫を犯すことがないように、前の配偶者が死ぬまで、今の配偶者とは性行為をしないように教えましょうか。しかしパウロは、結婚した夫婦が相手との性行為を避けることを禁じてはいませんでしたか。そのような薦めは、性的誘惑を引き起こし、元配偶者の死を望むことを助長させませんか。

私たちは、申命記二十四章一から四節にあるモーセの律法で禁じられていることですが（ある人たちが主張したように）、このような人たちに現在の配偶者を離別し、

## 弟子をつくる指導者

元配偶者と再婚することを教えましょうか。

離婚はしたが、まだ再婚していない人たちはどうでしょうか。もし、彼らの元配偶者が何らかの姦淫を犯したのならば、彼らの再婚が許されるのならば、一体誰が、実際に姦淫が行われていたかどうかを判断するのでしょうか。再婚する為に、ある人たちは、彼らの元配偶者が単に情欲の罪であったことを証明しなくてはいけなかったり、またある人たちは、彼らの元配偶者の不倫に対する証言を立てる必要があるのでしょうか。

先にも尋ねましたが、結婚した相手が性行為を控えていたという理由もあって、元配偶者が姦淫を犯した、といった場合はどうでしょうか。性行為を控えていた人は再婚でき、姦淫を犯してしまった人は再婚できないというのは、公平と言えるでしょうか。

婚前に不品行を犯した人はどうでしょうか。その人の不品行は、将来の配偶者に対して不忠実な行為になりませんか。不品行の時に、その人もしくはその相手が結婚していたのなら、その人の罪は姦淫に等しいとされるのではないのでしょうか。それならなぜ、婚前のことならば結婚は許されるのでしょうか。

結婚せずに、同棲していた二人が、「別れた」場合はどうでしょう。なぜ、正式に結婚していないというだけで、別れた後なら他の誰かとの結婚が許されるのでしょうか。離婚して再婚する人たちとどう違うのでしょうか。

みことばにある、クリスチャンになると、「古いものは過ぎ去り」「すべてが新しくなる」（第二コリント 5:17参照）という事実はどうなるのでしょうか。それは、違法な離婚の罪以外の、全て犯されてきた罪、という意味なのでしょうか。

これらの疑問に加え、ここにはない疑問<sup>55</sup>も、まだまだ尋ねられますが、これらはみな、イエスは再婚について新しい律法を制定した訳ではなかった、と考える大

---

<sup>55</sup> 55 例えば、ある離婚した牧師が再婚した時に、キリストの御からだから断ち切られたことに気づかされた時の以下のコメントを良く考えて欲しい。彼はこう言った：「一層の事、妻と離婚するよりも、彼女を殺しての方が良かったであろう。もし私が殺人者であったなら、悔い改めて、許しを得、合法的に再婚し、私の主にある務めを続けることができたであろう。」

## 離婚と再婚

きな理由です。もし再婚についての新しい律法を制定することであったのなら、イエスは、当然のことながら、それが及ぼす悪影響を十分理解できるお方でした。それだけで、イエスは単にパリサイ人の偽善、つまり情欲で満ちた、宗教熱心な偽善者たちが、「あらゆる理由」で妻を離別し、再婚していたことを暴いていただけであったことを、私たちに十分わからせています。

確かに、彼らがしていることは正しくない、と単純に言うよりも、彼らは「姦淫している」とイエスが言った理由は、いかなる理由での離婚も、それに続く再婚も、彼らは決してしないと言い張っていた姦淫を、実際はしていることと何ら変わらない、ということ、イエスは彼らに気づいて欲しかったからです。イエスの唯一の関心は、再婚の性的な側面であって、性行為を節制している限りイエスは再婚を承認する、という結論に私たちは至るのでしょうか。勿論、そんなことはありません。従って、イエスが決して意味しなかったことをイエスに言わせることは止めましょう。

### 思いやりのある比較 (A Thoughtful Comparison)

二人の人を想像してみましょう。一人は既婚男性で、その人は宗教熱心で、神を心から愛していると主張していますが、隣の若い女性に強い情欲を抱くようになりました。すぐに彼は妻を離別し、彼が夢見た女性と急いで結婚します。

もう一人の男性は、宗教熱心ではありません。福音は聞いたことがなく、罪深い生活を送っていて、ついには彼の結婚生活にも支障を来します。何年か後、独り身となっていた彼は、福音を聞き、悔い改め、心からイエスに従って歩み出しました。三年後、彼は教会で出会った、とても熱心なクリスチャン女性と恋に落ちます。二人は真剣に主を求め、他からの助言も得、ついに結婚することに決めました。彼らは結婚し、主とお互いにと、生涯忠実に仕えました。

ここで、これら二人の男性たちは、再婚という罪を犯したと仮定しましょう。二人のうち、どちらがより大きな罪を犯したのでしょうか。最初の男性であることは明白です。彼は姦通者のような者です。

しかし、後の男性はどうでしょうか。彼は本当に罪を犯したように見えますか。

## 弟子をつくる指導者

彼は、最初の男性同様、姦通者と何ら変わらないと言えますか。私はそうは思いません。その男性に私たちは、離婚や再婚する人たちについてイエスが言ったことを教え、神はまだ最初の妻と結婚していると見なしている為、彼は、神が結ばなかった女性と一緒に住んでいることになるかと知らせましょうか。その男性に私たちは、彼は姦淫にふけた生活を送っていることを教えましょうか。

答えは明白です。姦淫とは、既婚者が自分の配偶者以外の誰かにその目が行く時になされます。従って、他にもっと魅力的な相手を見つけたという理由で、配偶者を離別することは、姦淫と同じです。しかし、未婚者は、まだ不忠実の対象となる配偶者がまだいない為、姦淫を犯すことができませんし、また離婚者も同様に、不忠実の対象となる配偶者がいない為、姦淫を犯すことができません。一度私たちが、イエスが言った聖書的、また歴史的背景を理解すると、辻褃の合わない結論に至ることもなく、また聖書の残りの部分と矛盾することもあります。

因みに、弟子たちがパリサイ人の質問に対するイエスの答えを聞いた時、弟子たちは、「もし妻に対する夫の立場がそんなものなら、結婚しないほうがましです」(マタイ 19:10) とイエスに言いました。彼らは、パリサイ人の教えや影響の下、またパリサイ人の強い影響を受けた文化の中で育ってきたことに気づいてください。彼らは、結婚が永遠のものとは一度も考えたことがありませんでした。実際、数分前まで、彼らもおそらく、男性が妻をいかなる理由でも離別することは合法であると信じていたことでしょう。それ故、彼らは急いで、一層の事、結婚自体を避け、離婚や姦淫をする危険を冒さないようにするのが一番良いに違いない、という結論に至りました。

イエスは言いました。

そのことばは、だれでも受け入れることができるわけではありません。ただ、それが許されている者だけができます。というのは、母の胎内から、そのように生まれついた独身者がいます。また、人から独身者にさせられた者もいます。また、天の御国のために、自分から独身者になった者もいるからです。それができる者はそれ

## 離婚と再婚

を受け入れなさい（マタイ 19:11-12）。

つまり、人の性欲とそれを抑制する能力が、どちらかという決定要因となります。パウロでさえも、「情の燃えるよりは、結婚するほうがよいからです」（第一コリント 7:9）と言いました。生まれついた独身者や人から独身者にさせられた者（自分が持つ婦人部屋を守るために、信頼の置ける他の男性を充てる際に施された）は、性欲はありません。「天の御国のために、自分から独身者になった者」たちは、特に自制の賜物が際立って神により与えられている人たちのようで、そのために、「そのことばは、だれでも受け入れることができるわけではありません。ただ、それが許されている者だけができるのです」（マタイ19:11）とあるのです。

### 山上の垂訓（The Sermon on the Mountain）

イエスから山上の垂訓を受けた群衆は、イスラエルの統治者や教師であるパリサイ人の偽善的な影響の下で生活をしていて、ということ覚えておくべきです。私たちが山上の垂訓について既に学んだ通り、イエスが言ったことの多くは、パリサイ人の誤った教えに対する訂正に他ならなかったことは明らかです。イエスは、群衆に、彼らの義が律法学者やパリサイ人の義にまさるものでなければ、天国には行けないとさえ教えました（マタイ 5:20参照）が、これは、律法学者とパリサイ人は地獄へ行く、ということのもう一つの言い方でした。イエスの説教の最後に、イエスが「律法学者たちのようではなく」（マタイ7:29）教えていたこともあって、群衆は非常に驚きました。

イエスの説教の最初で、決して姦淫を犯したことはないと主張するが、情欲を抱いたり、離婚や再婚をする人たちの偽善について、イエスは暴きました。イエスは、姦淫の意味を、既婚者同士による罪深い肉体行為から更に広げました。イエスが言ったことは、正直にそれについて少し考える人なら誰にでも明らかです。イエスの説教を聞くまでは、群衆の殆どの人々が、「いかなる理由でも」離婚することは合法であると思っていたということ覚えていてください、イエスは、彼の弟子と他の全ての人に、神の意図は最初からもっと高い基準であったことを知って欲しかったのです。

## 弟子をつくる指導者

『姦淫してはならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。もし、右の目が、あなたをつまづかせるなら、えぐり出して、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに投げ込まれるよりは、よいからです。もし、右の手があなたをつまづかせるなら、切って、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに落ちるよりは、よいからです。また『だれでも、妻を離別する者は、妻に離婚状を与えよ。』と言われていて、しかし、わたしはあなたがたに言います。だれであっても、不貞以外の理由で妻を離別する者は、妻に姦淫を犯させるのです。また、だれでも、離別された女と結婚すれば、姦淫を犯すのです(マタイ 5:27-32)。

まず、私が既に指摘したように、イエスの離婚や再婚についての言葉は、情欲について話したすぐ後に来ていて、それ程お互いに関係しているというだけでなく、イエスはそれらをもっと関係付けて、それらは両方共姦淫と同等であると見なしています。従って私たちは、この聖書箇所全体を通して、共通のテーマがあることがわかります。イエスは、第七戒を従うことは実際何を必然的に伴うのか、ということを知り弟子たちが理解できるように助けていました。つまりそれは、情欲を持たないこと、また離婚や再婚をしないことを意味します。

イエスの話を聞いていたユダヤ人の聴衆は、第七戒が会堂で読まれ、またそれが説明されるのを聞いたことがありました(当時は個人の聖書は誰も所有していませんでした)し、また彼らの教師、律法学者、またパリサイ人の人生で、その教えがどのように適用されているかを観察していました。イエスは次に、「しかし、わたしはあなたがたに言います」と言いましたが、イエスは新しい律法を付け加えるつもりではありませんでした。イエスは単に神の元々の意図を明らかにしようとしていただけで

## 離婚と再婚

す。

第一に、欲望を抱くことは、第十戒で禁じられており、例え第十戒がなかったとしても、それについて考えた人なら誰でも、神が咎めたことをしたいと切望することは正しくないと分かったことでしょう。

第二に、創世記の一番最初の章から、神は結婚を生涯の誓約としていました。更に、誰でもそのように考えた人ならば、離婚や再婚は姦淫にほぼ等しく、人が再婚を目的に離婚する場合は特にそうであると、結論付けていたことでしょう。

しかし、この説教で、イエスは人々が情欲についての真理と、あらゆる理由での離婚と再婚についての真理を見れるよう、単に助けていたということははっきりしています。イエスは、今まで「みことばに」載ったことのない、再婚についての新しい律法を制定しようとしていた訳ではありません。

イエスが言った、目をえぐり出すことや、手を切って捨てることを、文字通り受け止める人は、そのような考えが残りの聖書箇所と相反する為に、教会にはあまりおらず、それらの言葉は、性的誘惑を避けることについて、単によく強調する為であることが明白であるというのは、興味深いことです。しかし、再婚者は姦淫を犯しているというイエスの言葉を、文字通り解釈することは、残りの聖書箇所と全く相反することであるにもかかわらず、そこをかなり文字通りに解釈しようとしている人が教会には多いです。イエスの目的は、これから離婚が減少することに期待を持って、聴衆に真理と直面させることでした。もし、弟子たちが情欲について言ったイエスの言葉を心に留めたのならば、彼らの間には不品行がなくなったことでしょう。もし不品行がなくなれば、離婚の正当な理由がなくなり、神が最初から意図していた通り、離婚がなくなったことでしょう。

### 夫が妻に姦淫を犯させる方法 (How Does a Man Make His Wife Commit Adultery?)

イエスは、「だれであっても、不貞以外の理由で妻を離別する者は、妻に姦淫を犯させるのです」と言ったことに注目してください。ここでも、イエスは再婚についての新しい律法を制定しようとしていたのではなく、適切な理由なしに妻を離別する

## 弟子をつくる指導者

人の罪についての真実を明らかとしていただけでした。その人は、「妻に姦淫を犯させる」のです。イエスはそれを姦淫として扱われる為、従ってイエスはその妻の再婚を禁じている、と言う人たちもいます。しかしこの考えは馬鹿げています。重要なのは、離婚をする人の罪です。人が離婚することによって、その人の妻は再婚するしか、他に手立てが無いのです。彼女は単に夫の自分勝手の被害者である為、彼女側には罪はないのです。しかし、その人が彼の妻を極貧状態にさせ、再婚以外に選択の余地を残さなかった為に、それは神の目には、まるでこの夫が彼の妻を他の男性と強制的に関係を持たせたように見えました。従って、自分は姦淫を犯していないと考えるその人は、実は自分と自分の妻の二つの姦淫の罪に問われるのです。

イエスは、神が被害者の妻に姦淫の罪を課したとは言っていないに違いありません。というのも、それは余りにも不公平であり、事実、被害者の妻が再婚を一度もしないことは、全く無意味なこととなるでしょう。従って、神はその夫に、彼自身の姦淫と、彼の妻の「姦淫」、とは言っても彼女自身が犯した姦淫では全くありませんが、その両方の罪に課していることは、見ていて明らかです。彼女がしたのは、合法的な再婚です。

また、イエスが次に言った、「だれでも、離別された女と結婚すれば、姦淫を犯すのです」という発言についてはどうでしょうか。考えられる意味の可能性としては、二つだけあります。一つは、イエスは、この決して姦淫を犯したことがない（二回目の時も同様に）思っている人に、三回目の姦淫を数えていたのか、もしくは、もう一つ考えられるのは、イエスは、「姦淫を犯すことなく」女性と結婚できるように、彼女の夫を離別するよう彼女に励ましている男性について語っていたか、のどちらかです。もしイエスが離婚した女性と結婚する男性は誰でも、姦淫を犯していると言っていたのなら、それ以前の何百年もの間、全てのイスラエル人男性は、モーセの律法に完全に則って、離婚した女性と結婚をしていたので、姦淫を犯したことになります。事実、イエスのその日の聴衆の男性たちは皆、モーセの律法に完全に従って離婚した女性と現在結婚していた訳ですが、丁度一分前には罪とされなかったことが、突然罪



## 離婚と再婚

と課せられたのですから、イエスはその瞬間に神の律法を変えたに違いありません。更に、離婚した人と結婚することは罪ではないと、コリント人への手紙の中で書かれているパウロの言葉を信じて、将来そうする人も皆、実際は姦淫の罪を犯していたということになります。

聖書全体にある霊は、離別させられた妻と結婚する男性は称賛に価すると、私に思わせます。もし彼女には非がなく、自分勝手な前の夫の被害者だったのなら、私は、やもめの世話を一手に引き受けて、結婚する男性と同様に、そのような男性を称賛するでしょう。もし、以前の離婚にあつて彼女に何か非があつても、彼女の最善を信じるキリストのような彼の品性と、危険を冒してでも過去を水に流すことを表す彼の恵み深さを、私は称賛するでしょう。なぜ、聖書を読み、聖霊が宿る人たちが、イエスは離婚した人たちと結婚することを禁じている、という結論に至るのでしょうか。女性自身に何も非がないにもかかわらず離別されたといった場合に見られるように、どうしたら、そのような見解が神の義、つまり被害者となる人を罰することは決してないという義と合致するのでしょうか。どうしたら、そのような見解が、悔い改めた罪人に赦しとやり直しの機会を与える福音のメッセージと合致するのでしょうか。

### まとめ (In Summary)

聖書は常に、離婚は必ず一方、もしくは両方の罪を含んでいると語っています。神は、誰に対しても離婚を望むことは決してなく、しかし不品行が起きた場合、離婚という道を恵み深く提供してくださいました。神はまた、離別させられた人が再婚できる道をも恵み深く与えてくださいました。

もし再婚についての言葉がイエスからのものでなかったら、聖書を読む人は誰も、(旧約の非常に稀な二つの場合と、新約の一つの場合、つまり、クリスチャンとして、クリスチャンの相手から離別された後の再婚を除いて) 再婚が罪だとは思わなかったでしょう。しかし、イエスが再婚について言ったことと、聖書の残りの箇所とを調和させる理にかなった方法を私たちは見つけることができました。イエスは神の再婚に関する律法を、全ての再婚を禁ずるといった、より厳しい律法や、既に離婚し、再婚

## 弟子をつくる指導者

した人たちが（まるで割った卵を元の形に戻すような）順守不可能な律法、更には、無限大の混乱と、神の他の律法への違反に人々を導くものに置き換えようとしていた訳ではありません。むしろ、彼らの偽善を人々に認識させるよう助けていたのです。イエスは、自分は決して姦淫を犯したことがないと思っていた人たちに、その人たちが持つ情欲と離婚に対する自由主義的な態度によって、他の形で姦淫を犯していたことを気づかせる助けをしていたのです。

聖書全体が教えるように、離婚者を含め、その人の罪がどんなものであったかにかかわらず、悔い改める罪人には赦しが与えられ、二度、三度と、やり直す機会が与えられます。新約の下では、信者が別の信者から離別される場合を除いて、とは言っても、真の信者は不品行を犯すことはなく、従って離婚する妥当な理由がない為、そのようなことは決して起きるべきではありませんが、再婚に罪はありません。そのような非常に稀な場合には、両者は一人のままに留まるか、もしくは互いに和解すべきです。

## 第十四章

### 信仰の基礎 (Fundamentals of Faith)

信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であることとを、信じなければならないのです（ヘブル 11:6）。

信者として、私たちの信仰は、神は存在すること、また、神は神を求める人々を、求めない人々とは違うように取り扱われる、という土台の上に建てられています。私たちが真にこれら二つのことを信じ出すとすぐに、私たちは直ちに神を求め始め、それによって神を喜ばせ始めます。神を求めることは、(1) 神の御旨を学ぶこと、(2) 神に従うこと、そして(3) 神の約束を信頼することを意味します。私たちの日々の歩みは、これら三つ全てから成るべきです。

この章では、信仰の歩みについて注目します。多くの人々が、聖書的ではない極端なもの、特に物理的繁栄という分野に集中してしまっていることは残念なことです。その為、このテーマを危惧して、全く触れない人もいます。しかし、川で溺死する人がいるというだけで、私たちが水を飲むのを止めるというのは理にかなっていません。私たちがバランスを保って、聖書に根差し続けることは可能です。聖書には、このテーマについて教えることは沢山あり、神からの多くの約束について、神は私たちに信仰を使って欲しいと願っています。

## 弟子をつくる指導者

イエスは神に信仰を持つことの模範を示し、イエスは弟子たちにその模範に従うことを期待しました。同様に、弟子をつくる指導者は、神を信頼する模範を表すことに努め、また弟子に神の約束を信じることを教えます。これは非常に重要なことです。信仰がなければ神を喜ばすことはできないだけでなく、信仰がなければ私たちの祈りの答えを受け取ることはできません(マタイ21:22; ヤコブ 1:5-8参照)。聖書は明白に、疑う者からは信者が受け取る祝福を取り上げられると教えています。イエスは、「信じる者には、どんなことでもできるのです」と言いました(マルコ 9:23)。

### 信仰の定義 (Faith Defined)

信仰の定義は、聖書のヘブル人への手紙11章1節に見つけられます。

信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させる  
ものです。

この定義から、私たちは信仰の特徴について、いくつか学びます。まず第一に、信仰のある人は、**確信**、もしくは自信があります。これは、希望とは異なります。と言うのも、信仰は「望んでいる事がらの保証」だからです。希望にはいつも、疑う余地があります。希望はいつも、「たぶん」という言葉が付きます。例えば、「今日は雨が降ってくれると本当にいいんだけど。そうすれば、庭の水やりが済んだことになるから。」と私が言ったとします。しかし、雨が降るかどうかは、私には定かではありません。一方で信仰は、いつも確実であり、「望んでいる事がらの保証」です。

人々が**信仰**とか**信念**と呼ぶものは、聖書的定義によると信仰ではないことがよくあります。例えば、空に雨雲を見つけて、「**確かに**雨になると**思う**」と言います。しかし、雨が降るかどうかは確かではありません。つまり、それは単に、降水確率が高いかもしれないと考えているだけです。それは聖書的な信仰ではありません。聖書的信仰には、疑う要素がありません。神が既に約束してくださったこと以外の結果が入る余地はありません。

### 信仰は見えないものを確信させるもの (Faith is the Conviction of Things Not Seen)

ヘブル十一章一節にある定義では、また、信仰は「見えないものを確信させるも

## 信仰の基礎

の」と書いてあります。従って、もし私たちが見えるものや、私たちの五感で感じ取れるものならば、信仰は必要ではありません。

たった今、誰かがあなたにこう言ったとしましょう。「何だかわからないけど、あなたの手には一冊の本があるという信仰が私にはあります」。あなたはこう言うでしょう。「なぜですか。私の手に一冊の本があると、信じる必要はありません。なぜなら、あなたには私が本を持っているのがはっきりと見えるのですから。」

信仰は目に見えない領域のもので、例えば、これらの言葉を私が書きながら、私は天使が私の側にいることを信じています。私はそれについて確信しています。どうしてそれ程までの確信があるのでしょうか。私はこれまでに天使を見たことがあるのでしょうか。いいえ。私は天使が側を飛ぶのを感じたり、聞いたりしたことがあるのでしょうか。いいえ。私はこれまでに天使を見たり、もしくは聞いたり、感じたりしたのなら、私は私の近くに天使がいることを信じる必要はなくなるでしょう。私はそれを知っているのです。

それでは何が私に天使が存在することをそれ程までに確信させるのでしょうか。私の確信は、神の約束のひとつから来ています。詩篇三十四篇七節に、神は、「主の使いは主を恐れる者の回りに陣を張り、彼らを助け出される」と約束しました。それは真の聖書の言う信仰、すなわち「見えないものを確信させるもの」です。世の人々は、「百聞は一見に如かず」と言いますが、神の御国ではその逆が真理です。つまり、「信じるからこそ見えて来る」のです。

私たちが神の約束のひとつについて、信仰を用いる時、私たちは往々にして、疑いを引き起こすような状況に境遇したり、状況が変わらないために、まるで神がその約束を守っていないかのように見える期間を通ることがよくあります。それらの場合、私たちは単純となって疑いを跳ね除け、信仰を保ち、心に、神はいつも約束を守るお方であることを信じ切ることが必要です。神は嘘をつくことができません(テトス 1:2 参照)。

### 信仰の得方 (How Do We Acquire Faith?)

## 弟子をつくる指導者

信仰は神の約束のみに基づいているので、聖書的信仰の元はたった一つです。すなわち、それは神のみことばです。ローマ十章十七節には、「そのように、*信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです*」（ローマ10:17、一部強調）と書いてあります。神のみことばはその御旨を表します。私たちが信じられるのは、私たちが神の御旨を知っている時だけです。

ですから、もしあなたが信仰を持ちたいのなら、あなたは神の約束を聞く（もしくは読む）ことが必須です。信仰はそれを求めて祈ったり、断食したり、それを授かるように誰かに按手してもらうことで来る訳ではありません。信仰は神のみことばを聞くことからのみ始まり、それを聞いたら今度は、それを信じる決心をしなくてはならないのです。

信仰を得ること以上に、私たちの信仰はまた、強く成長していくこともできます。信仰には色々なレベル、つまり小さな信仰から、山をも動かす信仰までであると、聖書には書いてあります。信仰は、食物が与えられ運動することにより、より強く成長します。丁度人間の筋肉のようです。私たちは、神のみことばについて熟考することにより、私たちの信仰に食物を与え続けなければなりません。また、神のみことばに基づいて全てに対して行動や反応することで、信仰を働かせなければなりません。これには、私たちが問題や心配や不安に直面するような時も含まれています。神は子供たちに何も心配して欲しくはなく、むしろ、全ての状況において神を信頼して欲しいのです（マタイ 6:25-34; ピリピ 4:6-8; 第一ペテロ 5:7参照）。心配を拒むことは、私たちが信仰を用いることができる一つの方法です。

もし私たちが神が言ったことを心から信じるなら、私たちはそれがまるで事実であるかのように振る舞い、また話すでしょう。もし神があなたに健康であることを望んでいると、あなたが信じるなら、あなたはそのように振る舞い、また話すでしょう。聖書は、逆境の最中に、神にある信仰に従って歩み、結果として奇跡を受けた人たちの例で溢れています。後程、この章と後の章でそれらの例のいくつかを見て行きます。

（他の良い例として、第二列王記 4:1-7; マルコ 5:25-34; ルカ 19:1-10; 使徒 14:7-10

## 信仰の基礎

を参照のこと)。

### 信仰は心のこと (Faith is of the Heart)

聖書の言う信仰は、私たちの頭ではなく、むしろ私たちの心で働きます。パウロは、「人は心に信じて」(ローマ 10:10前半)と書きました。また、イエスは言いました。

まことに、あなたがたに告げます。だれでも、この山に向かって、  
『動いて、海にはいれ。』と言って、心の中で疑わず、ただ、自分の言ったとおりになると信じるなら、そのとおりになります(マルコ 11:23、一部強調)。

頭の中で疑いながら、心には信仰がまだあって、神が約束したものを受け取るとは極めて可能なことです。事実、往々にして、私たちが神の約束を信じようと努力している時、肉の感覚やサタンの嘘に影響されている私たちの思いは、疑いによって打ち負かされてしまうでしょう。そのような時には、私たちは疑う思いを神の約束と取り換えて、揺り動かされないように、信仰にしっかりと立つ必要があります。

### よくある信仰に関する間違い (Common Faith Mistakes)

私たちが神にある信仰を用いようと試みる時、私たちが神のみことばによって用いていない為に、私たちが願っているものを受け取れないことがしばしばあります。最もよくある間違いの一つは、神が私たちに約束をしていないことを信じようとしている時に起きます。

例えば、結婚した夫婦が立つことのできる約束が、聖書には含まれているので、彼らが神から子供を授かれることを信じることは聖書的です。私は、医者から子供を産むことができないと言われていたご夫婦を知っています。しかし彼らは代わりに以下の二つの約束に立って、神を信じることを選びました。今日彼らは健康な子供の親となっています。

あなたがたの神、主に仕えなさい。主はあなたのパンと水を祝福してくださる。わたしはあなたの間から病気を除き去ろう。あなたの国のうちには流産する者も、不妊の者もいなくなり、わたしはあ

## 弟子をつくる指導者

なたの日数を満たそう（出エジプト 23:25-26）。

あなたはすべての国々の民の中で、最も祝福された者となる。あなたのうちには、子のない男、子のない女はいないであろう。あなたの家畜も同様である（申命記 7:14）。

これらの約束は、子供のいない夫婦を励ますはずです！しかし、男の子もしくは女の子と限定して信じようとする、話は別です。聖書には、私たちが将来の子供の性を選べると言った特定の約束はどこにもありません。私たちの信仰が有効である為には、聖書の示す範囲に留まらなくてはなりません。神が私たちに約束したことについて、私たちは神を信頼するしかありません。

これから、神のみことばにある約束について見て行き、その約束に基づいて、私たちは一体何を信じることができるのかを判断してみましょう。

主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、  
ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、  
まず初めによみがえり（第一テサロニケ 4:16）、

この箇所に基づいて、私たちはイエスが戻って来られることに確信が持てます。

しかし、イエスが明日戻ってくるように祈ることはできますか。いいえ、この箇所も他の箇所も、そのようには私たちに約束していません。事実、イエスはその戻られる日も時間も知らないと言いました。

勿論、私たちはイエスが明日戻って来られることを期待して祈ることはできますが、それが起きるとは保証されていません。信仰によって祈る時、私たちが祈っていることについて、神からの約束がある為、それが起こることを確信しています。

この同じ箇所から、既に死んだ信者の体がイエスの再臨でよみがえることについて信じることができます。しかし、キリストの再臨の時、「キリストにある死者」が復活の体を受けると同時、もしくはできればその前に、生き残っている私たちもそれ



## 信仰の基礎

を受ける、という信仰を持てるのでしょうか。いいえ、聖書は私たちにその逆を約束しています。「キリストにある死者が、まず初めによみがえる」。事実、すぐその後の節で、「次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです」（第一テサロニケ 4:17）と続けられています。つまり、キリストが「戻られる時に、「キリストにある死者」が最初に復活の体を受けないことはありません。神のみことばがそのように約束しているからです。

もし私たちが何かについて、神を信じるつもりならば、私たちがその願うことを受けることは神の御旨であることを、確信していなくてはなりません。神の御旨は、聖書に記録されている約束を調べることによってのみ、確実に見極められます。

そこにしっかりと立つべき約束のない信仰は、実際は全く信仰とは言えず、単なる愚かさです。ですから、あなたが何か神に頼む前に、聖書のどの箇所が、私の願っていることについて私に約束しているのか、とまず自分自身に尋ねてみてください。もしあなたに約束がないのならば、あなたの信仰には土台がないことになります。

### 二つ目のよくある間違い（A Second Common Mistake）

多くの場合、クリスチャンは、神の約束の一つが自分たちの人生に成就するよう信じようと試みますが、その約束に付随する条件の全てを満たそうとはしません。例えば、私はクリスチャンが詩篇三十七篇を抜粋して、「聖書には、神は私の心の願いを叶えてくださると書いてあります。それを私は信じています。」と言うのを聞いたことがあります。

しかし聖書は、神は私たちに心の願いを叶えてくださるとだけ、書いている訳ではありません。これが実際に言っていることです。

悪を行なう者に対して腹を立てるな。不正を行なう者に対してねたみを起こすな。彼らは草のようにたちまちしおれ、青草のように枯れるのだ。主に信頼して善を行なえ。地に住み、誠実を養え。主をおのれの喜びとせよ。主はあなたの心の願いをかなえてくださる。あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださ

## 弟子をつくる指導者

る（詩篇 37:1-5）。

もし私たちが、神は私たちの心の願いを叶えてくださることを信じるのであれば、いくつかの条件を満たさなくてはなりません。私は、実際、上記の約束の中に、少なくとも八つの条件を見ます。私たちが条件を満たさない限り、私たちは約束された祝福を受ける権利はありません。私たちの信仰には、土台がありません。

クリスチャンはまた、ピリピ四章十九節にある約束も抜粋したがります。「私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たして下さいます」。しかし、この約束には条件があるのでしょうか。明らかにあります。

もしあなたが、ピリピ四章十九節にある約束の内容を調べれば、あなたはこれは全てのクリスチャンに与えられた約束ではないことに気づくでしょう。むしろ、これは献身したクリスチャンに与えられた約束です。ピリピの人たちがちょうどパウロに献金を送ったので、パウロは、神が彼らの必要の全てを満たして下さることを知っていました。ピリピの人たちは、イエスが命じたように神の国をまず第一に求めていたので、イエスが約束した通り（マタイ6:33参照）神は彼らの必要を全て満たしたでしょう。聖書の中にある、私たちの物質的な必要を神が満たすことに関連する多くの約束は、まず私たち自身が与える人となることが条件とされています。

もし私たちが、私たちのお金に関する神の命令に従っていないのならば、神が私たちの必要を満たして下さると考える権利は、私たちには全くないのです。旧約の下、神は神の民が十一献金をしていないことで、彼らはのろいを受けると言いましたが、民が十一献金と捧げものを従順に与えれば、神は彼らを祝福すると約束しました（マラキ 3:8-12参照）。

聖書の中で私たちに約束されている祝福の多くは、私たちの神への従順に付随するものです。従って、私たちが何かについて神を信じようと努力する前に、私たちはまず、「私はその約束に付随する全ての条件を満たしているだろうか」と自問すべきです。

## 信仰の基礎

### 三つ目のよくある間違い (A Third Common Mistake)

新約の中で、イエスは私たちが何かについて祈り求める度に適用される条件を言いました。

神を信じなさい。まことに、あなたがたに告げます。だれでも、この山に向かって、『動いて、海にはいれ。』と言って、心の中で疑わず、ただ、自分の言ったとおりにになると信じるなら、そのとおりになります。だからあなたがたに言うのです。祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります (マルコ 11:22-24、一部強調)。

イエスが言った条件は、私たちが祈る時、もう既に受けたと信じることです。多くのクリスチャンは、祈りの答えが見える時に受けたと信じることで、信仰を使うという間違っただけを試みをしています。彼らは、受けるであろうことを信じていて、受けたと信じていたのではありません。

私たちは、神が既に私たちに約束した何かを神に求める時に、祈る時に答えを得ることを信じ、その只中で、答えについて神に感謝し始めるべきです。私たちは、答えを見た後ではなく、見る前に答えられたことを信じなくてはなりません。私たちは、パウロが書いたように、感謝をもって神に願い求めるべきです。

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい (ピリピ 4:6)。

前にも言いましたが、もし私たちの心に信仰があるならば、自然と私たちの言葉と行ないは、私たちが信じることに一致するでしょう。イエスは、「心に満ちていることを口が話すのです」 (マタイ 12:34) と言いました。

クリスチャンの中には、同じことを何度も繰り返し求めるという過ちを犯す人たちがいますが、それは彼らが既に受けたとまだ信じていない証拠です。私たちが祈る時に、私たちが既に受けたと信じたのなら、同じことを繰り返し求める必要はなくな

## 弟子をつくる指導者

ります。同じことを繰り返し求めることは、私たちが求めた最初の時に神が私たちを聞いてくださったことを疑うことです。

### イエスは同じ要求を何度かしなかったか (Didn't Jesus Make The Same Request More Than Once?)

イエスは、ご存知の通り、ゲツセマネの園で祈っている時に立て続けに三度同じことを祈り求めました (マタイ 26:39-44参照)。しかし、イエスは神が既に表した御旨に従って、信仰で祈っていた訳ではないことを覚えていてください。実際は、イエスが三度十字架から逃れる可能性を求めて祈っていたのなら、その要求は、神の御旨に反するものであることを知っていました。それ故に、イエスは同じ祈りの中で三度、御父の御旨にご自身を委ねたのでした。

イエスの模範に従って、「もしあなたの御旨ならば」や「しかし、わたしの願うようにではなく、あなたのみこころのように、なさってください」という言葉で全ての祈りを終わらすべきだ、とある人たちが教えるように、イエスのこの祈りはよく、全ての祈りのモデルとして、間違っ用いられています。

私たちは、イエスは神の御旨ではないことを知っていて祈り求めていたことを覚えていなくてはなりません。私たちが神の御旨に沿って祈っている時に、イエスの模範に従うことは、過ちであり、信仰の欠如を表しています。例えば、「主よ、私はあなたに罪を告白しますから、あなたの御旨でしたら、どうぞ私をお赦してください」と祈ることは、私の罪を赦すことが神の御旨ではないかもしれない、ということを示唆しています。勿論私たちは、私たちが罪を告白する時に、神が赦してくださるという聖書の約束を知っています (第一ヨハネ 1:9参照)。従って、そのような祈りは神が既に表した御旨をその人は信じ切れていないことを表しています。

イエスは全ての祈りを、「しかし、わたしの願うようにではなく、あなたのみこころのように、なさってください」という言葉で終えた訳ではありませんでした。そのようにイエスが祈ったのはたった一つの例しかなく、それはイエスが、その為に通るであろう苦しみを知りながら、ご自身を御父の御旨に委ねていた時でした。

## 信仰の基礎

一方で、ある状況の中で、神がまだ表していない為に神の御旨が何であるか私たちにまだわからないのであるならば、「あなたの御旨ならば」という言葉で私たちの祈りを終えることは妥当です。ヤコブはこう書きました。

聞きなさい。「きょうか、あす、これこれの町に行き、そこに一年いて、商売をして、もうけよう。」と言う人たち。あなたがたには、あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません。むしろ、あなたがたはこう言うべきです。「主のみこころなら、私たちは生きていて、このことを、または、あのことをしよう。」ところがこのとおり、あなたがたはむなしい誇りをもって高ぶっています。そのような高ぶりは、すべて悪いことです（ヤコブ 4:13-16）。

一度私たちが神からの約束に基づいて祈り求め、その約束にある全ての条件を満たしているのなら、次に私たちは一体何をすべきなのでしょう。実際に答えが与えられるまで、私たちはもう既に受けたと信じて、神にその答えについて繰り返し感謝すべきです。私たちは、信仰と忍耐によって、神から約束のものを相続します（ヘブル 6:12）。サタンは、疑いを送って私たちを打ち負かそうと必ず試みますが、私たちは、私たちの思いが戦いの場であることに気づかなくてはなりません。疑いが私たちの思いを攻撃する時、単純となって、それらの思いを神の約束に基づいた思いと取り換えて、信仰にあって神のみことばを語る必要があります。私たちがそれをする事で、サタンは逃げ去るに違いありません（ヤコブ 4:7; 第一ペテロ 5:8-9参照）。

### 行動の伴う信仰の例 (An Example of Faith in Action)

行動の伴う信仰の伝統的な聖書の例の一つに、ペテロが水の上を歩く話があります。その箇所を読んで、そこから私たちが何を学べるか見て行きましょう。

それからすぐ、イエスは弟子たちを強いて舟に乗り込ませて、自分より先に向こう岸へ行かせ、その間に群衆を帰してしまわれた。群

## 弟子をつくる指導者

衆を帰したあとで、祈るために、ひとりで山に登られた。夕方になったが、まだそこに、ひとりでおられた。しかし、舟は、陸からもう何キロメートルも離れていたが、風が向かい風なので、波に悩まされていた。すると、夜中の三時ごろ、イエスは湖の上を歩いて、彼らのところに行かれた。弟子たちは、イエスが湖の上を歩いておられるのを見て、「あれは幽霊だ。」と言って、おびえてしまい、恐ろしさのあまり、叫び声を上げた。しかし、イエスはすぐに彼らに話しかけ、「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない。」と言われた。すると、ペテロが答えて言った。「主よ。もし、あなたでしたら、私に、水の上を歩いてここまで来い、とお命じになってください。」イエスは「来なさい。」と言われた。そこで、ペテロは舟から出て、水の上を歩いてイエスのほうに行った。ところが、風を見て、こわくなり、沈みかけたので叫び出し、「主よ。助けてください。」と言った。そこで、イエスはすぐに手を伸ばして、彼をつかんで言われた。「信仰の薄い人だな。なぜ疑うのか。」そして、ふたりが舟に移ると、風がやんだ。そこで、舟の中にいた者たちは、イエスを拝んで、「確かにあなたは神の子です。」と言った（マタイ 14:22-33）。

それより以前に、イエスの弟子たちはガリラヤ湖で舟に乗っている時、他の大暴風に遭遇していたことは重要です（マタイ 8:23-27参照）。その出来事の間、イエスは彼らと共におられ、イエスが嵐を叱ることでそれが止んだ後、イエスは弟子たちをもその信仰のなさに叱りました。その旅の前に、イエスは弟子たちに湖の反対側へ行くつもりがあることを伝えていました（マルコ 4:35参照）。しかし嵐が起こった時、弟子たちは状況に翻弄され、ある時点では皆で溺れ死ぬと思いました。イエスは、弟子たちが少なくとも怖がらないことを期待していました。

しかしこの時は、イエスは弟子たちだけでガリラヤ湖を渡るよう送り出しました。

## 信仰の基礎

勿論イエスは、そうするように霊に導かれ、勿論神は、その夜向かい風が起こされることを知っていました。つまり主は、弟子たちが彼らの信仰に対する小さな課題に直面することをお許しになったのでした。その向かい風によって、通常数時間で辿り着く所に、一晩中かかりました。私たちは弟子たちが耐え忍んだことは認めなくてはなりません、しかし弟子たちの中で、彼らがイエスがたった数日前に成したのを見たように、その風も静まるという信仰を持とうとしていた人は、一体誰かいたのかと思わずにはいられません。興味深いことに、マルコによる福音書では、イエスが湖の上を歩いて、弟子たちに近づいて行かれた時、「そのままそばを通り過ぎようとおつもりであった」（マルコ 6:48）と記録しています。イエスは、奇跡的にその側を歩きながら、弟子たちだけで問題に直面するよう放っておこうとしておられました！これは、弟子たちは神に祈ってもいないし、神を見てもいなかったことを示唆しているようです。どれ程多く、私たちが困難の風に人生のオールで奮闘している間に、奇跡を起こす方が私たちのちょうど真横を通り過ぎてしまっているのでしょうか。

### 信仰の原則 (Principles of Faith)

イエスはペテロの挑戦に、「来なさい」と一言で答えました。もしペテロがこの言葉の前に、水の上を歩こうとしていたのなら、彼の信仰の土台となる約束がなかったため、彼は直ちに沈んでいたことでしょう。ペテロは信仰によってではなく、仮定によって、踏み出していたことでしょう。同様に、イエスが言葉を発した後でも、もし他の弟子たちが水の上を歩こうとしていたのなら、イエスはペテロに対してのみその約束を与えたので、彼らも直ちに沈んでいたことでしょう。彼らはペテロではないので、その約束の条件に誰も見合うことはできませんでした。同様に私たちは誰でも、神の約束の一つを信じようとする前に、その約束が私たちに当てはまり、その約束に対する条件を私たちが満たしていることを確実にしていなくてはなりません。

ペテロは水の上を歩き出しました。それは、その数秒前に幽霊が出たと恐ろしさの余り叫んでいた彼の頭の中には疑いもありましたが、最初の一步を踏み出した時が、彼の信じた瞬間でした。しかし、奇跡を受けるには、ペテロは信仰に基づいて行動し

## 弟子をつくる指導者

なくてはなりませんでした。もしペテロが、舟のマストにしがみついて、水が彼の体重を支えられるかどうかを見る為に、舟の横側から足の親指を浸していたのなら、彼は決してその奇跡を体験していなかったでしょう。同様に、私たちはどんな奇跡でもそれを受ける前に、私たちがある時点で神の約束を信じて、その信じたことを行動に移せるよう専念しなくてはなりません。私たちの信仰が試される時が常にあります。時には、その時は短く、時にはそれは長いです。しかし、私たちの感覚が立証することを無視して、神の言葉に基づいて行動しなくてはいけない期間があるでしょう。

ペテロは最初順調でした。しかし、彼がしていることが不可能なことであると考え、風と波に気づいた時、ペテロは怖くなりました。おそらく、ペテロは歩くのをやめ、次の一步を踏み出すことを恐れていました。そして、奇跡を体験していたペテロは彼自身が沈んでいることに気づきました。私たちは、一度始まったら、信仰によって続ける必要があります、私たちの信仰を行動で表し続ける必要があります。し続けましょう。

ペテロは疑った時に沈みました。人は大抵、その信仰のなさについて、自分のせいにはしたくありません。むしろ神のせいにして、責任を押し付けます。しかし、ペテロが無事舟に戻り、他の弟子たちに、「イエスに向かって少し歩けたのは、本当に神の御旨のみによる」と言っているのをイエスが聞いたとしたら、イエスはどんな反応をしていたと、あなたは考えますか。

ペテロは、恐ろしくなって、信仰を失った時に失敗しました。これは単なる事実です。イエスは彼を非難しませんでした、ペテロにしっかりとつかまることが出来るものを与える為に直ちに手を伸ばしました。そして、イエスはペテロに、なぜ疑ったのかを直ぐに尋ねました。ペテロには、神の御子の言葉は他のどんなものよりも確かなので、疑う正当な理由はありませんでした。私たちは恐れたり、心配することで、神のみことばを疑ってよいとする理由は何一つありません。

聖書は、信仰の結果による勝利と、また疑いの結果による失敗で満ちています。ヨシュアとカレブは、彼らの信仰により約束の地を所有しましたが、同世代の多くは、



## 信仰の基礎

彼らの疑いにより荒野で死に絶えました（民数記 14:26-30参照）。イエスの弟子たちは、二人ずつで宣教に行く旅の中で、彼らの必要は満たされました（ルカ 22:35参照）が、ある時は、彼らの不信仰によって悪霊を追い出すことができませんでした（マタイ 17:19-20参照）。キリストの働きの下で、多くは癒しの奇跡を受けましたが、イエスの故郷であるナザレでは、病人の殆どが、彼らの不信仰により癒されないままでした（マルコ 6:5-6参照）。

このような人たちと同様に、私も個人的に私の信仰と疑いによって成功と失敗を経験してきました。しかし、私は自分の失敗に対して苦い思いを持つ気もなく、また神を責める気もないです。私は神のせいにする事で、自己義を立てるつもりもありません。私は、神が明白に表した御旨を変えさせる、何か複雑な神学的説明を探す気もありません。私が失敗した時は、私は単に私の不信仰を悔い改め、再び水の上を歩き出すだけです。私が気づいたのは、イエスはいつも私を赦してくださり、私が溺れないように守ってくださるということです！

判決は出ました。すなわち、信じる者は祝福を得、疑う者は得ない、ということです！弟子をつくる指導者は、イエスの模範に従います。そのような指導者は、信仰に溢れ、「神を信じなさい」（マルコ 11:22）と弟子たちを訓戒します。



## 第十五章

### 神のいやし (Divine Healing)

神のいやしというテーマは、少々論議的的になりますが、それは聖書の中で不明瞭なものでは決してありません。事実、四つの福音書に書かれている全体の内容の十分の一が、イエスのいやしの働きについてです。旧約聖書、福音書、新約聖書の使徒書簡には、神のいやしの約束があります。病んでいる人たちは、信仰を建て上げる聖書の言葉の富に偉大な励ましを見つけることができます。

私が世界中で一般的に見てきていることは、教会に非常に献身的な信者（真の弟子たち）が多いところには、神のいやしは、更にもっと当たり前になっているということです。教会が生温く、知識人向きところには、神のいやしは非常に稀にしか起きません。<sup>56</sup> イエスは私たちに、*信者*について来るしるしの一つは、彼らが病人に手を置くと、その病人は癒される（マルコ 16:18参照）と教えたので、このような事は全て、私たちが驚かすべきではありません。もし私たちが、イエスが信者について来ると宣言したしるしによって、教会を裁くというのなら、私たちは多くの教会には信者がいないと結論付けなくてはなりません。

それから、イエスは彼らにこう言われた。「全世界に出て行き、す

---

<sup>56</sup> 56 北米にある教会では、所謂信者から受ける酷い反発から、このテーマについて教えることには高い危険を冒すことになる。イエスも、時として反発と不信仰に会い、それはイエスの癒しの働きを妨げた（マルコ 6:1-6 参照）。

## 弟子をつくる指導者

すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。信じてバプテスマを受ける者は、救われます。しかし、信じない者は罪に定められます。信じる人々には次のようなしるしが伴います。すなわち、わたしの名によって悪霊を追い出し、新しいことばを語り、蛇をもつかみ、たとい毒を飲んでも決して害を受けず、また、病人に手を置けば病人はいやされます」 (マルコ 16:15-18)。

弟子をつくる指導者は、キリストの完全な働きを模倣していますが、その指導者の影響下で神のいやしの働きが助長されるように、その人にある賜物を確かに用いることでしょう。そのような指導者は、神のいやしが神の御国を少なくとも二つの方法で促進させることを知っています。第一に、いやしの奇跡は、福音書や使徒の働きを読む子供が誰でもわかる位（しかし、高い地位にある多くの聖職者たちには理解が不可能のようですが）多くの、福音の素晴らしい宣伝となります。第二に、健康な弟子は、自分の病気がその働きの妨げになることはありません。

弟子をつくる指導者はまた、いやしを求めているけれども、なかなかそれを受けられないキリストの御からだのメンバーに敏感である必要もあります。そのような人たちは、特にどんないやしのメッセージに対しても反発を強めているのなら、思いやりのある導きと優しい励ましが往々にして必要です。弟子をつくる指導者はある選択に迫られます。すなわち、神のいやしのテーマについての教えを一層の事全て避けて、その結果誰からも反感を買われないように、また誰もいやされないようにするか、もしくは、このテーマについて愛をもって教え、何人からかは反感を買っても、他の人たちがいやしを体験する助けとなるかです。個人的には、イエスの模範に従うことと信じて、私は二番目を選択しています。

## 十字架でのいやし (Healing on the Cross)

神のいやしの学びを始めるのに良い場所はイザヤ五十三章であり、世界中でメシヤ預言として知られています。聖霊を通して、イザヤはイエスの犠牲的な死と十字架の上でイエスが成し遂げる御業について、描写的に表しています。

## 神のいやし

まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた（イザヤ 53:4-6）。

聖霊の啓示によって、イザヤはイエスが私たちの嘆きと悲しみ（英訳聖書の日本語訳）を負ったことを宣言しました。原語であるヘブル語にもっと近い訳では、多くの信頼のおける訳の注釈に指摘されている通り、イエスは病と痛みを負ったことを示しています。

イザヤ五十三章四節で嘆きと訳されたヘブル語は、*choli*という言葉で、それは申命記七章十五節、二十八章六十一節、第一列王記十七章十七節、第二列王記一章二節、八章八節、そして第二歴代誌十六章十二節、二十一章十五節でも使われています。これら全ては病氣と訳されています。

悲しみと訳されたヘブル語は、*makob*という言葉で、それはまたヨブ十四章二十二節やヨブ三十三章十九節にもあります。両方痛みと訳されています。以上のことから、イザヤ五十三章四節をもっと正確に訳すと、「まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった」（訳者注：日本語訳には変更なし）となります。この事実は、マタイが彼の福音書の中で、イザヤ五十三章四節を直接引用したことにより動かぬものとされています。「彼が私たちのわずらいを身に引き受け、私たちの病を背負った」（マタイ 8:17）。

これらの事実から逃れられない為、ある人たちは、イザヤは私たちの「靈的病」について言っていたと、私たちを説得しようとします。しかし、マタイのイザヤ53章4節の引用から、イザヤが言葉通り身体的な病について言及していたことは間違いありません。その箇所を文脈の中で読んでいきましょう。

## 弟子をつくる指導者

夕方になると、人々は悪霊につかれた者を大ぜい、みもとに連れて来た。そこで、イエスはみことばをもって霊どもを追い出し、また病気の人々をみなお直しになった。これは、預言者イザヤを通して言われた事が成就するためであった。「彼が私たちのわずらいを身に引き受け、私たちの病を背負った」（マタイ 8:16-17、一部強調）。

マタイははっきりと、イエスが行った肉体のいやしは、イザヤ五十三章四節の成就であると言いました。つまり、イザヤ五十三章四節が、私たちの身体的なわずらいや病を背負うキリストのことを言及していたのは間違いありません。<sup>57</sup>57イエスは私たちの咎をになう（イザヤ53:11参照）と聖書が言っていると同様に、聖書はまた、私たちのわずらいと病を背負ったとも言っています。この知らせは、病人なら誰でも喜ぶはずです。イエスの贖いのいけにえにより、私たちは救いと癒しを得ました。

### 一つの質問 (A Question Asked)

もしそれが本当なら、なぜ全ての人がいやされないのでしょうか。その問題に対する答えは、もう一つ他の質問を聞くことで答えられます。なぜ全ての人生まれ変わりの体験をしないのですか。全ての人生まれ変わっていないのは、その人たちが福音をまだ聞いていないか、もしくはそれを信じなかったからです。ですから、各個人が、その人自身の信仰を通して、その人のいやしを得なくてはなりません。多くの人が、イエスが彼らの病を負ったという素晴らしい真理をまだ聞いていません。他には、聞いたけれども、それを拒んだ人たちもいます。

病に対する父なる神の態度は、その愛する御子の働きによって明白に表れており、

---

<sup>57</sup> 57 ある人たちは、何が何でも彼らの不信仰に固執して、カペナウムでイエスが人々をいやしたその夕方に、イエスはイザヤ 53 章 4 節を完全に成就したと言って、私たちに説得を試みる。しかしイザヤは、イエスが私たちの咎のために砕かれた、と言ったのと同様に、イエスは私たちの病を負ったと言ったのだ（イザヤ 53:4 と 5 を比較せよ）。イエスは、その咎のために砕かれた同じ人たちの病を負った。従ってマタイは、カペナウムでのイエスのいやしの働きが、イエスこそ、イザヤ 53 章にある、私たちの咎と病を負うメシヤであることを認証した、と指摘していたに過ぎない。

## 神のいやし

御子のご自身をこう証しました。

まことに、まことに、あなたがたに告げます。子は、父がしておられることを見て行なう以外には、自分からは何事も行なうことができません。父がなさることは何でも、子も同様に行なうのです（ヨハネ 5:19）。

私たちは、イエスが「神[御父]の本質の完全な現われ」（ヘブル 1:3）であったことが、ヘブル書からわかります。イエスの病人に対する態度は、御父の病人に対する態度と一致していたことに疑いの余地はありません。

イエスの態度はどうだったのでしょうか。一度として、イエスは癒しを求めて来る人を誰であろうと追い払ったことはありませんでした。一度として、イエスは癒されることを願った病人に、「あなたがいやされることは神の御旨ではないから、病人のままにいてはならない」と言いませんでした。イエスはいつも、イエスの下にきた病人をいやし、彼らがいやされると、イエスはよく、彼らの信仰が彼らをやした、と言いました。更に、聖書は神は決して変わることがないお方で（マラキ 3:6参照）、イエス・キリストは、「きのうもきょうも、いつまでも、同じ」（ヘブル 13:8）お方であると宣言しています。

### いやしの宣言（Healing Proclaimed）

残念なことに、今日救いの意味が減らされてきていて、罪の赦しよりも少し上としか捉えていません。しかし、「救われた」や「救い」と一番よく訳されているギリシャ語は、赦しの概念が含まれているだけでなく、完全なる解放といやしという概念も含まれています。<sup>58</sup> 聖書の中に出て来る、完全な意味で救いを体験した人のことを考えてみましょう。パウロがその人の町で福音を宣べ伝えているのに耳を傾けて

---

<sup>58</sup> 58 例えば、イエスが長血をわずらっている女に、「娘よ。あなたの信仰があなたを直したのです」（マルコ 5:34）と言った。この節と新約聖書の他の 10 カ所で「直した」と訳されているギリシャ語（*sozo*）は、新約聖書の他 80 カ所以上で、「救う」や「救われた」と訳されている。これは、例えば、エペソ 2 章 5 節「あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです」では「救われた」と訳されている。従って私たちは、一番よく「救われた」と訳されるギリシャ語の意味の中に、身体的ないやしも含まれていることがわかる。

## 弟子をつくる指導者

いた時、彼は信仰によっていやされました。

ふたりは...ルカオニヤの町であるルステラとデルベ、およびその付近の地方に難を避け、そこで福音の宣教を続けた。ルステラでのことであるが、ある足のきかない人がすわっていた。彼は生まれながらの足なえで、歩いたことがなかった。この人がパウロの話すことに耳を傾けていた。パウロは彼に目を留め、いやされる信仰があるのを見て、大声で、「自分の足で、まっすぐに立ちなさい。」と言った。すると彼は飛び上がって、歩き出した（使徒 14:6-10）。

パウロは「福音」を宣教していましたが、その人は身体的ないやしを受ける信仰を心の中に起こさせる何かを耳にしたのでした。最低でも、彼はパウロがイエスのいよしの働きについて話し、イエスがどのようにして、信仰によっていよしを求めた人を皆いよしたかについて聞いたに違いありません。おそらく、パウロはまた、イエスが私たちのわずらいと病を背負ったというイザヤの預言についても言及したのでしょう。私たちにはわかりませんが、「信仰は聞くことから始まる」（ローマ 10:17）とあるので、この足なえの人は、心の中で、いやされる信仰に火を付けた何かを聞いたに違いありません。パウロが言った何かが、神は彼に足なえのままでいて欲しくないということを彼に納得させたのです。

パウロ自身、神はその人がいやされることを望んでおられる、と信じていたに違いありません。そうでなければ、パウロの言葉に、その足なえの人がいやされる信仰を持つような説得力はなかったでしょうし、パウロがその人に立ちなさいと命じることもなかったでしょう。もしパウロが、現代のかなり多くの説教者が言うことを言っていたら、一体何が起きていたでしょうか。もしパウロが、「皆がいよされることは、神の御旨ではない」と説教していたらどうなっていたでしょうか。足なえの人には、いやされる信仰は生まれなかったでしょう。おそらく、これが余りにも多くの人々が今日いやされない理由でしょう。このような、いよしを受ける信仰を人々に励ますべき説教者たちが、人々の信仰を台無しにしているのです。



## 神のいやし

再び、この足なえの人が、彼の信仰によっていやされたことに注目しましょう。もし信じなかったら、神が彼をいやすことが御旨であることは明らかであるにもかかわらず、その人は足なえのままでした。更にその日、その群衆の中に他の病人もおそらくいたでしょうが、他にいやされたという記録はありません。もしそうであるのなら、なぜ彼らはいやされなかったのでしょうか。これは、その群衆の中にいる多くの未信者たちが、その日生まれ変わりの体験をしなかった理由と同じです。なぜなら、彼らはパウロのメッセージを信じなかったからです。

私たちは、ある人たちがいやされないと言う事実に基づいて、全ての人がいやされることは神の御旨ではない、という結論を決してすべきではありません。それは、ある人たちは生まれ変わりの体験を持たない、というだけで、全ての人が生まれ変わることが神の御旨ではないと結論付けていることと同じことになってしまうでしょう。全ての人が救われるのなら、その人自身が福音を信じなくてはなりませんし、全ての人がいやされるならば、その人自身がそれを信じなくてはなりません。

### いやしが神の御旨である更なる証拠 (Further Proof of God's Will to Heal)

旧約の下、身体的ないやしはイスラエルと神との間の契約に含まれていました。出エジプトからわずか数日後、神はイスラエルにこのような約束をしました。

もし、あなたがあなたの神、主の声に確かに聞き従い、主が正しいと見られることを行ない、またその命令に耳を傾け、そのおきてをことごとく守るなら、わたしはエジプトに下したような病気を何一つあなたの上に下さない。わたしは主、あなたをいやす者である (出エジプト 15:26)。

誰でも正直な人なら、イスラエルと神との間の契約の中に、民の従順という条件付きで、いやしが含まれていたことに合意せずにはいられないでしょう。(因みに、パウロは第一コリント十一章二十七から三十一節で、新約における身体的な健康は、私たちの従順という条件付きであることを明確に記しています。)

神はまた、イスラエルに約束しました。

### 弟子をつくる指導者

あなたがたの神、主に仕えなさい。主はあなたのパンと水を祝福してくださる。わたしはあなたの間から病気を除き去ろう。あなたの国のうちには流産する者も、不妊の者もいなくなり、わたしはあなたの日数を満たそう（出エジプト 23:25-26、一部強調）。

あなたはすべての国々の民の中で、最も祝福された者となる。あなたのうちには、子のない男、子のない女はいないであろう。あなたの家畜も同様である。主は、すべての病気をあなたから取り除き、あなたの知っているあのエジプトの悪疫は、これを一つもあなたにもたらさず、あなたを憎むすべての者にこれを下す（申命記 7:14-15、一部強調）。

もし身体的ないやしが古い契約に含まれていたのなら、聖書には以下の通り、新しい契約は古い契約よりも、事実、更にすぐれたものである、と書いてあるので、いやしの約束が新しい契約に含まれていないなどということが一体あり得るでしょうか。

しかし今、キリストはさらにすぐれた務めを得られました。それは彼が、さらにすぐれた約束に基づいて制定された、さらにすぐれた契約の仲介者であるからです（ヘブル 8:6、一部強調）。

### まだ続く更なる証拠（Yet Further Proof）

聖書は、全ての人をいやすことが神の御旨であることについて、議論の余地のない証拠を表す多くの聖句を含みます。ここに、それを一番表している三つの聖句を挙げます。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、（詩篇

## 神のいやし

103:1-3、一部強調)

すべての咎を赦すことが神の御旨であるとのダビデの宣言に異議を唱えるクリスチャンとは一体どんな人なののでしょうか。しかし、ダビデは更に、神は同じ位多くの病、つまりすべての病をいやしたいと願っておられることを信じました。

わが子よ。私のことばをよく聞け。私の言うことに耳を傾けよ。それをあなたの目から離さず、あなたの心のうちに保て。見いだす者には、それはいのちとなり、その全身を健やかにする（箴言 4:20-22、一部強調）。

あなたがたのうちに病気の人がありますか。その人は教会の長老たちを招き、主の御名によって、オリーブ油を塗って祈ってもらいなさい。信仰による祈りは、病む人を回復させます。主はその人を立たせてくださいます。また、もしその人が罪を犯していたなら、その罪は赦されます（ヤコブ 5:14-15、一部強調）。

最後の約束は、病気の人なら誰でも当てはまることに注目してください。また、いやしをもたらすのは、教会の長老たちでも、オリーブ油でもなく、「信仰による祈り」であることにも注意してください。

これは長老の信仰でしょうか、それとも病気の人信仰でしょうか。両方の信仰です。病気の人信仰は、少なくとも部分的に、その人が教会の長老を呼ぶ時に表されています。病気の人信仰は、長老の祈りの効果を無効にしてしまうこともあり得ます。ヤコブが書いたこの種の祈りは、イエスがマタイ十八章十九節で触れた「同意の祈り」が良い例です。この種の祈りに関わる両者が「同意」しなくてはなりません。一方が信じて、他方が信じないのなら、そこには同意がありません。

私たちはまた、聖書には、病の原因をサタンとしているいくつかの箇所があることを知っています（ヨブ 2:7; ルカ 13:16; 使徒 10:38; 第一コリント 5:5参照）。従って、神が、その子供たちの体に対して行うサタンの働きに反対するであろう、とい

## 弟子をつくる指導者

うことは理にかなっています。私たちの御父は、地上の父がその子供を愛する以上に愛しておられ（マタイ 7:11参照）、私は、自分の子が病気のままでいることを望む父親を今まで見たことがありません。

イエスの地上での働きの間にあったイエスによるいやしの業、また使徒の働きの中に記録されている全てのいやしは、神は私たちの健康を望んでおられるということ私たちが信じる励ましとなるはずです。イエスは、いやしを求める人を頻繁にいやしましたし、またそれらの奇跡は彼らの信仰によることを認めました。それは、イエスがいやしたいと思う、ある限定された人たちを選び出した訳ではなかったことを証明します。病人は誰でも、信仰によってイエスの下へ来ることができ、またいやされることができました。イエスは全ての人をいやしたかったのですが、それには彼らの信仰が必要でした。

### よくある反論に対する答え (Answers to Some Common Objections)

おそらく、これら全てに対して最も共通の反論は、神のみことばに基づくものではなく、人々の経験に基づくものです。大抵、このような感じですか。「私は素晴らしいクリスチャンの女性で、癌がいやされるよう祈っていた方を知っていますが、その方はなくなりました。それは、全ての人がいやされることが神の御旨ではないことを証明しています」。

私たちは、神のみことば以外の何かで、神の御旨を測ろうとしては決してなりません。例えば、あなたが過去に遡り、ヨルダン川の向こうには、乳と蜜の流れる地が待っているにもかかわらず、イスラエル人が四十年間荒野をさま迷っているのを見たら、あなたは、イスラエルが約束の地に入ることは神の御旨ではなかったと結論付けたことでしょうか。しかし、あなたが聖書を知っていれば、そうではないことがわかるでしょう。イスラエルが約束の地に入ることは、勿論神の御旨でしたが、彼らの不信仰によってそこに入ることができなかつたのです（ヘブル 3:19参照）。

今地獄にいる人たちはどうでしょうか。その人たちが天国にいることは神の御旨でしたが、主イエスにある悔い改めと信仰という条件を満たさなかつたのです。従っ

## 神のいやし

て、病気の人たちを見て、いやしに対する神の御旨を決めることはできません。クリスチャンがいやしのために祈り、しかし受けることができなかつたというだけで、全ての人をいやすことが神の御旨ではない、ということの証明にはなりません。もしそのクリスチャンが神からの条件を満たしていたら、その人はいやされていたでしょう。そうでなければ、神が嘘つきとなってしまいます。私たちがいやしを受けられない時、いやしは神の御旨ではないと言って言い訳をし、神を責める時、私たちは、約束の地に入ることは神の御旨ではなかつたと荒野で死んだ、不信仰なイスラエルの民と、何ら変わりません。私たちはプライドを捨てて、私たちのせいであることを認めた方がいいです。

信仰についての書いた、この前の章で、多くの敬虔なクリスチャンが、信仰を台無しにする言い回しである、「もしあなたの御旨ならば」をいやしの為の祈りの最後に間違っつけて付けています。これは明らかに、彼らは神の御旨かどうか確信を持っていない為に、信仰によって祈っていないことを表しています。いやしに関して言えば、ここまでも見てきた通り、それが神の御旨であることは非常に明らかです。もしあなたをいやすことが神の御旨であることをあなたが知っていれば、「もしあなたの御旨ならば」という言葉を、いやしのためのあなたの祈りの中に付け加える理由はどこにもありません。それはこのように言っていることと同じです。「主よ、あなたは私をいやすと約束してくださったことはわかりますが、万が一あなたがそれについて嘘をついているかもしれないので、もし本当にあなたの御旨なら、どうか私をいやしてください」。

また、神は不従順な信者を病によって、悩ませることで訓練することがあり、時にはそれが時期尚早の死を招くことさえある、というのは確かに本当です。そのような信者は明らかに、いやしを受けることができる前に悔い改める必要があります（第一コリント 11:27-32参照）。他には、自分の体の健康管理を怠り、病気を招いた人たちもいます。クリスチャンは、健康な食生活を送り、普通に食べ、定期的に運動し、必要な休息を取るのに十分賢くあるべきです。

## 二つ目によくある反論 (A Second Common Objection)

「パウロは、肉体に一つのとげがあって、神は彼をいやさなかった」と良く言われます。

しかし、パウロが私たちにはっきりと、そのとげが何であるか—それはサタンの使いである、と語った事実と照らし合わせると、パウロのとげが病気であったという考えは、単に悪い神学上の理論に過ぎません。

また、その啓示があまりにもすばらしいからです。そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう（第二コリント 12:7-9、一部強調）。

使いと訳されている言葉は、ギリシャ語の「aggelos」で、それは新約聖書の160カ所以上で、御使または御使たちと、訳されています。パウロの肉体のとげは、サタンの御使いで、パウロと戦う為に送られました。従って、とげは病ではありませんでした。

いやされるためのパウロの祈りについての言及も、神がパウロをいやすのを拒んだしるしも、なかったことにも気づいてください。三回、パウロは単純に神へ、戦いを挑む御使いを排除するよう頼みましたが、神はその恵みは十分であると言いました。

誰が、パウロにこのとげを与えたのでしょうか。ある人たちは、とげが「サタンの使い」と訳されている為、サタンであったと信じています。他の人たちは、パウロが高ぶらないように、どうも神がとげを与えたらしい、と考えています。パウロ自身、「私が高ぶることのないように」と言いました。

## 神のいやし

欽定訳 (KJV) は、この箇所を多少違って訳しています。「私が私自身を高めることを避けるために」と言う代わりに、「私が極端に高められるといけないから」と言っています。これは、神は私たちが高められることには反対していないので、大事な違いです。実際神は、私たちが身を低くすれば、神が私たちを高めてくださると約束しています。従って、神が高めることをしている一方で、サタンが、パウロが旅する先々で問題を引き起こすよう戦いを挑む、ある特定の御使いを配属することで、パウロが高められるのを阻止しようとしている、という可能性は大いにあります。しかし神は、パウロの弱さの結果として、神の御力が彼の人生に更に現われるので、神の栄光の為にそれらの状況を用いるであろう、と言いました。

とにかく、パウロは病気であって、神はパウロをいやすことを拒んだということは、聖書が実際言っていることを、ひどく曲解しています。パウロの肉体のとげについての箇所では、パウロは一度も病について触れていませんし、想定されるパウロの病からパウロをいやすことに対して、神が拒んでいるように見受けられる箇所はどこにもありません。もし正直な人が、第二コリント十一章二十三から三十節で列挙するパウロの苦難について読むならば、その人は、そこに一度たりとも病について触れていないことがわかるでしょう。

### 同じテーマについての詳細 (An Elaboration on the Same Theme)

パウロのとげについての私の説明に反対する人たちは、「でも、パウロは自分でガラテヤの人たちに、パウロが福音を彼らに宣べ伝えに行った最初の頃、病気であったと言っていないでしたか。パウロは彼の肉体のとげについて言っていたのではありませんか。」と言います。

これが、パウロが実際、ガラテヤ宛に彼が書いたことです。

ご承知のとおり、私が最初あなたがたに福音を伝えたのは、私の肉体が弱かったためでした。そして私の肉体には、あなたがたにとって試練となるものがあつたのに、あなたがたは軽蔑したり、きらったりしないで、かえって神の御使いのように、またキリスト・イ

## 弟子をつくる指導者

エスご自身であるかのように、私を迎えてくれました（ガラテヤ 4:13-14）。

ガラテヤ四章十三節で「弱かった」と訳されているギリシャ語（英訳では「病気」となっている）は、*asthenia*で、文字通りの意味は「弱さ」です。病気が原因の弱さの可能性もありますが、そうとも限りません。

例えばパウロは、「神の弱さは人よりも強いからです」（第一コリント 1:25、一部強調）と書きました。この例で「弱さ」と訳されている言葉も、*asthenia*という言葉です。もし翻訳者が「神の病気は人よりも強い」と訳していたら、全く意味が通らなかつたでしょう。（*asthenia*という言葉が弱さと訳されていて、病気とは訳せない他の例として、マタイ26:41や第一ペテロ3:7も参照）。

使徒の働きの中に記録されている通り、パウロが最初にガラテヤを訪れた時、彼が病気であったとはどこにも書いてありません。パウロが石打ちにされ、死んだものとして放っておかしましたが、パウロは死んでよみがえったのか、奇跡的に息を吹き返しました（使徒 14:5-7, 19-20参照）。当然のことながら、パウロの体は、石打ちにされ、死んだものとして放っておかれた後ですから、切り傷や打ち身が体中にある酷い状態だったに違いありません。

パウロはガラテヤで、聴衆に面倒を掛けるような病気になっていた訳ではなく、むしろ、彼の体は最近起きた石打ちによって弱かったのです。ガラテヤの人たちへ手紙を書いた頃も、ガラテヤでの迫害の傷がまだ残っていた可能性が高いです。パウロは手紙をこのように締めくくっていることからわかります。

これからは、だれも私を煩わさないようにしてください。私は、この身に、イエスの焼き印を帯びているのですから（ガラテヤ 6:17）。

### 他の反論—「神の栄光のために私は病気をしている」（Another Objection: “I’m Suffering for the Glory of God”）

この反論は、ラザロが死からよみがえった話の聖書箇所に基づいて、神の栄光のために、病気を患っていると主張する人たちが使うものです。イエスはラザロについ



## 神のいやし

てこう言いました。

この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです(ヨハネ 11:4)。

イエスは、ラザロの病気の結果として、神が栄光を受けるとは言っておらず、ラザロがいやされ、死からよみがえる時に、神が栄光を受けると言いました。言い換えると、病気の最終的な結果は死ではなく、神が栄光を受けることだったのです。神は、病で栄光は受けず、いやしで栄光を受けるのです(いやしが神に栄光をもたらした例としては、マタイ 9:8; 15:31; ルカ 7:16; 13:13; 17:15を参照。)

### 他の反論—「トロピモは病気のためミレトに残して来た、とパウロは言った」(Another Objection: “Paul Said He Left Trophimus Sick at Miletum”)

私はこの文章をちょうどドイツの町で書いています。先週アメリカの私の住む町を発つ時、多くの病人を残してきました。私は病人で一杯の病院を後にしました。しかしそれが、それら全ての人たちがいやされることは神の御旨ではなかった、という意味にはなりません。パウロが、その訪れた町に一人の病人を残して来たというだけで、その人がいやされることが神の御旨ではないことの証拠にはなりません。パウロが残して来た他の沢山の未信者たちはどうなるのでしょうか。彼らが救われるのは神の御旨ではなかったことを証明しているのでしょうか。当然、そんなことはありません。

### 他の反論—「私はまるでヨブみたいだ！」(Another Objection: “I’m Just Like Job!”)

主を讃えます！もしあなたがヨブの話を読み終えて、ヨブがいやされたこととはご存知のことでしょう。ヨブが病んだままにいることは、神の御旨ではなかったですし、あなたを病気のままでいさせることも神の御旨ではありません。ヨブの話は、神の御旨はいつもいやすことであることを再確認させます。

### 他の反論—テモテの胃を気遣って与えたパウロの助言 (Another Objection: Paul’s Advice to Timothy About His Stomach)

パウロがテモテに、胃とたびたび起こる病気のために、少量のぶどう酒を用いる

## 弟子をつくる指導者

よう言ったことを、私たちは知っています（第一テモテ 5:23参照）。

実際パウロは、テモテに水を飲むのを止めて、胃とたびたび起こる病気のために、少量のぶどう酒を用いるよう言いました。これは、水が何かおかしかったことを示唆しているようです。もしあなたが汚染された水を飲んでいたら、当然ながら、それを飲むのを止めて、何か別の物を飲み始めるべきです。さもなければ、テモテのように、おそらくあなたの胃にも問題が出て来ることでしょう。

### 他の反論—「イエスはご自分の神性を証明するためだけにいやした」 (Another Objection: "Jesus Only Healed to Prove His Deity.")

ある人たちは、イエスがいやした理由は、ご自分の神性を証明するためだけだった、と私たちに信じさせたいと考えています。そこで今は、イエスの神性は良く示されているので、もはやイエスはいやすことはないだろう、というのです。

それは完全に間違っています。イエスの奇跡は、ご自分の神性が本当であることを示したのは事実ですが、地上での御働きの間に、イエスが人々をいやしたのはそれだけが理由ではありません。多くの場合、イエスはいやさされた人たちに何が起きたかを誰にも言わないようにと、禁じました（マタイ 8:4; 9:6, 30; 12:13-16; マルコ 5:43; 7:36; 8:26参照）。もしイエスが、ご自分の神性を証明するという唯一の理由だけで人をいやしていたのなら、イエスはいやさされた人たちに、イエスが成した業について皆に伝えるよう、言ったに違いありません。

イエスのいやしの背後にある動機は何だったのでしょうか。多くの場合、聖書はイエスは「かわいそうに思って」いやされました、と語っています（マタイ 9:35-36; 14:14; 20:34; マルコ 1:41; 5:19; ルカ 7:13参照）。イエスがいやした理由は、イエスが人々を愛し、また人々に対する憐みで溢れていたからです。イエスは、その地上での働き以降、人々に対する憐れみが減っていったのでしょうか。イエスの愛は衰えて行ったのでしょうか。勿論、そんなことはありません！

### 他の反論—「何らかの理由で神は私に病気になって欲しい」 (Another Objection: "God Wants Me to be Sick for Some Reason.")

## 神のいやし

これまでに私たちが見てきた全ての箇所を考慮すると、それはあり得ないことです。もしあなたが不従順を続けているのなら、神はあなたに悔い改めをもたらすために、あなたが病気にかかるのを許しているのかもしれませんが。しかし、あなたが病んだままでは神の御旨ではありません。神は、あなたが悔い改めていやされて欲しいのです。

更に言えば、もし神があなたに病気でいて欲しいのなら、なぜあなたは医者に行き、薬を飲んで、いやされることを望んでいるのですか。あなたは「神の御旨」から離れようとしているのですか。

**最後の反論—「もし私たちが病気にならなかつたら、どうやって死を遂げるのか」(A**

### **Final Objection: “If We Never Suffer Disease, How Will We Die?”)**

私たちは、この肉の体は朽ちて行くと聖書が教えていることを知っています（第二コリント 4:16参照）。私たちが、白髪になることや、体が衰えることを止める為には、何もありません。若い頃と比べて、私たちの視力や聴力は、いずれは衰え、早く走れなくなり、心臓も弱まります。私たちは徐々に衰えていくのです。

だからといって、私たちは病気が原因で死ななくてはならない訳ではありません。私たちは単に、この体を完全燃焼させて使い切り、それをした時、神は私たちが天の御住まいに呼び、私たちの霊は肉体を離れます。多くの信者はこのようにして天に召されました。なぜあなたはそうはならないと、決め付けるのですか。



## 第十六章

### イエスのいやしのミニストリー (The Healing Ministry of Jesus)

イエスは神の御子であった為、ご自分の思いのままに奇跡を起こし、人をいやすことができたと思いがちですが、聖書を詳しく見て行くと、イエスは勿論神でありましたが、その地上のミニストリーでは、どうやらご自身を制限されていたようです。イエスはかつて、「子は、父がしておられることを見て行なう以外には、自分からは何事も行なうことができません」（ヨハネ 5:19）と言いました。これは、イエスは制限され、御父に依存していたことをはっきりと示しています。

パウロによると、イエスが人となった時、神として以前所有していたものを捨て、「ご自分を無に」しました。

あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです（ピリピ 2:5-7、一部強調）。

イエスは、ご自分の何を「無に」したのでしょうか。それはご自分の神性ではありませんでした。ご自分の聖さではありませんでした。ご自分の愛ではありませんでした。それは、ご自分の超自然的な力であったはずですが、明白に、イエスはもはや偏在する（どこにでも存在できる）お方ではありませんでした。同様に、イエスはもは

## 弟子をつくる指導者

や全知全能なる（何でも知っていて、何でもできる）お方ではありませんでした。イエスは人となったのです。イエスはそのミニストリーの中で、聖霊によって油注がれた人として働いておられました。これは、四つの福音書を詳しく見て行くと非常に明らかです。

例えば、もしイエスが神の御子だったならば、三十歳の時ご自分のミニストリーを始めるのに、なぜ聖霊のバプテスマを受ける必要があったのだろうか、と私たちは尋ねるかもしれません。なぜ、神が神によってバプテスマを受ける必要があったのでしょうか。

明らかに、イエスはミニストリーの為の油注ぎを受けるために、聖霊のバプテスマが必要でした。それ故、そのバプテスマの後すぐに、イエスが次のように述べ伝えていることを私たちは聖書の中で読むのです。「わたしの上に主の御霊がおられる。主が、...福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれたのだから。...赦免を...告げ...自由に」するために（ルカ 4:18、一部強調）。

それ故にまた、ペテロは「それは、ナザレのイエスのことです。神はこの方に聖霊と力を注がれました。このイエスは、神がともにおられたので、巡り歩いて良いわざをなし、また悪魔に制せられているすべての者をいやされました」（使徒10:38、一部強調）と教えたのです。

それ故にまた、イエスはおおよそ三十歳で聖霊のバプテスマを受けるまで、奇跡を起こさなかったのです。イエスは、二十五歳の頃、神の御子だったのででしょうか。勿論です。ではなぜ、イエスは三十歳まで、奇跡を何も起こさなかったのでしょうか。それは単に、イエスは、神としてのご自身が持つておられる超自然的な力を無にして、聖霊によって御力が注がれる時を待たなければならなかったからです。

### **イエスが聖霊の油注ぎを受けた人としてはたらいた更なる証拠 (More Proof that Jesus Ministered as a Man Anointed by the Spirit)**

わたしたちは福音書を読むと、イエスが超自然的な知識を持っていた時と、そうでない時があったことに気づきます。実際、イエスは大抵の場合、情報を得るために

質問しました。

例えば、サマリヤの井戸で出会った女性に、その女性には以前五人の夫がいて、また現在一緒に住んでいる男性は彼女の夫ではないことを言いました（ヨハネ 4:17-18参照）。どうやってイエスはそのことを知ったのでしょうか。それは、イエスが神であり、神は何でもご存知であるからでしょうか。いいえ、もしそうであったなら、イエスは、その能力をいつも現わしていたでしょう。イエスは神であり、神は全てをご存知であります。イエスは人となられた時に、全知であるご自分を無にしたのでした。イエスは、聖霊がその時に与えた「知識のことば」（第一コリント 12:8）、つまり、現在または過去の何かについてわかる超自然的な力によって、井戸にいた女性の婚歴を知ったのです。（次の章で、聖霊の賜物について、詳しく見て行きます）。

イエスはいつも全てのことについて知っていたのでしょうか。いいえ、長血の女がイエスの着物にさわった時、イエスはいやしの力がご自身から外へ出て行くのを感じて、「誰が私の着物をさわったのですか」（マルコ 5:30後半）と尋ねました。マルコ 11章13節で、イエスが遠くのいちじくの木を見た時、「それに何かありはしないかと見に行かれ」ました。

なぜイエスは誰がご自分の着物にさわったのかを知らなかったのでしょうか。なぜいちじくの木に何かなっていないか知らなかったのでしょうか。それは、イエスが聖霊の油注ぎを受けた人として、聖霊の賜物によってはたらいておられたからです。聖霊の賜物は、みこころのままに働きます（第一コリント 12:11; ヘブル 2:4参照）。イエスは、聖霊がイエスに「知識のことば」の賜物を与えることを望まない限り、超自然的に物事を知ることはなかったのです。

イエスのいやしの働きについても同様でした。聖書は明白に、イエスはいつでも、誰でもいやした訳ではないことを示しています。例えば、マルコの福音書に、イエスがナザレの町を訪れた時、イエスが望んでおられた全ての事をやり遂げることができなかったと書いてあります。

イエスはそこを去って、郷里に行かれた。弟子たちもついて行った。

## 弟子をつくる指導者

安息日になったとき、会堂で教え始められた。それを聞いた多くの人々は驚いて言った。「この人は、こういうことをどこから得たのでしょうか。この人に与えられた知恵や、この人の手で行なわれるこのような力あるわざは、いったい何でしょう。この人は大工ではありませんか。マリヤの子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではありませんか。その妹たちも、私たちとここに住んでいるではありませんか。」こうして彼らはイエスにつまずいた。イエスは彼らに言われた。「預言者が尊敬されないのは、自分の郷里、親族、家族の間だけです。」それで、そこでは何一つ力あるわざを行なうことができず、少数の病人に手を置いていやされただけであった。イエスは彼らの不信仰に驚かれた。それからイエスは、近くの村々を教えて回られた（マルコ 6:1-6、一部強調）。

マルコは、イエスはそこでは何一つ力あるわざを行わなかった、ではなく、行うことができなかつたと言ったことに注目してください。なぜでしょう。それは、ナザレの人たちが不信仰だったからです。彼らはイエスを、油注がれた神の御子としては受け入れず、単に近所の大工の息子として見ていました。イエスご自身が驚いたように、「預言者が尊敬されないのは、自分の郷里、親族、家族の間だけです」（マルコ 6:4）。結果として、イエスが唯一達成できたことは、（ある訳にある通り）「軽度の慢性的な病」を持つ少数の人をいやすこと位でした。もしイエスに、奇跡の業をなし、劇的に人をいやしたい場所があったとしたら、それはご自分が人生の殆どを過ごした郷里であったでしょう。しかし、聖書によると、イエスはそれができなかつたと書いてあります。

## ルカによる更なる見解 (More Insight from Luke)

イエスは主に二つの異なる手法でいやしました。すなわち、(1) 神のみことばを教えることで、病んだ人にいやされる信仰を持つよう励ますことと、(2) 聖霊の望むまま、「いやしの賜物」を用いることによってです。従って、イエスのいやしの働き



## イエスのいやしのミニストリー

は、以下の二つの要因によって制限されていました。すなわち、(1) 病人の不信仰と、(2) 「いやしの賜物」を通して聖霊がご自身を現わしたいかという御旨によってです。

明らかに、イエスの郷里の人々の多くは、イエスに信仰をもっていませんでした。彼らは他の町で起きたイエスのいやしの奇跡について聞いてはいましたが、イエスがいやす力をお持ちであったとは信じず、結果としてイエスは彼らをいやすことはできませんでした。更に、聖霊はナザレにおいて、イエスにどんな「いやしの賜物」をも与えることはしませんでした。理由については誰もわかりません。

ルカは、イエスがナザレを訪れた時に実際何が起きたのかについて、マルコよりも更に詳細に渡って記録しています。

それから、イエスのご自分の育ったナザレに行き、いつものとおりに安息日に会堂にはいり、朗読しようとして立たれた。すると、預言者イザヤの書が手渡されたので、その書を開いて、こう書いてある所を見つけられた。「わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれたのだから。主はわたしを遣わされた。捕われ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために。しいたげられている人々を自由にし、主の恵みの年を告げ知らせるために。」 イエスは書を巻き、係の者に渡してすわられた。会堂にいるみな目がイエスに注がれた。イエスは人々にこう言って話し始められた。「きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおりに実現しました。」 みなイエスをほめ、その口から出て来る恵みのことばに驚いた。そしてまた、「この人は、ヨセフの子ではないか。」と彼らは言った（ルカ 4:16-22）。

イエスは聴衆に、イエスこそが、イザヤの預言通り、捕らわれ人や、しいたげられている人には自由を与え、盲人には視力を与えることができる、約束された油注が

## 弟子をつくる指導者

れた方であることを信じて欲しかったのです。<sup>59</sup>しかし彼らは信じませんでした。彼らはイエスの話す能力に関心しましたが、彼らはヨセフの息子が誰か特別な人とは信じませんでした。彼らの懐疑的な態度を見て、イエスは答えました。

イエスは言われた。「きっとあなたがたは、『医者よ。自分を直せ。』というたとえを引いて、カペナウムで行なわれたと聞いていることを、あなたの郷里のここでもしてくれ、と言うでしょう。」…まことに、あなたがたに告げます。預言者はだれでも、自分の郷里では歓迎されません（ルカ 4:23-24）。

イエスの郷里の人々は、イエスがカペナウムで行われたと聞いていることを、イエスがするかどうかを見る為に待っていました。彼らの態度は、期待に溢れる信仰ではなく、疑念でした。彼らに信仰がなかった為に、彼らはイエスが奇跡や大きないやしの業をなすことを制限していました。

### ナザレでイエスにあった他の制限について (Jesus' Other Limitation in Nazareth)

イエスがナザレの群衆に発した次の言葉により、イエスは、聖霊が「いやしの賜物」を通して御自身を現わすことを望んでいるか、という御旨によっても御自分が制限されていたことを、明らかにされました。

わたしが言うのは真実のことです。エリヤの時代に、三年六か月の間天が閉じて、全国に大ききんが起こったとき、イスラエルにもやもめは多くいたが、エリヤはだれのところにも遣わされず、シドンのサレプタにいたやもめ女にだけ遣わされたのです。また、預言者エリシャのときに、イスラエルには、らい病人がたくさんいたが、そのうちのだれもきよめられないで、シリヤ人ナアマンだけが

---

<sup>59</sup> 59 これら全ては、身体的ないやしと呼ばれる可能性が高い。病気であることは、しいたげられていることと同じで、聖書は、「神はこの方[イエス]に聖霊と力を注がれました。このイエスは、…巡り歩いて良いわざをなし、また悪魔に制せられているすべての者をいやされました」と言っている（使徒 10:38）。

## イエスのいやしのミニストーリー

きよめられました（ルカ 4:25-27）。

イエスが言わんとしていることは、イスラエルに起きた大ききの三年間、エリヤは、誰でも彼が良いと思われるやもめを養うために油と粉を増やす、ということではできなかった、ということです（第一列王記 17:9-16参照）。当時イスラエルには数多くの苦しんでいるやもめたちがいましたが、御霊は、イスラエル人でもない、たった一人のやもめを助けるようエリヤに油を注ぎました。同様に、エリシャも、誰でも彼が良いと思われるらい病人をきよめる、ということではできませんでした。このことは、ナアマンがきよめられた時、イスラエルには多くのらい病人がいたという事実を物語っています。もしそれが純粹にエリシャ自身で選ぶということだったなら、エリシャはナアマンという偶像礼拝者をきよめる前に、当然同国イスラエル人のらい病人をきよめていたでしょう（第二列王記 5:1-14参照）。

エリヤもエリシャも、両方預言者であり、聖霊によって油注ぎを受け、御霊の思うままに、あらゆる種類の御霊の賜物によって用いられた人たちでした。なぜ、神はエリヤを他のやもめたちにも送らなかったのでしょうか。それは私にはわかりません。なぜ、神は他のらい病人たちもいやすためにエリシャを用いなかったのでしょうか。それは私にはわかりません。神以外に、わかる方はいません。

しかし、これらの馴染みある旧約聖書の話は、全てのやもめの必要を満たしたり、全てのらい病人をいやすことが神の御旨ではなかった、との証明にはなりません。もしイスラエルの民と悪王（アハブ）が彼らの罪を悔い改めていたら、エリヤの時代に大ききんは終わりを遂げていたかもしれません。ききんは神の裁きの現れでした。イスラエルの全てのらい病人たちは、神から与えられた契約の言葉に従って信じていれば、私たちもその契約の言葉には身体的ないやしについて含まれていることを見た通り、彼らはいやされていたかもしれません。

イエスはエリヤやエリシャと同じ制限の下にあることを、ナザレの聴衆に明らかにしました。何らかの理由で、聖霊はナザレでイエスにいかなる「いやしの賜物」を与えませんでした。その事実と、ナザレの人々の不信仰とによって、結果として、イ

## 弟子をつくる指導者

エスの郷里でイエスは大きな奇跡の業を見せることができませんでした。

### イエスを通した「いやしの賜物」の一事例を見る (A Look at One “Gift of Healing” Through Jesus)

もし私たちが福音書にあるイエスの行った様々ないやしについて説明をよく見てみると、人々の多くは「いやしの賜物」によってではなく、彼らの信仰によっていやされたことがわかります。両方の事例を見ながら、これら二種類のいやしにある違いを見て行きましょう。まず最初は、ベテスダの池にいた足なえの人が、彼の信仰によってではなく、イエスを通してはたらく「いやしの賜物」によっていやされた話について見て行きます。

さて、エルサレムには、羊の門の近くに、ヘブル語でベテスダと呼ばれる池があって、五つの回廊がついていた。その中に大ぜいの病人、盲人、足なえ、やせ衰えた者が伏せっていた。そこに、三十八年もの間、病気にかかっている人がいた。イエスは彼が伏せっているのを見、それがもう長い間のことなのを知って、彼に言われた。「よくなりたいか。」病人は答えた。「主よ。私には、水がかき回されたとき、池の中に私を入れてくれる人がいません。行きかけると、もうほかの人が先に降りて行くのです。」イエスは彼に言われた。「起きて、床を取り上げて歩きなさい。」すると、その人はすぐに直って、床を取り上げて歩き出した。ところが、その日は安息日であった(ヨハネ 5:2-9)。

どうしてこの人が、彼の信仰によってではなく、「いやしの賜物」によっていやされたということがわかるのでしょうか。それにはいくつかの兆候があります。

第一に、この人はイエスを求めていなかった、ということに気づいてください。むしろ、イエスが池の側で座っている彼を見つけたのでした。もしこの人がイエスを求めていたのなら、彼の信仰の兆しだったと言えるでしょう。

第二に、イエスはこの人に、イエスが他の人々をいやした時によく言っていた、彼の信仰が彼をいやした、という言葉を言いませんでした。

## イエスのいやしのミニストリー

第三に、いやされた人がユダヤ人に、誰が彼に「立って歩け」と言ったのかと質問された時、この人は、それが誰だったのかさえ知りませんでした。従って、イエスへのこの人の信仰が、彼にいやしをもたらした、という訳では決してありませんでした。これは、御霊が望むままに現れる「いやしの賜物」によっていやされた人の明白な事例でした。

大ぜいの病人が水がかき回されるのを待っていましたが、イエスは一人だけをいやし、残り的人たちは病気のままであったことに注目してください。なぜでしょうか。これも私にはわかりません。しかし、このことは、ある人たちを病気のままに残しておくことが神の御旨である、ということを証明している訳ではありません。そこにいた病人の誰もが皆、イエスへの信仰によっていやされることはできたはずです。実のところ、これは、ただ信じさせればいやしてくださるお方であるイエスに、病人たちの注目が行くように、この人が超自然的にいやされたのかもしれない。

多くの場合、「いやしの賜物」は「しるしと不思議」に分類され、それは、イエスに注目が行くためにある奇跡です。それ故、新約のピリポのような伝道者たちには、彼らが起こす奇跡によって、彼らの宣べ伝える福音に注目が行くので、様々な「いやしの賜物」が伴いました（使徒 8:5-8参照）。

現在病気のクリスチャンは、誰か「いやしの賜物」をもって、いやしてくれるのを、ただ待っているべきではありません。と言うのも、そのような人も賜物も決して来ないかもしれないからです。いやしはイエスへの信仰を通していただくことができ、皆がいやしの賜物を通していやされる訳ではありませんが、誰もがその人の信仰によっていやされることは可能です。いやしの賜物が教会にもともと与えられているのは、未信者がいやされて、それにより福音に彼らの注目が寄せられる為です。これは、いやしの賜物を通してクリスチャンはいやされることがない、ということではありません。しかし、神はご自分の子供たちには、その信仰によっていやしを受けることを期待されています。

**信仰によっていやされた人の一例 (One Example of a Person Healed By His Faith)**

## 弟子をつくる指導者

バルテマイは盲人で、イエスへの信仰によっていやされました。マルコの福音書から読んでみましょう。

彼らはエリコに来た。イエスが、弟子たちや多くの群衆といっしょにエリコを出られると、テマイの子のバルテマイという盲人のこじきが、道ばたにすわっていた。ところが、ナザレのイエスだと聞くと、「ダビデの子のイエスさま。私をあわれんでください。」と叫び始めた。そこで、彼を黙らせようと、大ぜいでたしなめたが、彼はますます、「ダビデの子よ。私をあわれんでください。」と叫び立てた。すると、イエスは立ち止まって、「あの人を呼んで来なさい。」と言われた。そこで、彼らはその盲人を呼び、「心配しないでよい。さあ、立ちなさい。あなたをお呼びになっている。」と言った。すると、盲人は上着を脱ぎ捨て、すぐ立ち上がって、イエスのところに来た。そこでイエスは、さらにこう言われた。「わたしに何をしてほしいのか。」すると、盲人は言った。「先生。目が見えるようになることです。」するとイエスは、彼に言われた。「さあ、行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです。」すると、すぐさま彼は見えるようになり、イエスの行かれる所について行った（マルコ 10:46-52）。

第一に、イエスはバルテマイを探していなかったことに注目してください。（これは、ベテスダの池で起きたことと正反対です。）実際、イエスは彼の前を通り過ぎようとしていました。もしバルテマイが叫んでいなかったのなら、イエスはそのまま通り過ぎていたでしょう。つまり、バルテマイはいやされていなかったでしょう。

このことについて考えてみてください。もしバルテマイが座りながら、「もし私がいやされることがイエスの御旨なら、イエスは私の所に来て、いやしてくれるだろう」と心の中で言っていたら、どうなっていたでしょう。この聖書箇所から、バルテマイがいやされることはイエスの御旨であることがはっきりと示されています

### イエスのいやしのミニストーリー

が、バルテマイは決していやされることがなかったでしょう。バルテマイの信仰の最初のしるしは、彼がイエスに叫んだことです。

第二に、バルテマイは、彼を黙らせようとたしなめる人たちによって落胆させられなかったことに注目してください。人々が彼を黙らせようとした時、彼は「ますます」叫びたてました（マルコ 10:48）。それは彼の信仰を表しています。

第三に、イエスはバルテマイの最初の叫びに応えなかったことに注目してください。勿論、バルテマイの最初の叫びがイエスには聞こえなかったという可能性はありますが、もしイエスに聞こえていたのなら、イエスはあえて応えなかったのです。つまり、イエスはこの男の信仰を試させたのです。

もしバルテマイが一度叫んだだけで諦めていたら、彼はいやされていなかったでしょう。多くの場合、まるで私たちの祈りが聞かれていないように思えるので、時には私たちも信仰によって耐え忍ばなくてはなりません。それが私たちの信仰が試される時で、私たちは逆境から来る落胆を拒みながら、信仰によって立ち続ける必要があります。

#### バルテマイの信仰の更なるしるし (Further Indications of Bartimaeus' Faith)

イエスが遂にバルテマイに来るよう呼んだ時、彼は「上着を脱ぎ捨て」たと聖書は言っています。私の考えでは、イエスの時代、盲人は自分が盲人であることを公に示すための特殊な上着を着ていました。もしそれが本当なら、恐らく、バルテマイはイエスに呼ばれた時、もはや自分は盲人と呼ばれる必要はなくなったと信じた故、彼の上着を投げ捨てたのでした。もしそうであるなら、ここでも彼の信仰ははっきりと表されていました。

更に、バルテマイが上着を投げ捨てた時、彼は「すぐに立ち上がって」と聖書に書いてありますが、これは、彼に何かいいことが起こるといふ、彼の期待と興奮の表れです。いやしの信仰がある人は、神に自分をいやしてもらおうよう祈る時に、そのいやしを受けることを期待しているので興奮しています。

イエスはもう一度、バルテマイがイエスの前に立った時に、彼の信仰を試したこ

## 弟子をつくる指導者

とに注目してください。イエスはバルテマイに何を望むかを尋ね、バルテマイの応答から、彼はイエスが彼の盲目をいやすことができ、またしてくださることを信じていたことは明らかです。

最後に、イエスはバルテマイに、彼の信仰によって彼は救われた、と告げました。もしバルテマイが信仰によっていやされたのなら、神は「かたよったことをなさない」為、他の誰でもいやされることができます。

### 更なる学びのために (For Further Study)

以下に、四つの福音書に記録されている、イエスが施したいやしについての二十一の事例を挙げています。イエスは勿論、二十一人以上の人を实际いやしましたが、これらの事例の全てを通して、それぞれの病人についての詳細とどのようにしてその人がいやされたかがわかります。

以下、私は大まかに二つに区分しました。一つは信仰によっていやされた人たちで、もう一つはいやしの賜物によっていやされた人たちです。人々が信仰によっていやされた沢山の事例において、私はイエスが彼らに、いやされたことを言わないように注意していることに気づきました。これは、イエスや福音を宣伝するために、その病気の人々がいやされた訳ではなかったため、これらが「いやしの賜物」ではないことを更に表しています。

### いやしの原因として信仰や信じることが言及されている事例 (Cases Where Faith or Believing is Mentioned as the Cause of Healing:)

1. 百人隊長のしもべ (または「子」) — マタイ 8:5-13; ルカ 7:2-10 「あなたの信じたとおりになるように。」
2. 床に寝かせたままで屋根からつり降ろされた中風の人 — マタイ 9:2-8; マルコ 2:3-11; ルカ 5:18-26 「彼らの信仰を見て、...『...家に帰りなさい。』と言われた」
3. ヤイロの娘 — マタイ 9:18-26; マルコ 5:22-43; ルカ 8:41-56 「『恐れないうで、ただ信じていなさい。』...イエスは、このことをだれにも知らせないようにと、きびしくお命じになり...」



4. 長血の女—マタイ 9:20-22; マルコ 5:25-34; ルカ 8:43-48 「あなたの信仰があなたを直したのです。」

5. ふたりの盲人—マタイ 9:27-31 「あなたがたの信仰のとおりになれ。...決してだれにも知られないように気をつけなさい。」

6. バルテマイという盲人—マルコ 10:46-52; ルカ 18:35-43 「あなたの信仰があなたを救ったのです。」

7. 十人のらい病人—ルカ 17:12-19 「あなたの信仰が、あなたを直したのです。」

8. 王室の役人の息子—ヨハネ 4:46-53 「その人はイエスが言われたことばを信じて...」

次の四つの事例では、病人の信仰については特に触れられていませんが、その人の言葉や行動がその人の信仰を表しています。例えば、ふたりの盲人（下記の10番）は、バルテマイという盲人がやったのと全く同じように、イエスが通りがかられた時叫びました。次に挙げる四つの事例に出て来る全ての病人は、イエスを求め、それは彼らの信仰をはっきりと表しています。四つの事例の内三つでは、イエスがいやした病人に、イエスは何が起きたかについて誰にも言わないようにと伝え、これらが「いやしの賜物」の事例ではないことを示唆しています。

9. 神の御旨を知らなかったらい病人—マタイ 8:2-4; マルコ 1:40-45; ルカ 5:12-14 「気をつけて、だれにも話さないようにしなさい。」

10. ふたりの盲人（恐らく一人はバルテマイであったと思われる）—マタイ 20:30-34 [彼らは]叫んで言った。「主よ。私たちがあわれんでください。」

11. 耳が聞こえず、口のきけない人—マルコ 7:32-36 「イエスは、このことをだれにも言ってはならない、と命じられた」

12. 盲人—マルコ 8:22-26 「村には行って行かないように。」

信仰によっていやされた人たちの最後の二つの事例は、実際病がいやされたというより、悪霊がその人たちから出て行ったものです。しかし、イエスは彼らの信仰が悪霊の追放をもたらしたことを認めました。

## 弟子をつくる指導者

13. おしの霊につかれた息子—マタイ 17:14-18; マルコ 9:17-27; ルカ 9:38-42  
「...イエスは言われた。『...信じる者には、どんなことでもできるのです。』するとすぐに、その子の父は叫んで言った。『信じます。不信仰な私をお助けください。』」

14. スロ・フェニキヤ生まれの女の娘—マタイ 15:22-28; マルコ 7:25-30 「ああ、あなたの信仰はりっぱです。その願いどおりになるように。」

### 「いやしの賜物」を通して人々がいやされた事例 (Cases of People Healed Through “Gifts of Healings”):

これら最後の七つの事例は、恐らくいやしの賜物によっていやされた人たちについてです。しかし、最初の三つの事例では、病人がいやされる前に、イエスが与えた具体的な命令への従順が求められました。また、これらの事例のどれも、病人は自分からイエスを求めることはしていませんでした。

15. 手のなえた人—マタイ 12:9-13; マルコ 3:1-5; ルカ 6:6-10 「立って、真中に出なさい。...手を伸ばしなさい。」

16. ベテスダの池の人—ヨハネ 5:2-9 「起きて、床を取り上げて歩きなさい。」

17. 生まれつき盲目の人—ヨハネ 9:1-38 「行って、シロアムの池で洗いなさい。」

18. ペテロのしゅうとめ—マタイ 8:14-15; マルコ 1:30-31; ルカ 4:38-39

19. 十八年も腰が曲がって、全然伸ばすことのできない女—ルカ 13:11-16

20. 水腫をいやされた人—ルカ 14:2-4

21. 大祭司のしもべ—ルカ 22:50-51

上記の二十一全ての事例で、大人が他の大人の信仰だけでいやされたことは一度もありません。誰かが他の人の信仰によっていやされた事例は、子供がその親の信仰によっていやされたというものだけです (事例1, 3, 8, 13, 14参照)。

唯一例外の可能性のあるものは、事例一と二の、百人隊長のしもべと、床に寝かせたままで屋根から降り降ろされた中風の人でしょう。百人隊長のしもべの事例は、しもべと訳されたギリシャ語は *pais* で、マタイ十七章十八節に「その子はその時から直った」とあるように、子とも訳される言葉です (一部強調)。

## イエスのいやしのミニストーリー

もし実際に百人隊長のしもべであり、彼の子ではなかったとしたら、そのしもべはきっと少年であったに違いありません。従って、親が子のために信仰を用いたように、百人隊長は法的保護者としてその少年に対して責任がありました。

床に寝かせたままで屋根からつり降ろされた中風の人々の事例では、その中風の人自身も信仰を持っていたに違いありません。そうでなければ、彼は友人たちに決して屋根から自分をつり降ろさせなかったでしょう。このように、大人はいやしの必要な他の大人と一緒に同意して祈ることができますが、病人の不信仰は、他の大人の信仰がもたらす影響を無効にしていまいかねません。

しかし、私たち自身の子供たちは、私たちの信仰によって、ある程度の年齢まではいやされるのが可能です。しかし、子供たちもいずれは、彼ら自身の信仰に基づいて神からいやしをいただくことを、神が彼らに要求する年齢に到達します。

是非あなた自身の聖書から、上記の事例を一つ一つ吟味して、私たちの主はいやしをお与えになるという信仰を強めていただきたいと思います。

### いやしの油注ぎ (The Healing Anointing)

最後に、イエスはその地上での働きの中に、触知できるいやしの力が与えられていた、ということを知ることは重要です。つまり、イエスはご自分の体からいやしの力が出て行くのを感じることもできたし、またある事例では、いやされた病人が、その力が自分の体に入るのを感じることもできました。例えば、ルカの六章十九節では、「群衆のだれもが何とかしてイエスにさわろうとしていた。大きな力がイエスから出て、すべての人をいやしたからである」と書いてあります。

明らかに、そのいやしの力は、イエスの着物にさえ浸透していたようで、病人が信仰を持ってイエスの着物の端に触ると、いやしの力はその人の体に流れていきました。マルコ6章56節にはこう書いてあります。

イエスがはいって行かれると、村でも町でも部落でも、人々は病人たちを広場に寝かせ、そして、せめて、イエスの着物の端にでもさわらせてくださるようにと願った。そして、さわった人々はみな、

## 弟子をつくる指導者

いやされた。

長血をわずらっている女（マルコ 5:25-34参照）は、信仰によっていやされるということを期待して、イエスの着物のふさに触っただけでいやされました。

イエスだけが、触知できるいやしの力を与えられただけでなく、使徒パウロにも、その働きの晩年に同じ力が与えられました。

神はパウロの手によって驚くべき奇蹟を行なわれた。パウロの身に着けている手ぬぐいや前掛けをはずして病人に当てると、その病気は去り、悪霊は出て行った（使徒 19:11-12）。

触知できるいやしの力はパウロが着ていたどの服にも浸透し、遂に布はいやしの方の良い導体であることを示すようになりました。

神はイエスやパウロの時代から何も変わっていませんので、神が神の遣いの誰かにそのようないやしの力を今日あたえても驚くべきではありません。しかし、これらの賜物は、まだ未熟な信仰者には与えられず、忠実で、自分勝手な動機がないことをある一定の期間を超えて証明した者だけに与えられます。

## 第十七章

### 聖霊の賜物 (The Gifts of the Spirit)

聖書には、男性も女性も、突然聖霊によって超自然的な能力が与えられたという例で溢れています。新約では、これらの超自然的な能力を、「御霊の賜物」と呼んでいます。これらは、自分で獲得できないものなので、賜物と呼ばれています。しかし、神が信頼できる人々を起こしていることを忘れてはなりません。イエスは、「小さい事に忠実な人は、大きい事にも忠実であり、小さい事に不忠実な人は、大きい事にも不忠実です」（ルカ16:10）と言いました。つまり、御霊の賜物は、どちらかと言えば、神の御前にその忠実が認められた人たちに与えられるもののようです。聖霊に完全に聖別され、服従することは、神はどちらかと言うとそのような人たちをより超自然的に用いるので、重要なことです。一方で、神はかつて預言するためにろばを用いたことがあることを考えると、神は神の御心のままに誰をも用いることができます。もし神が、私たちを用いるのに完全になるまで待っていなくてはならなかったら、神は私たちの誰をも用いることはできなかったでしょう！

新約聖書の第一コリント十二章に、御霊の賜物の記述があり、全部で九つあります。

ある人には御霊によって知恵のことばが与えられ、ほかの人には同じ御霊にかなう知識のことばが与えられ、またある人には同じ御霊による信仰が与えられ、ある人には同一の御霊によって、いやし

## 弟子をつくる指導者

の賜物が与えられ、ある人には奇蹟を行なう力、ある人には預言、ある人には霊を見分ける力、ある人には異言、ある人には異言を解き明かす力が与えられています（第一コリント 12:8-10）。

各賜物の定義の仕方をすることは、霊的な賜物において神に用いられるために不可欠なものではありません。旧約聖書に出て来る預言者、祭司、王、また新約聖書の初代教会の聖職者たちは、御霊の賜物を区分したり、定義する仕方は知りませんでした。その賜物を用いてはたらいていました。とは言っても、新約聖書では私たちの為に御霊の賜物が区分されているため、そこには何か、神が私たちに理解して欲しいことがあるに違いありません。確かにパウロは、「御霊の賜物についてですが、私はあなたがたに、ぜひ次のことを知っていただきたいのです」（第一コリント 12:1）と書きました。

### 九つに区分された賜物（The Nine Gifts Categorized）

御霊の九つの賜物は、現代では更に三つに区分されています。すなわち、(1) 言葉の賜物、つまり、異言、異言を解き明かす力、預言、(2) 啓示の賜物、つまり、知恵のことば、知識のことば、霊を見分ける力、そして(3) 力の賜物、つまり、奇蹟を行なう力、特別な信仰、そしていやしの賜物です。これらの内の三つは何かを言ひ、三つは何かを現わし、三つは何かをする賜物です。これら全ての賜物は、異言と異言の解き明かしを除いて、旧約でも現れていました。異言と異言の解き明かしは、新約特有のものであります。

新約には、「力の賜物」の正しい使い方についての教えはなく、また「啓示の賜物」の正しい使い方についての教えも、非常に少ないです。しかし、「言葉の賜物」の正しい使い方について、かなり多くの教えがパウロによってなされ、その理由には恐らく二面あると思われれます。

第一に、言葉の賜物は教会の集まりで、一番良く現れるものである一方、啓示の賜物はそれ程でもなく、力の賜物が現れることは一番少ないです。従って私たちは、教会の集まりで最もよく現れがちな賜物について、より多くの教えを受ける必要があ

## 聖霊の賜物

るでしょう。

第二に、言葉の賜物は、人間が関わる度合が一番大きいものであるため、最も誤って使われやすい賜物でもあります。いやしの賜物を損ねるよりも、預言に加えたり、損ねたりすることの方がもっと容易にできてしまいます。

### 御霊のみこころのままに (As the Spirit Wills)

御霊の賜物は、御霊のみこころのままに与えられるもので、人の望むようにではないことに気づくことは重要です。聖書ではこのことをかなり明白に表しています。

しかし、同一の御霊がこれらすべてのことをなさるのであって、みこころのままに、おのおのにそれぞれの賜物を分け与えてくださるのです (第一コリント 12:11、一部強調)。

そのうえ神も、しるしと不思議とさまさまの力あるわざにより、また、みこころに従って聖霊が分け与えてくださる賜物によってあかしされました (ヘブル 2:4、一部強調)。

ある人は、ある特定の賜物で頻繁に用いられるかもしれませんが、誰もどの賜物をも所有はしていません。あなたがかつて奇跡をはたらかせるのに用いられたからと言って、それは、あなたがいつでも思いのままに奇跡を起こせるということを表している訳ではありません。また、あなたが奇跡をはたらかせるのに再び用いられるという保証はどこにもありません。

私たちは、これから各賜物の聖書にある事例をいくつか簡単に見て行きます。しかし、神はその恵みと力を無限大の方法で表すことができるお方であり、従って全ての場合にどのようにしてそれぞれの賜物がはたらくのかについて、正確に定義することは不可能であるということ覚えていてください。更に、聖書には九つの御霊の賜物についての定義は書いていません。あるのは、賜物の名前だけです。それ故、私たちは聖書から事例を見て、それが賜物のどれに当てはまるのか決めることを試み、最終的にそれらの明らかな違いによってでしか、賜物を定義できません。余りにもたく

## 弟子をつくる指導者

さんの方法で聖霊は超自然的な賜物を通してご自身を表すことができる為に、私たちの定義に固執しすぎるのは余り賢いとは言えません。いくつかの賜物は、実際には複数の賜物が合わさったようなものでしょう。これらのことについて、パウロはこう書いています。

さて、御霊の賜物にはいろいろの種類がありますが、御霊は同じ御霊です。奉仕にはいろいろの種類がありますが、主は同じ主です。働きにはいろいろの種類がありますが、神はすべての人の中ですべての働きをなさる同じ神です。しかし、みな益となるために、おのおのに御霊の現われが与えられているのです（第一コリント 12:4-7、一部強調）。

### 力の賜物 (The Power Gifts)

1) **いやしの賜物**—いやしの賜物は、当然のことながら、病人がいやされることに関係しています。この賜物はよく、突然与えられた、身体的に病んだ人々をいやす超自然的な力と定義され、それを疑う理由はどこにもありません。前の章で、イエスがベテスダの池で足なえの人をいやしたという、イエスを通して現れたいやしの賜物の一例を見てきました（ヨハネ 5:2-17参照）。

神は、偶像礼拝者であった、シリヤ人のらい病人、ナアマンをいやす為にエリシヤを用いました（第二列王記 5:1-14参照）。私たちは、ナアマンのいやしについて、ルカ四章二十七節のイエスのことばから学べるように、エリシヤはその時彼がいやしたいと思うらい病人をいやすことはできませんでした。エリシヤは突然超自然的に聖霊に促されて、ナアマンにヨルダン川へ行って七たび身を洗うように命じ、ナアマンが最終的に従ったので、彼はらい病がいやされました。

神は、美しの門と呼ばれる宮の門にいた生まれつき足のきかない男を、いやしの賜物を通していやす為にパウロを用いました（使徒 3:1-10）。この足なえの男がいやされただけでなく、この超自然的なしるしによって、多くの人々はペテロの口から福音を聞き、その日五千人程が教会に加えられました。いやしの賜物は、病人をいやす



## 聖霊の賜物

ことと、まだ救われていない者たちをキリストに近づけるという二つの目的を頻繁に果たしています。

ペテロがその日集まった人々に向かって話していた時、こう言いました。

イスラエル人たち。なぜこのことに驚いているのですか。なぜ、私たちが自分の力とか信仰深さとかによって彼を歩かせたかのよう  
に、私たちを見つめるのですか（使徒 3:12）。

神が、この足なえの男をいやすためにペテロを用いたのは、彼自身の持つ力によってでも、彼の偉大な聖さによってでもないことはわかっていました。この奇跡のたった二週間前に、ペテロはイエスを知らないときえ言って拒んでいたことを思い出してください。使徒の働き最初のページで、神がペテロをそれ程までに奇跡的に用いたという事実は、神がそのみこころのままに、私たちをも用いてくださるという自信で元気づけるはずで

ペテロが、この男がどのようにしていやされたかについて説明をしようとした時、彼はそれを「いやしの賜物」として区分できていたとは殆ど考えられません。ペテロが知っていたことは、彼とヨハネが足なえの人の側を通りかかった時、突然その人がいやされるという信仰で満たされたということでした。それ故、ペテロはその男にイエスの御名によって歩くよう命じ、その人の右手を取って立たせました。足なえの男は、「歩いたり、はねたりしながら、神を賛美」し始めました。ペテロはこのように説明しました。

そして、このイエスの御名が、その御名を信じる信仰のゆえに、あなたがたがいま見ており知っているこの人を強くしたのです。イエスによって与えられる信仰が、この人を皆さんの目の前で完全なからだにしたのです（使徒 3:16）。

足なえの人の手を取り、立たせて、その人が歩くことを期待するには特別な信仰が必要です！これが実現するには、この特定のいやしの賜物に合わせて、信仰の分与も必要とされていました。

## 弟子をつくる指導者

ある人たちは、この賜物という言葉が（英語では）複数形（"gifts" of healings）となっている理由は、様々な病をいやす様々な賜物がある為と提案しています。いやしの賜物によく用いられる人たちは時々、ある特定の病が、他の病よりもより頻繁にいやされることに気づかされます。例えば、伝道者ピリポは、特に中風や足なえの人々をいやすことができました（使徒 8:7参照）。他の例えでは、過去一世紀に渡る伝道者たちの場合でも、その人たちを通して最も頻繁に現れたいやしの賜物が何であったかに基づいて、その人たちが、視覚または聴覚障害を持つ人々、また心臓障害を持つ人々、と言った特定の病のいやしに用いられました。

**2) 信仰と奇跡を行う賜物**—信仰の賜物と、奇跡を行う賜物は非常に似ているように見えます。両方の賜物で、油注ぎを受けた人が、突然不可能なことに対する信仰を与えられるのです。二つの違いは、このようによく描写されます。すなわち、信仰の賜物で、油注ぎを受けた人は、自分自身が奇跡を受ける信仰があたえられますが、奇跡を行う賜物では、その人は他の人のために奇跡を起す信仰が与えられます。

信仰の賜物は時として、普通の信仰を超えた、突然の信仰の分与なので、「特別な信仰」として言及されます。普通の信仰は、神の約束を聞くことから来ますが、特別な信仰は、聖霊による突然の分与によって来ます。この特別な信仰の賜物を体験した人たちによると、不可能と思うことが突然可能になり、事実、疑うことが不可能となるということです。同じことが、奇跡を行う賜物でも言えるでしょう。

ダニエルの三人の友人、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの話は、どのようにして「特別な信仰」が疑うことを不可能にしたかの、とても良い事例です。彼らが王の造った像を拝まないことで、火の燃える炉の中に投げ込まれた時、彼らは特別な信仰の賜物を皆受けました。火の燃える炉の中に投げ込まれても生き延びるには、普通の信仰以上のもの必要であったでしょう！この三人の若者たちが王の前に示した信仰を見てみましょう。

シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴはネブカデネザル王に言った。

「私たちはこのことについて、あなたにお答えする必要はありません

## 聖霊の賜物

ん。もし、そうならば[あなたが私たちを火の燃える炉に投げ込めば]、私たちの仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。王よ。神は私たちをあなたの手から救い出します。しかし、もしそうでなくても[あなたが私たちを火の燃える炉に投げ込まなくても]、王よ、ご承知ください。私たちはあなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拝むこともしません。」（ダニエル 3:16-18、一部強調）。

賜物は、彼らが炉に投げ込まれる前から既にはたらいていたことに注目してください。彼らは、神が彼らを救い出そうとしておられると思って、心で疑いませんでした。

悪王アハブの時代、三年半続く飢饉の間、鳥がエリヤを日々養っていた時、エリヤには特別な信仰の賜物がはたらいていました（第一列王記 17:1-6参照）。鳥が自分に朝食と夕食を持って来ることを神に信頼することには、普通の信仰以上のものが必要です。神はみことばのどこにも、鳥が私たちに日々食物を持って来るとは約束しませんでした。私たちは私たちの必要が神によって満たされるという普通の信仰を用いることはできます。なぜなら、これこそが約束だからです（マタイ 6:25-34参照）。

奇跡を行うことは、モーセの働きの中でとても頻繁に見られました。モーセが紅海を分けたり、様々な災害がエジプトに来た時、彼にはその賜物がはたらいていました（出エジプト 14:13-31参照）。

イエスが少しの魚とパンを増やして、五千人に食べさせた時、イエスには奇跡を行う賜物がはたらいていました（マタイ 14:15-21参照）。

パウロがキプロスの島でのパウロの働きを邪魔していた為に、パウロは魔術師エルマを一時的に盲にさせましたが、これも、奇跡を行う一つの例と言えるでしょう（使徒 13:4-12参照）。

## 啓示の賜物（The Revelation Gifts）

- 1) 知識のことばと知恵のことば—知識のことばは、過去または現在の特定の情

## 弟子をつくる指導者

報の、超自然的な突然の分与としてよく定義されます。神は、全ての知識をお持ちですが、時として、その知識の小さな部分を分与します。それで恐らく英語では、知識のことば (*a word of knowledge*) と呼ばれているのでしょう。一つの言葉とは、文の中の一部ですから、知識のことばとは、神の知識の一部と言えるでしょう。

知恵のことばは、知識のことばととても似ていますが、将来起こることの、超自然的な突然の分与としてよく定義されます。知恵という概念は、普通何か将来のことに関わることが多いです。もう一度言いますが、これらの定義はあくまでも推測です。

ここで、旧約聖書から知識のことばの事例を見て行きましょう。エリシャがシリヤ人のらい病人、ナアマンをきよめた後、ナアマンはそのいやされたことの感謝から、多額なお金をエリシャに用意しました。ナアマンのいやしが、神の恵みによって与えられたものというよりはむしろ、購入されたものであると、誰も考えないように、エリシャはその贈り物を拒みました。しかし、エリシャに仕えるゲハジは、自分が裕福になれる機会と見て、密かにナアマンが支払うつもりであった金額の一部を受け取りました。ゲハジは、騙して得た銀を隠してから、エリシャの前に姿を現しました。それからこう続きます。

エリシャは彼に言った。「ゲハジ。あなたはどこへ行って来たのか。」

彼は答えた。「しもべはどこへも行きませんでした。」 エリシャ

は彼に言った。「あの人があなたを迎えに戦車から降りて来たとき、

私の心もあなたといっしょに行っていたではないか (第二列王記

5:25後半-26前半)。

神は、ゲハジの不純な行ないについて良くご存知でしたので、そのことについて超自然的にエリシャに示しました。しかし、この話から、エリシャはこの知識のことばを「所有」していなかったことは明らかです。つまり、彼はいつも全ての人のことについて知っていた訳ではありません。もしそうであったのなら、ゲハジは彼の罪を隠せるとは思わなかったでしょう。エリシャは、神が時々彼にそれらのことを示した時だけ、事を超自然的に知りました。御霊のみこころのままに、賜物は働きました。

## 聖霊の賜物

イエスが、夫が五人あったサマリヤの女と井戸で話した時、知識のことばがはたらいていました（ヨハネ 4:17-18参照）。

アナニヤとサツピラが、彼らが最近売った土地で得た収入の全額を教会に与えたと、その会衆に嘘をついていたことをペテロが超自然的に知った時、ペテロはこの賜物にあって用いられていました（使徒 5:1-11参照）。

知恵のことばの賜物については、私たちはその賜物が頻繁に現れるのを、旧約時代の預言者たちの全てを通して見ます。彼らが将来起きることを予見する時はいつでも、知恵のことばがはたらいていました。イエスも、この賜物をかなり頻繁に受けました。イエスは、エルサレムの滅亡について、ご自分の十字架の死について、またご自分の再臨の前に起こる出来事について予見しました（ルカ 17:22-36, 21:6-28参照）。

使徒ヨハネは、患難期の裁きが彼に示された時、この賜物によって用いられていました。使徒ヨハネは私たちの為に、これらのことについて黙示録に記録しました。

**2) 霊を見分ける賜物**—霊を見分ける賜物は、見る突然の超自然的な能力、さもなければ、霊的な領域で起きていることを見分ける同能力としてよく定義されます。

信者の目や思いを通して見る幻は、霊を見分けるものとして分類されることができません。この賜物は、パウロが何度か体験したように、信者に天使、悪霊、またイエスご自身を見せるかもしれません（使徒 18:9-10; 22:17-21; 23:11参照）。

エリシャとその召使はシリア軍に追いかけられた時、彼らはドタンの町で包囲されたのに気づきました。その時、エリシャの召使が城壁の向こうの外に大軍が集まっているのを見て、かなり心配になりました。

すると彼[エリシャ]は、「恐れるな。私たちとともにいる者は、彼らとともにいる者よりも多いのだから。」と言った。そして、エリシャは祈って主に願った。「どうぞ、彼の目を開いて、見えるようにしてください。」主がその若い者の目を開かれたので、彼が見ると、なんと、火の馬と戦車がエリシャを取り巻いて山に満ちていた。（第二列王記 6:16-17）。

## 弟子をつくる指導者

あなたは、天使が霊の馬や霊の戦車に乗るのを知っていましたか。天国でいつか見るかもしれませんが、エリシャの召使は地上においてそれらを見る能力が与えられました。

この賜物を通して、信者は人を苦しめる悪霊を見分け、どんな霊か識別する能力を持ちます。

この賜物は、霊的な領域を見るだけでなく、霊的な領域の中のあらゆる種類のものを見分けることも含まれます。例えば、それは霊的領域から何か、神ご自身の声のようなものを聞くことに関係するかもしれません。

最後に、この賜物は、ある人たちが考えるような「見分ける賜物」ではありません。この賜物を持っていると言う人たちは、時々他人の動機を見分けることができると思っていますが、そのような彼らの賜物は、「他人への批判と裁きを与える賜物」と言う方が、より正しいと言えるかもしれません。真理としては、あなたは恐らくあなたが救われる前からこの「賜物」を持っていて、今救われたところで、神はあなたをそれから永遠に開放したいのです！

### 言葉の賜物 (The Utterance Gifts)

**1) 預言の賜物**—預言の賜物は、話し手のわかる言語で神の靈感によって突然超自然的に話す能力です。これはいつも、「主は言われます」で始まることができます。

この賜物は、説教したり、教えたりすることではありません。靈感に励まされた説教や教えは、御霊によって油注がれている為、確かに預言の要素が含まれますが、かなり厳密に言うと、これらは預言ではありません。多くの場合、油注がれた説教者や教師は、その人は言うつもりはありませんが、突然の靈感によって何か言い、それは預言的と考えられたかもしれませんが、実際は預言ではありません。

預言の賜物はそれ自身、徳を高め、勧めをなし、慰めを与える為にあります。

ところが預言する者は、徳を高め、勧めをなし、慰めを与えるため

に、人に向かって話します (第一コリント 14:3)。

つまり、預言の賜物自身には、啓示は含まれていません。つまりそれは、知恵の

## 聖霊の賜物

ことばや知識のことばがするように、過去、現在、または未来について何か示すものではありません。しかし、以前にも書きました通り、御霊の賜物は、互いに組み合わせあって機能することもあるので、知恵のことばや知識のことばが、預言によって告げられることもあります。

私たちは、将来起こることについて言う集会の中で、誰かが預言するのを聞く時、私たちは単に預言だけを聞いたのではなく、預言の賜物を通して告げられた知恵のことばを聞いたのです。単純な預言の賜物は、まるで誰かが、「主にあって、強くまた雄々しくありなさい」とか、「私はあなたを決して見捨てない」と言った、聖書の励ましの言葉を読んでいるかのように聞こえるでしょう。

ある人たちは、新約の預言は、「否定的」な内容は決して入らないと言い、そうでなければ恐らく、「徳を高め、勧めをなし、慰めを与える」というものにならないであろうと、考えています。しかし、それは正しくありません。神が神の民に言うかもしれないことを制限する為に、民が叱責を必要としているのに、彼らが「肯定的」と考えることだけを神に言わせるというのは、神よりも自分自身を高めることとなります。叱責は、当然のことながら、徳を高めることと勧めをなすことの両方に含まれます。ヨハネの黙示録に記録されている、アジアの七つの教会に宛てた主からのメッセージには、確かに叱責の要素を含んでいます。私たちはこれらを切り捨てるべきでしょうか。私はそうは思いません。

**2) 異言と異言の解き明かしの賜物**—異言の賜物は、話し手の知らない言語で突然超自然的に話す能力です。この賜物は通常、異言の解き明かしの賜物を伴い、それは、知らない言葉で言われたことを突然超自然的に解釈する能力です。

この賜物は、異言の解き明かしと呼ばれ、異言の通訳ではありません。ですから、私たちは異言のメッセージ一語一語を通訳されることを期待すべきではありません。それ故に、短い「異言によるメッセージ」に対して、長めの解き明かしであったり、その逆であったりすることはあり得ます。

異言の解き明かしの賜物はまた、それ自体に啓示は含まれず、通常徳を高め、勧

## 弟子をつくる指導者

めをなし、慰めを与える為のものなので、預言とも非常に似ています。第一コリント十四章五節によると、私たちは異言と異言の解き明かしを足すと預言になると言っても過言ではないかもしれません。

私はあなたがたがみな異言を話すことを望んでいますが、それよりも、あなたがたが預言することを望みます。もし異言を話す者がその解き明かしをして教会の徳を高めるのでないなら、異言を語る者よりも、預言する者のほうがまさっています。

前にも述べたように、力の賜物の使い方について、聖書には何の導きもなく、啓示の賜物の使い方についても殆どありませんが、言葉の賜物の使い方については、かなり沢山の導きが与えられています。コリントの教会で、言葉の賜物の使い方について、少々混乱があった為に、パウロは第一コリントの手紙の十四章殆ど全てを、この内容について充てました。

聖霊のバプテスマについての章で既に学んだように、聖霊のバプテスマを受けた信者はそれぞれ、思いのままに好きな時に異言で祈ることができたので、ここでの一番の問題は、異言で語ることの正しい使い方についてでした。コリントの人々は、礼拝中異言で沢山語っていましたが、その多くは秩序に欠けていました。

### 他言語（異言）の異なる用途（The Different Uses of Other Tongues）

未知の言語（訳者注：日本語では総じて「異言」と訳されている）を公に使うことと、個人で使うことには違いがあることを私たちが理解することは、最も重要なことです。聖霊のバプテスマを受けた全ての信者はいつでも異言を語ることができますが、だからと言って、神が様々な種類の言語（異言）を公に語る賜物に神がその信者を用いるとは限りません。異言を語る一番の目的は、各信者が個人的な神との時間の中で用いる為です。しかし、コリントの人々は一緒に集まり、異言を解き明かしなしで話していたので、当然のことながら、誰もそれによって益を受けず、徳も高められませんでした（第一コリント 14:6-12, 16-19, 23, 26-28参照）。

異言を公で使うことと、個人で使うことを区別する一つの方法は、個人では異言



## 聖霊の賜物

で祈り、公では他の言語（異言）で語る、と区分することです。パウロはコリント人への最初の手紙の第14章で、その両方の使い方について触れています。違いは何でしょうか。

私たちが異言で祈る時、私たちの霊は神に向かって祈っています（第一コリント 14:2, 14参照）。しかし、誰かが突然様々な種類の言語（異言）の賜物によって油注ぎを受ける時は、会衆に向かって神から与えられたメッセージであり（第一コリント 14:5参照）、解き明かしが与えられる時に理解されるものです。

聖書によると、私たちは私たちの思いのままに異言で祈ることができます（第一コリント 14:15参照）が、様々な種類の言語（異言）の賜物は、御霊のみこころのままによってのみ、はたらくのです（第一コリント 12:11参照）。

様々な種類の言語（異言）の賜物は、通常その解き明かしの賜物を伴います。しかし、個人で異言で祈る時は解き明かしはありません。パウロは、異言で祈る時、知性は実を結ばないと言いました（第一コリント 14:14参照）。

個人で異言で祈る時、徳が高められるのはその人だけです（第一コリント 14:4参照）が、様々な種類の言語（異言）の賜物とその解き明かしの賜物と一緒に現れる時、教会全体の徳が高められます（第一コリント 14:4後半-5参照）。

日々の主との交わりの中で、全ての信者は毎日異言で祈るべきです。異言での祈りにおける素晴らしいことの一つは、あなたの知性を使わないで済むことです。つまり、仕事中であったり、他のことをして頭を使っている最中でも、あなたは異言で祈ることができるのです。パウロはコリントの人々に、「私は、あなたがたのだれよりも多くの異言を話すことを神に感謝しています」（第一コリント 14:18、一部強調）と言いました。パウロは、コリントの教会全体よりも勝って、多くの時間を異言を語ることに費やしたに違いありません！

パウロはまた、異言で祈る時、私たちは時として、「主を祝福」（第一コリント 14:16-17）している、と記しています。三度私は、私の「祈りの言葉」をそこにいた他の人に理解されたという経験があります。三度とも、私は日本語で話していました。

## 弟子をつくる指導者

一回は、私は主に向かって日本語で、「あなたはとても素晴らしいです」と言い、別の時は、「ありがとうございます」と言い、もう一回は、「早く来なさい。早く来なさい。私は待っています」と言いました。驚きませんか。私は日本語を一言も学んだことがないにもかかわらず、少なくとも三度、私は日本語で、「主を祝福」したのです！

### 異言を話すことに関するパウロの教え (Paul's Instructions for Speaking in Tongues)

コリントの教会にパウロが教えたことはとても具体的なものでした。どんな集まりでも、公に異言で語ることが許された人数は二、三人に限られました。その人たちは一度にではなく、順番を待って話さなくてはなりませんでした(第一コリント 14:27 参照)。

必ずしもパウロは、「異言によるメッセージ」は三つまで、と意味したのではなく、どのような礼拝においても、三人以上は異言を語るべきではない、としました。異言の賜物に頻繁に用いられる人が三人以上いるのなら、その内の誰でも一人が、聖霊に委ねて、聖霊が教会に現わしたい異言のメッセージを与えることができると考える人たちもいます。そうでなければ、パウロの教えは、どのような集会の中でも現わされる可能性のある異言のメッセージの数を制限することで、実際には聖霊を制限してしまうことになってしまいます。もし聖霊が、集会では異言の賜物を三つ以上決して与えないということだったのなら、パウロにはそのような教えをする必要はなかったことになるでしょう。

異言の解き明かしについても全く同じことが言えるでしょう。集会で恐らく一人以上の方が聖霊に委ねて、「異言によるメッセージ」の解き明かしを与えることができると考えられています。そのような人たちは、異言の解き明かしの賜物に頻繁に用いられるので、「解き明かす者」(第一コリント 14:28参照)と見なされています。もしそうであるのなら、恐らくそれは、「ひとり解き明かしをしなさい」(第一コリント 14:27)とパウロが教えたことと同じことでしょう。恐らくパウロは、一人だけが全ての異言によるメッセージを解き明かすべきとは、意味していなかったでしょう。

## 聖霊の賜物

う。むしろ、同じメッセージの「競争的な解き明かし」に対して警告していました。もし解き明かす者の一人が、異言によるメッセージを解き明かしたのなら、他の解き明かす者は、例え自分の解き明かしの方がより良いものだと思っただとしても、その同じメッセージについては解き明かしをしてはなりませんでした。

一般的に、教会の集まりでは、すべてのことを適切に、秩序をもっておこなうべきです。言葉が同時に発せられ、混乱と更には競争がごちゃ混ぜになっているものにしてはなりません。更に信者は、以下でパウロが書いた通り、集まりの中にいるかもしれない未信者に対して、敏感でなくてはなりません。

ですから、もし教会全体が一か所に集まって、みな異言を話すとしたら、初心の者とか信者でない者とかがはいつて来たとき、彼らは、あなたがたを気遣いだと言わないでしょうか（第一コリント 14:23）。

それがまさに、コリントでの問題でした。皆が同時に異言で話し、多くの場合解き明かしがありませんでした。

### 啓示の賜物についてのある教え（Some Instruction Concerning Revelation Gifts）

パウロは、預言者を通して現れる「啓示の賜物」について教えを施しました。

預言する者も、ふたりか三人が話し、ほかの者はそれを吟味しなさい。もしも座席に着いている別の人に黙示が与えられたら、先の人には黙りなさい。あなたがたは、みながかわるがわる預言できるのであって、すべての人が学ぶことができ、すべての人が勧めを受けることができるのです。預言者たちの霊は預言者たちに服従するものなのです。それは、神が混乱の神ではなく、平和の神だからです（第一コリント 14:29-33）。

コリントの教会には、異言の解き明かしの賜物に頻繁に用いられた「解き明かす者」として知られる人たちがいたように、預言や啓示の賜物に頻繁に用いられた「預言者」として見なされる人たちがいました。これらの人たちは、旧約聖書に出て来る

## 弟子をつくる指導者

預言者たちや新約聖書のアガボ（使徒 11:28; 21:10参照）と同類の預言者ではなく、むしろ、彼らの働きは、その地域教会の御からだの中に限られていたのでしょう。

ある教会の集まりに、そのような預言者が三人以上いるかもしれませんが、パウロは、特に預言の働きに対して「ふたりか、多くても三人」という制限を与えました。これは、これまでと同様に、御霊が、ある集会において霊的な賜物を与えている時、一人以上の人々がそれらの賜物を受けよう身を委ねているかもしれないことを示唆しています。もしそうでないのなら、パウロの教えは、何人まで預言者は話せる、と制限することで、御霊が賜物を与えているにもかかわらず、御からだでそれらが一切用いられない、という結果をもたらしかねません。

もし三人以上の預言者がいるのなら、残り的人たちは、話すことは抑えられましたが、語られたことを吟味することで、用いられました。これはまた、御霊が言っていることを見分ける、彼らに与えられた力を示すことになり、また、他の預言者を通して現れたその同じ賜物に、彼ら自身も用いられるよう御霊に身を委ねていたことを暗示しているのかもしれませんが。そうでなければ、他の預言者たちは、預言や啓示が、（聖書のみことばといった）既に神が与えた啓示と合っているかを確認めるといった、成熟した信者なら誰でもできそうな方法で、大まかにしか判断することができなかったでしょう。

パウロは、これらの預言者たちは皆がかわるがわる預言でき（第一コリント 14:31参照）、「預言者たちの霊は預言者たちに服従するもの」（第一コリント 14:32）、つまり預言者は皆、会衆と分かち合うよう御霊からある預言や啓示を与えられた時でさえ、他の預言者の邪魔をしないように自分自身を制することができることを示唆しています。これは、御霊は集会にいる何人かの預言者に同時に賜物を与えるかもしれませんが、預言者は各々、その受けた啓示や預言を御からだと分かち合うべき時を制御できますし、またそうすべきであることを表しています。

これは、あらゆる信者を通して表されるかもしれない言葉の賜物についても言えることです。もしある人に異言によるメッセージ、もしくは預言が主から与えられて

## 聖霊の賜物

も、その人は集会の中で適切な時が来るまで待つことができます。自分の預言を与える為に、誰か他の人の預言や教えを邪魔することは間違いです。

パウロが、「みながかわるがわる預言できる」（第一コリント 14:31）と言った時、彼は預言を得た預言者について話していたことを覚えていてください。ある人たちは残念ながら、パウロの言葉を文脈から外して考え、全ての信者は御からだの全ての集まりで預言ができる、と言っています。預言の賜物は聖霊のみこころのままに与えられるのです。

今日、教会は聖霊の助け、力、臨在、そして賜物を、これまで以上に必要としています。パウロはコリントの信者たちに「御霊の賜物、特に預言することを熱心に求めなさい」（第一コリント 14:1）と導きました。これは、御霊の賜物の現れは、私たちの熱望の度合と関係していることを示唆しています。そうでなければ、パウロはそのような導きを与えなかったでしょう。弟子をつくる指導者は、神の栄光のために神に用いられたいと熱望しているので、確かに熱心に霊的な賜物を求め、また、同じことをするようにその人の弟子たちにも教えるでしょう。



## 第十八章

### 務めの賜物 (The Ministry Gifts)

しかし、私たちはひとりひとり、キリストの賜物の量りに従って恵みを与えられました。...こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とにたちし、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまでたちするためです（エペソ 4:7、11-13、一部強調）。

そして、神は教会の中で人々を次のように任命されました。すなわち、第一に使徒、次に預言者、次に教師、それから奇蹟を行なう者、それからいやしの賜物を持つ者、助ける者、治める者、異言を語る者などです（第一コリント 12:28、一部強調）。

務めの賜物とよく呼ばれていますが、それは、特定の信者たちが、使徒、預言者、伝道者、牧師、教師という職を務めることができるように与えられる呼びと様々な能力のことです。誰も自分で、それらの職の一つに入ることはできません。むしろ、これらの職につく人は、神によって呼ばれ、また賜物を与えられていなくてはなりません。

## 弟子をつくる指導者

五役者の内、一つ以上の職につくことは可能ですが、組み合わせは限られています。例えば、牧師と教師の職、または預言者と教師の職という組み合わせで、信者が召されるということはあるかもしれませんが。しかし、牧師と伝道者の職につくことは、牧師の職は地域の群れに仕える為に一つの場所に留まることを要求されているので、頻繁に旅に出なくてはならない伝道者の呼びを全うすることはできないという理由から、可能性が低いと言えるでしょう。

五役者の賜物は、その目的が異なる為に皆違いますが、五役者は皆、一つの大きな目的の為に教会に与えられています。それは、「聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせる」（エペソ 4:12）ためです<sup>60</sup>。全ての指導者の目標は、奉仕の働きのために、聖なる民（これは「聖徒たち」という言葉本来の意味です）を整えることです。しかし、それらの指導する立場の者たちが、奉仕の働きのために聖なる民を整えるのではなく、まるで教会の礼拝で座っている肉の民を楽しませることに召されているかのようには振る舞うことが、余りにも多いです。これらの職の一つに召されている人は全て、「聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせる」為に、自分がしてきたことを常に省みて評価すべきです。もし全ての指導者がそれをしたのなら、誤って「神にある務め」と考えられていた数多くの活動を止める人は多くいるのではないのでしょうか。

### 務めの賜物の中には初代教会の為だけのものがあるのか（Were Some Ministry Gifts Only for the Early Church?）

これらの務めの賜物は教会にどれ位の間与えられているのでしょうか。イエスは、ご自身の聖なる民が、奉仕の働きのために整えられるのに必要なだけ、つまり少なくともそれはキリストの再臨まで与えられるでしょう。教会には常に成長の必要な新しいクリスチャンがいて、残りの私たちもいつも霊的に成熟する必要があります。

残念なことにある人たちは、まるで神がご自身のご計画を変えてしまったかのようになり、今日たった二種類の指導者、すなわち牧師と伝道者しか存在しないと結論付け

---

<sup>60</sup> 60 これは、「イエス・キリストの弟子をつくるため」の単なる別の言い方である。



## 務めの賜物

てしまいました。勿論間違いで、私たちは、初代教会と同様に、まだ使徒も、預言者も、教師も必要としています。世界中の多くの教会で、これらの賜物の例を見ない理由は、単にイエスがはそれらの賜物を、ご自分の教会に与えるのであって、偽の、聖くない、誤った福音の教会にではないからです。偽教会では、勤めの賜物のいくつか（大抵は牧師と恐らく少々の伝道者）の役割を果たそうとを貧弱な試みをする人たちしか見つけられず、イエスがご自分の教会に与える、神の召しを受け、油注がれた務めの賜物とは、似ても似つかないものです。それらは、宣べ伝える福音自体が聖さをもたらすものではなく、人々に赦されたと騙して思い込ませるに過ぎないものである為に、聖なる民を整えて奉仕の働きをさせることは、全くと言ってしていません。そこに集まる人たちにも、奉仕の働きのために整えられたいという願いは一切ありません。彼らは自分を捨て、自分の十字架を負うつもりは全くありません。

### どうしたら自分が召されているとわかるのか (How do you Know if You are Called?)

どうしたら、教会の職の一つに自分には呼びがあるということをわかることができるのでしょうか。まず第一に、一番大切なことは、その人は神から召されていることを感じます。その人は、自分にある特定の任務を果たす重荷が与えられていることに気づきます。これは単に、満たされ得る必要がわかる以上のことです。むしろ、それはその人を、ある特定のミニストリーに入らずにはいられない気持ちにさせる、神の与えた内なる飢え渇きです。もしその人が本当に神からの呼びがあるのなら、その呼びに応え始めるまで、決して満足できません。これは、ある人や複数の人たちから成る委員会から指名を受けるものではありません。

第二に、真に召されている人は、神から与えられる任務を果たせるよう、自分が神によって整えられていることに気づきます。五つの職はそれぞれ、その人が神に召された仕事をさせる超自然的な油注ぎが伴います。呼びと共に、油注ぎも来るのです。もし油注ぎがないのなら、呼びもないのです。人はある特定の働きの為に仕えることを熱望し、教育を受け、その働きの為の準備をするために聖書学校に四年間通うかもしれませんが、神からの油注ぎがなければ、真の成功はあり得ません。

## 弟子をつくる指導者

第三に、その人は、与えられた特定の賜物を使う何かしらの機会を神が与えてくださっていることに気づきます。このようにして、その人は自分の忠実を表すことができ、遂には、更に大きな機会や責任、また賜物を任せられるでしょう。

神からの内なる衝動や、務めの賜物の一つに呼びを感じていなかったり、もしくは、神からの任務を果たす為に、自分に何か特別な油注ぎがあるかわからなかったり、また、自分の賜物と思っているものを用いる機会が全く与えられていないのならば、その人は神が実際には召していないことをしようと、試みるべきではありません。むしろ、その人は地域教会の御からだの中で、その人の近所で、またその人の職場で祝福となる働きをすべきです。例えその人は「五役者」の働きに呼びがなくても、神が与えた賜物を使って仕えることに召されており、その人は自分の忠実を表すための努力をすべきです。

聖書は五つの務めの賜物について触れていますが、これは、ある特定の職についている全ての人が、同じような働きをするという意味ではありません。パウロは、「奉仕にはいろいろの種類」がある（第一コリント 12:5）と書き、同じ職につく指導者たちの間で違いがあることを表しました。更に、これらの職につく人たちの上に留まる油注ぎの程度にも差があるようで、私たちはそれぞれの職を油注ぎの程度によって更に区分できます。例えば教師の中でも、あるやり方に、他よりも油注ぎのあるように見える教師がいます。他の務めの賜物についても同様です。個人的に私は、どの働きにおいても、ある一定の期間その人が忠実を証明したり、神により深く聖別されることで、その人の働きに油注ぎを増し加えることができると信じています。

### 使徒の職について (A Closer Look at the Office of Apostle)

使徒と訳されているギリシャ語は*apostolos*で、その言葉は、「送られる者」を意味します。新約に出て来る真の使徒は、教会を建てるためにある場所から次の場所へ神に遣わされた信者です。その人は、神の「建物」の霊的な基礎を敷き、それは何となく、「ゼネコン」に例えられます。使徒パウロ自身もこのように書きました。

私たちは神の協力者であり、あなたがたは神の畑、神の建物です。

## 務めの賜物

与えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台を据えました。そして、ほかの人がその上に家を建てています。しかし、どのように建てるかについてはそれぞれが注意しなければなりません（第一コリント 3:9-10前半、一部強調）。

「建築家」またはゼネコンは、建設工程全体を監督します。つまり、完成品の幻を持っています。その人は、大工やレンガ職人のような専門家ではありません。大工やレンガ職人の仕事をできるかもしれませんが、恐らくその仕事に携わる人たち程上手ではないでしょう。同様に、使徒は伝道者や牧師の働きをする能力はありますが、教会を起ち上げる限定された間だけです。（使徒パウロはよく、一つの場所に六カ月から三年間留まりました。）

使徒は、教会を起ち上げることに、またそれらの教会が神の道から反れないよう監督することに一番長けています。使徒は、その人が植えたそれぞれの群れを牧するための長老、牧師、監督を立てる責任があります（使徒 14:21-23; テトス 1:5参照）。

### 本物と偽物の使徒 (True and False Apostles)

今日の指導者の中には、教会を治める権威が欲しいが故に、彼らに使徒の呼びがあると焦って宣言する人がいるようですが、殆どの場合、それは大きな問題です。そのような人たちはまだ教会を植えたことがない（もしくは、たった一つか二つしか植えていない）状態で、聖書的な使徒の賜物も油注ぎもない為に、彼らは、教会に対して自分たちが権威を振るうことができるような騙されやすい牧師を探さなくてはなりません。もしあなたが牧師であるなら、このような自分を高め、権力に飢え渴いている偽の使徒に惑わされないよう、注意してください。彼らは大抵、羊の皮を着た狼です。彼らはよくお金を求めます。聖書は偽使徒に対して警告しています（第二コリント 11:13; 黙示録 2:2参照）。もし彼らが使徒であることをあなたに言わなくてはならないのなら、恐らく彼らは本当の使徒ではないことを表しているでしょう。彼らの実がそのことについて語るべきだからです。

自分の教会を建てたり、教会を長年牧する為にそこに留まる牧師は、使徒ではあ

## 弟子をつくる指導者

りません。そのような牧師は、自分自身の教会を開拓したという事で、恐らく、「使徒的牧師」と呼ばれるかもしれません。それにしても、使徒は常に教会を植える働きをするので、使徒の職にあるとは言えません。

真に神が送った、油注がれた「宣教師」と今日よく私たちが呼ぶ人たちは、その主な呼びは教会を建て上げることであり、使徒の職にあると言えるでしょう。一方で、聖書学校を設立したり、牧師を訓練する働きにある宣教師は、使徒ではなく、教師と言えるでしょう。

真の使徒の働きは、超自然的なしるしと不思議が伴い、それがその人の教会設立を助ける道具となります。パウロはこう書きました。

たとい私は取るに足りない者であっても、私はあの大使徒たちにどのような点でも劣るところはありませんでした。使徒としてのしるしは、忍耐を尽くしてあなたがたの間でなされた、あの奇蹟と不思議と力あるわざです（第二コリント 12:11b-12）。

しるしと不思議がその人の働きに伴わないのなら、その人は使徒ではありません。当然のことながら、真の使徒は稀で、偽の、聖くない、偽の福音教会には存在しません。私は使徒たちを、世界の福音がまだ伝わっていない領域の場所で主に見かけます。

### 使徒の高い位 (The High Rank of the Apostle)

新約聖書で務めの賜物が列挙されている両方の箇所、使徒の職が一番最初に挙げられており、それは最上の呼びであることを示しています（エペソ 4:11; 第一コリント 12:28参照）。

誰も使徒からその人の働きは始まりません。後になって使徒の呼びを受けるかもしれませんが、その職からは始まりません。その人はまず、何年もかけて、説教や教えることに忠実を表さなくてはなりません。そして遂には、神がその人に用意した職につくのです。パウロは母の胎にいる時から、使徒の呼びがありましたが、その職につくまで、他の主にある働きに、昼夜、多くの年数を費やしました（ガラテヤ 1:15-2:1参照）。パウロは実は、教師と預言者として始まり（使徒 13:1-2参照）、後に聖霊に

## 務めの賜物

よって遣わされた時に使徒に昇格しました（使徒 14:14参照）。

パウロや最初の十二弟子以外にも使徒がいたことが、使徒の働き一章十五から二十六節、十四章十四節、ローマ十六章七節、第二コリント八章二十三節、ガラテヤ一章十七から十九節、ピリピ二章二十五節、第一テサロニケ一章一節と二章六節に書いてあります。（第二コリント八章二十三節とピリピ二章二十五節で使者と訳されている言葉は、ギリシャ語の*apostolos*です。）これは、使徒職が十二弟子に限られたものであるとする見解を払いのけます。

しかし、十二弟子だけが、「小羊の十二使徒」に分類され、十二弟子だけがキリストの千年王国に特別な場所が用意されているのです（マタイ 19:28; 黙示 21:14参照）。聖書の啓示が完成した今、私たちにはもはや、ペテロやヤコブ、ヨハネのような聖書を書く特別な霊を受けた使徒は必要ではありません。しかし、使徒の働きに書いてあるような、パウロや他の使徒たちのような、聖霊の力によって教会を建てる使徒たちを、今日まだ必要としています。

### 預言者の職について（The Office of Prophet）

預言者は、超自然的な啓示を受け、神の靈感によって話す人です。そのような人は必然的に、しばしば預言の霊的賜物と啓示の賜物、つまり知恵のことば、知識のことば、霊を見分ける力において用いられます。

御霊が望むなら、どんな信者も預言の賜物において、神に用いられるかもしれませんが、だからと言って、その人が預言者という訳ではありません。預言者は、まず第一に、油注ぎをもって説教や教えることができる指導者です。預言者は、二番目に高い呼びのようですから（第一コリント 12章28節に書かれている順番を参照）、常勤の指導者でさえ、数年の間、ミニストリーに携わっていなければ、預言者の職につくことはありません。その職についているのなら、それに見合うように、その人は超自然的に備えられていることでしょう。

新約聖書の中で、預言者と呼ばれている人は、ユダとシラスの二人です。使徒の働き15章32節に、彼らはアンテオケの教会に向けて多くのことば（英語では長い預言）

## 弟子をつくる指導者

をもって励ました、と書いています。

ユダもシラスも預言者であったので、多くのことばをもって兄弟たちを励まし、また力づけた。

新約聖書の預言者としての別の例は、アガボです。使徒の働き十一章二十七から二十八節にはこう書いてあります。

そのころ、預言者たちがエルサレムからアンテオケに下って来た。その中のひとりでアガボという人が立って、世界中に大ききんが起ると御霊によって預言したが、はたしてそれがクラウデオの治世に起こった。

アガボは、知恵のことばが与えられたことに注目してください。つまり、彼に将来についての何かが啓示されました。勿論、アガボは将来に起こる全てのことについて知りませんでした。聖霊が彼に示したいことだけを彼は知りました。

使徒の働き二十一章十から十一節には、知恵のことばがアガボを通してはたらいっている他の例があります。この時は、ある人についてことばが与えられました—パウロです。

幾日かそこに滞在していると、アガボという預言者がユダヤから下って来た。彼は私たちのところに来て、パウロの帯を取り、自分の両手と両足を縛って、「『この帯の持ち主は、エルサレムでユダヤ人に、こんなふうには縛られ、異邦人の手に渡される。』と聖霊がお告げになっています。」と言った。

個人的な導きを預言者から求めることは、新約聖書に書いてあることでしょうか。いいえ、書いていません。なぜなら、全ての信者には、その人を導くために、それぞれの内に聖霊が与えられているからです。預言者は、信者が自分自身の例にあってもう既に知っていることが、神の導きであることについて、確認だけを与えるべきです。例えば、アガボがパウロに預言した時、パウロに何をすべきかという導きは一切与えませんでした。彼はただ、パウロがもう既に、暫くの間知っていたことについて、確

## 務めの賜物

認を与えただけに過ぎませんでした。

前にも述べましたが、パウロは使徒の働きに召される前に、預言者（と教師）の職につきました（使徒 13:1参照）。ガラテヤ 一章十一から十二節によると、パウロが主から啓示を受け、また沢山の幻をも受けたことがわかります（使徒 9:1-9; 18:9-10; 22:17-21; 23:11; 第二コリント 12:1-4参照）。

真の使徒でもそうであったように、偽教会の中には真の預言者はいません。偽教会は、シラスやユダ、アガボといった真の預言者を遠ざけます。なぜなら（ヨハネが、黙示録の最初の二章で、小アジアの殆どの教会にしていたように、）真の預言者は、人々の不従順に対して、神が喜んでおられないという啓示を与えるからです。偽教会はそのようなことには心を開いていません。

### 教師の職について（The Office of Teacher）

第一コリント十二章二十八節に書かれた順番によると、教師の職は三番目に高い呼びです。教師とは、神の言葉を教えることに、超自然的に油注がれた人のことです。誰かが聖書を教えているからと言って、その人が新約の教師という訳ではありません。多く人は単に好きだから、もしくは義務感から教えますが、教師の職につく人は、教える超自然的な賜物があります。そのような人には、よく神の言葉について超自然的な啓示が与えられ、聖書をわかりやすく、また聞き手がそれを応用できる方法で教えることができます。

アポロは新約でこの職についた人の例です。パウロは、自分の使徒的働きと、アポロの教師的働きについて、第一コリントではこのように言っています。

私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です...私は賢い建築家のように、土台を据えました。そして、ほかの人がその上に家を建てています（第一コリント 3:6、10後半、一部強調）。

アポロという教師は、最初に植えたのでも、土台を据えたのでもありませんでした。その代わりに、神の言葉で新しい芽に水をやり、もう既にある土台の上に家を建て

## 弟子をつくる指導者

たのです。

アポロについてはまた、使徒の働き十八章二十七、二十八節でこのように言及されています。

そして、アポロがアカヤへ渡りたいと思っていたので、兄弟たちは彼を励まし、そこの弟子たちに、彼を歓迎してくれるようにと手紙を書いた。彼はそこに着くと、すでに恵みによって信者になっていた人たちを大いに助けた。彼は聖霊によって、イエスがキリストであることを証明して、力強く、公然とユダヤ人たちを論破したからである。

アポロは、既に信者になっていた人たちを「大いに助け」、彼の教えは「力強い」と描写されました。油注がれた教えはいつも力強いのです。

教会にとって、教える働きは、奇跡の業や、いやしの賜物よりももっと重要なものです。それ故、第一コリント十二章二十八節でそれらの賜物の前に挙げられています。

そして、神は教会の中で人々を次のように任命されました。すなわち、第一に使徒、次に預言者、次に教師、それから奇蹟を行なう者、それからいやしの賜物を持つ者、助ける者、治める者、異言を語る者などです（一部強調）。

残念なことに信者は、その人たちの人生に霊的な成長と聖さをもたらすみことばの明確な教えを聞くことよりも、いやしを見ることの方にもっと気を取られてしまっていることが時々あります。

聖書は、説教と教えの両方について述べています。教えは、論理的で教育的ですが、説教は、靈感を与え、動機付けになるものです。伝道者は一般的に説教します。教師と牧師は一般的に教えます。使徒は説教し、また教えます。信者の中には、教えにある価値に気づかない人がいるというのは、残念なことです。また、話し手が素晴らしいと思えるのは、大きな声で、早い説教をしている時だけと考える人たちさえい



## 務めの賜物

ます！そんな訳はありません。

イエスは油注がれた教師の最高の例です。教えることが、彼の働きの大部分を占めていた為、多くの人々はイエスを「先生」と呼びました（マタイ 8:19; マルコ 5:35; ヨハネ 11:28）。

教師や教えることについての更なる学びには、使徒の働き 2:42; 5:21, 25, 28, 42; 11:22-26; 13:1; 15:35; 18:11; 20:18-20; 28:30-31; ローマ 12:6-7; 第一コリント 4:17; ガラテヤ 6:6; コロサイ 1:28; 第一テモテ 4:11-16; 5:17; 6:2; 第二テモテ 1:11; 2:2、そしてヤコブ 3:1を参照してください。列挙した聖句箇所の後には、教師はより厳しい裁きを受けるということが書いてあるので、教師は何を人々に教えるかについて、とても慎重にならなくてはなりません。教師はみことばだけを教えるべきです。

### 伝道者の職について (The Office of Evangelist)

伝道者とは、福音を宣べ伝えるのに油注がれている人のことです。その人が語るメッセージは、人々を悔い改めと主イエス・キリストへの信仰に導くように組み立てられています。伝道者には、未信者の心をつかみ、そのメッセージの真実性が彼らを説得させるような奇跡が伴います。

初代教会には多くの伝道者がいたことは間違いありませんが、使徒の働きの中に伝道者として載っているのはたった一人です。彼の名はピリポです。「あの七人のひとりである伝道者ピリポの家には行って、そこに滞在した」（使徒 21:8、一部強調）。

ピリポは、食卓のことに仕える人（もしくは、恐らく「執事」）として、彼の働きを始めました（使徒 6:1-6参照）。ステパノの殉教をきっかけに、広がった教会への迫害の頃、ピリポは伝道者に昇格しました。彼は最初にサマリヤにて福音を宣べ伝えました。

ピリポはサマリヤの町に下って行き、人々にキリストを宣べ伝えた。

群衆はピリポの話を聞き、その行なっていたしるしを見て、みなそろって、彼の語ることに耳を傾けた。汚れた霊につかれた多くの人たちからは、その霊が大声で叫んで出て行くし、大ぜいの中風の

## 弟子をつくる指導者

者や足のきかない者は直ったからである。それでその町に大きな喜びが起こった（使徒 8:5-8）。

ピリポのメッセージはたった一つであったことに注目してください—キリストです。彼の目的は弟子、つまりキリストに従順に従う者をつくることでした。彼はキリストを奇跡を行う方、神の子、主、救い主、直ちに來る裁き主として、宣言しました。彼は人々に悔い改めて、彼の主に従うことを強く勧めました。

ピリポはまた、彼のメッセージが本当であることを証明する超自然的なしるしと不思議が授けられていたことにも注目してください。伝道者の職につく人は、いやしや他の靈的賜物が与えられています。偽教会には、偽福音を宣べ伝える偽伝道者しかいません。今日、世はそのような伝道者で溢れていて、神はそのような人たちのメッセージに奇跡といやしをもって承認していないのは明らかです。それは単に、神の福音を宣べ伝えていないからです。彼らはキリストを真に伝えてはいません。彼らは大抵、人々の必要についてであったり、どのようにしてキリストが人々に豊かな人生を与えることができるか、もしくは悔い改めを含まない救いの方式について宣べ伝えていきます。彼らは、罪悪感を和らげる偽の会話へと人々を導きますが、それは彼らを救いません。彼らの伝道の結果は、人々はもう既に持っているものを受け取る必要はないと考える為、人々が生まれ変わる機会が更に減っています。そのような伝道者は、実際はサタンの王国を建てる手伝いをしているのです。

エペソ4章11節とは異なり、第一コリント十二章二十八節では伝道者の職は、他の務めと一緒に挙げられていません。しかし私は、この箇所「奇跡といやしの賜物」こそ、これらが伝道者ピリポの務めを特徴付けており、またこれらがどんな伝道者の働きにおいても、自然に超自然的なことを証明している為に、これらは伝道者の職を示唆しているように思います。

教会から教会へと旅する多くの人々が自分たちを伝道者と呼んでいますが、実際はそうではありません。と言うのも、彼らは教会の建物の中でクリスチャンに向かってのみ説教をしていて、彼らにはいやしの賜物も奇跡も伴っていません。（ある者たち

## 務めの賜物

はそのような賜物があるかのように振る舞いますが、彼らほうぶな人たちしか騙せません。彼らの最大の奇跡は、人々を押して一時的に倒すことです。) これらの巡回伝道者は、教師、説教者、もしくは勧めをする人(ローマ 12:8参照)なのかもしれませんが、伝道者の職にはついていません。しかし、神は勧めをする人や説教者として召してから、後にその人を伝道者に昇格させるかもしれません。

伝道者の職については、使徒の働き 8章4から40節のピリポの働きについての記録を読んで、更に見てみてください。そこには、務めの賜物の相互依存の重要性(特に14から25節を参照)や、ピリポが群衆に福音を宣べ伝えただけでなく、個々人に対しても神の導きにより働きかけをしました(使徒 8:25-39参照)。

伝道者は、改心者に水の洗礼を受ける命令を受けているようですが、新しい信者たちに対して聖霊のバプテスマを受けさせるようには、必ずしも命令を受けてはいません。それは、主に使徒、牧師、長老、または監督の責任とされています。

## 牧師の職について (The Office of Pastor)

二章前で、私は牧師の聖書的役割と、一般的な、組織的教会の牧師の役割を比較しました。しかし、牧師の働きについては、まだ言うことがあります。

牧師の職について、聖書が何を教えているのかを十分に理解する為に、私たちは三つのギリシャ語を理解する必要があります。ギリシャ語でそれらは、(1) *poimen*、(2) *presbuteros*、そして(3) *episkopos*です。これらの言葉は順番に、(1) 牧者または牧師、(2) 長老、そして(3) 監督または司教と訳されます。

*Poimen*という言葉は、新約聖書に十八回出てきて、その内十七回は牧者と、一回は牧師と訳されています。その言葉の動詞である *poimaino* は、十一回出てきており、その殆どが牧すると訳されています。

*Presbuteros* というギリシャ語は、新約聖書に六十六回出てきています。その内の六十回は、長老または長老たちと訳されています。

最後に、*episkopos* というギリシャ語は、新約聖書に五回出てきて、その内の四回は監督と訳されています。欽定訳では、これは司教と訳されています。

## 弟子をつくる指導者

これらの三つの言葉は、教会の中で同じ地位を表しており、それぞれに言い換えて用いられています。使徒パウロが教会を建てる時はいつでも、彼は長老 (*presbuteros*) という、その地域の会衆の世話係を残したのでした (使徒 14:23、テトス 1:5参照)。このような人たちは、監督 (*episkopos*) という役割を担い、また群れを牧する (*poimaino*) 責任が与えられました。例えば、使徒の働き 20章17節にはこのように書いてあります。

パウロは、ミレトからエペソに使いを送って、教会の長老たち

[*presbuteros*]を呼んだ (一部強調)。

そこで、パウロはそれらの教会の長老たちに何を言ったのでしょうか。

あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させる

[*poimaino*]のために、あなたがたを群れの監督 [*episkopos*]にお立てになったのです (使徒 20:28、一部強調)。

これら三つのギリシャ語は、言い換えて用いられることに注目してください。パウロは長老たちに、彼らは監督であって、牧者のように振る舞うべきであることを言いました。

ペテロは、その最初の手紙の中にこう書いています。

そこで、私は、あなたがたのうちの長老たち [*presbuteros*]に、同じく長老のひとり、キリストの苦難の証人、また、やがて現われる栄光にあずかる者として、お勧めします。あなたがたのうちにいる、神の羊の群れを、牧しなさい [*poimaino*]。強制されてするのではなく、神に従って、自分から進んでそれをなし、卑しい利得を求める心からではなく、心を込めてそれをしなさい。あなたがたは、その割り当てられている人たちを支配するのではなく、むしろ群れの模範となりなさい。そうすれば、大牧者が現われるときに、あなたがたは、しぼむことのない栄光の冠を受けるのです (第一ペテロ

## 務めの賜物

5:1-4、一部強調)。

ペテロは長老たちに彼らの群れを牧するよう言いました。ここで牧すると訳されている動詞は、エペソ4章11節では牧師と(いう名詞の形で)訳されています。

こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです(一部強調)。

この箇所はまた、長老と牧師は同じであるようにも思わせます。

パウロはまた、この長老(presbuteros)と監督(episkopos)という言葉をとテトス1章5から7節で同じ意味で用いました。

私があなただをクレテに残したのは、あなたが残っている仕事の整理をし、また、私が指図したように、町ごとに長老たちを任命するためでした...監督は神の家の管理者として、非難されるところのない者であるべきです(一部強調)。

つまり、牧師、長老、監督の職が同じ職ではないとする議論は妥当ではないということになります。従って、新約聖書の手紙の中で、監督や長老について書いてあることは何でも、牧師にも当てはまります。

### 教会管理 (Church Governance)

また、上記の抜粋された聖書箇所から、長老、牧師、または監督によって教会に対する霊的監視が与えられてきただけでなく、それを管理する権威をも与えられていたことは非常に明らかです。極単純に、長老、牧師、または監督が責任者であり、また教会員は彼らに従うべきです。

あなたがたの指導者たちの言うことを聞き、また服従しなさい。この人々は神に弁明する者であって、あなたがたのたましいのために見張りをしているのです(ヘブル 13:17)。

勿論、神に従っていない牧師に、どんなクリスチャンでも従うべきではありませんが、しかし完璧な牧師はいないことをも認めるべきです。

## 弟子をつくる指導者

牧師、長老、または監督は、父親がその家を治める権威があるように、彼らの教会を治める権威が与えられています。

ですから、監督[牧師または長老]はこういう人でなければなりません...自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です（自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう。）（第一テモテ 3:2-5、一部強調）。

パウロは続けてこう言いました。

よく指導の任に当たっている長老[牧師または監督]は、二重に尊敬を受けるにふさわしいとしなさい。みことばと教えのためにほねおっている長老は特にそうです（第一テモテ 5:17、一部強調）。

明確に言えることは、長老たちは教会を治めるべきである、ということです。

### 聖書的でない長老たち (Unscriptural Elders)

多くの教会は、そこを治める長老たちからなる集団が存在する為に、その管理体制が聖書的であると信じていますが、彼らの問題は、長老に対する考えが間違っていることです。そのような教会の長老は、定期的には選抜され、会衆の中で輪番していました。彼らはよく、「長老会」と呼ばれます。しかし、そのような人たちは、聖書で定義される長老ではありません。もし私たちが、パウロが列挙する長老の要件を単純となつて調べるのならば、それはかなり明らかとなるでしょう。パウロは、長老は常勤で働いており、従って報酬を受け、教会では教えたり、説教したり、監督したりする地位にあります（第一テモテ 3:4-5; 5:17-18; テトス 1:9参照）。教会の「長老会」の人の中で、このような要件に見合う人がいたとしても、非常に少なく、殆どいません。彼らに報酬はなく、説教も教えることもせず、教会で常勤として働くこともありません。また、彼らは殆ど、教会の管理方法について知りません。

聖書に基づいていない教会の管理体制程、地域教会に問題を引き起こす原因はありません。ふさわしくない人たちが教会を治めていると、問題が発生します。衝突や

## 務めの賜物

妥協、更には教会の完全なる崩壊への扉を開けることになりかねません。聖書に基づいていない教会の管理体制は、悪霊を歓迎する玄関マットのようなものです。

私は組織的な教会と家の教会の両方の牧師たちに対して書いていると、わかっています。組織的な教会の牧師たちの中には、教会員の中から選ばれた長老たちが治めている聖書的でない管理体制下にある教会を今既に牧しているという人たちがいるかもしれません。このような聖書的でない管理体制は、大抵の場合、衝突なしに変えられることは不可能です。

そのような牧師たちに対しての私の助言は、神の助けの下、教会の管理体制を変える努力を尽くし、何もしなければ、将来、日常的な衝突は避けて通れない為、起きる可能性のある、必然的で一時的な衝突に今耐えることです。もし一時的な衝突に耐えることができれば、その人はこれから先の全ての衝突を避けられたことになるでしょう。もしできなかつたとしても、その人はいつでも、聖書に基づく新しい教会を始めることができます。

痛みは伴いますが、長い目で見れば、その人は神の御国に更なる実りを与えることになるでしょう。その人の教会を現在治めている人たちが、真のキリストの弟子であり、その人が現在の教会体制における必要な変化について、聖書から説明し、尊敬を得ながら説得ができるのならば、その人は、実際に体制を変えることについて、彼らを説得できる可能性が十分あります。

### 長老は複数いるべきか？ (The Plurality of Elders?)

聖書で長老について書かれている箇所はいつも複数形で書かれている、つまり一人の長老、牧師、または監督が群れを牧することは聖書的ではないことを意図しているのではないかと指摘する人たちがいます。しかし、私の意見では、これは結論付ける証拠とは言えません。聖書には確かに、ある町では一人以上の長老が教会を監督していたと書いてありますが、それらの長老たちが皆同等の立場で一つの群れを治めていたとは書いていません。例えば、パウロがエペソから長老たちを集めた時（使徒20:17参照）、それらの長老たちが来た町には、全体で何千、もしくは何万人もの信者

## 弟子をつくる指導者

たちがいました（使徒 19:19参照）。つまり、エペソには多くの群れが存在し、各長老は個々の家の教会を監督していたことは十分考えられます。

聖書には、神が何か仕事をする為に、委員会を作らせたといった聖書の事例は一つもありません。神がイスラエルの民をエジプトから連れ出したかった時、神は一人の人、モーセを指導者として召しました。他はモーセを助けるために呼ばれ、皆モーセの下に入り、モーセのように、彼らもある小グループの人々に対する責任を個々に負っていました。この型は、聖書の中に繰り返し出てきます。神が何かなさろうとする時、神は一人の人にその責任を与え、その人を助ける為に他の人たちを召します。

従って、神が二十人程から成る小さな家の教会を監督する権威を、長老会のような委員会に召すことは、考えにくいです。それは問題を引き起こすようなものです。

これは決して、各家の教会は、たった一人の長老によってのみ、監督されるべきである、ということを行っている訳ではありません。しかし、一人以上の長老が教会にいる場合、若く、まだ霊的に成熟していない長老（たち）は、一番年上の、最も霊的に成熟した長老に従うべきであることを示しています。聖書的には、聖書学校ではなく、教会こそが、若い牧師、長老、監督を育成する場となるべきであり、従って家の教会の中に、霊的に若い者たちが霊的に成熟した者たちから訓練を受ける為に、数人の長老、牧師、監督がいる可能性はあり、むしろその方が理想的であると言えるでしょう。

私は、「同等の」長老たちによって建前上監督されている教会に、このような現象を見たことがあります。そこには必ず、他から尊敬を受ける一人の長老がいます。もしくは、一人が支配的で、他は比較的その人の言いなりになっている状態です。さもなければ、遂には衝突が起きます。これは、委員会においても、実際は一人の議長を選びます。同等の人たちの集団が一つの仕事を行う時、いつもそこには一人の指導者がいることに気づきます。従って、教会においても同じことです。

更に、第一テモテ3章4から5節にてパウロは、長老の責任を父親のそれと比較しています。長老は、自分自身の家を治めることをしていなければならない、そうでなければ



## 務めの賜物

ば、教会を治める資格はありません。しかし、同等の二人の父親が一つの家をどのようにして治めることができるのでしょうか。私には問題があるように見えます。

長老、牧師、または監督は、より大きいな地域の御からだに属することで、何か問題が起きた時に互いに助け合える、長老仲間を持ち、そこで相互に説明責任を負い合うべきです。パウロは、その「長老たち」（第一テモテ 4:14参照）について書いていますが、そこでは*presbuteros*（長老）の会合があり、恐らく務めの賜物を持つ他の人たちも参加していたに違いありません。もしそこに教会を植えた使徒がいるなら、過ちを犯したある長老が原因で、地域の御からだに問題がある場合、その使徒もその問題について、使徒としての働きかけができるでしょう。組織的な教会の牧師が何か過ちを犯す時、教会の体制の為に、それが大きな問題へと発展してしまいがちです。そこには、維持しなくてはならない建物や計画があります。しかし、家の教会では、牧師が逸脱する時、問題はただちに解決されます。単純に、その牧師の下にいた人たちは別の御からだに属すればよいのです。

### 仕える為の権威（Authority to Serve）

神が牧師に、その教会に対する霊的な権威と、それを管理し治める権威を与えているからと言って、牧師にその群れを支配する権利が与えられている、という訳ではありません。牧師は群れの主ではありません。キリストこそ主です。そこに集まる人々は牧師の群れではなく、神の群れなのです。

あなたがたのうちにいる、神の羊の群れを、牧しなさい。強制されてするのではなく、神に従って、自分から進んでそれをなし、卑しい利得を求める心からではなく、心を込めてそれをしなさい。あなたがたは、その割り当てられている人たちを支配するのではなく、むしろ群れの模範となりなさい。そうすれば、大牧者が現われるときに、あなたがたは、しぼむことのない栄光の冠を受けるのです（第一ペテロ 5:2-4、一部強調）。

牧師は皆、いつかキリストの裁きの御座の前で、自分が主にあってしてきた働き

## 弟子をつくる指導者

について説明を求められる日が来ます。

更に、経済的な事柄については、牧師、長老、または監督が一人で携わるべきではありません。定期的に、もしくは何らかの理由で散発的に集められたお金がある場合は、御からだに属する他の者たちが説明責任を果たすべきです。そうすることで、資金の取り扱いについて、信頼を損ねることはありません（第二コリント 8:18-23参照）。この人たちは、選挙にて選ばれるか、もしくは指名されることもできます。

### 長老への報酬 (Paying Elders)

聖書から、長老、監督、または牧師は報酬を支払われるべきであることは、彼らは教会に常勤していることを考えれば明確です。パウロはこう書いています。

よく指導の任に当たっている長老は、二重に尊敬を受けるにふさわしいとしなさい。みことばと教えのためにほねおっている長老は特にそうです。聖書に「穀物をこなしている牛に、くつこを掛けてはいけない。」また、「働き手が報酬を受けることは当然である。」とされているからです（第一テモテ 5:17-18）。

主題は明確です。パウロは報酬という言葉さえ使っています。もう少し抽象的な彼の言い回しである、よく指導の任に当たっている長老は、二重に尊敬を受けるにふさわしい、という言葉は、文脈を考慮すると、簡単に理解できます。一節前に、教会は身寄りのないやもめに経済的な支援をする責任があることを、パウロは間違いなく記しており、以下の同様の言い回しを使って始めました。「やもめの中でもほんとうのやもめを敬いなさい」（第一テモテ 5:3-16参照）。この文脈で、「敬う」とは経済的な支援をするという意味です。よく指導の任に当たっている長老は、二重の尊敬を受けるにふさわしいとは、少なくともやもめに与える少なくとも二倍の額、もしくは子供がいる場合はそれ以上を受けるべきである、という意味です。

世界中の（途上国も含む）組織的な教会は、その牧師を全般的に支援していますが、世界中の家の教会の多くは、特に西洋において、牧師の支援をしていないようです。西洋社会において、多くの人々が家の教会に参加する理由は、彼らの心には実は

## 務めの賜物

反発があり、この地上で自分に対する要求が最も少ないと思われるキリスト教の形を探して、見つけた為であると、私は考えます。彼らが家の教会に来た理由は、組織的な教会にある縛りから逃れたい為だ、と彼らは言いますが、実際の理由は、キリストへの深い関与を避けたい為です。彼らは、経済的な誓約を求めない教会、つまり、キリストがその弟子たちに求めるものとは正反対の教会を探してきたのです。自分の神がお金である人や、宝を天にではなく地上に積むことによって、お金が神であることを証明している人は、真のキリストの弟子とは言えません（マタイ 6:19-24; ルカ 14:33参照）。もしキリスト教が、その人のお金の扱いに影響を与えていないのなら、その人は全くクリスチャンではありません。

聖書的な家の教会であると言うところは、牧師を金銭的に支え、また貧しい人々を世話し、そのような働きを支援しているはずで、そのような家の教会には、支払いの必要な建物も、何かプログラムの為に雇わなくてはならないスタッフもいないので、施しや全ての経済面において、組織的な教会と比べてずば抜けているはずで、一人の牧師を経済的に支えるのに、たった十人が十一献金さえすれば間に合います。収入の二割を捧げる人が十人いれば、牧師一人と、その牧師と同等の生活レベルの送るもう一人の宣教師を十分支えることができます。

### 牧師がすること (What do Pastors do?)

一般的な礼拝出席者に以下のような質問をしたとします。「今から挙げることは誰の仕事だと思えますか。」

誰が未信者に福音を分かち合うべきでしょうか。誰が聖い生活を送り、祈り、他の信者を訓戒し、励まし、助けるべきでしょうか。誰が病人を見舞うべきでしょうか。誰が病人に手を置き、いやすべきでしょうか。誰が他人の重荷をも一緒に負うべきでしょうか。誰が御からだの為にその賜物を用いるべきでしょうか。誰が自分を捨て、神の御国のために犠牲を払うべきでしょうか。誰が弟子に洗礼を授け、キリストの命令に従うことを教えるべきでしょうか。

礼拝出席者の多くは、躊躇なく、「それらは全て牧師の責任です。」と答えるで

## 弟子をつくる指導者

しょう。しかし、本当にそうでしょうか。

聖書によると、全ての信者は未信者に福音を分かち合うべきです。

むしろ、心の中でキリストを主としてあがめなさい。そして、あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしていなさい（第一ペテロ 3:15）。

全ての信者は聖い生活を送るべきです。

あなたがたを召してくださった聖なる方にならって、あなたがた自身も、あらゆる行ないにおいて聖なるものとされなさい。それは、「わたしが聖であるから、あなたがたも、聖でなければならない。」と書いてあるからです（第一ペテロ 1:15-16）。

全ての信者は祈るべきです。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい（第一テサロニケ 5:16-17）。

全ての信者は、他の信者を訓戒し、励まし、助けることが求められています。

兄弟たち。あなたがたに勧告します。気ままな者を戒め、小心な者を励まし、弱い者を助け、すべての人に対して寛容でありなさい（第一テサロニケ 5:14、一部強調）。

全ての信者は、病人を見舞うべきです。

わたしが裸のとき、わたしに着的物を与え、わたしが病気をしたとき、わたしを見舞い、わたしが牢にいたとき、わたしをたずねてくれたからです。』（マタイ 25:36）

### 更なる責任 (More Responsibilities)

しかしそれだけではありません。全ての信者は病人に手を置いていやすべきです。

信じる人々には次のようなしるしが伴います。すなわち、わたしの名によって悪霊を追い出し、新しいことばを語り、蛇をもつかみ、たとえ毒を飲んでも決して害を受けず、また、病人に手を置けば病

## 務めの賜物

人はいやされませぬ (マルコ 16:17-18、一部強調)。

全ての信者は、仲間の信者の重荷を負い合うべきです。

互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい (ガラテヤ 6:2)。

全ての信者は他の人の為に、自分に与えられた賜物を用いるべきです。

私たちは、与えられた恵みに従って、異なった賜物を持っているので、もしそれが預言であれば、その信仰に応じて預言しなさい。奉仕であれば奉仕し、教える人であれば教えなさい。勧めをする人であれば勧め、分け与える人は惜しまずに分け与え、指導する人は熱心に指導し、慈善を行なう人は喜んでそれをしなさい (ローマ 12:6-8)。

全ての信者は自分を捨て、福音の為に犠牲を払うべきです。

それから、イエスは群衆を弟子たちといっしょに呼び寄せて、彼らに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです (マルコ 8:34-35、一部強調)。

全ての信者は弟子をつくり、洗礼を受け、キリストの命令に従うことを教えるよう求められています。

だから、戒めのうち最も小さいものの一つでも、これを破ったり、また破るように人に教えたりする者は、天の御国で、最も小さい者と呼ばれます。しかし、それを守り、また守るように教える者は、天の御国で、偉大な者と呼ばれます (マタイ 5:19、一部強調)。

あなたがたは年数からすれば教師になっていなければならないにもかかわらず、神のことばの初歩をもう一度だれかに教えてもらう

## 弟子をつくる指導者

必要があるのです。あなたがたは堅い食物ではなく、乳を必要とするようになっていきます（ヘブル 5:12、一部強調）。

それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。（マタイ 28:19-20、一部強調）。<sup>61</sup>

これら全ての責任は、全ての信者に与えられていますが、殆どの礼拝出席者は、これらの仕事は牧師だけに与えられていると考えています！理由は恐らく、牧師自らが、往々にして、これらの仕事は彼らだけの責任であると考えているからでしょう。

### 牧師がすべきこと (So What are Pastors Supposed to do?)

これらの責任全てが、全ての信者に与えられているのなら、牧師は何をすべきなのでしょう。非常に単純なことですが、牧師は聖なる信者がそれら全てのことをするように整える為に召されています（エペソ 4:11-12参照）。彼らは、それらの聖なる信者がキリストの命令の全てを守るよう、教訓と模範をもって（第一テモテ 3:2; 4:12-13; 5:17; 第二テモテ 2:2; 3:16-4:4; 第一ペテロ 5:1-4参照）教える為に召されています（マタイ 28:19-20参照）。

聖書はこのことについて、これ以上明確にはできませんでした。聖書の言う牧師役割とは、日曜日の朝の礼拝に、どれだけ多くの人を集めるか、ということではありません。それは、「すべての人を、キリストにある成人として立たせるため」（コロサイ 1:28）です。聖書的な牧師は、人の耳をくすぐることはしません（第二テモテ 4:3

---

<sup>61</sup> 61 もしイエスの弟子が、イエスが彼らに命じた全てに従うよう、彼らの弟子に教えることが求められているのなら、彼らはその結果として、彼らの弟子に、弟子をつくり、洗礼を授け、キリストの全ての命令に従うことを教えるように、と教えるであろう。従って、弟子をつくり、洗礼を授け、教えることは、次に続く弟子の一人一人に与えられた、永遠に続く命令であったに違いない。

## 務めの賜物

参照)。彼らは全てを神のみことばに基づいて、教え、訓練し、勧め、訓戒し、正し、非難し、叱責します（第二テモテ 3:16-4:4参照）。

パウロは、テモテに宛てた最初の手紙の中で、牧師の職につく人のいくつかの要件についてあげました。十五ある内の十四は、生き方の模範が最も大切なことであることを含む、その人の人格に関することです。

「人がもし監督の職につきたいと思うなら、それはすばらしい仕事を求めることである。」ということばは真実です。ですから、監督はこういう人でなければなりません。すなわち、非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、自分を制し、慎み深く、品位があり、よくもてなし、教える能力があり、酒飲みでなく、暴力をふるわず、温和で、争わず、金銭に無欲で、自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。（自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう。）また、信者になったばかりの人であってははいけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。また、教会外の人々にも評判の良い人でなければいけません。そしりを受け、悪魔のわなに陥らないためです（第一テモテ 3:1-7）。

これらの要件を、新しい牧師を探している組織的な教会がよく挙げる要件と比べる時に、余りにも多くの教会が直面している最重要問題が何であるかが明らかとなります。彼らは、従業員の管理者、エンターテイナー、短い演説家、管理者、心理学者、イベント・ディレクター、資金調たち係、皆の友たち、そして主力商品となる人を探しています。彼らは、「教会のミニストリーを運営する」人を求めています。しかし、聖書の言う監督の場合、その人の目標は自分自身を再生することなので、とりわけ素晴らしい人格とキリストへの献身を持つ、真の使いでなくてはなりません。その人は、自分の群れに向かって、「私がキリストを真似るように、あなたも私を真似なさい」

## 弟子をつくる指導者

と言えなくてはなりません（第一コリント 11:1）。

牧師の職について、更に見て行きたい方は、使徒の働き 二十章二十八から三十一節、第一テモテ 五章十七から二十節、そしてテトス 一章五から九節もご参照ください。

### 執事の職について (The Office of Deacon)

最後に、簡単に執事について触れさせてください。執事の職は、五役者の賜物ではない、地域教会にある、唯一の他の職です。執事は、長老がするような、教会を治め、管理する権威はありません。執事と訳されているギリシャ語は、*diakonos*で、その文字通りの意味は、「召使い」です。

エルサレムの教会で、やもめたちの日常の食事係に任命された七人の人たちは、大抵、最初の執事であったと考えられています（使徒 6:1-6参照）。彼らは民の中から選ばれ、使徒により任命されました。その内の少なくとも二人は、ピリポとステパノで、後に神により、力強い伝道者に昇格されました。

執事については、また、第一テモテ三章八から十三節やピリピ一章一節にも話されています。明らかにこの職は、男性または女性どちらでもつくことができるようです（第一テモテ 3:11参照）。



## 第十九章

### キリストにある現実 (In-Christ Realities)

新約聖書の使徒書簡を通して、私たちは「キリストにある」、「キリストと共に」、「キリストによって」、また「主にあって」といった言葉を見つけます。これらの言葉は頻繁に、私たちキリストを信じる者たちがキリストの成した業の故に受ける恩恵を啓示しています。神が私たちを「キリストにあって」見るように、私たちが自分たちを見る時に、それは私たちが神が望んでおられるように生きる助けとなるでしょう。弟子をつくる指導者は、弟子たちが霊的な成熟を得るために、キリストにあって自分たちはどういう者かということ、弟子たちに教えたいと願っています。

第一に、「キリストにあって」とは一体どういう意味なのでしょう。

私たちは新生されると、私たちはキリストの御からだに属し、霊的には、キリストと一つとされます。これについて確認できるいくつかの聖書箇所を、新約聖書にある使徒書簡から見て行きましょう。

大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです（ローマ 12:5、一部強調）。

しかし、主と交われば、一つ霊となるのです（第一コリント 6:17、一部強調）。

## 弟子をつくる指導者

あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官なので（第一コリント 12:27、一部強調）。

主イエス・キリストを信じる私たちは、自分たち自身を、主に属し、キリストの御からだの器官となり、キリストと一つ霊とされた者たちと見るべきです。主は私たちの内におられ、私たちも主の内に存在します。

以下は、キリストにある私たちの存在がもたらすいくつかの恩恵について述べている聖書箇所です。

しかしあなたがたは、神によってキリスト・イエスのうちにあるのです。キリストは、私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとになりました（第一コリント 1:30、一部強調）。

キリストのうちに、私たちは義とされ（「無罪」宣告を受け、今は正しいことができるようになり）、聖くされ（神の聖なるご用の為に聖別され）、贖われた（奴隷から買い取られた）のです。私たちは、義とされ、聖くされ、また贖われることが将来のどこかの地点で起きることを待っている訳ではありません。むしろ、私たちがキリストのうちにあるが故に、もう既にこれらの祝福を受けているのです。

キリストにあって、私たちは以前の罪が赦されました。

神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。この御子のうちにあって、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ています（コロサイ 1:13-14、一部強調）。

この聖書箇所は、私たちはもはや、暗やみが支配するサタンの王国には属さず、今は、光で満ちたイエスの王国に属することも言っていることに注目してください。

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました（第二コリント 5:17、一部強調）。

## キリストにある現実

もしあなたがキリストに従う者であるならば、いも虫が蝶に変わるように、あなたは「新しく造られた者」となることを、神に感謝します！あなたの霊は新しい性質を得ました。以前は、あなたの霊の中にサタンの自己中心的な性質を持っていましたが、あなたの古いものは全て「過ぎ去った」のです。

### キリストにある更なる祝福 (More Blessings in Christ)

あなたがたはみな、キリスト・イエスに対する信仰によって、神の子どもです (ガラテヤ 3:26、一部強調)。

私たちは実際に神ご自身の子であり、神の霊によって生まれたことを知るのは、なんと素晴らしいことでしょうか。私たちが祈りをもって神の御前に来る時、私たちは私たちの神としてだけでなく、私たちの父として、神に近づけるのです！

私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです (エペソ 2:10、一部強調)。

神は私たちをお造りになられただけでなく、キリストにあって造り変えられたのです。しかも、神は「あらかじめ備えてくださった」「良い行ない」を成し遂げるために、私たち一人一人にその働きを用意してくださっています。私たちにはそれぞれ、神から個人的に受けるさだめがあります。

神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方において、神の義となるためです (第二コリント 5:21、一部強調)。

キリストにあって私たちが受けたこの義とは、実際は神ご自身の義です。それは、神が私たちに内住し、聖霊によって私たちを変えてくださった為です。私たちの良い行ないは、実際は、私たちを通してなされる神の良い行ないなのです。

しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです (ロー

## 弟子をつくる指導者

マ 8:37、一部強調)。

パウロの言う「これらすべてのこと」とは、一体何でしょう。この箇所の前にあるローマ人への手紙の中の言葉から、これらは信者が体験する試練や苦難のことを表しています。殉教にあつてでさえ、世は被害者と見なすかもしれませんが、私たちは勝利者なのです。私たちは死んでも天国へ行く為、私たちはキリストによって、圧倒的な勝利者となります！

私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです (ピリピ 4:13、一部強調)。

神が私たちに能力と力を与える為、私たちには、キリストによって、不可能はありません。神がお与えになるいかなる働きも、私たちはこなすことができます。

また、私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてください (ピリピ 4:19、一部強調)。

私たちがまず神の御国を求めるのなら、神は私たちの真の必要に応じてくださることを私たちは期待できます。主は私たちの羊飼いであり、その羊の世話をしてくださるからです！

### 神の言うことに合意する (Agreeing With What God Says)

残念ながら、私たちの中には、自分で聖書の言葉と反することを言い表して、神のみことばが私たちについて言っていることを信じない人たちがいます。「私たちは私たちが強くしてくださるキリストによってどんなことでもできます」と言う代わりに、私たちは、「そんなことはできないだろう」と言っているのです。

そのような言葉は、神が言うことに合意していないので、英訳聖書では「悪い報告」と呼んでいます (民数記 13:32 —日本語では「悪く言いふらす」という箇所を参照)。しかし、もし私たちの心が神のみことばで溢れているのなら、聖書に合意することだけを信じ、そのようなことだけを言って、信仰で溢れているはずです。

### 聖書からの告白 (Some Biblical Declarations)

## キリストにある現実

私たちは、神が私たちをどのような者と言っておられるかを信じ、またそれを口にすべきです。

私たちは、神が私たちにはできると言われていることを、私たちにはできると信じ、またそれを口にすべきです。

私たちは、神ご自身についてどのような神であるか、神が言われていることを信じ、またそれを口にすべきです。

私たちは、神がこれからなされると言われていることをなされると信じ、またそれを口にすべきです。

以下は全信者が大胆に告白できる聖書の言葉です。全てが「キリストにある」現実という訳ではありませんが、聖書によると全て真実です。

私はキリストに贖われ、聖められ、義とされています（第一コリント 1:30参照）。

私は暗やみの圧制から救い出され、神の御子をご支配する光の王国に移されました（コロサイ 1:13参照）。

キリストにあって、私の全ての罪は赦されました（エペソ 1:7参照）。

私はキリストにあって新しく造られた者です—私の古い生き方は過ぎ去りました（第二コリント 5:17参照）。

神は私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださっています（エペソ 2:10参照）。

私はキリストにあって神の義となりました（第二コリント 5:21参照）。

私は私を愛してくださったキリストによって、すべてのことの中にあって圧倒的な勝利者です（ローマ 8:37参照）。

私は、私を強くしてくださるキリストによって、どんなことでもできます（ピリピ 4:13参照）。

私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、私の必要をすべて満たしてくださいます（ピリピ 4:19参照）。

## 弟子をつくる指導者

私は聖徒として召されています（第一コリント 1:2参照）。

私は神の子どもとされています（ヨハネ 1:12、第一ヨハネ 3:1-2参照）。

私のからだは聖霊の宮です（第一コリント 6:19参照）。

もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられます（ガラテヤ 2:20参照）。

私はサタンの支配から解放されました（使徒 26:18参照）。

聖霊によって、神の愛が私の心に注がれています（ローマ 5:5参照）。

私のうちにおられる方が、この世のうちにいる、あの者（サタン）よりも力があります（第一ヨハネ 4:4参照）。

私はキリストにおいて、天にあるすべての霊的祝福をもって祝福されています（エペソ 1:3参照）。

私はキリストとともに、サタンの霊的な圧制を遥かに超えた天の所に座らされます（エペソ 2:4-6参照）。

私は神を愛し、神のご計画に従って召されている為、神はすべてのことを働かせて益としてくださいます（ローマ 8:28参照）。

神が私の味方であるなら、だれが私に敵対できるでしょう（ローマ 8:31参照）。

キリストの愛から、私を引き離すものは何也不会あります（ローマ 8:35-39参照）。

私はキリストを信じる者なので、私には、どんなこともできます（マルコ 9:23参照）。

私は神の祭司です（黙示録 1:6参照）。

私は神の子どもなので、神は私を御霊によって導かれます（ローマ 8:14参照）。

私が主に従う時、私の人生の歩みはいよいよ輝きを増します（箴言 4:18参照）。

神は私に御霊の賜物を、用いて仕える為に与えてくださいました（第一ペテロ 4:10-11参照）。

私は悪霊を追い出すことができ、病人に手を置けば病人はいやされます（マルコ 16:17-18参照）。

## キリストにある現実

神はいつでも、私を導いてキリストによる勝利の行列に加えてくださいます（第二コリント 2:14参照）。

私はキリストの使節です（第二コリント 5:20参照）。

私には永遠のいのちがあります（ヨハネ 3:16参照）。

私が信じて祈り求めるものなら、何でも与えられます（マタイ 21:22参照）。

イエスの打ち傷のゆえに、私はいやされました（第一ペテロ 2:24参照）。

私は地の塩、世界の光です（マタイ 5:13-14参照）。

私は神の相続人であり、イエス・キリストとの共同相続人です（ローマ 8:17参照）。

私は、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です（第一ペテロ 2:9参照）。

私はキリストのからだの器官です（第一コリント 12:27参照）。

主は私の羊飼いで、私は、乏しいことはありません（詩篇 23:1参照）。

主は私のいのちのとりでです—だれを私はこわがらしましょう（詩篇 27:1参照）。

神は、私を長いいのちで満ち足らせます（詩篇 91:16参照）。

キリストは私の病を負い、私の痛みをにないました（イザヤ 53:4-5参照）。

主は私の助け手なので、私は恐れませんが（ヘブル 13:6参照）。

神が私のことを心配してくださるので、私は私の思い煩いを、いっさい神にゆだねます（第一ペテロ 5:7参照）。

私は悪魔に立ち向かい、悪魔は私から逃げ去ります（ヤコブ 4:7参照）。

私は、イエスのためにいのちを失うことで、それを見いだします（マタイ 16:25参照）。

私はキリストに属する奴隷です（第一コリント 7:22参照）。

私の国籍は天にあります（ピリピ 3:20参照）。

私のうちに良い働きを始められた神は、それを完成させてくださいます（ピリピ 1:6参照）。

## 弟子をつくる指導者

神は、私のうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださいます（ピリピ 2:13 参照）。

これは、神のみことばに基づいた、肯定的な信仰告白の例のほんの一部です。これらの言葉が保証する真理が私たちの心の奥底に根差すまで、これらの告白を習慣付けるのは良いでしょう。そして、私たちは私たちの口にする言葉が、神のおっしゃることに反していないか、しっかりと注意しておくべきです。



## 第二十章

### 賛美と礼拝 (Praise and Worship)

女は[イエスに]言った。「先生。あなたは預言者だと思います。私たちの先祖は、この山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムだと言われます。」イエスは彼女に言われた。

「わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが父を礼拝するのは、この山でもなく、エルサレムでもない、そういう時が来ます …しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません」 (ヨハネ 4:19-24)。

イエスご自身の口から出たこれらの言葉は、礼拝の最も重要な特徴を私たちが理解する上での土台となります。イエスは、「真の礼拝者たち」について語り、そうなる為の必要条件について示しました。これは、礼拝者ではあっても、真の礼拝者ではない人がいることを示唆しています。そのような人たちは神を礼拝しているつもりですが、神の提示する必要条件を満たしていない為に、真の礼拝者ではありません。

イエスは真の礼拝者の特徴がどんなものかを明示しています。彼らは、「霊とまことによって」礼拝します。つまり言い換えれば、偽の礼拝者とは、「肉と偽善によ

## 弟子をつくる指導者

って」礼拝する人たちのことです。肉によって、偽の礼拝者は礼拝しているふりをしますが、その礼拝は神を愛する心から発しているものではない為に、単に見せかけのものに過ぎません。

神を真に礼拝することは、神を愛する心からしか起こされません。従って礼拝とは、教会が集まる時に私たちがすることというだけでなく、キリストの命令に従う私たちの人生のあらゆる部分で行うことなのです。驚いたことに、イエスが話していた女性は五回結婚したことがあり、その時は別の男性と一緒に住んでいました。その彼女が、神を礼拝するのにふさわしい場所についてイエスと討論したかったのです！この女性は、礼拝に集う一方、日々の生活では神に反発して歩んでいる多くの宗教家たちを、なんと良く代表していることでしょうか。彼らは真の礼拝者ではありません。

イエスはかつて、パリサイ人と律法学者に、彼らの偽善的で心ない礼拝の態度を叱りました。

偽善者たち。イザヤはあなたがたについて預言しているが、まさにそのとおりです。『この民は、口先ではわたしを敬うが、その心は、わたしから遠く離れている。彼らが、わたしを拝んでも、むだなことである。人間の教えを、教えとして教えるだけだから。』

(マタイ 15:7-9、一部強調)。

イエスの時代のユダヤ人とサマリヤ人は、礼拝の場所というものに非常にこだわっていましたが、イエスはそれは重要ではないと言いました。むしろ、人の心の状態や神に対する態度が、その人の礼拝の質を決めるのです。

今日の教会で「礼拝」と呼ばれているものの多くは、霊的に死んだ状態の礼拝者たちによって執り行われる霊的に死んだ儀式に過ぎません。人々は「賛美」を歌いながら、神について誰か他の人が語った言葉を、何も考えずに、ただオウムのように真似て言っているだけで、彼らの礼拝は、その生き方が、彼らの心に本当にあるものを暴いているので、虚しいものです。

神は何千人もの日曜礼拝クリスチャンが、心もなく、つまらなそうに歌う「輝く

## 賛美と礼拝

目を仰ぐ時」に我慢するよりはむしろ、真の従順な神の子供たちの内の一人が歌う、単純で心のこもった「あなたを愛します」を聞いてくださるでしょう。

### 霊による賛美 (Worshipping in Spirit)

「霊による」賛美と聞くとある人たちは、異言による祈りと歌、と思いますが、それはイエスの言葉と照らし合わせると、歪んだ解釈のように思います。イエスは、「真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です」と言いましたが、それはイエスがこの発言をした時、既に「霊によって」礼拝する条件を満たす人たちがいたことを示唆しています。勿論、五旬節の日まで誰も異言で話しませんでした。従って、誰でも信者なら、その人が異言で話そうとそうでなかろうと、霊とまことによって神を礼拝できるのです。異言により祈り、歌うことは、信者の礼拝において、その人を確かに助けますが、異言での祈りさえも、心の伴わない儀式になり得るのです。

使徒の働き十三章一から二節には、初代教会の礼拝についての興味深い洞察が記されています。

さて、アンテオケには、そこにある教会に、バルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、クレネ人ルキオ、国主ヘロデの乳兄弟マナエン、サウロなどという預言者や教師がいた。彼らが主を礼拝し、断食をしていると、聖霊が、「バルナバとサウロをわたしのために聖別して、わたしが召した任務につかせなさい。」と言われた（一部強調）。

この箇所には、彼らは「主に仕えていた」（英訳）と書いてあることに注目してください。これは、彼らが神を礼拝していたと意味することは理にかなっているように思います。従って私たちは、真の礼拝とは、実際に主に仕えることであることを学びます。しかし、私たちの愛と思いの対象が主である時にのみ、そうなります。

### 礼拝の仕方 (Ways to Worship)

イスラエルの讚美歌集とも言える詩篇は、多種多様に神を礼拝するよう、私たち

## 弟子をつくる指導者

に強く勧めています。例えば、詩篇三十二編にはこう書いてあります。

すべて心の直ぐな人たちよ。喜びの声をあげよ（詩篇 32:11後半、一部強調）。

静寂で荘厳な礼拝もありますが、喜び叫ぶ礼拝もあります。

正しい者たち。主にあって、喜び歌え。賛美は心の直ぐな人たちにふさわしい。立琴をもって主に感謝せよ。十弦の琴をもって、ほめ歌を歌え。新しい歌を主に向かって歌え。喜びの叫びとともに、巧みに弦をかき鳴らせ（詩篇 33:1-3、一部強調）。

勿論、私たちは主を崇めながら歌うべきですが、私たちの歌はまた、喜びに溢れているべきです。そしてそのことは、人の心の状態を外から見て分かる一つのしるしとなります。私たちは、その喜びの歌を、様々な楽器の奏でる音と共に合わせることもできます。しかし私は、多くの集会で電子的な楽器の音が余りにも大きすぎて、民の歌声をかき消してしまっていることが多々あることにも触れなくてはなりません。そのような騒音は下げるか、なくすべきです。詩篇の作者たちにそのような問題は全くありませんでした！

それゆえ私は生きているかぎり、あなたをほめたたえ、あなたの御名により、両手を上げて祈ります（詩篇 63:4、一部強調）。

降伏と畏敬の表れとして、私たちは神に両手を上げることができます。

全地よ。神に向かって喜び叫べ。御名の栄光をほめ歌い、神への賛美を栄光に輝かせよ。神に申し上げよ。「あなたのみわざは、なんと恐ろしいことでしょう。偉大な御力のために、あなたの敵は、御前にへつらい服します。全地はあなたを伏し拝み、あなたにほめ歌を歌います。あなたの御名をほめ歌います」（詩篇 66:1-4、一部強調）。

私たちは、神はなんと恐るべきお方であろうか、と申し上げ、数多くの素晴らしい神の特質の為に、神をほめたたえるべきです。詩篇は、神をたたえるのに適した言

## 賛美と礼拝

葉を見つけるのにとってもよい箇所です。何度も繰り返して、「主よ、たたえます！」  
と言うところから進歩させなくてはなりません。神に申し上げる言葉は、もっと沢山  
あるからです。

来たれ。私たちは伏し拝み、ひれ伏そう。私たちを造られた方、主  
の御前に、ひざまずこう（詩篇 95:6、一部強調）。

立ったり、跪いたり、ひれ伏したりといった私たちの姿勢でさえも、礼拝を表す  
ことができます。

聖徒たちは栄光の中で喜び勇め。おのれの床の上で、高らかに歌え  
（詩篇 149:5、一部強調）。

しかし、私たちは礼拝する為に、立ったり、跪いたりしていなくてもよいのです  
—私たちは床の上に横になっていることさえできます。

感謝しつつ、主の門に、賛美しつつ、その大庭に、はいれ。主に感  
謝し、御名をほめたたえよ（詩篇 100:4、一部強調）。

感謝を捧げることは、勿論、私たちの礼拝の一部です。

踊りをもって、御名を賛美せよ。（詩篇 149:3前半、一部強調）。

私たちは、踊りをもって主を賛美することさえもできます。しかしその踊りは、  
肉体的や官能的であったり、単に娯乐的であってははいけません。

角笛を吹き鳴らして、神をほめたたえよ。十弦の琴と立琴をかなで  
て、神をほめたたえよ。タンバリンと踊りをもって、神をほめた  
たえよ。緒琴と笛とで、神をほめたたえよ。音の高いシンバルで、  
神をほめたたえよ。鳴り響くシンバルで、神をほめたたえよ。息  
のあるものはみな、主をほめたたえよ（詩篇 150:3-6）。

音楽の賜物がある人たちについて、神に感謝しましょう。彼らの賜物は、神への  
愛の心から楽器を奏でる時、主に栄光を与える為に用いられることが可能です。

## 霊の歌 (Spiritual Songs)

新しい歌を主に歌え。主は、奇しいわざをなさった。（詩篇 98:1

## 弟子をつくる指導者

前半、一部強調)。

儀式になっていなければ、古い歌を歌うことに何の問題はありません。そして、私たちには心から来る新しい歌が必要です。聖霊は私たちが新しい歌を作るのを助けてくださることを、私たちは新約聖書から学びます。

キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい (コロサイ 3:16)。

また、酒に酔ってははいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。詩と賛美と霊の歌とをもって、互いに語り、主に向かって、心から歌い、また賛美しなさい。いつでも、すべてのことについて、私たちの主イエス・キリストの名によって父なる神に感謝しなさい (エペソ 5:18-20)。

パウロは、私たちが「詩と賛美と霊の歌」をもって、互いに歌うべきであることを書きましたので、これら三つには違いがあるのでしょうか。原語であるギリシャ語を調べることは、多少の助けとなりますが、恐らく、「詩」とは、実際に聖書の中にある詩篇を、楽器と共に歌うことを意味したのでしょうか。一方、「賛美」とは、教会の様々な信者によって作曲された、神への感謝を表す一般的な歌であったのでしょうか。「霊の歌」とは、恐らく、聖霊により与えられた自然発生的な歌で、単純な預言の賜物と似ています。但し、その言葉が歌の形となったのでしょうか。

賛美と礼拝は、私たちの毎日の生活の一部であるべきであり、単に教会で集まる時にするものではありません。一日中、私たちは主に仕え、神と共に深い交わりを体験できるのです。

### 賛美—行動で表す信仰 (Praise—Faith in Action)

賛美と礼拝は、私たちの神への信仰の正常な表れです。私たちが心から神のみことばの約束を信じているのなら、私たちはきっと、喜びと神への賛美とで溢れた民と

## 賛美と礼拝

なるでしょう。ヨシュアとイスラエルの民は、城壁が崩れる前に、まず叫ばなくてはなりませんでした。聖書は私たちに、「いつも主にあって喜ぶ」（ピリピ4:4）こと、また「すべての事について、感謝する」（第一テサロニケ 5:18前半）ことをするように勧告しています。

賛美の力について、最も際立った事例の一つを、第二歴代誌二十章にある、ユダの民が、その敵であるモアブ人とアモン人によって攻められた時のことが記された箇所に見ることができます。ヨシャパテ王の祈りに応えて、神はイスラエルにこのような指示を与えました。

あなたがたはこのおびただしい大軍のゆえに恐れてはならない。気落ちしてはならない。この戦いはあなたがたの戦いではなく、神の戦いであるから。あす、彼らのところに攻め下れ…この戦いではあなたがたが戦うのではない。しっかり立って動かずにいよ。あなたがたとともにいる主の救いを見よ。ユダおよびエルサレムよ。恐れてはならない。気落ちしてはならない。あす、彼らに向かって出陣せよ。主はあなたがたとともにいる。（第二歴代誌 20:15後半-17）。

その描写はこう続きます。

こうして、彼らは翌朝早く、テコアの荒野へ出陣した。出陣のとき、ヨシャパテは立ち上がって言った。「ユダおよびエルサレムの住民よ。私の言うことを聞きなさい。あなたがたの神、主を信じ、忠誠を示しなさい。その預言者を信じ、勝利を得なさい。」それから、彼は民と相談し、主に向かって歌う者たち、聖なる飾り物を着けて賛美する者たちを任命した。彼らが武装した者の前に行き、こう歌うためであった。「主に感謝せよ。その恵みはとこしえまで。」彼らが喜びの声、賛美の声をあげ始めたとき、主は伏兵を設けて、ユダに攻めて来たアモン人、モアブ人、セイル山の人々を襲わせたので、彼らは打ち負かされた。アモン人とモアブ人はセイル山の

### 弟子をつくる指導者

住民に立ち向かい、これを聖絶し、根絶やしにしたが、セイルの住民を全滅させると、互いに力を出して滅ぼし合った。ユダが荒野に面した物見の塔に上ってその大軍のほうを見渡すと、なんと、死体が野にころがっている。のがれた者はひとりもない。ヨシャパテとその民が分捕りをしに行くと、その所に、武具、死体、高価な器具を数多く見つけたので、これを負いきれないほど、はぎ取って、自分のものとした。あまりにも多かったので、彼らはその分捕りに三日かかった（第二歴代誌 20:20-25、一部強調）。

信仰に満ちた賛美は、防御と供給をもたらします！

賛美の力について、更に調べたい場合は、ピリピ 四章六から七節（賛美が平安をもたらす）、第二歴代誌五章一から十四節（賛美は神の臨在をもたらす）、使徒の働き十三章一から二節（賛美は神の目的とご計画を明らかにする）、そして使徒の働き十六章二十二から二十六節（賛美は神の保護と捕らわれ人の解放をもたらす）を参照してください。



## 第二十一章

### クリスチャンの家庭 (The Christian Family)

神こそが、当然ながら家族を発案されたお方です。従って、神こそが、家族がどう機能すべきかについての洞察力を与え、また家族の破滅を招く落とし穴についての警告も与えてくださいます。実に主はみことばから、家族という体制について、また各人が担う役割について、数多くの指針を与えてくださいました。これらの聖書の教えに従う時、神が家族に楽しんで欲しいと既にご用意されている全ての祝福を、彼らは体験することになるでしょう。反対にその教えに違反した場合、その結果は破滅と心痛です。

#### 夫と妻の役割 (The Role of Husband and Wife)

神はクリスチャン家庭を、ある体制に従わせました。この枠組みは家庭生活において安定を与えるので、サタンは神のご計画をどうにかしてねじ曲げようと必死です。

第一に、神は夫を家族という単位の頭として立てました。これによって、夫は自分勝手に妻や子供を支配する権利を与えられた訳ではありません。神は夫を頭として家族を愛し、守り、養い、導くように召しました。神はまた、妻がその夫の指導権に身を委ねるよう言いました。これは聖書からも明らかです。

妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。

なぜなら、キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだ

の救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。 教

## 弟子をつくる指導者

会がキリストに従うように、妻も、すべてのことにおいて、夫に従うべきです（エペソ 5:22-24）。

夫は妻の霊的な頭ではありません—イエスこそがその役割を果たす方です。イエスは教会の霊的な頭であり、クリスチャンの妻も夫も同様に、教会の一部なのです。しかし、家庭では、クリスチャンの夫が妻と子供の頭となり、彼らはその神が与えた権威に従うべきです。

では、妻はどの程度夫に従うべきなのでしょう。パウロの言った通り、妻は全てにおいて夫に従うべきです。この規則のたった一つの例外は、夫が妻に神のみことばに反することを求めたり、彼女の良心が咎めることをするように要求する場合です。勿論、クリスチャンの夫なら、妻に神のみことばや彼女の良心に逆らうことをさせることはないはずです。夫は妻の主ではありません—イエスだけが、彼女の人生の主なのです。もし妻が誰に従うかを選ばなくてはならないのなら、イエスを選ぶべきです。

夫は、神がいつも「夫の味方」をすることは限らないことを肝に銘じておくべきです。神はかつてアブラハムにその妻サラの言うことに従うよう命じました（創世記 21:10-12参照）。聖書にはまた、アビガイルがその愚かな夫、ナバルに従わないことで、大惨事を逃れた（第一サムエル 25:2-38参照）ことが記録されています。

### 夫に対する神の言葉（God's Word to Husbands）

夫に対し、神はこのように言っています。

夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい…そのように、夫も自分の妻を自分のからだのように愛さなければなりません。自分の妻を愛する者は自分を愛しているのです。だれも自分の身を憎んだ者はいません。かえって、これを養い育てます。それはキリストが教会をそうされたのと同じです。私たちはキリストのからだの部分だからです…それはそうとして、あなたがたも、おのおの自分の妻を自分と同様に愛しなさい。妻もまた自分の夫を敬いなさい。

## クリスチャンの家庭

い（エペソ 5:25、28-30、33）。

夫は、キリストが教会を愛したように、妻を愛するよう命じられています。それは、決して小さな責任ではありません！どんな妻でも、イエスという、献身的な愛をもって、ご自分の命を捧げたこのお方が愛するように、彼女を愛してくれる人には、喜んで従うでしょう。キリストがご自身のからだである教会を愛するように、夫はその妻である女性を自分の「体の一部」（エペソ 5:31）として愛さなくてはなりません。もしクリスチャンの夫が妻を、神の命じる通り愛すならば、彼は彼女を養い、思いやり、敬い、助け、励まし、時間を共に過ごすでしょう。もし夫が妻を愛する責任をきちんと負っていないのならば、夫は自分自身の祈りが妨げられるという危険を冒していることとなります。

同じように、夫たちよ。妻が女性であって、自分よりも弱い器[からだ]だということをわきまえて妻とともに生活し、いのちの恵みとともに受け継ぐ者として尊敬しなさい。それは、あなたがたの祈りが妨げられないためです（第一ペテロ 3:7、一部強調）。

勿論、口論や不一致が完全でない結婚などあり得ません。しかし、互いへの誓約と、私たちの人生になる御霊の實の成長を通して、夫と妻は調和して生きることを学び、クリスチャンの結婚生活の中で増え続ける祝福を体験できるのです。全ての結婚生活に存在する、避けて通れない問題を通して、夫婦は互いにキリストの似姿へと更に成長することを共に学べるのです。

夫と妻の役割について、更に調べたい場合は、創世記二章十五から二十五節、箴言十九章十三節、二十一章九、十九節、二十七章十五から十六節、三十一章十から三十一節、第一コリント十一章三節、十三章一から八節、コロサイ三章十八から十九節、第一テモテ三章四から五節、テトス二章三から五節、第一ペテロ三章一から七節を参照してください。

### 夫婦の性生活（Sex in Marriage）

神が性交を発案された方であり、明らかに神はそれを生殖と喜びの為に造られま

## 弟子をつくる指導者

した。しかし、性的な関係は、人生の終わりまで結婚の誓約によって結ばれた者同士によってのみ楽しめるべきものであることが、聖書には明白に記されています。

結婚外で持たれる性的関係は、姦淫または不貞として区分されます。使徒パウロは、そのようなことを行う者たちは神の国を相続しないと述べました（第一コリント 6:9-11参照）。クリスチャンは、誘惑を受け、姦淫もしくは不貞の行為を行う可能性はありますが、その人は霊において大きな咎めを受け、それがその人を悔い改めに導くでしょう。そして、その人は悔い改めるべきです！

パウロはまた、夫と妻の性的責任について、具体的な導きを与えました。

しかし、不品行を避けるため、男はそれぞれ自分の妻を持ち、女もそれぞれ自分の夫を持ちなさい。夫は自分の妻に対して義務を果たし、同様に妻も自分の夫に対して義務を果たしなさい。妻は自分のからだに関する権利を持ってはおらず、それは夫のものです。同様に夫も自分のからだについての権利を持ってはおらず、それは妻のものです。互いの権利を奪い取ってはいけません。ただし、祈りに専心するために、合意の上でしばらく離れていて、また再びいっしょになるというのならかまいません。あなたがたが自制力を欠くとき、サタンの誘惑にかからないためです（第一コリント 7:2-5）。

この箇所では、夫婦どちらも自分のからだに関する権利を持っていない為、夫婦の営みは、夫もしくは妻からの「報酬」として用いられるべきではないことが、非常に明白にされています。

また、夫婦の営みは神からの賜物であり、夫婦内に制限されている限り、それは穢れたものでも、罪深いものでもありません。パウロはクリスチャン夫婦に性的関係で結ばれるよう励ましました。更に、箴言にはクリスチャンの夫向けにこのような助言があります。

あなたの泉を祝福されたものとし、あなたの若い時の妻と喜び楽し

## クリスチャンの家庭

め。愛らしい雌鹿、いとしいかもしかよ。その乳房がいつもあなたを酔わせ、いつも彼女の愛に夢中になれ（箴言 5:18-19）。<sup>62</sup>62

もしクリスチャン夫婦が、互いに満足の行く性的関係を楽しむべきであるのなら、夫と妻は、男性と女性の性的性質に大きな違いがあることを理解していなくてはなりません。比較すると、男性の性的性質は物理的である一方、女性のそれは彼女の感情に密接に関係しています。男性は視覚的な刺激によって性的に興奮します（マタイ 5:28参照）。それに対して、女性の場合は、関わり合いや接触によって性的に興奮します（第一コリント 7:1参照）。男性は目に訴える女性に対して性的に惹かれますが、一方、女性は相手に単なる肉体的な魅力以上のものを感じて、性的に惹かれる傾向があります。従って、賢い妻は常に夫を喜ばせる為に、彼女の最も美しい状態を見せます。そして賢い夫は、妻に一日の終わりに突然、「性的に興奮する」ことを求める代わりに、妻を抱擁し、親切で思いやりのある行動を常にとることでその愛情を示しています。

男性の性欲の度合いは、体内に蓄積される精液と一緒に増加する傾向にあります。一方女性の性欲は、排卵周期によって増減します。男性は数分もしくは数秒で、性的に興奮し、絶頂を迎えることができますが、女性はもっと長くかかります。男性は一般的に言って、数秒で実際の性交の身体的準備は整えられますが、女性の体は三十分程は準備ができていないかもしれません。従って、賢い夫は愛撫、接吻、また妻が結果として性交の準備ができるように、彼女の体のそれらの部分を手先により刺激を与えるといった形で前戯の時間を持つでしょう。もし夫が妻の体のそれらの部分がどこにあたるのかわからないのであれば、夫は彼女に尋ねるべきです。更に、夫はたった一度しか絶頂にたちすることができませんが、妻は数回そのような時があることを夫は知っておくべきです。妻は彼女が望むことなら受けるということを、夫は知っておくべきです。

---

<sup>62</sup> 62 神は度を越えて堅いお方ではないという更なる証拠に、雅歌 7:1-9 とレビ記 18:1-23 を参照のこと。

## 弟子をつくる指導者

クリスチャンの夫と妻がそれぞれの必要をお互い正直に話し合い、異性がどのように違うかをなるべく多く学ぶということは必須です。何カ月も、何年もかけてコミュニケーションを図り、発見と実践を通して、夫と妻の性的関係にある祝福は、増加の一途をたどることでしょう。

### クリスチャン家庭の子供 (Children of a Christian Family)

子供はクリスチャンの親に服従し、完全に従順であることを教わるべきです。もし子供がそうすれば、長寿とその他の祝福が約束されています。

子どもたちよ。主にあつて両親に従いなさい。これは正しいことだからです。「あなたの父と母を敬え。」これは第一の戒めであり、約束を伴ったものです。すなわち、「そうしたら、あなたはしあわせになり、地上で長生きする。」という約束です(エペソ 6:1-3)。

クリスチャンの父親は、家庭の頭として、子供をしつける一番の責任が与えられています。

父たちよ。あなたがたも、子どもをおこらせてはいけません。かえって、主の教育と訓戒によって育てなさい(エペソ 6:4)。

父親の責任は、二要素から成ります—主のしつけと教育です。まずは、子供のしつけの重要性から見ていきましょう。

### 子供のしつけ (Child Discipline)

一度もしつけられていない子供は、自分勝手に、権威に逆らう子に育ちます。両親によってあらかじめ確立されている妥当な規則に対して、子供が完全に反抗を表した時はいつでも、その子はしつけられるべきです。子供は単なる間違いや、子供らしい無責任に対しては罰を受けるべきではありません。しかし大抵の場合、子供は自分の間違いや無責任に対する結果に直面することを求められるべきで、そうすることで、子供を、大人の人生の現実に備える助けとなります。

子供が小さければ、神のみことばが教えるように、お尻をたたくといった手段でしつけるべきでしょう。勿論、新生児は対象外です。しかし、これは赤ん坊がいつも

## クリスチャンの家庭

自分の好きなようにできる、という意味ではありません。事実、赤ん坊は生まれて以降、主導権は母親と父親にあることが、その子に明白となっているべきです。とても小さいうちから、子供がしていること、もしくは、しようとしていることを単純に我慢させることで、子供は「いけません」という言葉の意味を教わることは可能です。一度「いけません」の意味を子供がわかり始めれば、子供が従わないような時にその子のお尻を軽くたたくことによって、更にその意味がよくわかるようになるでしょう。これが継続的に行われれば、子供は幼少期に従順を学ぶでしょう。

両親は、子供が泣く度にすぐその子が欲しがるものを与える、といった子供の好ましくない行動を励まさないことで、親の権威を確立することもできます。それをしてしまうと、自分が欲しいものを手に入れるには泣けばよい、ということをお教わります。もしくは、子供がかんしゃくを起こしたり、駄々をこねる度に親が子供の要求を呑むならば、そのような親は、そのような好ましくない行動を実際励ましてしまうこととなります。賢い両親は、子供の好ましい行動だけに報います。

お尻をたたくことで身体的な害をもたらすべきではありませんが、それは不従順な子供が短い間泣く位の十分な痛みを確実に伴わせるべきです。このようにすれば、子供は、不従順と痛みの関係を学びます。聖書にはこのように書いてあります。

むちを控える者はその子を憎む者である。子を愛する者はつとめてこれを懲らしめる…愚かさは子ども心につながれている。懲らしめの杖がこれを断ち切る…子どもを懲らすことを差し控えてはならない。むちで打っても、彼は死ぬことはない。あなたがむちで彼を打つなら、彼のいのちをよみから救うことができる…むちと叱責とは知恵を与える。わがままにさせた子は、母に恥を見させる(箴言 13:24; 22:15; 23:13-14; 29:15)。

両親は単純にその規則を施行する際、子供に従わせようと脅す必要はありません。子供が完全に従わなければ、その子はお尻をたたかれるべきです。もし親が不従順な子供にお尻をたたくことを脅しているだけならば、親は単に子供に繰り返されている

## 弟子をつくる指導者

不従順を助長するだけです。結果として、子供は親の脅しの声が大きくなるまでは従順にならなくてよいことを学びます。

お尻をたたくという行為が行われた後は、子供を抱擁し、親の愛を再確認させてあげるべきです。

### 子供を教育する (Train Up a Child)

クリスチャンの親は、子供を教育する責任があることに気づかなくてはなりません。箴言22章6節にこうある通りです。「若者をその行く道にふさわしく教育せよ。そうすれば、年老いても、それから離れない」(一部強調)。

教育は不従順に対する訓戒だけでなく、良い行動に対する報いも含まれます。子供はその子の良い行動や好ましい特徴が強化されるよう、親から常に褒められている必要があります。親は子供を褒め、抱擁や口づけすることで、また子供と一緒に過ごす時間を通して、子供に親の愛を伝えることができます。

「訓練する」とは「従わさせる」という意味です。従って、クリスチャンの親は子供に、教会に行くことや毎日祈ること等について、する、しないの選択肢を与えるべきではありません。子供は、自分にとって何が最善であるかを知るのに十分な責任能力はありません。だからこそ、神は子供に親を与えました。子供が正しく教育されたかを確認する努力と労力を惜しまない親には、箴言22章6節にある通り、その子が年老いても正しい道から離れないと、神は約束しています。

子供が大きくなるにつれて、責任も増やしてあげるべきです。効果的な親業の目標は、成人期に負う全ての責任に対して、子供を徐々に準備させることです。子供が大きくなるにつれて、自分で物事を決める自由は着実に増やされるべきです。更に、十三歳以上の子は、自分の決断とその結果に責任を負うこと、また、親は子が問題を被らないよう、「子の責任回避」の為にいつもいてくれる訳ではないことを理解すべきです。

### 親に与えられた教育責任 (Parents' Responsibility to Instruct)

私たちはエペソ六章四節で読む通り、父親は子供を主にあって訓戒するだけでな



## クリスチャンの家庭

く、教育する責任も与えられています。聖書的なモラル、クリスチャンとしての人格、また理論を子供に教えるのは教会の責任ではありません。それは父親の仕事です。自分の子に神について教えることを、日曜学校の先生任せにしていることは、とても深刻な過ちです。神はモーセを通してイスラエルにこう命じました。

私がきょう、あなたに命じるこれらのことばを、あなたの心に刻みなさい。これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい。あなたが家にすわっているときも、道を歩くときも、寝るときも、起きるときも、これを唱えなさい（申命記 6:6-7、一部強調）。

クリスチャンの親は子供が小さい時から、神はどんなお方か、どれ程神がその子を愛しておられるかを教えながら、子供に神を紹介すべきです。小さい子供は、イエスの誕生、地上での歩み、死、そして復活の話を習うべきです。多くの子供は、五、六歳までに福音のメッセージを理解でき、主に仕える決心ができます。すぐその後（六、七歳まで、もしくはそれ以前に）、異言で語る証拠を伴う聖霊のバプテスマを受けることができます。勿論、子供はそれぞれ個人差があるので、鉄則を作ることはできません。要は、クリスチャンの親にとって、自分の子供の霊的訓練は、地上で最優先されるべきことなのです。

### 子供を愛する十の法則（Ten Rules for Loving Your Children）

1). 子供を怒らせてはなりません（エペソ 6:4参照）。子供は大人のように振舞えません。子供から求めすぎると、あなたを喜ばせることは不可能と思い、それを試みなくなります。

2). 自分の子と他人の子を比較してはなりません。その子にしかない神から与えられた性質や賜物を、あなたがどれ程高く評価しているかを子供に伝えましょう。

3). 子供は家族の大切な一員であることがわかるように、家の中で責任を与えましょう。達成感を味わうことで、健全な自尊心を構築します。

4). 子供と時間を過ごしましょう。そうすることで、あなたにとって子供は大切な存在であることを教えましょう。物理的なものを与えることは、あなた自身を子供

## 弟子をつくる指導者

に与えることの代わりとはなりません。更に、子供はその子が一番時間を費やす人たちからの影響を最も受けます。

5). もし否定的なことを言わなくてはならないならば、それを肯定的な方法で言うように試みましょう。私は子供たちが私に従わなかった時、彼らに向かって「悪い子」だと一度も言ったことはありませんでした。代わりに、私は息子にこう言うでしょう。「君はいい子なんだ。いい子は、今君がしたようなことはしないぞ！」（そして、私は息子のお尻をたたくでしょう。）

6). 「いけません」という言葉の意味は、「私はあなたを大切に思っている」であることに気づきましょう。子供がいつも自分のやり方を通せるのなら、子供はあなたが子供に規制を与える程大切に思っていないということを、直観的に悟ります。

7). 子供は親を真似ることを知っておきましょう。子供は親の模範から学びます。賢い親は子供に向かって、「私のしているようにはではなく、私の言う通りにしなさい」とは決して言いません。

8). 子供をいつも問題から救い出してはいけません。ただ、つまづきの石だけ取り除いてあげましょう。子供が通る道の踏み石は残しておきましょう。

9). 心から神に仕えましょう。霊的に生ぬるい親の子供は、大人になって神に仕え続けることは滅多にないことを私は見てきました。親がまだ救われていないクリスチャンの子供と、キリストに熱心に仕える親を持つ子供は、「巣立ってから」神に仕え続けることが多いです。

10). 子供に神の言葉を教えましょう。親はよく子供の教育を優先させますが、子供が受けられる最も重要な教育である、聖書の教えを与えられていません。

### ミニストリー、結婚、家庭の優先順位 (The Priorities of Ministry, Marriage and Family)

恐らく、クリスチャンの指導者が犯す最も共通の過ちは、そのミニストリーに熱心になり過ぎて、結婚や家族を顧みないことです。そのような人たちは、彼らの犠牲は「神の働きの為」であると言って、自分たちを正当化します。

## クリスチャンの家庭

弟子をつくる指導者が、神への真の従順と献身はその人の配偶者や子供との関係に表れていることに気づく時、この過ちは改善されます。指導者はキリストが教会を愛したようにその妻を愛していないのならば、もしくは主にある育成と訓戒の為に子供と過ごす必要な時間を費やすことを怠っているのならば、その指導者は、自分は神に献身しているとは到底言えません。

更に、「ミニストリー」の為に、自分の配偶者や子供をないがしろにすることは、大抵それが全くの肉の働きであることの証拠であり、その人自身の力によって行っていることは明らかです。多くの組織的な教会の牧師は、教会の全てのプログラムを運営し続ける為に重労働を課せられ、自分を疲れさせていますが、彼らはこの良い例であると言えるでしょう。

イエスは、イエスが与えるくびきは負いやすく、荷は軽いと約束しました（マタイ 11:30参照）。イエスは、どんな指導者にも、自分の家族の代わりに、世の中や教会に献身的に仕えるよう召してはいません。事実、長老になる必要条件として、「自分の家庭をよく治めること」（第一テモテ 3:4）があります。その人とその家族の関係は、その人が指導者にふさわしいかどうかを試すものです。

各地を訪れて回るミニストリーに召されている人たちや、時々家を不在にしなくてはならない人たちは、家にいる時は特に自分の家族に集中してより多くの時間を費やす必要があります。キリストの御からだに属する仲間の教会員たちは、そのような調整が可能となるように、できる範囲で協力すべきです。弟子をつくる指導者は、自分の子供こそ自分の一番弟子であることを知っています。それに失敗するようなら、その人は自分の家の外で弟子をつくるのにふさわしいとは到底言えません。



## 第二十二章

### 御霊によって導かれる方法 (How to Be Led by the Spirit)

ヨハネによる福音書には、信者の人生の中での聖霊の役割について、イエスが沢山の約束を与えたことが記録されています。

わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちに住むからです（ヨハネ14:16-17）。

しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます（ヨハネ14:26）。

しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたにとって益なのです。それは、もしわたしが去って行かなければ、助け主があなたがたのところに来ないからです。しかし、

## 弟子をつくる指導者

もし行けば、わたしは助け主をあなたがたのところに遣わします…  
わたしには、あなたがたに話すことがまだたくさんありますが、今あなたがたはそれに耐える力がありません。しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。御霊はわたしの栄光を現わします。わたしのものを受けて、あなたがたに知らせるからです。父が持つておられるものはみな、わたしのものです。ですからわたしは、御霊がわたしのものを受けて、あなたがたに知らせると言ったのです（ヨハネ 16:7、12-15）。

イエスは弟子たちに、聖霊が彼らにとどまることを約束しました。聖霊は彼らを助け、教え、導き、これから起こることを示すとも言われました。私たちは、今日のキリストの弟子として、聖霊が私たちのためにそれらのことをしてくださらないと考える理由は何もありません。

驚いたことに、イエスが去ることは弟子たちの益となると、イエスは彼らに言いました。さもないと、聖霊は来てくださらなかったからです！そのことは弟子たちに、聖霊との交わりは、イエスが彼らといつも物理的に一緒にいてくださった時のように、とても親しくなれることを示唆していました。そうでなければ、イエスよりも聖霊がいてくださることの方が良いということにはならなかったでしょう。聖霊を通して、イエスは私たちと共に、また私たちの中にいてくださるのです。

では、どのような方法で聖霊が私たちを導いてくださることを、私たちは期待すべきなのでしょう。

聖霊といふ御名の御名自体に、その一番の役割は、私たちを聖く、神に従順になるよう導くことであると示唆しています。聖さに関する事、また神の御旨の地上における成就に関する全ては、聖霊の導く領域の中にあります。聖霊は、キリストが与えた全ての一般的な命令と、私たちを特に召している固有のミニストリーに関するキリス

## 御霊によって導かれる方法

トの具体的な命令に従うよう私たちを導きます。ですから、もしあなたがあなたのミニストリーに具体的な聖霊の導きを求めているのなら、あなたは、聖霊が案内する人生全体の聖さ向かって導かれなくてはなりません。一方を他方抜きにいただくことはできません。余りにも多くの指導者は、自分のミニストリーが偉大な功績を収め、奇跡を得るよう、聖霊に導かれたいと願っていますが、人生全体の聖さという「些細な」面については気にしたくありません。それは大きな間違いです。イエスはどのようにして弟子たちを導いたのでしょうか。まず第一に、聖さについて弟子たちに大まかに教えることからでした。それに比べて、イエスが弟子たちのミニストリーにおける仕事について、具体的な導きを与えることは稀でした。つまり、具体的な導きは私たちに内住する聖霊が与えるのです。ですから、あなたが聖霊に導かれることを求めているのなら、あなたが聖められるよう導くイエスにまず第一に従わなくてはなりません。

使徒パウロは、このように書きました。「神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです」（ローマ 8:14）。私たちが神の子供とさせるのは、私たちが神の御霊に導かれることです。従って、神の子供は皆、御霊に導かれています。勿論、その御霊の導きに従うかどうかは、自由意志と善悪を判断する良心を与えられた者として、私たちにかかっています。

そうであるとすれば、クリスチャンは誰も、聖霊によって導かれる方法を教えられる必要は全くありません。なぜなら、聖霊が全てのクリスチャンを既に導いておられるからです。一方、サタンは神の子供たちを間違った方向へ導こうとしており、また私たちの内にも、神の御旨に反する方向へ私たちを導こうとする肉の古い性質が残っています。従って、信者はそれらの他の導きから御霊の導きを見分けることをよく学ぶ必要があります。それは、成熟への道の過程です。しかし、基本的な事実はこれです—御霊はいつも、記録されている神のみことばに沿って私たちを導き、御霊はいつも、正しいこと、神を喜ばすこと、神に栄光をもたらすことをするように私たちを導きます（ヨハネ 16:14）。

## 弟子をつくる指導者

### 聖霊の御声 (The Voice of the Holy Spirit)

聖霊は時として幻や預言、または神の御声を実際に聞く等の、あっと驚くような方法で私たちを導くことが聖書に書かれています。聖霊が私たちと意思疎通を図る為にもっとよく取る方法は、私たちの霊に「印象を与えること」です。つまり、もし御霊が私たちに何かをさせたい時、御霊は私たちを、霊において、「強く引っ張る」ことで、私たちはある方向へ「導かれている」という印象を受けます。

私たちは自分の霊の声を、自分の「良心」と呼ぶことができるかもしれません。クリスチャンは皆、自分の良心がどんな声をしているか知っています。私たちが罪を犯すよう誘惑される時、私たちの耳が、「その誘惑に負けるな」という声を聞く訳ではありません。むしろ、私たちは単に、その誘惑に対抗している何かを自分の内に感じるだけです。また、もし私たちが誘惑に負け、罪を犯した後でも、私たちの耳が、「あなたは罪を犯した！あなたは罪を犯した！」という声を聞く訳ではありません。私たちは単純に、内から咎めを感じ、それは今私たちが悔い改めに、また私たちの罪の告白へと導いているのです。

同様に、御霊は私たちを教え、一般的な真理とその理解へと導きます。御霊は突然の啓示（それはいつも聖書に沿ったものです）を私たちの内に分け与えます。それらの啓示は、誰か他の人に説明するのに十分程時間を要するかもしれませんが、聖霊によれば数秒しかかかりません。

同様に、聖霊はミニストリーの仕事においても、私たちを導きます。私たちはそれらの内なる導きや印象に敏感になることを、とにかく意識的に努力しなくてはなりません。そうすれば、私たちは徐々に（試行錯誤しながら）ミニストリーに関する事について、御霊の導きに従順となることを学ぶでしょう。私たちが神の御旨に関して過ちを犯すのは、私たちの頭（つまり私たちの合理的または非合理的な考え）が私たちの心（つまり御霊が私たちを導くところ）の邪魔をしている時なのです。

### どのように御霊はイエスを導いたか (How the Spirit Led Jesus)

イエスは内なる印象によって、聖霊に導かれました。例えば、マルコによる福音



## 御霊によって導かれる方法

書には、イエスがヨハネから洗礼を受け、聖霊によるバプテスマを受けた直後に起きたことについて、このように描写しています。

そしてすぐ、御霊はイエスを荒野に追いやられた（マルコ 1:12、一部強調）。

イエスは、荒野に導く声を聞いた訳でも、幻を見た訳でもありませんでした。イエスは単純に追いやられたのでした。聖霊は大抵そのように私たちを導きます。私たちはあることをするよう促しや導き、また咎めを感じるのです。

イエスは、屋根から床ごと降ろされた中風の人に、罪が赦されたことを伝えた時、その場にいた律法学者たちは、イエスが冒瀆の罪を犯していると考えていたことを知っていました。どうしてイエスは彼らが考えていたことを知っていたのでしょうか。マルコによる福音書にはこのように書いてあります。

彼らが心の中でこのように理屈を言っているのを、イエスはすぐにご自分の霊で見抜いて、こう言われた。「なぜ、あなたがたは心の中でそんな理屈を言っているのか」（マルコ 2:8、一部強調）。

イエスは、彼らが考えていることをご自身の霊で見抜いていました。もし私たちが、自分の霊に敏感になれば、私たちも、神の御働きに反対する者たちに対してどのように答えるべきかわかることができるのです。

### パウロのミニストリーにおける御霊の導き (The Spirit's Leading in the Ministry of Paul)

使徒パウロは、少なくとも二十年間ミニストリーで仕えた後、聖霊の導きに従う方法を習得しました。ある程度御霊は、パウロのミニストリーに「これから起こること」を彼に示しました。例えば、パウロがエペソで彼のミニストリーを終えようとしているところで、パウロには彼の人生とミニストリーが次の三年間でどのような道を辿るのかについて、ある思いがありました。

これらのことが一段落すると、パウロは御霊の示しにより、マケドニヤとアカヤを通ったあとでエルサレムに行くことにした。そして、

## 弟子をつくる指導者

「私はそこに行ってから、ローマも見なければならぬ」と言った

(使徒の働き 19:21)。

パウロは彼の思いではなく、彼の霊の示しにより、この将来の導きに従うことにしたことに注目してください。それは聖霊が彼の霊に、まずマケドニヤとアカヤ（両方現在のギリシャに位置する）に行ってから、エルサレムに行き、最終的にローマへ行くように導いていたことを示しています。そして、パウロはその通りの航路を通りました。もしあなたの聖書に、パウロの三回目の伝道旅行や彼のローマへの旅の経路を示す地図があるのなら、あなたはエペソ（パウロが御霊の示しにより経路を決定した場所）から、マケドニヤとアカヤを通して、エルサレムに着き、その数年後ローマへ行ったことを辿ることができるでしょう。

更に正確に言うと、パウロはマケドニヤとアカヤを通り、それから彼はマケドニヤへ一度戻り、エーゲ海沿岸を巡り、それからエーゲ海沿岸を南下して小アジアへ行きました。その旅の間、パウロはミレトの町に留まり、エペソ近辺の教会の長老たちを呼び集め、彼らに以下の通り別れを告げました。

いま私は、心を縛られて、エルサレムに上る途中です。そこで私にどんなことが起こるのかわかりません。ただわかっているのは、聖霊がどの町でも私にはっきりとあかしされて、なわめと苦しみが私を待っていると言われることです（使徒の働き 20:22-23、一部強調）。

パウロは、「心を縛られて」と言いましたが、それは彼が彼の霊にあって、自分がエルサレムへ導かれている咎めを受けていたことを意味していました。パウロはエルサレムに着いたら何が起こるのかについて、全体像が見えていた訳ではありませんが、彼の旅の過程で留まった全ての町で、なわめと苦しみがそこで彼を待っていることを聖霊があかしされたと言いました。聖霊はどのように、それらのなわめと苦しみがエルサレムでパウロを待っていることを「あかしされた」のでしょうか。

## 二つの事例 (Two Examples)

## 御霊によって導かれる方法

私たちは、使徒の働き第二十一章にこの質問に答える二つの出来事が記録されているのを見つけます。最初の事例は、パウロが地中海の港町、ツロに上陸した時のことです。

私たちは弟子たちを見つけ出して、そこに七日間滞在した。彼らは、御霊に示されて、エルサレムに上らぬようにと、しきりにパウロに忠告した（使徒の働き 21:4）。

この一節のために、評論家の中には、パウロがエルサレムへの旅を続けたことで、パウロは神に従わなかったと結論付ける人たちがいます。しかし、使徒の働きの中で私たちに与えられている残りの情報を考慮すれば、そのような結論に安易に至ることはできません。この事例について読み進めながら、このことがより明確となるでしょう。

どうやらツロの弟子たちは霊的に敏感で、エルサレムの地で困難がパウロを待っていることを見分けていたようです。彼らは後に、パウロを行かないよう説得を試みました。新約聖書のウィリアム訳は、この同じ箇所を以下のように訳してこのことを裏付けています—「御霊が与えた印象のために、彼らはエルサレムに足を踏み入れないうパウロに警告し続けた」。

しかしながら、パウロが彼らの警告にもかかわらずエルサレムへの旅を続けたので、ツロの弟子たちの説得は成功しませんでした。

このことは、私たちが私たちの霊に受けた啓示に自分たちの解釈を付け加えないよう十分注意しなくてはならないことを、私たちに教えています。パウロはエルサレムに困難が彼を待っていることは十分承知していましたが、それにもかかわらず彼がそこを旅することは神の御旨であることもパウロは知っていました。もし神が聖霊によって私たちに何かを示す時、それは私たちが行ってそのことを言わなくてはならない、という意味とは限りません。ですから、私たちは御霊が啓示することに自分たちの解釈を加えないように注意しなくてはなりません。

### カイザリヤへの寄り道 (Caesarea Stop Over)

## 弟子をつくる指導者

パウロのエルサレムへの旅における次の滞在地は、港町カイザリヤでした。

幾日かそこに滞在していると、アガボという預言者がユダヤから下って来た。彼は私たちのところに来て、パウロの帯を取り、自分の両手と両足を縛って、「『この帯の持ち主は、エルサレムでユダヤ人に、こんなふうには縛られ、異邦人の手に渡される。』と聖霊がお告げになっています。」と言った（使徒の働き 21:10-11）。

ここにも、聖霊がパウロに「なわめと苦しみ」がエルサレムで彼を待っていることを証するもう一つの例があります。しかしアガボは、「それ故主は言われます。『エルサレムへ行ってはならない！』」とは言いませんでした。神はパウロをエルサレムへ導いておられたのであって、そこでパウロを待っている困難について語るアガボの預言を通して、パウロを単に整えていたのです。アガボの預言は、その数カ月前にパウロが霊にあって既に知らされていたことを、単に確認したに過ぎないことに注目してください。私たちは決して預言によって導かれるべきではありません。もし預言が私たちが既に知っていることを確認するものでないのなら、私たちはそれに従うべきではありません。

アガボの預言は、パウロの霊の内に受けた単なる印象を超えたものであった為に、それは「驚異的な導き」と私たちが考えるようなものでした。幻を見たり、御声を実際聞くといった「驚異的な導き」を神からいただく時というのは、大抵、私たちが行こうとしている道は決して楽ではないことを神はご存知であるからです。パウロの場合、群衆によって殺されそうになったり、囚人としてローマに向けて旅をする前に数年獄中で過ごしました。しかし、この驚異的な導きをパウロが受けたお陰で、これら全てにあってもパウロは完全な平安を保つことができ、結果は必ず好ましいものになるという確信がありました。

もしあなたが、驚異的な導きというものを受けていないのなら、そのことについて余り心配すべきではありません。なぜなら、もしそれをあなたが必要とするなら、あなたがそれを得ることを神はご存知だからです。しかし私たちは、内なる証人に敏

## 御霊によって導かれる方法

感となり、その方に導かれるよういつも努力すべきです。

### 投獄と神の御旨 (In Chains and in God's Will)

パウロがエルサレムに着くと、彼は捕えられ、投獄されました。もう一度、パウロはイエスの幻というかたちで、ある驚異的な導きを受けました。

その夜、主がパウロのそばに立って、「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなければならない。」と言われた（使徒の働き 23:11）。

イエスは、「パウロよ。あなたは一体ここで何をしているのか。あれ程エルサレムに来るなと警告したではないか！」と言わなかったことに注目してください。イエスは、実際には、パウロが数カ月前彼の霊の中で受けた導きについての確認を与えたのでした。パウロはエルサレムでイエスに代わって証言する為に、神の御旨の只中にいました。パウロは最終的にローマでもキリストを述べ伝えました。

私たちは、パウロの元々の呼びの一部は、ユダヤ人や異邦人の前だけでなく、王の前でも証することであったことを忘れてはなりません（使徒の働き 9:15参照）。パウロのエルサレム及び、その後カイザリヤでの投獄を通して、パウロは総督ペリクス、ポルキオ・フェスト、そしてアグリッパ王に証する機会が与えられ、アグリッパ王については、もう少しでイエスを信じる「キリスト者にされる」（使徒の働き 26:28）ところでした。ついにパウロは、ローマに送られ、ローマ皇帝ネロ自身を前に証することになりました。

### 皇帝ネロに会いに行く途中 (On the Way to See Nero)

パウロをイタリアへ連れて行く航海の途中で、パウロは彼の霊に敏感になることで、神からの導きを再び得ました。その船の船長や航海士がクレテの島のどの港で冬を過ごすかを決めている最中に、パウロはある啓示を受けました。

かなりの日数が経過しており、断食の季節もすでに過ぎていたため、もう航海は危険であったので、パウロは人々に注意して、「皆さん。この航海では、きっと、積荷や船体だけではなく、私たちの生

## 弟子をつくる指導者

命にも、危害と大きな損失が及ぶと、私は考えます。」と言った（使徒の働き 27:9-10、一部強調）。

パウロが通っていた苦境を考えると、更なる「驚異的な導き」を神がパウロに与えたのは当然のことにように思います。その厳しい試練を超えて、パウロはすぐに難破という状況に直面しました。そしてすぐその後には、猛毒蛇にかまれました（使徒の働き 27:41-28:5）。全てはうまく行くということをもっと知らせてくれる天使がいるのは素晴らしいことです！

### いくつかの実用的な助言 (Some Practical Advice)

聖霊の導きであるそれらの感覚や印象を求めて、あなたの霊に注意を向けてみてください。最初は恐らく、聖霊が導いていない時にあなたを導いていると考えてしまう間違いを犯すでしょうが、それはよくあることです。それで落胆せずに、根気よく続けてください。

また、静かな場所で、異言で祈ったり、聖書を読むといったことで時間を費やすことも助けとなります。異言で祈る時、祈っているのは私たちの霊であり、そうすることで、私たちは自然と自分の霊にもっと敏感になっていきます。神のみことばを読み、思い巡らすことでも、みことばは霊の糧なので、私たちは自分の霊に更に敏感になります。

ある導きを神があなたに与える時、その導きは弱まりません。それは、自分自身の考えや感情ではなく、神があなたを導いておられることにあなたが確信を持つために、暫くの間大きな決断について祈り続けなくてはならないことを意味しています。あなたがある方向性について祈っている時に心に平安がないのなら、平安が来るまで、その方向へ行くべきではありません。

あなたが驚異的な導きを受けるなら、それは良いことですが、幻を見ることや、御声を耳で聞くことを「信じる」よう試みてはなりません。神はそれらの方法で導くとは約束していません（神の御旨によりそのような方法を用いる時もありますが）。しかし、内なる証人を通して、神が私たちを導くことはいつも信頼できることです。

## 御霊によって導かれる方法

最後に、あなたに与える神のお告げに付け加えてはなりません。神は、将来あなたに用意されている何らかのミニストリーについてあなたに啓示するかもしれませんが、あなたは、実際数年かかるかもしれないことを、数週間で成就すると思いを違える可能性があります。このことは私の経験からわかります。思い込みをしてはなりません。パウロは何が彼の将来に待っているのか、ほんの少し見せられましたが、全てを知っていた訳ではありませんでした。なぜなら、神が全てを示さなかったからです。神は私たちにいつも信仰によって歩み続けて欲しいと願っているのです。





## 第二十三章

### 礼典 (The Sacraments)

イエスは教会にたった二つの礼典を与えました—洗礼 (マタイ 28:19参照) と聖餐 (第一コリント 11:23-26参照) です。まずは洗礼について見ていきましょう。

新約において、全ての信者は三つの異なるバプテスマを経験すべきです。それらは、キリストの御からだへのバプテスマ、水のバプテスマ、そして聖霊のバプテスマです。

人が生まれ変わる時、その人は自動的にキリストの御からだに洗礼されます。つまり、その人はキリストの御からだである教会の一員となるのです。

一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです (第一コリント 12:13後半; またローマ 6:3; エペソ 1:22-23; コロサイ 1:18, 24も参照のこと)。

聖霊のバプテスマを受けることは、救われた後に体験することで、このバプテスマは全ての信者が受けることができ、またそうあるべきです。

最後に、全ての信者は、悔い改め、主イエスを信じた後すぐに、水の洗礼を受けるべきです。バプテスマは、新しい信者が最初に示す従順の行為となるべきです。

それから、イエスは彼らにこう言われた。「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。信じてバプテスマを受ける者は、救われます。しかし、信じない者は罪に定められま

## 弟子をつくる指導者

す（マルコ 16:15-16、一部強調）。

初代教会は、バプテスマを授けよ、とのイエスの命令を非常に重要なものとして受け止めていました。殆ど例外なく、新しい改心者は、信者になるとすぐにバプテスマを受けました（使徒の働き 2:37-41; 8:12-16, 36-39; 9:17-19; 10:44-48; 16:31-33; 18:5-8; 19:1-5参照）。

### 聖書的でないバプテスマについての考え (Some Unscriptural Ideas About Baptism)

ある人たちは、新しい改心者に数滴の水を振りかけて行う滴礼というバプテスマを行っています。これは正しいことなのでしょうか。新約聖書でバプテスマを授けると訳されている動詞はギリシャ語の**baptizo**に当たり、それは文字通り「浸す」を意味します。従って、水のバプテスマを受ける人たちは、水の中に浸されるべきであって、単に数滴振りかけられるわけではありません。クリスチャンのバプテスマの象徴としても、これから詳しく見ていきますが、この浸水の考えを支持しています。

幼児洗礼を行うところもありますが、聖書にはそのような例がありません。幼児洗礼の起源は、バプテスマを受けた瞬間に人は生まれ変わると考える「洗礼による新生」という誤った教義にあります。聖書は明確に、人はバプテスマを受ける前にまずイエスを信じるべきであると教えています。従って、悔い改め、イエスに従うのに十分な年齢にたちしている子供はバプテスマを受けることができますが、乳幼児や幼児はそれに適していません。

ある人たちは、イエスを信じて、水の洗礼を受けるまではその人は救われていないと教えています。それは聖書によると正しい解釈ではありません。使徒の働き十章四十四から四十八節と、十一章十七節には、コルネリオの家の者たちは、その誰もが水の洗礼を受ける前に救われ、聖霊のバプテスマを受けたと書いてあります。誰でもまず救われない限り、その人が聖霊のバプテスマを受けることはあり得ません（ヨハネ 14:17参照）。

ある人たちは、人は特定のやり方でバプテスマを受けない限り救われたとは言え

## 礼典

ないと教えています。聖書は、正しい洗礼の仕方として、特別なしきたりを教えてはいません。例えば、ある人たちは、「イエスの御名によって」（使徒の働き 8:16）ではなく、「父、子、聖霊の御名によって」（マタイ 28:19）バプテスマを受けた人は救われていないと言っています。このような人たちは、ぶよはこして除くが、らくだはのみこむ、パリサイ人を支配していた同じ霊をはっきりと示しています。世が福音を聞こうと待っているというのに、クリスチャンは、洗礼を授ける際のふさわしい言葉について議論しているとは、何と言う悲劇でしょう。

### バプテスマの聖書的象徴 (The Scriptural Symbolism of Baptism)

水の洗礼は、既に新しい信者の人生に起きたいくつかのことを象徴しています。最も単純には、それは私たちの罪が洗い流され、今は神の御前に聖い者として立っていることを表しています。サウロ（パウロ）が改心してすぐ後、彼のもとにアナニヤが遣わされた時、アナニヤはパウロにこう言いました。

さあ、なぜためらっているのですか。立ちなさい。その御名を呼んでバプテスマを受け、自分の罪を洗い流しなさい。』（使徒の働き 22:16、一部強調）。

第二に、水の洗礼はキリストの死と埋葬、そして復活に私たちが与かる象徴です。私たちが生まれ変わり、キリストの御からだに属すると、私たちはそれ以降「キリストの内に」とあり、神は見なしています。イエスは私たちの身代わりとなったので、イエスがなされた全ての御業は私たちの為であると、神は見なしています。従って、「キリストの内に」私たちは死んで、葬られ、死から新しい人としてよみがえったのです。

それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたではありませんか。私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたよう

## 弟子をつくる指導者

に、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです（ローマ 6:3-4）。

あなたがたは、バプテスマによってキリストとともに葬られ、また、キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、キリストとともによみがえらされたのです（コロサイ 2:12）。

新しい信者は皆、水の洗礼を受ける時にこれらの大切な真理を教わり、また、イエスを信じた後なるべく早く洗礼を受けるべきです。

## 主の晩餐 (The Lord's Supper)

主の晩餐は旧約聖書の過越の祭りにその起源があります神がイスラエルをエジプトでの奴隷生活から解放したその夜、神は各家族に一歳の子羊をほふり、その血を取り、家々の二本の門柱と、かもいにつけるよう指示しました。「死の使い」はその夜国中を巡り、エジプトにいる全ての初子を打ちましたが、イスラエルの家々にしるしとしてあった血を使いが見る時、そこを「通り越した」のでした。

更に、イスラエルはその夜過越の子羊を食べ、七日間種を入れないパンを食べて、これを祭りとして祝うべきとされました。これはイスラエルが守るべき永遠のおきてとなり、毎年同じ時期に祝いました（出エジプト 12:1-28）。明らかに過越の子羊は、第一コリント五章七節で「私たちの過越」と呼ばれる、キリストを表しています。

イエスが主の晩餐を設けた時、イエスと弟子たちは過越の祭りを祝っていました。イエスは過越の祭り中十字架にかかり、「世の罪を取り除く神の小羊」（ヨハネ 1:29）として、その呼びを真に成就したのでした。

私たちが食べるパンと私たちが飲む杯は、私たちの為に壊されたイエスの体と、私たちの罪を取り除く為に流されたイエスの血潮を象徴するものです。

また、彼らが食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福した後、これを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取って食べなさい。これはわたしのからだです。」 また杯を取り、感謝をささげて後、

## 礼典

こう言って彼らにお与えになった。「みな、この杯から飲みなさい。これは、わたしの契約の血です。罪を赦すために多くの人のために流されるものです。ただ、言うておきます。わたしの父の御国で、あなたがたと新しく飲むその日までは、わたしはもはや、ぶどうの実で造った物を飲むことはありません」 (マタイ 26:26-29)。

使徒パウロはこのことについて、以下のように伝えました。

私は主から受けたことを、あなたがたに伝えたのです。すなわち、主イエスは、渡される夜、パンを取り、感謝をささげて後、それを裂き、こう言われました。「これはあなたがたのための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行ないなさい。」夕食の後、杯をも同じようにして言われました。「この杯は、わたしの血による新しい契約です。これを飲むたびに、わたしを覚えて、これを行ないなさい。」 ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです (第一コリント 11:23-26)。

### 時と方法 (When and How)

聖書はどの位の頻度で主の晩餐を行うべきかについて言っていませんが、初代教会では、それは家の教会の集まりにおける食事の時として、定期的に行われていたことは明らかです (第一コリント 11:20-34参照)。主の晩餐は、過越の食事をその起源としている為、イエスが執り行った時、それは食事の一部であったし、また、初代教会では食事として取られていました。従って、今日でもそのように行われるべきです。しかし未だに多くの教会は、「人の伝統」に従っています。

私たちは、主の晩餐を畏敬の念をもって行うべきです。使徒パウロは、ふさわしくない方法で主の晩餐を取ることは、深刻な違反行為であると教えました。

したがって、もし、ふさわしくないままでパンを食べ、主の杯を飲む者があれば、主のからだと血に対して罪を犯すことになります。

## 弟子をつくる指導者

ですから、ひとりひとりが自分を吟味して、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい。みからだをわきまえないで、飲み食いするならば、その飲み食いが自分をさばくこととなります。そのために、あなたがたの中に、弱い者や病人が多くなり、死んだ者が大ぜいいます。しかし、もし私たちが自分をさばくなら、さばかれることはありません。しかし、私たちがさばかれるのは、主によって懲らしめられるのであって、それは、私たちが、この世とともに罪に定められることのないためです。（第一コリント 11:27-32）。

私たちは、主の晩餐を取る前に自分自身を吟味しなくてはならないと戒められています。そして、もし自分の内に何か罪を見つけたのなら、私たちはそれについて悔い改め、告白する必要があります。さもなければ、私たちは「主のからだと血に対して罪を犯す」ことをし兼ねません。

イエスは私たちを罪から解放する為に、死んでその血を流したのですから、知っている罪を告白することなしに、イエスのからだと血を表すパンや杯を取ることは決してしたくありません。もしそれをするならば、コリントのクリスチャンたちのように、その飲み食いは、病や早死という形で自分たちを裁くこととなります。神の懲らしめを回避するには、私たちは「自分自身を裁く」こと、つまり、自分の罪を認めて、悔い改めることです。

コリントのクリスチャンたちの一番の罪は、彼らの愛の欠如でした。つまり、彼らは、互いに口論し、争っていました。事実、彼らの思いやりのなさは、主の晩餐の時にさえ、他が空腹である時にある者たちは食べていたり、またある者たちは酒に酔っていたことで、それを表していました（第一コリント 11:20-22参照）。

私たちが食べるパンは、キリストのからだを表すものであり、それは今日の教会です。私たちがひと塊のパンから取る時、それは一つの御からだとしての私たちが一致していることを表しています（第一コリント 10:17参照）。そのキリストの御からだの象徴であるパンを取る一方で、御からだに属する他の人と争って、調和を崩すと

## 礼典

は、何と言う罪でしょう！主の晩餐を取る前に、私たちはキリストにある兄弟姉妹との関係が正しいかどうか、きちんと確かめる必要があります。





## 第二十四章

### 問題提起、赦し、そして和解 (Confrontation, Forgiveness and Reconciliation)

私たちがイエスの山上の垂訓を始めの方の章で学んだ時、私たちに罪を犯す人を私たちが赦すことがどれ程大切かについて学びました。もし私たちがその人たちを赦さないのなら、イエスははっきりと、神も私たちが赦しないと宣言しました（マタイ 6:14-15参照）。

誰かを赦すとはどういう意味でしょうか。このことについて聖書が教えていることを見ていきましょう。

イエスは赦すことを、人の借金を帳消しにすることに例えています（マタイ 18:23-35参照）。誰かがあなたからお金を借りていましたが、あなたに支払う義務からその人を解放することを想像してみてください。その人の借金を記録した文書をあなたが破棄するのです。あなたはもはや、支払われることを期待せず、借金をしていいた人に対しても、もはや怒りはありません。あなたは今、お金を貸していた時とは違ってその人を見ています。

私たちはまた、神に赦されることとは一体何なのかと考える時、赦す意味をより良く理解できます。神が私たちの罪を赦す時、神はその罪の為に私たちに対して怒っていることはもはやありません。私たちがしてしまったことの為に、訓戒したり、罰を与えたりすることはありません。私たちは神と和解するのです。

## 弟子をつくる指導者

同様に、私が誰かを本当に赦すのならば、私はその人を自分の心から解き放ち、憐みを表すことで、公正や復讐を求める思いを乗り越えます。私はもはや私に罪を犯した人に対して怒ってはいません。私たちは和解するのです。もし私が誰かに対して怒りや苦い思いを抱いているのなら、私はその人をまだ赦してはいないのです。

クリスチャンはこのことについてよく自分たちをだましています。彼らはしなくてはならないこととわかっている為に、誰かを赦しますが、心の内の深いところではまだ苦い思いを抱いているのです。彼らは、心に押し込んだ怒りが表面化しないように、加害者と会うことを避けます。私自身、そのようなことをしたことがある為に、このことがよくわかります。どうか、自分たちを騙すことはやめましょう。イエスは仲間の信者に対して怒ることすら、私たちにして欲しくないと願っておられることを思い出しましょう（マタイ 5:22参照）。

ここで、質問です—あなたに嫌な思いをさせた人が赦しを求める場合と、赦しを求めない場合、あなたはどちらの方が赦しやすいと思いますか。勿論、自分の非を認め、赦しを請う人の方が赦しやすいと、私たちは皆同意できます。実際、赦しを請う人を赦すことの方が、そうしない人を赦すよりも格段の差で簡単なようです。赦しを求めない人を赦すことは、実際には不可能のように思えてしまいます。

違う角度から考えてみましょう。もしあなたに嫌な思いをさせた人が、悔い改めたのにも関わらず赦すことを拒むことも、悔い改めない人を赦すことを拒むことも、両方間違っているとすれば、どちらがより大きな罪となるでしょうか。もし両方が間違っているとすれば、悔い改めた人を赦さない方がより悪いとされることは、恐らく皆同意できると思います。

### 聖書からの驚きの事実 (A Surprise from Scripture)

これらは全て次の質問へと導きます—神は、私たちに対して罪を犯し、へり下りがなく、自分の罪を認めず、赦しをも求めない人全てを、私たちが赦すことを望んでいるのでしょうか。

聖書をよく見ると、その答えは「そうではない」ということがわかります。多く

## 問題提起、赦し、そして和解

のクリスチャンにとって驚いたことに、聖書は明白に、敵を含む全ての人を愛すること命じていますが、私たちは全ての人を赦すように要求されてはいません。

例えば、イエスは私たちに対して罪を犯す仲間の信者をただ赦すよう求めているのでしょうか。いいえ、違います。そうでなければ、マタイ十八章十五から十七節に書かれた和解の四つの手順に従うよう言いはしなかったでしょう。そこに示された手順の最後には、私たちが嫌な思いにさせた人が悔い改めない場合、その人を除名するよう書いてあります。

また、もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、行って、ふたりだけのところで責めなさい。もし聞き入れたら、あなたは兄弟を得たのです。もし聞き入れないなら、ほかにひとりかふたりをいっしょに連れて行きなさい。ふたりか三人の証人の口によって、すべての事実が確認されるためです。それでもなお、言うことを聞き入れようとしないなら、教会に告げなさい。教会の言うことさえも聞こうとしないなら、彼を異邦人か取税人のように扱いなさい。

明らかに、第四段階（除名）に到ちると、相手を嫌な思いにさせる人は赦しを得ることはできません。なぜなら、赦しと除名は相入れない行動だからです。誰かが「私たちはあの人を赦してから、除名しました」と言うのを耳にすると、違和感を覚えるでしょう。なぜなら、赦しの結果は和解であり、断絶ではないからです。（神が、「私はあなたを赦すが、これから私はあなたと一切関わりを持たない」と言われたら、一体どう思いますか。）イエスは、私たちに除名される人を、ユダヤ人が関係を持たず、実際忌み嫌っていた二種類の人々、「異邦人か取税人のように」扱うよう言いました。

イエスの示した四つの手順に、相手に嫌な思いをさせる人が悔い改めないのなら、手順の第一段階でも、第二段階でも、第三段階でも、赦しは得られません。これらの段階を経てもその人が悔い改めないのなら、その人は次の段階へ連れて行かれ、悔い改めない人として扱われます。その人が「あなたの言うことを聞き入れる」（つま

## 弟子をつくる指導者

り、悔い改める) ことをした時のみ、あなたは「兄弟を得た」(つまり、和解された) と言うことができます。

人に問題提起する目的は、赦しが得られる為です。しかし、赦しは相手の心を傷つけた人の悔い改めに基づいて、断言されます。従って私たちは、(1) 私たちが私たちの心を傷つける人を赦せるように、(2) その人が悔い改める希望を持って (3) 問題提起することです。

そうであるが故に、私たちに対して罪を犯し、尚かつその問題をぶつけられた後でも改めない仲間の信者を、私たちが単に赦すことを神は望んでいないと、私たちは確信をもって言うことができます。これは勿論、攻撃的な信者を憎む権利を私たちに与える訳ではありません。反対に、私たちは私たちが傷つける人を愛し、赦し、和解したいが故に、その人に問題提起するのです。

しかし、イエスが示す手順の第三段階まで踏んで、和解に向けてあらゆる努力をしたのなら、その第四段階は、キリストに従ってその関係を断ち切ることです。<sup>63</sup> 私たちが姦淫を犯す者、酒に酔う者、同性愛者等々(第一コリント 5:11参照) と言った、いわゆる疑わしいクリスチャンと関係を持つべきではないと同様に、私たちは、御からだ全体の確認があるにもかかわらず、悔い改めを拒むような、いわゆるクリスチャンとは関係を持つべきではありません。そのような人たちは真のキリストに従う者でなく、神の教会に不名誉をもたらします。

### 神の模範 (God's Example)

他人を赦すという私たちの責任について更に見ていくと、なぜ神はご自身がしないことを私たちにするように要求するのかもしれない。確かに神は罪人たちを愛し、ご自身の憐みの手を伸べ、赦しを与えます。神は御怒りを抑えて、その人たちに悔い改める時間をも与えます。しかし、実際に赦されるかどうかは、その人たちの悔い改め次第です。神は、罪人たちが悔い改めない限り彼らを赦しません。では

---

<sup>63</sup> 63 これはまた、もしその関係を断ち切った人が後になって悔い改めたならば、その時には赦しが認められることをイエスは期待するであろう、と言える根拠となる。

## 問題提起、赦し、そして和解

なぜ、神は更なる赦しを私たちに期待していると考えerべきなのでしょうか。

全体を通して見ると、それほどまでに神の御目には非常に重大な、人を赦さないという罪は、正確に言えば、私たちに赦しを請う人たちを赦さない、という罪であると言えるのではないのでしょうか。イエスが教会の規律として四つの手順の概要を説明した丁度その後にペテロが以下の質問をしたのは興味深いところです。

そのとき、ペテロがみもとに来て言った。「主よ。兄弟が私に対して罪を犯したばあい、何度まで赦すべきでしょうか。七度まででしょうか。」 イエスは言われた。「七度まで、などとはわたしは言いません。七度を七十倍するまでと言います。(マタイ 18:21-22)。

イエスがほんの少し前に、悔い改めない兄弟に対しては、たった一つの罪の故に異邦人か取税人のように扱いなさいと言ったばかりなのに、数多くの罪を何度も犯し続ける、悔い改めない兄弟を、ペテロはイエスが彼に赦すよう望んでいるとでも思ったのでしょうか。それはあり得ないように思います。もう一度言いますが、あなたは人を赦したのなら、憎しみをもってその人を扱ってはなりません。

私たちに考えさせるもう一つの質問はこれです—もしイエスが私たちに、何度も繰り返し多くの罪を犯す、悔い改めない兄弟を赦すことを求めている、つまりそのような人と私たちとの関係を維持するよう求めているのだとすれば、なぜイエスは、たった一つの罪、つまり姦淫の罪を配偶者が犯し、それを悔い改めない場合、その配偶者との婚姻関係を破棄することを私たちに許すのでしょうか(マタイ 5:32参照)。

<sup>64</sup>64 それではむしろ一貫性がないように思えます。

### 詳細 (An Elaboration)

イエスがペテロに兄弟を四百九十回赦すことを伝えた直後、イエスはイエスの意図したことをペテロにわからせる為にたとえ話をしました。

---

<sup>64</sup> 64 もし姦淫を犯す配偶者がクリスチャンならば、離婚に踏み切る前に、和解の為にイエスが示した手順の第三段階までは踏む様、配偶者を導くべきである。もし姦淫を犯す配偶者が悔い改めるならば、私たちはイエスの命令に従ってその人を赦すことを期待される。

## 弟子をつくる指導者

このことから、天の御国は、地上の王にたとえることができます。王はそのしもべたちと清算をしたいと思った。清算が始まると、まず一万タラント[これはイエスの時代の平均年収で計算すると五千年以上分相当である]の借りのあるしもべが、王のところに連れて来られた。しかし、彼は返済することができなかつたので、その主人は彼に、自分も妻子も持ち物全部も売って返済するように命じた。それで、このしもべは、主人の前にひれ伏して、『どうかご猶予ください。そうすれば全部お払いいたします。』と言った。しもべの主人は、かわいそうに思って、彼を赦し、借金を免除してやった。ところが、そのしもべは、出て行くと、同じしもべ仲間、彼から百デナリ[これは百日分相当である]の借りのある者に出会った。彼はその人をつかまえ、首を絞めて、『借金を返せ。』と言った。彼の仲間は、ひれ伏して、『もう少し待ってくれ。そうしたら返すから。』と言って頼んだ。しかし彼は承知せず、連れて行って、借金を返すまで牢に投げ入れた。彼の仲間たちは事の成り行きを見て、非常に悲しみ、行って、その一部始終を主人に話した。そこで、主人は彼を呼びつけて言った。『悪いやつだ。おまえがあんなに頼んだからこそ借金全部を赦してやったのだ。私がおまえをあわれんでやったように、おまえも仲間をあわれんでやるべきではないか。』こうして、主人は怒って、借金を全部返すまで、彼を獄吏に引き渡した。あなたがたもそれぞれ、心から兄弟を赦さないなら、天のわたしの父も、あなたがたに、このようになさるのです。」（マタイ 18:23-35）

最初のしもべはその主人に赦しを求めた為に赦されたことに注目してください。そして、次のしもべはまた、最初のしもべに赦しを謙虚に求めたことにも注目してください。最初のしもべは自分が聞き入れられたものを次のしもべに与えず、そのこと

## 問題提起、赦し、そして和解

は最初のしもべの主人を非常に怒らせました。そのような中で、ペテロは、イエスのたとえ話には全くない、赦しを全く求めず、悔い改めもない兄弟を赦すことを、イエスに期待されていると思ったのでしょうか。そうであることは考え難く、特にイエスはペテロにちょうど、兄弟が正しくその問題点を突き付けられても悔い改めない場合は、その人を異邦人か取税人のように扱うよう教えていたのだから尚更です。

もし私たちが心から私たちの兄弟を赦さない時に、イエスが必ず与えると断言した罰という観点から考えても、ペテロが悔い改めのない兄弟を赦すことを求められていたと考えることは、更にあり得ないような話です。イエスは、私たちが以前に免除された負債を全て元に戻し、私たちが到底払い戻すことのできないものを返し切るまで、酷く苦しめる者の手に私たちを引き渡すと約束しました。しかしそれは、*神さえもお赦しにならない一人の兄弟を赦さないから*と言って、一人のクリスチャンに与えられる罰としてふさわしいものと言えるでしょうか。もし兄弟が私に対して罪を犯すなら、その人は神に対して罪を犯します。また、神はその人が悔い改めない限り、その人を赦すことはありません。ご自身が赦さない誰かを私が赦していないからと言って、神が私を裁いたら、それは公平と言えるでしょうか。

### 概要 (A Synopsis)

ルカの十七章三から四節には、イエスが私たちに、仲間の信者を赦すことを期待していることが簡潔に記録されています。

気をつけていなさい。もし兄弟が罪を犯したなら、彼を戒めなさい。

そして悔い改めれば、赦しなさい。 かりに、あなたに対して一日に七度罪を犯しても、『悔い改めます。』と言って七度あなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」 (一部強調)

これ以上明白にできるでしょうか。イエスは私たちに仲間の信者が悔い改める時、その人を赦すことを求めています。私たちが、「私たちの負いめをお赦してください。 私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました」と祈る時、私たちは神に私たちが他の人に対して既にしたことを自分たちにもしてくださいと頼んでいるのです。

## 弟子をつくる指導者

私たちは頼むことをしない限り、神が私たちが赦してくださることを期待してはなりません。そうであるのなら、なぜ私たちに赦しを頼まない人を私たちが赦すよう神が求めていると、私たちは考えてしまうのでしょうか。

もう一度言いますが、以上のことによって、私たちに罪を犯した、キリストにある兄弟姉妹に対し、私たちが悪意を抱いても良いという訳ではありません。私たちは互いに愛し合うことを命じられています。だからこそ、私たちは、自分たちに対して罪を犯す仲間の信者を問い正すことが命じられており、それによってその人との和解があり、またその人が罪を犯した相手である神とも和解が持てるかもしれないのです。愛とはこのようなことを成し遂げます。しかし余りにも多くの場合、クリスチャンは、自分を傷つけた仲間の信者を赦すと言いながら、実際のところ、それは単に問題提起を避ける言い訳でしかないのです。彼らは自分たちを傷つける人をどんなことをしても避け、自分たちが受けた傷について大概話しています。そこには和解はありません。

私たちが罪を犯す時、神は私たちが愛し、また赦したい故に、その聖霊によって私たちの内に咎めを与えます。私たちは、そこに悔い改めと赦し、また和解があるように、私たちに対して罪を犯す仲間の信者を愛をもって問い正すことで、神を見習うべきです。

神はいつもご自分の民が互いを真の愛をもって愛し合うことを望んでおられます。その愛は戒めをも与えますが、恨みを抱かせることはありません。この命令はモーセの律法の中に含まれています。

心の中であなたの身内の者を憎んではならない。あなたの隣人をねんごろに戒めなければならない。そうすれば、彼のために罪を負うことはない。復讐してはならない。あなたの国の人々を恨んではならない。あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。わたしは主である（レビ記 19:17-18、一部強調）。

## 反論 (An Objection)



## 問題提起、赦し、そして和解

しかし、マルコ十一章二十五節にあるイエスの言葉はどうでしょうか。それは、相手が赦しを求めているといまいと、私たちは誰に対しても全てのことを赦さなくてはならないことを示していないでしょうか。

また立って祈っているとき、だれかに対して恨み事があったら、赦してやりなさい。そうすれば、天におられるあなたがたの父も、あなたがたの罪を赦してくださいませ。」

この一節が、私たちがこれまでこの主題について既に考慮してきた他の全ての節に取って代わるものではありません。私たちは既に、私たちの赦しを請う人を私たちが赦さないことは、神を非常に悲しませることであると知っています。従って、私たちはこの節を、しっかりと確立された事実に基づいて解釈することができます。イエスは単にここでは、私たちが神の赦しを求めるならば、私たちは他人を赦さなくてはならないことが強調されているだけです。イエスは赦しの更なる具体的な仕組みについてとか、人がそれを他の人から受ける為にしなくてはならないことについて等を私たちに教えている訳ではありません。

イエスはまたここで、私たちが神から赦しを受ける為には、私たちは神に赦しを求めなくてはならない、と言っている訳ではないことに注目してください。そうであるなら、私たちは、私たちが赦しを求めると、神の赦しが断言されることが書かれた聖書箇所を全て無視すべきでしょうか（マタイ 6:12; 第一ヨハネ 1:9参照）。ここでイエスは赦しを求めることについて触れていないので、私たちが罪を犯す時に、私たちは神から赦しを求める必要はないと考えるのでしょうか。聖書が私たちに言うことを考慮すると、それは愚かな思い込みと言えるでしょう。また、私たちが他人を赦すことは相手が赦しを求めることに基づいてなされる、と教える聖書の他の全ての箇所を無視することも、同様に愚かなことです。

### 他の反論 (Another Objection)

イエスは、ご自分の着物を分けていた兵士たちの為に、「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」（ルカ 23:34）と祈

## 弟子をつくる指導者

らなかったでしょうか。これは神が赦しを求めない人をも赦すことを示してはいませんか。

示しています。しかし、ある程度に限られています。それは、神が無知な者たちに憐みを、一定の赦しを表すことを示しています。神は完全に義なる方なので、人々が罪を犯していることをわかっている時にだけ、その責任を問います。

イエスの兵士たちの為の祈りは、彼らの天国行きを保証した訳ではありません—彼らはイエスがどなたかを知らなかった為、彼らが神の御子の上着を分けた責任は問われないことだけが保証されました。兵士たちは、イエスを単にもう一人の死刑囚としか考えていませんでした。従って、彼らが実際何をしていたのかがわかっていたら、何かしらの裁きを受けるべき行いに、神は憐みをかけました。

しかし、何らかの方法でイエスの苦しみに対して責任がある他の全ての人を神が赦してくださるようイエスは祈ったのでしょうか。いいえ、しませんでした。例えば、ユダについて、イエスは彼は生まれなかったほうがよかったと言いました（マタイ 26:24 参照）。イエスは確かに、御父にユダを赦すようには祈りませんでした。全く逆です—もし詩篇六十九篇や百九篇を、実際ペテロがしたように（使徒の働き 1:15-20 参照）イエスについての預言的な祈りと見なすならば、そうでなかったことは明らかです。イエスはユダという無知ではない違反者の上に裁きが下るように祈りました。

キリストに倣おうと努力する者として、私たちは、イエスの上着を分けた無知な兵士たちのような未信者の場合のように、私たちに対して何をしたのか無知で分からない人たちに対しては、憐みをかけるべきです。私たちの敵を愛し、私たちを憎む者に善を行い、私たちをのろう者を祝福し、私たちを侮辱する者のために祈る、と言った様な、途轍もない憐みを、私たちが未信者に対して示すことを、イエスは求めています（ルカ:27-28 参照）。私たちは、彼らの憎しみを私たちの愛で溶かし、悪を善で打ち負かすことを試みなくてはなりません。この考えはモーセの律法にさえ記述されていました。

### 問題提起、赦し、そして和解

あなたの敵の牛とか、ろばで、迷っているのに出会った場合、必ずそれを彼のところに返さなければならない。あなたを憎んでいる者のろばが、荷物の下敷きになっているのを見た場合、それを起こしてやりたくなくても、必ず彼といっしょに起こしてやらなければならない（出エジプト 23:4-5）。

もしあなたを憎む者が飢えているなら、パンを食べさせ、渴いているなら、水を飲ませよ。あなたはこうして彼の頭に燃える炭火を積むことになり、主があなたに報いてくださる（箴言 25:21-22）。

イエスは私たちに私たちの敵を愛し、私たちが憎む者に善を行い、私たちがのろう者を祝福し、私たちが侮辱する者のために祈るよう命じましたが（ルカ 6:27-28 参照）、イエスは一度もそのような人たちの誰をも赦すようには言わなかったことは興味深いところです。イエスは、彼らの誰をも赦すよう私たちに言いませんでした。私たちは、実際に人を赦さずにその人を愛することができます。それはまるで、神が人を赦さずに愛するのと同じです。私たちは人を愛することができるだけでなく、私たちは神にそうするように命じられている通り、人を愛すべきでもあります。そして、私たちの彼らへの愛は、私たちの行動によって表されるべきです。

イエスが着物を分けた兵士たちを赦すよう御父に祈ったというだけで、この主題について聖書から私たちが学んできた他の全てを無視して、私たちに対して罪を犯す全ての人を赦すよう神が私たちに求めていることを証明しているとは言えません。それは単に、私たちに対して犯した罪について無知な人たちを、私たちは自動的に赦し、未信者に対して普通ではない憐みを見せることを単に教えているだけです。

### ヨセフについて (What About Joseph?)

ヨセフは、自分の身を奴隷として売った兄弟を憐み深く赦した人ですが、私たちに対して罪を犯す人を全て誰でも、その人が赦しを求める、求めざるとにかかわらず、どう赦すべきかの模範として時として用いられます。しかし、それが本当にヨセフの

## 弟子をつくる指導者

話が私たちに教えているのことなのでしょうか。

そうではありません。

ヨセフは彼の兄弟を少なくとも一年間、彼らを悔い改めへと導く為に、継続的に試練と試みに会わせました。ヨセフは兄弟の一人をエジプトに何カ月もの間投獄しました（創世記 42:24 参照）。ヨセフの兄弟がついに彼らの罪に気づかされ（創世記 42:21; 44:16 参照）、兄弟の一人が、当時父親が気に入っていた息子の身代わりとなるために自分自身を差し出した時に（創世記 44:33 参照）、ヨセフは、彼を奴隷に売った時の嫉妬深い、自分勝手な兄弟たちではもはやないことを悟りました。それから、これら全てのことを通った後に、ついにヨセフは自分の正体を証し、彼に対して罪を犯した人たちに恵み深い言葉をかけてやりました。ヨセフは直ちに彼らを「赦していた」なら、兄弟たちは決して悔い改めることはしなかったでしょう。また、それこそが「すぐに誰でも赦す」という今日の教えの欠陥の一つです。私たちに對して罪を犯した兄弟を、その問題に直面することなく赦すことで、結果として、(1) 和解に至らない偽の赦しをもたらし、(2) その兄弟は悔い改めず、結果的に霊において成長しないこととなります。

### マタイ十八章十五から十七節の実践 (The Practice of Matthew 18:15-17)

イエスが示した和解に向けた四つの手順は、極めて単純に理解できますが、それを実際に行うとなるとより複雑になる可能性があります。イエスが四つの手順の枠組みを示した時、イエスは兄弟 A は、兄弟 B が彼に対して罪を犯したことを確信し、そして事実そうである、という視点から話されました。しかしながら現実では、兄弟 A が間違っている場合もあります。ここでは、全ての考えられるシナリオを見ていきましょう。

もし兄弟 A は、兄弟 B が彼に対して罪を犯したことを確信するなら、兄弟 A はまず、自分が過度に批判的になって、兄弟 B の目の中のちりを取ろうとしてはいいか確認すべきです。私たちが不快な思いにさせる些細なことは、実際、私たちが単に見逃して、憐みをかけてあげるべきことが多いです（マタイ 7:3-5 参照）。しかし、

## 問題提起、赦し、そして和解

もし兄弟 A にとって、兄弟 B にされた不快なことが重大であり、兄弟 A の中に赦せない気持ちがあるならば、兄弟 A は兄弟 B にこの問題をぶつけるべきです。

兄弟 A は、イエスの命令に従って、兄弟 B に愛を表しながら、内密にそれを行うべきです。兄弟 A の動機は愛であり、目的は和解であるべきです。彼は、兄弟 B のしたことについて、他の誰かに言う必要はありません。「愛は多くの罪をおおう」(第一ペテロ 4:8) からです。もし私たちが誰かを愛するならば、私たちはその人の罪を暴露はしないでしょ。むしろ、私たちはそれらを覆います。

兄弟 A が問題をぶつける際、それは柔和で、愛を表すものであるべきです。兄弟 A はこのような感じで話すべきです。「兄弟 B よ、私はあなたとの関係を本当に大切なものと考えています。しかしあることが起きて、それが私の心にあなたに対して壁を作っています。私はその壁がそこにあって欲しくないの、なぜ私は、あなたが私に対して罪を犯したと感じているのかを、あなたに言わなくてはなりません。そして、もし私側にこの問題について何か原因があるのなら、それを教えて欲しいのです。」それから、兄弟 A は兄弟 B に何が彼を不快にさせたかについて優しく語るべきです。

殆どの場合、兄弟 B は兄弟 A に不快な思いをさせたことについて、気づいてさえいないということが多です。ですから、それについて知らされるとすぐに、兄弟 B は赦しを求めます。もしそうなれば、兄弟 A は直ちに兄弟 B を赦すべきです。そこに和解がはたらいたこととなります。

他の考えられるシナリオとしては、兄弟 B が自分が犯した兄弟 A に対する罪を正当化しようと、兄弟 A が彼をその前に不快にさせていたことへの反応であると言う場合です。そのような場合は、兄弟 B は、それが起きた時に兄弟 A にそのことを伝えるべきでした。しかし、少なくとも今ついに何かしらの会話が持たれたことで、和解の希望があります。

そのような場合、互いに不快な思いを相手にさせられた両者は、何が起きたのかについて話し合い、各自の罪の程度に従って、相手方の非難を認め、それからお互いに赦しを受け合うということをするべきです。そこに和解が完成します。三つ目のシナ

## 弟子をつくる指導者

リオは、兄弟 A も B も、和解ができない場合です。従って、彼らは助けが必要であり、第二段階に行くべきです。

### 第二段階 (Step Two)

兄弟 A と兄弟 B の二人が、和解に向けての働きを誰が助けるかについて合意していれば最善です。理想的には、兄弟 C と D が兄弟 A と B の両方を知っていて、愛している、つまり彼らの公平さを保証できる人たちであるということです。そして兄弟 A と B に対する愛と尊敬から、二人の不和については、兄弟 C と D にのみ語られるべきです。

もし兄弟 B がこの時点で協力的でない場合、もう一、二人他に助けられる人を探すかどうかは兄弟 A 次第です。

もし兄弟 C と D が賢ければ、兄弟 A と B 二人の見解を聞くまでは、判断を下さないでしょう。兄弟 C と D が一度判断を下してしまったなら、兄弟 A と B はその判断に従い、一方もしくは両方に勧告された謝罪と補償を相手に与えなくてはなりません。

兄弟 C と D は、公平感を表す為に、また個人的なリスクを負わない様にと、実際は一方だけがすればよいところを、兄弟 A と B の両方に悔い改めの必要があると勧めることを試みるべきではありません。彼らは、もし兄弟 A か B のどちらかが彼らの判定を拒む場合、その彼らの示した臆病な判定について、後には教会全体に明らかにされることを知っておくべきです。真理を妥協して兄弟 A や B 両方との友情を保とうとする、兄弟 C と D が直面したような誘惑があるので、一人よりも二人で判定する方が良く、また二人ですることによってお互いに真理によって強められます。更に、二人で判決を出すことによって、その判決が兄弟 A と B からより重要視される傾向があります。

### 第三段階 (Step Three)

もし兄弟 A または B が兄弟 C と D によって示された判定を拒否する場合、この事柄は教会全体で話し合われることとなります。組織的教会ではこの第三段階に入る

### 問題提起、赦し、そして和解

ことは決してありません。そしてそれは、良い意味で、と言っていいのかもしれませんが。なぜなら、人々が一方を支持することで教会に分裂が起こることが避けられないと思われるからです。イエスは決して地域教会が一軒の家に収まりきらない程成長することは望んでおられませんでした。この小規模な会衆という家族では、皆がお互いの名前を知っており、兄弟 A のことも B のことも皆が気にしているという状態ですが、それこそ聖書が第三段階に必要な設定として意図していたものです。ですから組織的教会においては、第三段階は、兄弟 A と B の両方を知り、愛している人々から成る小グループという状況の中で取られるべきです。もし兄弟 A と B が違う地域教会に属しているのなら、それぞれの教会から最適な人材を何人か集めて、意思決定を行う機関として用いられることができます。

教会が一度判決を下したら、兄弟 A と B は、反逆の結果どうなるかを知りつつ、二人共それに従うべきです。謝罪され、赦しを得て、和解が成立します。

もし兄弟 A または B が勧告を受けた通り謝罪をすることを拒む場合、彼は教会から破門され、教会員は皆彼との交流を断つべきです。大抵、悔い改めを拒む人は、この時まで既に自ら身を引いているでしょう。また、この過程のどの段階においても、彼の思い通りに行かなかったなら、それよりももっと前にそうしていたかもしれません。これは、彼が霊の家族を愛することの責任を心から果たしていないことを表しています。

### 共通の問題 (A Common Problem)

組織的な教会で教会員同士の不和がある時、人々は単純に一つの教会を去り、次の所へ移ることで通常解決します。移る先には、どんなことをしてでも、自分の王国を建てたいと思い、他の牧師たちとの真の関係を持たない牧師がいて、そのような人たちを受け入れ、彼らの酷い話を聞いて共感を表し、彼らの側に立ってあげます。このようにして、キリストの命じた和解に向けた手順は、事実上無力化されます。そして、不快な思いをして教会を出て、そのような牧師に受け入れられたその人は、ほんの数カ月か数年の間に、何かに不快な思いをして、他の教会を見つけるためにそこか

## 弟子をつくる指導者

ら出て行くのです。

イエスは、教会は家に収まる位の大きさであり、地域教会の牧師たち、長老たち、または監督者たちは一つの御からだの中で一緒に働くものと考えておられました。従って、一教会員を破門することは、事実上、全ての教会から破門されることを意味しました。それぞれの牧師、長老、または監督者が、自分の教会に新しく入ろうとするクリスチャンに、以前の教会の背景について尋ね、そのような人を受け入れるべきか決断する為に、その人が以前行っていた教会の指導者に連絡することは、彼らの責任です。

### 聖なる教会に対する神のご計画 (God's Intention for a Holy Church)

組織的な教会にあるもう一つの共通の問題は、そのような教会は、見世物のためにだけに集まるような多くの人たちで成っており、彼らの人間関係は、元々単に社会的なものである為に、誰に対しても説明責任が殆ど、もしくは全くないということです。そこでは誰も、特に牧師たちは教会員がどのような生活を送っているのか知る術もなく、その結果、聖くない人々は、自分たちが通う教会に絶え間なく染みを付け、汚しています。外部の人たちは、そのような自称クリスチャンたちが未信者と何ら変わりのないことを見て裁きます。

このこと自体が、組織的教会という体制は神が意図した神の聖なる教会の形ではないことを証明していることは、誰が見ても明らかなはずです。聖くない、偽善的な人たちがいつも大きな組織的教会に隠れて、キリストに恥辱をもたらしています。しかし、マタイ十八章十五から十七節で私たちが読んだ通り、教会とは自ら聖めることができる御からだの献身的なメンバーである、聖なる人たちの集まる場所であると、イエスは明確に示しました。世は教会を見て、イエスの純粋な花嫁を見るのです。しかし、今日の教会を見る時、世は夫に不忠実な売春婦を見るのです。

この神の意図した、教会の自らを聖める働きは、パウロがコリントの教会の危機的な状況を指摘した時に明らかでした。御からだとして受け入れられていた人が、実際、彼の義母と姦淫の関係にありました。



## 問題提起、赦し、そして和解

あなたがたの間に不品行があるということが言われています。しかもそれは、異邦人の中にもないほどの不品行で、父の妻を妻にしている者がいるとのこと。それなのに、あなたがたは誇り高ぶっています。そればかりか、そのような行ないをしている者をあなたがたの中から取り除こうとして悲しむこともなかったのです。

私のほうでは、からだはそこにいなくても心はそこにおり、現にそこにいるのと同じように、そのような行ないをした者を主イエスの御名によってすでにさばきました。あなたがたが集まったときに、私も、霊においてともにおり、私たちの主イエスの権能をもって、このような者をサタンに引き渡したのです。それは彼の肉が滅ぼされるためですが、それによって彼の霊が主の日に救われるためです。

…私は前にあなたがたに送った手紙で、不品行な者たちと交際しないようにと書きました。それは、世の中の不品行な者、貪欲な者、略奪する者、偶像を礼拝する者と全然交際しないようにという意味ではありません。もしそうだとしたら、この世界から出て行かなければならないでしょう。私が書いたことのほんとうの意味は、もし、兄弟と呼ばれる者で、しかも不品行な者、貪欲な者、偶像を礼拝する者、人をそしめる者、酒に酔う者、略奪する者がいたなら、そのような者とはつきあってはいけない、いっしょに食事をしてはいけない、ということです。外部の人たちをさばくことは、私のすべきことでしょうか。あなたがたがさばくべき者は、内部の人たちではありませんか。外部の人たちは、神がおさばきになります。

その悪い人をあなたがたの中から除きなさい（第一コリント 5:1-5、9-13）。

この人は、明確に真の信者とは言えない為に、この人を和解に向けた四つの手順に通す必要はありませんでした。パウロは彼のことを、「兄弟と呼ばれる者」とか「悪

## 弟子をつくる指導者

い人」と呼びました。更に、その数節後で、パウロはこう書きました。

あなたがたは、正しくない者は神の国を相続できないことを、知らないのですか。だまされてはいけません。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、貪欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者はみな、神の国を相続することができません（第一コリント 6:9-10）。

はっきりとパウロは、コリント教会のこの人のように不道徳な人たちは、彼らの信仰がいかにか偽物であるかを表しており、それは正論だと確信していました。そのような人たちは兄弟として扱われるべきではなく、和解に向けた四つの手順を通させる必要もありません。彼らは交流を断たれ、「サタンに引き渡され」るべきです。そうすることで、教会は彼らの自己欺瞞を励まさずに済み、また彼らが「主の日に救われる」（第一コリント 5:5）為に、彼らに悔い改める必要があることをわかる希望があります。

今日、世界中の大規模な教会で、時として何百人もの見せかけクリスチャンがいますが、彼らは聖書の基準から言うと未信者であり、交流を持つべきではありません。聖書は明白に、悔い改めない不品行な者、姦淫をする者、同性愛者、酒に酔う者、等を教会内から除く責任が教会にあることを示しています。しかし今日そのような人たちはよく、「恵み」という旗の下、教会の支援グループに入れられ、そこで彼らは似たような問題を持つ他の「信者」に励まされることが出来ます。これは、イエス・キリストの福音にある人生を変えられる力に対する恥辱に他なりません。

### 墮落した指導者たち (Fallen Leaders)

最後に、指導者が(姦淫のような) 深刻な罪に陥って、その人が悔い改めたなら、すぐに復職させるべきでしょうか。主は悔い改めた指導者を直ちに赦すでしょう(従って教会もそうすべきです) が、墮落した指導者は、その人のミニストリーの対象となる人たちからの信頼を失ってしまいました。信頼は勝ち取らなくてはならないものです。従って、墮落した指導者たちは、自主的に指導する立場から身を引いて、彼ら

## 問題提起、赦し、そして和解

自身が信頼されるにふさわしいことを証明できるまで、霊的な監督下に身を委ねるべきです。そのような指導者は初めからやり直さなくてはなりません。信頼回復の為に、小さな方法で謙虚に仕えることを喜んでしないような人たちは、御からだの誰からも指導者としての任務を委ねられるべきではありません。

### まとめ (In Summary)

弟子をつくる指導者は、「絶えず教えながら、責め、戒め、また勧める」(第二テモテ 4:2) 呼びがあるのですから、私たちの呼びに尻込みしないようにしましょう。私たちは弟子たちに、いつも憐み深く辛抱し、問題については必要に応じて優しく提起し、更に必要であれば他の人からの助けのもと、問題に対決し、求められる時にはいつでも赦しを与えることを通して、真に互いに愛し合うことを教えていきましょう。こちらの方が、壊れてしまった関係に真のいやしをもたらすことはない偽の赦しよりも、遥かに良いです。そして、神の教会を純粋で聖く保ち、教会が神の御名への賛美の表れとなる様に、私たちができる全てのことについて、主に熱心となって従いましょう！

問題提起と教会の訓練についての更なる学びには、ローマ十六章十七から十八節、第二コリント十三章一から三節、ガラテヤ二章十一から十四節、第二テサロニケ三章六節、十四から十五節、第一テモテ一章十九から二十節、五章十九から二十節、テトス三章十から十一節、ヤコブ五章十九から二十節、そして第二ヨハネ十から十一を参照してください。



## 第二十五章

### 主の懲らしめ (The Discipline of the Lord)

あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。あなたがたはまだ、罪と戦って、血を流すまで抵抗したことはありません。そして、あなたがたに向かって子どもに対するように語られたこの勧めを忘れていません。「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるのでしょうか。もしあなたがたが、だれでも受ける懲らしめを受けていないとすれば、私生子であって、ほんとうの子ではないのです。さらにまた、私たちには肉の父がいて、私たちを懲らしめたのですが、しかも私たちは彼らを敬ったのであれば、なおさらのこと、私たちはすべての霊の父に服従して生きるべきではないでしょうか。なぜなら、肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちを懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、

## 弟子をつくる指導者

懲らしめるのです。すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。ですから、弱った手と衰えたひざとを、まっすぐにしなさい。また、あなたがたの足のためには、まっすぐな道を作りなさい。足なえの人も関節をはずすことのないため、いやむしろ、いやされるためです（ヘブル 12:3-13）。

聖霊に満たされたヘブル人への手紙の著者によると、私たちの天の御父は、その子供たちを皆、懲らしめてくださいます。もし私たちが神によって懲らしめられることがなかったら、それは私たちが神の子供として扱われていないことを示しています。従って、私たちは神の懲らしめを意識し、敏感となる必要があります。神の祝福と神が良いお方であることにだけ注目をしている、口先だけのクリスチャンの中には、全ての悪い状況が、神のご計画を阻止する悪霊の働きであると解釈する人たちもいます。このような考えは、もし神がそのような人たちを懲らしめて、悔い改めに導こうとしているのなら、大きな過ちとなってしまいます。

地上の良い両親は、その子供が学び、成熟し、大人としての責任を負う準備ができるように、という望みを持って子供を懲らしめます。神も同様に、私たちが霊的に成長し、神の御用に更に用いられ、裁きの御座の前に立つ備えができるように、私たちに懲らしめてくださるのです。神は私たちが愛し、私たちが神の聖さにあずかることを望んでいるが故に、私たちに懲らしめてくださるのです。私たちの愛する天の御父は、私たちの霊的な成長の為に全てを捧げてくださいます。聖書には、「あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださる」（ピリピ 1:6）と書いてある通りです。

親に尻を叩かれることを喜ぶ子供がいないように、私たちが神に懲らしめられる時、その体験は、先程読んだ通り「喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われる」ものです。しかし後になると、懲らしめによって「平安な義の実」を結ばせるので、

## 主の懲らしめ

私たちにとってそれはかえって良いものとなるのです。

### 神が私たちが懲らしめる時と方法 (When and How Does God Discipline Us?)

良い父親なら誰でもするように、神はその子供が従順でない時に懲らしめます。私たちが神に従わない時はいつでも、私たちは神の懲らしめに会う危険があります。しかし、主は憐み深いので、通常、私たちが悔い改めるのに十分な時間を与えてくださいます。神の懲らしめは、大抵、私たちが繰り返す不従順な行為と、神が繰り返し与える警告の後に与えられます。

神はどのように私たちが懲らしめるのでしょうか。私たちはこの本の始めの方でも学んだように、神の懲らしめは、私たちが弱められたり、病んだり、更には時期尚早の死を迎えるといった形で現れる可能性があります。

そのために、あなたがたの中に、弱い者や病人が多くなり、死んだ者が大ぜいいます。しかし、もし私たちが自分をさばくなら、さばかれることはありません。しかし、私たちがさばかれるのは、主によって懲らしめられるのであって、それは、私たちが、この世とともに罪に定められることのないためです (第一コリント 11:30-32)。

私たちは、(ヨブの場合を思い巡らしながら) 全ての病は神の懲らしめから来ると、自動的に結論付けるべきではありません。しかし、もし病に打たれたのなら、私たちが神に対して不従順を犯すことによって、神の懲らしめの扉を私たちが開けてしまわなかったか、自分の霊の点検をすることは賢いことです。

私たちが自分自身を裁く時、私たちは神の裁きを免れることができます。つまり、私たちの罪を認め、それを悔い改めるのです。もし神の懲らしめによる病であるのなら、私たちが一度悔い改めさえすれば、私たちはいやされる可能性があるとは結論付けることは理にかなっていると言えるでしょう。

神の裁きによって、私たちが実際に世と一緒に非難されずに済むと、パウロは言いました。彼は何を意味していたのでしょうか。パウロは単に、神の懲らしめは私た

## 弟子をつくる指導者

ちを悔い改めに導き、それによって究極的には、私たちは世と一緒に地獄へ送られずに済む、ということの意味していたに違いありません。このことは、天国へ行くことが決まっている人たちには聖さは余り関係ない、と考える人たちにとって受け入れ難いことでしょう。しかし、イエスの山上の垂訓を読んだ人なら、神の御旨に従う者だけが神の御国に入ることがわかっているはずです（マタイ 7:21参照）。従って、私たちが罪をし続けて悔い改めないのなら、私たちは永遠の命を失うことになります。私たちが悔い改めに導き、地獄から救ってくださる神の懲らしめについて、神をほめたたえましょう！

### 神の裁き的手段としてのサタン (Satan as a Tool of God's Judgement)

聖書の多くの箇所から、神の懲らしめの目的で、神がサタンを用いることがあることは明白です。例えば、マタイ十八章の赦さないしもべのたとえの中で、しもべの主人は、彼が赦したしもべが同様にしてその仲間のしもべを赦さなかったことを知らされた時に「怒った」、とイエスは語りました。結果としてしもべの主人は、「借金を全部返すまで、彼[赦さなかったしもべ]を獄吏に」引き渡しました（マタイ 18:34）。イエスはこのたとえ話を以下の厳粛な言葉で閉じました。

あなたがたもそれぞれ、心から兄弟を赦さないなら、天のわたしの

父も、あなたがたに、このようになさるのです（マタイ 18:35）。

「獄吏（苦しめる者）」とは一体誰でしょう。それは恐らく悪魔か悪霊のことでしょう。神は従順でない神の子供を悔い改めに導く為に悪魔に引き渡すことがあります。もしその人が悔い改めないのなら、神は永遠にその人を悪魔に引き渡します。苦難や災難は、放蕩息子のたとえからも学んだように、人々を悔い改めへと導く手段として用いられます（ルカ 15:14-19参照）。

私たちは旧約聖書に、神がサタンや悪霊を使って、神の御怒りを受けるにふさわしい者たちの上に、神の懲らしめや裁きをもたらす事例を見つけます。その一つは士師記の第九章ですが、そこには、ギデオンの家族に対する悪の為に、「神は、アビメレクとシェケムの者たちの間に悪霊を送ったので、シェケムの者たちはアビメレクを



## 主の懲らしめ

裏切った」（士師記 9:23）と記されています。

聖書はまた、サウル王を悔い改めに導く為に、「主からの悪い霊」が彼をおびえさせたと書いてあります（第一サムエル 16:14）。しかし、サウル王は決して悔い改めることをせず、遂にはその反発の故にサウル王は戦死しました。

旧約聖書にあるこれら両方の事例で、悪霊は「神から送られた」ことが書かれています。これは、神に仕えようと待機している悪霊が天にいることを示している訳ではありません。どちらかと言うと、神は単に、罪人が災難の中で悔い改める望みを持って、サタンの悪霊がその悪を限定的に働かすことを許しているのでしょう。

### 神の懲らしめの他の手段 (Other Means of God's Discipline)

神の民が飢饉に見舞われたり、外国の敵の占領下に入るといった困難が彼らに降りかかることを神が許していることも、私たちは旧約に見ることができます。最終的には彼らは悔い改め、神は彼らをその敵から救います。彼らは何年も続く圧制と警告の後にも悔い改めることを拒んだ時、神は究極的に外国の勢力が完全に彼らを支配することを許し、彼らは外国へ捕囚され、自国から追放されました。

新約の下では、神はその不従順な子供に困難を送ったり、彼らを悩ます敵を送ったりしてその子を懲らしめることは、当然あり得る話です。例えば、この章の最初に引用した、神の懲らしめに関する聖句（ヘブル 12:3-13）は、信仰の為に迫害を受けていたヘブル人信者という枠組みの中で書かれたものです。しかし、全ての迫害が不従順によるものではありません。各事例は個々に判断される必要があります。

### 神の懲らしめに正しく反応する (Rightly Reacting to God's Discipline)

この章の最初に引用された勧告によると、私たちは、次の二つの内の、どちらか一つの方法により、神の懲らしめに誤って反応する可能性があります。一つは、私たちが「主の懲らしめを軽んじて」しまうかもしれないこと、もう一つは、「主に責められて弱り果てて」しまうかもしれないことです（ヘブル 12:5）。もし私たちが主の懲らしめを「軽んじ」るなら、それは私たちがそれと気づかない、もしくはその前触れを無視していることを意味します。主に責められて弱り果てるとは、神の懲らし

## 弟子をつくる指導者

めが余りにも厳しいので、私たちが神を喜ばそうとすることを諦めることです。どちらの反応も間違いです。神は私たちを愛しておられ、神が私たちの為に私たちを懲らしめてくださることに気づかなくてはなりません。懲らしめという神の愛の手に気づく時、私たちは悔い改めるべきです。そうすれば、私たちは神の赦しを受けます。

一旦私たちが悔い改めれば、私たちは神の懲らしめから解放されることを期待すべきです。しかし、私たちの罪において、主の憐みと助けを求めることはもっともですが、その避けて通れない結果からの解放を必ずしも期待すべきではありません。神が目を留めるのは、へりくだって心砕かれる人です（イザヤ 66:2参照）。聖書はこう約束しています—「まことに、御怒りはつかの間、いのちは恩寵のうちにある。夕暮れには涙が宿っても、朝明けには喜びの叫びがある」（詩篇 30:5）。

神の裁きがイスラエルの民に下った後できえ、神はこのように約束しました。

わたしはほんのしばらくの間、あなたを見捨てたが、大きなあわれみをもって、あなたを集める。怒りがあふれて、ほんのしばらく、わたしの顔をあなたから隠したが、永遠に変わらぬ愛をもって、あなたをあわれむ（イザヤ 54:7-8）。

神は憐み深い、良いお方です！

神の懲らしめについての更なる学びには、第二歴代誌六章二十四から三十一節、三十六から三十九節、七章十三から十四節、詩篇七十三章十四節、九十四章十二から十三節、百六章四十から四十六節、百十八章十八節、百十九章六十七、七十一節、エレミヤ二章二十九から三十節、五章二十三から二十五節、十四章十二節、三十章十一節、ハガイ一章二から十三節、二章十七節、使徒の働き五章一から十一節、そして黙示録三章十九節を参照してください。

## 第二十六章

### 断食 (Fasting)

断食とは、ある期間飲食を断つ自発的な行為です。

聖書には断食した人々の多くの事例が記録されています。その中にはあらゆる食物を断った人もいれば、断食の期間ある種の食物を断った人もいます。後者の事例は、ダニエルの三週間の断食で、彼はその期間、「肉もぶどう酒も口に」しませんでした（ダニエル 10:3）。

聖書にはまた、飲食の両方を断った人たちについての事例もいくつかあります。しかし、この種の絶食は稀で、三日間以上続く場合、それは超自然的なこととして考慮すべきです。例えば、モーセが何も飲まず食わずで四十日間行いましたが、モーセは神ご自身のご臨在の中において、彼の顔が輝く程でした（出エジプト 34:28-29参照）。モーセは最初の断食の直後、二回目の四十日間の断食を行いました（申命記 9:9, 18参照）。彼の断食は二回共とても超自然的なものであり、この点において誰もモーセの真似をすべきではありません。それは、神の超自然的な助けなしに、人が水なしに数日以上生き延びることは不可能だからです。脱水症状は死をもたらします。しかし、殆どの健康な人なら、食物なしでも何週間かは生き延びることは可能です。

#### なぜ断食をするのか (Why Fast?)

断食の一番の目的は、主に祈り、主を求める更なる時間を費やすことで与えられる利益を得ることです。聖書の中の断食が言及されている箇所に、祈りが言及されて

## 弟子をつくる指導者

いない箇所は殆どないというところから、私たちは、祈りのない断食は無意味であるという結論に導かれます。<sup>65</sup>65例えば、使徒の働きで、断食について言及している両方の箇所で、祈りについても触れられています。最初の事例では（使徒の働き 13:1-3 参照）、アンテオケの預言者や教師は、単に「主を礼拝し、断食をして」いました。その時、彼らは預言的啓示を受け、結果としてパウロとバルナバが最初の伝道旅行へと送られました。二回目の事例では、以下の通り、パウロとバルナバはガラテヤの新しい教会の長老を任命しました。

また、彼らのために教会ごとに長老たちを選び、断食をして祈って  
後、彼らをその信じていた主にゆだねた（使徒の働き 14:23）。

恐らくこの二つ目の事例では、パウロとバルナバは、イエスが十二使徒を選ぶ前の夜に祈っていた模範に従っていたのでしょう（ルカ 6:12）。霊の指導者の任命といった重要な決断には、主の導きを得たという確信が来るまで祈る必要があり、断食はそこに辿り着く為に、更なる祈りの時間を与えてくれるものかもしれません。新約聖書が祈りにもっと専念する様、結婚相手との性関係を一時的に断つことを命じているのであれば（第一コリント 7:5参照）<sup>66</sup>66、食物を一時的に断つことがどの様にその同じ目的を果たすことができるのか、容易に理解できるはずです。

従って、重要な霊的決断について神の導きを私たちが祈る時、断食はその為に役立ちます。多くの他の必要の為に祈りは、比較的短い期間でできるかもしれません。導きを求める祈りは、私たちの内にある間違っただけの願いや動機、もしくは神への献身の欠如が、神の御声に反発し、「私たちの心にある神の御声を聞き分ける」ことが難しい為に時間がかかります。導きに確信を得る為には、長期間の祈りが求められ、そのような場合には、断食が有益です。

---

<sup>65</sup> 65 霊的な目的を持たずに、祈る為に更なる時間を費やすことをしなかったという単純な理由で、私の七日間に及ぶ断食が全く霊的な利益を得ることがなかったという体験をしたことがある。

<sup>66</sup> 66 第一コリント 7 章 5 節の欽定訳聖書は、夫婦が「断食と祈り」に自分たち自身を捧げられる為に、性関係を互いに慎むことが命じられている。この箇所の殆どの現代訳は単に祈りだけを表している。

## 断食

勿論、良い目的の為に、自分の時間を捧げてただ祈るということは、霊的な益以外の何ものでもありません。それ故私たちは、断食が祈りを伴うものならば、断食は、霊的な力とその効果を得る為の素晴らしい手段であると見なすべきです。使徒の働きには、初代教会の使徒たちが「祈りとみことばの奉仕」に励んでいたことについての描写があります（使徒の働き 6:4）。当然このことは、断食を伴う祈りが彼らの霊的な力とその効果のかぎとして、少なくともその一部としてあった、ということを示しています。

### 断食の間違った理由 (Wrong Reasons to Fast)

新約聖書における断食の霊的根拠を立てたところで、私たちはここで、いくつかの聖書にはない断食の理由も見ていきましょう。

中には、断食は神が私たちの祈りのリクエストに応じてくださる機会を増やす、という期待をもって断食している人たちもいます。しかしイエスは、祈りが応えられる一番の手段は信仰であって、断食ではないと私たちに教えました（マタイ 21:22参照）。断食は「神に無理強いをする」ことでも、神に向かって「あなたが私の祈りに応えないなら、私は飢え死にします！」と言うことでもありません。これは聖書的な断食ではありません。それは、ハンガーストライキと呼ばれるものです！ダビデは一週間、バテ・シェバがダビデに産んだ病気の子が生きる為に断食して祈りましたが、神はダビデに懲らしめを与えていた為にその子は死にました。断食はダビデの状況を変えませんでした。事実、その結果を見れば明らかなように、ダビデは神の御旨に反する祈りと断食をしていました。

断食はリバイバルが起こる為に必須ではありません。新約聖書の中で、リバイバルの為に断食した人の例は一つもありません。むしろ使徒たちは、福音を宣べ伝えることで、イエスに単純となって従いました。もし行った先の町から反応を得られなかったのなら、彼らは再びイエスに従って、足のちりを払い、次への町へと旅しました（ルカ 9:5; 使徒の働き 13:49-51参照）。彼らは、「霊的な要塞を打ち破ろう」として、リバイバルを待ちつつ、断食をし、滞在し続けていた訳ではありませんでした。

## 弟子をつくる指導者

しかしそうは言っても、祈りの伴う断食は必ず福音の奉仕者の益となり、リバイバルの為の有効な代理人として彼らが更に用いられるようになる、ということを私は付け加えなければなりません。教会の歴史の中で私たちが学ぶことができる霊的な偉人たちの多くは、祈りと断食を習慣としていた男性また女性たちでした。

食欲を持つことは律法に違反していませんし、ガラテヤ五章十九から二十一節にある、明白な「肉の欲」として挙げられているものとは違い、それ自体罪深い欲ではないので、断食によって「肉を抑える」手段にはなりません。一方、断食は自制を鍛え、この同じ徳は、肉ではなく御霊を追って歩む為に必要とされています。

その人の霊性を証明したり、その人の神への献身ぶりを誇示する為の断食は、時間の無駄であり、偽善の表れです。これはパリサイ人が断食した理由であり、イエスはそのことで彼らを叱りました（マタイ 6:16; 23:5参照）。

ある人たちはサタンに勝利する為に断食します。しかし、それは聖書的ではありません。聖書は、私たちが神のみことばに対する信仰によってサタンに抵抗するならば、サタンは私たちから離れると約束しています（ヤコブ 4:7; 第一ペテロ 5:8-9参照）。断食は必要ではありません。

しかし、イエスは「祈りと断食」によってのみ、ある悪霊を追い出すことができると言いませんでしたか。

その言及は、ある種の悪霊に取りつかれている人を解放する為にされたもので、サタンの個人的な攻撃に信者が打ち勝つという、全ての信者に対するものではありません。

しかし、イエスのこの言及は、私たちは断食によって悪霊に対して更なる権威を獲得できることを意味していませんか。

イエスの弟子たちがある男の子から悪霊を追い払うことができなかつたという報告をイエスが聞いた時、イエスが最初にしたことは、彼らの信仰の足りなさを嘆き悲しんだことです（マタイ 17:17参照）。イエスの弟子たちがイエスになぜ彼らにできなかつたのかを尋ねた時、イエスは彼らの信仰の薄さの為であると答えました（マタ

## 断食

イ 17:20参照)。イエスは、「ただし、この種のもの、祈りと断食によらなければ出て行きません」（マタイ 17:21）を注釈として付け足していたかもしれません。私が注釈であったかもしれないと言ったのは、実際その部分はマタイによる福音書の原本に含まれていなかったかもしれないという証拠がいくつかあるからです。私の聖書（ニュー・アメリカン・スタンダード訳（NASB）という英語圏で高い評価を受けている訳）の注釈には、マタイによる福音書の写本の原本に、この部分が含まれていないものが多く、従って、実際は「この種のもの、祈りと断食によらなければ出て行きません」とイエスは言わなかった、という可能性もある、と示しています。英語話者は、多数の様々な英訳聖書を手にとれる恩恵にあずかっていますが、一方他の言語に訳された聖書は、ヘブル語やギリシャ語の原語からではなく、今に至るまで四百年以上親しまれている英語の欽定訳聖書から訳されたものが多いです。

同じことをマルコによる福音書では、イエスは「この種のもの、祈りによらなければ、何によっても追い出せるものではありません」（マルコ 9:29）と言ったと記録されており、またNASBの注釈には、多くの訳はその節の最後に「と断食」という言葉を付け加えたと記されています。

もしイエスが実際にこの言葉を言ったとしても、全ての悪霊をきちんと追い出すには断食が必須である、と結論付けるのは間違いでしょう。もしイエスが、十二弟子に与えたように（マタイ 10:1参照）誰かに悪霊を追い出す権威を与えるのなら、その時点でその人はその権威を持っているのであって、断食によってその権威を増やせる訳ではありません。勿論断食によって、人は祈る時間がより増え、結果として、更に霊的に敏感となり、恐らくその人が神から授かった権威に対する信仰も増し加わる可能性はあります。

また、もしイエスが実際にそのように考えていたのであれば、それはある種の悪霊だけを意味していました。イエスの弟子たちはその種の悪霊を追い出すのに失敗しましたが、彼らは他の種の悪霊の多くを追い出すことには成功しました（ルカ 10:17参照）。

## 弟子をつくる指導者

以上のことから、私たちは断食を、サタンの私たちへの攻撃に対して個人的な勝利を得る為にする必要はないことがわかります。

### 断食の誇張 (Overemphasis Regarding Fasting)

残念ながら、クリスチャンの中には、断食がクリスチャン人生の大部分を占める形で、そこから宗教を作ってしまった人たちもいます。しかし新約聖書の使徒書簡には、断食について触れている箇所は一つもありません。どのように、いつ断食するかということについて書かれた信者向けの教えはどこにもありません。これは、断食がイエスに従うのに重要な側面ではないことを表しています。

旧約聖書には、もっと頻繁に断食について言及があります。それは大抵、誰かの死や悔い改めといった哀悼の時か、もしくは、国や個人の危機に直面する際の必死な祈りと最も関係していました（士師記 20:24-28; 第一サムエル 1:7-8; 7:1-6; 31:11-13; 第二サムエル 1:12; 12:15-23; 第一列王記 21:20-29; 第二歴代誌 20:1-3; エズラ 8:21-23; 10:1-6; ネヘミヤ 1:1-4; 9:1-2; エステル 4:1-3, 15-17; 詩篇 35:13-14; 69:10; イザヤ 58:1-7; ダニエル 6:16-18; 9:1-3; ヨエル 1:13-14; 2:12-17; ヨナ 3:4-10; ゼカリヤ 7:4-5参照）。これらは、今日断食をする際にも、有効な理由であり続けていると私は考えます。

旧約聖書では、貧しい人たちの世話をするといい、より重要な命令に従順を欠く程断食に没頭することは、偏った行動であると教えています（イザヤ 58:1-2; ゼカリヤ 7:1-14参照）。

イエスは、断食を過度に勧めたとして責められることは決してあり得ません。イエスはパリサイ人から断食をしていないことで責められました（マタイ 9:14-15参照）。イエスは、彼らが他のもっと重要な霊的な事柄よりも、断食を大切にしていたことについて注意しました（マタイ 23:23; ルカ 18:9-12参照）。

一方で、イエスは山上の垂訓の中で、弟子たちに断食について話しました。イエスは正しい動機で断食をするよう弟子たちを教えました、それは、時には弟子たちが断食することをイエスが見込んでいたことを示しています。イエスはまた、彼らの



## 断食

断食の故に、神は彼らに報いることも約束しました。イエスご自身もある程度断食を行いました（マタイ 17:21参照）。イエスは、ご自身が弟子たちから取り去られる時に、彼らが断食する時が来ると言いました（ルカ 5:34-35参照）。

### 断食の期間（How Long Should One Fast?）

この章の最初にもお伝えした通り、聖書に記録されている四十日間の断食は、超自然的なものとして分別されます。私たちは既に、モーセの二回に渡る、神のご臨在の中で行われた四十日間の断食について見ました。エリヤもまた、四十日間の断食をしましたが、前もって御使いは彼に食べさせていました（第一列王記 19:5-8参照）。イエスの四十日間の断食にも、とても超自然的な要素がいくつかありました。イエスは超自然的に、聖霊によって荒野へと導かれました。イエスは断食の終わりの方で、サタンから超自然的な誘惑を受けました。イエスはまた、断食の最後に御使いの訪れを受けました（マタイ 4:1-11参照）。四十日間の断食は、聖書の標準ではありません。

もし人が、主を求める為に時間を費やす目的で一食でも自ら食事を断つなら、その人は断食をしています。日数という観点からだけで断食を測るという考えは間違いです。

使徒の働きには、二つの断食の事例が記されており、それらについて私たちはもう既に見てきましたが（使徒の働き 13:1-3; 14:23参照）、それらは長い日数をかけた断食ではなかったようです。それらは一食だけを抜く断食だったかもしれません。

断食の最も大切な目的は、主を求めることなので、必要な限り、あなたが神に求めていることをあなたが得るまで断食することを、私はお勧めします。

断食は、神があなたと話しをするよう仕向ける為のものではありません。断食はあなたが聖霊に敏感になるのを助けるだけです。神は、あなたが断食しようとしまいと、あなたに語っています。私たちが困難なのは、神の導きと私たち自身の思いを見分けることです。

### 実用的な助言（Some Practical Advice）

## 弟子をつくる指導者

断食は通常、様々な方法で肉体に影響を及ぼします。人によっては、衰弱、倦怠、頭痛、吐き気、目眩、胃痛等を体験します。もし、コーヒー、紅茶や他の含カフェイン飲料を飲む習慣のある人なら、これらの症状は、カフェインを断っていることから起きている可能性があります。そのような人たちの場合、断食開始前に一週間程カフェインを含む飲み物を飲まないようにすることは賢い選択です。もし定期的に、もしくは半定期的に断食をする場合、少なくとも最初の一、二週間は大抵衰弱を体験しますが、回を重ねるにつれて簡単になっていくことがわかるでしょう。

断食中は、脱水症状を避ける為、十分な水分補給をすることを心掛けなくてはなりません。

断食は注意深く、ゆっくりと終わらせなくてはなりません。断食の期間が長ければ長い程、断食を終わらせるのに気を付ける必要があります。もし三日間固形物を胃に入れていないのなら、消化の悪い物をいきなり食べて断食を終わらせることは、賢いとは言えないでしょう。そのような人は、消化しやすい食べ物とフルーツジュースを食べ始めると良いでしょう。断食の期間が長い程、消化器官が再調整されるのに時間がかかりますが、一、二食抜く位の断食ならば、断食を終わらせる準備期間は必要ありません。

ある人たちは、適度な断食を気を付けて行くと実際その人たちの健康を促進する、と納得していますが、私もその一人です。私は断食中、元々病気だった人がいやされたという証を多く耳にしました。断食は、体を休ませ、体の内側から洗浄する手段の一つと考えられています。これは、最初の断食が通常その人が体験する断食の中で一番難しい理由なのかもしれません。断食を一度もしたことがない人は、体の内側の洗浄を最も必要としている人であることが多いです。

断食中の空腹感は、通常断食をして、二日から四日目位で止まります。空腹感が戻る時（通常数週間後）、それはあなたの断食を注意深く終わらせる為の印です。なぜならば、それは飢餓の始まりでもあり、体は蓄積された脂肪を使い切った為に、これから大切な細胞を使い出す段階に入ります。イエスは四十日間の断食の末、空腹を

## 断食

覚えたが聖書には書いてありますが、それはイエスが断食を終えた時でした（マタイ4:2参照）。



## 第二十七章

### 死後 (The Afterlife)

殆どのクリスチャンは人が死を迎えた後、その人は天国か地獄へ行くことを知っています。しかし、天国は義人の最終的住処であるのに対し、ハデスは不義な人の最終的住処ではないことを、皆が知っている訳ではありません。

イエス・キリストの弟子たちが死を迎えると、彼らの霊またはたましいは、直ちに、神の住んでおられる天国へと向かいます(第二コリント 5:6-8; ペリピ 1:21-23; 第一テサロニケ 4:14参照)。しかし、将来のいつか、神は新しい天と新しい地を創造され、新しいエルサレムが天から地へと下って来ます(第二ペテロ 3:13; 黙示録 21:1-2参照)。そこに義人は永遠に住むのです。

不義な人が死を迎えると、彼らは直ちにハデスへ向かいますが、そこは単に、彼らの体が復活されるまでの、一時的な待機場所に過ぎません。かの日が来ると、彼らは神の裁きの御座の前に立たされ、聖書にゲヘナと記されている、火と硫黄とが燃える池に投げ込まれます。この章ではこれらのことを、聖書から更に詳しく見ていきます。

#### 不義な人が死を迎える時 (When the Unrighteous Die)

死後、不義な人に何が起こるのか、もっと詳しく理解する為に、私たちは旧約聖書から一つのヘブル語の言葉と、旧約聖書から三つのギリシャ語の言葉を学ぶ必要があります。これらのヘブル語とギリシャ語の言葉は、実際は三つの異なる場所につい

## 弟子をつくる指導者

て描写していますが、大抵の場合、これら全てを地獄と訳していることが多く、それは読者に誤解を招きかねません。

まず第一に、旧約聖書にあるよみというヘブル語を見ていきましょう。

よみという言葉は、旧約聖書の中に六十回以上出てきます。これは明確に、不義な人が行く死後の住処を意味しています。例えば、コラとその仲間が荒野でモーセに反発した時、神は地がその口をあけて、彼らとすべての持ち物をのみこむようにして、彼らを罰しました。聖書は彼らはよみに下ったと書いてあります。

彼らとすべて彼らに属する者は、生きながら、よみに下り、地は彼らを包んでしまい、彼らは集会の中から滅び去った（民数記 16:33、一部強調）。

後のイスラエルの歴史の中で、神はイスラエルの民に、神の怒りで火は燃え上がり、よみの底にまで燃えて行くと警告しました。

わたしの怒りで火は燃え上がり、よみの底にまで燃えて行く。地とその産物を焼き尽くし、山々の基まで焼き払おう（申命記 32:22、一部強調）。

ダビデ王はこのように宣言しました。

悪者どもは、よみに帰って行く。神を忘れたあらゆる国々も（詩篇 9:17、一部強調）。

ダビデ王は、以下の要請を神に出して、不義な人々に対する祈りもしました。

死が、彼らをつかめばよい。彼らが生きたまま、よみに下るがよい。  
悪が、彼らの住まいの中、彼らのただ中にあるから（詩篇 55:15、一部強調）。

賢明なソロモンは、若い男性に売春婦のたくらみを警告して、次の様に記しました。

彼女の家はよみへの道、死の部屋に下って行く…しかしその人は、そこに死者の霊がいることを、彼女の客がよみの深みにいることを、

## 死後

知らない。（箴言 7:27; 9:18、一部強調）。

ソロモンは、最終的によみに下る人たちは、当然のことながら義人ではないことを私たちに信じさせる、他の箴言も書きました。

悟りのある者はいのちの道を上って行く。これは下にあるよみを離れるためだ（箴言 15:24、一部強調）。

あなたがむちで彼を打つなら、彼[あなたの子供]のいのちをよみから救うことができる（箴言 23:14、一部強調）。

最後に、地獄についてイエスがなされた説明の予告として、イザヤは預言的に、バビロン王という、自分自身を高めた後、結局よみに突き落とされることとなった王に向かって語りました。

下界のよみは、あなたの来るのを迎えようとざわめき、死者の霊たち、地のすべての指導者たちを揺り起こし、国々のすべての王を、その王座から立ち上がらせる。彼らはみな、あなたに告げて言う。

『あなたもまた、私たちのように弱くされ、私たちに似た者になってしまった。』あなたの誇り、あなたの琴の音はよみに落とされ、あなたの下には、うじが敷かれ、虫けらが、あなたのおおいとなる。暁の子、明けの明星よ。どうしてあなたは天から落ちたのか。国々を打ち破った者よ。どうしてあなたは地に切り倒されたのか。あなたは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。』しかし、あなたはよみに落とされ、穴の底に落とされる。あなたを見る者は、あなたを見つめ、あなたを見きわめる。『この者が、地を震わせ、王国を震え上がらせ、世界を荒野のようにし、町々を絶滅し、捕虜たちを家に帰さなかった者なのか』（イザヤ 14:9-17、一部強調）。

この聖書箇所や他の似たような聖書箇所から、よみはいつもあり、現在もある苦

## 弟子をつくる指導者

悩みの場所であり、そこには不義な人たちが死後、監禁されるところです。更なる証拠がまだあります。

### ハデス (Hades)

新約聖書にあるハデスというギリシャ語は、旧約聖書にあるよみというヘブル語と同じ意味で用いられていることは明らかです。その証拠として、詩篇16章10節と使徒の働き2章27節を比較して見る必要があります。

まことに、あなたは、私のたましいをよみに捨ておかず、あなたの聖徒に墓の穴をお見せにはなりません（詩篇 16:10、一部強調）。

あなたは私のたましいをハデスに捨てて置かず、あなたの聖者が朽ち果てるのをお許しにならないからである（使徒の働き 2:27、一部強調）。

それ故、新約聖書でハデスが言及されている十の全ての例で、いつも否定的なイメージで、悪者が死後に行かなくてはならない苦悩の場所として、よく話されているのは興味深いことです（マタイ 11:23; 16:18; ルカ 10:15; 16:23; 使徒 2:27; 2:31; 黙示録 1:18; 6:8; 20:13-14参照）。繰り返しますが、これら全ての例において、よみまたはハデスは、不義な人たちが死後に行く住処で、そこは苦悩の場所であったし、現在もそうです。<sup>67</sup>

### イエスはよみ/ハデスに下ったのか (Did Jesus Go to Sheol/Hades?)

よみとハデスが同じ場所であることを表している二節、詩篇16章10節と、ペテロがこの箇所を引用した使徒の働き2章27節を、更に詳しく見ていきましょう。ペテロの五旬節での説教によると、ダビデは詩篇16章10節の中で、預言的にキリストについ

---

<sup>67</sup> 67 創世記 37:35、ヨブ記 14:13、詩篇 89:48、伝道者の書 9:10 とイザヤ 38:9-10 のような聖書箇所を用いて、よみは死後に義人も行くところであることを実証しようとする者たちがいる。この考えの聖書的な証拠は、余り説得力のあるものではない。もしよみが不義の人も義人も両方死後に行くところだとしたら、よみには一つは地獄、一つはパラダイスと、二つに仕切られた部屋から成ることになり、それが大抵この考えの支持者たちによって主張されている。



## 死後

て話していました。なぜならば、キリストの体とは違って、ダビデの体は朽ち果ててしまったからです（使徒 2:29-31参照）。そうであるならば、詩篇16章10節は、実際は、イエスが御父に向かって話しかけているのであって、そこでは御父が、イエスご自身のたましいをよみに捨てておかず、また体も朽ち果てるようになさらない、というイエスの信仰を宣言しておられたことに、私たちは気づかされます。

このようなイエスの宣言は、イエスのたましいは、死とよみがえりの間の三日間、よみ/ハデスに行っておられた証拠として解釈する人たちも中にはいます。しかし、実際そのような意味を含んでいません。もう一度、イエスが御父におっしゃったことを正確に見てみましょう。

まことに、あなたは、私のたましいをよみに捨ておかず、あなたの  
聖徒に墓の穴をお見せにはなりません（詩篇 16:10）。

イエスは御父に向かって、「私のたましいは数日間よみで過ごしますが、あなたはそこに私を放ってはおかないことを信じています」と言いませんでした。むしろイエスは、「私が死を迎える時、不義な者として扱われたり、私のたましいがよみまたはハデスに見捨てられることはないでしょう。私はそこに一分たりとも過ごすことはないでしょう。私は、あなたのご計画が私を三日目によみがえらせ、私の体を朽ちないよういさせることを信じています」と言っていました。

この解釈は確かに正当なものです。イエスが、「あなたの聖徒に墓の穴をお見せにはなりません」と言われた時、イエスの体が三日間徐々に朽ちていき、復活の時回復された、とは解釈しません。むしろ、私たちはイエスの体は、その死からよみがえりまで、一切朽ちることはなかったと解釈します。

同様に、神はご自分のたましいをよみ/ハデスに捨てておかない、というイエスの言葉についても、イエスがよみ/ハデスに数日間残されて、しかしそこに最終的に捨ておかれることはなかった、と解釈される必要はありません。<sup>68</sup>68むしろ、イエスのた

---

<sup>68</sup> 68 特にこの解釈に同意している者たちは、それによって他二つの理論の内の一つに同意しな

## 弟子をつくる指導者

ましいは、よみ/ハデスに捨てられる不義なたましいの様に扱われることはないと解釈されるべきです。またイエスは、「あなたは、私のたましいをよみへ捨てず」（訳者注：この部分は英語の聖書では「よみへ投げ捨てず」の意味だが、日本語の聖書では「よみに捨ておかず」と訳されている）と言っておられたのであって、「あなたは、私のたましいをよみの中に捨てられたままにせず」とは言わなかったことに注目してください。

### イエスのたましいは三日間どこにいたのか（Where Was Jesus' Soul During the Three Days?）

イエスは弟子たちに、ご自分が三日三晩地の中にいると伝えたことを思い出してください（マタイ 12:40参照）。墓が「地の中」であるとは考え難い為、これは、イエスの体が三日間墓の中に置かれることについての言及ではないようです。むしろ、イエスはご自分の霊またはたましいが地の奥深くにあることについて言及していたに違いありません。従って、イエスの霊またはたましいは、その死から復活の間、天にはいなかったと結論付けることができます。イエスが復活し、マリヤにご自分が御父のもとにまだ上がっていないことを伝えた時、そのことを明確にしました（ヨハネ 20:17参照）。

イエスは十字架に付けられていた悔い改めた犯罪人に、今日ご自分と共にパラダイスにいることを言われたことも思い出してください（ルカ 23:43参照）。これらの事実を総合的に見ると、私たちはイエスの霊またはたましいが三日三晩地の中で過ごしたことがわかります。少なくとも、その期間のある部分で、イエスはご自身が呼ぶ

---

くてはならない。一つの理論は、よみ/ハデスは不義な者たち及び義人の死後の住処の名前であり、そこは二部屋に区分され、一つは苦悩の場所、もう一つはイエスが行かれたパラダイスであるというものである。もう一つの理論は、イエスは我々の身代わりとして、罪の代価を完全に払った為、イエスは三日三晩、よみ/ハデスの火の中で、地獄に落とされた者の苦悩に耐えたというものである。これらの理論の両方は、聖書から証明することは困難であり、もしイエスがよみまたはハデスで全く過ごさなかったとするならば、証明する必要はないということになる。実際には、これこそがイエスの宣言の意味することである。二つ目の理論について言うと、イエスは、そのよみ/ハデスでの苦しみというものを通してではなく、その十字架の苦しみを通して、私たちの贖いとして神に受け入れられたので（コロサイ 1:22参照）、イエスは決して、その死から復活までの三日三晩を、地獄の苦悩の中で苦しめられていた訳ではなかった。

## 死後

「パラダイス」というところにいました。この言葉は、確かに、よみやハデスと呼ばれる苦悩の場所の同義語として容認できるような感じではありません！

以上のことから、私は、よみやハデス以外の場所、パラダイスと呼ばれる場所が地の中にあるはずであると思います。この考えは、イエスがかつてした二人の死んだ人の話、不義な人と義人、つまり、金持ちとラザロの話によって、確かに強調されています。その話を読んでみましょう。

ある金持ちがいた。いつも紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。ところが、その門前にラザロという全身おどきの貧乏人が寝ていて、金持ちの食卓から落ちる物で腹を満たしたいと思っていた。犬もやって来ては、彼のおどきをなめていた。さて、この貧乏人は死んで、御使いたちによってアブラハムのふところに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。その金持ちは、ハデスで苦しみながら目を上げると、アブラハムが、はるかかなたに見えた。しかも、そのふところにラザロが見えた。彼は叫んで言った。『父アブラハムさま。私をあわれんでください。ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすように、ラザロをよこしてください。私はこの炎の中で、苦しくてたまりません。』アブラハムは言った。『子よ。思い出してみなさい。おまえは生きている間、良い物を受け、ラザロは生きている間、悪い物を受けていました。しかし、今ここで彼は慰められ、おまえは苦しみもだえているのです。そればかりでなく、私たちとおまえたちの間には、大きな淵があります。ここからそちらへ渡ろうとしても、渡れないし、そこからこちらへ越えて来ることもできないのです』（ルカ 16:19-26、一部強調）。

勿論、ラザロと金持ちは一度死んだのなら、肉の体にはもういませんでしたが、彼らの霊またはたましいはそれぞれの場所へと旅していました。

## ラザロはどこにいたのか (Where Was Lazarus?)

金持ちは自分がハデスにいて、しかしラザロは、アブラハムと共に別の場所にいるのが見えた、ということに注目してください。実際、ラザロは「アブラハムのふところ」にいたとされています。それは場所の名前ではなく、恐らくその場所にラザロが着いた時、アブラハムから受けた慰めを意味していたのでしょう。

金持ちとラザロが死を迎えた後、二人の間にはどれ位の距離があったのでしょうか。

聖書には、金持ちはラザロを「はるかかなたに」見て、二人の間には「大きな淵」があると書いてあります。従って、二人の間の距離は、憶測に過ぎませんが、地の中から天の距離程大きくはないと結論付けるのは理にかなっているように思えます。そうでなければ、金持ちがラザロを（神の助けなしに）見ることはかなり不可能なことであったことでしょうし、二つの場所の間に、特に誰かが一つのところからもう一つのところへ行き来できないようにされた「大きな淵」があることに言及したり、もしくは、そのようなものがあることさえ、殆ど必要ではなかったでしょう。更に、金持ちはアブラハムに「叫んで」言い、アブラハムはそれに言い返した、とあります。ここから、「大きな淵」を隔てて互いに話す為には、適度に近かったであろう、と考えるに至るでしょう。

以上のことから、ラザロは私たちが天と呼ぶところにはおらずに、むしろ地の中の別の場所にいたと結論付けられます。<sup>69</sup>それは、イエスが悔い改めた犯罪人に言及したパラダイスという場所であったに違いありません。旧約時代の義人たちが彼らの死後行った場所とは、地の中にあるこのパラダイスであったのです。そこにラザロも、イエスも、また悔い改めた犯罪人も行きました。

---

<sup>69</sup> 69 また、金持ちとラザロは自分たちの肉の体からは離れてはいたが、二人共意識があり、見たり、触ったり、聞いたりといった能力を全て備えていた。彼らは痛みや慰めを体験でき、また過去の経験も思い出すことができた。このことは、「魂の睡眠」という理論、つまり、人が死ぬ時、彼らの体が復活して意識が戻るまで待ちながら、無意識の領域に入るといった考えが誤りであることを証明する。

## 死後

そこはまた、預言者サムエルも彼の死後行った場所であったようです。第一サムエル28章に、神は既に死んでいた預言者サムエルの霊がサウルに預言的に話すことを許した時、エン・ドルの霊媒師はサムエルについて、「こうごうしい方が地から上って来られる」と言いました（第一サムエル 28:13、一部強調）。サムエル自身もサウルに、「なぜ、私を呼び出して（訳者注：英語では「下から上げる」という意味が含まれる）、私を煩わすのか」と言いました（第一サムエル 28:15、一部強調）。恐らく、サムエルの霊またはたましいは地のパラダイスにいたのでしょう。

聖書は、キリストの復活で、パラダイスには誰もいなくなる、そして旧約聖書の時代に死を迎えた義人たちはイエスと共に天国へ引き上げられる、という事実を支持している様です。聖書は、イエスが地の低い所から天へ上られた時、「彼は多くの捕虜を引き連れた」と書いてあります（エペソ 4:8-9、詩篇 68:18）。私は、これらの捕虜は皆パラダイスに住んでいた人たちであったと考えます。イエスは確かに、人々をよみ/ハデスからは解放しませんでした！<sup>70</sup>

### イエスは捕らわれの霊たちのところに行ってみことばを宣べた (Jesus Preached to Spirits in Prison)

聖書はまた、イエスは、その死から復活の間に、ある人々、つまり肉の体を離れた霊たちにみことばを宣べられた、ということを私たちに教えています。第一ペテロの第三章を読んでみましょう。

キリストも一度罪のために死なれました。正しい方が悪い人々の身代わりとなったのです。それは、肉においては死に渡され、霊においては生かされて、私たちが神のみもとに導くためでした。その霊において、キリストは捕らわれの霊たちのところに行ってみことばを宣べられたのです。昔、ノアの時代に、箱舟が造られていた間、神が忍耐して待っておられたときに、従わなかった霊たちのことで

---

<sup>70</sup> 70 ある人たちは、エペソ 4:8-9にある捕虜とは、罪の奴隷となっていた我々全てのことを指し、今キリストの復活によって自由となったという考えを、恐らく当然のこととして持っている。

## 弟子をつくる指導者

す。わずか八人の人々が、この箱舟の中で、水を通して救われたのです（第一ペテロ 3:18-20）。

聖書のこの箇所は、確かにいくつかの疑問点が浮かび、私にはその答えはありません。なぜイエスは、特にノアの洪水の時に死んだ不従順な人たちに向かって、みことばを宣べたのでしょうか。イエスは彼らに何を言ったのでしょうか。

とにかく、この聖書箇所はイエスは三日三晩、その死から復活までの間ずっとパラダイスにいた訳ではないということを示している様です。

## ゲヘナ (Gehenna)

今日、義人の体が死を迎える時、その人たちの霊またはたましいは直ちに天国へ行きます（第二コリント 5:6-8; ピリピ 1:21-23; 第一テサロニケ 4:14参照）。

不義な人たちは未だに、よみ/ハデスに行きます。そこは彼らにとって苦悩の場所であり、彼らの体の復活、最後の審判、更には、よみ/ハデスとは異なり、隔たれた場所、「火の池」に投げ込まれるのを待つところです。

この火の池は、時として英語では地獄と訳されている三つ目の言葉、ギリシャ語のゲヘナに当たります。この言葉は、ヒンノムの谷というエルサレム郊外にある廃棄物集積場であり、ミミズや蛆が群がる腐ったゴミの山で、その一部は絶えず煙が焚かれ、火で燃やされているところです。

イエスがゲヘナについて話した時、そこを人の体が投げ込まれる場所として話しました。例えば、イエスはマタイによる福音書でこのように言いました。

もし、右の手があなたをつまづかせるなら、切って、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナ[地獄]に落ちるよりは、よいからです…からだを殺しても、たましいを殺せない人たちなどを恐れてはなりません。そんなものより、たましいもからだも、ともにゲヘナ[地獄]で滅ぼすことのできる方を恐れなさい。

（マタイ 5:30, 10:28、一部強調）。

ゲヘナとハデスは、同一の場所ではありません。なぜならば、聖書には不義な人

## 死後

私たちは肉の体を離れた霊またはたましいとして、ハデスに送られると書いてあるからです。キリストが支配する千年王国の後、初めて、不義な人たちの体はよみがえり、神の御前で裁きを受け、火の池、ゲヘナに投げ込まれます(黙示録 20:5, 11-15参照)。更に、いつかは、ハデス自体が火の池に投げ込まれるとあるので(黙示録 20:14参照)、そこは火の池とは違う場所であるはずです。

## 地獄 (Tartaros)

四つ目の言葉は、聖書の中で地獄と訳されているギリシャ語 *tartaros* です。この言葉は新約聖書で一度だけ出てきます。

神は、罪を犯した御使いたちを、容赦せず、地獄に引き渡し、さばきの時まで暗やみの穴の中に閉じ込めてしまわれました(第二ペテロ 2:4)。

地獄は、罪を犯したみ使いたちが入る特別な監獄であると通常思われています。従って、それはよみやハデス、またゲヘナでもありません。ユダもまた、拘束された天使についてこう書きました。

また、主は、自分の領域を守らず、自分のおるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の束縛をもって、暗やみの下に閉じ込められました(ユダ 1:6)。

## 地獄の恐怖 (The Horrors of Hell)

一度不義な人が死を迎えたなら、それ以上は悔い改めの機会は与えられません。その人の運命はそこで封印されます。聖書には、「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」(ヘブル 9:27)と書いてあります。

地獄は永遠であり、そこに閉じ込められた人たちには、逃亡できる希望はありません。不義の人たちが将来受ける有罪宣告について、イエスは、「こうして、この人たちは永遠の刑罰にはいり、正しい人たちは永遠のいのちにはいる」(マタイ 25:46、一部強調)と言いました。不義の人たちが地獄で受ける罰は、義人が受ける永遠のいのち位、永遠に続くものです。

## 弟子をつくる指導者

同様に、パウロはこう書きました。

つまり、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えてくださることは、神にとって正しいことなのです。そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現われるときに起こります。そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです（第二テサロニケ 1:6-9、一部強調）。

地獄は、終わりのない罰が続くのですから、描写できない程の苦しみの場所です。永遠にそこに閉じ込められ、不義な人たちは彼らの永遠の罪を負い、尽きない火の中で神の御怒りに苦しむことでしょう。

イエスは地獄を、「外の暗やみ」の場所と呼び、そこで「泣いて歯ぎしり」し、「彼らを食ううじは、尽きることがなく、火は消えることがない」と描写しました。（マタイ 22:13; マルコ 9:44）。私たちがその場所について人々に警告し、キリストによってしか与えられない救いについて彼らに知らせる必要は、なんと大きいことでしょうか！

ある宗派では、煉獄という考えがあり、そこは信者が暫くの間、罪から浄化される為苦しみを通る場所であり、従ってその人は天国に行けるようになるというものです。しかし、この考えは聖書のどこにも教えられていません。

### 義人の死後 (The Righteous After Death)

信者が死を迎える時、その人の霊は直ちに主と共に天へ行きます。パウロは自分の死について書いた時、この事実を非常に明確に示しました。

私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。しかし、もしこの肉体のいのちが続くとしたら、私の働きが豊かな実を結ぶことになるので、どちらを選んだらよいのか、私にはわかり



## 死後

ません。私は、その二つのものの間に板ばさみとなっています。

私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまさっています（ピリピ 1:21-23、一部強調）。

パウロは、世を去ることを望んだと言い、もし世を去るなら、彼はキリストと共にいると言ったことに注目してください。（残念ながらある人たちが考える様に）パウロの霊は無意識の状態となり、復活を待つ、というものではありません。

また、パウロはそのことについて、彼にとっては死ぬことも益であると言ったことに注目してください。それは彼が死んだ時天国に行ったのなら、そうであると言えるでしょう。

パウロはまた、コリント人への第二の手紙の中で、もし信者の霊がその人の体を離れたのなら、その人はその時、「主のみもとにいる」と宣言しました。

そういうわけで、私たちはいつも心強いのです。ただし、私たちが肉体にいる間は、主から離れているということも知っています…そして、むしろ肉体を離れて、主のみもとにいるほうがよいと思っています（第二コリント 5:6-8）。

それを更に指示する為に、パウロはこうも書きました。

眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです。私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずですよ（第一テサロニケ 4:13-14）。

再臨の際、もしイエスが「眠った人々」をご自身と一緒に連れて来られるならば、彼らは今イエスと共に天国にいるに違いありません。

### 予見された天国（Heaven Foreseen）

天国はどのようなところでしょうか。そこで私たちを待つ栄光の全てを、私たち

## 弟子をつくる指導者

の限りある思いで完全に理解することは不可能であり、聖書を通して、私たちはほんの少し垣間見ているだけです。天国について信者が最も興奮する事実は、そこで私たちの主であり、救い主であるイエスと、私たちの父なる神と、顔と顔を合わせてお会いできることです。私たちは、「父の家」に住むようになるのです。

わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとの迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。（ヨハネ 14:2-3）。

私たちが天国へ行く時、現在私たちの頭では理解できない沢山のことが、理解できるようになるでしょう。パウロはこう書きました。

今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔と顔とを合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知るようになります（第一コリント 13:12）。

天国がどのようなところかについて、一番良い描写があるのは黙示録です。偉大な活動が行われ、素晴らしい美しさで満ちており、無限大の多様性の中、表しきれない喜びが溢れる場所として描写されており、天国は人々が雲の上にただ座って、一日中ハープをかき鳴らす場所ではありません！

ヨハネは、かつて天の幻を与えられましたが、まず第一に、全宇宙の中心である神の御座に気づかされました。

たちまち私は御霊に感じた。すると見よ。天に一つの御座があり、その御座に着いている方があり、その方は、碧玉や赤めのうのように見え、その御座の回りには、緑玉のように見える虹があった。また、御座の回りに二十四の座があった。これらの座には、白い衣

## 死後

を着て、金の冠を頭にかぶった二十四人の長老たちがすわっていた。御座からいなすまと声と雷鳴が起こった。七つのともしびが御座の前で燃えていた。神の七つの御霊である。御座の前は、水晶に似たガラスの海のようにであった。御座の中央と御座の回りに、前もうしろも目で満ちた四つの生き物がいた。第一の生き物は、ししのようであり、第二の生き物は雄牛のようであり、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は空飛ぶわしのようであった。この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その回りも内側も目で満ちていた。彼らは、昼も夜も絶え間なく叫び続けた。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、昔いまし、常にいまし、後に来られる方。」また、これらの生き物が、永遠に生きておられる、御座に着いている方に、栄光、誉れ、感謝をささげるとき、二十四人の長老は御座に着いている方の御前にひれ伏して、永遠に生きておられる方を拝み、自分の冠を御座の前に投げ出して言った。「主よ。われらの神よ。あなたは、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方です。あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから」（黙示録 4:2-11）。

ヨハネは、地上の何ものとも比較できないものを、地上にある言語を使って描写するのに最善を尽くしました。当然ながら、私たちが実際行って見るまで、ヨハネが見た全てを私たちが理解する術はありません。しかしヨハネの描写は、確かに読んでいて刺激を受けます。

天国について最も刺激的な描写は、ヨハネの黙示録第21章と22章にある、新しいエルサレムです。それは現在天国にあります。イエスが治める千年王国の後、地上に下りてきます。

そして、御使いは御霊によって私を大きな高い山に連れて行って、

## 弟子をつくる指導者

聖なる都エルサレムが神のみもとを出て、天から下って来るのを見せた。都には神の栄光があった。その輝きは高価な宝石に似ており、透き通った碧玉のようであった。都には大きな高い城壁と十二の門があって、それらの門には十二人の御使いがおり、イスラエルの子らの十二部族の名が書いてあった。東に三つの門、北に三つの門、南に三つの門、西に三つの門があった。また、都の城壁には十二の土台石があり、それには、小羊の十二使徒の十二の名が書いてあった。また、私と話していた者は都とその門とその城壁とを測る金の測りざおを持っていた。都は四角で、その長さとは幅は同じである。彼がそのさおで都を測ると、一万二千スタディオンであった。長さも幅も高さも同じである。また、彼がその城壁を測ると、人間の尺度で百四十四ペーキュスであった。これが御使いの尺度でもあった。その城壁は碧玉で造られ、都は混じりけのないガラスに似た純金でできていた。都の城壁の土台石はあらゆる宝石で飾られていた。第一の土台石は碧玉、第二はサファイヤ、第三は玉髓、第四は緑玉、第五は赤縞めのう、第六は赤めのう、第七は貴かんらん石、第八は緑柱石、第九は黄玉、第十は緑玉髓、第十一は青玉、第十二は紫水晶であった。また、十二の門は十二の真珠であった。どの門もそれぞれ一つの真珠からできていた。都の大通りは、透き通ったガラスのような純金であった。私は、この都の中に神殿を見なかった。それは、万物の支配者である、神であられる主と、小羊とが都の神殿だからである。都には、これを照らす太陽も月もいらない。というのは、神の栄光が都を照らし、小羊が都のあかりだからである。諸国の民が、都の光によって歩み、地の王たちはその栄光を携えて都に来る。都の門は一日中決して閉じることがない。そこには夜がないからである。こうして、人々

## 死後

は諸国の民の栄光と誉れとを、そこに携えて来る。しかし、すべて汚れた者や、憎むべきことと偽りとを行なう者は、決して都には入れない。小羊のいのちの書に名が書いてある者だけが、はいることができる。御使いはまた、私に水晶のように光るいのちの水の川を見せた。それは神と小羊との御座から出て、都の大通りの中央を流れていた。川の両岸には、いのちの木があって、十二種の実がなり、毎月、実ができた。また、その木の葉は諸国の民をいやした。もはや、のろわれるものは何もない。神と小羊との御座が都の中にあって、そのしもべたちは神に仕え、神の御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額には神の名がついている。もはや夜がない。神である主が彼らを照らされるので、彼らにはともしびの光も太陽の光もいらない。彼らは永遠に王である（黙示録 21:10-22:5）。

イエスの全ての弟子は、信仰を持ち続ける限り、これらの素晴らしいことを期待できます。私たちはきっと天国に着いた最初の数日間は、こんなことをお互いに言い合って過ごすのでしょうか。「なるほど、ヨハネが黙示録で言おうとしていたことはこのことだったのか」と。



## 第二十八章

### 神の永遠のご計画 (God's Eternal Plan)

神はなぜ私たちを造られたのでしょうか。神は最初から何か目的をお持ちだったのでしょうか。皆が神に反発することを、神はご存知なかったのでしょうか。私たちの反発の結果として、人間が直面し続ける苦悩や悲しみを予測しなかったのでしょうか。それならば、なぜ神はそもそも人をお造りになったのでしょうか。

聖書は私たちにこれらの質問について答えてくれます。神がアダムとエバをお造りになる前から、彼らが、またその子孫たちが罪を犯すことをご存知でした。驚いたことに、神は既にイエスを通して墮落した人類を救済する計画をお持ちでした。神の創造前のご計画について、パウロはこのように書きました。

神は私たちを救い、また、聖なる招きをもって召してくださいましたが、それは私たちの働きによるのではなく、ご自身の計画と恵みとによるのです。この恵みは、キリスト・イエスにおいて、私たちに永遠の昔に与えられたものであって、（第二テモテ 1:8b-9、一部強調）。

神の恵みはキリストにおいて、私たちに永遠の昔から与えられたものであって、単に永遠に与えられるものではありません。これは、イエスの犠牲的な死が、神が大昔からご計画されていたことであることを示しています。

同様に、パウロはエペソ人への手紙の中で、こう書きました。

## 弟子をつくる指導者

私たちの主キリスト・イエスにおいて実現された神の永遠のご計画

に沿ったことです。（エペソ 3:11、一部強調）。

イエスの十字架の死は、神が予測しなかったことを直す為の、後から思い付いた、とっさに考案した計画ではありませんでした。

神は、その恵みを私たちに永遠の昔に与える永遠の目的をお持ちであっただけでなく、神は永遠の昔から、誰がその恵みに授かるのか、既にご存知であって、その人たちの名前を本に書き記しさえしました。

地に住む者で、ほふられた小羊[イエス]のいのちの書に、世の初め

からその名の書きしるされていない者はみな、彼[黙示録の獣]を拝

むようになる（黙示録 13:8、一部強調）。

アダムの罪は、神を驚かせるものではありませんでした。あなたの罪も、私の罪も同様です。神は私たちが罪を犯すことをご存知で、また、誰が悔い改めて、主イエスを信じるかについてもご存知でした。

### 次の質問（The Next Question）

神が誰かはイエスを信じ、他はイエスを拒むことを前もってご存知ならば、なぜ神は人々を、イエスを拒むことを知っていながらお造りになられたのでしょうか。なぜ、イエスを敬い、信じることをご存知の人々だけをお造りにならなかったのでしょうか。

この質問に対して答えることは、少々理解が困難なところはありますが、不可能ではありません。

まず第一に、私たちは神が私たちをお造りになられた際、自由意志を与えたということを理解しなくてはなりません。つまり、私たちは皆、神に仕えるかどうか、その決断の特権は私たちにかかっているのです。私たちが従順になるか否や、悔い改めるか否やの決断は、神によって決められるものではありません。それらは私たちの選択です。

そうであるが故に、私たちは皆、試されなくてはなりません。神は勿論、私たち



## 神の永遠のご計画

がすることをあらかじめご存知ですが、神があらかじめ知る為には、私たちはどこかの地点で何かをしなくてはなりませんでした。

一つの例として言うならば、神は試合が始まる前にすべてのフットボール試合の結果をご存知です。しかし、神がその結果を予見するのであれば、その結果が伴う試合の実施が必要です。予見する結果がなければ、神は、試合が実施されない試合結果を予見しません（し、またできません）。

同様に神は、自由にモラルを持つ人たちに決断の機会が与えられ、その人たちが実際に決断する場合のみ、その決断を予見することができます。彼らは試されなくてはなりません。だからこそ、神は悔い改めて、イエスを信じる者たちだけを造ることをしなかった（し、またできなかった）のです。

### 他の質問 (Another Question)

「もし神の望みが従順な人たちだけならば、なぜ私たちに自由意志を与えたのだろうか。なぜ神は永遠に従順でいられるロボットの様な人種をお造りにならなかったのだろうか」ということも、尋ねられます。

その答えとしては、神は父であるからです。神は、父と子の関係を私たちと持ちたいと願っており、ロボットではそのような関係は持てません。神の願いは、自由意志によって神を愛する、選ばれた子供たちによって、永遠の家族を造ることです。聖書によると、これはあらかじめ神によって定められたことでした。

神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによって  
ご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたので  
す（エペソ 1:4後半-5、一部強調）。

もしあなたが、神がロボットからどれだけの喜びを得られるか知りたいのなら、自分の手に指人形をはめて、その人形にあなたを愛していると言わせてみてください。大抵の場合、あなたの心に温かい感情を持つことはないでしょう！その人形は、単にあなたがそれに言わせることを言っているだけです。人形はあなたを本当は愛している訳ではありません。

## 弟子をつくる指導者

愛がとても特別であるのは、それが誰かの自由意志による選択に基づいているからです。人形やロボットは、それら自身で何も決めることはできないので、愛について何も知りません。

神は、自分自身の心から神を愛し、仕えることを選ぶ子供の集まる家族が欲しいので、自由にモラルを持つ人たちを造らなくてはなりませんでした。この決断には、自由にモラルを持つ人たちの中には、神を愛さず、また仕えないことを選ぶ人も出て来る、というリスクを神が負われることを含んでいました。そして、多くの人々にご自身を表し、その創造、人々の良心、そして福音の呼びかけを通して、神は全ての人をご自身に近づけようとしています。その神に対して、自由にモラルを持つ人たちが生涯通して反発したならば、彼ら自身で神の御怒りを受けるにふさわしいことを証明したこととなり、彼らは受けるべき処罰に直面しなくてはならなくなるでしょう。

神は、全ての人が罪の報いから逃れる道を各人に用意した為に、地獄にいる誰も、神に向かって指をさして、正当に責め立てることはできません。神は全ての人に救われて欲しいと願っています（第一テモテ 2:4; 第二ペテロ 3:9参照）が、各人が自分自身で決めなくてはなりません。

### 聖書の予定説 (Biblical Predestination)

しかし、神が世を造られる前から、私たちのことをあらかじめ救う予定で選んでいる、と書いてある新約聖書の箇所についてはどうでしょうか。

残念ながら、ある人たちは、神がある人たちを救われるように、また残りは地獄へ落ちるように選び、その決断には各人がこれまでに行ってきたこととは一切関係がない、と考えています。それはつまり、神によって、誰が救われ誰が地獄へ落ちるのか既に決められている、と一般的に考えられています。この考えは自由意志という考え方を排除してしまい、当然のことながら、それは聖書に書いていないことです。予定説について聖書は何を教えているのか、ここで見ていきましょう。

実に聖書は神が私たちをお選びになられたことを教えていますが、この事実は適格であるとされなくてはなりません。神はこの世界の基が造られる前から、その導き

## 神の永遠のご計画

の影響下で、福音を自らの選択で敬い、信じるであろうと神が予見した人々をお救いになると定めています。使徒パウロが、神がお選びになった人々について言及しているところを読んでみましょう。

神は、あらかじめ知っておられたご自分の民を退けてしまわれたのではありません。それともあなたがたは、聖書がエリヤに関する個所で言っていることを、知らないのですか。彼はイスラエルを神に訴えてこう言いました。「主よ。彼らはあなたの預言者たちを殺し、あなたの祭壇をこわし、私だけが残されました。彼らはいま私のいのちを取ろうとしています。」ところが彼に対して何とお答えになりましたか。「バアルにひざをかがめていない男子七千人が、わたしのために残してある。」それと同じように、今も、恵みの選びによって残された者がいます（ローマ 11:2-5、一部強調）。

神はエリヤに、「男子七千人が、わたしのために残してある」と言いましたが、その男子七千人は、その前に「バアルにひざをかがめ」ないという選択を選んだことに注目してください。パウロは、それと同じように、今も、恵みの選びによって残された者がいると言いました。従って、確かに、神は私たちをお選びになりましたが、神がお選びになったのは、まず自分たちで正しい選択をした者たちである、と私たちは言うことができます。神はイエスを信じる者全てをお選びになり、それは創造以前から神がご計画したことでした。

### 神の予知 (God's Foreknowledge)

同様に、聖書は、神が正しい選択をする全ての者たちについてあらかじめご存知であることも教えています。例えば、ペテロはこのように書きました。

…寄留している、選ばれた人々、すなわち、父なる神の予知に従い…選ばれた人々へ（第一ペテロ 1:1-2前半、一部強調）。

私たちは、神の予知に従って選ばれました。パウロはまたあらかじめご存知である信者たちについてこのように書きました。

## 弟子をつくる指導者

なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々[私たち]を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子[イエス]が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました（ローマ 8:29-30）。

私たちがイエスを信じる選択をすることについて、神はあらかじめご存知であり、また、私たちが御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定めて、霊的に新しく生まれ変わった子供として、神の大きな家族の中の一員とされました。その永遠のご計画を守るのに、神は福音を通して私たちに召し、また義とされ、最後には神のこれから来る御国で私たちに栄光としてくださいます。

パウロは他の手紙でこのように書きました。

私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神はキリストにおいて、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちに祝福してくださいました。すなわち、神は私たちが世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。神は、ただみこころのままに、私たちがイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。それは、神がその愛する方によって私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです（エペソ 1:3-6、一部強調）。

同じ真理がここに表れています。神は世界の基の置かれる前から（私たちが悔い改め、信じることを前もってご存知で、）イエス・キリストによってご自分の聖い子にしようと、私たちにあらかじめ定めていました。

既に触れた様に、このような聖書のことばの意味を、聖書が教える他の全てのことを無視して曲解し、自分の救いにおいて、私たちに選択は何もなく、一般的には全

## 神の永遠のご計画

て神によってなされたと主張する人たちが中にはいます。これを彼らは「無条件の選び」の教義と呼んでいます。しかし、「無条件の選び」などというものを、誰が今までに聞いたことがあるでしょうか。その選びは、ある条件に見合ったら、という基準に基づいてなされない、というのでしょうか。自由な国では、私たちは議員を選ぶ時、私たちの頭の中で、各候補者がどれだけ条件を満たしているかで決めます。配偶者を選ぶ時、相手について良いと思われる特徴等の条件を満たしているかで決めます。しかし、ある神学者たちは、誰が救われ、誰が救われないかという神の選択と思われるものが「無条件の選び」であり、人々が条件に見合っているかどうかではないということ、私たちに信じて欲しいと考えています！つまり、個人の救いは単なる偶然によるものだ、無慈悲で、不正な、また偽善的で愚かな、神という怪物の気まぐれによるものだ、と言うのです！選びという言葉が条件付きであることを暗示しているのです。この「無条件の選び」という言葉自体に矛盾があります。もしそれが「無条件の選び」であるならば、それは全く選びではありません。それは単なる偶然に過ぎません。

## 全体像 (The Big Picture)

今私たちは全体像を見えています。神は私たち全員が罪を犯すことをご存知でしたが、私たち全員が生まれる前から、私たちを救うご計画がありました。この計画は、罪のない神の御子が私たちの罪の身代わりとなって死ぬことが求められている故に、神の驚くばかりの愛と正義を表すものでした。そして、パウロが「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです」(ガラテヤ 2:20)と言ったように、神は、私たちが悔い改め、信じることで赦されるだけでなく、私たちが神の御子、イエスのようになることも、あらかじめ定められていました。

生まれ変わった、神の子供である私たちは、いつか朽ちないからだを得て、私たちの素晴らしい天の御父に仕え、また愛し、交わる完全な社会に住むようになります！私たちは新しい地、新しいエルサレムに住むのです。これら全ては、イエスの犠牲的な死の故に可能とされたのです！神のあらかじめ定めてくださったご計画をほめたたえます！

弟子をつくる指導者  
今あるいのち (This Present Life)

私たちが神の永遠のご計画を一度理解すれば、私たちは今あるいのちについて、一体それが何を意味するのか、もっと完全にわかることができるようになります。主として、このいのちはそれぞれの人にとって試金石としての役割があります。各人が取る選択によって、その人が神と共に永遠に住み、神ご自身の子供の一人となる祝福溢れる特権を、満喫できるかどうかが決まります。神の導きに従うことで、自分を低める人たちは、悔い改め、信じ、そして高められるでしょう (ルカ 18:14参照)。今あるいのちは、主に、将来にあるいのちの試金石なのです。

これはまた、今あるいのちを取り囲む、いくつかの謎についての理解を助けてくれます。例えば、多くの人には、「なぜサタンとその悪霊どもは人を誘惑することを許されているのか」とか、「サタンが天から追放された時、なぜ彼は地上に行くことがゆるされたのか」と思い巡らせます。

私たちは、サタンでさえ、神のご計画の中でその目的を果たしていることを見ることができます。第一に、サタンは人間に与えられた代替策としての役割があります。もし、イエスに仕えることしか選択肢がなければ、皆が、その人の思いがどうかにかかわらず、イエスに仕えることになっているでしょう。

それは、立候補者がたった一人しかいない選挙で、投票しなくてはならない状況に似ています。その立候補者は、何の意義もなく当選するでしょうが、その人が果たして投票者の支持を実際に得たのか、皆に気に入られたのかについては、自信を持つことはできないでしょう。投票者は、その人に投票するしか選択肢がなかったのです！もし人の心にとって、神と比べる者がいなければ、神も同じ様な状況にあったでしょう。

このことについて、次の角度から考えてみてください。もし神がアダムとエバを何の制限もない園に置いたとしたら、一体どうなっていたでしょうか。そうしたら、アダムとエバは、その環境によってロボットとなっていたことでしょう。彼らは、神に背く機会がない為に、「私たちは神に従うことを選びます」ということが言えませ

ん。

更に重要なのは、アダムとエバには神に従って、彼らの愛を神に証明する機会がない為に、神は「アダムとエバが神である私を愛していることを知っている」と言えなくなってしまうことです。神は自由にモラルを持つ者たちに、神に背く機会を与え、彼らが本当に神に従いたい心があるかを見極めなくてはなりません。神は誰をも誘惑なさせることはありません（ヤコブ 1:13参照）。しかし、神は全ての人を試します（詩篇 11:5; 箴言 17:3参照）。神が人を試す一つの方法は、人がサタンに誘惑されることを許可することです。サタンはそのようにして、神の永遠の計画における御旨を果たすのです。

### 完璧な事例（The Perfect Example）

申命記十三章一から三節にはこのように書いてあります。

あなたがたのうちに預言者または夢見る者が現われ、あなたに何かのしるしや不思議を示し、あなたに告げたそのしるしと不思議が実現して、「さあ、あなたが知らなかったほかの神々に従い、これに仕えよう。」と言っても、その預言者、夢見る者のことばに従ってはならない。あなたがたの神、主は、あなたがたが心を尽くし、精神を尽くして、ほんとうに、あなたがたの神、主を愛するかどうかを知るために、あなたがたを試みておられるからである（一部強調）。

偽預言者にしるしと不思議を行う超自然的な能力を与えたのは神ではなく、サタンであったに違いない、と結論付けるのは理にかなっているようです。しかし、神はそれを許し、サタンの誘惑を神ご自身の試みとして用いて、人々の心に本当にあるものを明らかにしようとしていました。

この同じ原則は、イスラエルが本当に神に従うかどうかを見極める為に、周辺諸国によってイスラエルが誘惑されることを神が許した、という描写のある士師記二章二十一節から三章八節にも記されています。イエスも、悪霊の試みを受ける為に、つ

## 弟子をつくる指導者

まり神に試される為に、聖霊によって荒野へと導かれました（マタイ 4:1参照）。イエスは、罪がないことを証明しなくてはならず、罪がないことを証する唯一の方法は、誘惑によって試みられることです。

### サタンが全て悪い訳ではない (Satan Does Not Deserve All the Blame)

サタンは既に世界中の多くの人々を、その思いが福音の真理に気づかない様にして、騙してきましたが、サタンはただ誰でも見えなくさせることができる訳ではないことに、私たちは気づかなくてはなりません。サタンは、騙されることを許す人たち、つまり、真理を拒む人たちだけを騙すことができます。

パウロは、未信者について、彼らは「その知性において暗くなり」（エペソ 4:18）無知であると断言しましたが、彼はまた、彼らの暗くされた知性と無知の根本的な理由をも明示しました。

もはや、異邦人がむなしい心で歩んでいるように歩んではなりません。彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいのちから遠く離れています。道徳的に無感覚となった彼らは、好色に身をゆだねて、あらゆる不潔な行ないをむさぼるようになっていきます（エペソ 4:17後半-19、一部強調）。

救われていない人々は、単にサタンに悲しくも騙された不運な人たち、というだけではありません。むしろ、彼らは反抗的な罪人で、彼らの心が余りにもかたくなな故に、意思をもって無知となり、騙され続けることを求めている人たちなのです。

あなた自身の人生が証している様に、誰も騙され続ける必要はありません！ただ神の御前に心を柔らかくさえすれば、サタンはあなたを騙し続けることはできません。

最終的には、サタンはキリストが千年間統治する間縛られ、誰に対しても影響力がなくなります。

彼[御使い]は、悪魔でありサタンである竜、あの古い蛇を捕え、こ



## 神の永遠のご計画

それを千年の間縛って、底知れぬ所に投げ込んで、そこを閉じ、その上に封印して、千年の終わるまでは、それが諸国の民を惑わすことのないようにした。サタンは、そのあとでしばらくの間、解き放されなければならない（黙示録 20:2-3）。

サタンが監禁される前は、サタンは「諸国の民を惑わす」ことをしましたが、サタンが縛られると、もはや諸国の民を惑わすことはなくなると書いてあることに注目してください。しかしながら、再びサタンが解き放される時、諸国の民はまた惑わされます。

しかし千年の終わりに、サタンはその牢から解き放され、地の四方にある諸国の民…を惑わすために出て行き、戦いのために彼らを召集する…彼らは、地上の広い平地に上って来て、聖徒たちの陣営と愛された都とを取り囲んだ。すると、天から火が降って来て、彼らを焼き尽くした（黙示録 20:7-9、一部強調）。

なぜ神は暫くした後、サタンを解き放つのでしょうか。その理由は、キリストを心の中では憎んでいるが、キリストの統治下では従順を装う人たち全員が、その時現れる為です。そして彼らは正しく裁かれます。それが最後の試みとなるでしょう。

同様に、サタンは、心でキリストを憎む者たちが現れ、最終的に裁かれるかもしれないので、現在この地上を操ることを許されています。神は、ご自身の目的を果たし終え、サタンの必要がもはやなくなった時に、この惑わした者は火の池に投げ込まれ、そこで永遠に苦しみを受けることとなります（黙示録 20:10参照）。

### 将来の世界への準備 (Preparing For the Future World)

もしあなたが悔い改め、福音を信じたのなら、この人生において最初の、最も大切な試しを既に通ったこととなります。しかし、あなたの神に対する継続的な献身と忠実を神が見極める為に、あなたを試し続けることはないなどと思ってはなりません。神は「信仰に踏みとどまる」人たちだけを、「聖く、傷のない」者として神の御前に立たせてくださるのです（コロサイ 1:22-23）。

## 弟子をつくる指導者

この先には、私たちは皆いつか神の裁きの御座の前に立つ日が来ることは、聖書から明らかに示されていて、そこで、私たちがいかに地上で神に従順であったかに応じて、私たちは個々に報いを受けます。従って、神の御国における将来の特別な報いに、私たちがふさわしいかどうか見極める為に、私たちは未だ試されるのです。パウロはこう書きました。

それなのに、なぜ、あなたは自分の兄弟をさばくのですか。また、自分の兄弟を侮るのですか。私たちはみな、神のさばきの座に立つようになるのです。次のように書かれているからです。「主は言われる。わたしは生きている。すべてのひざは、わたしの前にひざまずき、すべての舌は、神をほめたたえる。」 こういうわけですから、私たちは、おのおの自分のことを神の御前に申し開きすることになります（ローマ 14:10-12、一部強調）。

なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです（第二コリント 5:10）。

ですから、あなたがたは、主が来られるまでは、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。主は、やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます。そのとき、神から各人に対する称賛が届くのです（第一コリント 4:5、一部強調）。

### 報酬は何か（What Will be the Rewards?）

イエスに対する愛と献身を証明する人々に与えられる報酬とは、一体何なのでしょうか。

聖書は少なくとも二つの報いについて述べています。一つは神からの称賛、もう

## 神の永遠のご計画

一つは神に仕える更なる機会です。これら二つの報いについては、イエスによる、身分の高い人のたとえ話の中で明らかにされています。

それで、イエスはこう言われた。「ある身分の高い人が、遠い国に行った。王位を受けて帰るためであった。彼は自分の十人のしもべを呼んで、十ミナを与え、彼らに言った。『私が帰るまで、これで商売しなさい。』しかし、その国民たちは、彼を憎んでいたのので、あとから使いをやり、『この人に、私たちの王にはなってもらいたくありません。』と言った。さて、彼が王位を受けて帰って来たとき、金を与えておいたしもべたちがどんな商売をしたかを知ろうと思い、彼らを呼び出すように言いつけた。さて、最初の者が現われて言った。『ご主人さま。あなたの一ミナで、十ミナをもうけました。』主人は彼に言った。『よくやった。良いしもべだ。あなたはほんの小さな事にも忠実だったから、十の町を支配する者になりなさい。』二番目の者が来て言った。『ご主人さま。あなたの一ミナで、五ミナをもうけました。』主人はこの者にも言った。『あなたも五つの町を治めなさい。』もうひとりが来て言った。『ご主人さま。さあ、ここにあなたの一ミナがございます。私はふろしきに包んでしまっておきました。あなたは計算の細かい、きびしい方ですから、恐ろしゅうございました。あなたはお預けにならなかったものをも取り立て、お蒔きにならなかったものをも刈り取る方ですから。』主人はそのしもべに言った。『悪いしもべだ。私はあなたのことばによって、あなたをさばこう。あなたは、私が預けなかったものを取り立て、蒔かなかったものを刈り取るきびしい人間だと知っていた、というのか。だったら、なぜ私の金を銀行に預けておかなかったのか。そうすれば私は帰って来たときに、それを利息といっしょに受け取れたはずだ。』そして、そば

## 弟子をつくる指導者

に立っていた者たちに言った。『その一ミナを彼から取り上げて、十ミナ持っている人にやりなさい。』すると彼らは、『ご主人さま。その人は十ミナも持っています。』と言った。彼は言った。

『あなたがたに言うが、だれでも持っている者は、さらに与えられ、持たない者からは、持っている者までも取り上げられるのです。ただ、私が王になるのを望まなかったこの敵どもは、みなここに連れて来て、私の目の前で殺してしまえ。』」（ルカ 19:12-27）

明らかに、イエスは、暫くの間留守にして戻ってきた、この身分の高い人を表しています。イエスが戻られる時、たとえ話の中でそれぞれのしもべに一ミナずつ与えられた様に、私たちは神が私たちに与えた賜物、能力、働き、機会をどのように用いたかについて説明しなくてはならなくなるでしょう。もし私たちが忠実であったのなら、私たちは神から称賛を受け、たとえ話の中で、それぞれの忠実なしもべがいくつかの町を支配するようになった様に、神がこの地を治めるのを助ける権威が私たちに与えられるでしょう（第二テモテ 2:12; 黙示録 2:26-27; 5:10; 20:6参照）。

### 将来私たちに与えられる裁きの公正さ（The Fairness of Our Future Judgement）

他にもイエスのたとえ話の中で、私たちに将来与えられる裁きがいかに校正なものであるかを描写しているものがあります。

天の御国は、自分のぶどう園で働く労務者を雇いに朝早く出かけた主人のようなものです。彼は、労務者たちと一日一デナリの約束ができると、彼らをぶどう園にやった。それから、九時ごろに出かけてみると、別の人たちが市場に立っており、何もしないでいた。そこで、彼は那些人たちに言った。『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。相当のものを上げるから。』彼らは出て行った。それからまた、十二時ごろと三時ごろに出かけて行って、同じようにした。また、五時ごろ出かけてみると、別の人たちが立っていたので、彼らに言った。『なぜ、一日中仕事もしないでここにいるので

## 神の永遠のご計画

すか。』 彼らは言った。『だれも雇ってくれないからです。』 彼は言った。『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。』 こうして、夕方になったので、ぶどう園の主人は、監督に言った。『労務者たちを呼んで、最後に来た者たちから順に、最初に来た者たちにまで、賃金を払ってやりなさい。』 そこで、五時ごろに雇われた者たちが来て、それぞれ一デナリずつもらった。 最初の者たちがもらいに来て、もっと多くもらえるだろうと思ったが、彼らもやはりひとり一デナリずつであった。 そこで、彼らはそれを受け取ると、主人に文句をつけて、 言った。『この最後の連中は一時間しか働かなかったのに、あなたは私たちと同じにしました。私たちは一日中、労苦と焼けるような暑さを辛抱したのです。』 しかし、彼はそのひとりに答えて言った。『私はあなたに何も不当なことはしていない。あなたは私と一デナリの約束をしたではありませんか。 自分の分を取って帰りなさい。ただ私としては、この最後の人にも、あなたと同じだけ上げたいのです。 自分のものを自分の思うようにしてはいけないという法がありますか。それとも、私が気前がいいので、あなたの目にはねたましく思われるのですか。』 このように、あとの者が先になり、先の者があとになるものです（マタイ 20:1-16）。

イエスはこのたとえ話で、神のしもべたちは皆、最後には同じように報いを受けるということを教えてはいません。それでは、不公平なだけでなく、聖書の他の箇所との矛盾が生じてしまいます（例えば、ルカ 19:12-27; 第一コリント 3:8を参照のこと）。

イエスはむしろここで、神のしもべたちは、彼らが神の為にしたことだけでなく、神が彼らにどれ位の機会を与えてきたかに基づいても、それぞれが報いられるということを知っています。キリストのたとえ話の中で一時間労働した者たちは、もしぶど

## 弟子をつくる指導者

園の主人から一日中働く機会を与えられていたなら、一日中働いていたでしょう。従って、一時間の労働の機会を十分用いて仕えた労務者たちは、一日中働く機会を与えられていた労務者たちと同じ報いを受けました。

従って、神もそれぞれのしもべに異なる機会を与えています。神はある者たちには、驚くような神が与えた賜物を用いて、何千人もの人々に仕え、祝福する素晴らしい機会を与えています。またある者たちには、そこまでの機会や賜物を与えないにしても、その人たちに神が与えられたものに忠実であるならば、最後には同じ報いを彼らも受けられるのです。<sup>71</sup>

## 結論 (The Conclusion)

神に従うこと程大切なことはなく、いつか皆がそれを知る時が来ます。賢い者たちはそれをもう知っていて、それに基づいて行動します！

結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。

神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。神は、善であれ悪であれ、すべての隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからだ (伝道者の書 12:13-14)。

弟子をつくる指導者は心を尽くして神に従い、その弟子たちが同じように振る舞う動機付けをさせる為に、できることは何でもしています！

この重要な主題である、私たちの将来の裁きについての更なる学びには、マタイ 6:1-6, 16-18; 10:41-42; 12:36-37; 19:28-29; 25:14-30; ルカ 12:2-3; 14:12-14; 16:10-13; 第一コリント 3:5-15; 第二テモテ 2:12; 第一ペテロ 1:17; そして黙示録 2:26-27; 5:10; 20:6を参照してください。

---

<sup>71</sup> 71 このたとえ話はまた、若い時に悔い改め、その後何年もの間忠実に主に仕えた人たちと、人生の最後の年に悔い改め、主に一年間だけ忠実に仕えた人たちの報いは同じであるということを教えている訳ではない。それは公平でなく、また神はそれぞれの人生の間ずっと悔い改める機会を与えてきていたので、それは神が各人に与えたその機会に基づいていないことになるであろう。従って、より長く働く者たちは、短い者たちよりも報いは大きいであろう。

## 第二十九章

### 携挙と後の日 (The Rapture and End Times)

イエスが人間としてこの地上を歩まれた時、イエスは弟子たちにご自分が去ることと、いつか再び戻られることをはっきりと言いました。イエスが本当に戻られる時、イエスは弟子たちをご自分と一緒に天に連れて行きます。(現代のクリスチャンはこのことを「携挙」と呼んでいます。) 例えば、イエスが十字架にかけられる前の晩、イエスは十一人の忠実な使徒たちにこう言いました。

あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのものと迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです (ヨハネ 14:1-3、一部強調)。

イエスのこのことばは、明白に十一弟子が生きている間にイエスが戻って来られる可能性を示唆していました。実際、イエスが言われたことを聞いた後、彼らは単純に、彼らの存命中にイエスが彼らの元へ戻って来られることを想像していました。

イエスはまた、弟子たちにご自分の再臨の準備をしておく様に、何度も忠告しました。これも、彼らが生きている間に再臨がある可能性を示唆しています(例として、

## 弟子をつくる指導者

マタイ24:42-44を参照のこと）。

### 使徒書簡から見る、イエスの今にも起こりそうな再臨について (Jesus' Imminent Return in the Epistles)

使徒書簡を書いた使徒たちは、確かに一世紀の読者が生きている間にイエスが戻って来られるという信仰を固く持っていました。例えば、ヤコブはこの様に書きました。

こういうわけですから、兄弟たち。主が来られる時まで耐え忍びなさい。見なさい。農夫は、大地の貴重な実りを、秋の雨や春の雨が降るまで、耐え忍んで待っています。あなたがたも耐え忍びなさい。心を強くしなさい。主の来られるのが近いからです (ヤコブ 5:7-8、一部強調)。

ヤコブが読者に、その生涯で起こらないかもしれないことを忍耐強く待つように勧告するのは、理にかなわないことであつたでしょう。しかし、ヤコブは主の再臨が「直ちに」あることを信じていました。前後を読むと、ヤコブはこの手紙を教会が迫害に苦しんでいる最中 (ヤコブ 1:2-4参照) で、信者たちは自然に主の再臨を待ち望んでいた頃にかいたことがわかります。

同様にパウロも、自分と同世代の人々の存命中に再臨があると固く信じていました。

眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです。私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずですが、私たちは主のみことばのとおりには言いますが、主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。主は、号令と、御使いの



## 携挙と後の日

かしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい（第一テサロニケ 4:13-18、一部強調）。<sup>72</sup>72

このことから、私たちはまた、イエスが天から戻られる時、既に死んだ信者の体がよみがえり、主の再臨の時まで生き残っている信者と一緒に、「雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会う」（携挙）ことがわかります。パウロはまた、「イエスにあって」眠った人々をイエスは天からご自身と一緒に連れて来られる、と語っているので、私たちはただ、携挙の時は天にいる信者の霊が、たった今よみがえった彼らの体と一つとなる、ということだけを結論付けることができます。

ペテロもまた、彼の最初の書簡を書いた時、キリストの再臨は直ちに起こることを信じていました。

ですから、あなたがたは、心を引き締め、身を慎み、イエス・キリストの現われのときあなたがたにもたらされる恵みを、ひたすら待ち望みなさい…万物の終わりが近づきました。ですから、祈りのために、心を整え身を慎みなさい…むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです（第一ペテロ 1:13、4:7、13、一部強調）。<sup>73</sup> 73

---

<sup>72</sup> 72 パウロとその同世代が生きている間に、イエスの再臨がある可能性をパウロが信じていることを示す他の参照聖句としては以下の通り。ピリピ 3:20; 第一テサロニケ 3:13; 5:23; 第二テサロニケ 2:1-5; 第一テモテ 6:14-15; テトス 2:11-13; ヘブル 9:28。

<sup>73</sup> 73 ペテロと同世代の者たちが生きている間に、イエスの再臨があるというペテロの確信が示されている他の参照聖句としては、第二ペテロ 1:15-19 と 3:3-15 がある。

## 弟子をつくる指導者

最後に、ヨハネが教会に宛てた彼の手紙の中にも、世の終わりは近く、当時の読者がイエスの再臨を見れるであろうと、ヨハネも信じていたことが書かれていました。

小さい者たちよ。今は終わりの時です。あなたがたが反キリストの来ることを聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現われています。それによって、今は終わりの時であることがわかります…そこで、子どもたちよ。キリストのうちにとどまっていなさい。それは、キリストが現われるとき、私たちが信頼を持ち、その来臨のときに、御前で恥じ入るということのないためです…愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。キリストに対するこの望みをいただく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします（第一ヨハネ 2:18、28; 3:2-3、一部強調）。

### 再臨の遅れ (His Delay)

過去二千年を振り返ると、使徒たちが望んでいた時直ちにイエスが戻って来られた、という訳ではないことに私たちは気づきます。当時でさえ、イエスが世を去ってからどれ程経過したかという視点から、イエスの再臨は本当にあるのかと疑い始める人々も出てきました。例えば、ペテロの地上の歩みが終わろうとしていた時（第二ペテロ 1:13-14参照）、イエスはまだ戻って来られていませんでした。そして、ペテロは疑いを持つ人々に向かって彼の最後の手紙でこう言いました。

まず第一に、次のことを知っておきなさい。終わりの日に、あざける者どもがやって来てあざけり、自分たちの欲望に従って生活し、次のように言うでしょう。「キリストの来臨の約束はどこにあるのか。先祖たちが眠った時からこのかた、何事も創造の初めからのままではないか。」 こう言い張る彼らは、次のことを見落としてい

## 携挙と後の日

ます。すなわち、天は古い昔からあり、地は神のことばによって水から出て、水によって成ったのであって、当時の世界は、その水により、洪水におおわれて滅びました。しかし、今の天と地は、同じみことばによって、火に焼かれるためにとっておかれ、不敬虔な者どものさばきと滅びとの日まで、保たれているのです。しかし、愛する人たち。あなたがたは、この一事を見落としてはいけません。すなわち、主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。しかし、主の日は、盗人のようにやって来ます。その日には、天は大きな響きをたてて消えうせ、天の万象は焼けてくずれ去り、地と地のいろいろなわざは焼き尽くされます（第二ペテロ 3:3-10）。

イエスの再臨の遅れはその愛と憐みによると、ペテロは断言しました。イエスは人々が悔い改める時間をもっと与えたいと思っておられます。しかし、イエスはまた、その再臨は必ず訪れることに疑いの余地はないことも断言しました。その時、イエスは大いなる御怒りをもって来られます。

聖書はまた、この本でも後に見ていきますが、キリストの御怒りをもった再臨よりも前に、未だかつてない世界規模の大患難と、神が悪者たちに注ぐ御怒りが来ることを明白に表しています。黙示録の主題の大部分は、その将来の時についてです。この本でも後程見ていきますが、聖書は将来七年間の患難が起こることが記されています。教会の携挙は、それらの七年間のどこかで、もしくはその近辺で起こることに疑いの余地はありません。

**いつ携挙は起こるのか (When Exactly Does the Rapture Occur?)**

## 弟子をつくる指導者

クリスチャンの間でよく意見が分かれる質問は、携挙が実際いつの時点で起きるのか、というものです。ある人たちは、携挙は七年の患難期のちょうど前に起きると言い、従っていつでも起きる可能性があるということです。またある人たちは、七年の患難期の真ん中で起きると言います。更には、携挙は患難期の最後で、イエスの御怒りをもった再臨の際に起きると言う人たちもいます。

このことで分裂があることは当然好ましくありませんし、これら全てに共通することは、携挙は七年の患難期に、もしくはその近辺に起きるであろう、ということです。何千年の歴史の中で、それはかなり狭い範囲であると言えるでしょう。従って、不一致によって分裂するよりも、私たちが皆同意できる点を喜ぶ方が良いでしょう！私たちがそれぞれどう思おうと、これから実際起ころうとしていることには変わりはないのです。

そうは言いましたが、私のクリスチャン人生の最初の二十五年間は、携挙は七年の患難期の前に起こると信じていました。そのように思ったのは、そのように教わったからであり、また黙示録に記されていることを体験したくないと思ったからです！しかし、自分自身で聖書を勉強していきながら、私は違った見解を受け入れるようになりました。それではここで、聖書が言っていることを共に見ながら、どのような結論に至るか考えていきましょう。あなたを説得させて、私の考えに賛同させるようにはならないかもしれませんが、私たちはそれでもお互いに愛するべきです！

### オリーブ山の説教 (The Olivet Discourse)

まず、終わりの日とイエスの再臨についての基本的な聖書箇所である、マタイによる福音書の二十四章を見ていきましょう。マタイによる福音書二十五章と合わせて、これら二章は、オリーブ山で、イエスの一番近かった弟子たちの何人が<sup>74</sup>74に施した説教の記録である為、*オリーブ山の説教*として知られています。そこを読んでいきな

---

<sup>74</sup> 74 マルコ 13 章 3 節には、当時まだ生きていた四人、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレの名前が挙がっている。因みに、同様の内容のオリーブ山の説教が、マルコ 13:1-37 とルカ 21:5-36、ルカ 17:22-37 にも見られる。

## 携挙と後の日

がら、私たちは終わりの日には色々なことが起きるということを学び、またイエスの話を聞いていた弟子たちが、携挙がいつ起こるかについて出した結論についても考えてみましょう。

イエスが宮を出て行かれるとき、弟子たちが近寄って来て、イエスに宮の建物をさし示した。そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「このすべての物に目をみはっているのでしょうか。まことに、あなたがたに告げます。ここでは、石がくずされずに、積まれたまま残ることは決してありません。」イエスがオリーブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとに来て言った。「お話しください。いつ、そのようなことが起こるのでしょうか。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか」(マタイ 24:1-3)。

イエスの弟子たちは、将来について知りたかったのです。彼らは、特に宮の建物が(イエスがたった今予告した様に)壊されるのはいつ起きるのか、また世の終わりといエスの来られる時の前兆はどんなものかが知りたかったのです。

考えてみれば、確かに、私たちは司令官ティトゥスとローマ軍によって宮の建物は西暦70年に完全に破壊されたことを知っています。私たちはまた、イエスのご自身のもとへ教会を集める為に、まだ再臨されていないことも知っています。従って、これらの二つの事柄は、どう見ても同時に起こることではないということなのです。

### イエスの回答 (Jesus Answers Their Questions)

将来宮の建物が破壊されることについて、最初に出た質問に対するイエスの回答を、マタイは記録しなかった様ですが、一方ルカはその福音書の中に含めました(ルカ 21:12-24参照)。マタイによる福音書の中では、イエスは直ちに主の再臨と世の終わりの前兆について語り始めました。

そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「人に惑わされないように[あなたがたは]気をつけなさい。わたしの名を名をのる者が大ぜい

## 弟子をつくる指導者

現われ、『私こそキリストだ。』と言って、多くの人を惑わすでしょう。また、戦争のことや、戦争のうわさを[あなたがたは]聞くでしょうが、[あなたがたは]気をつけて、あわてないようにしなさい。これらは必ず起こることです。しかし、終わりが来たのではありません。民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起こります。しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです（マタイ 24:4-8、一部強調）。

この説教の一番最初から、イエスは、一世紀にいたご自分の弟子たちが、再臨の時までに起こる様々な出来事の間にも、生存している可能性は十分あると、イエスが考えていたことは明らかです。イエスは何度もあなたがたという人称代名詞を用いていたことに注目してください。イエスはあなたがたという人称代名詞を二十四章の中で、少なくとも二十回用いました。従って、聴衆はイエスが預言したことを、彼らが生きている間に見ることになると信じていました。

勿論私たちは、その日イエスに耳を傾けていた弟子たちは皆、ずっと以前に既に亡くなっていることを知っています。しかし、私たちは、イエスが彼らをだましたと結論付けるべきではなく、イエスご自身も再臨の 때가いつになるかご存知なかったと考えるべきです（マタイ 24:36）。当時、イエスが施したオリーブ山の説教を聞いた人たちが、再臨の時にも生きている可能性は、確かに十分ありました。

イエスの最大の懸念は、後の日に現れる多くの偽キリストに、弟子たちがだまされはしないか、ということでした。私たちは、反キリスト者自身が、世界の多くの人々をだます、偽キリストとなることは知っています。人々はその人を素晴らしい救い主と見なすのです。

イエスは、戦争、ききん、地震が起こると言われましたが、それらの出来事がイエスの再臨のしるしではなく、単に「産みの苦しみの初め」であるということを示しました。そのようなしるしは、過去二千年の間にずっと起きていたと言っても過言ではありません。しかし、イエスはその後、まだ起きていない何かについて話し出しま

す。

### 世界規模の大患難が始まる (Worldwide Tribulation Begins)

そのとき、人々は、あなたがたを苦しいめに会わせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。また、そのときは、人々が大ぜいつまずき、互いに裏切り、憎み合います。また、にせ預言者が多く起こって、多くの人々を惑わします。不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます (マタイ 24:9-14、一部強調)。

もしあなたが当時イエスのみことばをその場で聞いた人たちに、再び、「あなたはこれらの事柄が成就するのを、あなたが生きている間に見ると思いますか」と尋ねるのなら、彼らは確信を持ってそうであると答えたことでしょう。イエスはあなたがたという人称代名詞をここでも使い続けていました。

私たちがたった今読んだ、「産みの苦しみ」を経て、未だかつてない、世界規模のクリスチャンへの大迫害が、私たちの予期しない時に起こるのです。私たちは、「すべての国の人々」、つまり文字通り、「すべての民族や種族」に憎まれます。イエスは、それが起きる時について、何百年以上もの期間といった一般的なものではなく、ある特定の時について言っていました。なぜならば、イエスはすぐその後、「また、そのときは、人々が大ぜいつまずき、互いに裏切り、憎み合います」と言っているからです。

未信者は「つまずく」ことはできないし、彼らは既に互いに憎み合っているのです。ここでイエスは、クリスチャン信者がその時になると他の信者を憎み出し、つまずくようになることを、明確に示しています。つまり、世界規模の患難が始まると、自分はキリストに従う者であると公言する多くの者たちが背教する結果となるでしょう。彼らが心からの信者でも、偽信者でも、羊でも、山羊でも、多くがつまずき、彼らは代

## 弟子をつくる指導者

わりに、迫害する権力者たちに他の信者たちの身元を明らかにし、かつて愛していると公言していた仲間を憎むようになります。結果として、世界中の教会が聖められるのです。

それから、偽預言者が起こされ、その内の一人は、反キリストの仲間として、黙示録に著しく描かれています（黙示録 13:11-18; 19:20; 20:10参照）。不法がはびこるので、人々の心に残っていたわずかな愛さえも尽き果て、罪人たちはすっかり冷酷となります。

### 殉教者と生存者 (Martyrs and Survivors)

イエスは信者たちがその命を失うことを予告しましたが（24:9参照）、どうやら全員がそうなるということではなさそうです。なぜなら、イエスは最後まで耐え忍ぶ者は救われると約束したからです（24:13参照）。つまり、もし彼らが偽キリストや偽預言者によってだまされることなく、信仰を捨てて離れさせる誘惑を拒むならば、彼らは、キリストが戻って来られ、空中に信者を呼び集める時に救われる、もしくは守られるでしょう。また、この将来起こる患難と救済は、預言者ダニエルに簡潔に啓示され、彼はこのように預言しました。

国が始まって以来、その時まで、かつてなかったほどの苦難の時が来る。しかし、その時、あなたの民で、あの書にしるされている者はすべて救われる。地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます（ダニエル 12:1-2）。

その時でさえも、福音が全ての国民（文字通りの意味は、「民族や種族」）に宣べられ、悔い改めの最後の機会が与えられ、それから世の終わりが来ると、イエスは約束した様に、救いは恵み深く与えられるでしょう。<sup>75</sup>黙示録の中にイエスの約束の成就が読み取れるのは興味深いことです。

---

<sup>75</sup> 75 この約束はその文脈から抜かれ、イエスが戻る前に、私たちは全世界を伝道する仕事を成就しなくてはならないとよく言われている。しかし、この文脈からは、この約束は、世の終わりが来るちょうど前に、全世界に福音を最終的に宣べ伝えることについて言っているのである。



## 携挙と後の日

また私は、もうひとりの御使いが中天を飛ぶのを見た。彼は、地上に住む人々、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音を携えていた。彼は大声で言った。「神を恐れ、神をあがめよ。神のさばきの時が来たからである。天と地と海と水の源を創造した方を拝め。」（黙示録 14:6-7、一部強調）

ある人たちは、御使いがその時に福音を宣べる理由は、七年の患難期の最中であるその時までには、携挙が既に起こっており、に入っており、信者は全ていなくなっているからだ、と考えています。しかし、それは勿論憶測です。

### 反キリスト (The Antichrist)

預言者ダニエルは、反キリストが実際七年の患難期の真ん中で、エルサレムに再建された宮の中に座り、自分こそ神であると宣言する、と示しました（ダニエル 9:27 参照、後程詳細を見ていきます）。イエスがオリーブ山の説教を続けながら思い巡らせていたのは、まさにこのことです。

それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす憎むべき者』が、聖なる所に立つのを見たならば、（読者はよく読み取るように。） そのときは、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。屋上にいる者は家の中の物を持ち出そうと下に降りてはいけません。畑にいる者は着物を取りに戻ってはいけません。だが、その日、悲惨なのは身重の女と乳飲み子を持つ女です。ただ、あなたがたの逃げるのが、冬や安息日にならぬよう祈りなさい。そのときには、世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような、ひどい苦難があるからです。もし、その日数が少なくされなかったら、ひとりとして救われる者はいないでしょう。<sup>76</sup>76しかし、選ばれた者のために、その日数は少なくさ

---

<sup>76</sup> 76 ある人たちが言う様に、もし七年間の患難期のちょうどこの時に教会の携挙が起きるとす

## 弟子をつくる指導者

れます（マタイ 24:15-22）。

これは、イエスがその前に話した患難についての、更なる詳細です（24:9参照）。反キリストが、エルサレムの宮から自分は神であると宣言する時、想像を絶する迫害がイエスの信者たちに対して起こります。自分の神性を宣言する中で、反キリストはその神性を認めることを皆に要求します。結果として、キリストに真に従う者たちは直ちに正式な国家の敵として捕らえられ、殺されます。それ故イエスは、ユダヤの信者たちは、いかなる理由があっても逃げ遅れない様に祈りながら、山へ逃げる様忠告しました。

私の考えでは、その様なことが起きたら、世界中にテレビ放映される事柄に当たるので、世界中の信者たちはどこか遠くへ避難するのが良いと思います。聖書は、全世界は反キリストによってだまされ、彼らは反キリストこそ彼らのキリストであると信じ、彼に忠誠を誓う様になります。反キリストが自分は神であることを宣言する時、その様な人たちは彼を信じ、拝みます。反キリストが真の神、つまりクリスチャンの神に対して冒瀆を吐く時、彼は惑わされた世界全体が、彼を崇拜することを拒む人々を憎むよう影響を与えるでしょう（黙示録 13:1-8参照）。

イエスは、患難の「日数が少なくされる」ことでご自分の民が最終的には救われることを約束しました。そうでなければ、「ひとりとして救われる者はないでしょう」（24:22）と書いてあります。イエスが、「選ばれた者のために」日数を「少なくする」ことは、イエスが現れ、彼らを空中で集める時、イエスが彼らを救済することを表しています。しかし、反キリストが自分は神であると宣言してから、どれ位後に、救済が起きるかについては、イエスはここでは述べていません。

それはとにかく、ここでも、イエスはその日聴衆に、反キリストが自分こそ神であると宣言し、クリスチャンに対して戦いを挑んで来ることを、彼らが生きている間に目撃するであろう、という印象を与えたことについて、ここに特記します。これは、

---

るならば、信者は皆引き上げられていた為に、イエスが信者に自分の命を救う為に逃亡せよという導きを与える必要がなくなってしまうであろう。

## 携挙と後の日

信者はそのことが起きる前に天へ携挙される、と言っている人たちに反した立場です。もしあなたがペテロ、ヤコブ、またはヨハネに、反キリストがその神性を宣言する前に、イエスは彼らを救いに戻って来るか尋ねたならば、彼らは「どうやらそうではないらしい」と答えていたでしょう。

### 聖徒に対する戦い (War Against the Saints)

聖書は信者に対する反キリストの迫害について、他の箇所でも預言しています。例えば、ヨハネはそれについて啓示を受け、黙示録の中でこう記しました。

この獣[反キリスト]は、傲慢なことを言い、けがしごとを言う口を与えられ、四十二か月間活動する権威を与えられた。そこで、彼はその口を開いて、神に対するけがしごとを言い始めた。すなわち、神の御名と、その幕屋、すなわち、天に住む者たちをののしった。彼はまた聖徒たちに戦いをいどんで打ち勝つことが許され、また、あらゆる部族、民族、国語、国民を支配する権威を与えられた(黙示録 13:5-7、一部強調)。

反キリストには、四十二か月間、もしくは三年半の間、「活動する権威」が与えられることに注目してください。これが七年の患難期のちょうど真ん中に当たるのは興味深いことです。患難期の終わりに、キリストが反キリストとその軍勢と戦う時に、反キリストの権威は確かに完全に彼から取り上げられる為、反キリストがその「活動する権威」を与えられるのは、患難期の後半の四十二か月であろうと考えるのは、理にかなっているように思われます。

明らかに、この四十二か月間の「活動する権威」とは、反キリストがその勢力を増している時に、神によって与えられるある権威であることから、何か特別な権威について話していることは明らかです。この特別な「活動する権威」は、反キリストが、ダニエル書で見る通り、聖徒たちを打ち負かす為の時が与えられていることも意味しています。

私が見ていると、その角[反キリスト]は、聖徒たちに戦いをいどん

## 弟子をつくる指導者

で、彼らに打ち勝った。しかし、それは年を経た方[神]が来られるまでのことであって、いと高き方の聖徒たちのために、さばきが行なわれ、聖徒たちが国を受け継ぐ時が来た…彼[反キリスト]は、いと高き方に逆らうことばを吐き、いと高き方の聖徒たちを滅ぼし尽くそうとする。彼は時と法則を変えようとし、*聖徒たちは、ひと時とふた時と半時の間、彼の手にゆだねられる*（ダニエル 7:21-22、25、一部強調）。

ダニエルは、聖徒たちが「ひと時とふた時と半時の間」反キリストの手に委ねられると預言しました。この謎めいた言い回しは、黙示録12章6節と14節と比較すると、三年半と解釈すべきです。黙示録12章6節には、ある象徴的な女が荒野に隠れて、1260日間、つまり三百六十日を一年とすると、三年半の間、「養われる」と書いてあります。それから、たった八節後に、彼女について再び触れられていますが、そこには「ひと時とふた時と半時の間」「養われる」と書いてあります。つまり、「ひと時と二時と半時の間」とは、1260日、もしくは三年半と同じ意味で用いられていることがわかります。

従って、「時」という言葉はこの文脈からは年を意味し、複数形の「時」（英語では“times”）は二年、「半時」は半年を意味するということです。この様な、黙示録12章14節に見られる普通ではない表現は、ダニエル書7章21節にある同様のことを意味するに違いありません。つまり、聖徒たちが反キリストの手にゆだねられる三年半という時は、黙示録13章5節で反キリストが「活動する権威」を与えられているのと同じ時であることがわかります。

これら二カ所に記された四十二カ月という期間は、一致した時であるというのは言うまでもない、と私は思います。もしそれらの期間が、七年の患難期の真ん中に起きる、反キリストの神性の宣言によって始まるのならば、聖徒たちは次の三年半の間、反キリストの手にゆだねられ、七年の患難期の終わり、もしくはその近くで、イエスは空中に表れ、ご自身のもとに聖徒たちを集める時に、彼らを解放するでしょう。し

かし、もしこれらの四十二カ月が、七年の患難期の他の時点で始まるのならば、携挙は七年の患難期の終わりよりも前の時点で起きる可能性があるという結論に至ります。

これら二つの可能性の後者では、聖徒たちが危険に陥り、反キリストの神性の宣言の時、彼らが山へ逃げなくてはいけなくなる前に、反キリストの手にゆだねられる必要が出てきてしまうという困難が生じます。これは非論理的のように思えます。

二つの可能性の前者では、黙示録に書いてある、神の天変地異的な世界規模の裁きの多くが起きている最中に、聖徒たちが地上にいるということを意味することになる困難が生じる様です。この点については後程見ていきます。

ここで、オリーブ山の説教に戻しましょう。

### 偽メシヤ (False Messiahs)

イエスは次に、弟子たちに向かって偽キリストについて言われることに惑わされないことが大切であることを、更に詳しく説明をしました。

そのとき、『そら、キリストがここにいる。』とか、『そこにいる。』とか[あなたがたに]言う者があっても、信じてはいけません。 にせキリスト、にせ預言者たちが現われて、できれば選民をも惑わそうとして、大きなしるしや不思議なことをして見せます。 さあ、わたしは、あなたがたに前もって話しました。 だから、たとい、『そら、荒野にいらっしゃる。』と[あなたがたに]言っても、飛び出して行ってはいけません。 『そら、へやにいらっしゃる。』と聞いても、信じてはいけません。 人の子の来るのは、いはずまが東から出て、西にひらめくように、ちょうどそのように来るのです。 死体のある所には、はげたかが集まります (マタイ 24:23-28)。

イエスは、人称代名詞であるあなたがたを多く使っていることに再び注目してください。 オリーブ山のイエスの聴衆は、偉大な奇跡を行う偽キリストや偽預言者の出現を、彼らが生きている間に見ることを期待していたでしょう。そして、イエスが

## 弟子をつくる指導者

なずまの様に、空に戻って来ることを期待していました。

その時信者たちに対する迫害は非常に恐ろしく、また偽キリストや偽預言者の行う奇跡にとっても説得力がある為に、信者たちがつまづく危険性は大変高いでしょう。それ故、イエスは繰り返し弟子たちに、ご自分の再臨前の世界の様子について警告しました。イエスは弟子たちに、他の多くの人たちがそうである様に、惑わされて欲しくありませんでした。真にしっかりとした信者は、いなくまの様にイエスが空中に戻って来るのを待っていますが、イエスに真に従う者でなければ、死体のある所にはげたかが集まる様に、彼らは偽キリストに引き寄せられるでしょう。

### 天空のしるし (Signs in the Sky)

イエスは続けました。

だが、これらの日の苦難に続いてすぐに、太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は天から落ち、天の万象は揺り動かされます。そのとき、人の子のしるしが天に現われます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るのです。人の子は大きなラッパの響きとともに、御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで、四方からその選びの民を集めます (マタイ 24:29-31)。

イエスのオリーブ山の説教のこの箇所描写は、太陽や月が暗くなると言った、イザヤ書やヨエル書から直接来ているもので(イザヤ 13:10-11; ヨエル 2:31参照)、世の終わりになされる神の最後の審判、いわゆる「主の日」について触れている箇所である為、当時のユダヤ人にとって馴染みのあるものであったでしょう。そして、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、イエスが栄光を帯びて天に現れるのを見ます。イエスの御使いたちは、「天の果てから果てまで、四方からその選びの民を集め」、それは、信者たちがイエスに会う為に、実際それぞれの場所から空中に集められることを意味し、これら全ては「大きなラッパの響き」とともに起きるのです。

## 携挙と後の日

繰り返しになりますが、もしあなたがオリーブ山の説教でこのことを聞いている時に、ペテロ、ヤコブ、またはヨハネに、イエスが再び戻られるのは、反キリストが興され、患難期に入る前か、それとも後かと尋ねたなら、彼らは確信をもって、「後」と答えたでしょう。

### 再臨と携挙 (The Return and the Rapture)

オリーブ山の説教のこの箇所は、パウロが書いたある出来事、まさに教会の携挙に非常によく似ていますが、多くの聖書解説者は、これは患難期が始まる *前* に起こると言っています。この章の始めの方で考察してきた次の聖書箇所を再考しましょう。

眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです。私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずですが。私たちは主のみことばのとおりに言いますが、*主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい。兄弟たち。それらがいつなのか、またどういう時かについては、あなたがたは私たちに書いてもらう必要がありません。主の日は夜中の盗人のように来るということは、あなたがた自身がよく承知してい*

## 弟子をつくる指導者

るからです。人々が「平和だ。安全だ。」と言っているそのようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります。ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むようなもので、それをのがれることは決してできません（第一テサロニケ 4:13-5:3、一部強調）。

パウロはイエスが神のラッパの響きのうちに、天から下って来られ、信者が「空中で主と会う」と書いています。その記述はちょうどイエスがマタイ24章30から31節で述べていることと同様に聞こえるものですが、それは明らかに反キリストと患難期の勃発後に起こることです。

さらにパウロは、キリストの再臨について続けて書き、それがいつ起こるのか、その「時と時代」について言及しました。またパウロは、読者に、「主の日が夜中の盗人のように来る[であろう]」ことを、当然承知しているはずの事として思い起こさせました。パウロは、キリストの再臨と信者の携挙が、「主の日」、即ち、恐ろしい御怒りと破壊が「平和と安全」を期待している人々の上を下る日に、起こるであろうと信じていました。キリストはご自身の教会を連れ去ろうとして再臨されるのですから、御怒りはこの世の上を下るでしょう。

これは、パウロがテサロニケ人へ書いた次の手紙の中で、キリストが御怒りをもって再臨する、と言っていたことと完全に一致しています。

つまり、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えてくださることは、神にとって正しいことなのです。そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現われるときに起こります。そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。その日に、主イエスは来られて、ご自分の聖徒たちによって栄光を受け、信じたすべての者の・・・そ



## 携挙と後の日

うです。あなたがたに対する私たちの証言は、信じられたので  
す。・・・感嘆の的となられます（第二テサロニケ 1:6-10、一部強  
調）。

パウロは、イエスが迫害を受けているテサロニケのクリスチャンたちに安息を  
与える為に戻られる時（**第二テサロニケ 1:7**）、主は「炎の中に、力ある御使いたちを  
従えて」現れて、彼らを苦しめる者には報いとして苦しみを与える、と書きました。  
これは、七年の患難期が始まる**前**に、キリストによって教会が挙げられる、と多くの  
人が描写する患難前携挙説、一般的に**秘密携挙**（イエスが密かに現れ、静かに教会を  
連れ去る）と呼ばれるものとは程遠いです。これはむしろ、イエスが**マタイ24章30**  
から**31節**に描写された、患難期の**終わり**、もしくは**終わり近く**に主の再臨があり、そ  
の時イエスは信者たちを引き上げ、未信者たちに御怒りを注ぐというものと、全く同  
じである様に思います。

## 主の日 (The Day of the Lord)

同じ手紙の後の箇所、パウロはこのように書きました。

さて兄弟たちよ。私たちの主イエス・キリストが再び来られること  
と、私たちが主のみもとに集められることに関して、あなたがたに  
お願いすることがあります。霊によってでも、あるいはことばに  
よってでも、あるいは私たちから出たかのような手紙によってでも、  
主の日がすでに来たかのように言われるのを聞いて、すぐに落ち着  
きを失ったり、心を騒がせたりしないでください（第二テサロニケ  
2:1-2）。

まず第一に、パウロの主題は、キリストの再臨と携挙であったことに注目してく  
ださい。主のみもとに私たちが「集められること」に関してパウロが言った時、マタ  
イによる福音書**24章31節**で、イエスが「天の果てから果てまで、四方から」選びの民  
を「集める」御使いたちについて話した際使った言葉と、似た表現を用いて書きまし  
た。

## 弟子をつくる指導者

第二に、パウロはそれらの出来事を「主の日」と同等と見なしたことに注目してください。それは、第一テサロニケ4章13節から5章2節でパウロがしたことと同じ様なことで、これ以上明白なところはありません。

パウロはこう続けました。

だれにも、どのようにも、だまされないようにしなさい。なぜなら、まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現われなければ、主の日は来ないからです。彼は、すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言します（第二テサロニケ 2:3-4、一部強調）。

パウロによると、主の日はまず携挙と主の再臨をもって始まらなくてはならないとのことですが、テサロニケのクリスチャンたちはどういう訳か、それがもう既に来た間違って教えられていました。しかしパウロははっきりと、背教（おそらく、イエスがマタイ二十四章十節で話した、おおぜいつまづくこと）が起こるまでは、また反キリストがエルサレムの宮でその神性を宣言するまでは、主の日は来ない、と言いました。従って、パウロは明確にテサロニケの信者たちに、反キリストが自分こそが神であると宣言するまでは、キリストの再臨も、携挙も、主の日も期待すべきではない、と言いました。<sup>77</sup>

パウロは次に、キリストの再臨と、それに続く反キリストの破滅について描写します。

私がまだあなたがたのところにいたとき、これらのことをよく話しておいたのを思い出しませんか。あなたがたが知っているとおりに、

---

<sup>77</sup> <sup>77</sup>「オリーブ山の説教のイエスの言葉は、患難期に生まれ変わりの体験をするユダヤ人信者にもみ適応する。なぜなら患難期に生まれ変わりの体験をしたクリスチャンは皆既に携挙されているからだ。」と仮想する理論は崩される。パウロは、異邦人であるテサロニケの信者たちに、携挙とキリストの再臨は、七年間の患難期の中間で起きるはずの、反キリストが自分を神だと宣言することの後でなければ起こらないであろう、と言った。

## 携挙と後の日

彼がその定められた時に現われるようにと、いま引き止めているものがあるのです。不法の秘密はすでに働いています。しかし今は引き止める者があって、自分を取り除かれる時まで引き止めているのです。その時になると、不法の人が現われますが、主は御口の息をもって彼を殺し、来臨の輝きをもって滅ぼしてしまわれます。不法の人の到来は、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行なわれます。なぜなら、彼らは救われるために真理への愛を受け入れなかったからです（第二テサロニケ 2:5-10）。

パウロは、主が「来臨の輝きをもって」反キリストを滅ぼすと言いました。もしこの「輝き」がちょうど九節前（2:1参照）に触れた携挙で現れる時のイエスの輝きと同じであるなら、教会が空中で主と出会う為に集められると同時に、反キリストは殺されます。この裏付けは、黙示録の十九章と二十章にあります。そこには、キリストの再臨（黙示録 19:11-16参照）、反キリストとその軍勢の破滅（19:17-21参照）、サタンの縛り（20:1-3参照）、そして「第一の復活」（20:4-6参照）という七年の患難期に殉教した信者たちの復活について書いてあります。もしこれが、最初の一般的な義人の復活である点で、本当に最初の復活であるのなら、聖書にはっきりと、キリストにあって死んだ者たちは皆、携挙の時に体のよみがえりを体験すると書かれているので、携挙とキリストの御怒りを伴う再臨が、反キリストの破滅と同時に起こるということは、それ程疑わしいことではありません（第一テサロニケ 4:15-17参照）。

7878

## 備える (Be Ready)

---

78 78 黙示録 20 章 4 から 6 節の中で語られている復活は、実際は、携挙の際のキリストの最初の再臨で起きる復活である第一の復活の第二の部分（後半）である、とある人たちは言っている。この解釈に何の根拠があるのか。もしこの黙示録の箇所（20:4-6）にある復活が実際は第二の復活なら、なぜそのように呼ばなかったのか。

## 弟子をつくる指導者

再び、オリーブ山の説教に戻しましょう。

いちじくの木から、たとえを学びなさい。枝が柔らかくなって、葉が出て来ると、夏の近いことがわかります。そのように、これらのことのすべてを見たら、あなたがたは、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。まことに、あなたがたに告げます。これらのことが全部起こってしまうまでは、この時代は過ぎ去りません。

<sup>79</sup>79 この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません（マタイ 24:32-35）。

イエスは、弟子たちに不意を突かれて欲しくなかったのです。それがオリーブ山の説教の重要な点でした。彼らが「これらのことのすべてを見たら」、つまり、世界規模の患難、背教、多くの偽預言者や偽キリストの出現、反キリストの神性の宣言、そして主の再臨の時が更に近づくと、太陽と月が輝きを失い、星が落ちるようになる時、イエスは「戸口まで近づいて」いることを知るでしょう。

しかし、主の再臨よりも数年、数カ月、もしくは数日先行してあるこれらのしるしについてイエスが弟子たちに言われた直後、イエスは再臨の正確な時は未だ謎のままであると言いました。

ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます（マタイ 24:36）。

この聖句は何ともよく文脈を無視して引用されていることでしょう！これは通常、イエスはいつでも戻られ、教会を携挙できる為、私たちはそれがいつになるかわからない、という考えを支持する為に引用されます。しかし前後関係を見ると、イエスが

---

<sup>79</sup> 79 その日イエスのみことばを聞いた人たちは、彼らの時代に、それら全てのことが起きるのを目撃すると思っていたに違いないが、私たちは実際そうではなかったことを知っている。従って、24章34節にあるイエスの言葉は、全てはひとつの世代で起きる、もしくは、これら全てが起こるまでは、恐らくクリスチャン（もしくはユダヤ人）という人種（本文では時代と訳されているこの言葉は、時としてこの様に訳される為）は過ぎ去らない、と解釈されなくてはならない。

## 携挙と後の日

意味したことはそうではありません。イエスは、その再臨の直前に起きるであろう沢山のしるしについて彼らに教えられることで、弟子たちが主の再臨に備えられる様に、イエスはかなりの努力を注いだのでした。ここで、イエスは弟子たちに、その日時は明らかにされないことを伝えています。更に、イエスはこの箇所、七年の患難期が始まる前の最初の再臨で、教会が密かに携挙される時のことを言っていた訳ではなく、患難期の終わり、もしくはその近辺にある主の再臨について、明白に伝えていました。それは文脈を素直に見れば、議論の余地はありません。

### イエスの再臨—何の前触もなく来るのか (His Return — A Complete Surprise?)

患難期の終わり近辺で起こる主の再臨の考えに対して、よくある議論は、患難期に起こる出来事によってそれを予期できる為、イエスが（恐らく）そうなると言った様な驚きはないのではないか、というものです。そう議論する人たちは、患難前携挙説に立ち、さもなければ、イエスが戻られるまで七年もしくはそれ以上かかることを信者たちは知っている、聖書が警告している様に備え、注意をする必要がなくなる、と言っています。

しかし、この議論に対する反論は、イエスのオリーブ山の説教全体の主旨は、弟子たちが患難期が終わる頃にある主の再臨に、確実に備えられる様にすることであり、またイエスが弟子たちに主の再臨に先行して起こる数多くのしるしを明らかにした、という事実です。なぜオリーブ山の説教は、イエスご自身の再臨が、それについて最初に話した時から少なくとも数年先のことになることをご存知であったにもかかわらず、それ程まで多くの警告をもって強調されているのでしょうか。明らかにイエスは、ご自身の再臨がまだ何年も先の話であっても、クリスチャンはそれに備え、注意している必要があると考えていました。使徒たちも、彼らの書いた手紙の中で信者たちに、イエスの再臨に備え、注意深くあるよう警告していましたが、それは単にイエスご自身がしたことを真似ていただけのことです。

それに加えて、患難前携挙説だけが備え続けることに関する警告を妥当とすると信じる人たちには、他の問題があります。彼らによると、キリストの最初の再臨は、

## 弟子をつくる指導者

患難期が終わる七年前に起きます。従って、イエスの最初の再臨と言われるものは、実際は、いつでも起き得るものではなく、患難期が終わる、ちょうど七年前に起きなくてはならないことである、と主張しています。つまり現実的には、七年の患難期の始まりという世界的な出来事、つまり確実に起きると予期されている出来事が、実際起こるまで再臨の準備の必要ない、と彼らは考えています。

患難前携挙説に同意する殆どの人たちは、彼らが正直ならば、世界の政治情勢を見て、イエスが今日、明日に戻られることはない、と言うでしょう。七年の患難期が始まる前に起きなくてはならないと預言された出来事がまだ残っています。例えば、私たちは間もなくダニエル書の中から見ていきますが、反キリストはイスラエルと七年間の契約を結びますが、それは患難期が始まるしるしです。つまり、患難期の終わる七年前に携挙が起こるならば、反キリストがイスラエルと七年の契約を結ぶ時にそれが起きなくてはならない、ということになります。そのシナリオを現実化させる、政治上での何かが起こらない限り、患難前携挙説を信じる人たちは、イエスの再臨に備える必要はないのです。

更にそのことは、イエスは患難期の終わりに再び戻ってくると信じている患難前携挙説支持者にとって、いわゆるその第二の再臨の正確な日付を計算できるという意味です。イエスが御父のみがご存知であると言っていたことは、一度携挙が起きると、そこから単に七年足すことで計算できてしまうということです。

もう一度、イエスが実際言っていたことから考えると、イエスはその再臨を全くの秘密としたくなかったことは明確です。実際、イエスはそれを患難期に起きる特定の出来事を通して予測して欲しかったのです。簡単に言えば、イエスは、世がなるように、弟子たちの不意を突かれて欲しくなかったのです。オリーブ山の説教でイエスはこう続けました。

人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のようなからです。洪水前の日々は、ノアが箱舟にはいるその日まで、人々は、飲んだり、食べたり、めとったり、とついだりしていました。そして、洪水

## 携挙と後の日

が来てすべての物をさらってしまうまで、彼らはわからなかったのです。人の子が来るのも、そのとおりです。そのとき、畑にふたりいると、ひとりを取られ、ひとりが残されます。ふたりの女が臼をひいていると、ひとりを取られ、ひとりが残されます。<sup>80</sup>80 だから、目をさましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られるか、知らないからです。しかし、このことは知っておきなさい。家の主人は、どろぼうが夜の何時に来ると知っていたら、目を見張っていたでしょうし、また、おめおめと自分の家に押し入れられはしなかったでしょう。だから、あなたがたも用心していなさい。なぜなら、人の子は、思いがけない時に来るのですから（マタイ 24:37-44）。

もう一度言いますが、イエスは明らかに、弟子たちがご自分の再臨に備えられることを気にしていました。実はそれこそが、オリーブ山の説教のこの箇所前後でイエスが言っていた全ての主な理由でした。いつも備えて注意していなさい、というイエスが弟子たちに与えた多くの忠告は、主の再臨が不意を突いて突然やって来ることを示唆しているものではなく、むしろ逆境の中で備え注意し続けることがいかに大変なことであるかを示唆しています。そうであるが故に、いつでも患難前に携挙があると考え、自分たちは他のクリスチャンよりも準備がよくできていると思っている人たちは、実際直面するであろうことには実際準備ができていないかもしれません。もし彼らが患難は何も起こらないと考えていて、後で反キリストが支配する、世界規模の迫害の只中に自分たちがいることに気づいたなら、つまり誘惑に彼らは圧倒されるかもしれません。聖書が実際に起こるであろうと教えていることに対して備えられている方が良いです。

---

<sup>80</sup> 80 これらの例にある裁きに苦しむ人は、取られる人なのか、残される人なのか、ということがよく議論されるが、それは本当にどちらでもよいことである。ここでの主旨は、キリストの再臨の際、ある者は整えられており、ある者はそうではないということである。備えられているかどうかで、その人の永遠の運命が決まる。

## 弟子をつくる指導者

また再び、もしあなたがペテロ、ヤコブ、またはヨハネにいつ彼らがイエスが戻られるのを見れると思うかと尋ねたならば、彼らはイエスが彼らに教えた、再臨の前に起こる全てのしるしについて話していたでしょう。彼らは患難期の前、もしくは反キリストが興される前に、主を見ることは期待していなかったでしょう。

### 夜中の盗人 (A Thief in the Night)

イエスは、弟子たちが主の再臨の際に不意を突かれない様に、多くのしるしを明らかにする中で、「夜中の盗人」のたとえさえも含めたことに注目してください。従って、「夜中の盗人」のたとえは、誰もイエスがいつ戻られるかについて、いかなる考えも持つべきではないことを証明する目的では、正しく用いられることはできません。

パウロとペテロは二人共、イエスの「夜中の盗人」のたとえを、「主の日」について記す際用いました（第一テサロニケ 5:2-4, 第二ペテロ 3:10参照）。彼らはこのたとえは、七年の患難期の終わり近くに起こるイエスの御怒りの再臨に当てはまると考えました。しかし、興味深いことに、パウロは読者に、「しかし、兄弟たち。あなたがたは暗やみの中にはいないのですから、その日が、盗人のようにあなたがたを襲うことはありません」（第一テサロニケ 5:4）と書きました。パウロは、しるしに注意し、イエスに従順に従う者たちは、暗やみの中にはおらず、キリストの再臨に不意を突かれることは全くないことを理解し、イエスのたとえを正しく解釈しました。彼らにとって、イエスは夜中の盗人の様には来ません。暗やみの中にいる者たちだけが驚くのであり、それこそ正にイエスが教えたことです（黙示録3章3節と16章15節のハルマゲドンの戦いの中の主の再臨に関して、イエスが「盗人」という言葉をどう使っているか参照してください。)

オリーブ山の説教でここから、イエスは繰り返し弟子たちにご自分の再臨に備える様警告しました。同時に、イエスは弟子たちに、悪いしもべ、十人の娘、タラントのたとえを物語り、そして山羊と羊を分ける裁きについて預言して（全て読むに値します）、どの様にしたら備えることができるかも教えました。殆ど全ての話の中で、



主の再臨の備えがない者たちは、地獄が待っていることを警告しました（マタイ 24:50-51; 25:30, 41-46参照）。備える方法とは、主が戻られる時に、神の御旨を行っているのを見られるようにすることです。<sup>81</sup><sup>81</sup>

### 他の異論 (Another Objection)

ノアやロト、またエジプトにいたイスラエルの民の様に、正しい者は決して不正を行う者に罰せられないという聖書の例に基づいて、ある人たちは患難期の終わり近辺での携挙について反対しています。

それは聖書の中にある多くの前例や約束に反することなので、私たちには、義人が七年の患難期に神の御怒りに苦しめられることはない信じられる理由は確かにあります（例えば、第一テサロニケ 1:9-10; 5:8を参照のこと）。

しかしイエスは、患難期には義人が苦しむことを預言しました。その時は神の御手になく、不義なる者たちの手の中にあるからです。クリスチャンは迫害から免れず、むしろ公約されています。七年の患難期に、多くの信者は命を失います（マタイ 24:9; 黙示録 6:9-11; 13:15; 16:5-6; 17:6; 18:24; 19:2参照）。多くは首をはねられます（黙示録 20:4参照）。

従って、もしある国で全ての信者が殉教したら、その国の全ての人の上に間違いなく神の御怒りが降り注がれるでしょう。また、もしある国に信者たちがいるならば、悪者たちの上に注がれる神の裁きから、神は当然信者たちを守ることができます。モーセの時代、神の裁きがエジプトに下っている時、神はそれを証明しました。近隣のエジプト人たちの上に続々と裁きが下る中、神は一匹の犬でさえ、イスラエル人に向かってうならせませんでした（出エジプト 11:7参照）。同様に、黙示録の中には、人を刺し苦痛を与えるいなごが放たれ、五カ月間地上の人々を苦しめることが許され

---

<sup>81</sup> <sup>81</sup> 明らかに、イエスが最も近い弟子たちに主の再臨に備えられないことを警告することは、彼らが備えられていない可能性があったということである。もしイエスが彼らが罪によって備えられていないことで永遠の刑罰はいることになる警告したのなら、彼らが罪によって救いを失うこともあり得る。このことは、私たちに聖さを保つ重要性和、また信者がその救いを失うことはないと考え人たちの愚かさを語っている。

## 弟子をつくる指導者

ますが、額に特別なしるしのある十四万四千人のユダヤ人奴隷たちを苦しめることは特定の許されないことが書かれています（黙示録 9:1-11参照）。

### 黙示録にみる携挙 (The Rapture in Revelation)

黙示録のどこにも教会の携挙について書いてありませんし、黙示録十九章に書かれている、ハルマゲドンの戦いで反キリストとその軍勢を打ちのめしに来るキリスト以外に、その出現について書いてある箇所はありません。携挙はその時でさえ、これから起きることとして書かれていません。しかし、患難期に命を落とした殉教者たちの復活は、同時期に起きることとして書かれています（黙示録 20:4参照）。パウロはキリストにあつて死を遂げた人たちは、キリストの再臨、つまり教会もまた携挙されるのと同じ時期に、彼らは生き返ると書いたのです、このことは、私たちが既に見てきた他の聖書箇所とも照合すると、黙示録十九章と二十章に描写されている、七年の患難期の終わりまでは携挙は起きない、という考えに私たちを導きます。

しかし、他にも見方があります。

ある人たちは、携挙を黙示録六章と七章の中に見出しています。黙示録六章十二から十三節に、太陽が「毛の荒布のように黒く」なり、天の星が地上に落ちると書いてありますが、これら二つのしるしの直後に、イエスは現れ、またイエスによって選ばれる民が集められると、ご自身が言っておられました（マタイ 24:29-31参照）。それから、七章に入って暫くすると、「大きな患難から抜け出て来た」（7:14）あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから集められた、天に入る大ぜいの群衆について書いてあります。彼らはちょうど一章前で別のグループである（6:9-11参照）、殉教者たちとして記されていないことを考えると、彼らは殉教よりも、むしろ携挙された、つまり大患難から救い出された信者たちであると考える様に、私たちを導いています。

携挙は、イエスがマタイ二十四章二十九から三十一節で類似したことを言うことから、単純に考えて、黙示録六章十二から十三節に描写された天空の現象が見られた後すぐに起きるであろう、と推定するのは確かに正しいことです。しかし私たちは、黙示録十六章十二から十三節にある天空の現象が、実際七年の患難期の間にい

## 携挙と後の日

つ起こるのかということについての結論は示唆できません。黙示録六章一から十三節に描写された出来事は順次起きることであり、携挙が六章十三節の直後にあるならば、携挙は、反キリストの出現（6:1-2参照）、世界戦争（6:3-4参照）、ききん（6:5-6参照）、そして剣、ききんと、死病、地上の獣による地上の四分の一の死（黙示録 6:7-8参照）、そして多くの殉教者が起こされる（黙示録 6:9-11参照）までは起きないだろう、という考えに私たちを導きます。確かにこれらの描写された出来事全ては、七年の患難期が終わる前に起きますが、それはまた、出来事全てが七年という期間全体を描写することにより、一番最後に携挙を位置付けていた、という可能性を含んでいます。

七年の終わりが来る前に携挙があるという考えに重きを置くのであれば、それは黙示録八章の後に七つの裁きが二組描写されているという事実によるでしょう。つまり、「ラッパの裁き」と「香炉の裁き」です。これら二組の裁きの後者には、神の御怒りが終わることが書かれています（15:1参照）。しかし、香炉の裁きが始まる直前に、ヨハネは、「獣と、その像と、その名を示す数字とに打ち勝った人々が、神の立琴を手にして、このガラスの海のほとりに立っていた」（15:2）のを見ます。これらの打ち勝った聖徒たちは、携挙されていたかもしれません。その一方で、彼らは殉教したかもしれません。聖書はどちらかということをお明らかにしていません。更に、十五章二節がその周辺に描写されたことと、時系列的な関係にあるのかどうかも、私たちにはわかりません。

黙示録で見つけた他の事実は、七年間が終わる前に携挙が起こるという考えを強調するものになるかもしれません。黙示録9章1から12節に記録されている第五の「ラッパの裁き」の際、刺して害を与えるいなごが「額に神の印を押されていない」（9:4）人間にだけ害を加えるように言い渡されると書いてあります。その神の印を額に持つ者は、十四万四千のイスラエルの子孫たちだけであると言われています（黙示録 7:3-8参照）。従って、他全ての信者は、第五のラッパの裁きの前に携挙される様です。さもなければ、彼らがいなごが与える苦痛から免れることはなかったでしょう。更に、

## 弟子をつくる指導者

このいなごは五カ月間、人間を苦しめるので (9:5, 10)、携挙は七年の患難期の終わる、少なくとも五カ月前に起きるに違いないと考えられています。

勿論、この理屈にそぐわない考え方もあります。恐らく、神の印を額に持つ者は他にもいて、単にこの黙示録という簡約された粗筋には触れられていないだけであろう、というものです。いずれにせよ、これが第五のラッパの裁きの前に携挙が起こることを証明しているのなら、それはまた、刺して害を与えるいなごが離される前に携挙されない信者のグループ、つまり十四万四千人という特別に選ばれたイスラエルの子孫がいるということです。しかし彼らは、害を与えるいなごに表される様な神の御怒りの苦しみからは感謝なことに守られます。

これら全ての結論は何でしょうか。私から言えることは、携挙は七年の患難期の終わり、もしくは終わり近くに起きるということです。信者たちは神の御怒りに苦しめられるということを恐れる必要はありませんが、七年間の患難期に対しては、殉教も含め、備えられておくべきです。

### 患難期の期間 (The Tribulation period)

ここで、七年の患難期について聖書が教えていることを、更にもう少し詳しく見ていくことにしましょう。どの様にして、私たちは七年という数字が患難期の期間であることに辿り着いたのでしょうか。私たちは黙示録の他に、聖書の中で後の日に関して恐らく最も啓示しているダニエル書からも学ぶ必要があります。

ダニエル書九章に、ダニエルは仲間のユダヤ人たちと共にバビロンに捕囚されたことが記されています。エレミヤ書を学びながら、ダニエルはバビロンでの捕囚期間は七十年であることを突き止めました (ダニエル 9:2; エレミヤ 25:11-12参照)。七十年という期間がほぼ終わろうとしていることを知り、ダニエルは彼の民の罪を告白し、神の憐みを求める祈りをし始めました。彼の祈りの答えとして、天使ガブリエルはダニエルの前に現れ、患難期を経て、キリストの再臨に至るまでのイスラエルの将来について啓示しました。ダニエル九章二十四から二十七節にある預言は、聖書の中で最も驚くべき箇所の一つです。その箇所を、私のコメントを括弧に含めて以下に記

します。

あなたの民[イスラエル]とあなたの聖なる都[エルサレム]については、七十週[ここで週とされているのは、明らかに、後に示される通り、週を七年として、計四百九十年を指す]が定められている。それは、そむき[恐らく、イスラエルの罪の絶頂に当たる、自分たち自身のメシヤを十字架につけた行為]をやめさせ、罪を終わらせ[恐らく、キリストの十字架の上のあがないの御業を意味している]、咎を贖い[間違いなく、キリストの十字架の上のあがないの御業意味している]、永遠の義をもたらし[神の御国で、イエスが地上を統治し始めること]、幻と預言とを確証し[恐らく、聖書の著作の完結、もしくは、千年王国の前に関する預言の成就を意味している]、至聖所に油をそそぐ [恐らく、千年王国の神殿の建設を意味している]ためである。それゆえ、知れ。悟れ。引き揚げてエルサレムを再建せよ、との命令[この命令は紀元前445年にアルタシャスタ王により出たもの]が出てから、油そそがれた者、君主[主イエス・キリスト]の来るまでが七週。また六十二週の間[計六十九週、つまり四百八十三年間]、その苦しみの時代に再び広場とほりが建て直される [バビロンによって以前破壊されたエルサレムの再建のこと]。その六十二週の後、[紀元前445年の発令から四百八十三年後]油そそがれた者は断たれ、彼には何も残らない[もし、一年を三百六十日とするユダヤのカレンダーで計算すると、イエスは西暦32年に十字架で処刑されることになる]。やがて来たるべき君主[反キリスト]の民[ローマ軍]が町と聖所を破壊する[西暦70年にティトゥスとローマ軍によるエルサレム陥落を意味する]。その終わりには洪水が起こり、その終わりまで戦いが続いて、荒廃が定められている。彼[「来るべき君主」反キリスト]は一週の間[もしくは七年間、つまり患難期]、

## 弟子をつくる指導者

多くの者[イスラエル]と堅い契約を結び、半週の間[約三年半]、いけにえとささげ物とをやめさせる。荒らす忌むべき者が翼に現われる[反キリストがエルサレムのユダヤ人の神殿の中で自分自身に座を設け、自分こそ神であると宣言する時; 第二テサロニケ 2:1-4参照]。ついに、定められた絶滅[イエスの再臨]が、荒らす者の上にふりかかる[イエスにより反キリストが倒される]」（ダニエル 9:24-27、一部強調）。

### 特別な四百九十年 (490 Special Years)

紀元前445年、アルタシャスタ王がエルサレムの再建を命令した時から、神は特別な四百九十年の将来の歴史を定めました。しかし、それらの四百九十年は、連続していませんでした。むしろ、これらは四百八十三年と七年という二つに区分されました。最初の四百八十三年が全て完了した時（イエスが十字架にかけられた年に）、時は止まりました。ダニエルは恐らく、今までの約二千年の間、時が止まってしまうとは夢にも思わなかったことでしょう。将来のどこかの地点で、時計は動き出し、最後の七年に突入します。その最後の七年は、「患難期」としてだけでなく、「ダニエルの第七週」としても知られています。

それらの七年は、三年半の二期に分かれます。その中間点で、今ダニエルの預言でも読んだ様に、反キリストがイスラエルに対して結んだ契約を破り、「いけにえとささげ物とをやめさせ」ます。反キリストは、パウロも言っていた通り、エルサレムに自分の御座を設け、自分こそが神であると宣言します。<sup>82</sup>82 これこそ、イエスが言われた「荒らす憎むべき者」（マタイ 24:15参照）なのです。だからこそ、ユダヤにいる信者たちは、「山へ逃げる」べきなのです（マタイ 24:16）。なぜならそれは、いまだかつて見たこともない、最もひどい患難の始まりのしるしだからです（マタイ 24:21参照）。

---

<sup>82</sup> 82 これは、当然、エルサレムの神殿が将来再建されるはずであることを示唆している。今の所、エルサレムに神殿はない（本書執筆中の 2005 年現在）。

## 携挙と後の日

黙示録第十二章の中に記録された「ユダヤ人の逃亡」は、ヨハネがそのまぼろしの中で象徴的に見せられた可能性はあります。もしそうであるなら、ユダヤにいる信者たちは、ちょうど三年半の間、つまり七年の患難期の残り期間に、荒野の中で彼らの為に用意された、安全で特別な場所で「養われる」のでしょうか（黙示録 12:6、13-17 参照）。ヨハネは、彼らの逃亡に対してサタンが激怒し、それに続いて、「神の戒めを守り、イエスのあかしを保っている者たち」の残りとは戦うのを（黙示録 12:17）を予見しました。ですから、世界中の信者は、反キリストがエルサレムで自分こそは神だと宣言する時に、安全の為に遠く離れた場所へ逃げるのが良いと私は考えます。

### ダニエルの最後の啓示 (Daniel's Last Revelation)

ダニエル書で、まだここで取り上げていない、もう一つの興味深い箇所は、その驚くべき書の最後の十三節にあります。ここは、天使がダニエルに話しているところです。その箇所を、私のコメントを括弧に含めて以下に記します。

その時、あなたの国の人々を守る大いなる君、ミカエル[天使]が立ち上がる。国が始まって以来、その時まで、かつてなかったほどの苦難の時が来る[これは、マタイ二十四章二十一節でイエスが話した苦難と同じである]。しかし、その時、あなたの民で、あの書にしるされている者はすべて救われる[ここは、ユダヤ人の逃亡、もしくは携挙による信者の救済を意味している可能性がある]。地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます。ある者は永遠のいのちに、ある者はそしりと永遠の忌みに[義人と悪者の復活]。思慮深い人々は大空の輝きのように輝き、多くの者を義とした者は、世々限りなく、星のようになる。 [彼らの復活の後、義人たちは新しいからだを得て、そのからだは神の栄光で輝いている。] ダニエルよ。あなたは終わりの時まで、このことばを秘めておき、この書を封じておけ。多くの者は知識を増そうと探り回ろう。」 [過去百年の間で、驚くべき発展を遂げた交通と知識は、この予見の成

## 弟子をつくる指導者

就の様である。]

私、ダニエルが見ていると、見よ、ふたりの人が立っていて、ひとは川のこちら岸に、ほかのひとは川の向こう岸にいた。それで私は、川の水の上にいる、あの亜麻布の衣を着た人に言った。

「この不思議なことは、いつになって終わるのですか。」すると私は、川の水の上にいる、あの亜麻布の衣を着た人が語るのを聞いた。彼は、その右手と左手を天に向けて上げ、永遠に生きる方をさして誓って言った。「それは、ひと時とふた時と半時[黙示録十二章六節と十二章十四節の解説によると、三年半]である。聖なる民の勢力を打ち砕くことが終わったとき、これらすべてのことが成就する。」[ダニエル書七章二十五節で、聖徒たちは三年半の間、反キリストの手に渡されるとある通り、ここではこれらが七年の患難の最後の三年半であることは明らかな様である。「聖なる民の勢力」が「打ち砕かれる」時、天使が語った全ての出来事に終わりが来る。]私はこれを聞いたが、悟ることができなかった。そこで、私は尋ねた。「わが主よ。この終わりは、どうなるのでしょうか。」彼は言った。「ダニエルよ。行け。このことばは、終わりの時まで、秘められ、封じられているからだ。多くの者は、身を清め、白くし、こうして練られる[患難を通してであることは疑いない]。悪者どもは悪を行ない、ひとりも悟る者がいない。しかし、思慮深い人々は悟る。常供のささげ物が取り除かれ、荒らす忌むべきものが据えられる時から千二百九十日がある。【これは二つの出来事の間の時間と解釈されるべきではない。なぜなら、これら両方は七年間の真ん中で起こるからである。むしろ、これら二つの出来事が起きる時から、最後に何かとても重要なことが起きるまでが、千二百九十日



## 携挙と後の日

である解釈されるべきである。千二百九十日は、一年三百六十日の計算で、三年半より三十日多いということになる。この日数は、ダニエル書や黙示録で預言的な箇所として何度も触れられている。なぜ余分に三十日が足されているかについては、憶測の話である。この不思議に更に付け加える様に、天使は次のことをダニエルに言った:]幸いなことよ。忍んで待ち、千三百三十五日にたちする者は。  
[ここでは、もう余分に四十五日となっている謎がある] あなたは終わりまで歩み、休みに入れ。あなたは時の終わりに、あなたの割り当ての地に立つ[ダニエル自身の復活も約束されている]。』（ダニエル 12:1-13)

言うまでもなく、それらの余分な七十五日間の最後にはとても素晴らしい何かが起こるのでしょう！私たちは待つて見るしかありません。

私たちは、黙示録の最後の章を読むと、恐らくキリストの再臨の直後に、多くの出来事が起こるであろうことがわかりますが、その一つは、小羊の婚宴であり、それについて天使はヨハネに、「小羊の婚宴に招かれた者は幸いだ」と言いました（黙示録 19:9）。恐らく、ダニエルに天使が言っていた、同じ祝福のことでしょう。もしそうであるとすれば、イエスの再臨後、二カ月半の間、栄光の大宴会が催されるでしょう。

恐らく、それらの七十五日間は、黙示録の最後の方の章に書かれている様な、反キリストと偽預言者が燃えている火の池に投げ込まれたり、サタンが縛られたり、キリストの世界規模の王国の政権を築き上げたりするのに用いられるのかもしれませんが（黙示録 19:20-20:4参照）。

## 千年王国 (The Millennium)

千年王国はイエスが千年間、全地を個人的に治める時期を表す言葉で（黙示録 20:3, 5, 7参照）、それは七年の患難期の後に起こります。イザヤは、全地の政治的主権がキリストにあることを、ほぼ三千年前に予見しました。

## 弟子をつくる指導者

ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「…平和の君」と呼ばれる。その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる（イザヤ 9:6-7、一部強調）。

同様に、天使ガブリエルはマリヤに、彼女の息子がとこしえまで王国を治めることになろうと言いました。

すると御使いが言った。「こわがることはない。マリヤ。あなたは神から恵みを受けたのです。ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。彼はとこしえにヤコブの家を治め、その国は終わることがありません。」（ルカ 1:30-33、一部強調）。<sup>83</sup>83

千年王国の間、イエスはエルサレムのシオン山から個人的に治め、そこは現在の標高よりも高く立つようになります。キリストの統治は、全ての国々にとって完全な正義のひとつとなり、全地上に平和をもたらします。

終わりの日に、主の家の山は、山々の頂に堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち、すべての国々がそこに流れて来る。多くの民が来て言う。「さあ、主の山、ヤコブの神の家を上ろう。主はご自分の道を、

---

<sup>83</sup> 83 この箇所は、それが実際聖書の中で言っていることを誤解することにより、預言的な出来事の時間について、間違った推測をいとも簡単にできてしまうことを例証している。マリヤは簡単に、また論理的に、彼女の特別な息子が数十年の内に、ダビデの王位に就くと思ってしまったかもしれなかった。ガブリエルは彼女に、彼女はヤコブの家を治める息子を産むと言ったが、それはまるで、イエスの誕生と統治が二つ続いて起こる出来事の様聞こえた。マリヤは、それらの間に、少なくとも二千年あるとは、決して想像しなかったであろう。私たちも、預言的聖句を解釈しようとする時、似たような思い込みをしないよう注意すべきである。

## 携挙と後の日

私たちに教えてくださる。私たちはその小道を歩もう。」それは、シオンからみおしえが出、エルサレムから主のことばが出るからだ。主は国々の間をさばき、多くの国々の民に、判決を下す。彼らはその剣を鋤に、その槍をかまに打ち直し、国は国に向かって剣を上げず、二度と戦いのことを習わない（イザヤ 2:2-4）。

ゼカリヤは同じことを預言しました。

万軍の主はこう仰せられる。「わたしは、シオンをねたむほど激しく愛し、ひどい憤りでこれをねたむ。」主はこう仰せられる。「わたしはシオンに帰り、エルサレムのただ中に住もう。エルサレムは真実の町と呼ばれ、万軍の主の山は聖なる山と呼ばれよう。」…万軍の主はこう仰せられる。「再び、国々の民と多くの町々の住民がやって来る。一つの町の住民は他の町の住民のところへ行き、『さあ、行って、主の恵みを請い、万軍の主を尋ね求めよう。私も行こう。』と言う。多くの国々の民、強い国々がエルサレムで万軍の主を尋ね求め、主の恵みを請うために来よう。」万軍の主はこう仰せられる。「その日には、外国語を話すあらゆる民のうちの十人が、ひとりのユダヤ人のすそを堅くつかみ、『私たちがあなたと一緒に行きたい。神があなたがたとともにおられる、と聞いたからだ。』と言う。」（ゼカリヤ 8:2-3, 20-23）

聖書は、その千年間、信者たちが実際キリストと共に統べ治めることを教えています。神の御国では、彼らの現在の信仰深さに基づいて、彼らに任される分が決められます（ダニエル 7:27; ルカ 19:12-27; 第一コリント 6:1-3; 黙示録 2:26-27; 5:9-10; と 22:3-5参照）。

私たちは私たちの復活された体を身に着ていますが、その時には朽ちる体を持つ自然のままの人たちも地上に住んでいるようです。更に、族長たちは長寿を再び得て、野生動物たちはそのどう猛性を失います。

## 弟子をつくる指導者

わたしはエルサレムを喜び、わたしの民を楽しむ。そこにはもう、泣き声も叫び声も聞かれない。そこにはもう、数日しか生きない乳飲み子も、寿命の満ちない老人もない。百歳で死ぬ者は若かったとされ、百歳にならないで死ぬ者は、のろわれた者とされる…狼と子羊は共に草をはみ、獅子は牛のように、わらを食べ、蛇は、ちりをその食べ物とし、わたしの聖なる山のどこにおいても、そこなわれることなく、滅ぼされることもない。」と主は仰せられる。（イザヤ 65:19-20, 25; またイザヤ 11:6-9も参照のこと）。

聖書には、特に旧約聖書において、将来の千年王国に言及している事柄が多く見られます。更なる学びには、イザヤ 11:6-16; 25:1-12; 35:1-10; エレミヤ 23:1-5; ヨエル 2:30-3:21; アモス 9:11-15; ミカ 4:1-7; ゼパニヤ 3:14-20; ゼカリヤ 14:9-21; そして黙示録 20:1-6を参照してください。

詩篇にもまた、預言的に千年王国にあてはまるものが多く見られます。例えば、詩篇四十八編の以下の箇所を読んでみてください。

主は大いなる方。大いにほめたたえらるべき方。その聖なる山、われらの神の都において。高嶺の麗しさは、全地の喜び。北の端なるシオンの山は大王の都。神は、その宮殿で、ご自身をやぐらとして示された。見よ。王たちは相つどい、ともどもにそこを通り過ぎた。彼らは、見るとたちまち驚き、おじ惑って急いで逃げた。その場で恐怖が彼らを捕えた。産婦のような苦痛（詩篇 48:1-6、一部強調）。

イエスが千年王国の最初にエルサレムでその政権を築く時、患難期を生き延びた地上の統治者たちの多くは、イエスの統治についての報告を聞き、それを自分たちで見に行くでしょう！彼らはそこで見るものに驚くことでしょう。<sup>84</sup>84

---

<sup>84</sup> 84 他の聖書箇所を見ると、信者たちだけが地上に住んでいるのではなく、未信者もいる（イ

キリストの千年王国の統治について言及している他の詩篇としては、詩篇 2:1-12; 24:1-10; 47:1-9; 66:1-7; 68:15-17; 99:1-9; そして100:1-5を参照してください。

### 永遠の御国 (The Eternal State)

千年王国の最後は、聖書学者たちが「永遠の御国」と呼ぶものの始まりを指します。それは、新しい天と地の始まりです。そこでイエスは、第一コリント十五章二十四から二十八節によると、全てを御父の下へ返します。

それから終わりが来ます。そのとき、キリストはあらゆる支配と、あらゆる権威、権力を滅ぼし、国を父なる神にお渡しになります。キリストの支配は、すべての敵をその足の下に置くまで、と定められているからです。最後の敵である死も滅ぼされます。「彼は万物をその足の下に従わせた。」[詩篇 8:6]からです。ところで、万物が従わせられた、と言うとき、万物を従わせたその方がそれに含まれていないことは明らかです。しかし、万物が御子に従うとき、御子自身も、ご自分に万物を従わせた方に従われます。これは、神が、すべてにおいてすべてとなられるためです。

千年間縛られていたサタンは、千年王国が終わると解放されます。そしてサタンは、イエスに従順を装いながら、心の内では反発している人たちを惑わします(詩篇 66:3参照)。

神は、彼らの心の状態が現れ、正しく裁かれる様に、サタンが彼らを惑わすことを許します。サタンの惑わしを受け、イエスの政権を打倒しようと、彼らは聖なる都、エルサレムに一丸となって攻撃を仕掛けます。包囲する敵軍は、天から降て来る火により焼き尽くされるので、戦いは長く続かず、サタンは火と硫黄との池に永遠に投げ込まれます(黙示録 20:7-10参照)。

---

ザヤ 2:1-5<sup>84</sup> 更に聖書には、(パロの様に) 神に対して心を頑なに閉ざし続ける人々の心を、神は更に意識的に頑なにものにさせることさえある、ということが記されている。そのような人々が悔い改める望みは殆どない様に思われる。  
; 60:1-5; ダニエル 7:13-14 参照)。

## 弟子をつくる指導者

この将来の戦いの為の集まることについては、詩篇二篇で預言されています。

なぜ国々は騒ぎ立ち、国民はむなしくつぶやくのか。地の王たちは立ち構え、治める者たちは相ともに集まり、主と、主に油をそそがれた者[キリスト]とに逆らう。「さあ、彼らのかせを打ち砕き、彼らの綱を、解き捨てよう。」天の御座に着いておられる方は笑う。主はその者どもをあざけられる。ここに主は、怒りをもって彼らに告げ、燃える怒りで彼らを恐れおののかせる。「しかし、わたしは、わたしの王を立てた。わたしの聖なる山、シオンに。」[イエスは今言われる。]「わたしは主の定めについて語ろう。主はわたしに言われた。『あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える。あなたは鉄の杖で彼らを打ち砕き、焼き物の器のように粉々にする。』」それゆえ、今、王たちよ、悟れ。地のさばきづかさたちよ、慎め。恐れつつ主に仕えよ。おののきつつ喜べ。御子に口づけせよ。主が怒り、おまえたちが道で滅びないために。怒りは、いまにも燃えようとしている。幸いなことよ。すべて主に身を避ける人は。

## 最後の審判 (A Final Judgement)

永遠の御国の直前に、最後の審判が行われます。全ての時代の不義なる者たちは皆、神の御座の前に立つ為に、体がよみがえり、彼らの行いに応じて裁かれます（黙示録 20:5, 11-15参照）。今ハデスにいる者たちは皆、その裁きの場、「大きな白い御座」と呼ばれるところに連れて来られ、火の池であるゲヘナに投げ込まれます。これが「第二の死」と呼ばれるものです（黙示録 20:14）。

永遠の御国は、まず天と地が滅びることから始まり、それは以下のイエスが二千年前に言われた約束の成就でもあります。「この天地は滅び去ります。しかし、わた

## 携挙と後の日

しのことばは決して滅びることがありません」(マタイ 24:35)。

そしてペテロが第二の手紙で預言した通り、神は新しい天と地を創造されます。

しかし、主の日は、盗人のようにやって来ます。その日には、天は大きな響きをたてて消えうせ、天の万象は焼けてくずれ去り、地と地のいろいろなわざは焼き尽くされます。このように、これらのものはみな、くずれ落ちるものだとなれば、あなたがたは、どれほど聖い生き方をする敬虔な人でなければならないことでしょう。

そのようにして、神の日の来るのを待ち望み、その日の来るのを早めなければなりません。その日が来れば、そのために、天は燃えてくずれ、天の万象は焼け溶けてしまいます。しかし、私たちは、神の約束に従って、正義の住む新しい天と新しい地を待ち望んでいます(第二ペテロ 3:10-13; イザヤ 65:17-18も参照のこと)。

最後に、新しいエルサレムは、天から下って地に来ます(黙示録 21:1-2参照)。その町の大きさはアメリカの半分を占めますが、私たちの思いではその町の栄光や終わりのない時の不思議を少しでも捕らえようとしたところで、不可能なことでしよう(黙示録 21:16参照)。私たちは永遠に、神が続べ治める、完全な社会で、イエス・キリストの栄光へと生き続けるのです!





## 第三十章

### 現代の靈的戦いについての迷信－前篇 (Modern Myths About Spiritual Warfare, Part 1)

靈的戦いという主題は、現代の教会では年々人気となってきています。残念ながら、そこで教えられていることの多くは、聖書に反しています。結果として、世界中の多くのミニストリーは、聖書では一度も指示されたことのない靈的戦いの様なものを教え、また実践しています。確かに聖書に基づいた靈的戦いというものがあり、それこそ、弟子をつくる指導者が実践し教えるべきものです。

この章と次の章では、サタンや靈的戦いにおける、最もよくある誤解について、いくつか触れていきたいと思えます。これは、私の著書、「サタンと靈的戦いについての現代神話」の凝縮版です。この本の全文は英語で私たちのホームページ ([www.shepherdserve.org](http://www.shepherdserve.org)) に載せてあります。

迷信その一「永遠の昔、神とサタンとの間に大激戦があった。今

日も未だに宇宙規模の奮闘が両者の間にある。」(Myth #1)

この迷信は、聖書の中で示され、最も確立している、神に関する基礎的真理に反しています。それは、神は力ある、全能なる方ということです。

イエスは、神にはどんなことでもできるとおっしゃいました(マタイ 19:26参照)。エレミヤは神に何一つできないことはないと認めました(エレミヤ 32:17参照)。どん

## 弟子をつくる指導者

な武器も勢力も神のご計画が成し遂げられることを阻止できません（第二歴代誌 20:6; ヨブ 41:10; 42:2参照）。エレミヤを通して神は、「だれかわたしのような者があろうか。…だれかわたしの前に立つことのできる…か」（エレミヤ 50:44）と尋ねています。答えは、誰も、サタンでさえもできません、ということです。

もし神が上記の聖書箇所で証言されている通り、本当に全能であるならば、神とサタンが戦っていた、もしくは今でも戦っている、と言うことは、神が全能ではないことを示唆していることとなります。もし神が戦いの一つでも負けたとしたら、ほんの少しでもサタンが勝利したのなら、もしくは、短時間でも神がサタンに対して奮闘しなくてはならなかったのなら、神はご自身について宣言している通り、全能である、ということではなくなってしまいます。

### サタンの力についてのキリストの解釈（Christ's Commentary on Satan's Power）

イエスは、サタンが天から落とされたことについて語りましたが、それは、サタンが私たちの全能の神に比べて、どの程度の力を持っているかについて、私たちが理解するのを助けてくれます。

さて、七十人が喜んで帰って来て、こう言った。「主よ。あなたの御名を使うと、悪霊どもでさえ、私たちに服従します。」 イエスは言われた。「わたしが見ていると、サタンが、いなずまのように天から落ちました（ルカ 10:17-18）。

全能の神が、サタンの天からの追放を宣言した時、サタンはそれを拒むことはできませんでした。イエスはいなずまのように、という比喻を用いて、サタンが落ちたその速度の速さを強調しました。サタンは、糖蜜のようにではなく、いなずまのように落ちました。サタンは天にいましたが、たった一秒で、あっという間にそこから消え去りました！

もし神がそれ程素早く、また容易にサタン自身を追放できるのなら、神から権限を与えられた使いたちも、素早く、また容易に悪霊を追放できても、全く驚くことはありません。キリストの最初の弟子たちの様に、今日多くのクリスチャンは悪霊の

## 現代の靈的戦いについての迷信－前篇

力に対して偉大な敬意を払っており、神の力が比べものにならない程もっと偉大であることをまだ理解していません。神は創造主であります、サタンは単に被造物です。サタンは神と対等ではありません。

### 一度も存在しなかった戦い (The War That Never Was)

私たちの中には、奇妙な様に聞こえる人たちもいるかもしれませんが、神とサタンの間には、今も、今までも、またこれからも戦いはない、ということを知っていません。実に、双方には異なる計画があり、反対の立場にある、とすることができます。しかし、お互いが反対の立場にあり、一方が他方よりも非常に強い時、その対立は、戦いとは見なされません。ミミズが象と戦うことはできますか。サタンという、ミミズのような存在が、それに比べて非常に力のあるお方と争うという、かすかな試みをしたのです。神の反対勢力は素早く対処され、サタンは天から追放され、「いなずまのように」落ちたのです。戦いは元々なく、ただ追放があっただけです。

神が全能であるならば、サタンには、神が御旨を遂行することをほんの少しでも妨げられる見込みは、これっぽちもありません。そして、もし神がサタンに何かすることを許可するならば、それは最終的に、神ご自身の御旨を達成する為だけです。この主題について聖書を更に調べていくと、この真理が大いに明快なものとなるでしょう。

興味深いことに、神が持つ、サタンに対する最高権威は、永遠の過去においてだけでなく、将来においても立証されることなのです。黙示録には、一人の御使いがサタンを縛り、千年間監禁した（黙示録 20:1-3参照）ことが書いてあります。最初にあったサタンの天からの追放と同様に、将来起こることは、神とサタンとの間の戦いであるとは見なされないでしょう。また、サタンには牢を打ち破って出て来る力もなく、ただ神の目的に合わせて解き放されるだけであることにも注目してください（黙示録 20:7-9参照）。

### 将来起こる「天の戦い」はどうか (What About the Future “War in Heaven”?)

神とサタンの間には、過去にも現在にも将来にも戦いがないことが本当ならば、

## 弟子をつくる指導者

なぜ黙示録には、将来起こる、サタンが関わる天の戦いについて書いてあるのでしょうか（黙示録 12:7-9参照）。それは良い質問で、すぐに答えられます。

この戦いは、ミカエルと彼の使いたち対サタンとその使いたちの戦いであることに注目してください。神ご自身はこの戦いに関わっているとは書かれていません。もし神が関わっていたのなら、その衝突は戦いとして描写するに及ばなかったでしょう。なぜなら、全能なる神は、これまでも証してきた様に、一瞬にしてどんな敵をも簡単につぶすことができたはずだからです。

ミカエルを含む御使いは、全能ではなく、従って、サタンとその使いたちとの衝突は、実際にある一定の期間あるので、戦いとして描写できます。そうであっても、ミカエルたちはサタンよりももっと力強い為、彼らはサタンとその軍勢に打ち勝つでしょう。

なぜ神はこの特定の戦いに個人的に関わりを持たずに、御使いたちに任せるのでしょうか。私にはわかりません。確かに、全知なる神は、御使いたちが戦いに勝つことをご存知で、従って、神は恐らく個人的に関わる必要はない、と考えたのかもしれない。

神はヨシュアの時代に、悪いカナン人を容易にまた素早く絶滅できたでしょうが、神はイスラエルの民にその任務を与えることを選びました。神が数秒で、いとも簡単にできてしまうことを、神は彼らに数カ月に渡って多大な労力を費やす様求めました。恐らくこちらの方が、イスラエルの民の信仰を要したので、神はより喜ばれたのでしょう。恐らくこれが、将来起こる天の戦いに、神が個人的に関わらない理由なのでしょう。聖書は、しかし、そのことについては記していません。

ミカエルと彼の使いたちと、サタンとその使いたちとの戦いが、いつか天であるということだけで、神が全能ではない、と私たちが考える理由は全くありません。それは、カナンにおけるイスラエルの戦いが、神は全能ではないと私たちに思わせている、ということではないのと同じことです。

**サタンは十字架の上でイエスに打ち負かされたのではなかったのか (Was Not Satan**

**Defeated by Jesus on the Cross?)**

最後に、神とサタンの戦いと呼ばれる、この最初の迷信に関して、良く使われる、イエスは十字架の上でサタンに勝利したという言い回しについて考えながら、結論付けたいと思います。

私たちが、イエスはサタンを打ち負かしたと言う時、私たちはまるでイエスとサタンとの間に戦いがあったかのように言っており、それは神が全能ではなく、サタンがまだ神の権威の下に完全に入っていないことを暗示しています。イエスをご自身の命をカルバリの丘で捧げた時、サタンに実際何が起きたのかについては、もっと聖書に基づいた説明の仕方があります。例えば聖書は、イエスの死を通して、「死の力を持つ者を滅ぼした」（ヘブル 2:14-15参照）とイエスは宣告した、と私たちに教えます。

どの程度、イエスはサタンを力のない状態にしたのでしょうか。当然ながら、サタンは現在、完全に力を失っている訳ではありません。そうでなければ、使徒ヨハネは「全世界は悪い者の支配下にある」（第一ヨハネ 5:19、一部強調）とは書かなかっただでしょう。ヘブル2章14から15節によると、サタンは「死の力」に関して、力のない状態にされました。どういう意味でしょうか。

聖書は三種類の死—*靈的な死*、*物理的な死*、そして*第二の死*について触れています。

これよりも前の章で、*第二の死*（もしくは*永遠の死*）について、黙示録二章二十二節、二十章六節と十四節、そして二十一章八節で触れられている様に、その時が来ると未信者は火の池に投げ込まれます。

*物理的な死*は人の体から靈が離れ、その機能が全て止まる時に起こります。

*靈的な死*は、聖靈によってまだ人の靈が生まれ変わっていない状態のことを指します。靈的に死んでいる人は、神からかけ離れた靈を持っており、その靈は罪深い性質を所有し、即ち、ある程度サタンとつながっています。エペソ二章一から三節には、靈的に死んでいる人の描写があります。

## 弟子をつくる指導者

あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。 私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。

パウロはエペソのクリスチャンに自分の罪過と罪の中に死んでいた者であったと書きました。明らかに、パウロは物理的な死について言っていませんでした。なぜなら、彼は物理的に生きている人たちに宛てて書いていたからです。従って、彼は霊的に言って、彼らは死んでいた、ということを書いていたに違いありません。

何が彼らを霊的に殺したのでしょうか。それは、彼らの「罪過と罪」でした。神は、アダムが神に背いた時に、彼は必ず死ぬ、と言ったことを思い出してください（創世記 2:17参照）。神は物理的な死について言っていたのではなく、霊的な死について言っていました。なぜなら、アダムはその禁じられた木の実を食べた日に、物理的には死にませんでした。むしろ、その日彼は霊的に死んだのであって、物理的には、何百年もの後の話でした。

パウロはエペソ人たちは、霊的に死んだ人として、「この世の流れに従って」（これは、他の誰もが行っていたことですが、）また「空中の権威を持つ支配者に従って」、自分の罪過と罪の中に歩んで（もしくはそれらを行って）いました。

誰が「空中の権威を持つ支配者」なのでしょう。それは、その暗やみをその中に住む他の悪霊と共に、最高司令官として支配する、サタンのことです。それらの悪霊については、エペソの後の章で、色々な階級毎に挙げられています（エペソ 6:12参照）。

パウロは、暗やみの君は「今も不従順の子らの中に働いている霊」であると言いました。「不従順の子ら」という表現は、彼らの罪深い性質を強調した、未信者とい

## 現代の靈的戦いについての迷信－前篇

う言葉の他の言い方に過ぎません。パウロは後に、「生まれながら御怒りを受けるべき子らでした」（エペソ 2:3、一部強調）と言いました。パウロはまた、サタンが彼らの中で働いている、とも付け加えました。

### 父としての悪霊 (The Deveil for a Dad)

まだ救われていない人たちは意識的か否かに関わらず、彼らはサタンに従っており、サタンの暗やみの王国の臣民なのです。彼らには、サタンの邪悪で、自己中心な性質があり、彼らの霊は靈的に死んだ状態にあります。サタンは実際、彼らの靈的な主であり父なのです。それ故、イエスはかつてまだ救われていなかった宗教指導者にこう言ったのです。「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです」（ヨハネ 8:44）。

これは、生まれ変わりの体験をまだしていない人が持つ、暗い姿です！そのような人は、靈的に死んだ人生を歩んでおり、サタンの性質に溢れ、その人が非常に恐れている物理的な死へと必然的に向かっています。その人が気づいていようと、いまいと、いつの日か、その人は火の池に投げ込まれ、最も最悪な死である、永遠の死を体験するのです。

靈的、物理的、また永遠の死は、全て罪深い人間に対する神の御怒りの現れであるということ、またサタンがその全てに加担しているということを、私たちが理解することは大変重要なことです。神はサタンに暗やみの王国と、「やみを愛する」（ヨハネ 3:19）人たちを皆、支配することを許可しました。実際には、神はサタンに、「わたしに服従しない者たちをおまえの權威によって捕えてもよい」と言いました。サタンは、人間が持つ神への反抗に対する神の御怒りを表す為の、従属的な道具となったのです。全ての人は罪を犯した為、皆サタンの權威のもとに入り、その霊はサタンの性質で溢れ、サタンの意思を遂行する為に捕えられているのです（第二テモテ 2:26参照）。

### 捕らわれの身である私たちの為の贖いの代価 (The Ransom for Our Captivity)

しかし私たちは、神は人類に憐みを持ってくださったことについて、神に感謝す

## 弟子をつくる指導者

ることができます。神の憐みの故に、誰もその惨めな状態にとどまっておく必要はないからです。イエスの身代わりの死は、神の義の要求を満たしたので、キリストを信じる者は誰でも、神の御怒りのもとにはもはやいない為に、霊的な死とサタンの捕らわれから逃れることができるのです。私たちが主イエスを信じる時、私たちの霊の内に聖霊が来られ、そこからサタンの性質を根絶し、私たちの霊を新生させ（ヨハネ 3:1-16参照）、私たちが神のご性質に与かる者とさせていただきます（第二ペテロ 1:4参照）。

元の質問に戻りましょう。ヘブル書の著者が、イエスのご自分の死により「死の力を持っていた者、即ち悪魔を無力に」した、と述べた時に、彼は、サタンが全ての救われていない人について握っている霊的な死の力が、「キリストの内に」ある全ての者たちの為に壊されたことを意味しました。私たちは、その罪の贖いとなってくださったキリストの故に、霊的に生かされる様になったのです。

さらに、私たちはもはや霊的な死とサタンの支配下にはいない為、*物理的な死*を恐れる必要もないのです。私たちが待っているものが、栄光に輝く永遠の相続であることを知っているからです。

最後に、イエスのゆえに、私たちは**第二の死**を被ること、即ち火の池に投げ込まれることから解放されました。

イエスは十字架の上で悪魔に打ち勝ったのでしょうか。いいえ、違います。なぜならイエスとサタンの間に戦いはなかったからです。イエスは、しかしながら、サタンが霊的な死を掌握する力に関して、サタンを無力なものへと変えました。実にサタンは、その霊的な死によって、罪の囚われ人である未信者たちを拘束しているのです。サタンは依然として、救われていない人々の上に霊的な死の力を保持しています。しかし、キリストにある者たちに関する限り、サタンは彼らにとって無力です。

### 権威の武装解除 (The Disarming of the Powers)

これはまた、コロサイ人への手紙二章十三から十五節にある、「すべての支配と権威の武装を解除」という言葉の意味を理解する助けともなります。



## 現代の靈的戦いについての迷信－前篇

あなたがたは罪によって…[靈的に]死んだ者であったのに、神は、そのようなあなたがたを、キリストとともに生かしてくださいました。それは、私たちのすべての罪を赦し、いろいろな定めのために私たちに不利な、いや、私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました。神は、キリストにおいて、すべての支配と権威の武装を解除してさらしものとし、彼らを捕虜として凱旋の行列に加えられました（一部強調）。

パウロはこの箇所、明白な比喩を用いました。最初の部分では、彼は私たちの罪を「債務証書」に例えています。私たちが支払うことができなかったものは、私たちの罪という債務を十字架に釘づけにしてくださったキリストによって、私たちの為に支払われたのです。

次の部分では、昔の王たちが打ち負かした敵の武装解除をして、凱旋の行列に加えて勝利した様に、キリストの死も、「支配と権威」に勝利した、つまり、反発している人間を支配し、彼らを捕虜とする低い階級の悪霊たちに勝利しました。

この箇所に基づいて、キリストはサタンを打ち負かしたということは言えなかったでしょうか。恐らく言えたでしょうが、条件付きです。私たちは、この聖書箇所、パウロが比喩的に書いていた、ということを知っているべきです。そして、聖書の解釈についての章で学んだ様に、全ての比喩には、類似点が相違点にかわるという瞬間があるのです。

コロサイ二章十三から十五節のパウロの比喩を解釈する際に、私たちは気を付けなければなりません。明らかに、私たちの全ての罪が書かれている「債務証書」が十字架に釘付けになっていた、ということは実際にはありませんでした。しかしながら、それはイエスが成し遂げたことを象徴しているのです。

同様に、まだ救われていない人間を支配する悪霊は、文字通り、剣や盾等の武装を解除され、さらしものとして、イエスによって凱旋の行列に加えられた訳ではあり

## 弟子をつくる指導者

ません。パウロが用いる言葉は、イエスが私たちの為成就してくださったことを象徴的に表しています。私たちは悪霊のとりこされていました。イエスは、それらの悪霊と、実際に戦った訳ではなく、また彼らもイエスと戦っている訳ではありません。神の義なる許可のもと、悪霊はその權威によって、私たちの人生の全てを制していたのです。悪霊の「兵器」は、いつもそうでしたが、キリストに向かってではなく、私たちに向かってありました。しかし、イエスはそれらを「武装解除」したのです。悪霊はもはや、私たちを捕虜としたままにはできないのです。

ですから、長い時代をかけた、イエスとサタンの悪霊の戦いがあったと考えるのはやめましょう。最後には、イエスは十字架の上で勝利を収めたのです。もし私たちがイエスは悪霊に打ち勝った、と言うのであれば、イエスが悪霊に打ち勝ったのは、ご自身の為ではなく、私たちの為であったことを、しっかりと理解しましょう。

私はかつて、まだ赤ん坊であった私の娘を怖がらせる子犬を裏庭から追い払いました。私はその子犬を打ち負かしたと言うかもしれませんが、ぜひ理解していただきたいことは、その犬は私にとっては何の恐れる対象ではなく、ただ私の娘にとってはそうでした。イエスとサタンにあっても同じことでした。イエスは私たちから犬を追い払いましたが、その犬がイエスを悩ませたことは全くありませんでした。

どの様にしてイエスはサタンという犬を追い払ったのでしょうか。イエスは、私たちの罪に対する処罰を受けてくださり、それによって、神の御前に明らかな私たちの罪から私たちを免除してくださり、従って私たちを神の御怒りから解放してくださり、ついには、反抗する人間たちを奴隷として良いと、神の正しい權威のもとで許可を与えられた悪霊たちが、もはや私たちに関しては、奴隷とする権利を持たないようにしてくださったことにより、それを行ったのです。それ故に神をほめたたえましょう！

このことは、次の迷信を正しく吟味する準備となります。

**迷信その二 「霊の領域では神の御使いたちとサタンの使いたちの間で、常に戦いがある。これらの戦いの結果は、私たちの霊的戦い**

によって決まる。」 (Myth #2)

私たちは、いつかミカエルと彼の御使いたち対サタンとその使いたちによる戦いが天であることについて、黙示録から既に学びました。それ以外に、もう一つだけ、御使いたちの間の戦いについて記述されているところが、ダニエル書第十章にあります<sup>85</sup> 85。

ダニエルは私たちに、ペルシヤの王、クロスの第三年に、ダニエルが三週間へりくだって祈っていたところ、一人の御使いがヒデケル川の側に現れたと記しました。その天使の訪れの目的は、イスラエルの将来について、それについては、私たちは既に前章で、携拳と後の日に関してダニエルが言われたことについて簡単に学びましたが、ダニエルにその理解を分与する為でした。その会話の中で、名のない御使いがダニエルにこう言いました。

彼は私に言った。「恐れるな。ダニエル。あなたが心を定めて悟ろうとし、あなたの神の前でへりくだろうと決めたその初めの日から、あなたのことばは聞かれているからだ。私が来たのは、あなたのことばのためだ。ペルシヤの国の君が二十一日間、私に向かって立っていたが、そこに、第一の君のひとり、ミカエルが私を助けに来てくれたので、私は彼をペルシヤの王たちのところに残しておき、  
(ダニエル 10:12-13、一部強調)。

ダニエルは、この御使いに出くわす三週間前に、自分の祈りが聞かれていること

---

<sup>85</sup> 85 考えられる二つの異論については、次の様に答える：(1) ユダは、ミカエルとサタンの間に、モーセのからだのことで口論があったと記したが、ここで実際の戦いについては一切触れられていない。事実、ユダは、ミカエルが「あえて相手をののしり、さばくようなことはせず、『主があなたを戒めてくださるように。』と言いました」(ユダ 1:9) と記している。(2) エリシャとその使いがシリヤ軍によってドタンという町で包囲された時、エリシャは自分の使いの目が開かれる様、神に祈った(第二列王記 6:15-17)。結果として、エリシャの使いは、「火の馬と戦車」を見たが、それは靈の領域で、御使いの軍勢が攻撃をしかけ、占領していったと思われる。しかし、これはこれらの御使いたちが、悪霊の使いたちと戦っていた、もしくはこれから戦おうとしていたことを絶対に示しているとは限らない。御使いは、邪悪な人間たちに神の御怒りを下す為に、神によって用いられることがよくある。第二列王記 19 章 35 節に記される、アッシリヤの陣営で十八万五千人が打ち殺されたことは、その一例である。

## 弟子をつくる指導者

を知っていました。しかし、その御使いがダニエルのもとへ来るまでに三週間かかりました。御使いの遅れの理由は、「ペルシヤの国の君」がその御使いに抵抗していたからでした。しかし、「第一の君のひとり」であるミカエルがその御使いを助けに来た時、御使いはそれを打ち破ることができました。

御使いがダニエルから離れようとする時、こういいました。

今は、ペルシヤの君と戦うために帰って行く。私が出かけると、見よ、ギリシヤの君がやって来る。しかし、真理の書に書かれていることを、あなたに知らせよう。あなたがたの君ミカエルのほかに、私とともに奮い立って、彼らに立ち向かう者はひとりもいない  
(ダニエル 10:20-21)。

いくつかの興味深い事実を、この聖書箇所から学ぶことができます。私たちは再びここで、神の御使いが全能ではないこと、また彼らは実際悪の使いたちとの戦いに関わる場合があることがわかります。

第二に、御使いの中には、(ダニエルと話した御使いの様な)他の御使いよりも力のある、(ミカエルの様な)御使いがいる、ということもわかります。

### 答えのない質問 (Questions for Which We Have No Answers)

私たちは、「なぜ神はこのメッセージと共にミカエルをダニエルのもとへ初めから遣わさなかったのか。そうすれば、三週間も遅れなくて済んだではないか。」と言うかもしれません。なぜ神は、この御使いでは、ミカエルの助けなしに「ペルシヤの君」を打ち破ることができないことを、疑いなく知っていたはずなのに、この御使いを送られたのかについて、聖書は何も言っていないということは事実です。実際、なぜ神が誰かにメッセージを届けるのにいずれかの御使いを使うのか、私たちにはわかりません！なぜ神ご自身が行ったり、ダニエルの耳に聞こえる様に話したり、もしくはダニエルを一時的に天国へ連れてきてそこで彼に話すことをしなかったのでしょうか。私たちにはわかりません。

しかし、この箇所は、霊の領域において、神の御使いとサタンの使いの間で絶え

## 現代の靈的戦いについての迷信－前篇

ず戦いがあることを証明していますか。いいえ、数千年前に、神の弱い方の天使の一人と「ペルシヤの君」という名のサタンの使いとの間で、三週間の争いがひとつあったことだけが証明されています。その争いは、神の強い意志によっては、起きてなかったかもしれません。これ以外で、御使いの戦いとして載っているものは、聖書全体を見ても、黙示録にある将来天で起こる戦いのみです。それだけです。御使いの戦いは他にも起きたのかもしれませんが、それは、私たちの側がそのように結論付ける為の憶測にすぎないでしょう。

### 迷信を基にした迷信 (A Myth Based Upon a Myth)

ダニエルとペルシヤの君のこの話は、私たちの靈的戦いは御使いの戦いの結果を左右するということが証明されていますか。繰り返しになりますが、この考えは、普通の御使いの戦いが(いくつかの聖句に基づいて)あることを推測しています。しかし、ここでは無謀なことをして、普通の御使いの戦いがある、としてみましよう。その場合、ダニエルについてのこの話は、私たちの靈的戦いが将来起こる御使いの戦いの結果を左右するということが保証されていますか。

この質問はよくこの特定の迷信を支持する人たちによって、この様に聞かれます。「もしダニエルが一日経って諦めてしまっていたらどうなっていたのだろう。」この質問に対する答えは、勿論、誰も実際は知りません。なぜなら、ダニエルは実際、無名の御使いが現れるまで、祈りの中で神を求めることを止めなかったのが事実だからです。しかし、この質問をすることで、ダニエルは、その継続的な靈的戦いを通して、無名の御使いが靈の領域で打ち破りをもたらすかぎであったことを、私たちに納得させます。もしダニエルが靈的戦いをするのを止めていたら、恐らく、御使いは決してペルシヤの君を超えることはなかったであろう、と考えられています。この人たちは、私たちも、ダニエルの様に靈的戦いを続けなければ、悪の使いが神の御使いの一人との戦いに勝利してしまうかもしれない、ということを私たちに理解して欲しかったのです。

まず第一に、ダニエルは「靈的戦いを行っている」訳ではなかったことを指摘さ

## 弟子をつくる指導者

せてください。ダニエルは神に祈っていました。ダニエルが何か悪霊の使いのことや、それらを縛ることや、それらと「戦うこと」について、一切触れていません。事実、ダニエルは、三週間経過して、無名の御使いが彼の前に現れるまで、絶えず行われている御使いの戦いについて、何も知識がありませんでした。ダニエルは断食して神を求めらることに三週間労しました。

ですから、ここでこの質問を、次の様に言い換えてみましょう。もしダニエルが一日、二日で神を祈り求めることを止めてしまっていたなら、その無名の御使いはダニエルに神のメッセージを運ぶことに失敗していたのでしょうか。それは私たちにはわかりません。しかし、無名の御使いはダニエルに、「あなたが祈り続けたのは良いことだ。さもなければ、私には決してできなかつたであろう。」とは決して言わなかつたことを指摘させてください。そうではなく、その御使いは打ち破つたことに対してミカエルに功績を与えました。明らかに、無名の御使いとミカエルを送つたのは神であり、神はダニエルの祈りへの答えとして、また、イスラエルの将来に何が起るかを理解する為、彼らを送りました。

ダニエルが断食をして神を祈り求めることを止めていたら、神は「あなた方、二人の御使いたちよ。ダニエルがちょうど断食と祈ることを止めたので、例え、あなた方の一人を、ダニエルが祈り始める初日にメッセージを届ける様、ダニエルのもとへ遣わしたとしても、ダニエルがそのメッセージを得ることは忘れてもよい。どうやら、ダニエル書には第十一章や十二章は無くなりそうだ。」と神が言っていたと考えることは、単に憶測のひとつに過ぎません。

ダニエルは明らかに、（「霊的戦い」ではなく）祈りの中で耐え、神は御使いを送ることでそれに応えました。私たちも神への祈りにあつて、忍耐深くなくてはなりません。そしてもし神の御旨ならば、私たちの答えは、御使いという仲介者によって来るでしょう。しかし、三週間よりももっと短い期間での祈りが誰からも施されていないところでも、御使いが聖書の登場人物たちに大切なメッセージを届けるという、

多くの例があることを決して忘れないでください。<sup>86</sup>私たちは極端になってはいけません。更に言うと、天からの道のりの途中で、悪の使いと戦わなければならなかったということについて全く触れられていない御使いたちを含めて、聖書の登場人物たちへメッセージを届けた御使いの例が多数聖書には載っています。それらの御使いは、メッセージを届ける為に、御悪の使いと戦わなくてはならなかったかもしれませんが、もしそうであったとしても、それについて聖書には書かれていないので、私たちにわかる術はありません。

では、三つ目の迷信を見ていきましょう。

### 迷信その三 「アダムの墮落の際、サタンはこの世を治める為にアダムに対する賃貸借契約を得た」 (Myth #3)

人間が墮落した際、サタンには一体何が起きたのでしょうか。ある人たちは、アダムの墮落の際、大きな昇格を得たと考えます。彼らは、アダムは元々、「この世の神」でしたが、アダムが墮落した際、サタンがその地位を得て、従ってサタンが地上で思い通りに何をやっても良いという権利が与えられた、と言います。そこからは、神でさえサタンを止める力は無くなった、と想定するに至ってしまいました。なぜなら、アダムは自分の地位をサタンに与える「法的権利」を有しており、神はアダムと神が結んだ契約を尊重しなければならず、その契約は、今はサタンが資格を有しているから、というのです。サタンは恐らく「アダムのリース権」を所有しており、神はその「アダムのリース権が失効する」までは、サタンを止めることはできません。

この理論は正しいのでしょうか。サタンは、人間が罪を犯した際、「アダムのリース権」を得たのでしょうか。

勿論そんなことはありません。サタンは、人間の墮落の際、神からののろいと、完全なる死という保証以外は何も得ませんでした。

事実としては、聖書は一度も、アダムは元々「この世の神」であるとは言っていない

---

<sup>86</sup> 86 例として、マタイ 1:20; 2:13-19; 4:11; ルカ 1:11-20, 26-38 参照。

## 弟子をつくる指導者

ません。第二に、アダムが、彼に与えられたこの世を支配する権威を誰か他の人へ与えるという法的権利を持っていた、とは聖書に決して記されていません。第三に、聖書は有効期限がいつか切れるリース権をアダムが持っているとは一言も言っていません。これら全ての考えは聖書に基づくものではありません。

アダムは元々どのような様な権威を所有していたのでしょうか。私たちは創世記を読むと、神がアダムとエバに「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ」（創世記 1:28、一部強調）と言ったことがわかります。

神はアダムが地上を治める「神」となるとは一言も言いませんでしたし、アダムが、天気や将来生まれて来る人々等全てを支配できるとも言いませんでした。神は単に、アダムとエバの両方に、最初の間として、魚、鳥、動物を支配し、地を満たし、地を従える様命じただけでした。

神が人への裁きを宣告した時、神はアダムが「この世の神」という、彼に与えられていると思われた地位を失うことは一切言いませんでした。更に、神はアダムもしくはエバが、最初の間として、魚、鳥、地をはう生き物を支配し、地を満たし、地を従える様命じる権限を喪失することについても一切言いませんでした。事実、人間はまだ魚や鳥と「地をはうすべての生き物」を支配していることは明白であると私は思います。人類はまだ、地を満たし、それを従えています。アダムはその最初に神から授かった権威を、墮落の際失ったということは一切ありませんでした。

### サタンは「この世の神」ではないのか (Isn't Satan "God of This World"?)

しかしサタンのことを、パウロは「この世の神」と、またイエスは「この世を支配する者」と、呼びませんでしたか。その通りです。しかし、このどちらも、アダムが以前の「この世の神」であるとか、アダムが墮落した際、サタンがアダムの肩書を獲得した、と暗示していた訳ではありません。

更に言えば、サタンの「この世の神」という肩書は、サタンは地上で何でもしたいようにできることや、神がそれを阻止できないことを保証する訳ではありません。



## 現代の靈的戦いについての迷信－前篇

イエスは、「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています」（マタイ 28:18、一部強調）と言いました。もしイエスがこの地上における全ての権威を持っているのなら、サタンは、神の許可を得てのみ活動できるのです。

誰がイエスに天と地において、一切の権威を与えたのでしょうか。それは父なる神に違いありません。御父はその権威をイエスに与える為に、ご自身で所有しておられたのです。それ故、イエスは御父を「天地の主」（マタイ 11:25; ルカ10:21、一部強調）と呼びました。

神は、地を創造して以来、一切の権威をお持ちです。神は少しの権威を最初の頃、人間にお与えになり、人間は神が元々お与えになったものを一度も失ったことはありません。

聖書がサタンをこの世の神または支配者と呼ぶのは、それは単にこの世の（まだ生まれ変わりの体験をしていない）人々がサタンに従っている理由からです。サタンは、そのような人々が意識していようと、していまいと、彼らの仕える対象なのです。サタンは彼らの神なのです。

### サタンの不動産提供？（Satan's Real-Estate Offer?）

このサタンが権威を得たという理論の多くは、マタイやルカによる福音書に記録されている、荒野でサタンがイエスを試した話に基づいています。ルカによる福音書から、何が学べるか見ていきましょう。

また、悪魔はイエスを連れて行き、またたくまに世界の国々を全部見せて、こう言った。「この、国々のいっさいの権力と栄光とをあなたに差し上げましょう。それは私に任されているので、私がこれと思う人に差し上げるのです。ですから、もしあなたが私を拝むなら、すべてをあなたのものとしましょう。」 イエスは答えて言われた。「『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えなさい。』と書いてある」（ルカ 4:5-8）。

この事柄はサタンがこの世の全てを支配していること、もしくはアダムがそれを

## 弟子をつくる指導者

サタンに手渡したこと、または神が悪霊を治める力がないことを証明するものでしょうか。そうではありませんし、その良い理由は数多くあります。

まず第一に、私たちはイエスが「偽りの父」（ヨハネ 8:44）と呼ぶ者の発言に私たちの理論が基づいていないか、注意すべきです。サタンは時に真理を語りますが、この場合は、サタンが言ったことは、神が既に言われたことに明確に反することであった為に、警告の旗を激しく振りかざすべきです。

ダニエル書の第四章で、ネブカデネザル王のへりくだりの話が書いてあります。ネブカデネザルは、自分の地位や業績を非常に誇らしく思っていました。預言者ダニエルによって、「いと高き方が人間の国を支配し、その国をみこころにかなう者にお与えになること」（ダニエル 4:25、一部強調）を知るようになるまで、獣の心が与えられるであろう、と告げられました。この話の中で同様のことが四度告げられ、その重要性を示唆しています（ダニエル 4:17、25、32; 5:21参照）。

ダニエルが、「いと高き方が人間の国を支配し」と言ったことに注目してください。それは、神が地上を支配していることを表していると思いませんか。

また、ダニエルの宣言は、サタンがイエスに言ったことと正反対であるように見えることにも注目してください。神は、「みこころにかなう者にお与えになる」とダニエルが言ったのに対し、サタンは、「私がこれと思う人に差し上げる」（ルカ 4:6）と言いました。

あなたは誰を信じますか。個人的には、私はダニエルを信じるつもりです。

しかし、サタンが真理を語っているという可能性も、もし私たちが違った角度からその発言について見る場合には、あることも確かです。

サタンは、「この世の神」であり、これまでに記した通り、それは暗やみの王国を、また神に反発するすべての国民も含めて、サタンが支配していることを意味します。聖書には、「全世界は悪い者の支配下にある」（第一ヨハネ 5:19）と記されています。サタンが、その思いのままに地上の王国に対する権威を与えることができると主張する時、サタンは彼自身の領域、つまり暗やみの王国についてだけを話してい

## 現代の靈的戦いについての迷信－前篇

る可能性は十分あり、その王国とは、大体地政学的な王国に相当する、従属王国から成っています。私たちは聖書から、サタンの王国では、サタンが悪霊にいくつかの階級を設けていることを知らされています（エペソ 6:12参照）。また私たちは、サタンがその長として、それらの悪霊にその階級に応じて、昇格または降格させていることも推測できます。そうであるならば、イエスに、サタンの暗やみの王国の支配を手伝う、サタンに次ぐ第二の悪霊という地位を、サタンは合法的に提供していたこととなります。イエスがしなくてはならなかったことは、サタンの前にひれ伏して彼を拝むだけでした。感謝なことに、イエスはその「出世」の機会を見送りました。

### 誰がサタンに権威を与えたのか（Who Gave Satan His Authority?）

では、サタンの主張である、これらの王国の権威は彼に「手渡された」ものであることについてはどうでしょうか。

再び、ここでもサタンが嘘をついているという可能性が非常に強くあります。しかし、ここでは大目に見て、サタンが真実を言っていることとして考えてみましょう。

サタンは、アダムが彼に手渡したとは言わなかったことに注目してください。私たちが既に見てきた通り、アダムはその権威を他に与える為に得たものではない為、それをサタンに手渡すことなどできませんでした。アダムは魚、鳥、畜牛を支配するのであって、王国を支配するものではありません。（実際のところ、アダムが墮落した時には、支配する為の人々の王国はありませんでした。）更に、もしサタンがイエスに、全ての悪霊と救われていない人々から成る暗やみの王国を支配する様言っていたのなら、アダムが自分の管轄をサタンに引き渡すことは決してできる訳はありません。サタンはアダムが創造される前から、墮落した天使を支配していたのです。

この世の全ての人々は、神に服従していなかった、従って意識的にあるいは無意識にサタンに服従していたので、彼らは自分たちを支配する権威をサタンに渡していた、ということ、サタンは意味していたのかもしれませんが。

更にもっと可能性が高いのは、神がその権威をサタンに渡したということです。聖書を見ると、神はサタンに、「おまえとおまえの悪霊は、私の許可のもと、私に服

## 弟子をつくる指導者

従っていない者たちを全て治めてもよい」と言った可能性は十分あります。これはあなたにとって理解するのが今は難しいかもしれませんが、後になると、これが恐らくサタンの宣言についてが一番良い説明であることに気づくでしょう。もし神が本当に、「人間の国を支配し」（ダニエル 4:25）ているならば、サタンが人間に対して持っている権威は、神から獲得したものであったに違ひありません。

サタンは、暗やみの王国を支配しており、それは「反発の王国」とも呼ぶことができます。サタンはその王国を、彼が天から追放されて以来支配しており、それはアダムの墮落より前に起きたことでした。アダムの墮落までの時は、その暗やみの王国は、天使の反逆者たちから成っていました。しかしアダムが罪を犯した時、彼はその反発の王国に入り、それ以降、サタンの王国は天使だけでなく人間の反逆者たちが含まれるようになりました。

サタンは、アダムが創造される前ですら、暗やみの領域を支配してきました。ですから、アダムの墮落によって、アダムが以前所有していたものをサタンが得たと考えるのは止めましょう。アダムが罪を犯した時、彼は、既に存在しており、サタンが統治していた反発の王国に自ら入ったのです。

### 墮落は神を驚かせたのか (Was God Surprised by the Fall?)

この「サタンが権威を得たという理論」の他の点での欠陥は、それがまるで神が墮落という出来事で不意を突かれた様に見せ、神をむしろ愚かに見せ、結果として、神はご自身を悲しい苦境の中に見るということです。神はサタンがアダムとエバを誘惑し、結果として人の墮落をもたらすことを知らなかったのでしょうか。神が全知であるならば、そして実際そうですが、神は何が起ころうとしているか知っていたはずです。それ故、神が人類を造る前から、人類を救う計画を神が作っていたことを、聖書は私たちに教えています（マタイ 25:34; 使徒の働き 2:2-23; 4:27-28; 第一コリント 2:7-8; エペソ 3:8-11; 第二テモテ 1:8-10; 黙示録 13:8参照）。

神は悪魔が墮落することをご存知の上で、彼を造り、またアダムとエバが墮落することをご存知の上で、彼らを造りました。神がサタンにはあえて持たせないような

## 現代の靈的戦いについての迷信—前篇

ものを、サタンが神をだまして、獲得するということは絶対にあり得ません。

私は、神がサタンに「この世の神」であって欲しいと願っている、と言っているのでしょうか。それが、神の目的に合う限り、その通りです。もし神がサタンの活動を望んでいなかったのなら、黙示録の二十章一から二節に神がいつか行くと、書いてある通り、神は単純にサタンを止めるでしょう。

しかし、誰であろうとサタンの統治のもとに残ることを神が望んでいるとは、私は言っていません。神は全ての人が救われること、またサタンの領域から逃れることを望んでおられます（使徒の働き 26:18; コロサイ 1:13; 第一テモテ 2:3-4; 第二ペテロ 3:9）。しかし、神はサタンに、暗やみを愛する者、つまり神に反発し続ける者たち全てを支配する許可を与えています（ヨハネ 3:19参照）。

しかし、私たちが、人々をサタンの暗やみの王国から逃れる様何か手伝えることはないのでしょうか。あります。私たちはその様な人たちの為に祈り、（イエスが私たちに命じた通り）彼らが悔い改め、福音を信じる様に呼び掛けることができます。それをするなら、彼らはサタンの支配から解放されます。しかし、人々を捕えた邪悪な靈を私たちが「引き降ろす」ことができると考えることは誤りです。もし人々が暗やみに留まりたいのなら、神の御旨は彼らをそのままにすることでしょう。イエスは弟子たちに、もしある町々の人々が彼らのメッセージを受け入れなかったのなら、足のちりをはらって、他の町へ行くべきであることを伝えました（マタイ 10:14）。イエスは、人々がもっと福音を受け入れやすくなる様に、彼らにそこに留まって、町にある要塞を引き降ろす様には言いませんでした。神は、悔い改めと神の元へ戻ることを拒む人たちを、悪い靈に支配させることを許します。

### サタンを上回る神の最高權威を示す更なる証拠 (Further Proof of God's Supreme Authority Over Satan)

人の墮落の際、神はサタンを支配する力を失わなかったことを豊かに証明する、他にも多くの聖書箇所があります。聖書は繰り返し、神はこれまでもずっと、またこれからも、サタンを完全に支配しておられることを保証します。悪魔は神が許可する

## 弟子をつくる指導者

ことだけをできます。この事実の描写について、まずは旧約聖書から見ていきましょう。

ヨナ書の最初の二章は、神の権威がサタンにも及んでいたことを示す、典型的な事例です。そこで私たちは、サタンが神の御座の前に来て、ヨブを非難している様子について読みます。ヨブは、当時いた地上の誰よりも神に従っていたので、自然と、サタンは彼を狙いました。神は、サタンがヨブに「心を留めた」こと（ヨブ 1:8、NASBの注釈を参照）をご存知で、ヨブが神だけに仕える理由は、彼が楽しんでいる全ての祝福にあると、ヨブを非難するサタンを神は聞きました（ヨブ 1:9-12参照）。

サタンは、神がヨブの回りに垣を巡らせた、と言って、神がヨブの祝福を取り去る様に要請しました。結果として、神はサタンを聞き入れ、ある程度限られた範囲で、ヨブを苦しめることを許可しました。最初は、サタンはヨブの体には触れることができませんでしたが、後になると、神はサタンに、ヨブを殺してはなりません、ヨブの体を打つことも許可しました（ヨブ 2:5-6）。

この聖書の箇所は、明白にサタンがしたい様にはできないことを証明しています。サタンはヨブの所有物に触れることは、神から許可を得るまではできませんでした。そして、神は許可を与えなかったため、サタンはヨブを殺すことをできませんでした。<sup>87</sup>87 アダム の 墮落 以来、ずっと神はサタンを支配しています。

### サウロの「神から来た」悪い霊（Saul's Evil Spirit "From God"）

旧約において、神の御怒りの仲介者として、神がサタンの悪霊を用いた事例がいくつもあります。第一サムエル十六章十四節には、「主の霊はサウルを離れ、主からの悪い霊が彼をおびえさせた」と書いてあります。この状況は明らかに、不従順なサウル王に対する神の訓練の為に起きました。

---

<sup>87</sup> 87 この文章全体をとおして、ヨブの場合、ある人たちが信じている迷信である、「彼の恐れがサタンの扉を開けた」訳ではないことも証明されている。神ご自身がサタンに向かって、ヨブについてヨブ記 2 章 3 節でこの様に言った：「彼[ヨブ]はなお、自分の誠実を堅く保っている。おまえは、わたしをそそのかして、何の理由もないのに彼を滅ぼそうとしたが」（一部強調）。これについては、私の著書「神の試し」（pp. 175-181）の中で議論されている。英語版は、私たちのホームページ（[www.shepherdserve.org](http://www.shepherdserve.org)）からも入手が可能である。

## 現代の靈的戦いについての迷信－前篇

ここで問題となるのは、「主からの悪い霊」という表現が何を意味するかということ。これは、神が天に神と共に住んでいた悪い霊を送ったという意味なのでしょう。それとも、神は最高権力者としてサタンの悪い霊の一つにサウルを悩ます様許可したという意味なのでしょう。殆どのクリスチャンは、聖書の他の箇所では教えていることと照らし合わせて、後者の可能性を受け入れる傾向にあると、私は思います。聖書が、悪い霊が「主から」と表現した理由は、悪い霊からの嫌がらせは、サウルに対する神の訓練による直接の結果であったからです。このように、悪い霊は神の絶対的な支配下にあることを、私たちは見ることができます。

神の裁きが人々の邪悪な行いに対して下る為に、士師記九章二十三節には、「神は、アビメレクとシェケムの者たちの間に悪霊を送った」と書いてあります。ここでも、この悪霊とは神のおられる天からのものではなく、サタンの領域からのものであり、ある処罰に値する人々に対して悪い計画が遂行される様、神によって許可された、ということです。悪霊は、神の許可なくして、誰に対しても悪い計画を上手に遂行させることはできません。もしそうでないのなら、神は全能ではない、ということになってしまいます。従って、私たちはもう一度、アダムの墮落の際、サタンは神の支配から外れた権威を獲得した訳ではない、ということの問題なく結論付けることができます。

### サタンに対する神の力に関する新約からの事例 (New Testament Examples of God's Power Over Satan)

新約聖書には、サタンが権威を得たという理論に反論する、更なる証拠があります。

例えば、イエスは十二弟子に「すべての悪霊を追い出す権威」を与えた、とルカによる福音書9章1節に記されています。更に、同書十章十九節でイエスは弟子たちに、「確かに、わたしは、あなたがたに、蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けたのです。だから、あなたがたに害を加えるものは何一つありません」(一部強調) と言いました。

## 弟子をつくる指導者

もしイエスが弟子たちにサタンの全ての力を上回る権威を与えたのなら、まずイエスご自身がその権威を持っていた、ということになります。つまり、サタンは神の権威の下にある、ということです。

ルカによる福音書の終わりの方の章では、イエスはペテロに、「シモン、シモン。見なさい。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました」（ルカ 22:31）と言っているのが記録されています。この言葉は、サタンは、神からの許可なくしては、ペテロをふるいにかけることはできなかった、ということを示唆しています。繰り返しになりますが、サタンは神の支配下にあるのです。<sup>88</sup>

### サタンの千年間という投獄期間 (Satan's Thousand-Year Prison Team)

黙示録第二十章には、一人の御使いがサタンを縛る、という描写がありますが、そこには、アダムのリースの期限が切れることについては、一切触れられていません。サタンの監禁の理由は、単に「それが諸国の民を惑わすことのないようにした」（黙示録 20:3）からです。

興味深いことに、サタンが千年間監禁された後、彼は解き放され、「地の四方にある諸国の民、すなわち、ゴグとマゴグを惑わすために出て行き」（黙示録 20:8）ます。そしてだまされた国民は、イエスがいずれ統治するであろうエルサレムを攻撃する為に彼らの軍隊を召集します。彼らが都を包囲すると、天から火が降って来て、彼らを焼き尽くし」ます（黙示録 20:9）。

アダムのリースは、その千年間の後の最後の短期間も含まれていて、神はその為にサタンを解き放す義務があるなどと、誰がそんな愚かなことを言うのでしょうか。その様な考えは実に馬鹿げています。

この聖書の箇所から学べるもう一つのこと、神は悪魔を完全に支配しており、

---

<sup>88</sup> 88 第一コリント 10 章 13 節も参照のこと。ここでは、神が私たちの試練を制限しておられることが示唆されており、従って、神が試練や誘惑を与える者をも制限しておられる、ということになる。



## 現代の靈的戦いについての迷信—前篇

神ご自身のご計画を成就する為にだけ、神は悪魔のだますはたらきを許されている、ということです。

イエスが千年王国を統治している間、サタンは人をだます活動はできません。しかし、見せかけだけキリストの統治に従順ですが、心の中では実はイエスとその統治の座から降ろされることを望んでいる人たちが地上にはいるでしょう。しかし、彼らは「鉄の杖をもって彼らを牧される」（黙示録 19:15）お方を打倒できる可能性は全くないことを知っている為に、クーデターを起こそうとはしないでしょ。

しかしサタンが解き放される時、彼は心の中でキリストを憎む者たちをだますことが可能となり、彼らは愚かにも不可能なことを試みます。サタンが反逆者となりそのような人々をだますことが許されるので、人々の心の状態は明らかとなり、それにより、神はその御国に住むのにふさわしくない者たちを正しく裁くこととなります。

勿論、それは神がサタンに今日人々をだます許可を与えている理由の一つです。私たちは後程、神がサタンに対して持つ、より完全な目的について見ていきますが、今の所、神は誰にもだまされたままでいて欲しいとは思っていない、と言うことで十分です。しかし神は、固い心の故に、真理を拒む人々を、悪魔がだますことを許可しています。

反キリストの時代について、パウロはこう書きました。

その時になると、不法の人が現われますが、主は御口の息をもって彼を殺し、来臨の輝きをもって滅ぼしてしまわれます。不法の人の到来は、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行なわれます。なぜなら、彼らは救われるために真理への愛を受け入れなかったからです。それゆえ神は、彼らが偽りを信じるように、惑わす力を送り込まれます。それは、真理を信じないで、悪を喜んでいたすべての者が、さばかれるためです（第二テサロニケ 2:8-12、一部強調）。

## 弟子をつくる指導者

「真理を信じないで、悪を喜んでいたすべての者が、さばかれるため」に「惑わす力」を送っているのは神であることに注目してください。しかしまた、惑わされるのは、「真理を信じない」人たちであって、彼らは機会はありましたが、それでも福音を拒んだのでした。神は、キリストを拒む者たちがだまされる為に、サタンに偽りのしるしや不思議を伴わせ、反キリストを強めることを許します。神の最終的な目的は、彼らが「さばかれるため」なのです。同じ理由で、神はサタンに今日人々をだますことを許しています。

もし神が地上でサタンが活動することに理由を持たないのであれば、神はサタンが墮落した時、宇宙のどこか別の場所に彼を消すことは簡単にできたに違いありません。第二ペテロ二章四節には、罪を犯したある御使いたちがいて、神は彼らを既に、地獄に引き渡し、「さばきの時まで暗やみの穴の中に閉じ込めて」しまわれたことが、書かれています。私たちの全能の神は、サタンにも、また他のどの御使いに対しても、もしそのことが神の目的に見合うのであれば、同じことをすることができたはずですが、しかし、まだ暫くの間、サタンとその使いがこの地上で働くことが許されている良い理由を、神はお持ちなのです。

### 苦しみに対する悪霊の恐れ (The Demons' Fear of Torment)

この迷信についての学びを閉じるにあたって、考慮すべき最後の参照聖句は、ガダラ人の地にいた悪霊につかれた人たちの話です。

それから、向こう岸のガダラ人の地にお着きになると、悪霊につかれた人がふたり墓から出て来て、イエスに出会った。彼らはひどく狂暴で、だれもその道を通れないほどであった。すると、見よ、彼らはわめいて言った。「神の子よ。いったい私たちに何をしようというのです。まだその時ではないのに、もう私たちを苦しめに来られたのですか。」 (マタイ 8:28-29、一部強調)。

この話はよく、サタンが権威を得たという理論の擁護者によって、彼らの考えを支持する為に用いられます。彼らは、「それらの悪霊たちは、イエスの公正に訴えた。

## 現代の靈的戦いについての迷信—前篇

アダムのリースの期限が切れる時、つまり、彼らとサタンが昼も夜も永遠に苦しめられる為に火の池に放り込まれる時の前では、イエスは彼らを苦しめることができない、ということを知っていた。」と言うのです。

しかし、実際はその反対が真実です。彼らは、イエスにはいつでも心のままに、彼らを苦しめる力も全ての権利をも持っておられることを知っており、それが故に、彼らはイエスに憐みを求めたのです。神の御子が、彼らを苦しめられるところへもっと早く送るかもしれないことを、彼らは明らかにとても恐れていました。ルカは、悪霊たちが「底知れぬ所に行け、とはお命じになりませんように」（ルカ 8:31）とイエスに願った、と書きました。もしイエスが、悪霊が持つと想定される法的権利の為に、上記のような権利がなかったとしたら、彼らは全く心配してはいなかったでしょう。

それらの悪霊たちは、この地方から追放しないようにと頼んだり（マルコ 5:10）、近くにいた豚の中に送り、乗り移らせてもらう様懇願したり（マルコ 5:12）、「底知れぬ所」に投げ込まない様頼んだり（ルカ 8:31）、キリストに「その時」が来る前に苦しめない様懇願したりしていることからわかる様に、彼らは完全にイエスのなすがままであることを理解していました。

### 迷信その四 「『この世の神』としてのサタンは、人間の政治、災害、天気を含む地上の全てを支配している」（Myth #4）

サタンは、使徒パウロによると、「この世の神」（第二コリント 4:4）、またイエスによると、「この世を支配する者」（ヨハネ 12:31; 14:30; 16:11）であると言われています。サタンのこれらの肩書に基づいて、サタンがこの地上において完全なる支配権を持っていると、多くの人が思います。その迷信の誤りを顕著に示す聖書箇所を、既に十分見てきましたが、私たちはサタンの力がいかに実に限られたものであるかを、完全に理解することができる為に、更なる学びをすることは私たちにとって良いことです。サタンをこの世の神または支配者と呼んでいる聖書箇所は、たった四カ所しかないにもかかわらず、それらが私たちのサタンに対する考えの全てとならない

## 弟子をつくる指導者

様に、私たちは注意しなくてはなりません。

私たちが聖書を詳しく学んでいくと、イエスがサタンを「この世の支配者」と呼んだだけでなく、天の御父をも「天地の主」（マタイ 11:25; ルカ 10:21、一部強調）と呼びました。更に、使徒パウロはサタンを「この世の神」と呼んだだけでなく、パウロは、イエスと同様、神をも「天地の主」（使徒の働き 17:24、一部強調）と呼びました。これは、イエスもパウロも、サタンがこの地上の全てを支配していると、私たちに考えて欲しくない証拠です。サタンの権威は限られたものでなくてはなりません。

これらの対照的な聖句の非常に重要な違いは、「世」と「地」という言葉にあります。「地」と訳されているギリシャ語は *ge* です。それは、私たちが住む物理的な惑星を表し、そこから英語の *geography*（地理）という言葉が派生しました。

それに対して、イエスはサタンがこの世の支配者であると言いました。世というギリシャ語は *kosmos* で、それは主に、秩序や配列を意味します。それは、物理的な惑星自体を表すよりはむしろ、人々を意味します。それ故、クリスチャンはよくサタンのことを、「この世の秩序の神」と言い表します。

現時点では、神はこの世の人々を完全に支配してはいない為、神はこの世を完全に支配している訳ではありません。この理由は、誰が彼らの主人となるのか、神は人々にその選択肢を与えており、多くはサタンに忠誠を尽くすことを選んでしまっています。人間の自由意思は、もちろん、神のご計画の一部です。

パウロは、この世の神と書いた時、世という言葉ではない、ギリシャ語の *aion* という言葉を用いました。*Aion* は *age*（時代）と訳されることができ、よくそうされますが、それは、特化した期間という意味です。サタンは、この現代という時の神なのです。

以上のことは、一体何を意味するのでしょうか。地が、私たちの住む物理的な惑星を意味します。世は地上に現在住む人々について、更に詳しく言うと、イエスに現在仕えていない人々について語っています。彼らはサタンに仕えており、その歪めら

## 現代の靈的戦いについての迷信—前篇

れた、罪で溢れる秩序に捕らわれているのです。私たち、クリスチャンは、「この世の中に」いても、「この世のもの」ではありません（ヨハネ 17:11, 14）。私たちは暗やみの王国の市民の中に住んでおりますが、私たちは実際は光の王国、神の王国の者なのです。

ですから、私たちには答えがあります。簡単に言うと、神はその最高権力の下、全地上を治めています。サタンは、神の許可の下、「この世の秩序」、つまりその暗やみの王国の市民たちを支配する制度のみを支配しています。これ故、使徒ヨハネは「私たちは神からの者であり、全世界（全地ではない）は悪い者の支配下にある」（第一ヨハネ 5:19）と書きました。

これは、神にこの世、もしくはこの世の秩序、もしくはこの世の人々に対する権威がない、と言っている訳ではありません。神は、ダニエルが言った通り、「いと高き方が人間の国を支配し、その国をみこころにかなう者にお与えになる」（ダニエル 4:25）お方なのです。神は尚も、その御心のままに、誰をも高め、また低めることができになります。しかし、「人間の領域を支配する」最高位の「司令官」として、神はその最高権威の下、サタンに、神に反発している一部の人間を支配する許可を与えているのです。

### サタンが考慮した提案（Satan's Offer Considered）

この地と世の区別はまた、イエスが荒野で受けた誘惑について理解する助けにもなります。サタンはイエスに、「世界の国々」をそこで見せました。サタンは、イエスに地上の行政における政治的主導権、所謂、大統領や首相と呼ばれるものを与えることはできませんでした。サタンは、地上の人間の支配者を高めたり、低めたりする者ではありません。神がするのです。

むしろ、サタンはイエスに世界中に広がる暗やみの王国に属する全ての国々を見せたに違いありません。サタンは、悪霊の階級と、悪霊たちがそれぞれの領土で、暗やみの王国と、その臣民である反発する人間を統治している様子を見せていました。サタンは、もしイエスが、サタンの神に対する反逆に加担するならば、という条件で、

## 弟子をつくる指導者

その領域の統治権をイエスに提案しました。そして、イエスは暗やみの王国の副司官となるのでした。

### 地上の行政に対する神の支配 (God's Control Over Earthly, Human Governments)

ここで、神が地上の行政を支配しておられることを保証する聖書箇所をまず見て行きながら、更に具体的に、サタンの権力に制限を設けていきましょう。サタンは、地上の行政に対して、ある程度の権威を持っていますが、それは単に、サタンがまだ救われていない者たちに対して、ある程度の権威を持っており、行政は大抵、未信者によって牛耳られているからです。しかし、最終的には、神が人間の行政においても最高権威によって治めているので、サタンは神が許す範囲に限りにおいて、人間を操作できます。

私たちは既に、ネブカデネザル王についてダニエルが記したものを考察しましたが、それは私たちの理解を非常に容易にさせるので、もう一度簡単に見てみましょう。ネブカデネザル大王は、その権力と偉業によって、非常に高慢になっていました。そこで神は、ネブカデネザルが「いと高き方が人間の国を支配し、これをみこころにかなう者に与え、また人間の中の最もへりくだった者をその上に立てる」(ダニエル 4:17) ことを学べる様に、彼が低い地位へ落とされることを命じました。明らかに、ネブカデネザルの政治的な繁栄は神のお陰であり、神こそ名声に価するのです。このことは、全ての地上の指導者について、当てはまります。使徒パウロは、地上の指導者について、「神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられた」(ローマ 13:1) と宣言しました。

神こそ、最初で、最高の権威を全宇宙に対して持つお方です。誰でも、権威を持っているのならば、それは単に神がその権威の一部を委任したか、もしくは、誰かに一部持たせる様許可したからです。

しかし、悪の支配者についてはどうでしょうか。パウロは、その様な者たちも神によって立てられたということの意味したのでしょうか。その通りです。同じ手紙の最初の方で、パウロは、「聖書はパロに、『わたしがあなたを立てたのは、あなたに

## 現代の靈的戦いについての迷信－前篇

おいてわたしの力を示し、わたしの名を全世界に告げ知らせるためである。』と  
ています」(ローマ 9:17)。神は、心の固いパロを、神ご自身を栄光とする為に、  
立てたのです。神は、その偉大な力を、神が立てた頑な人によって与えられた機会  
である、イスラエル人の奴隷解放という奇跡を通して表したのでした。

この事実は、イエスがピラトと持った会話の中でも明らかではありませんでした  
か。イエスは彼の質問に答えないことに驚き、ピラトはイエスに、「あなたは私に話  
さないのですか。私にはあなたを釈放する権威があり、また十字架につける権威があ  
ることを、知らないのですか」(ヨハネ 19:10)と言いました。

イエスは、「もしそれが上から与えられているのでなかったら、あなたにはわた  
しに対して何の権威もありません」(ヨハネ 19:11、一部強調)と答えられました。  
神はピラトの臆病な性格をご存知であったので、イエスが十字架の上で死を遂げると  
いう予め定められていた神のご計画が成就される為に、神はピラトを立てたのでした。

旧約聖書の中の歴史書を大雑把に読むだけでも、神は時として、その御怒りを受  
けるにふさわしい人々を邪悪な人間に支配させ、その仲介者として用いることがある  
ことがわかります。ネブカデネザルは、神の裁きを、旧約時代の多くの国々に下す為  
に、神によって用いられたのです。

聖書には、神が引き上げたり、また引き降ろしたりした支配者たちについての数  
多くの例が載っています。例えば、新約聖書では、ヘロデについて書いてありますが、  
彼は、民衆がヘロデに向かって、「神の声だ。人間の声ではない。」(使徒の働き 12:22)  
と叫び続けた時、神に栄光を帰しませんでした。

結果はどうであったのでしょうか。「するとたちまち、主の使いがヘロデを打った  
…彼は虫にかまれて息が絶えた」(使徒の働き 12:23)とある通りです。

ヘロデは完全にサタンの王国の市民でしたが、神の管轄外ではなかったことを覚  
えていてください。神は御旨であれば、いつでも現在の地上の支配者の誰でも引き下

げることができることは明らかです。<sup>89</sup>

### 神の個人的な証 (God's Personal Testimony)

最後に、神ご自身がかつて言われた、神が地上の人間の王国に対して持つ主権について、預言者エレミヤを通して語られた言葉を読みましょう。

イスラエルの家よ。この陶器師のように、わたしがあなたがたにすることができないだろうか。・・主の御告げ。・・見よ。粘土が陶器師の手の中にあるように、イスラエルの家よ、あなたがたも、わたしの手の中にある。わたしが、一つの国、一つの王国について、引き抜き、引き倒し、滅ぼすと語ったその時、もし、わたしがわざわざを予告したその民が、悔い改めるなら、わたしは、下そうと思っていたわざわざを思い直す。わたしが、一つの国、一つの王国について、建て直し、植えると語ったその時、もし、それがわたしの声に聞き従わず、わたしの目の前に悪を行なうなら、わたしは、それに与えると言ったしあわせを思い直す(エレミヤ 18:6-10)。

サタンがイエスを荒野で誘惑した時、サタンは合法的にはイエスに地上の人間の行政の王国を支配する権利を提供することなど、全くできなかったということはわかりますか。もしサタンが(時にする様に)真実を言っているのなら、サタンがイエスに提供することができた唯一のことは、サタンの暗やみの王国を支配する、ということだけだったでしょう。

---

<sup>89</sup> 89 このことは、私たちは政治的指導者たちのために祈るべきではないこと、もしくは、神が私たちが支配する者を誰でも建て上げることができることを知って、選挙で投票しない、ということ、果たして意味しているのだろうか。それは違う。民主主義では、神の御怒りはもう既に部分的に組み込まれている、と言える。私たちは、私たちが投票する者を指導者として得る。邪悪な民は、たいてい他の邪悪な人々を撰ぶ。それが故に、義人はその一票を投じるべきである。更に、旧約でも新約でも、私たちは自分たちの政治的指導者の為に祈る様導かれている(エレミヤ 29:7; 第一テモテ 2:1-4)。このことは、神が誰をどの職に就かせるかを決定する際、私たちは神に影響することができることを示唆している。神の裁きは時として、政治上の悪い指導者アという形で来て、また殆どの国はその様な裁きを受けるにふさわしい為に、私たちの国が、その受けるべき全ての裁きを受けないで済むように、私たちは神から憐みを受けれる様、請う願うことができる。



## 現代の靈的戦いについての迷信－前篇

しかし、サタンは人間の行政に対する影響力を持っていますか。はい、持っています。しかし、それはサタンは未信者の人々の靈的な主であり、また未信者の人々が政治に関わっているから、というだけです。しかし、サタンは神が持って良いと許可した分だけの影響力しか持っていないし、神はその御心のままに、いかなる時でもサタンの策略をくじかせることができるのです。使徒ヨハネは、イエスについて、「地上の王たちの支配者」（黙示録 1:5）である方、と書きました。

### サタンが災害や悪天候をもたらしているのか (Does Satan Cause Natural Disasters and Adverse Weather?)

サタンが「この世の神」である為に、多くの人は、サタンが天候を支配しており、また、日照り、洪水、竜巻、地震等、全ての自然災害の原因であると思込んでいます。しかし、これは聖書が私たちに教えることでしょうか。繰り返しますが、私たちは、サタンについての神学全体を、「盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのため」（ヨハネ 10:10）という、たった一つの聖句に基づいて考えない様、注意しなくてはなりません。人々がこの聖句を、何か盗まれた、殺された、もしくは破壊された、という様なことがサタンのせいだ、と証明する為に引用するのを、私はなんとも頻繁に聞いてきたことでしょうか。しかし、聖書を詳しく調べると、私たちは神ご自身が時には殺し、滅ぼすことを学びます。多くの可能な事例の中から、以下の三つの箇所について考えていきましょう。

律法を定め、さばきを行なう方は、ただひとりであり、その方は救うことも滅ぼすこともできます（ヤコブ 4:12、一部強調）。

恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺したあとで、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい（ルカ 12:5、一部強調）。

## 弟子をつくる指導者

からだを殺しても、たましいを殺せない人たちなどを恐れてはなりません。そんなものより、たましいもからだも、ともにゲヘナで滅ぼすことのできる方を恐れなさい（マタイ 10:28、一部強調）。

もし私たちが、殺すこと、または滅ぼすことの全てはサタンの働きであると言うのなら、それは間違いです。聖書には、神が殺し、また滅ぼす事例があります。私たちは、イエスが、盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけ、と言われた時、実際は悪魔について語っていたのだろうか、と自問すべきです。ここでも、私たちがすべきことは、イエスの発言を文脈から理解して読むことです。この盗み、殺し、滅ぼす盗人についての発言の一節前に、イエスはこう言われました—「わたしの前に来た者はみな、盗人で強盗です。羊は彼らの言うことを聞かなかったのです」（ヨハネ 10:8）。ヨハネ十章一から十五節にあるイエスの説教全体を読むと、まずイエスは良い羊飼いである、ということから始まっていますが、イエスの盗人や強盗という言葉が、偽教師や宗教指導者を指していることは、更に明白になっていきます。

### 悪天候や災害に関する様々な見解 (Various Views of Adverse Weather and Natural Disasters)

竜巻や地震が来ると、神を信じる人々の心に、神学的な質問が沸き上がります。「これを起こしたのは一体誰なのだろう。」聖書を信じるクリスチャンにとって、可能性としては、たった二つです。神か、サタンが、それらの原因です。

そこで反対する人もいるでしょう。「いいえ、違います！神は非難されるべきではありません！人間が悪いのです。神は、人間の罪を裁いているだけです。」

もし、罪に対する神の裁きとして神が、竜巻や地震を起こしているのなら、確かに、私たちは神にではなく、むしろ反発する人間のせいにできますが、しかし、依然として神に責任があります。なぜならば、神の判決なしに、自然災害は起きないからです。

もしくは、神はサタンに竜巻や地震を送らせて、神の裁きを罪人に下していると

## 現代の靈的戦いについての迷信―前篇

いうことが本当であるのならば、私たちはサタンが原因であると言えますが、しかし依然として神に責任があるのです。それは、神が破壊を起こすことをサタンに許可し、それらの災害は神の罪に対する反応の結果として起きるからです。

ある人たちは、竜巻や地震は神の責任でも、サタンの責任でもなく、それらは単に「私たちの罪で墮落した世における自然現象」に過ぎない、と言っています。曖昧な方法で、自然災害の責任を人間に負わせようとしていますが、それは依然としての的外れです。この説明では、神の出番が全くありません。もし竜巻が単に、「私たちの罪で墮落した世における自然現象」であるというのなら、誰が一体それを決めたのですか。明らかに、竜巻は人間によって作られたものではありません。つまり、竜巻はある程度の嘘が空気中に話される時にできるものではありません。地震は、ある特定の人数の人々が姦淫を犯す時に起きるものではありません。

竜巻と罪に何か関係があるのなら、神が関わっている、ということになります。なぜなら、竜巻は罪に対する神の裁きの現れだからです。それらが不定期に起きるにしても、神が不定期に起きる様命じたのであり、従って神が関わっている、ということになります。

例え、罪と自然災害には何ら関係がなく、神が世を設計した際失敗した為に、地殻断層がたまに起きたり、天候系も時々荒れ狂っているとしても、神は、創造主として、その誤りが人々を傷つけたということで、依然として、地震や竜巻の責任を神が負うことになります。

### 「母なる自然」はない (There is No “Mother Nature”)

従って、自然災害に関する疑問に対する答えは、たった二つしか私たちにはありません。神か、もしくはサタンの責任である、ということです。どちらの答えが正しいのか、具体的な聖書箇所を見ていく前に、まずこれら二つの答えの可能性について、もう少し深く考えてみましょう。

もしサタンが自然災害の原因であるならば、神はそれを止めることができるのか、もしくはできない、ということになります。もし、神は、サタンが自然災害を起こす

## 弟子をつくる指導者

のを阻止できるのにしないのならば、神は又しても責任を負います。災害は神の許可なく起きることはなかったからです。

それでは、もう一方を考えてみましょう。少しの間だけ、神がサタンを阻止したいがそれができないと仮定してみましょう。それは本当に可能性としてあるのでしょうか。

もし神が、サタンが自然災害を起こすことを阻止できないとしたら、サタンは神よりも力があるのか、もしくは、神よりも賢い、ということになってしまいます。それは、「アダムが墮落した際、サタンはこの世の権威を得た」という理論を支持する者たちが実際に言っていることです。彼らは、サタンがアダムのリースを奪った為に、サタンには、この地上で好き放題にできる法的権利がある、と主張しています。ではここで、神は、サタンが現在所有しているアダムのリース契約を尊重しなくてはならない為に、サタンを阻止したいができない、と仮定してみましょう。言い換えるなら、神が余りにも愚かで、世に罪が入り墮落すると何が起きるか予見できなかったのですが、一方サタンは、神よりも賢く、神がサタンに持っていないことを望むような力を今持っている、ということです。個人的には、サタンが神よりも賢いとはとても言えません。

もし、「サタンが権威を得た」という理論が本当ならば、サタンはなぜ今以上に地震や竜巻を起こさないのか、また、なぜクリスチャン人口の大部分を狙わないのか、私たちはその理由が知りたいと思います。（もし、あなたが、「神がサタンにクリスチャン人口の大部分を狙わせないから」と言うのなら、それはあなたが、サタンは神の許可なくして働くことはできないことを、たった今認めたこととなります。）

私たちが具体的に検証していくと、私たちの質問への答えには、たった二つの可能性しかないのです。つまり、(1) 神が地震や竜巻を起こす、ということか、もしくは (2) サタンが神の許可を得て行っている、ということです。

どちらの答えが正しいかに関わらず、究極的に責任があるのは、神であることがわかりますか。人々が「神が竜巻を送ったのではない。サタンが、神の許可を得てし

## 現代の靈的戦いについての迷信―前篇

たことだ」と言う時、その人たちが思っている程、神に余り「責任がない」ようにはしていません。もし神が、御旨であろうとなかろうと、サタンが竜巻を起こすことを阻止できたけれどもしなかったのならば、神に責任があります。人間の反発こそ、(もし竜巻が神によって送られたか、神が裁きとして起こることを許可したのなら) その罪の為に非難されるべきかもしれませんが、しかし依然として、神には何の関係も責任もないということは愚かなように思えます。

### 聖書からの証 (Scripture's Testimony)

聖書は具体的に、「自然災害」については何と言っているのでしょうか。聖書は、神もしくは悪魔がそれらの原因であると言っているのでしょうか。まずは、地震について聖書の中で多く語られているので、それを見てみましょう。

聖書によると、地震は、神の裁きとして、それを受けるに値する罪人たちの上に起こることがある様です。エレミヤ書には、「その[神の]怒りに地は震え、その憤りに国々は耐えられない」(エレミヤ 10:10、一部強調)と書いてあります。

イザヤはまた、こう警告しています。

万軍の主は、雷と地震と大きな音をもって、つむじ風と暴風と焼き

尽くす火の炎をもって、あなたを訪れる(イザヤ 29:6、一部強調)。

あなたはまた、モーセの時代に、地がその口を開き、コラとそれに従った反発の民を飲み込んだ(民数記 16:23-34参照)ことを思い出すかもしれません。これは明白に神の裁きの御業です。地震を通して表された神の裁きに関する他の事例は、エゼキエル三十八章十九節、詩篇十八章七節と七十七章十八節、ハガイ二章六節、ルカ二十一章十一節、また黙示録六章十二節、八章五節、十一章十三節、そして十六章十八節をご参照ください。

聖書に記録される地震の内、それが神の裁きの御業とは必ずしも言えないものもありますが、それにしても、それは神によって起こされたものです。例えば、マタイによる福音書には、イエスが死んだ時(マタイ 27:51, 54)と復活された時(マタイ 28:2)に地震があったと記録されています。それらをサタンが起こしたのでしょうか。

## 弟子をつくる指導者

パウロとシラスは、ピリピの留置場で真夜中に神に向かって褒め歌を捧げていた時、「突然、大地震が起こって、獄舎の土台が揺れ動き、たちまちとびらが全部あいて、みな鎖が解けて」しまいました（使徒の働き 16:26、一部強調）。サタンがこの地震を起こしたのでしょうか。私はそうは思いません！看守でさえ、その神の御業を目の当たりにして、救われました。使徒の働きの中に記録された地震の中で、神が起こしたものはこれだけではありません（使徒の働き 4:31参照）。

最近私は、善意のあるクリスチャンたちが、ある地域に地震が起こるという預言を聞いて、その場所へ旅に出て、悪魔に対して、「霊的な戦い」をしたということを読みました。あなたは彼らの憶測の誤りがわかりますか。彼らが、その地域に住む人々の為に、神の憐みを祈っていれば霊的であると言えたでしょう。そして、そのようにしていたのなら、彼らは地震が起こりうる場所にわざわざ時間とお金をかけて行くという浪費をせずに済んだでしょう。彼らは彼らの住んでいるその場所で、神に祈ることができたはずですが、しかし、地震を阻止する為に、悪魔と戦うことは聖書に書いてありません。

### 竜巻はどうか (How About Hurricanes?)

竜巻という言葉は聖書にはありませんが、私たちは強風について聖書から見つけることはできます。例えば、以下の箇所があります。

船に乗って海に出る者、大海であきないする者、 彼らは主のみわざを見、深い海でその奇しいわざを見た。 主が命じてあらしを起すすと、風が波を高くした（詩篇 107:23-25、一部強調）。

そのとき、主が大風を海に吹きつけたので、海に激しい暴風が起こり、船は難破しそうになった（ヨナ 1:4、一部強調）。

この後、私は見た。四人の御使いが地の四隅に立って、地の四方の風を堅く押え、地にも海にもどんな木にも、吹きつけないようにし

## 現代の靈的戦いについての迷信―前篇

ていた（黙示録 7:1）。

明らかに、神は風を起こし、またそれを抑えることができるお方です。<sup>90</sup>聖書全体でたった一カ所、サタンが風を送ったことが書いてあります。それはヨブが試練を通っている最中で、「荒野のほうから大風が吹いて来て、家の四隅を打ち、それがお若い方々の上に倒れたので、みなさまは死なれました」（ヨブ 1:19）と一人の使いが報告に来た時のことでした。

ヨブの第一章を読むと、サタンがヨブに不運をもたらしたことがわかります。しかし私たちは、サタンは神の許可なくヨブやヨブの子供たちに危害を加えることは一切できなかつたことを忘れてはなりません。そして、風を上回る神の絶対的主権を私たちはここでも見るのです。

### ガリラヤの暴風 (The Gale on Galilee)

イエスと弟子たちがガリラヤ湖を渡っている時に彼らを悩ませた「激しい強風」についてはどうでしょうか。神はその御子が乗る舟を転覆させるような風を送る訳はないので、当然、そのような嵐を起こさせたのはサタンに違いありません。「もし国が内部で分裂したら、その国は立ち行きません」とあるのですから、なぜ神はイエスと十二弟子を傷つけるかもしれない風を送ることがありましようか。

これらは良い議論ですが、暫くの間、止まって考えてみましょう。もし神が嵐を送らずにサタンがそうしたのならば、私たちはそれでも、神がサタンにそれを送ることを許したということを認めなくてはなりません。ですから、依然として先程の質問は、まだ答えられていません。なぜ神はイエスや十二弟子に害を与えるかもしれない嵐を送ることを許したのでしょうか。

答えはあるのでしょうか。恐らく、神は弟子たちに信仰について、何か教えていたのでしょうか。恐らく、神は彼らを試していたのでしょうか。恐らく、神は、「すべて

---

<sup>90</sup> 90 神が風を治めていることを証明する他の聖書箇所としては、以下の通り：創世記 8:11；出エジプト 10:13, 19；14:21；15:10；民数記 11:31；詩篇 48:7；78:76；135:7；147:18；148:8；イザヤ 11:15；27:8；エレミヤ 10:13；51:16；エゼキエル 13:11, 13；アモス 4:9, 13；ヨナ 4:8；ハガイ 2:17。これらの事例の多くで、神は裁きの手段の一つとして風を用いたことが記されている。

## 弟子をつくる指導者

の点で、私たちと同じように、試みに会われ」（ヘブル 4:15）なくてはならなかった、イエスを試していたのでしょう。完全に試されるには、イエスは恐れる誘惑を受ける機会が必要でした。恐らく、神はイエスに栄光を帰したかったのでしょう。恐らく、神はこれら全てをしたかったのでしょう。

神は、これからパロの軍隊がイスラエルの子供たちを追い上げ、追い詰めることを十分知りながら、その民を紅海の端へと導きました。しかし、神はイスラエルの民を救出しませんでしたか。神はご自身に反して、民が大虐殺されるような所へと導いたのでしょうか。これは、「内部で分裂している国」の例なのではないのでしょうか。

いいえ、なぜなら、神はイスラエルの民を大虐殺に合わせようという意図は全くなかったからです。また、神はガリラヤ湖で、イエスと十二弟子を溺死させ様と、そこに暴風を送ったり、サタンに送らせたりする意図も全くありませんでした。

とにかく、聖書はサタンがガリラヤ湖に暴風を送ったとも、神がそうしたとも書いてありません。ある人たちは、イエスが風を叱りつけたことから、サタンがしたに違いないと言っていますが、それは隙のない議論とは言えません。イエスは神を叱った訳ではなく、風を叱ったのです。御父なる神も同じことをしたに違いありません。つまり、神は言葉一つで風を引き起こすこともでき、またそれを叱ることで抑えることもできました。イエスが暴風を叱りつけたからと言うだけでは、サタンがそれを起こした証明にはなりません。

繰り返しになりますが、私たちは実は何も証明していない聖書の一節に、私たちの神学の全ての基礎を置いてはなりません。私は既に、神が絶対的な主導権をもって風を治めていることを証明する聖書箇所を参照しました。また、殆どの場合、神が風を送っていると認められています。私の主要なポイントとしては、サタンは「この世の神」ではありますが、風を完全に独立して支配している訳でもなく、またいつでも、どこでもサタンの思いのままに竜巻を起こす権利が与えられている訳でもありません。

従って、竜巻が起きる時、私たちは何か神のご支配を超えたもの、何か神が阻止



## 現代の靈的戦いについての迷信－前篇

したいのにできないといったものとして見るべきではありません。イエスがガリラヤ湖の暴風を叱ったことは、神が御心のままに、竜巻を阻止したい時にできる、ということを実証するのに十分であるとされるべきです。

そして、もし神が竜巻を送っている（もしくは、送る許可を与えている）ならば、神は何かしらの理由があるに違いありません。また、神が広範囲に渡る壊滅的な大惨事をもたらす様な嵐を送ったり、もしくはそれを許可する、もっとも賢い答えとしては、神が不従順な人たちに警告を与え、また裁く為、ということでしょう。

### 「しかし時に竜巻はクリスチャンを傷つける」 ("But Hurricanes Sometimes Harm Christians")

しかし、自然災害によって影響を受けたクリスチャンたちはどうなるのでしょうか。竜巻が起きると、それは単にクリスチャンではない家だけを破壊する訳ではありません。クリスチャンは、イエスの犠牲なる死の故に、神の御怒りから免れるのではないのですか。それでは、どうして私たちは、自然災害が神ご自身の子供たちをも傷つける可能性が十分ありますが、その背後で働く唯一絶対の主権者は神であると、言えるのでしょうか。

それらは、大変難しい質問です。しかし、私たちは、もしサタンが自然災害を起こしているという誤った前提に基づいているとしても、それに答えるのに少しも容易になっていない、ということに気づかなくてはなりません。もしサタンが全ての自然災害を起こしているのなら、なぜ神はその様に神ご自身の子供たちを傷つけるかもしれないことを、サタンが起こすことを許すのでしょうか。私たちは依然として、同じ問題に直面しています。

聖書は、キリストにある人たちが「御怒りに会うようにお定めになったのではない」（第一テサロニケ 5:9）と明白に記しています。同時に聖書は、イエスに聞き従わない者は、「神の怒りがその上にとどまる」（ヨハネ 3:36）と記しています。しかし、神の御怒りは、どのようにしたら未信者たちの只中に住む信者たちには影響せず、未信者の上だけにとどまることができるのでしょうか。答えは、時としてそれ

## 弟子をつくる指導者

はできない、ということで、私たちはその事実に向き合わずにはなりません。

出エジプトの時代、イスラエルの民は皆、一つの場所に共に住んでいましたが、神の裁きとしてエジプト人たちの上に下った疫病は、イスラエル人たちを害することはありませんでした（出エジプト 8:22-23; 9:3-7; 24-26; 12:23参照）。しかし私たちは、「エジプト人たち」と隣り合わせに住み、また仕事をしています。もし神が災害という手段を用いて彼らに裁きを下すなら、私たちはどのようにしてそこから逃れるのでしょうか。

逃れるという言葉は、この質問の答えを理解する上で、間違いなくキーワードとなります。ノアは神が地上に洪水を送った時、神の完全なる御怒りから逃げましたが、彼は箱舟を作る為に労苦し、その後一年間その舟の中で、悪臭を放つ数多くの動物たちと共に過ごさなくてはならなかった、という悪影響を受けました。（因みに、旧約と新約の両方で、サタンではなく、神がノアの洪水を起こした、としています。創世記 6:17; 第二ペテロ 2:5参照）。

ロトは、神の裁きがソドムとゴモラに下った時、九死に一生を得ましたが、彼はそれでも、火と硫黄で彼の持ち物は破壊され、全て失いました。神が悪者に下す暴きは、義人も影響を受けました。

それからだいぶ年数が経過し、イエスはエルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、それは「報復の日」（ルカ21:22-23）となるだろうから、エルサレムにいる信者たちはそこから逃げるようにと、前もって警告しました。これは、神の御怒りが、西暦70年にローマ軍にエルサレムを包囲攻撃させたことを明白に示しています。キリストの警告に注意深くあったクリスチャンたちは、九死に一生を得ましたが、彼らもエルサレムに残してこなくてはならなかったものを失いました。

以上の事例で、私たちは神の民は、神の裁きが悪者の上を下る時、ある程度の苦難があるかもしれないことがわかります。従って、私たちはクリスチャンが時として自然災害の影響を受けるからと言って、それらの災害は神の責任ではない、という結論に飛び付くことはできません。

それでは私たちは何をすべきか (What Then Shall We Do?)

私たちは神によってのろわれた世に住んでおり、世というところは、神の御怒りをいつも受けているところです。パウロは、「人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から[「啓示されるであろう」ではなく、]啓示されていると書きました (ローマ 1:18)。邪悪で、神にのろわれた世に生きている者たちとして、私たちは、例え御怒りが特に私たちに向かっていなくても、わたしたちは世に下る神の御怒りの影響から完全に逃れられることはできません。

それを知った上で、私たちは何をすべきでしょうか。まず、私たちは神を信頼すべきです。エレミヤはこう書きました。

主に信頼し、主を頼みとする者に祝福があるように。 その人は、  
水のほとりに植わった木のように、流れのほとりに根を伸ばし、暑  
さが来ても暑さを知らず、葉は茂って、日照りの年にも心配なく、  
いつまでも実をみのらせる (エレミヤ 17:7-8)。

エレミヤは、主を頼みとする者は、決して日照りに遭わない、とは言わなかったことに注目してください。そうではなく、暑さや日照りが来ても、主を頼みとする者は、流れのほとりに根を伸ばす、水のほとりに植わった木の様です。その人の周りで世がやつれている時に、彼には他の供給源があります。エリシャはイスラエルにききんがあった時に、鳥に養われた時の話が、一つの例として思い浮かびます (第一列王記 17:1-6参照)。ダビデは正しい者について、「ききんのときにも満ち足りよう」 (詩篇 37:19) と書きました。

しかし、ききんは悪魔によるものではないのですか。聖書によると、そうではありません。常に神に責任があり、ききんは、神の御怒りを受けるにふさわしい人たちへの報いとして語られていることが多いです。例えば、以下の聖書箇所を参照ください。

それで、万軍の主はこう仰せられる。「見よ。わたしは彼らを罰する。若い男は剣で殺され、彼らの息子、娘は飢えて死に、 (エレ

## 弟子をつくる指導者

ミヤ 11:22、一部強調)。

万軍の主はこう仰せられる。「見よ。わたしは彼らの中に、剣とききんと疫病を送り、彼らを悪くて食べられない割れたいちじくのようになる (エレミヤ 29:17)。

「人の子よ。国が、不信に不信を重ねてわたしに罪を犯し、そのためわたしがその国に手を伸ばし、そのパンのたくわえをなくし、その国にききんを送り、人間や獣をそこから断ち滅ぼすなら…」(エゼキエル 14:13、一部強調)。

あなたがたは多くを期待したが、見よ、わずかであった。あなたがたが家に持ち帰ったとき、わたしはそれを吹き飛ばした。それはなぜか。・・万軍の主の御告げ。・・それは、廃墟となったわたしの宮のためだ。あなたがたがみな、自分の家のために走り回っていたからだ。それゆえ、天はあなたがたのために露を降らすことをやめ、地は産物を差し止めた。わたしはまた、地にも、山々にも、穀物にも、新しいぶどう酒にも、油にも、地が生やす物にも、人にも、家畜にも、手によるすべての勤労の実にも、ひでりを呼び寄せた。」 (ハガイ 1:9-11、一部強調)。

上記の四番目の事例は、イスラエルの民の罪が原因で日照りが起きたと、彼らは責められましたが、それを送った責任は神にあることがわかります。<sup>91</sup>91

---

<sup>91</sup> 91神がききんを起こしたことを示す、他の参照聖句は以下の通り：申命記 32:23-24；第二サムエル 21:1；24:12-13；第二列王記 8:1；詩篇 105:16；イザヤ 14:30；エレミヤ 14:12, 15-16；16:3-4；24:10；27:8；34:17；42:17；44:12-13；エゼキエル 5:12, 16-17；6:12；12:16；14:21；36:29；黙示録 6:8；18:8。イエスご自身が、神は「正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださる」

## 現代の靈的戦いについての迷信—前篇

もし神が悪者たちにききんを送り、私たちがたまたまその悪者たちの中で住んでいるならば、私たちは、神が私たちの必要を満たしてくださることを信じなくてはなりません。パウロは、以下の通り、ききんは私たちをキリストの愛から引き離すことはできないと断言しました！「私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか」（ローマ 8:35、一部強調）。パウロは、聖書を学ぶ者として、ききんは神が悪者への裁きとして送られることを知っていましたが、彼は、クリスチャンは決して飢えに直面しないと行った訳ではなく、むしろ、それがクリスチャンの身にも起こりうることを示唆したことに注目してください。

### 従順と知恵 (Obedience and Wisdom)

第二に、私たちは従順となり、また、世に的が絞られている神の御怒りはどんなものでも避ける為、神の知恵を用いるべきです。ノアは箱舟を作り、ロトは丘高い方へ向かい、エルサレムにいたクリスチャンたちは、その町から逃げなくてはなりません。これらの人々は皆、神の悪者たちに対する裁きを免れる為に、神に従わなくてはなりません。

もし私が竜巻の起こる地域に住んでいるとしたら、私は吹き飛ばされない様な頑丈な家を建てるか、もしくは簡単に建て替えの利く安い家を建てるでしょう！そして私は祈ります。クリスチャンは皆、神の世に対する御怒りから逃れられる様に、祈り、またイエスが約束した方（訳者注：すなわち真理の御霊）が、「やがて起ころうとしていることをあなたがたに示す」（ヨハネ 16:13）ことにいつも敏感でいるべきです。

使徒の働き第十一章には、ユダヤに住んでいるクリスチャンにも大惨事となりかねない、差し迫るききんについて警告した預言者アガボについて、記されています。結果として、パウロとバルナバによって救援物資が届けられました（使徒の働き 11:28-30参照）。

---

（マタイ 5:45）と言った。神は雨を支配するお方である。

## 弟子をつくる指導者

そのようなことは、今日起こり得るのでしょうか。勿論です。なぜなら、聖霊は今日も変わらず、また神の愛も衰えていないからです。しかし、キリストの御からだの中には、その様な聖霊の賜物や現れに心を閉ざしている者たちもおおり、従って、彼らは「聖霊を消して」（第一テサロニケ 5:19）いる為に、神の最善のものを逃してしまっていることがあるのです。

デモス・シャカリアンは、後のフルゴスペル・ビジネスメンズ・フェローシップ・インターナショナルの後の会長であり、創立者であります。彼の伝記の中で、十八世紀後半にアルメニアに住むクリスチャンたちに対して、神がどの様にして、無学の少年預言者を通して語ったかについて、詳しく語られています。神は彼らに差し迫る大虐殺を警告し、結果として、その様な超自然的な現れを信じる、何千人ものペンテコステ派のクリスチャンたちは、シャカリアンの祖父母も含め、国外逃亡しました。その直後、トルコによるアルメニア侵略は、百万人以上のアルメニア人が虐殺され、その中には神の警告を無視したクリスチャンも含まれていました。

私たちは聖霊に心を開き続け、神に従順であることが賢明でしょう。さもなければ、私たちは、神が本来私たちに経験して欲しくない神の御怒りを、一度体験することになるかもしれない可能性はかなりあります。エリシャはかつてある女に、「あなたは家族の者たちと旅に立ち、あなたがとどまっていた所に、しばらくとどまっていなさい。主がききんを起こされたので、この国は七年間、ききんに見舞われるから」（第二列王記 8:1）と指示しました。もしその女が預言者を聞かなかつたら、どうなっていたのでしょうか。

それから、私は、天からのもう一つの声がこう言うのを聞いた。「わが民よ。この女[バビロン]から離れなさい。その罪にあずからないため、また、その災害を受けないためです。なぜなら、彼女の罪は積み重なって天にまで届き、神は彼女の不正を覚えておられるからです…それゆえ一日のうちに、さまざまの災害、すなわち死病、悲しみ、飢えが彼女を襲い、彼女は火で焼き尽くされます。彼女を

## 現代の靈的戦いについての迷信—前篇

さばく神である主は力の強い方だからです（黙示録 18:4-5、8、一部強調）。

最後にまとめると、神は天気にも、災害にも、最高の権威をもって治めておられます。神は、ノアの時代に四十日間雨を降り続けさせたことに始まり、イスラエルの敵に雹を降らせたり、他の自然災害を送ったりしたこと、またヨナの舟に強風を起こさせたこと、そしてイエスがガリラヤ湖で嵐を叱りつけたことまで、繰り返して、聖書の中でご自身を自然界の主として証明しました。神こそ、イエスが言われた通り、「天地の主」（マタイ 11:25）なのです。神の自然界にも働く主権についての更なる参照聖句は以下の通りです：ヨシュア 10:11；ヨブ 38:22-38；エレミヤ 5:24；10:13；31:35；詩篇 78:45-49；105:16；107:33-37；135:6-7；147:7-8, 15-18；マタイ 5:45；使徒の働き 14:17。

### 質疑応答 (A Few Questions Answered)

もし神が人々をききん、洪水、また地震を通して裁いているのならば、神を代表する者たちとして、神が罰を与えている人々を援助したり、その苦しみを軽減させたりすることは、私たちの間違いなのでしょうか。

勿論、違います。神はその裁きの対象となる人々も含め、全ての人を愛していることを、私たちは気付くべきです。私たちの耳には不思議に聞こえますが、自然災害を通した神の裁きは、実際神の愛の表れなのです。どうしてでしょうか。自然災害が原因の苦難や困難を通して、神はその愛する人々へ、神は聖であり、また裁くお方であり、また罪には結果が伴うことを警告しています。神は人々が救い主を必要としていることがわかる為に、更には、彼らが火の池から逃れられる為に、神は一時的な苦しみを許可しています。それは愛です！

人々に息ある限り、神は彼らが受けるに値しない憐みをまだ見せており、悔い改める為の時間が残されています。私たちの同情心と助けを通して、私たちは神の一時的な御怒りを体験している人たちに、神の愛を表すことができますが、誰が神の永遠の御怒りから救われるのでしょうか。自然災害は、イエスとその命を捧げた世に、手を

## 弟子をつくる指導者

差し伸べる機会なのです。

今世において、福音を人々に届ける程大切なことは他にあるでしょうか。私たちが永遠の視点を持つ時、自然災害から受ける苦しみは、火の池に投げ込まれる人が受ける苦しみに比べれば何でもありません。

人々は苦しみの中にある時の方が、一般的に福音をより受け入れやすくなる、というのは事実です。この現象の事例は、近隣諸国から圧力を掛けられている時にイスラエルが悔い改めに至った話から、イエスが語られた放蕩息子の話まで、聖書には沢山あります。クリスチャンは、自然災害を、畑が既に色づいた収穫の時として見るべきです。

### 真実を言おう (Let's Tell The Truth)

では、竜巻や地震の後、元の暮らしに戻ろうとしている人たちに、私たちは何を伝えるべきでしょうか。もし彼らとその苦境に対する神学的な答えを求めるならば、私たちはどう答えるべきでしょうか。聖書が教えることに正直となって、人々に神は聖なるお方で、彼らの罪には報いがあることを伝えましょう。竜巻の猛烈なとどろきは、全能の神が持つ力のほんの小さな例に過ぎないこと、また家が揺れた時に味わった恐怖は、彼らが地獄へ投げ込まれる時に彼らを引き付ける恐れとは比べものにならないことを伝えましょう。そして、私たちは皆地獄に投げ落とされるに値するにもかかわらず、神は憐み深く、私たちに悔い改め、イエスを信じる時間を与えてくださり、そのお方を通して神の御怒りから私たちは救われることができる、と彼らに伝えましょう。

「しかし、神について、私たちは人々を怖がらせるべきではないのでは」と、ある人たちは尋ねます。答えは聖書にこの様に書いてあります—「主を恐れることは知識の初めである」(箴言 1:7)。人々は神を恐れないうちは、彼らは本当は何もわかっていないのです。

もし人々が神に対して怒りを顕にしたら (What if People Become Angry with God?)



## 現代の霊的戦いについての迷信―前篇

しかし、人々はその苦しみの故に、神に対して怒ることもあるのではないですか。恐らく怒るでしょうが、私たちは人々が傲慢になっていることをわからせる様、優しく助ける必要があります。誰も神が彼らに取った処置に対して、不平を言う権利はありません。なぜならば、私たちは皆、ずっと昔に地獄に投げ落とされるに値するからです。患難について神を恨むよりもむしろ、人々は、彼らに警告を与える程愛して下さっていることについて、神をほめたたえているべきです。神は、全ての人をことごとく無視し、彼らを地獄に至る自分勝手な道に従わせておく権利をお持ちです。しかし神は、人々を愛し、毎日彼らを招いておられます。神はりんごの木に咲く花、鳥の歌声、偉大な山々や無数の輝く星を通して、彼らを静かに呼んでいます。神は、人々の良心を通して、御からだである教会を通して、また聖霊を通して彼らを呼んでいます。しかし、彼らは神の呼びを無視しています。

当然のことながら、人々を苦しめることは神の御旨ではありませんが、彼らが神を無視し続けると、神は彼らの注意を引く為に、より劇的な手段を用いる程に彼らを愛しているのです。竜巻、地震、洪水、ききんは、上記のより劇的な手段のいくつかです。神はそのような患難が人々の傲慢の鼻をへし折り、彼らに目覚めて欲しいと望んでいます。

### 神の裁きは偏っているのか (Is God Unfair in His Judgment?)

私たちが、神と私たちの世の中を聖書的な観点から見る時、その様な時にのみ、私たちは物事を正しく考えています。聖書的観点とは、全ての人には神の御怒りを受けるべきですが、しかし、神は憐み深いお方である、ということです。苦しんでいる人々が、自分たちは神からもっと良い扱いを受けるべきだ、と言う時、神はうめいているに違いありません。全ての人には、その人が受けるに値する以上に多くの憐みを受けているのです。

この主題に沿って、イエスはかつて二つの現代における患難について触れました。それは、ルカによる福音書に書いてあります。

ちょうどそのとき、ある人たちがやって来て、イエスに報告した。

## 弟子をつくる指導者

ピラトがガリラヤ人たちの血をガリラヤ人たちのささげるいけにえに混ぜたというのである。イエスは彼らに答えて言われた。「そのガリラヤ人たちがそのような災難を受けたから、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い人たちだったとでも思うのですか。そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。また、シロアムの塔が倒れ落ちて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいるだれよりも罪深い人たちだったとでも思うのですか。そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます」 (ルカ 13:1-5)。

ピラトの手によって殺されたガリラヤ人たちは、「ピラトからお救いにならなかった神は、私たちが不公平に扱った！」とは言えませんでした。そうではありません。彼らは、死に値する罪人だったのです。そして、イエスによると、それらの生き延びたガリラヤ人たちが、彼らの方が殺された仲間よりも罪深くなかった、と結論を急ぐのは間違いであると言われています。彼らは神からより多くのごひいきを勝ち取った訳ではありません。彼らは、より多くの憐みを与えられたのでした。

キリストの言いたかったことは明白でした。「あなた方は皆、罪人です。罪には結果が伴います。今の所は、神の憐みの故に生きています。ですから、あなたも、遅すぎる前に悔い改めなさい。」

イエスは、神の憐みについてのあるたとえ話をを用いて、その様な悲劇についてご自身の考えを結論づけました。

イエスはこのようなたとえを話された。「ある人が、ぶどう園にいちじくの木を植えておいた。実を取りに来たが、何も見つからなかった。そこで、ぶどう園の番人に言った。『見なさい。三年もの間、やって来ては、このいちじくの実のなるのを待っているのに、なっていたためしがない。これを切り倒してしまいなさい。何のた

## 現代の靈的戦いについての迷信—前篇

めに土地をふさいでいるのですか。』番人は答えて言った。『ご主人。どうか、ことし一年そのままにしてやってください。木の回りを掘って、肥やしをやってみますから。もしそれで来年、実を結べばよし、それでもだめなら、切り倒してください。』」（ルカ 13:6-9）。

ここに、神の義と憐みの良い例があります。神の義は、「価値のない気を切り倒してしまいなさい！」と叫ぶ一方、神の憐みは、「実を結ぶ様に、もっと時間をお与えください。」と頼んでいます。キリストを知らない人は皆、この木の様です。

### 私たちは竜巻や洪水を叱ることはできるのか (Can We Rebuke Hurricanes and Floods?)

私たちが持つ、自然災害に対する最後の質問はこれです—私たちに十分な信仰があれば、私たちは自然災害を叱りつけたり、その発生を阻止したりできるのでしょうか。

信仰を持つことは、神の示された御旨を信じる、という意味です。従って、信仰は、神ご自身のみことばに基づくものでなければ、それは全く信仰とは呼べず、むしろ望みや推測に過ぎません。聖書のどこにも、神が私たちに竜巻を叱りつけ、鎮める約束を与えているところはなく、従って、人がそのようなことを行う信仰を持つことは（神が絶対的主権を持ってその人に信仰を与えない限り）あり得ません。

もう少し説明させてください。人が竜巻を叱りつける信仰を持つ唯一の方法は、神がある地理上の地域に竜巻を送りたくない、ということその人が確信していれば、の話です。私たちは聖書から学んだ様に、神は風を治める方であり、つまり竜巻を起こす責任があります。従って、神ご自身が起こることを命じる時に、誰かが竜巻を阻止することができるという自信を持つことはあり得ない話です！この唯一の例外は、神が竜巻について思い直すことです。それは神が、憐みを見せてください、と言う誰かの祈りに応えたか、もしくは、裁きを受けるところにあつた人々が悔い改めに応じたかです（この例として、ヨナの時代のニネベの話が思い出されます）。しかし、例

## 弟子をつくる指導者

え神が思い直したとしても、神が思い直したことと、神がその人に嵐を叱りつけ、鎮めて欲しいと思っていることをその人が知った場合でない限り、誰も竜巻を叱りつけ、鎮める信仰を持つことはできませんでした。

これまでに強風を叱り、鎮めた唯一の人は、イエスだけでした。私たちの誰もがそうできる唯一の方法は、もし第一コリント十二章七節から十一節にある、九つの御霊の実の一つ「信仰の賜物」（もしくは、時として「特別な信仰」の賜物と呼ばれるもの）を、神が私たちに与えた場合です。御霊の賜物の全てにおいてそうですが、信仰の賜物は、私たちの思う通りではなく、御霊の思う通りに働きます（第一コリント 12:11参照）。従って、神がこれから来る竜巻を叱る信仰を与えていないのなら、あなたは、信仰で行動していると思い込んで、その道に留まるべきではありません。あなたはそこから離れるべきです！またあなたは、神があなたを守る様に、神が裁こうとしておられる人々に憐みを注いでくださる様に、また彼らに命拾いをさせて、悔い改めの時間がもっと与えられる様に祈ることをお勧めします。

パウロはローマ行きの船に乗り、二週間暴風にさらされていた時、彼は叱責でそれを鎮めることはしなかったことに注目してください（使徒の働き 27:14-44 参照）。パウロがしなかった理由は、そうできなかったからです。また、結果として起きた難破にも、二百七十六人全員が無事であった様に、神はその乗船者全てに憐みを施しましたことにも注目してください（使徒の働き 27:24, 34, 44参照）。私は、パウロが神に、彼らに憐みを施してくださる様祈ったので、神はそうした、と考えたいです。

## 第三十一章

### 現代の靈的戦いについての迷信－後編 (Modern Myths About Spiritual Warfare, Part 2)

この章でも引き続き、誤りがありますが、人気のある、サタンと靈的戦いについての教えに触れていきます。最後には、全ての信者が実践すべき靈的戦いについて、聖書は何と言っているかを考えていきます。

#### 迷信その五 「私たちは靈的戦いを通して、空中にある悪魔の要塞を引き下ろすことができる」 (Myth #5)

聖書によると、地球の空中に住む悪霊は、暗やみの王国を支配するサタンの手下として働いていますが、サタンはそれらの悪霊の最上階級を支配しています。それらの悪霊は「縄張り意識が高く、ある特定の地域を支配していることは、聖書にもある考えです (ダニエル 10:13, 20-21; マルコ 5:9-10参照)。クリスチャンが、悪霊を他人から追い出す権威と悪霊に立ち向かう責任を持っていることは、聖書に基づいています (マルコ 16:17; ヤコブ 4:7; 第一ペテロ 5:8-9参照)。しかし、クリスチャンは町にいる悪霊を引き下ろすことはできるのでしょうか。その答えは、彼らにはできませんし、そう試みることは時間の無駄です。

私たちが単に人から悪霊を追い出すことができるからといって、私たちは町にいる悪霊を引き下ろすことができる、と考えるべきではありません。福音書や使徒の働

## 弟子をつくる指導者

きの中には、人々から悪霊を追い出す例が数多くありますが、あなたは、福音書や使徒の働きの中から、誰かがある町もしくは地域を支配する悪霊を引き下ろした例を一つでも思い浮かびますか。その様な例はないので、できないと思います。あなたは、使徒書簡のどこかに、空中から悪霊を引き下ろすという私たちの責任について書いてある教えを、一つでも思い浮かびますか。それはないので、無理です。以上の理由から、空中にいる悪霊に対して、「霊的戦い」を遂行できる、もしくはすべきであると信じる聖書的土台はありません。

### 行き過ぎたたとえ話の解釈 (Pushing Parables Too Far)

神が意図した以上に聖書に意味を持たせて読むことは、クリスチャンが、隠喩を含む聖書の言葉を読む時によく犯す間違いです。隠喩を含む言葉に、誤った解釈を施す典型的な例は、パウロの「要塞を引き下ろす」という言葉の解釈です。

私たちは肉にあって歩んではいても、肉に従って戦ってはいません。

私たちの戦いの武器は、肉の物ではなく、神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです。私たちは、さまざまの思弁と、神の知識に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち砕き、すべてのはかりごとをとりこにしてキリストに服従させ、また、あなたがたの従順が完全になるとき、あらゆる不従順を罰する用意ができています (第二コリント 10:3-6)。

「要塞をも破る」という箇所は、*欽定訳聖書*では、「要塞をも引き下ろす」と書いてあります。事実上、このたった一つの隠喩表現から、空中の悪霊から成る「要塞を引き下ろす」為に「霊的戦い」をする、という考えを主張する理論全体が構築されている、と言っても過言ではありません。しかし、*ニュー・アメリカン・スタンダード*訳で明白に伝えている通り、パウロはここで、空中にいる悪霊について話しているのではなく、人々の思いの中に存在する間違った信念、という要塞について話しています。思弁をパウロは打ち砕くと言っているのもあって、高い所にいる悪い霊ではありません。

## 現代の靈的戦いについての迷信—後篇

これは、文脈から読むと、更に明白になります。パウロは、「私たちは、さまざまの思弁と、*神の知識*に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち砕き、すべてのはかりごとをとりこにしてキリストに服従させ」（一部強調）と言いました。パウロが象徴的に書いた戦いとは、思い、もしくは考えに対する戦いであり、それは神の真の知識に反するものです。

私たちは戦中にあり、その戦いとは、サタンの嘘を信じてしまった人々の思いを得ようとする戦いである、とパウロは軍事的隠喩を用いて説明します。この戦いにおける私たちの最も大切な武器は真理であり、それ故、私たちは全世界に行って、福音を宣べ伝え、捕らわれ人を解放できるメッセージを持って敵地を侵略せよ、と命じられました。私たちが打ち砕いている要塞は、偽りという漆喰で、嘘というブロックが積み上げられています。

### 神の全ての武具 (The Whole Armor of God)

パウロが書いた他の箇所、よく誤った解釈をされる場所は、エペソ六章十節から十七節で、そこでパウロは神の武具を身に着ける私たちの責任について書きました。この箇所は、間違いなく、悪魔や悪霊とクリスチャンの戦いについて書いてありますが、町を支配する悪霊を引き下ろすことについては、一切触れられていません。もう少し詳しくこの箇所を調べてみると、パウロは主に、神のみことばを個人の人生に適用して、サタンの策略を拒むという、それぞれの責任について書いていました。

この特定の箇所を読み進めながら、その中の明白な隠喩を用いた言葉に注目してください。パウロは明らかに、クリスチャンの体に身に着けるべき、文字通りの物理的な武具について話していたのではありません。それらの武具の一つ一つは、クリスチャンが悪魔や悪霊に対する防衛の為に用いるべき、様々な聖書の真理を表しています。神のみことばを知り、信じ、またそれに基づいて行動することで、クリスチャンは、象徴的に言えば、神の防護用武具を身に着けるのです。

エペソのこの箇所を、節ごとに調べながら、何を本当にパウロは私たちへ伝えようとしていたのか、ということをお問ひしましょう。

## 私たちの霊的力の源 (The Source of Our Spiritual Strength)

まず、私たちは「主にあって、その大能の力によって強められなさい」(エペソ 6:10)とされています。ここで、私たちは自分たち自身からではなく、神から私たちの力を得るべきである、という事実を強調しています。これは、パウロの次の言葉で更に明らかにされています—「神のすべての武具を身に着けなさい」(エペソ 6:11前半)。これは神の武具であり、私たちのものではありません。パウロは、神ご自身が武具を身に着けると言っているのではなく、神が私たちにお与えになる武具を、私たちは必要としている、と言っているのです。

なぜ私たちは、神の与えるこの武具が必要なのでしょうか。答えは、「悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために」(エペソ 6:11後半)ということです。この武具は主に防衛用であり、攻撃用ではありません。従って、私たちは外へ出て、町を支配する悪霊を引き下ろすのではなく、サタンの策略に対してしっかりと立つことができる為です。

私たちは、悪魔が私たちを攻撃する為の邪悪な計画を持っていることを知っており、また私たちが神の供給する武具を身に着けなければ、攻撃を受けやすくなります。武具を付けることは、私たちの責任であって、神の責任ではないことにも注目してください。

続けましょう。

私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです(エペソ 6:12)。

ここで、パウロは物理的、物質的戦いではなく、霊的なものについて話していることが、非常に明瞭となります。私たちは、パウロが挙げた悪霊が持つ数多くの階級の策略に対して格闘しています。殆どの読者が、パウロは低い方から高い方の階級に、つまり、「主権」が一番低く、「天にいるもろもろの悪霊」が一番高い階級として並べ挙げたと推測します。



## 現代の靈的戦いについての迷信—後篇

私たちは、靈的存在に対して、どの様に戦うことができるのでしょうか。その質問は、どの様にして靈的存在は私たちに攻撃できるのか、という質問をすることで答えられます。彼らは私たちを主に、神のみことばや御旨に反する誘惑、思い、提案、考えで攻撃します。従って、私たちの防衛は、神のみことばを知り、信じ、また従うことです。

ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、いっさいを成し遂げて、堅く立つことができるように、神のすべての武具をとりなさい（エペソ 6:13）。

パウロの目的は、サタンの攻撃に対して対抗し、立つ為に私たちを準備させることであることを、もう一度注目してください。パウロの目的は、私たちが外に出て、サタンを攻撃し、空中から悪霊を引き下ろす為に私たちを準備させることではありません。三度この箇所、パウロは私たちに「堅く立つ」様に言っています（訳者注：「立ち向かう」（11節）、「堅く立つ」（13節）、「しっかりと立つ」（14節）はいずれも英語では同じ言葉”*stand firm*”が使われている）。私たちの立場は、守りであり、攻撃ではありません。

### 真理—私たちの一番の守り（Truth—Our Primary Defense）

では、しっかりと立ちなさい。腰には真理の帯を締め（エペソ 6:14 後半）。

私達の武器をあるべきところに保つ場所がここにあります。真理です。真理とは何でしょう。イエスは御父に向かって「あなたのみことばは真理です」（ヨハネ17章17節）と言いました。私たちは、サタンの嘘を反撃する為の真理を知っていないのならば、サタンに対して上手く対抗して堅く立つことはできません。イエスはこのことについて、荒野でサタンの誘惑を受けた時に、実に素晴らしい模範を見せてくださいました。イエスは、サタンのすべての提案に対し、「と書いてある。」と答えました。

パウロは続けました。：

## 弟子をつくる指導者

胸には正義の胸当てを着け（エペソ 6:14後半）

クリスチャンとして、私たちは二種類の義について知っておくべきです。第一に、私たちは賜物として、キリストの義をいただいています（第二コリント 5:21参照）。キリストの義人という立場は、イエスを信じる者たちにも帰属するようになりました。イエスが彼らの罪を十字架の上で負ってくださったからです。そのキリストの義に立つことが、私たちをサタンの支配から解放したのです。

第二に、私たちはイエスの命令に従って、正しく生きるべきで、それこそパウロが、義の胸当てに関して思っていたことでしょう。キリストへの従順によって、私たちは悪魔に場所を与えません（エペソ 4:26-27）。

### 福音の履物による安定した足取り（Firm Footing in Gospel Shoes）

足には平和の福音の備えをはきなさい（エペソ 6:15）。

福音の真理を知り、信じ、またそれに基づいて行動することは、私たちがサタンの攻撃に対抗して、しっかりとした足取りで立てるようにしてくれます。ローマ兵が履いていた履物には、靴底にスパイクが付いており、それが彼らに戦場でしっかりとした足取りをもたらせました。イエスが私たちの主である時、私たちはサタンの嘘に対抗できる、安定した足取りを得るのです。

### 信仰—私たちの盾

これらすべてのものの上に、信仰の大盾を取りなさい。それによって、悪い者が放つ火矢を、みな消すことができます（エペソ 6:16）。

ここでも、パウロは私たちの守りの態勢を強調しています。彼は、町を支配する悪霊を私たちが引き下ろすことを話しているのではありません。彼は、悪魔の嘘に対抗する為に、私たちが神のみことばを信じる信仰を用いることについて話しています。私たちが、神の言われたことを信じ、またそれに基づいて行動する時、それは、サタンの嘘、比喩的には「悪い者が放つ火矢」と表現されていますが、そこから私たちを守る盾を持っているのと同様です。

### 私たちの霊的剣—神のみことば（Our Spiritual Sword—God's Word）

## 現代の靈的戦いについての迷信—後篇

救いのかぶとをかぶり、また御霊の与える剣である、神のことばを受け取りなさい（エペソ 6:17）。

聖書が描写する様に、救いは、私たちがサタンの束縛から解放されることが含まれます。神は、「私たちが暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました」（コロサイ 1:13）。これを知ることは、私たちがまだサタンの支配下にあるという嘘を信じない為に、私たちの心を守るかぶとをかぶる様なものです。サタンはもはや私たちの主人ではなく、イエスが主人なのです。

更に、私たちは「御霊の与える剣」を取る必要があります。それは、パウロが説明する様に、神のみことばの比喻です。私が既に触れた様に、イエスは、その御霊の剣を巧みに使う、霊の戦士の完全な模範です。荒野でイエスが誘惑を受けている間、イエスはサタンに、毎回神のみことばから直接引用して答えました。ですから、もし私たちが靈的戦いで悪魔を打ち負かそうと言うのなら、私たちは神が言ったことを知り、信じなくてはなりません。そうでなければ、サタンの嘘に陥ってしまいます。

また、イエスは「御霊の与える剣」を防衛の為に用いたことにも注目してください。私たちの様に、パウロが書いた武具は主に防衛の為である、という意見の人たちに向かって、剣は絶対に攻撃の為の武器だ、と指摘したがる人たちがいます。従って彼らは、エペソ六章十節から十二節は、攻撃的に、天の悪霊の「要塞を引き下ろす」という、私たちに課せられた責任について示している箇所である、という彼らの理論を、余り説得力はありませんが、正当化しようとしています。

明らかに、なぜクリスチャンは神の武具を身に着けるべきかについて、パウロ自身書いた（彼らが「悪魔の策略に対して立ち向かうことができるため」という）理由を読んでもみると、私たちは、彼が主に武具を防衛の為に用いることを話していることがわかります。更に、剣は攻撃の為の武器と考えられますが、それは同時に、相手の剣の攻勢を阻止し、そこから身を守る為に用いられる様に、防衛の為とも考えられます。

更に、私たちは、様々な武具について、実際は存在しない重要性をそれぞれから

## 弟子をつくる指導者

もぎ取ろうとして、比喩全体を歪めない様に注意しなくてはなりません。私たちが剣の防衛と攻撃の特性について議論し始めると、元々はそれ程詳細に渡って見ていくことを意図されていなかった単純な比喩を、私たちは細かく区分けして、「行き過ぎたたとえ話の解釈」をしてしまう傾向が往々にしてあります。

しかし、イエスは「強い人を縛り上げる」様、教えなかったか **(But Didn't Jesus Instruct Us to "Bind the Strong Man"?)**

福音書の中に三度、イエスが「強い人を縛り上げること」について触れているのを、私たちは読んでいます。しかし、それら三箇所とも、イエスは弟子たちに「強い人を縛り上げること」を、彼らがすべきこととしては教えませんでした。ここで、イエスが実際言われたことを見ながら、文脈から何を言わんとしているか読んでみましょう。

また、エルサレムから下って来た律法学者たちも、「彼は、ベルゼブルに取りつかれている。」と言い、「悪霊どものかしらによって、悪霊どもを追い出しているのだ。」とも言った。そこでイエスは彼らをそばに呼んで、たとえによって話された。「サタンがどうしてサタンを追い出せましょう。もし国が内部で分裂したら、その国は立ち行きません。また、家が内輪もめをしたら、家は立ち行きません。サタンも、もし内輪の争いが起こって分裂していれば、立ち行くことができないで滅びます。確かに、強い人の家に押し入って家財を略奪するには、まずその強い人を縛り上げなければなりません。そのあとでその家を略奪できるのです。まことに、あなたがたに告げます。人はその犯すどんな罪も赦していただけます。また、神をけがすことを言っても、それはみな赦していただけます。しかし、聖霊をけがす者はだれでも、永遠に赦されず、とこしえの罪に定められます。」このように言われたのは、彼らが、「イエスは、汚れた霊につかれている。」と言っていたからである（マル

コ 3:22-30、一部強調)。

イエスは、誰でも強い人を縛り上げる様、弟子たちに教えてはいなかったことに注目してください。むしろ、イエスはエルサレムの律法学者からの批判に、難攻不落の理論と明快な比喩をもって答えていました。

彼らはイエスが悪魔の力を使って悪霊を追い出しているとして、イエスを非難しました。イエスは、サタンが自分自身に反して働くとは愚かなことであると言って、応答しました。誰もこれについて、賢く反論できません。

もし、イエスが悪霊を追い出す為に用いたものがサタンの力ではなかったなら、イエスは誰の力を使っていたのでしょうか。それは、サタンの力よりも強い力ではなくてはなりません。それは神の力、聖霊の力でなくてはなりません。つまり、イエスは、サタンを、家財を守る強い人に例えて、比喩的にサタンについて話していたのです。その強い人の家財を奪うことができる唯一のお方は、更に強いお方、つまりイエスご自身です。これこそ、イエスがどの様にして悪霊を追い出すかについての、正しい説明でした。

強い人について記されている箇所は、マタイやルカの福音書にある類似した箇所と同様に、私たちが、町を支配する「強い人を縛り上げること」を正当化する為に用いられることはできません。更に、私たちが残りの新約聖書を見ても、町を支配する「強い人を縛り上げること」を誰かがした例は見つかりませんし、また、そうする様にどの教えがある訳でもありません。従って私たちは、どんなクリスチャンでも、町や地域を支配する「強い人の悪霊」と思われる何かを縛り上げたり、力を弱めさせようとする事は、聖書のどこにも書いていないということを結論付けてもよいでしょう。

### 「地と天でつなぐ」とはどういうことか (What About “Binding on Earth and in Heaven”?)

「なんでもあなたがたが地上でつなぐなら、それは天においてもつながれており、あなたが地上で解くなら、それは天においても解かれています」というイエスの言葉

## 弟子をつくる指導者

は、福音書の中で二度出てきます。両方共、マタイによる福音書に記録されています。

イエスは私たちに、空中にいる悪霊を「縛る」ことができること、またそうすべきであることを、教えていたのでしょうか。

まず最初に、イエスの言葉、「つなぐこと」と「解くこと」について考えてみましょう。イエスは、弟子たちが物理的なロープや紐を持ってきて、文字通り何でも縛ったり、それらのロープや紐で縛ったものを、文字通り何でも解くことを、当然意味していなかった様に、それらの言葉は勿論、比喩的に用いられています。では、イエスは何を意味したのでしょうか。

その答えの為に、イエスがつなぐことと解くことという言葉、その時何を話していたにしても、それがどう文脈の中でどう用いられていたのかを、私たちは見ていく必要があります。イエスは、悪霊という主題について話していましたか。もしそうであるなら、イエスの言うつなぐ（訳者注：あるいは「縛る」とも訳す）という言葉には、悪霊をつなぐ（訳者注：「縛る」）という意味が適用されます。

ではここで、イエスがつなぐことと解くことに最初に触れた箇所を見ていきましょう。

イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」 シモン・ペテロが答えて言った。「あなたは、生ける神の御子キリストです。」するとイエスは、彼に答えて言われた。

「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。ではわたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。わたしは、あなたに天の御国のかぎを上げます。何でもあなたが地上でつなぐなら、それは天においてもつながれており、あなたが地上で解くなら、それは天においても解かれています。（マタイ 16:15-19、一部強調）。

## 現代の靈的戦いについての迷信—後篇

この箇所は、少なくとも五つの比喩的表現が含まれているので、色々な解釈が施されてきているのも無理ありません。それらの比喩的表現とは、(1)「人間」（訳者注：この箇所の英語は「血や肉」と訳されている）、(2)「岩」、(3)「ハデスの門」、(4)「天の御国のかぎ」、そして(5)「つなぐ/解く」です。これら全ては比喩的な表現であり、何か他のことについて話しています。

### ハデスの門 (Hades' Gates)

比喩の正確な意味が何であるのかに関わらず、あなたはこの箇所から、イエスが悪霊について話していないことはわかるでしょう。イエスが用いた一番近い表現としては、「ハデスの門」という言葉ですが、それは勿論象徴的であり、文字通りのハデスの門自体は、当然のことながら、教会を弱める為は何もできません。

では、「ハデスの門」は何を表しているのでしょうか。恐らく、サタンの力の象徴で、イエスは、サタンの力はイエスの教会が建てられることを阻止できない、ということの意味したのでしょうか。もしくは、イエスはこれから建てる教会が、ハデスの門の奥に閉じ込められる運命であった人たちを救うであろうことを意味していたのかもしれない。

イエスは実際、二種類の門について触れたことに注目してください。それは、ハデスの門と、イエスがペテロに「天の御国のかぎ」を与えることで示唆している、天国への門です。この比較は、ハデスの門についてのイエスの言及が、ハデス行きの人々を救う教会の役割を表している、という考えを更に支持しています。

例え、イエスは「サタンは全ての力をもっても、イエスの教会を阻止することはできない」ということを意味していたとしても、私たちは、つなぐことと解くことについてのイエスの発言が、町を支配する悪霊について何か私たちはすべきである、ということを知っていると、結論を急ぐことはできません。その単純な理由は、私たちは、福音書や、使徒の働きに、誰かが町を支配する悪霊を縛った事例が見つかりませんし、使徒書簡にも、そのようにすることを促す教えはどこにも見つからないからです。私たちが、つなぐことと解くことというイエスの言葉をどの様に解釈しようとも、

## 弟子をつくる指導者

私たちの解釈は残りの新約聖書の文脈に沿ったものでなくてはなりません。

聖書からの事例が一つもないということを考慮すると、「イエスの御名によって悪霊を縛る」だとか、「その人の上に天使を解く」等といった言葉がよくクリスチャンの口から出て来るのには驚かされます。そのようなことを誰かが言っているのを、新約聖書の中から探しても、どこにも見つかりません。使徒の働きと使徒書簡で強調されていることは、悪魔に向かって話すことだとか、悪霊をつないだり、解いたりすることではなく、福音を宣べ伝え、神に祈ることなのです。例えば、パウロはサタンの御使い（文字通りには、「天使」）によって、何度も打ちのめされましたが、パウロはそれを「縛る」ことを試みることはしませんでした。彼はそれについて、神に祈ったのでした（第二コリント 12:7-10参照）。

### 天のかぎ (The Keys to Heaven)

イエスがつなぐことや解くことについて話した前後の文脈を、更に詳しく見ていきましょう。イエスがつなぐことや解くことに触れる直前、イエスはペテロに「天の御国のかぎ」を与えと言いました。ペテロは文字通り、天の門のかぎを与えられたことは一度もないので、従ってイエスの言葉は比喩的に使われていたに違いありません。「かぎ」は何を意味するのでしょうか。かぎは、何か施錠されたものへのアクセス手段を表しています。かぎを持っている人は、他の人たちが持っていない、ある扉を開ける手段がある、ということです。

使徒の働きの中で記録されている、ペテロのミニストリーを考えると、他の人には施錠されている扉がペテロには開けられている、と同様に考えられることで、ペテロがしたことは一体何でしょうか。

最も重要なのは、ペテロは福音を宣べ伝え、その福音はそれを信じる人全てに天の扉を開け（また、ハデスの門を閉じ）ます。その様な意味では、私たちは皆、キリストの大使として、天の御国のかぎを与えられているのです。天の御国のかぎとは、イエス・キリストの福音、つまり天の門を開くメッセージとしか考えられません。

### つなぐことと解くことについて (And Now, Binding and Loosing)



## 現代の靈的戦いについての迷信―後篇

ペテロに天の御国のかぎを与えると約束した後、遂に、イエスは、ここまで見てきた聖書箇所の中の五つ目の比喩的表現である、つなぐことと解くことについて提言しました。

私たちがもう既に見てきた箇所の文脈に沿って見ると、イエスは一体何を意味したのでしょうか。ペテロのつなぐことと解くことは、どの様にイエスはその教会を建てること、人々をハデスから救うこと、そして福音を宣べ伝えることに適用されるのでしょうか。

実際はたった一つの可能性しかありません。イエスは単に、「私が天を代表する者としての権威を与える。この地上のあなたの責任を果たせば、天はあなたを応援する」ということを意味していたのです。

もし雇用主がその営業担当に、「バンコクであなたがやることは何でも、本社でも行われる」と言ったら、その営業担当は自分の上司の言葉をどの様に解釈するのでしょうか。きっと、その営業担当は、バンコクでこの会社を代表して表す権威が与えられた、という意味に取るでしょう。イエスが意味したことの全ては、ペテロが、この地上で、天の神を表す権威が与えられたということだけです。このペテロに対する約束は、彼が、律法学者やパリサイ人という、自分たちこそ神から権威を受けた代表者だと思っている人たち、ペテロもかつてはそう思って尊敬していた人たちの批判的な眼差しのもとで、エルサレムにおいて神の福音を宣べ伝え始めた際に、ペテロの自信を支えるものであったでしょう。

イエスの言葉のこのような解釈は、最初に見たマタイの福音書の箇所の二章後に見られる、その同一の表現をイエスが二回目に使った時と、良く調和がとれています。

また、もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、行って、ふたりだけのところで責めなさい。もし聞き入れたら、あなたは兄弟を得たのです。もし聞き入れないなら、ほかにひとりかふたりをいっしょに連れて行きなさい。ふたりか三人の証人の口によって、すべての事実が確認されるためです。それでもなお、言うことを聞き入れ

## 弟子をつくる指導者

ようもしないなら、教会に告げなさい。教会の言うことさえも聞こうもしないなら、彼を異邦人が取税人のように扱いなさい。まことに、あなたがたに告げます。何でもあなたがたが地上でつなぐなら、それは天においてもつながれており、あなたがたが地上で解くなら、それは天においても解かれています。まことに、あなたがたにもう一度、告げます。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです  
(マタイ 18:15-20、一部強調)。

つなぐことと解くことに触れている二箇所目では、イエスが悪霊を縛ることについて話していると、私たちに思わせる箇所は、この文脈の中にどこにもありません。ここでは、イエスは教会の規律という主題について話した直後に、つなぐことと解くことについて語りました。

この箇所のつなぐことと解くことに関して、イエスは、「私はあなたに誰が教会に入るべきで、誰がいるべきではないかを定める責任を与える。それはあなたの仕事だ。この地上のあなたの責任を果たせば、天はあなたを応援する」といったことを意味したことを表している様です。

広義的には、イエスは単純に、「あなたは天の代表者としての權威を与えられている。あなたには責任があり、この地上でその責任を果たせば、天はあなたを応援する」ということを言っていました。

### 文脈から見るつなぐことと解くこと (Binding and Loosing in Context)

この解釈は、前後の文脈とも良く合っていると同時に、残りの新約聖書という、より広い文脈とも合っています。

前後の文脈について見てみると、イエスがつなぐことと解くことについて触れた直後に、イエスは、「まことに、あなたがたにもう一度、告げます。もし、あなた

## 現代の靈的戦いについての迷信—後篇

がたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます」(マタイ 18:19、一部強調)とされていることがわかります。

ここにも、「あなたが地上ですることは、天で応援されている」というテーマがあります。私たちは地上で、祈る権威と責任を与えられています。私たちが実行する時、天はそれに応えます。イエスの「もう一度、告げます」という言葉は、イエスがつなぐことと解くことについてその前に言及したことを、更に広げていることを示唆している様です。

イエスのこの箇所最後の言葉、「ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです」もまた、「天はあなたを応援する」というテーマに沿っています。信者たちがイエスの御名によって集まる時、天におられるイエスはそこに現れます。

例えあなたが、これまでに見てきたこの箇所の私の解釈について、全く合意できなくても、イエスが町を支配する悪霊を縛ることについて話していたという、いかにも良さそうな、聖書的と思われる議論をするには四苦八苦することでしょう。

### 神のご計画にはサタンも含まれる (God's Devine Plan Includes Satan)

サタンとその使いたちは反逆軍ですが、神の支配を超えるものではありません。この反逆軍は、(最初に造られた時は彼らは反逆的ではありませんでしたが、) 神によって造られたのです。パウロはこう書きました。

なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです(コロサイ 1:16、一部強調)。

イエスは、サタンを含む、御使いの靈の全ての階級を造られました。イエスは、逆らう者たちについて知っていたのでしょうか。勿論です。それならば、なぜイエス

## 弟子をつくる指導者

は彼らを造られたのでしょうか。それは、イエスはそれらの反逆の霊を用いて、ご計画を成就しようと考えていたからです。もしイエスが彼らに対して何の目的もなかったのなら、イエスは、反発する御使いの一部にもう既に行われたと私たちは聞かされている通りに（第二ペテロ 2:4参照）、またイエスがいつかサタンに行われる様に（黙示録 20:2参照）、単に彼らを監禁していたことでしょう。

神がサタンや全ての悪霊を地上で働かせているのには理由があります。もしイエスがそうしなかったなら、彼らは完全にその任務から降ろされていることでしょう。サタンに地上で働かせる神の理由は何でしょうか。誰も全ての理由を理解することはできないと思いますが、神は理由のいくつかをみことばの中に表しています。

第一に、神は人を試す神のご計画を成就する為に、地上に限って、サタンが活動することを許しています。サタンは、人が忠誠を尽くす対象の別の選択肢としての役割を果たしています。人々が気づいていようと、なかろうと、人々は神もしくはサタンの支配下にあります。神はアダムとエバという、神に与えられた自由意志を持つ二人の人間を試す為に、サタンが彼らを誘惑することを許可しました。自由意志を持つ全ての人は、その人の心にあるものが、従順か不従順かを明らかにする為に、試されなくてはなりません。<sup>92</sup>

第二に、神は悪者の上に神の御怒りが下る為の仲介者として、地上に限って、サタンが活動することを許しています。もうこのことは、神が悪霊を用いて、裁きを受けるにふさわしい人たちにそれをもたらした、聖書からいくつかの具体的な事例を示しながら既に証明しました。神はこの世にいる未信者の人生をサタンが支配することを許しているという事実自体が、彼らの上に既に注がれている神の御怒りの現れです。神は、悪い人間たちを、邪悪な支配者や霊的存在に彼らを支配させて、彼らの人生を更にもっと惨めにさせることで裁いています。

第三に、神は神ご自身に栄光を帰す為に、地上に限って、サタンが活動すること

---

<sup>92</sup> 92 この考えは、著者による「神からの試し」という本の中で更に詳しく議論されており、当ホームページ（[www.shepherdserve.org](http://www.shepherdserve.org)）より、英語で読むことが可能である。

を許しています。「神の子が現われたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです」(第一ヨハネ 3:8)。神がサタンの働きを打ち壊す度に、それは神の力と知恵に栄光を与えます。

**イエスは主権や権力の頭である (Jesus is the Head Over Principalities and Powers)**

クリスチャンとして、聖書の言う、サタンや悪霊を取り扱う私たちの責任には二面あります。一つは、私たち自身の生活の中で悪霊に立ち向かうこと(ヤコブ 4:7)、そしてもう一つは、解放されたいと願う人から悪霊を追い出すこと(マルコ 16:17)です。他の人から悪霊を追い出す経験のあるクリスチャンは誰でも、一般的な法則として、悪霊に取りつかれた人が解放を求めない限り、その人は悪霊を追い出すことはできないでしょう。<sup>93</sup>93 神は全ての人の自由意志を尊重し、もし人が悪霊に屈服したいのなら、神はその人を止めることはしません。

しかし、これは、私たちが地域を支配する縄張り意識の高い霊を引き下ろすことをしない、もう一つの理由です。それらの悪霊は、人々を捕らわれの身のままでいさせます。なぜなら、それがそれらの人々が選んだことだからです。福音を彼らに宣べ伝えることを通して、私たちは彼らに選択肢を与えます。もし彼らが正しい選択をすれば、サタンや悪霊からの解放をもたらします。しかし、もし彼らが誤った選択をすれば、つまり悔い改めないことを選んだのなら、神はサタンに彼らを捕えたままでいさせます。

イエスは、聖書の中で、「すべての支配と権威のかしら」と呼ばれています(コロサイ 2:10)。ギリシャ語の支配(arche)と権威(exousia)という言葉は、人間の政治的な指導者を描写する際に時々用いられますが、それらの言葉はまた、新約聖書の中で、悪霊の支配者の肩書としても用いられています。エペソ六章十二節にある、支配(arche)と権威(exousia)に対するクリスチャンの奮闘は、一つの例です。

---

<sup>93</sup> 93 この法則の例外として、人が悪霊に酷くとりつかれている為に、自由になりたいという願望を伝えられない場合である。その様な場合、御霊の特別な賜物が解放をもたらす為に必要とされ、御霊の賜物は、その御旨のままに働く。

## 弟子をつくる指導者

パウロがコロサイ二章十節にある通り、イエスをすべての支配と権威のかしらであることについて書いたことを、私たちが文脈から読む時、パウロは霊的力について語っていることは明白な様に思えます。例えば、同じ箇所の子節後に、パウロはイエスについて、「神は、キリストにおいて、すべての支配と権威の武装を解除してさらしものとし、彼らを捕虜として凱旋の行列に加えられました」（コロサイ 2:15）と書きました。

もしイエスが霊的支配と権威のかしらであるならば、イエスはそれらの上に及ぶ最高権威者ということです。異教徒のアニミズム文化に住むクリスチャンは、以前、悪霊にとりつかれることを知っていて、その悪霊に対する恐怖心から、偶像を拝む生活を送っていましたが、これは彼らにとって素晴らしい啓示です。

### 逃げる為の唯一の道 (The Only Way of Esc前半pe)

悪霊による束縛から逃げる唯一の方法は、悔い改めて、福音を信じることです。これこそ、神が与えた逃げ道です。誰も、町を支配する悪霊を縛ることはできないし、あなたを自由に、もしくは部分的に自由にもできません。その人が悔い改めて、福音を信じるまでは、その人は神の御怒りの中にとどまっており（ヨハネ 3:36参照）、それは、悪魔の力に捕えられていることを意味します。

それ故、大きな霊的戦いのカンファレンスや集会が開催された町には、何も重大な変化がありません。なぜなら、それらの地域を支配する悪魔の階級に実際の影響を与えるようなことは何も起きなかったからです。クリスチャンは、権威に向かって昼夜叫ぶことができます。彼らは、所謂「戦いの異言」で悪霊を苦しめる様試みることができます。彼らは、「私はこの町を支配する悪霊を縛る」と何百万回も言うことができます。彼らは、以上これら全てを飛行機で、屋上で、そして（ある人たちが実際やっている様に）高層ビルの最上階ですることができます。そして、悪霊たちが影響を受けるたった一つのこと、彼らが愚かなクリスチャンたちを見て、大笑いすることだけです。

では、霊的戦いについての六つ目の迷信を見て行きましょう。

迷信その六 「縄張り意識の強い霊に対しての靈的戦いは、効果的な伝道の扉を開く」 (Myth #6)

縄張り意識の高い霊に向かって、靈的戦いをすることに深く関わっている多くのクリスチャンを燃え立たせる動機は、彼らが神の御国が広がるのを見たい、という彼らの熱望です。この為に、彼らは命じられたのです。クリスチャンは皆、サタンの支配からより多くの人々が逃れるのを見たいと願うべきです。

しかし、私たちが神の御国を建て上げる為には、神の方法を用いることが重要です。神は、何が機能し、何が時間の無駄となるかご存知です。神は私たちに、神の御国を広げることについて、私たちの責任は何であるか、私たちに正確に言いました。私たちの伝道の効果を増し加える、聖書にはない何かを、イエスも、ペテロも、パウロも、彼らのミニストリーで一度も実践されなかった何かを、私たちにはできると考えることは、愚かなことです。

なぜそれ程まで多くのクリスチャンは、靈的戦いが効果的な伝道への扉を開けると考えているのでしょうか。彼らがそう考える理由は、この様な感じですよ—「サタンは未信者の人々の心を盲目にした。私たちは従って、サタンに対して靈的戦いをして、彼らを盲目にさせることを止めさせなくてはならない。一度盲目にする者が取り除かれれば、より多くの人々が福音を信じるようになる」。違いますか。

サタンが未信者の心を盲目にすることは、確かに疑いのない事実です。パウロはこの様に書きました。

それでもなお私たちの福音におおいが掛かっているとしたら、それは、滅びる人々のばあいに、おおいが掛かっているのです。 そのばあい、この世の神が不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしているのです (第二コリント 4:3-4)。

質問はこれですよ—パウロは、未信者たちがもっと福音を受け入れるようになる為に、コリントにいるクリスチャンたちが靈的戦いを行い、縄張り意識の高い霊を引き

## 弟子をつくる指導者

下ろすことをしたいと思わせるのが目的で、このような情報を彼らに与えたのでしょうか。

答えは、いくつかの明白な理由から、いいえです。

まず第一に、パウロは続けてこうは言いませんでした—「従って、コリント人よ。サタンが未信者の思いをくらませたから、私はあなた方に霊的戦いを行い、縄張り意識の高い霊を引き下ろして、その覆いを掛ける者を排除して欲しい」。むしろ、パウロが次に触れたことは、キリストについて彼が宣べ伝えていることでした。これこそが、霊的覆いを排除させる方法です。

第二に、パウロの手紙のどこにも、彼が信者たちに、伝道の効果を上げる為に、町の要塞を引き下ろすことに関わる様教えていませんでした。

第三に、パウロの手紙全てを読むと、サタンが覆いを掛けることは、未信者が信じないままにしている一番の理由ではないと、パウロが考えていたことがわかります。サタンが覆いを掛けることは、要因の一つではありますが、主なものでも、唯一のものでもありません。人々を信じさせないままにしている一番の要因は、その人たち自身の心の頑なさにあります。これは、サタンが全ての人に覆いを掛けたままでいられないという単純な理由から明らかです。ある人たちは、真理を聞くと、それを信じ、従って、それまで信じていたあらゆる嘘を拒むようになります。サタンが覆いを掛けることが彼らの不信仰の原因という訳ではなく、彼らの不信仰がサタンが覆いを掛けることを許しているのです。

### 無感覚な心 (Callous Hearts)

使徒パウロは、エペソ人への手紙の中で、なぜクリスチャンでない者たちが、不信仰のままにしているのかについて、正確に説明しました。

そこで私は、主にあって言明し、おごそかに勧めます。もはや、異邦人がむなしい心で歩んでいるように歩んではなりません。彼らは、[恐らく、サタンが覆いを掛けた為に]その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいの



## 現代の靈的戦いについての迷信—後篇

ちから遠く離れています。道徳的に無感覚となった彼らは、好色に身をゆだねて、あらゆる不潔な行ないをむさぼるようになっていきます（エペソ 4:17-19、一部強調）。

パウロは、未信者たちは、「彼らのうちにある無知」の故に、神のいのちから離れている、と言いました。しかし、なぜ彼らは無知なのでしょう。なぜ彼らの「知性において暗く」なってしまったのでしょうか。答えは、彼らの「かたくなな心のゆえ」です。彼らは「無感覚」になってしまいました。それが根源であり、人々が救われないままにいる最も大きな理由です。<sup>94</sup>彼らに責任があるのです。サタンはただ、彼らが信じたい嘘を提供しているだけです。

イエスの種を蒔く人と土のたとえ話は、この考えを完全に表しています。

「種を蒔く人が種蒔きに出かけた。蒔いているとき、道ばたに落ちた種があった。すると、人に踏みつけられ、空の鳥がそれを食べてしまった…このたとえの意味はこうです。種は神のことばです。道ばたに落ちるとは、こういう人たちのことです。みことばを聞いたが、あとから悪魔が来て、彼らが信じて救われることのないように、その人たちの心から、みことばを持ち去ってしまうのです（ルカ 8:5、11-12）。

ここで種は福音を表していますが、その種が道ばたに落ちて、踏みつけられました。人が通るところの硬い土に、種が入ることができませんでした。従って、鳥というサタンの象徴にとっては簡単に、種を盗めました。

たとえ話全体の要点は、人々の心の状態（と神のみことばに対する受容力）を色々な種類の土で比較することにあります。イエスはなぜある人々は信じ、またある人々は信じないかを説明していました。それは、彼ら次第なのです。

サタンはこの描写においてどの様に影響を与えているのでしょうか。サタンはた

---

<sup>94</sup> 94 ローマ 1:章 18 から 32 節にある、パウロの未信者についての描写は、またこの同様の考えを支持している。

## 弟子をつくる指導者

だ、頑なな心を持つ人から、みことばを盗むことしかできません。たとえ話の中の鳥は、種が発芽しなかった二次的な原因に過ぎませんでした。第一の問題は、その土にありました。実際、土の硬さが、鳥に種を取らせてしまいました。

同様のことが福音にも言えます。本当の問題は、自由にモラルを持つ人たちの頑なな心にあります。人々が福音を拒む時、彼らは覆われたままでいるという選択をしています。彼らは真理よりも、嘘を信じることを好んでいます。イエスはこのような言い方をしました—「光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行ないが悪かったからである」（ヨハネ 3:19、一部強調）。

もしサタンが彼らに覆いを掛けることさえ止めれば、人々は誠実で、良い心を持っており、きっと福音を信じるでしょう、ということを聖書は私たちに信じる様には導いていません。反対に、聖書は人間の本質について、非常にぼんやりとした絵を描いており、神は全ての人にその罪深い選択の責任を負わせます。裁きの御座に座る神は、「悪魔が私にそうさせました」という誰の言い訳も受け入れません。

### サタンはどの様にして人々の思いに覆いを掛けるのか (How Satan Blinds People's Minds)

実際サタンはどの様にして人々の思いに覆いを掛けるのでしょうか。サタンは、人々の心に彼らの理解力を鈍くさせるものを注ぐといった、ある神秘的な霊の力を持っているのでしょうか。悪霊は彼らの脳に爪をめり込ませて、理性的な思考回路を効果的に省くのでしょうか。いいえ、サタンは彼らが信じる嘘を提供することで、人々の思いに覆いを掛けるのです。

明らかに、もし人々が、イエスは彼らの罪の為に死なれた神の御子であるという真理を本当に信じたのならば、また、もし彼らが自分たちの人生について説明する為に、いつか神の御前に立たなくてはならないことを本当に信じたのなら、彼らは悔い改めて、イエスに従う者となるでしょう。しかし、彼らはそれらのことを信じないのです。しかし、彼らは何かを信じています。神はいない、とか、死後に命はない、と信じているかもしれません。輪廻転生や、神は決して誰をも地獄へは送らないと信じ

## 現代の靈的戦いについての迷信—後篇

ているかもしれません。宗教活動が天国へ行かせると思っているかもしれません。しかし、何を信じているようと、もしそれが福音でないのなら、それは一言でまとめられます。嘘です。しかし、もし彼らがへりくだって、真理を信じるなら、サタンはもはや彼らに覆いを掛けることはできなくなります。

### 暗やみの嘘 (The Lies of Darkness)

サタンの王国のことを、聖書では「暗やみの圧制」(コロサイ 1:13)と呼んでいます。暗やみは、勿論、真理の欠如、つまり、光もしくは正しい知識の欠如を表しています。あなたが暗やみにいる時、あなたは想像しながら進みますが、大抵、最後には怪我をするのが落ちです。サタンの暗やみの王国はその様な感じですが。そこにいる人たちは、自分たちの人生の道筋を想像で決めており、その想像はサタンの嘘で溢れています。彼らは靈的な暗やみにいるのです。

サタンの王国は、はっきりとわかる境界線を持つ、地理上の王国としてではなく、信念の王国として定義されるのが一番適当です。信念は、嘘の中にあります。暗やみの王国は、光の王国と同じ場所に位置しています。真理を信じる人たちは、嘘を信じて生きる人たちの間で、正しく生きます。<sup>95</sup>私たちの第一の仕事は、真理を、既に嘘を信じている人たちに宣言することです。誰かが真理を信じる時、サタンはもはやその人をだますことができなくなるので、サタンは自分の臣下の一人を失うことになります。

従って、私たちが未信者をサタンから解放させるのは、彼らを支配する悪霊を「縛ること」によってではなく、真理を宣言することによってなのです。イエスは、「あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします」(ヨハネ 8:32、一部強調)と言いました。靈的な覆いは、真理によって取り除かれます。

ヨハネによる福音書の同じ箇所、イエスは未信者の聴衆に向かって言いました。

あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あ

---

<sup>95</sup> 95 様々な地理上の地域で、当然のことながら、どちらかの王国により多い、または少ない割合で人々がいるのは事実である。

## 弟子をつくる指導者

なたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。しかし、このわたしは真理を話しているために、あなたたちはわたしを信じません（ヨハネ 8:44-45、一部強調）。

イエスは、ご自身を悪魔と対比させていたことに注目してください。イエスは真理を語り、サタンは最大の嘘つきです。

また、イエスは聴衆に、彼らは彼らの父、悪魔のものであることを言われ、またサタンを偽り者として明らかにしましたが、イエスはそれでも彼らにイエスが語った真理を信じる責任を与えました。彼らに覆いが掛けられたのは、悪魔のせいではなく、それは彼ら自身のせいでした。イエスは彼らに責任を負わせました。サタンは「暗やみを愛する」人々が暗やみに留まる様、彼らが信じる嘘を提供することで支援しています。しかし、サタンは真理を信じるどんな人をもだますことはできません。

以上のことから、暗やみの王国を押し返す第一の方法は、光、つまり神のみことばの真理を広げることによってです。だから、イエスは私たちに、「世界中に出て行って、悪魔を縛ってきなさい」とは言わず、「世界中に行って、福音を宣べ伝えなさい」と言いました。イエスはパウロに、宣教の目的は、人々の「目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ」（使徒の働き 26:18、一部強調）る為であると言いました。これは、人々が福音の真理に触れて、暗やみから光に立ち返る決心をし、嘘よりも真理を信じるようになる時、彼らはサタンの支配を脱出する、ということを明らかにしています。私たちが「引き下ろす」唯一の要塞は、人々の思いに建て上げられた嘘の要塞です。

### これは神のご計画である (This is God's Plan)

神がサタンを天から地へ追放したことを忘れないでください。神は、サタンを宇宙のどこにでも置くことができましたし、永遠に監禁することもできました。しかし、

## 現代の靈的戦いについての迷信—後篇

神はそうしませんでした。なぜでしょうか。それは、神はその最終的な目的の為にサタンを用いたかったからです。その目的とは、いつかの日か、神を愛し、神に仕えることを選んだ、自由にモラルを持つ人たちの集まる、大きな家族を作ることです。

もし神が、神を愛する子供たちの家族が欲しかったのなら、二つのことが要求されたでしょう。第一に、愛の基礎には自由意志がある為に、神は自由意志を持つ人々を造らなくてはなりません。ロボットや機械は愛することはできません。

第二に、神は人々が神への従順または不従順、神を愛するか、もしくは神を憎むかの選択に直面させられる環境にて、彼らを試さなくてはなりません。自由にモラルを持つ者たちは試されなくてはなりません。そして、もし忠誠についての試があるのなら、不忠実への誘惑もあるに違いありません。結果として、私たちは、神がなぜサタンを地上に置いたのか、わかるようになってきます。サタンは、人間の忠誠の対象の別の選択としての役割もあります。サタンは（ある決められた範囲内で）彼の嘘を受け入れる人には誰にでも影響を与えることが許されています。皆この様な選択に直面します—私は神を信じるつもりか、それともサタンを信じるつもりか。私は神に仕えるつもりか、それともサタンに仕えるつもりか。人々がそれを気づこうと気づきまいと、彼らは既に決断をしたのです。私たちの仕事は、悔い改め、福音を信じ、正しい決断をすることにあって、誤った選択をしてしまった人々を励ますことです。

これがエデンの園で起きたことではないですか。神は善悪の知識の木をそこに置き、アダムとエバにその木から食べることを禁じました。もし神が彼らにそれから食べて欲しくなかったのなら、なぜ神はそれをそこに置いたのでしょうか。答えは、それは試しとしての役割があった、ということです。

私たちはまた、サタンがエバを誘惑することを神から許されたということにも気づいています。繰り返しになりますが、もし忠誠が試される為であるなら、そこには不忠実となる誘惑もあるに違いありません。サタンはエバに嘘をつき、エバは彼を信じました。それと同時に、彼女は神が言われたことを信じない決心をしました。結果はどうだったのでしょうか。一番最初の自由にモラルを持った人たちは、彼らの心に不

## 弟子をつくる指導者

忠実があることを現しました。

同様に、自由にモラルを持つ人は各人、その人が生きている間中試されます。神は、神の創造を通してご自身を現し、それで皆、素晴らしい神が存在することを見ることができます（ローマ 1:19-20参照）。神は私たちに一人残らず良心を与え、私たちの心で、私たちは正しいことと間違いを区別できます（ローマ 2:14-16参照）。サタンとその悪霊は、限られた方法で、人々に嘘をつき、誘惑することが許されています。結果として、自由にモラルを持つ人は皆、試されるのです。

悲しいことに、実際のところ、自由にモラルを持つ人は皆反抗的であり、「神の真理を偽りと取り換え」（ローマ 1:25）てしまっています。しかし、神は私たちの罪の為の贖いと神の家族に生まれる道を備えてくださった故に、私たちは神に感謝できます。イエスの犠牲的な死は、唯一、全てに十分な、私たちの問題に対する答えです。

### サタンの惑わし—今とこれから (Satan's Deception, Now and Later)

それで私たちは、なぜ悪魔とその反逆軍がこの惑星で活動することが許されたかについて、少なくとも一つの理由がわかります。それは、暗やみを愛する人たちをだます為です。

黙示録によると、サタンはいつか御使いによって縛られ、千年間封印されるというのを私たちが考慮する時、この真理が正当であることをより一層確認できます。サタンの監禁の理由は何でしょうか。「それが諸国の民を惑わすことのないように」（黙示録 20:3）です。その千円間、イエスは世界をエルサレムから個人的に支配するようになります。

しかし、千年が過ぎると、サタンは短い期間解き放たれます。結果どうなるのでしょうか。サタンは、「地の四方にある諸国の民…を惑わすために出て行き」（黙示録 20:8）ます。

もし神がその時、サタンに人々をだまして欲しくないのであれば、なぜ神はサタンを解き放ったのでしょうか。特に、神は元々、「それが諸国の民を惑わすことのないように」サタンを封印したという事実を考慮すると、一体なぜでしょうか。

## 現代の靈的戦いについての迷信—後篇

神は、勿論、サタンがこれ以上決して誰もだまさない、という方を好むでしょう。しかし、神は、サタンがだますことができる唯一の人々は、神ご自身が言ってきたことを信じない人たちであることを知っています。サタンは、真理を拒む人たちだけをだますことができるだけで、それ故、神はサタンに今活動すること、また後に活動することを許しています。サタンが人々をだます時、人々の心の状態は明白とされ、従って神は「麦を毒麦から」区別することができます（マタイ 13:24-30参照）。

これこそ、千年王国の最後にサタンが解き放たれる時に、実際に起こるであろうことです。サタンは、暗やみを愛する人たちを皆だまし、キリストの統治を覆そうと、エルサレム周辺に彼らの軍隊を招集します。神は誰が神を愛し、誰が神を憎むか、正確にご存知です。従って、神は直ちに「彼らを焼き尽くす」「天から火」（黙示録 20:9）を降らせるでしょう。他にも色々ある理由の中で、この理由から、私たちには「縄張り意識の高い霊を引き下ろす」ことができると考えることは愚かなことです。神が、ご自身の諸々の理由により、それらの霊たちが仕事をするのを許しているのです。

### 聖書に基づく伝道 (Biblical Evangelism)

ある人たちは、靈的戦いこそ、今日効果的な伝道をするのにまだ欠けている鍵であると主張していますが、明白な事実、イエスも新約聖書の使徒たちも、この種の靈的戦いをしなかったということです。私たちは、イエス、ペテロ、ヨハネ、ステパノ、ピリポ、またはパウロが、彼らの宣教した町の「要塞を引き下ろ」したり、「強い人を縛り上げる」ことをしているのを見つけたことはありません。むしろ私たちは、神がどこで彼らに宣教して欲しいのかについて、彼らは聖霊に従ったことを見つけます。私たちは、彼らが単純な福音、つまり、悔い改めとキリストへの信仰の勧めを宣べ伝えているのを見ます。また、彼らが素晴らしい結果に喜んでいるのを見ます。そして、福音を拒む、受容力のない人たちに宣教した場合、私たちは、彼らが「サタンが人々の思いに覆いを掛け続けられない為に、靈的戦いをやっている」のを見ていません。むしろ、私たちは彼らが、イエスの命令に従って「足のちりを払い落として」次の町へ行くのを見ます（マタイ 10:14; 使徒の働き 13:5参照）。

## 弟子をつくる指導者

「要塞を引き下ろす」とか「強い人を縛り上げる」ということを主張する人たちは皆、それらが伝道を成功させるには欠かせないものと主張していますが、その一方で、教会の歴史には、この様な「霊的戦い」が一度も行われていないところで、何千もの偉大なりバイバルがあるというのは驚きです。

「しかし、私たちの手法は利きます！」とある人は言うでしょう。「この種の霊的戦いをするようになってから、以前よりももっと人が救われてきています。」

もしそれが本当なら、どうしてだか教えましょう。それはなぜなら、同時に、もっと聖書に基づいた祈りと伝道をしてきたのか、もしくは、ある人々のグループが突然、福音に対してもっと受け入れるようになったからです。

もし伝道師があなたに、「今晚、私がリバイバル礼拝で説教する前に、私は密かに三本のバナナを食べました。そして私が説教すると、十六人の人が救われました！私はずいぶん効果的な伝道の鍵を見つけました！これからは、私はいつも説教前に三本のバナナを食べるつもりです！」と話したら、あなたは何と言うでしょうか。

当然あなたはその伝道師に向かって、「あなたが三本バナナを食べたことと、十六人救われたことは何の関係もありません。あなたの成功の鍵は、あなたが福音を宣べ伝えたことと、十六人の人たちが福音を受け入れやすい心で聞いていたことにあります。」

神はみことばを尊重します。もし神が約束を与え、誰かがその特定の約束に対して条件が満たされていれば、例えその人が聖書とは関係のない他のことをやっても、神はその約束を守ります。

現代の霊的戦いの活動についても同じことが言えます。もしあなたが小冊子を配り、あなたの町を支配する「強い人を縛り」始めるなら、ある程度の割合の人は救われるでしょう。そしてもしあなたが、強い人を縛ることなく、小冊子を配り出すことだけを始めれば、同じ割合の人が救われるでしょう。

**霊的収穫の為の聖書に基づいた祈り方 (How to Pray Scripturally for a Spiritual**

**Harvest)**



## 現代の靈的戦いについての迷信—後篇

私たちは未信者の人たちのためにどの様にして祈るべきでしょうか。第一に、新約聖書には、神が人々を救う様に、と祈る教えは一つもないこと、また、その様な祈りを初代教会がした記録も一つもないことを私たちは知るべきです。その理由は、神の立場から言うと、神は世界の全ての人が救われる為に神がなす必要のある全てのことを既に成したからです。神は人々が救われて欲しいと余りにも願う故、御子を十字架の上で死なせる為にお捧げになったのです。

しかし、なぜ全ての人はまだ救われていないのでしょうか。それは、全ての人がまだ福音を信じていないからです。ではなぜ彼らはまだ信じていないのでしょうか。それには理由が二つだけあります。(1) 彼らはまだ一度も福音を聞いたことがないか、(2) 福音を聞いたけれども、それを拒んだ為です。

それが故に、未信者の為に祈る聖書に基づいたやり方は、彼らに福音を聞く機会がある様に祈ることです。例えば、イエスは「実りは多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主に、収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい」(ルカ 10:2、一部強調) と、私たちに言いました。人々が福音を聞く為に、また救われる為に、誰かが彼らに福音を伝えなくてはなりません。だから、彼らに人を送って下さる様神に祈るべきです。

初代教会が靈的収穫の為に祈った時、彼らは「あなたのしもべたちにみことばを大胆に語らせてください。御手を伸ばしていやしを行なわせ、あなたの聖なるしもべイエスの御名によって、しるしと不思議なわざを行なわせてください」(使徒の働き 4:29-30、一部強調) と祈りました。

彼らは、(1) 福音を大胆に語る機会の為に、もしくは (2) 彼らに与えられると知っていた機会を用いて福音を語る大胆さを求めていました。彼らはまた、神がいやしや、しるしと不思議をもって福音を確かなものとしてくださることを期待していました。これらは聖書に基づいた祈りであり、目的は人々に福音を聞かせる機会を与えることであったことに注目してください。神は彼らの祈りに答えました。「彼らがこう祈ると、その集まっていた場所が震い動き、一同は聖靈に満たされ、神のことばを大

## 弟子をつくる指導者

胆に語りだした」（使徒の働き 4:31）とある通りです。

霊的収穫について、クリスチャンはどう祈るべきであるかとパウロは考えていたのでしょうか。パウロは彼らに、もっと人々を救ってくださる様、神に求めなさいと教えましたか。いいえ、違います。彼が言ったことを読んでみましょう。

終わりに、兄弟たちよ。私たちのために祈ってください。主のみことばが、あなたがたのところと同じように早く広まり、またあがめられますように（第二テサロニケ 3:1、一部強調）。

また、私が口を開くとき、語るべきことばが与えられ、福音の奥義を大胆に知らせることができるようにも私のためにも祈ってください。私は鎖につながれて、福音のために大使の役を果たしていません。鎖につながれていても、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください（エペソ 6:19-20、一部強調）。

人々が今救われているかどうかは、神にではなく、彼らにかかっています。従って私たちは、人々が福音を聞き、私たちがそれを語るのを神が助けてくださる様に祈るべきです。なぜなら、神は人々に自分たち自身の選択をする権利を与えているからです。彼らの救いは、彼らの福音に対する応答にかかっています。

### 迷信その七 「クリスチャンが罪を犯すと、その人の中に悪霊を招き入れる扉を開けてしまう」（Myth #7）

クリスチャンが罪を犯すのは、悪霊からの誘惑に負けてしまったからかもしれない、ということは正しいです。しかし、悪霊の提案に屈服することによって、悪霊自身がその信者の中に入れるようになることを意味していません。クリスチャンとして私たちが罪を犯す時、私たちが神に不従順となった故に、私たちが神との交わりを断ってしまうこととなります（第一ヨハネ 1:5-6参照）。私たちは罪悪感を持ちます。しかし、神との関係を断った訳ではなく、私たちは依然として神の子供たちなのです。

私たちは罪を告白するならば、「神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、

## 現代の霊的戦いについての迷信―後篇

すべての悪から私たちをきよめてくださいます」(第一ヨハネ 1:9)。そして、私たちの神との交わりは回復されます。ヨハネは、わたしたちが罪を犯して宿ってしまった悪霊を追い出す必要がある、とは言わなかったことに注目してください。

クリスチャンは皆、世や自分の肉、また悪魔から日々受ける誘惑に直面させられています。私たちには確かに様々な悪霊に対する格闘があることをパウロは書きました(エペソ 6:12参照)。従って、ある程度、全ての信者は悪霊から嫌がらせを受けています。それは普通であり、私たちの責任は、悪魔と悪霊に神のみことばを信じる信仰によって立ち向かうことです(第一ペテロ 5:8-9参照)。私たちが信じて、神が言ったことに基づいて行動する時、それは悪魔に立ち向かっていることとなります。

例えば、サタンが鬱の思いをもたらすなら、私たちは鬱に対抗する聖書の言葉について考え、また「いつも喜び」(第一テサロニケ 5:16)、「すべてのことに感謝する」(第一テサロニケ 5:18)という神のみことばに従うべきです。神のみことばに基づいて行動し、サタンの思いを神の思いと交換するのは、私たちの責任です。

私たちは、自由にモラルを持つ人として、私たちが考えたいことについて何でも考えることができる、ということを知っていなければなりません。もし信者が悪霊からの提案を聞くことを常に選び、それに甘んじるならば、その人は確かに自分の思いを憂鬱にさせる様に自分自身を開いており、それは結局、間違っただけの思いを自分の中にもっと受け入れ、それにもっと支配される状態を作っているに過ぎません。もしその人が更に甘んじることを撰ぶのなら、ある間違っただけの種類の考えに固執するようになり、それはクリスチャンには非常に稀なことですが、起こり得る話です。その時でさえ、もしそのような思いにとりつかれたクリスチャンが解放されることを求めるのであれば、その人がしなくてはならないことは、神のみことばについて考え、みことばに自分を明け渡すと決心し、悪魔に立ち向かうことです。

しかし、その人は悪霊に取りつかれる、ということはあるのでしょうか。もし誰からも強いられることなく、キリストを拒み、完全に背を向けることを意思をもって、心からするならば、それはあります。そして、勿論、その人はもはやクリスチャンで

## 弟子をつくる指導者

はないでしょうから<sup>96</sup>、従って、もしその人が自分を虐げる悪霊に更に自分自身を明け渡すことをすれば、その人が悪霊に取りつかれる可能性はあります。しかし、それは一つの罪を犯すことで悪霊をあなたの中に招き入れる扉を開けることになるという考えからは程遠いです。

新約聖書には、悪霊に取りつかれるクリスチャンの例は一つもないことは事実です。また、クリスチャンに向かって、悪霊を招き入れる危険性について警告している箇所も一つありません。更に、仲間のクリスチャンから悪霊を追い出す方法についての教えもどこにもありません。

真理は、クリスチャンとして、私たちの中から悪霊を追い出す必要はありません。私たちが必要なのは、神のみことばで思いを一新させることです。これこそ、聖書的です。パウロはこう書きました。

この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまを知るために、心の一新によって自分を変えなさい（ローマ 12:2）。

私たちの思いが、古い思考パターンから一掃され、神のみことばの真理で新しくされれば、私たちは罪深い習慣に勝利することができ、キリストの様な生き方を常に表すことができます。真理は私たちを自由にするものです（ヨハネ 8:32）。私たちは、全ての悪霊を追い出すことによってではなく、思いを新しくすることで、変えられていきます。

それではなぜ、悪霊（たち）に取りつかれていた多くのクリスチャンたちが、それらを追い出したという証が多くあるのでしょうか。一つの可能性は、彼らは悪霊が自分たちの中において、それはちょうど追い出された、と単に想像していたということ

---

<sup>96</sup> 96 「一度救われれば、いつも救われている」という立場を取る人たちは、当然これには同意しない。そのような人たちには、ローマ 11:22、第一コリント 15:1-2; ペリピ 3:18-19; コリント 1:21-23、そしてヘブル 3:12-14 を読む様に勧める。その際、「もし」という言葉が見つかったら、それらの箇所全てに特に注意を払って欲しい。

## 現代の靈的戦いについての迷信—後篇

です。多くのクリスチャンはだまされやすく、神のみことばの知識に欠けているので、自分たちが悪霊を持っていると思うように人々を心理的に操る「悪魔祓いのミニスター」の格好の餌食なのです。人々は、自分たちの内に悪霊が住んでいると説得されると、悪霊を追い出すのに自信のある様に見える人と協力することは自然なことです。

もう一つの有力な可能性は、その様に悪霊を追い出してもらった人たちは、解放された時に、自分たちはクリスチャンであったと思っていますが、実際はキリストにある真の信者ではなかった、ということです。聖書的福音とは全く対照的な現代の福音は、多くの人に、クリスチャンではない人たちとそれ程区別がつかず、またイエスが彼らの主ではないにもかかわらず、彼らはクリスチャンである、と思い込ませています。聖書には、人々が福音を信じ、生まれ変わった時、その人たちの内にいた悪霊は自動的に追い出されます（使徒の働き 8:5-7参照）。悪霊は聖霊が宿る人たちに取りつくことはできません。聖霊は生まれ変わった全ての人の中に住まわれます。

**迷信その八 「町の歴史を学ぶことで、どの悪霊がそこを支配しているか決定でき、従って、靈的戦いにおいて、また最終的には伝道において、より効果的となる (Myth #8)**

この迷信は、聖書にはない、いくつかの考えに基づいています。その様な考えの一つは、縄張り意識の高い霊が長い間留まっているというものです。即ち、ある地域に数百年に渡り住んでいた霊たちが、まだそこにいると仮定されています。つまり、もしある町が貪欲な人々によって見つけられたのなら、その町には今日も、貪欲な霊が支配していると結論付けられるのです。もしその町がかつて原住民の村であったのなら、その町には今日も、シャーマニズムと魔術の霊が支配していると結論付けられるのです。その様な感じで続きます。

しかし、ある地域に何百年以上にも渡って住む同じ悪霊の権威や権力が、今日もそこにいる、というのは本当でしょうか。そうかもしれませんが、そうとも限りません。

私たちがダニエル書第十章から見ていった話を考えてみてください。「ペルシヤ

## 弟子をつくる指導者

の君」と戦う為にミカエルに助けられた名もない天使が、ダニエルに、「今は、ペルシヤの君と戦うために帰って行く。私が出かけると、見よ、ギリシヤの君がやって来る」（ダニエル 10:20、一部強調）と言いました。歴史を見ると、ペルシヤ帝国はアレクサンドロス大王の遠征により滅亡したことがわかります。しかし、この名もない天使は、霊の領域において、目前に迫った、付随して起こる変化である、「ギリシヤの君」がやって来ることを知っていました。

ギリシヤの君が実際に来た時、ペルシヤ王がペルシヤ帝国の霊の領域を支配していた様に、ギリシヤの君はギリシヤ帝国を支配する霊の領域を支配したのでしょうか。それは理にかなった結論の様に思えますが、もしそうであるならば、ギリシヤ帝国がペルシヤ帝国の全ての領土を実際に占領したので、階級の高い悪霊は地理的場所を変えたということになります。地上に政治的变化がある時、暗やみの王国にも変化がある可能性はあります。しかし事実としては、神が私たちにそれを示さない限り、私たちにわかりません。

とにかく、ある地理的領域をどんな悪霊が支配しているか、ということは、既に証明されている通り、私たちがそれについて「霊的戦い」を通してできることは何もないので、大した違いをもたらしません。

### 区分しすぎる悪霊 (Over-Categorizing Evil Spirits)

更に言うと、特定の罪に特化して治めている霊がいる、と考えることは、私たちの思い込みです。「食欲の霊」、「姦淫の霊」、「宗教の霊」、「競争の霊」等があるという考えは全て聖書にはなく、まして、それらの異なる種類の霊は、暗やみの王国を支配する悪霊の中でも高い階級に存在するという考えは尚更ありません。

四つの福音書を詳しく勉強したことのない人たちにとっては驚く様なことですが、イエスが追い出した特定の種類の悪霊はたった三種類しかありません。一つは、「おしの悪霊」（ルカ 11:14）で一度、「おしとつんぼの霊」（マルコ9:25）も一度、「汚れた霊」は一度以上聖書の中に出てきますが、汚れた霊は、「おしとつんぼの霊」さえも含む、イエスが追い出した全ての悪霊が含まれる様です（マルコ 9:25参照）。

## 現代の霊的戦いについての迷信―後篇

「おしとつんぼの霊」は、誰かをおしとつんぼにする以外にできることはあるのでしょうか。その霊はマルコ第九章の男の子に酷いてんかん発作を起こさせていたことから考えても、それができることは間違いありません。従って、「おしとつんぼの霊」は、特定の種類の霊を意味しているのではなく、むしろ単純に、どの様にしてある個人に対してその霊が害をもたらすか、ということを示しているのかもしれませんが。私たちの中には、悪霊のことになると、聖書が啓示していることを遥かに超えて、「区分気違い」になってしまっています。

旧約聖書全体の中では、名付けられている特定の霊はいくつかだけあり、恐らくそれらは特定の悪霊として考慮されるかもしれませんが、それらは、「偽りを言う霊」（第一列王記 22:22-23）、「よろめく霊」（イザヤ 19:14）、そして、「姦淫の霊」（ホセア 4:12; 5:4）です。最初の二つの霊については、確かに全ての悪霊は「偽りを言う霊」であり、「よろめく霊」であると言えるかもしれません。三つ目については、「姦淫の霊」という言葉が特定の悪霊を示している訳ではなく、単に流行りの態度を表していたのかもしれませんが。<sup>97</sup>

使徒の働き全体で、特定の悪霊について触れられているのは、十六章十六節だけで、そこには若い女が「占いの霊」につかれていることが書かれています。また、全使徒書簡の中では、ある特定の悪霊はたった一種類、「惑わす霊」（第一テモテ 4:1）が記されていますが、これも、あらゆる悪霊の描写ともなり得るものです。

聖書の中には、特定の種類の悪霊への言及がこれ程少ない事実と照らし合わせた上で、人々の中に宿ったり、町々を支配したりする何百種類もの悪霊が含まれた現代のリストに目を通すと、ただ驚いてしまいます。

私たちは、特定の罪による、もしくは悪霊の階級の高さによるいかなる区分も、

---

<sup>97</sup> 97 民数記 5 章 14 から 30 節にある「ねたみの心」と箴言 16 章 18 節にある「心の高慢」の「心」（訳者注：英語では「霊」（*spirit*）という言葉は、実際の悪霊ではなく、心を支配しているある種の態度を表す為に使われている。民数記 14 章 24 節では、カレブが「違った心」（訳者注：英語では、「違った霊」（*different spirit*））を持っていたと書いてあるが、それは明らかに、カレブの良い態度を表している。

## 弟子をつくる指導者

あると思ひ込むべきではありません。「この町にはあまりにも多くのギャンブルがはびこっているから、ここはギャンブルの霊が支配しているに違いない」と言うことは、単なる思ひ込みです。

### 喫煙の霊？ (Smoking Spirits?)

誰かが現れて、この様なことを言うことが何と愚かなことか、想像してみてください—「この町には、たくさんの喫煙の霊がいるに違いない。なぜなら、余りにも多くの人がこの町で煙草を吸っているのだから。」これらの「喫煙の霊」は、町が存在する前は一体何をしていたのでしょうか。どこにいたのでしょうか。タバコが喫煙の為に使われる前は、それらは何をしていたのでしょうか。今喫煙者が減少している理由は、これらの古い「喫煙の悪霊」が次々と死んでいったからでしょうか、それとも新しい領土に移ったからでしょうか。

私たちが、「この町は情欲の霊に支配されている。だから、とても多くの売春宿があるのだ」といったようなことを口にする時、何とも愚かであるかがおわかりですか。人々がキリストに仕えていないところはどこでも、そこには暗やみの王国が存在することは真理です。多くの悪霊は、その対象が罪を犯し、神に反発し続ける様に誘惑しますが、それらの霊は暗やみの領域で活動します。それらの霊は、罪のあらゆる分野に人々を誘惑し、ある場所では、人々は他の罪よりもある特定の罪により一層自分たち自身を明け渡しています。彼らの唯一の希望は、私たちが宣言する様に召されている福音です。

例え、ある特定の罪に特化し、ある地理的領域を支配する悪霊の種類が具体的にあったとしても、私たちがそれを知ることは何の助けにもなりません。なぜなら、私たちがそれらの霊を取り除く為にできることは何もないからです。私たちの責任は、(聖書に基づいて) 惑わされている人たちの為に、またその様な人たちに福音を宣べ伝える為に祈ることです。

ある町を最も支配する罪についてわかることで、唯一良いことは、私たちがそこに住む未信者に対して、神の御前で罪と見なされるものを具体的に名指しすることに



## 現代の靈的戦いについての迷信—後篇

より、より説得力のあるメッセージを宣べ伝えられることです。しかし、それを決めるのに町の歴史を調査する必要はありません。短い期間訪れ、目と耳をしっかりと開いて観察することだけが必要です。そこを支配している罪はすぐに明白になります。

最後に、新約聖書には、靈的戦いまたは伝道の準備の為に、誰かが「靈的マッピング」をしている例はありません。また使徒書簡にもそうすることを促す教えはありません。新約聖書で使徒たちは、どこで宣教するかについて聖霊に従い、忠実に福音を宣言し、人々に悔い改めを命じて、みことばをしるしが伴うことによって確かなものとしてくださる様にと、主に頼りました。彼らのやり方はかなり良く機能していました。

### 迷信その九 「クリスチャンの中には、世代、もしくはサタンののろいから解放される必要のある人たちもいる」 (Myth #9)

「世代ののろい」の考えは全て、旧約聖書の以下の四箇所から来ており、それら全ては基本的に同じことを言っています。それらの箇所は、出エジプト二十章五節と三十四章七節、民数記十四章八節、そして申命記五章九節です。まずは民数記十四章八節を見ていきましょう。

主は怒るのにおそく、恵み豊かである。咎とそむきを赦すが、罰すべき者は必ず罰して、父の咎を子に報い、三代、四代に及ぼす（一部強調）。

この聖書箇所を私たちはどの様に解釈すべきでしょうか。それは、神はのろいを置くことなのか、それとも人の親、祖父母、高祖父母の罪の為に、神は誰かにのろいを与えたり、誰かを罰する、という意味なのでしょう。私たちは、誰かがイエスを信じる時、神はその人の罪を赦しますが、しかし、その同じ人を高祖父母の罪で罰するというのを信じなくてはいけないのでしょうか。

絶対にそんなことはありません。そうでなければ、神は著しく不当で、偽善であることを、当然ながら非難されてしまいます。神ご自身が、誰かがその人の親の罪の為に罰せられることは、道徳的に正しくないことを語られています。

## 弟子をつくる指導者

あなたがたは、『なぜ、その子は父の咎の罰を負わなくてよいのか。』  
と言う。その子は、公義と正義とを行ない、わたしのすべてのおきてを守り行なったので、必ず生きる。 罪を犯した者は、その者が死に、子は父の咎について負いめがなく、父も子の咎について負いめがない。正しい者の義はその者に帰し、悪者の悪はその者に帰する（エゼキエル 18:19-20、一部強調）。

更に、モーセの律法の下で、神は、父にもその子にも、相手の罪の為に罰を負わせるべきではないと命じました。

父親が子どものために殺されてはならない。子どもが父親のために殺されてはならない。人が殺されるのは、自分の罪のためでなければならない（申命記 24:16）。

愛と義なる神が、誰かをその祖先の罪の為にのろったり、罰したりする可能性は全くありません。<sup>98</sup>98 そうであるならば、神は「罰すべき者は必ず罰して、父の咎を子に報い、三代、四代に及ぼす」と言う時、聖書は一体何を意味しているのでしょうか。

それは、神は人々がその子孫の前に示してしまった罪深い模範に対して責任を問う、また従って、神は彼らの及ぼした影響によって、その子孫が犯す罪に対しても部分的に責任を問う、ということの意味しているとしか考えられません。神は人々に、その悪い影響を与えた故に、彼らのひ孫たちの罪までも、部分的に責任を負わせます！ それ程、神は聖いお方なのです。そして誰も神がそうなさることに対して不正である

---

<sup>98</sup> 98 これは、子供たちは親の罪の為に苦しめられない、とは言っておらず、実際それはよくあることである。しかし、子供たちが親の罪で苦しめられる時、神がそれらの子供たちをその親の罪の為に罰している、ということを示しているのではなく、人々は余りにも邪悪で、彼ら自身の子供たちがそれによって苦しめられることを知っていながら、ある罪を犯してしまう、ということを示唆している。また、神は憐み深くある個人への裁きを遅らせ、後にその後続く、同等の、もしくは、よりふさわしい子孫に神は裁きを注ぐことがあるかもしれないことも、聖書から明らかである。同様に、神は憐み深く邪悪な世代に神の裁きを遅らせ、しかしその後続く、同等の、もしくは、よりふさわしい世代に裁きを注ぐことがあるかもしれない（エレミヤ 16:11-12 参照）。それは、ある人をその祖父母の罪の為に罰することとは全く違うことである。

とは言えません。

この今考慮している聖書箇所には、神が「父の咎を子に報い」と書いてあることに注目してください。それは、子にある父の咎が報われる、ということです。

つまり、「世代の罪」という考え全体は疑わしく、神が不正であるかの様に見立てるので、それにあっては悪いものです。

### サタンののろい？ (Satanic Curses?)

では、「サタンののろい」はどうでしょうか。

第一に、聖書全体を見ても、サタンが誰かに「のろいを置く」ことができることが示されている箇所はありませんし、サタンがそうしている例は一つもありません。確かに、サタンが人々を苦しめているのは、私たちは聖書の中で見っていますが、家族に対してサタンが「のろいを置く」ことや、それによってその人たちとそれに続く世代に悪くて不運なことが継続して起こる結果を見たことがありません。

全てのクリスチャンはサタンと悪霊から一生の間、(限られた範囲で)嫌がらせを受けますが、それは私たちは誰かに、自分の親から受け継いだ「サタンののろいを砕いて」もらう必要がある、という意味ではありません。私たちに必要なのは、聖書に書いてある通り、神のみことばに立って、信仰によって悪霊に立ち向かうことです(第一ペテロ 5:8-9参照)。

聖書には、神は祝福とのろいを与える力があるお方である、と書かれています(創世記 3:17; 4:11; 5:29; 8:21; 12:3; 民数記 23:8; 申命記 11:26; 28:20; 29:27; 30:7; 第二歴代誌 34:24; 詩篇 37:22; 箴言 3:33; 22:14; 哀歌 3:65; マラキ 2:2; 4:6参照)。他人はその口をもって私たちをのろうかもしれませんが、それらののろいは私たちを傷つける程の力はありません。

逃げる雀のように、飛び去るつばめのように、いわれののろい

はやって来ない(箴言 26:2)。

バラムは、イスラエルの子らをのろう為にバラクによって雇われた後に、彼が「神がのろわない者を、私がどうしてのろえようか。主が滅びを宣言されない者に、私が

## 弟子をつくる指導者

どうして滅びを宣言できようか」(民数記 23:8)と言っていたのは正しかったのです。クリスチャンの中には、マルコ十一章二十三節のイエスの言葉、「まことに、あなたがたに告げます。だれでも、この山に向かって、『動いて、海にはいれ。』と言って、心の中で疑わず、ただ、自分の言ったとおりにになると信じるなら、そのとおりになります」を基に、人が他の人にのろいを置くという考えに行き過ぎた点がある人たちもいます。

しかし、話す言葉だけでは力はありませんが、心から信じて話される言葉にはある、ということに注目してください。そうは言っても、人が誰かをのろい、そののろいが実際相手に害をもたらすことに信仰を持つ、ということはありません。なぜなら、信仰は確信された保証(ヘブル 11:1)であり、信仰は神のみことばを聞くことからのみ来る(ローマ 10:17)からです。人は誰かに対するのろいが不運をもたらすことを望むかもしれませんが、神は人をのろうことであって、信仰をもたらす約束を与えていない為に、その人はそれを決して信じることはできません。

これに対して唯一の例外は、もし神がだれかに「信仰の賜物」を「預言の賜物」(九つの御霊の賜物の内の二つ)と一緒に与えたのなら、神が時として旧約聖書に出て来る人物の人生で行っていた様に、それは祝福もしくはのろいという形で話される、ということです(創世記 27:27-29, 38-41; 49:1-27; ヨシュア 6:26と第一列王記 16:34; 士師記 9:7-20, 57; 第二列王記 2:23-24参照)。それらの場合でも、その祝福またはのろいは、神から発せられたもので、人からではありませんでした。従って、誰かが他の人に「のろいを置く」ことができるという考えは、全くの迷信です。それ故、イエスは「私たちに対して語られたのろいを打ち破る」ことを私たちに教えず、むしろ、単純に「のろう者を祝福する」ことを教えました。私たちは、人の語るのろいを恐れる必要はありません。誰かののろいを恐れることは、神への信仰の欠如を表しています。残念なことに、私は神の力よりもサタンの力にもっと信仰を持っているように見受けられる牧師たちと会うことが多いです。毎月違う国へ旅行し、サタンの王国に沢山の打撃を与えていますが、私はサタンも、私に置かれるあらゆるのろいも、

全く恐れませんが、恐れる理由は何もないのです。

### オカルトののろい？ (Occult Curses?)

過去にオカルトに携わっていたという理由で、私たちはサタンののろいを受けることはあり得るのでしょうか。

私たちは、生まれ変わった時、サタンの力と暗やみの王国から解放されたことを忘れてはなりません（使徒の働き 26:18; コロサイ 1:13参照）。サタンは、私たちが与えない限り、もはや私たちに対して支配力を持っていません。聖書はエペソのクリスチャンが、彼らが改心する前、魔術に深く関わっていましたが（使徒の働き 19:18-19参照）、パウロが何か「サタンののろい」を打ち砕いたり、彼らが生まれ変わりの体験をした後に彼らを支配するサタンの力を縛り上げる、といった記録は一切ないことを示しています。理由は、彼らが最初にイエスを信じたその瞬間に、彼らは自動的にサタンの支配から解放されたからです。

更に、パウロがエペソのクリスチャンへ書き送った時、世代ののろい、もしくはサタンののろいから誰かを解放することについての教えを与えませんでした。パウロが彼らに言ったことは、「悪魔に機会を与えないようにしなさい」（エペソ 4:27）ということと、「悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために、神のすべての武器を身に着けなさい」（エペソ 6:11）ということだけでした。これらは全てのクリスチャンの責任です。

しかしなぜ、ある場合は、誰かがあるクリスチャンの「世代ののろい」もしくは「サタンののろい」を打ち破った時に、彼らは一見すると、解放された様に見えるのでしょうか。恐らく、助けが必要であった人には、「のろい」が打ち破られたら、悪魔は離れるという信仰があったからです。信仰が悪魔を逃げらせ、全てのクリスチャンは、その人が悪魔に立ち向かう時、悪魔は逃げることを信じることができますし、また信じるべきです。しかし、サタンを逃げ去らす為に「解放の専門家」を呼ぶ必要はありません。

最後に、キリストは「私たちのためにのろわれたものとなった」ことにより、「わ

## 弟子をつくる指導者

たしたちを律法ののろいから贖い出してくださいました」（ガラテヤ 3:13、一部強調）と聖書には書いてあります。私たちは皆、罪を犯した為に、以前は神ののろいの下にありましたが、イエスが私たちの受けるべき処罰をご自分の身に負ってくださったので、私たちはそののろいから解放されました。神をほめたたえます！私たちはもはやのろわれてはおらず、「キリストにおいて、天にあるすべての霊的祝福をもって」（エペソ 1:3）今は祝福されていることを喜ぶことができます。

### 聖書に基づいた霊的な戦い（Scriptural Spiritual Warfare）

これまでに、私たちは霊的戦いについての現代迷信の多くを見てきました。しかし、聖書に基づいた霊的戦いの形式とはあるのでしょうか。あります。ここからはそこに焦点を当てていきましょう。

恐らく、霊的戦いについて私たちが知っておく必要のある最初のことは、これはクリスチャン人生の中心ではない、ということです。私たちの中心はキリストであり、キリストに従って、益々キリストの様になって成長することであるべきです。新約聖書の中で霊的戦いについて書いてあるのは、ほんの僅かな割合です。それは、クリスチャン人生で集中すべき部分ではないことを示唆しています。

次に、霊的戦いについて私たちが知っておくべきことは、聖書が私たちに知るべきことを教える、ということです。私たちは、「サタンについての深いこと」を測る為に、何か特別に霊を見分ける力（または、特別に霊を見分ける力を持つという宣教師）が必要という訳ではありません。聖書の霊的戦いは単純です。サタンの策略は、聖書の中で顕著に現れています。私たちの責任は、その概要について単純明快に説明されています。あなたが、神の言っていることを知り、また信じさえすれば、この霊的奮闘に勝利者となることは間違いありません。

### 最初に戻る（Back to the Beginning）

私たちが悪魔に最初に紹介された、創世記に戻りましょう。その最初の章で、サタンは蛇の形で現れます。もしこの蛇が悪魔であることに疑いがあるのなら、黙示録に十章二節を読めば、それが解消されます—「彼は、悪魔でありサタンである竜、あ

の古い蛇を捕え…」(一部強調)。

創世記三章一節には、「神である主が造られたあらゆる野の獣のうちで、蛇が一番狡猾であった」とあります。神の創造物のいくつかは、何とも狡猾で、それが生き残りをかけて、餌食に忍び寄る様子から、私たちはサタンがどれだけ狡猾に違いないかに気付かされるでしょう。一方、サタンは、神の様に全知全能ではないので、私たちはサタンに対する戦いの中で、思いの面で不利な立場にあると憶測すべきではありません。イエスは私たちに「蛇のようにさとく」ある様にと教えました(マタイ 10:16、一部強調)。パウロは彼はサタンの策略を知らない訳ではなく(第二コリント 2:11 参照)、また私たちには「キリストの心」がある(第一コリント 2:16)と言いました。

サタンは、神が何と言ったかについてエバに質問することで、その最初として記録される火矢を飛ばしました。エバの答えは、彼女を神への不従順へとだますことのできる機会があるかどうかを、サタンに表してしまいました。サタンは神が言ったことを信じて従う人なら誰をもだます方法はなく、だからこそ、サタンの策略は神の言葉に反する考えの周りをぐるぐると巡っています。

サタンはエバに、「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか」(創世記 3:1)と尋ねました。それは、何の悪気もない、軽い質問の様に聞こえてしまいそうですが、サタンは自分の目的をしっかりとわかっていました。

エバは、「私たちは、園にある木の実を食べてよいのです。しかし、園の中央にある木の実について、神は、『あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけないからだ。』と仰せになりました」(創世記 3:2-3)と答えました。

エバの答えはもう少しで正解でした。実際、神は善悪の知識の木に触れることは禁じませんでした、そこから食べることを禁じました。

エバは確かにサタンの、「あなたがたは決して死にません」(創世記 3:4)という答

## 弟子をつくる指導者

えに潜む嘘に気付くのに十分な真理を知っていました。それは勿論、神の言ったことと余りにも矛盾していて、エバがそれをすっかり信じることは余り考えられません。従ってサタンは、普段からよくやるように、彼の嘘をいくつかの真理で甘く包み、もっと簡単に飲み込める様にしました。サタンは続けました。「あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです」（創世記 3:5）。

サタンは実際、嘘をついた後、三つの正しいことを言いました。アダムとエバが禁じられた実を食べてしまった時、サタンの言う通り、彼らの目は開かれました（創世記 3:7参照）。更に、神ご自身が後で、人は神のようになり、善悪を知るようになった（創世記 3:22参照）、と言いました。知っておいてください—サタンはよく、人をだます為に、真理と誤りを混ぜます。

サタンは神のご性質を中傷することを覚えていてください。神はアダムとエバに彼ら自身の安心と幸せの為に、その禁じられた実を食べて欲しくありませんでしたが、サタンはあたかも、神が彼らから良いものを与えないでいるかの様な言い方をしました。サタンの嘘の殆どは、神のご性質、ご意思、そして動機に対する中傷です。

残念なことに、地上での最初の夫婦は真理を信じることを拒み、嘘を信じた故、その報いに苦しみました。この話から現代の霊的戦いの全ての要素に気付いてください。サタンの唯一の武器は、真理で表現した嘘です。人間は神の言ったことか、サタンの言ったことかを信じる選択に直面しました。真理を信じることは、彼らの「信仰の大盾」となっていたことでは、彼らは決してそれを立てませんでした。

### イエスの霊的な戦い (Jesus' Spiritual Warfare)

イエスが荒野で試されている間、イエスのサタンに対する戦いぶりを読むと、私たちはサタンの手法は何千年もの間、何も変わっていないことがすぐにわかります。人が真理を信じ、またそれに従うことを説得してやめさせることだけが唯一その敵に勝つ方法であるとサタンは知っていたので、その攻撃の仕方は、神が言ったことに対して人に不信感を与えることでした。神のみことばが、またしても戦いの中心です。



## 現代の靈的戦いについての迷信—後篇

サタンはその嘘を一斉に浴びせますが、イエスはそれらを真理でかわします。イエスは神が言ったことを信じて、従いました。これこそ聖書に基づく靈の戦いです。

イエスはエバやアダム、また残りの私たちと同じ状況に直面しました。イエスは、神を聞くか、サタンを聞くかを選ばなくてはなりませんでした。イエスはその靈の戦いを「御靈の劍」、つまり神のみことばで戦いました。私たちはサタンとの靈の戦いから何が学べるか見ていきましょう。

イエスの二回目に受けた誘惑を詳述しながら、マタイはこの様に言っています。

すると、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の頂に立たせて、言った。「あなたが神の子なら、下に身を投げてみなさい。

『神は御使いたちに命じて、その手にあなたをささえさせ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにされる。』と書いてありますから。」 イエスは言われた。「『あなたの神である主を試みてはならない。』とも書いてある」 (マタイ 4:5-7)。

ここで最も大切な事柄は、再び、神が言ったことにあります。サタンは、詩篇九十一篇から引用しましたが、彼はそれを神が意図しなかったことを意味させる様に、みことばを歪めました。

イエスは、詩篇九十一篇にある神の守りの約束を、調和のとれた理解をもって引用して答えました。神は勿論私たちを守りますが、私たちの愚かな行為に対してはそうではなく、それは「神を試すこと」になる、と私の聖書の注釈にも書いてある通りです。

だからこそ、聖書の節を、残りの聖書の文脈から離して、歪曲しないことが非常に重要です。全ての聖書箇所は、聖書の他の箇所で行っていることと、必ず調和していなくてはなりません。

聖書の言葉を捻じ曲げることは、サタンが靈の戦いで最もよく使う戦術の一つです。悲しいことに、サタンは、現代の靈的戦いの教えの虜となった多くのクリスチャンに対して、この戦略をとって匠に用いて成功しています。典型的な例は、聖書の言

## 弟子をつくる指導者

葉、「要塞を引き下ろす」の間違った使い方ですが、それは、空中にいる悪霊を引き下ろすという考えを支持しています。初めの方で私が指摘した通り、その特定の言い回しは、その文脈から読む時、空中の悪霊を引き下ろすことに全く適用されません。しかし、悪魔は私たちがそうであることを信じることを、それにより私たちが空の権威や権力に向かって叫んで時間を浪費するので非常に喜んでいきます。

マタイによる福音書には、イエスの三回目に受けた誘惑についても書いてあります。

今度は悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華を見せて、言った。「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう。」イエスは言われた。「引き下がれ、サタン。『あなたの神である主を拝み、主だけに仕えよ。』と書いてある。」（マタイ 4:8-10）

これは権力の誘惑でした。もしイエスがサタンを礼拝し、サタンがイエスへの約束を守っていたなら、イエスは暗やみの王国にて、副司令官の地位を獲得していました。イエスは、救われていない人間たちと悪霊を全て支配し、サタンだけが持っていた、世界に渡る権威を持っていました。もしイエスはその誘惑に甘んじていたら、起きていたであろう悪夢を私たちはただ傍観することしかできません。

イエスはサタンの提案に対して、書かれている神の言葉をもって対抗したことをもう一度注目してください。それら三度の誘惑の度に、イエスは「…と書いてある」という言葉で打ち勝ちました。私たちも、もし私たちがサタンにだまされ、そのわなにはまることを避けたいのならば、神のみことばを知り、それを信じなくてはなりません。霊的戦いとは、まさにこのことなのです。

## 戦場（The Battle Ground）

大方、サタンとその悪霊たちが持つ唯一の力は、人々の心と思いに様々な考えを植えることだけです（また、それですら、神によって制限されています。第一コリント 10:13参照のこと。）。それを覚えながら、以下の聖句の例を考えていきましょう。

## 現代の霊的戦いについての迷信－後篇

そこで、ペテロがこう言った。「アナニヤ。どうしてあなたはサタンに心を奪われ、聖霊を欺いて、地所の代金の一部を自分のために残しておいたのか（使徒の働き 5:3、一部強調）。

夕食の間のことであった。悪魔はすでにシモンの子イスカリオテ・ユダの心に、イエスを売ろうとする思いを入れていたが…（ヨハネ 13:2、一部強調）。

しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります（第一テモテ 4:1、一部強調）。

しかし、蛇が悪巧みによってエバを欺いたように、万一にもあなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真実と貞潔を失うことがあってはと、私は心配しています（第二コリント11:3、一部強調）。

互いの権利を奪い取ってはいけません。ただし、祈りに専心するために、合意の上でしばらく離れていて、また再びいっしょになるというのならかまいません。あなたがたが自制力を欠くとき、サタンの誘惑にかからないためです（第一コリント 7:5、一部強調）。

そういうわけで、私も、あれ以上はがまんができず、また誘惑者があなたがたを誘惑して、私たちの労苦がむだになるようなことがあってはいけないと思って、あなたがたの信仰を知るために、彼を遣わしたのです（第一テサロニケ 3:5、一部強調）。

## 弟子をつくる指導者

そのばあい、この世の神が不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしているのです（第二コリント 4:4、一部強調）。

こうして、この巨大な竜、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれて、全世界を惑わす、あの古い蛇は投げ落とされた。彼は地上に投げ落とされ、彼の使いどもも彼とともに投げ落とされた（黙示録 12:9、一部強調）。

あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです（ヨハネ 8:44、一部強調）。

これらの聖句も他の箇所でも、聖書的な霊的戦いの第一の戦場は、私たちの心と思いであることが明らかとされています。サタンは思いを用いて攻撃します。具体的には、邪悪な提案、悪い考え、偽の哲学、誘惑、様々な嘘等です。私たちの防衛手段は、神のみことばを知り、信じ、それに基づいて行動することです。

あなたの思う全ての思いは、必ずしも自分自身から起源するものとは限らない、ということをおあなたが理解することは非常に重要なことです。サタンには、彼の思いを人々の思いに植えることを手伝ってくれる多くの報道官がいます。サタンは私たちに影響を与える為に、新聞、本、テレビ、雑誌、ラジオを通して、また友人や隣人を通して、更には説教者を通してさえ働いています。使徒ペテロでさえかつて、イエスに主が死ぬことは神の御旨ではない、ということ提唱して、サタンの報道官として、

思わず用いられたのでした（マタイ 16:23参照）。

しかし、サタンと悪霊はまた、誰かを仲介者として用いることなく、人間の思いに直接働き、クリスチャンは皆、時として、自分たちがサタンの直接攻撃の対象とされていることに気付かされます。靈的戦いが始まるのはその時です。

私にかつてある問題を打ち明けて来た親愛なるクリスチャン女性を思い出します。彼女は、いつも祈る時に、自分の中に冒流の思いがあって、罵る言葉が自分の思いから来てしまうことに気付きました。彼女は、最も愛おしく、親切で、敬愛する、教会に自分を捧げて仕えていた女性のひとりでしたが、彼女には悪い思いの問題がありました。

私は彼女に、それらの思いは彼女の内から起こされたものではなく、彼女はサタンという、彼女の祈りの生活を破壊しようとしている者からの攻撃を受けている、ということの説明をしました。すると彼女は、彼女はそれらの思いを再び考えてしまうかもしれないことを恐れて、彼女は毎日祈ることを止めてしまったことを私に告げました。サタンは成功していたのでした。

そこで私は彼女に祈ることを再び始めるよう言い、もしも冒流の思いが彼女の思いの中に来たら、彼女はそれらを神のみことばによる真理によって対抗すべきであることを伝えました。もし思いが彼女に、「イエスは単なる…」とい言ってきたら、代わりに、「違う。イエスは昔も今も神の御子だ」と言い、もし思いが彼女に罵る言葉をもたらしたら、彼女はその思いを、イエスへの賛美の思いに変える、といった具合です。

私はまた、彼女に、悪い思いを思ってしまうことを恐れていると、実はそれらの思いを招いてしまうことも伝えました。なぜなら、恐れは、信仰に幾分反対のところがある、つまりそれは悪魔の信仰だからです。何かについて考えない様にしようとして、それについて思わない様にする為に、私たちはかえって、それについて考えなくてはならないようになってしまうのです。

例えば、もし私があなたに、「自分の右手のことを考えないでください」と言う

## 弟子をつくる指導者

時、あなたは私の言ったことを守ろうとして、直ちに自分の右手のことを考えることでしょう。やろうとすればする程、それがなかなかできなくなっていくます。右手のことを考えない、唯一の方法は、意識的に、何か他のことを、例えばあなたの靴のこと、といった具合に考えることです。一度あなたの思いが靴に行けば、あなたは手のことを考えていません。

私はその親愛なる女性に、丁度聖書が私たちに命じている様に、「恐れなない」様に励ましました。彼女が神のみことばと反する思いに気付いた時はいつでも、彼女はそれを、神のみことばに沿う思いと交換すべきなのです。

彼女は、嬉しいことに、私の助言を聞き入れました。彼女の祈りの時に、二、三回程また攻撃を受けましたが、彼女はその問題に完全な勝利を得ることができました。彼女は聖書的な霊の戦いに勝利したのです。

私にとって興味深かったことはまた、数多くの教会を調査した結果、彼女の問題は他の人たちにも共通していたことが分かったことです。通常、私が調査した半分以上のクリスチャンが、いつだったかはっきりとは覚えてはいませんが、祈りの最中に冒流的思いが来たことを示しています。サタンは全く独創性に欠けます。

### 「聞いていることによく注意しなさい」 ("Take Care what You Listen To")

私たちは、サタンや悪霊が私たちの思いを攻撃することを阻止することはできませんが、彼らの思いを私たちの思いにさせる必要はありません。つまり、私たちは悪魔の考えや提案について深く考え、それらを自分たちのものとする必要はありません。

「あなたは自分の頭上を鳥が飛び回るのを止めることはできなくても、自分の頭に巣を作らせないようにすることはできる」と、言われている通りです。

更に私たちは、できる限り、自分たちの思いが不敬虔な影響を受けない様に気を付けるべきです。私たちがテレビの前に一時間座っている時、または新聞を読んでいる時、私たちは、サタンからのものかもしれない思いで影響を受けることを大歓迎しているのです。イエスが、種をまく人とその土のたとえ話を話した直後、イエスは「聞いていることによく注意しなさい」(マルコ 4:24) と忠告しました。イエスは、サタ

## 現代の靈的戦いについての迷信―後篇

ンが私たちの心や思いにその「種」をまくことを許して、嘘を聞くことでもたらされる破壊的効果をご存知でした。それらの種は、育って「いばらとあざみ」に成長し、それは最終的に神のみことばを私たちの人生から締め出すことになるでしょう（マルコ 4:7, 18-19参照）。

### ペテロが靈的戦いについて言っていること (Peter on Spiritual Warfare)

使徒ペテロは、本来の聖書的な靈の戦いについて理解していました。彼の使徒書簡で、ペテロはクリスチャンに町を支配する権威や権力を引き下ろすことを教えたことは一度もありません。しかし彼は、それぞれの人生で、サタンの攻撃に立ち向かうことは教えました。ペテロは、どの様にして立ち向かうべきかを正確に教えました。

身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。堅く信仰に立って、この悪魔に立ち向かいなさい。ご承知のように、世にあるあなたがたの兄弟である人々は同じ苦しみを通って来たのです（第一ペテロ 5:8-9）。

第一に、ペテロは攻撃ではなく、防衛という私たちの立場を示したことに注目してください。サタンが歩き回っているのであって、私たちではありません。サタンは私たちを捜し求めています。私たちの仕事は、攻撃することではなく、立ち向かうことです。

第二に、サタンは、ししの様に、誰か食い尽くすべきものを捜し求めていることに注目してください。どうしたら、サタンはクリスチャンを食い尽くすことができるのでしょうか。ペテロは、サタンがししの様に、彼らの肉を文字通り食べることを意味したのでしょうか。勿論違います。サタンがクリスチャンを食い尽くすことができる唯一の方法は、その人の信仰を破壊する嘘をその人に信じ込ませることです。

第三に、ペテロは、信仰を通して悪魔に立ち向かう様言っていることに注目してください。私たちの戦いは物理的なものではなく、また、私たちの拳を空中で振り回すことで、サタンと戦うことができるわけでもありません。サタンは嘘で私たちを攻

## 弟子をつくる指導者

撃し、私たちはそれらの嘘を、神のみことばへの信仰に堅く立って対抗するのです。これこそ、お伝えしている通り、聖書に基づく霊的な戦いなのです。

ペテロが宛てたクリスチャンは、いくつかの厳しい迫害に苦しんでいました。従って、キリストにある信仰を捨てる誘惑を受けていました。サタンが疑いや嘘で攻撃するのは、私たちが逆境の只中にいる時が多いです。その様な時こそ、あなたの信仰に堅く立つ時なのです。それこそ、「邪悪な日」であり、「悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために、神のすべての武具を身に着けなさい」（エペソ 6:11、一部強調）とパウロが書いた時なのです。

### ヤコブが霊的戦いについて言っていること（James on Spiritual Warfare）

使徒ヤコブも、彼の書簡の中で、霊的戦いに関する事に触れました。ヤコブはクリスチャンたちに、彼らの祈りが御使いの戦いの結果を左右すると言ったのでしょうか。違います。彼は、町を支配する情欲の霊、無関心の霊、そして泥酔の霊を引き下ろすことを教えたのでしょうか。違います。彼は、彼らの町ができて以来、どんな種類の悪霊がいるのか決定付けられる為に、それらの町の歴史を調べる様言ったのでしょうか。違います。

ヤコブは、聖書に基づく霊的戦いを信じて、この様に書きました。

ですから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ち向かいなさい。そ

うすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります（ヤコブ 4:7）。

繰り返しになりますが、クリスチャンの立場は、防衛、つまり私たちは対抗すべきであって、攻撃ではありません。私たちがする時、ヤコブは、サタンは逃げ去ることを私たちに約束しています。サタンは、その嘘を信じ込んだり、その提案に従ったり、またはその誘惑に甘んじることのないクリスチャンにまわりつく理由は何もありません。

ヤコブはまず、私たちが神に従うことを教えたことにも注目してください。私たちは、神のみことばに従うことで、神に従います。私たちのサタンに対する抵抗は、私たちの神のみことばへの従順に基づいています。



ヨハネが靈的戦いについて言っていること (John on Spiritual Warfare)

使徒ヨハネも、彼の書簡の中に靈的戦いについて記述しました。彼は、悪魔の要塞を引き下ろす為に、高き所に上る様言いましたか。いいえ、言いませんでした。彼は、時々怒るクリスチャンから、怒りの悪魔を追い出す方法を教えましたか。いいえ、教えませんでした。

むしろヨハネは、ペテロやヤコブと同様に、聖書に基づく靈的戦いを信じていただけでした。従って、彼の教えも同じです。

愛する者たち。靈だからといって、みな信じてはいけません。それらの靈が神からのものかどうかを、ためしなさい。なぜなら、にせ預言者がたくさん世に出て来たからです。人となって来たイエス・キリストを告白する靈はみな、神からのものです。それによって神からの靈を知りなさい。イエスを告白しない靈はどれ一つとして神から出たものではありません。それは反キリストの靈です。あなたがたはそれが来ることを聞いていたのですが、今それが世に來ているのです。子どもたちよ。あなたがたは神から出た者です。そして彼らに勝ったのです。あなたがたのうちにおられる方が、この世のうちにいる、あの者よりも力があるからです。彼らはこの世の者です。ですから、この世のことばを語り、この世もまた彼らの言うことに耳を傾けます。私たちは神から出た者です。神を知っている者は、私たちの言うことに耳を傾け、神から出ていない者は、私たちの言うことに耳を貸しません。私たちはこれで真理の靈と偽りの靈とを見分けます (第一ヨハネ 4:1-6)。

これらの聖書箇所にあるヨハネの論考全体は、サタンの嘘と神の真理を中心に展開しています。私たちは、靈が神からのものか、そして真理に基づくものかわかる為に、それらを試す必要があります。悪霊たちはイエス・キリストが人となって來られたことを認めません。彼らは嘘つきです。

## 弟子をつくる指導者

これらの聖書箇所にあるヨハネの論考全体は、サタンの嘘と神の真理を中心に展開しています。私たちは、霊が神からのものか、そして真理に基づくものかわかる為に、それらを試す必要があります。悪霊たちはイエス・キリストが人となって来られたことを認めません。彼らは嘘つきです。

ヨハネは、悪霊に打ち勝ったとも言いました。つまり、光の王国に属する者として、私たちはもはや、悪霊の支配下にはないのです。もっと偉大な方が、私たちの内に住んでおられます。自分たちの内にキリストが住まわれている人々は、悪霊を恐れるべきではありません。

ヨハネはまた、この世は悪霊たちに耳を傾ける、それは、悪霊たちが話しているに違いないことを示している、と言いました。私たちは、彼らが声を出して話す訳ではなく、人々の思いに嘘を植えていることを知っています。

キリストに従う者として、私たちは悪霊の嘘を聞くべきではありません。またヨハネは、神を知る者は、私たちが真理を持っている、つまり神のみことばを持っているので、私たちの言うことに耳を傾ける、と言っています。

繰り返しますが、サタンの策略は、人々に彼の嘘を信じ込ませることであることに注目してください。サタンは私たちが真理を知り、それを信じるならば、私たちを打ち負かすことはできません。それこそ、聖書に基づく、霊的な戦いなのです。

### 信仰がかぎ (Faith is the Key)

神の言葉を知ることだけでは、霊的戦いに勝つのに不十分です。鍵は、神のおっしゃったことを心から信じることです。これは、悪魔に対抗し、悪霊を追い出すことにあっても同じです。例えば、前にも見ましたが、イエスが十二弟子に、「汚れた霊どもを追い出す為にそれらを制する権威」(マタイ 10:1)をお与えになった時の例をもう一度見てみましょう。その七章後に、彼らはてんかんの少年から悪霊を追い出すことができなかつたことが記されています。<sup>99</sup> イエスが彼らの失敗を知った時、

---

<sup>99</sup> 99

こう悲しまれました。

「ああ、不信仰な、曲がった今の世だ。いつまであなたがたといっしょにいななければならないのでしょうか。いつまであなたがたにがまんしていなければならないのでしょうか。」（マタイ17:17、一部強調）。

イエスが悲しんだのは、彼らの不信仰でした。更に、弟子たちが後に、なぜ彼らは悪魔を追い出すことができなかつたのかを尋ねたところ、イエスは、「イエスは言われた。「あなたがたの信仰が薄いからです」（マタイ 17:20）と答えました。従って、私たちは、彼らの信仰ぬきに、悪霊を追い出す権威は働かない、ということがわかります。

悪霊を追い出したり、悪魔に立ち向かうことの成功は、神のみことばに対する私たちの信仰にかかっています。もし私たちが神が言われたことを心から信じるならば、私たちはその様に話し、その様に行動するでしょう。犬は、それから走り去る者を追いかけますが、悪魔も同様です。もしあなたが走れば、悪魔はあなたを追いかけます。しかし、あなたが信仰に堅くしっかりと立っていれば、悪魔はあなたから逃げ去ります（ヤコブ 4:7参照）。

使徒たちの信仰の欠如は、そこで見ていた人たちにとっても明らかであったに違いありません。彼らは試す度に、少年を悪霊から解放することに失敗していました。もしその悪霊がイエスの目の前でしたことと同じこと、つまり少年を「激しくひきつけさせ」（ルカ 9:42）「あわを吹きながら、ころげ回る」（マルコ 9:20参照）のを、弟子たちに見せていたら、弟子たちの信仰は恐れに変わっていた可能性はあります。彼らは恐らく、見たものによって、立ちすくんでいたでしょう。

しかし、信仰がある人なら、その人の見るものによってではなく、むしろ、神が言われたことによるのみ動かされます。「確かに、私たちは見るところによってではなく、信仰によって歩んでいます」（第二コリント 5:7、一部強調）。神は偽ることができません（テトス 1:2参照）。ですから、例え状況が神の言われたことと反対

## 弟子をつくる指導者

の様に思えたとしても、私たちは信仰にしっかりと留まるべきです。

イエスは、たった数秒で少年を解放したことに注目してください。イエスは信仰によってそれを行いました。イエスは、「解放の集会」を設ける等して、ご自分のお時間を浪費しませんでした。神のお与えになった権威に信仰がある人たちは、悪霊を追い出すのに何時間も費やす必要はありません。

更に、イエスはその悪霊に対して叫んだという記録は一つもありません。信仰のある人たちは、叫ぶ必要がありません。また、イエスも悪霊が出て行く様に何度も命じる必要はありません。一つの命令で十分でした。二つ目の命令は、疑いの告白となってしまうことでした。

### まとめ (In Summary)

弟子をつくる指導者は、自分の弟子たちがサタンの策略に対してしっかりと立ち、キリストの命令に従順な歩みができる様に、模範と言葉、また聖書的な霊の戦いをもって教えます。その様な指導者は、弟子たちを、聖書に基づかない霊の戦いの手法を推進する、現代の「教えの風」に追従するようにと導くことはしません。なぜなら、そのような手法を実行している人たちは、間違った焦点の合わせ方をしており、また、彼らが勝利をもって対処していると主張している正にそのサタンによって、実は騙されていることを、知っているからです。

## 第三十二章

### 管理責任 (Stewardship)

イエスの山上の垂訓についての、最初の方の章で、私たちはイエスが弟子たちに管理責任について語られたいくつかの言葉について見てきました。イエスは弟子たちに、地に宝を積むのではなく、天に宝を積むよう言いました。イエスは、一時的な宝に投資する人の愚かさだけでなく、彼らの心にある暗やみについても指摘しました（マタイ 6:19-24参照）。

金銭は地上に宝を積む者たちが真に拝むものです。なぜならば、彼らは金に仕え、金が彼らの人生を支配しているからです。イエスは、神が真の主人であり、従って私たちの経済の主人でもあることを明白に示しながら、神と金の両方に仕えることは不可能であると宣言しました。金銭ほど、人の心にとって神と張り合うものは他にありません。私たち自身の財産を全て捨てないでは、私たちはイエスの弟子にはなれない、とイエスが教えた理由がここにあります（ルカ 14:33参照）。キリストの弟子は何も所有しません。彼らは単に神のものに対して管理責任が与えられているだけであり、神はご自身のご性質、更にはご自身の御国を表すご自身の金銭で物事を進めることを好みます。

イエスは管理責任について沢山言うべきことがありましたが、イエスの弟子であると告白する者たちに、その言葉はよく無視されていたようです。それよりも更に今人気なのは、聖書を曲解して、その狡猾でわざとらしい様々な形で、現代の「繁栄に

## 弟子をつくる指導者

「ついての教義」を構築することです。しかし、弟子をつくる指導者はキリストの命令全てに従うことを人々に教えることを願っています。従って、そのような指導者は、その人の表す模範や、言葉、また聖書的な管理責任を通して教えるのです。

聖書が教える管理責任について、更に詳しく見ていくと同時に、繁栄についての間違った教えによく見られる事例のいくつかについても明るみに出してみましよう。これは決して、徹底的な調査とは言えません。この主題について、私は一冊の本を書き、それが私たちのホームページ (ShepherdServe.org) に英語で掲載されています。

「聖書のトピック (Biblical Topics)」の下の「金銭についてイエスが言ったこと (Jesus on Money)」にあります。この馴染み深い約束は、よくクリスチャンが引用し、宣言しますが、その文脈は一体どのようなものだったのでしょうか。私たちが文脈を通して読む時に、ピリピの信者たちの全ての必要が神によって満たされることを、パウロがそれ程までに自信を持って言った理由をすぐに発見できます。

### 必要を供給される方 (The Supplier of Needs)

肯定的な言葉から始めますと、私たちは、聖霊の導きによってパウロがこう書いたことを思い出します—「私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてください」(ピリピ 4:19)。この馴染み深い約束は、よくクリスチャンが引用し、宣言しますが、その文脈は一体どのようなものだったのでしょうか。私たちが文脈を通して読む時に、ピリピの信者たちの全ての必要が神によって満たされることを、パウロがそれ程までに自信を持って言った理由をすぐに発見できます。

それにしても、あなたがたは、よく私と困難を分け合ってくださいました。ピリピの人たち。あなたがたも知っているとおりに、私が福音を宣べ伝え始めたころ、マケドニヤを離れて行ったときには、私の働きのために、物をやり取りしてくれた教会は、あなたがたのほかには一つもありませんでした。テサロニケにいたときでさえ、あなたがたは一度ならず二度までも物を送って、私の乏しさを補って

## 管理責任

くれました。私は贈り物を求めているのではありません。私のほしいのは、あなたがたの収支を償わせて余りある霊的祝福なのです。私は、すべての物を受けて、満ちあふれています。エパフロデトからあなたがたの贈り物を受けたので、満ち足りています。それは香ばしいかおりであって、神が喜んで受けてくださる供え物です。また、私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たして下さいます（ピリピ 4:14-19、一部強調）。

パウロは、イエスがピリピの人たちの必要を必ず供給して下さると確信していました。なぜなら、彼らはイエスの条件を満たしていたからです。つまり、彼らはまず神の国を求めていました。その証拠に、パウロへの犠牲の伴った贈り物があり、それを通してパウロは教会開拓を続けることができました。イエスは、山上の垂訓でこのように言ったのを思い出してください。

しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます（マタイ 6:32-33）。

従って、パウロが言うピリピ四章十九節にある約束は、それを引用し宣言する全てのクリスチャンに適用されるものではないことがわかります。むしろ、神の国を第一に求める人たちだけに適用されるのです。

### 私たちが本当に必要なもの（What Do We Really Need?）

イエスが、マタイ六章三十二から三十三節で約束したことから、私たちは他にも学べることがあります。私たちは時として、必要なものと欲しいものを見分けることが困難になります。しかし、イエスは私たちの必要について定義されました。イエスは、「あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます」と言いました。

## 弟子をつくる指導者

イエスが神の国とその義を最初に求める者たちに加えられると言っていた、これらの「もの」とは一体何でしょうか。それは衣食のことです。この約束が考慮される直前にイエスが言ったことがこれでしたので、誰も反論はできません(マタイ 6:25-31 参照)。衣食は、私たちが真に、唯一必要とする物質です。それらは、イエスと伝道に出かけた弟子団が実際持って行った唯一の物でした。

パウロも私たちの必要についてイエスがした定義に間違いなく同意し、テモテにこのように書きました。

しかし、満ち足りる心を伴う敬虔こそ、大きな利益を受ける道です。私たちは何一つこの世に持って来なかったし、また何一つ持って出ることもできません。衣食があれば、それで満足すべきです。金持ちになりたがる人たちは、誘惑とわなと、また人を滅びと破滅に投げ入れる、愚かで、有害な多くの欲とに陥ります。金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは、金を追い求めたために、信仰から迷い出て、非常な苦痛をもって自分を刺し通しました(第一テモテ 6:6-10、一部強調)。

パウロは、衣食こそ、私たちが真に物質的に必要とする全てであると信じていました。そうでなければ、パウロは、衣食があれば、私たちはそれで満足すべきであるとは言わなかったでしょう。このことは、神は私たちの全ての必要を満たしてくださいと、パウロがピリピの人々へした約束について、私たちに少し違った見解に導きます！ある説教者たちがこの聖句についてする説明の仕方では、それは、「私の神はあなたの全ての欲を満たすでしょう！」と言っているように思うでしょう。更に、もし私たちが衣食だけで満足すべきならば、私たちが今持っているものは、実際衣食以上のものであるのですから、もっと満足すべきではないでしょうか。

## 不満 (Discontentment)

私たちの問題は、私たちが実際必要とするもっとそれ以上に、私たちには必要があると考えてしまうことです。神はアダムとエバを創造された時、彼らは何も所有し



## 管理責任

ていませんでしたが、彼らはパラダイスに住んでいたという事実を考えてみてください。明らかに、神は私たちが物質的なものを集めることで満足を得ることを意図していませんでした。あなたは、イエスが蛇口を開けたり、風呂場でシャワーを浴びることは一度もなかったという事実を今までに考えてみたことはありますか。イエスは洗濯機で服を洗ったことはなく、冷蔵庫の扉も開けたことはありませんでした。イエスは車の運転も、また自転車ですら漕いだことはありませんでした。イエスは一度もラジオを聴いたことはなく、誰かと電話で話したこともなく、ストーブの上で食事を作ったこともなく、拡声装置を使って説教したこともありませんでした。イエスはビデオやテレビ番組を見たことはなく、電気灯を付けたことも、クーラーや扇風機の前で涼んだこともありませんでした。イエスは腕時計を所有したこともなく、服で溢れるクローゼットも持っていませんでした。どうしてイエスは幸せでいられたのでしょうか。

アメリカでは、（恐らくあなたの国でも同様に、）人々は新たに物質的に所有することを楽しむことでいかに人々が幸せになれるかということを見せる広告で、私たちの周りは溢れています。結果として、私たちは新しい物質的な所有を楽しむように洗脳され（もしくは「脳が汚染され」）、幸せはもっと手に入れることから来ると考えるようになり、私たちがどれ程のものを蓄積しても、決して十分だと言えません。これこそが、イエスの言う「富の惑わし」（マタイ 13:22）です。物質的なものは、幸せを約束はしても、その約束を果たすことは殆どありません。そして、私たちは世の、もっと物質的なものを持つことに熱狂的な人種に属するようになり、実際それは偶像礼拝となり、金の奴隷となり、神を心から愛し、隣人を自分のように愛するという、最も大切な神の命令を忘れるようになります。神はちょうどこのことについてイスラエルに警告しました。

気をつけなさい。私が、きょう、あなたに命じる主の命令と、主の定めと、主のおきてとを守らず、あなたの神、主を忘れることがないように。あなたが食べて満ち足り、りっぱな家を建てて住み、あなたの牛や羊の群れがふえ、金銀が増し、あなたの所有物がみな増

## 弟子をつくる指導者

し加わり、あなたの心が高ぶり、あなたの神、主を忘れる、そういうことがないように。・・・主は、あなたをエジプトの地、奴隸の家から連れ出し、（申命記 8:11-14）。

同様に、イエスは「富の惑わし」は、真の信者から霊的生活のいのちを奪い、その人自身が妨害されることを許してしまうことになりかねない、と警告しました（マタイ 13:7, 22参照）。パウロは「金銭を愛することが、あらゆる悪の根である」と言っていて、「ある人たちは、金を追い求めたために、信仰から迷い出て、非常な苦痛をもって自分を刺し通した」（第一テモテ 6:10）と警告しました。ヘブル人への手紙の著者は、「金銭を愛する生活をしてはいけません。いま持っているもので満足しなさい。主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない」（ヘブル 13:5）と私たちを訓戒しています。これらは、富の危険性について聖書が警告する、単なる例として挙げられる箇所のひとつです。

### 金が主人となる時（When Money is Master）

恐らく、私たちと神との関係を測る指針として、私たちの金銭への係わり方以上のものはないでしょう。金銭は、一それを得る為に私たちが用いる時間や手段、またそれを得た後私たちがそれをもって何をするのか一私たちの霊的生活をよく表しています。金銭は、私たちがそれを所有する時も、それを所有しない時でさえ、何ものにも増して、私たちを誘惑します。金銭は容易に、黄金律である二つの最も大切な命令を全く軽蔑することができます。なぜなら、それは唯一の神以上の神という存在になり得るものであり、また自分自身をより愛し、隣人をそれ程愛さないよう誘惑できるからです。一方金銭は、私たちの神と隣人への愛を示す手段として用いることもできます。

イエスはかつて、神よりもむしろ金に自分を支配させた人のたとえ話をしました。

それから人々にたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作であった。そこで彼は、心の中でこう言いながら考えた。『どうしよう。作物をたくわえておく場所がない。』そして言った。『こうしよ

## 管理責任

う。あの倉を取りこわして、もっと大きいのを建て、穀物や財産はみなそこにしまっておこう。そして、自分のたましいにこう言おう。「たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。」』しかし神は彼に言われた。『愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』自分のためにたくわえても、神の前に富まない者はこのとおりです。」（ルカ 12:16-21）

イエスはこの金持ちをとて愚かな者として描写しました。彼は富と実りの多い土地と農業の経営力で祝福されていたにもかかわらず、彼は神を知りませんでした。もし知っていたら、彼は余った作物を蓄えることをせず、自分勝手な快樂と安らぎの生活へ退くことはしなかったでしょう。むしろ、彼は彼の受けた祝福について、自分は単なる神のものの管理者に過ぎないことを理解した上で、それらをどのように使うかについて主を求めていたことでしょう。神は勿論、彼に彼が受けた繁栄を分かち合い、更にそれを分かち合い続けられる様に彼に働き続けることを望んでいたに違いありません。恐らく、唯一他に考えられる案としては、もし神が彼にそうする様に召したのならば、彼は農業をやめて、何か自己支援型のミニストリーに専念することだったでしょう。

イエスのたとえ話に出て来るこの金持ちは、いつ自分の死が来るかについて、大きな過ちを犯してしまいました。彼はまだ何年も残されていると考えていましたが、実はたった数時間しか残されていませんでした。イエスの言わんとしていることは明白です。私たちは毎日をまるで自分の地上での最後の日であるかのように過ごし、いつも神の御前で申し開きできる準備をしておくべきです。

## 二つの観点 (Two Perspectives)

神の観点は人間のものと比べてなんという違いでしょうか！イエスのたとえ話にある金持ちは、彼を知る殆どの人たちからうらやましがられていましたが、神は彼を

## 弟子をつくる指導者

憐れんでいました。彼は人間の目から見ると裕福でしたが、神の目からは貧しい者でした。彼は天に宝を積み、その宝は永遠に彼のものとなっていたはずですが、彼は地上にそれを積むことを選び、彼が死を迎える時に彼に何の益をもたらしませんでした。イエスが欲深い人たちについて教えたことを考えると、イエスは私たちに、このような金持ちは死んで天に行ったと思うことを望んでいるとは到底言えない様です。

このたとえ話は、私たちが持つ全てのものは神からの贈り物であり、神は私たちに忠実な管理者となる様期待していることを、私たち皆が思い出す様に助けてくれるはず。これは、物質的に富んだ人たちに対してだけでなく、誰でも、物理的なものを大切に過ぎる誘惑を受ける人皆に適用されます。これはイエスが弟子たちに引き続き話した内容で明確にされました。

だから、[それは、イエスがこれから言おうとしたことは、イエスが直前に言ったことに基づいていたことを意味します]わたしはあなたがたに言います。いのちのことで何を食べようかと心配したり、からだのことで何を着ようかと心配したりするのはやめなさい。いのちは食べ物よりたいせつであり、からだは着物よりたいせつだからです。鳥のことを考えてみなさい。蒔きもせず、刈り入れもせず、納屋も倉もありません。けれども、神が彼らを養ってくださいます。あなたがたは、鳥よりも、はるかにすぐれたものです。あなたがたのうちのだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。こんな小さなことさえできないで、なぜほかのことまで心配するのですか。ゆりの花のことを考えてみなさい。どうして育つのか。紡ぎもせず、織りもしないのです。しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。しかし、きょうは野にあって、あすは炉に投げ込まれる草をさえ、神はこのように装ってくださるのです。ましてあなたがた

## 管理責任

には、どんなによくしてくださることでしょう。ああ、信仰の薄い人たち。何を食べたらよいか、何を飲んだらよいか、と捜し求めることをやめ、気をもむことをやめなさい。これらはみな、この世の異邦人たちが切に求めているものです。しかし、あなたがたの父は、それがあなたがたにも必要であることを知っておられます。何はともあれ、あなたがたは、神の国を求めなさい。そうすれば、これらの物は、それに加えて与えられます。小さな群れよ。恐れることはありません。あなたがたの父である神は、喜んであなたがたに御国をお与えになるからです。

持ち物を売って、施しをしなさい。自分のために、古くならない財布を作り、朽ちることのない宝を天に積み上げなさい。そこには、盗人も近寄らず、しみもいためることはありません。あなたがたの宝のあるところに、あなたがたの心もあるからです（ルカ

12:22-34）。

イエスが語ったことばは、現代の「繁栄の福音を伝える説教者」のことばと、何という違いでしょう！今日私たちは、神が私たちにもっと所有することを求めていると言われてきていますが、イエスは弟子たちに、彼らが既に持っているものを売り、施しなさいと言いました！再び、イエスは地上に富を積む者たちの愚かさを明らかにしました。地上に積まれたそれらの宝は朽ちる運命にあり、それらの宝の持ち主の心は、地上にあるのです。

イエスは、この金持ちの愚か者のたとえ話からの教えを、あまりにも持ち物が少なく、つい衣食について心配してしまう人たちにも当てはめたことに注目してください。そのようなことに心配することは、私たちの注目点が間違っていることを表しています。もし私たちが私たちのことを気にかけてくれる御父を信頼するなら、私たちは心配することなく、その心配事のない態度が私たちを自由にし、神の御国の建設に

## 弟子をつくる指導者

集中できるようになります。

### キリストの模範 (Christ's Example)

イエスは他にも、金銭について語ることは多くありましたが、しかし、イエスは弟子をつくる指導者たちに、その模範を通して教えました。イエスは、ご自分が実践していることについて説教しました。どの様にイエスは生きたのでしょうか。

イエスはいとも簡単にご自身の置かれた状況をうまく利用して、物凄い金持ちになることはできたでしょうが、イエスは地上に富を蓄えませんでした。賜物のある指導者たちの多くは、もし彼らのミニストリーで金儲けできるのなら、神は彼らを個人的に富ませてあげたいと誤って思い込んでいます。しかしイエスは、ご自身にあった油注ぎを個人の利益の為に用いることはしませんでした。イエスに与えられた金銭は、弟子づくりのために使われました。イエスは、ご自分の弟子たちが旅行する際の必要すら補ってあげました。<sup>100</sup>今日の私たちの時代は、若弟子たちは、聖書学校で自分たちより年上のミニスターの話を聞きに行くのに殆どの場合、自分たちで払わなくてはなりません。しかし、イエスは、全く正反対のことを模範として示しました！

イエスはまた、神に信頼を置いた生活を送っていました。つまり、御父がご自分の全ての必要を満たし、祝福してくださるので、ご自分も他の人たちの必要を満たすことができる信じていました。ある時は、イエスは宴会に招かれて食事をし、またある時は、イエスは麦畑の麦の穂を摘んで食べていたことが聖書からわかります（ルカ 6:1参照）。

少なくとも二回、イエスはご自身を聞きに来た何千人もの聴衆に給食しました。クリスチャン・カンファレンスで、聴衆となる人たちがまず参加費を請求される現代とは何という違いでしょうか！私たちが主催する指導者向けカンファレンスでは、参

---

<sup>100</sup> 100 繁栄の福音を伝える説教者は、イエスのミニストリーが繁栄していたことを証明する為に、この事実を用いることが多い。神がイエスの必要を満たしたのは、それによってイエスが任命を受けた務めを果たす為であったことに疑いの余地はない。イエスと繁栄の福音を伝える説教者の違いは、イエスは自分勝手ではなかったことである。イエスはミニストリーで得た金を、ご自身の繁栄の為に個人的に用いることはしなかった。

## 管理責任

加してくださる方々に軽食をご用意しますが、そのことで時に私たちは、「食事で参加者を釣っている」と言われることがあります。実際、私たちは単にイエスの模範に従っているだけです。

イエスも貧しい人たちに心を留め、イエスと弟子たちは献金箱を用意し、そこに集められたお金を配分しました。貧しい人たちへの施しは、イエスのミニストリーにおいて日常行われていたことでしたので、イエスが最後の晩餐で、ユダに向かってしようと思っていることを早くしなさい、と促した時、他の弟子たちは、ユダが買い物に行くのか、もしくは貧しい人たちへの施しに行くのかと思った程でした（ヨハネ 13:27-30参照）。

イエスは真にご自身の隣人を自分自身の様に愛しました。従ってイエスは単純に生き、また分かち合いました。イエスは、洗礼者ヨハネの、「下着を二枚持っている者は、一つも持たない者に分けなさい」という説教に対して、悔い改める必要がありませんでした（ルカ 3:11）。イエスは下着を一枚だけ持っていました。しかし、繁栄の福音を伝えるある説教者たちは、イエスが豊かな人たちしか着ることができないと思われる縫い目なしの下着を着ていたので（ヨハネ19:23参照）イエスは実際豊かであったと言って、私たちを説得しようとしています。もし誰かが、数多くの聖書箇所と矛盾している何かを証明したい場合には、どんなに意味ありげなことを聖書の文中から見いだせるかは、驚くべきことです！イエスは自分が豊かであることを願そうとしていた、なぜなら縫い目のない上着の方は身に着けていなかったから、と言った、またまた馬鹿げた結論さえも引き出そうとするかもしれません。

イエスは金銭についてまだ沢山言うべきことがありましたが、ここには全て書くことはできません。しかし、聖書を曲解して、だまされやすい人たちをだますのに非常に匠な現代の繁栄の福音を伝える説教者たちの共通の教えについて、更にいくつか見ていきましょう。

### 「神はソロモンを栄えさせた」（"God Made Solomon Rich"）

多くの繁栄の福音を伝える説教者たちが、彼らの欲深さを隠す為にこれを用いて

## 弟子をつくる指導者

正当化します。彼らは、神が理由があつてソロモンに富を与えたことを忘れてしまつています。その理由とは、神がソロモンに願いを叶えると約束した時に、ソロモンは民を治める為の知恵を求めました。神は、ソロモンが（他に色々ある中で）富を選ばなかったことを非常に喜んだ故に、神は知恵の他に富をも与えたのです。しかしソロモンは、神から授かった知恵を神の意図したように用いず、結果として、地上で生きた最も愚かな者となってしまいました。もし知恵が彼にあったのならば、ソロモンは生まれる前から律法の中で神がイスラエルに語ったことに注意を払ったはずです。

あなたの神、主があなたに与えようとしておられる地には行って行って、それを占領し、そこに住むようになったとき、あなたが、「回りのすべての国々と同じく、私も自分の上に王を立てたい。」と言うなら、あなたの神、主の選ぶ者を、必ず、あなたの上に王として立てなければならない。あなたの同胞の中から、あなたの上に王を立てなければならない。同胞でない外国の人を、あなたの上に立てることはできない。王は、自分のために決して馬を多くふやしてはならない。馬をふやすためだといって民をエジプトに帰らせてはならない。「二度とこの道を帰ってはならない。」と主はあなたがたに言われた。多くの妻を持つてはならない。心をそらせてはならない。自分のために金銀を非常に多くふやしてはならない（申命記 17:14-17）。

ソロモンが自分自身の衰退まで神の言葉を見捨てた例に従って、繁栄の福音を伝える説教者たちがいつも無視する聖書箇所がここにあります。ちょうどソロモンと同じ様に、彼らも偶像礼拝者となります。ソロモンの心の向きが、彼が持つ多くの妻たち、つまり、彼の富の悪用によって、ソロモンが手に入れることができた妻たちによって、偶像を礼拝するように反れていったことを思い出してください。

神はソロモンが神の授けた富を、自分の隣人を自分自身の様に愛する為に使おうと期待していましたが、ソロモンはそれを自分自身だけを愛する為に使ったので



## 管理責任

す。ソロモンは、金、銀、馬や自分の為<sup>ため</sup>に妻たちさえも増やし、神の命令に全く従いませんでした。彼は最終的に七百人の妻と結婚し、三百人のそばめを抱え、事実上、千人の男たちから妻たちを奪ったのでした。貧しい者に施すよりもむしろ、ソロモンは自分自身に溺れました。繁栄の福音を伝える説教者たちが、ソロモンを、その自己中心と忌々しい偶像礼拝があるにかかわらず、全ての新約時代のクリスチャンの模範として掲げることは非常に不思議な話です。私たちの目標は、キリストのようになることではなかったのでしょうか。

**「神はアブラハムを栄えさせ、アブラハムの祝福は私たちに約束されている」 ("God Made Abraham Rich, and Abraham's Blessings Are Promised To Us")**

これもよく正当化するのに用いられますが、これはガラテヤ人への手紙の第三章に書かれたパウロの言葉から来たものです。ここでは良く誤って引用される箇所を、文脈に沿って引用します。

聖書は、神が異邦人をその信仰によって義と認めてくださることを、前から知っていたので、アブラハムに対し、「あなたによってすべての国民が祝福される。」と前もって福音を告げたのです。そういうわけで、*信仰による人々が、信仰の人アブラハムとともに、祝福を受けるのです。*

というのは、律法の行ないによる人々はすべて、のろいのもとにあるからです。こう書いてあります。「律法の書に書いてある、すべてのことを堅く守って実行しなければ、だれでもみな、のろわれる。」ところが、律法によって神の前に義と認められる者が、だれもないということは明らかです。「義人は信仰によって生きる。」のだからです。しかし律法は、「信仰による。」のではありません。「律法を行なう者はこの律法によって生きる。」のです。キリストは、私たちのためにのろわれたものとなって、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。なぜなら、「木にかけ

## 弟子をつくる指導者

られる者はすべてのろわれたものである。」と書いてあるからです。

このことは、アブラハムへの祝福が、キリスト・イエスによって異邦人に及ぶためであり、その結果、私たちが信仰によって約束の御霊を受けるためなのです（ガラテヤ 3:8-14、一部強調）。

パウロが十四節に書いた「アブラハムの祝福」とは、神のアブラハムに対する約束であり、（パウロが8節に引用した様に）アブラハムによって全ての国民が祝福されるというもので、更に具体的に言うと、パウロがその数節後に説明した通り、アブラハムのひとりの子孫であるイエスによって全国民が祝福される、ということです（ガラテヤ 3:16）。私たちが今ちょうど読んだところによると、イエスは、神にのろわれ、十字架の上で世の罪の為に死ぬことで、全国民に約束されたこの祝福を与えたのです。従って、「アブラハムへの祝福が、…異邦人に及ぶ」というのは、神が異邦人たちをアブラハムの様に、物理的に富ませることではなく、アブラハムの子孫によって、神がアブラハムに約束した、異邦人の国々を祝福することであり、それはイエスが彼らの為に十字架の上で死を遂げたことを通して成就しました。（パウロの最も重要とするここでの主題は、異邦人も、ユダヤ人と全く同様に、信仰によって、つまり、イエスへの信仰を通して救われることができるということです。）

### 他の曲解（Another Twisting）

この同じ箇所は、繁栄の福音を伝える説教者たちによって、自分たちの教義を正当化する為に、別の方法でよく用いられます。彼らは、律法はそれを守らない者たちに貧困ののろいを定めた、と言い（申命記 28:30-31、33、38-40、47-48、51、68参照）、パウロが「キリストは、…私たちが律法ののろいから贖い出してくださいました」と、ガラテヤ三章十三節に書いた為に、キリストの内にいる私たちは、貧困ののろいから贖い出された、と言っています。

第一に、パウロが申命記二十八章で、キリストが私たちに「律法ののろい」から贖い出したと書いた時、パウロは特定ののろいについて考えていたかどうかは議論の余地があります。パウロはここで、律法の「様々なのろい」（複数形）からキリスト

## 管理責任

は私たちが贖い出したとは言わず、むしろ律法の「のろい」という単数形を用いているのは、恐らく律法を守ることで自分の救いを得ようとする人たちにとって、律法全体がのろいであることを示唆していたのでしょう。一度私たちがキリストに贖い出されると、私たちはもはや律法を守ることで自分自身を救おうとする間違いを犯さなくなり、従って、そういう意味で、私たちは「律法ののろいから贖い出される」のです。

もしパウロが実際、キリストは、申命記二十八章に挙げられる悲惨なこと全てから私たちが贖い出したと言っているのなら、それはつまり、私たちの物理的な繁栄を保証していることとなり、私たちはなぜパウロはかつて彼自身について、「今に至るまで、私たちは飢え、渇き、着る物もなく、虐待され、落ち着く先もありません」（第一コリント 4:11）と書いたのかと、思い巡らせなくてはならなくなるでしょう。またパウロが以下の通り書いたことも不思議と思うことになるでしょう。

私たちがキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、  
苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、  
剣ですか。「あなたのために、私たちは一日中、死に定められて  
いる。私たちは、ほふられる羊とみなされた。」と書いてあるとお  
りです（ローマ 8:35-36）。

明らかに、パウロは全てのクリスチャンが、キリストが律法ののろいから私たちを救ってくださったことで、迫害、飢え、裸、危険、または剣からも免れられるということならば、このような言葉は書かなかったでしょう。

私たちはまた、なぜイエスが以下の天国の描写を預言したのか、その理由について考えるべきでしょう。

そうして、王は、その右にいる者たちに言います。『さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。あなたがたは、わたしが空腹であったとき、わたしに食べる物を与え、わたしが渇いていたとき、わたしに飲ませ、わたしが旅人であったとき、わたしに宿を貸し、わた

## 弟子をつくる指導者

しが裸のとき、わたしに着る物を与え、わたしが病気をしたとき、わたしを見舞い、わたしが牢にいたとき、わたしをたずねてくれたからです。』すると、その正しい人たちは、答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹なのを見て、食べる物を差し上げ、渴いておられるのを見て、飲ませてあげましたか。いつ、あなたが旅をしておられるときに、泊まらせてあげ、裸なのを見て、着る物を差し上げましたか。また、いつ、私たちは、あなたのご病気やあなたが牢におられるのを見て、おたずねしましたか。』すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。』（マタイ 25:34-40、一部強調）。

確かに、ある信者たちは、「律法ののろいから贖い出されて」いるとは言っても、自分たち自身がとても繁栄しているとは思えない状況にあることに気づくでしょう。しかし、イエスが描写した骨の折れる状況下で、神は苦境にある信者の必要を満たし、またイエスはそのことを必要以上に持つ他の信者を通して行うのです。時には必要が満たされない様な状況に見えても、神は必ず私たちの必要を満たす方であることを私たちは期待できます。

最後に、繁栄の福音を伝える説教者たちは、自分たちもアブラハムの様に反映したいと願っていますが、彼ら自身、電気も水もないテント生活を一生送りたいと願っているのか、真剣に自問すべきです！旧約聖書の中である程度神から繁栄をもって祝福された人たちは、神の栄光の為にそれを用いて、その豊かさを他の人たちと分かち合い、与える様求められました。アブラハムは、何百人分もの雇用を提供し、その結果、彼らの必要を満たすことにより、このことを実践しました（創世記 14:14参照）。ヨブもその様に行い、やもめやみなしごの世話をすることに彼の富を用いる証をしました（ヨブ 29:12-13、31:16-22）。ビジネスを築くのに長けた人たちは、まず神に

従い、自分自身の様に隣人を愛することが最も重要な仕事であることを肝に銘じておくべきです。

**「聖書は、私たちが富むためにイエスが貧しくなったと書いてある」 ("Scripture Says That Jesus Became Poor so That We Could Become Rich")**

確かに聖書にはこの様に書いてあります。

あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みを知っています。  
すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくな  
られました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富  
む者となるためです (第二コリント 8:9)。

この箇所は、イエスが天で物理的に富んでおられたのに、地上で物理的に貧しく  
なられたと明白に意味しているので、パウロは読者がキリストの貧しさによって富む  
者となると書いた時、彼が思っていたことは物理的な豊かさである、ということが議  
論されています。そのように考える人たちは、パウロが最初の箇所で、物理的な豊か  
さと貧しさについて話していたのだから、勿論、彼は後半の箇所で霊的な豊かさにつ  
いて話してはいなかった、と言います。

しかし、もしパウロがキリストの物理的な貧しさの故に、私たちが物理的に富む  
者となるということを実際に意味したのなら、私たちは、パウロがその同じ手紙のほ  
んの数節後に、以下の様に書いた理由について考える必要があります。

労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食  
べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました (第二コリン  
ト 11:27)。

もしパウロが第二コリント八章九節で、私たちが物理的に富むようになる為に、  
キリストは物理的に貧しくなられた、ということの意味したのなら、キリストの御旨  
がまだパウロの人生に行われていなかったことは明らかです！パウロは、私たちがこ  
の地上で物理的に富む者とされる為に、キリストが物理的に貧しくなった、というこ  
とを意味しませんでした。イエスは私たちが霊的に富む者、つまり、イエスが使った

## 弟子をつくる指導者

表現（ルカ 12:21参照）を拝借するならば「神の前に富む者」となること、私たちの宝と心がある天で富むことを意味しました。

繁栄の福音を伝える説教者たちが主張する様に、パウロは文の一部で物理的な富について話していたので、他の箇所、またはその文で、霊的な富について語っていることは到底あり得ない、と想定するのは本当に安全なのでしょうか。スミルナの町にいた弟子たちに向かって語られたイエスの以下の言葉について考えてみてください。

わたしは、あなたの苦しみと貧しさを知っている。・・・しかしあ

なたは実際は富んでいる（黙示録 2:9前半）。

明らかに、イエスはスミルナにいた信者が直面していた物理的な貧困について語っていましたが、そのすぐ後には、信者たちの霊的な富について語っていません。

**「イエスは私たちが与えると百倍になって返って来ると約束した」 ("Jesus Promised a Hundred-Fold Return on Our Giving")**

イエスは、犠牲を払う者には百倍の見返りを約束しました。イエスが言った言葉そのものを読んでみましょう。

まことに、あなたがたに告げます。わたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、畑を捨てた者で、その百倍を受けない者はありません。今のこの時代には、家、兄弟、姉妹、母、子、畑を迫害の中で受け、後の世では永遠のいのちを受けます（マルコ 10:29-30）。

これは、よく繁栄の福音を伝える説教者たちが主張する様な、説教者に施す人たちへの約束ではないことに注意してください。むしろ、福音をあまねく宣べ伝える為に、家や畑や家族を捨てる人たちへの約束です。イエスはそのような人たちは、今の世で受けている百倍を受ける約束をしました。

しかし、イエスはそのような人たちが文字通り、百の家、畑を所有するようになると、繁栄の福音を伝える説教者たちが主張する様に、約束していたのでしょうか。いいえ、文字通り百人の母や百人の子供たちを得ることを約束していなかったことと、

## 管理責任

何ら変わりはありません。イエスは単に、家や家族を捨てる人たちは、仲間の信者たちが家を彼らに解放し、その家族として迎えられるということをお願いしていただけです。

イエスはまた、そのような人たちに迫害と永遠の命をも約束したことにも注目してください。これは、永遠のいのちを求めていた若い金持ちの役人が、悲しみながら立ち去った時、イエスが「金持ちが神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい」（マルコ 10:25）と宣言したのを弟子たちが見たという箇所全体の文脈を私たちに思い出させます。

弟子たちはイエスの言った言葉に驚き、自分たちが神の御国に入る可能性について不安に思いました。彼らは、彼らがどんな犠牲を払ってイエスに付き従ったかについて、イエスに思い出させました。それこそ、イエスが「百倍」の約束を語った時です。

ですから、ほんの数秒前にイエスが金持ちの男に、もし永遠のいのちが欲しいのなら、全てを売り払って貧しい人たちに与える様言われた、という事実に照らし合わせても、繁栄の福音を伝える説教者の誰もが、ここでは文字通り、物理面で百倍報いて、短い期間ですぐに私たちが物凄く裕福にさせることをイエスが約束していると、私たちが説得しようとしているのは信じ難いことです！

私たちがここで取り上げた聖書箇所の他にも、繁栄の福音を伝える説教者たちは色々と真理を捻じ曲げていますが、この本で書ける範囲は限られています。よく注意してください！

### 覚えておくべき格言 (A Maxim to Remember)

英国国教会で、メソジスト運動の創始者、ジョン・ウェスレーは、金銭の正しい見方について、素晴らしい格言を残しました。それは、「できるだけ儲けて、できるだけ貯めて、できるだけ与えなさい」です。

これは、クリスチャンはまず第一に、神から与えられた能力と機会を用いて稼ぐ為に熱心に働くべきです。その際、正直に、またキリストのどんな命令にも逆らうことなく行う様、気を付けなくてはなりません。

## 弟子をつくる指導者

第二に、クリスチャンは、自分たちにはなるべく少なく使うことで、節約して、質素な生活を送るべきです。それにより「できるだけ貯める」ことができます。

最後に、最初の二つに従った後は、クリスチャンは十一献金に限ることなく、「できるだけ与える」べきです。自分たちにはなるべく金銭を使わないことで、やもめやみなしごを養い、福音を世界中に宣べ伝えられるかもしれません。

初代教会は確かに、そのような管理責任を実行し、貧しい者たちに分け与えることは、新約の生き方の一般的な特徴でした。最初の信者たちは、「持ち物を売って、施しをなさい」とか、「自分のために、古くならない財布を作り、朽ちることのない宝を天に積み上げなさい」（ルカ 12:33）といった、イエスが弟子たちに与えた命令を真剣に受け止めました。ルカは、初代教会についてこう記録しています。

信者となった者たちはみないっしょにいて、いっさいの物を共有にしていた。そして、資産や持ち物を売っては、それぞれの必要に応じて、みなに分配していた…信じた者の群れは、心と思いを一つにして、だれひとりその持ち物を自分のものと言わず、すべてを共有にしていた。使徒たちは、主イエスの復活を非常に力強くあかしし、大きな恵みはそのすべての者の上にあった。彼らの中には、ひとりも乏しい者がなかった。地所や家を持っている者は、それを売り、代金を携えて来て、使徒たちの足もとに置き、その金は必要に従っておのおのに分け与えられたからである（使徒の働き 2:44-45; 4:32-35）。

聖書ではまた、初代教会が貧しいやもめたちを養い、彼女たちの差し迫った必要の為に施したことについても明白です（使徒の働き 6:1; 第一テモテ 5:3-10参照）。

パウロは、これまでに生きた人の中で最も偉大な使徒であり、福音を異邦人に届ける様神に任され、新約聖書の殆どの書簡を書いた人間であり著者ですが、貧しい人の物質的必要に応じて施すことは、彼のミニストリーの重要な部分であると見なしていました。パウロが創設した教会の間で、彼は貧しいクリスチャンを施す為に、沢山



## 管理責任

の募金を集めました（使徒の働き 11:27-30; 24:17; ローマ 15:25-28; 第一コリント 16:1-4; 第二コリント 8-9; ガラテヤ 2:10参照）。パウロは自分が受けた福音を、ペテロ、ヤコブ、またヨハネに吟味される様、提示する為に、少なくとも十七年間エルサレムへ足を運びました。誰一人として、パウロが宣べ伝えてきたメッセージに非を認めることはできず、パウロはガラテヤ人への彼の手紙の中で、その状況について詳しく話しながら、この様に思い出したのです。「ただ私たちが貧しい人たちをいつも顧みるようにとのことでしたが、そのことなら私も大いに努めて来たところです」（ガラテヤ 2:10）。ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、そしてパウロの頭の中では、貧しい者たちに憐みを見せることは、福音を宣べ伝える次に大切なことでした。

### まとめ (In Summary)

この主題について、弟子をつくる指導者たちへの一番の助言は、使徒パウロの言葉です。パウロはテモテに、「金銭を愛することが、あらゆる悪の根である」と忠告し、「ある人たちは、金を追い求めたために、信仰から迷い出て、非常な苦痛をもって自分を刺し通した」と言った後、テモテにこの様に訓戒しました。

神の人よ。あなたは、これらのことを避け、正しさ、敬虔、信仰、愛、忍耐、柔和を熱心に求めなさい（第一テモテ 6:11）。



## 第三十三章

### 伝道の秘訣 (Secrets of Evangelism)

アブラハムが自分の愛する息子、イサクを心から神へ捧げた時、神はアブラハムに次の約束をしました。

あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。あなたがわたしの声に聞き従ったからである(創世記 22:18)。

使徒パウロは、この約束はアブラハムとその子孫(訳者注:英語では複数形ではなく、単数形で表記)にされたもので、この単数形の子孫はキリストである、と指摘しています(ガラテヤ 3:16)。キリストにあって、全ての国民、もしくは更に正確に言えば、地上の全ての種族が祝福されるのです。このアブラハムへの約束は、地球上の何千もの異邦人種族がキリストにある祝福にあずかることを預言したものでした。それらの種族は、お互いに住む場所も異なり、人種、文化、また話す言語も異なるので、それによって区別がつけます。神はそれら全ての種族をキリストにあって祝福したいと願っており、その為に、イエスは全世界の罪の為に命を捧げたのです(第一ヨハネ 2:2参照)。

イエスは「いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです」(マタイ 7:14参照)と言われましたが、使徒ヨハネは、将来神の御国には、世界中の全種族からの代表がそれぞれいる、と信じる良い理由を私たちに残しています。

その後、私は見た。見よ。あらゆる国民、部族、民族、国語のうち

## 弟子をつくる指導者

から、だれにも数えきれぬほどの大ぜいの群衆が、白い衣を着、しゅろの枝を手に持って、御座と小羊との前に立っていた。彼らは、大声で叫んで言った。「救いは、御座にある私たちの神にあり、小羊にある」（黙示録 7:9-10、一部強調）。

従って、神の子供たちには、いつか神の御座の前で、数々の民族グループが一つとされる大いなる楽しみと期待があるのです！

多くの現代の宣教戦略家たちは、世界中に何千と残された「隠れた」種族へ布教することに大きな重きを置いて、各種族にこれから成長する教会を建てる望みを持っています。確かにこれは称賛すべきことで、イエスも私たちに、世界中へ行って「あらゆる国の人々（文字通りの意味は、種族）を弟子としなさい」（マタイ 28:19）と命じました。しかし人間の計画は、いくら良い思いで始めても、特に聖霊の導きがなければ、良くなるよりも、更に悪化させてしまうことがよくあります。私たちは、神の国を建て上げたいのなら、神の知恵に従うことが不可欠です。神はどの様にして私たちが世界中に弟子をつくるか、マタイ二十八章十九節にあることに加えて、更なる情報と指示を与えてくださいました。

恐らく、大宣教命令を成就しようと努力する人たちが、最も見逃していることは、神が全ての中で最も偉大な伝道師であり、私たちは神と共に働くべきであり、神の為に働くのではない、という事実です。神程、福音を世界へ届けることを気にかけている方は他にはおらず、その成就に向かって、他の誰よりも熱心に働きかけています。神は、昔も今もずっと熱心であり、その為に命を捨てた程です。神は、誰をも造られる前からこのことについて考えておられ、今でもそうなのです！これこそが献身なのです！

## キリストの為に世界を勝ち取る（"Winning the World for Christ"）

私たちは新約聖書の書簡を読む時、そこに、信者たちが「そこから出て行き、キリストの為に世界へ羽ばたけ！」といった、（今日、私たちがよく行う様な）熱のこもった嘆願はどこにも見つけられません。初代教会のクリスチャンとその指導者たち

## 伝道の秘訣

は、神が世界を救う為に多大な努力をもって働かれており、また彼らの仕事は、神が彼らを導く通りに神に協力することであると知っていました。誰がこのことを良く知っていたかと言えば、使徒パウロであり、彼は誰からも「主へ導かれ」ませんでした。むしろ彼は、ダマスコへの旅路で、神の直接の働きによって改心されました。使徒の働きの中で、私たちは、聖霊の油注ぎを受け、聖霊に導かれた人々が聖霊と協力した為に、教会が増え広がっていったことを絶えず見えています。聖書の中のこの書は「使徒の働き」と呼ばれていますが、本来は「神の働き」と呼ばれるべきです。この使徒の働きの導入部分で、ルカは、彼の最初の報告書（彼の名前が付いた福音書）は、「イエスが行ない始め、教え始められたすべてのこと」（使徒の働き 1:1、一部強調）の記録であった、と述べています。ルカは当然、使徒の働きという書はイエスが行い、また教え続けたことの説明であると信じていました。神は、聖霊の油注ぎを受け、聖霊に導かれた神の協力者であるしもべたちを通して働かれました。

もし初代教会のクリスチャンたちが、「そこから出て、隣人に証し、キリストの為に世界を勝ち取る働きをする」様に励まされていなかったなら、神の御国建設に関する彼らの責任は一体何であったのでしょうか。福音を公に宣言することに特に呼びや賜物がある（使徒や伝道師の）訳ではない人たちは、従順で聖い生活を送ること、また彼らにを非難したり、また質問したりする人たちに対して弁明できる準備をしておく呼びがありました。ペテロは例えば、このように書きました。

いや、たとえ義のために苦しむことがあるにしても、それは幸いなことです。彼らの脅かしを恐れたり、それによって心を動揺させたりしてはいけません。むしろ、心の中でキリストを主としてあがめなさい。そして、あなたがたのうちにある希望について説明を求め人々には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしておきなさい。ただし、優しく、慎み恐れて、また、正しい良心をもって弁明しなさい。そうすれば、キリストにあるあなたがたの正しい生き方をのしる人たちが、あなたがたをそしったことで恥じ入るでしょう

## 弟子をつくる指導者

(第一ペテロ 3:14-16)。

ペテロが宛てたクリスチャンたちは、迫害に耐えていました。しかし、クリスチャンたちが世と違わなければ、世は(勿論)彼らを迫害しないでしょう。これこそが、今日多くの場所であまり迫害がない一つの理由です。なぜなら、いわゆるクリスチャンと呼ばれる人たちが、他の人たちと何ら変わらない行動を取っているからです。彼らは全くクリスチャンではなく、従って誰も彼らを迫害しません。しかし、この種の「クリスチャン」の多くは、毎週日曜日に、「彼らの信仰を隣人と分かち合う」様に強く勧められます。彼らが隣人に実際に証する時、その隣人たちは彼らが生まれ変わりの体験をしたクリスチャン(であるらしい)ということを知り驚きます。更に悪いことは、彼らの伝える「福音」は、もし良い行ないや神への従順が救いと関係あると思うなら、それは間違いである、という「良い知らせ」を隣人に伝えている域をなかなか出ないということです。最も大切なのは、隣人がただ「イエスを個人的な救い主として受け入れる」ことだけです。

それに比べて、初代教会のクリスチャンたちは、(彼らの主は真にイエスであり、)暗やみの中の光の様に目立っており、従って彼らは伝道についての授業を取ったり、勇気を振り絞って自分たちはキリスト者であることを隣人に言う必要はありませんでした。彼らの義について、質問されたり、非難されたりする時、彼らには福音を分かち合う沢山の機会がありました。彼らは心の中で、イエスを主として特別に位置付け、またペテロが言っていた様に弁明できる準備をしておく必要があっただけでした。

恐らく、現代のクリスチャンと初代教会のクリスチャンの最も大きな違いはこれです—現代のクリスチャンは、自分が知っていて、信じていること、つまり「教義」と呼ばれるものによって特徴付けられていると考える傾向があり、従って、私たちはそれを学ぶことに目標を定めます。それとは対照的に、初代教会のクリスチャンは、その人の取る行動、つまりキリストの命令に従順であるかどうか集中しており、それによって特徴付けられると信じていました。最初の十四世紀の間、クリスチャンは実際誰も個人の聖書を所有していなかったということに気づくことは興味深いこと

## 伝道の秘訣

です。従って、現代クリスチャンの基本的な日課の一つとなっている「毎日聖書を読む」ことは、不可能なことでした。私は決して、現代のクリスチャンが毎日聖書を読むべきではない、と言っている訳ではありません。私はただ、余りにも多くのクリスチャンが、聖書を勉強することを、それに従うことよりも重要視してしまっている、と言いたいです。最終的に、(私たちのレベルには到底追いつくことができない、他の二万九千九百九十九の宗派の信者たちとは違い) 私たちこそ正しい教義を得た、と自分たち自身を誇るようになり、しかし相変わらず他人の噂話をしたり、嘘をついたり、地上に宝を積んでいるのです。

もし私たちが、人々が福音をもっと受け入れられる様にその心を柔らかくさせたいと願うのなら、私たちはその教義によってではなく、むしろ行動によってそれをすべきでしょう。

### 神という最も偉大な伝道師 (God, the Greatest Evangelist)

神の御国を建て上げる御働きについて、もう少し詳しく見ていきましょう。神の御働きを理解する程、私たちは益々神の良き協力者へとなることができます。

人々がイエスを信じる時、それは彼らの心の中ですることです (ローマ 10:9-10 参照)。彼らは主イエスを信じ、従って、悔い改めます。彼らは自分の意思を捨て、自分の心の王座にイエスを迎えます。信じることは、心の変化が伴います。

同様に、人々がイエスを信じない時、それも彼らの心の中ですることです。彼らは、神を拒み、従って悔い改めません。不信仰は、その人の心を変えないという、継続的な決断です。

イエスは、全ての人の心はとても固い為、御父がその人をご自身に引き寄せない限り、誰も神のもとへ来ることはできないと言いました (ヨハネ 6:44 参照)。神は恵み深く、また絶えず皆をイエスのもとへあらゆる手段を用いて引き寄せようとしており、それら全ては人々の心に触れ、またそれらを通して人々は心を柔らかくするか、もしくは固くするかを絶えず決めなくてはなりません。

神はどんな方法で、人々がイエスに引き寄せられることを期待して、その心に触

## 弟子をつくる指導者

れるのでしょうか。

まず、イエスは神の創造を用います。パウロはこう書いています。

というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。なぜなら、神について知りうることは、彼らに明らかであるからです。それは神が明らかにされたのです。神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです（ローマ 1:18-20、一部強調）。

パウロは、人々は「彼らに明らかである…真理をはばんでいる」と言っていることに注目してください。つまり、真理が彼らの内で起き上がり、彼らに直面しますが、彼らはそれを押し返して、内なる咎めを拒むのです。

全ての人に明白な心の中にある真理とは一体何なのでしょう。パウロは、「被造物」を通して表される、神の「目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性」についての真理であると言いました。人々は神の創造を見て、神が存在することは明らかであり<sup>101</sup>、神について少し描写するならば、神はとてつもなく力強く、驚く程創造的で、信じられない程知性があり、賢いお方であるということを、心の中で知っているのです。

パウロの結論は、そのような人々に「弁明の余地はない」ということですが、それは正しいです。神は絶えず皆に叫び、ご自身を明らかにし、彼らの心を柔らかくさせようとしませんが、殆ど人は耳を塞ぎます。しかし神は、全ての人的人生の中で、花、鳥、赤ん坊、結晶、バナナ、林檎、その他数え切れない程多くのものを使って、奇跡を見せながらそれぞれの人に問いかけることを決して止めません。

---

<sup>101</sup> 101だからこそ、聖書は、「愚かな者は心の中で、「神はいない。」と言っている。」（詩篇 14:1、一部強調）と宣言している。愚かな者だけが、そのように明らかな真理をはばむのである。



## 伝道の秘訣

もし神が存在し、その創造物に表れている程素晴らしいお方なら、当然神は私たちの従順の対象となるべきです。この様な心の中に与えられた啓示には、一つの重要なメッセージが含まれています。それは、悔い改めなさい！というものです。それ故、パウロは以下の通り、全ての人々が既に悔い改めについて、神の呼びを聞いたという考えを支持しています。

でも、こう尋ねましょう。「はたして彼らは聞こえなかったのでしょうか。」むろん、そうではありません。「その声は全地に響き渡り、そのことばは地の果てまで届いた」（ローマ 10:18）。

パウロは実際、以下の有名な詩篇十九編から引用していました。

天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。 昼は昼へ、話を伝え、夜は夜へ、知識を示す。 話もなく、ことばもなく、その声も聞かれない。 しかし、その呼び声は全地に響き渡り、そのことばは、地の果てまで届いた（詩篇 19:1-4前半、一部強調）。

ここでも再び、神は全ての人に、その創造を通して、昼も夜も語っていることが示されています。もし人々が正しく神の創造のメッセージに反応するのなら、彼らはひれ伏して、次の様なことを何か叫ぶでしょう。「素晴らしい創造主よ、あなたは私を創造されました。あなたが私を造られたのは、当然のことながら、私があなただの御旨を行う為です。ですから、私はあなたに従います！」

### 神が語る他の方法 (Another Means by Which God Speaks)

この内外からの啓示に関連して、もう一つ神が与える内なる啓示は、人がいかに、創造の奇跡に触れているかにはかかっていません。その内なる啓示は、各人の良心で、それは神の律法を絶えず啓示する声です。パウロはこう書きました。

・・律法を持たない異邦人が、生まれつきのままで律法の命じる行ないをするばあいは、律法を持たなくても、自分自身が自分に対する律法なのです。 彼らはこのようにして、律法の命じる行ないが

### 弟子をつくる指導者

彼らの心に書かれていることを示しています。彼らの良心もいっしょになってあかしし、また、彼らの思いは互いに責め合ったり、また、弁明し合ったりしています。・・・私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって人々の隠れたことをさばかれる日に、行なわれるのです（ローマ 2:14-16）。

つまり、私たちは皆、善悪について知っているのです。もしくは、更に言うならば、私たちは皆、神を喜ばすことが何であり、また喜ばせないことが何であるか知っており、神は裁きの日に、各人が神を喜ばせなかったと知っていることについて、それぞれに責任を課す、ということです。人は年を取ると、確かに自分の罪を正当化したり、良心の声を無視したりすることがもっと巧みになりますが、神は決してその人の内に神の律法を語ることを止めません。

### 第三の方法 (A Third Means)

しかし、それだけではありません。全ての人に悔い改めに導く働きをされておられる、最も偉大な伝道師である神は、更に別の方法で人々に語り掛けます。もう一度、パウロの言葉を読んでみましょう。

というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです（ローマ 1:18、一部強調）。

パウロは、神の御怒りが啓示されていると言ったのであって、いつか啓示されるであろうとは言わなかったことに注目してください。人間らしさを損なうような、多くの悲しい、悲劇的な出来事において、事の大小にかかわらず、神の御怒りはすべての人に明らかです。もし神が力ある、何でもでき、何でも防げるお方なら、そのようなことが神を無視する人々の上に起こる時、それらは単に神の御怒りの表れということになるでしょう。無分別な神学者と愚かな哲学者だけがこのことを理解できません。しかし、神の御怒りの最中でさえも、その御怒りを受ける対象は、受けるに値するよりももっと少ない御怒りを受けることが多いことから、神の恵みと愛は表れており、

## 伝道の秘訣

従って悔い改めのない者たちの死後に待つ永遠の御怒りについて、愛をもって警告しているのです。これは、悔い改めの必要な人々の注意を促す為に神が用いるもう一つの方法です。

### 第四の方法 (A Fourth Means)

最後に、神はその創造の御業、人に与えた良心、またわざわいを通してだけでなく、福音の呼びを通して、人々をご自分に引き寄せようとしています。神に仕える者たちが神に従い、福音を宣べ伝えるので、創造、良心、またわざわいの同じメッセージがもう一度再確認されます。それは、悔い改めなさい！です。

私たちが伝道ですることは、神がすることに比べると、比べものにならないということはあなたもわかると思います。神は全ての人の毎日の人生の瞬間毎に、絶えず伝道していますが、一方で、最も偉大な人間の伝道師でも、数十年というスパンで数十万の聴衆に向かって話す位でしょう。その様な伝道師たちは、一般的に言って、ある聴衆に向かって、たった一度、しかも短時間説教します。その一回の説教では、結局のところ、そのような伝道師たちができることと言えば、ある町、村、もしくは家が彼らを受け入れない時に、イエスの命令を踏まえて彼らの足のちりをはらうこと位です（マタイ 10:14参照）。以上のことから、決して絶えることなく、万人の為にあり、劇的に内側から咎めを与える神の伝道と、私たちのかなり限界のある伝道を比べると、実に全く比べものにならない、ということがわかります。

この様な視点は、伝道と神の御国の建設における私たちの役割を、より深く理解させてくれます。しかし、私たちの役割についてより具体的に考慮する前に、私たちには見逃してはならない、もう一つの大切な要素があります。

先にも記した通り、悔い改めと信じることは、人々が心の中で行うことです。神は、全ての人々がへり下り、心を柔らかくし、悔い改めて、主イエスを信じることを願っています。その目的に向かって、神は絶えず、ここまで説明した様なあらゆる方法で人々の心に働きかけています。

神はまた、一人一人の心の状態を当然のことながらご存知です。神は誰の心が柔

## 弟子をつくる指導者

らかに、また誰の心が固いかご存知です。神は誰がその途絶えることのないメッセージを聞き、また誰が無視するかご存知です。神はある種のわざわいが人生に降りかかる時、誰がその心を開き、悔い改めるか御存じです。神は誰が心を閉ざして、悔い改めの希望がないかご存知です。（例えば、神は、イスラエルの心が悔い改めどころではなかった為に、エレミヤに三度、彼らの為に祈ることさえしてはならないと言いました。エレミヤ 7:16; 11:14; 14:11参照。）<sup>102</sup>神は、神の霊から来るほんのもう少しの咎めで、悔い改めることができる程柔らかい心を誰が持っているかご存知です。

これらを全て考慮に入れた上で、私たちは、福音を宣べ伝え、神の御国を建て上げる為の教会の責任について、何を学ぶことができるでしょうか。

### 原則その一 (Principle #1)

まず第一に、神という全ての九十五パーセントの働きをし、既に全ての人の毎日の歩みの中で執拗に呼びかけている偉大な伝道師は、恐らく福音を宣べ伝える為にそのしもべたちを遣わすのに、最も受け入れ難い人よりも、最も受け入れやすい人のもとへ送ると考える方が理にかなってはいないでしょうか。私はそう思います。

神という既に全ての人生のあらゆる瞬間に福音を宣べ伝えている偉大な伝道師は、何年もの間、神が語ってきた他のことを全て無視しているような人たちに、あえて福音を送るようなことをわざわざ選ばない、ということはあるべきではないのでしょうか。もし彼らが、神の言わんとする最初の九十五パーセントを完全に無視してきたのなら、なぜ神は残りの五パーセントをそのような人たちに伝えるという、無駄な努力をすべきなのでしょう。むしろ、彼らの心が柔らかくなることを望んで、そのような人たちには裁きを送ると私は思います。もし彼らが心を柔らかくしたならば、もしくは、そうした時に、神はそのしもべを遣わして、福音を宣べ伝える、と考える方が理にかなっているように思います。

---

<sup>102</sup> 102 更に聖書には、(パロの様に) 神に対して心を頑なに閉ざし続ける人々の心を、神は更に意識的に頑なにものにさせることさえある、ということが記されている。そのような人々が悔い改める望みは殆どない様に思われる。

## 伝道の秘訣

ある人たちは、神は、悔い改めないことを知っている人たちにあえてしもべたちを遣わすことで、彼らが裁きの御座の前に立つ時に言い訳ができないようにしている、と言うかもしれません。しかし聖書によると、神はその創造を通してご自身を絶えず啓示してきたので、彼らは既にもう言い訳ができない、ということ覚えていてください（ローマ 1:20参照）。従って、神がそのような人たちにしもべの一人を遣わすならば、それは、彼らが責任を負う為ではなく、彼らが今までよりももっと責任を負うようになる為です。

神は、どちらかと言えば受け入れやすい人たちのもとへ、ご自分のしもべを導くということが実際正しければ、神のしもべである私たちは祈りをもって、神の知恵を求めるべきです。そうすれば、神が私たちが収穫に熟した人たちのもとへ導いてくださるかもしれません。

### 聖書からの事例 (A Scriptural Example)

この原則は、使徒の働きに記録されている、伝道師ピリポのミニストリーの中で見事に表されています。ピリポはサマリヤにいた受け入れやすい群衆に説教していましたが、その後、御使いによってある特定の道へ旅する様導かれました。そこで彼は信じられない程受け入れやすい求道者に導かれました。

ところが、主の使いがピリポに向かってこう言った。「立って南へ行き、エルサレムからガザに下る道に出なさい。」（このガザは今、荒れ果てている。）そこで、彼は立って出かけた。すると、そこに、エチオピヤ人の女王カンダケの高官で、女王の財産全部を管理していた宦官のエチオピヤ人がいた。彼は礼拝のためエルサレムに上り、いま帰る途中であった。彼は馬車に乗って、預言者イザヤの書を読んでいた。御霊がピリポに「近寄って、あの馬車といっしょに行きなさい。」と言われた。そこでピリポが走って行くと、預言者イザヤの書を読んでいるのが聞こえたので、「あなたは、読んでいることが、わかりますか。」と言った。すると、その人は、

## 弟子をつくる指導者

「導く人がなければ、どうしてわかりましょう。」と言った。そして馬車に乗っていっしょにすわるように、ピリポに頼んだ。彼が読んでいた聖書の個所には、こう書いてあった。

「ほふり場に連れて行かれる羊のように、また、黙々として毛を刈る者の前に立つ小羊のように、彼は口を開かなかった。彼は、卑しめられ、そのさばきも取り上げられた。彼の時代のことを、だれが話すことができようか。彼のいのちは地上から取り去られたのである。」

宦官はピリポに向かって言った。「預言者はだれについて、こう言っているのですか。どうか教えてください。自分についてですか。それとも、だれかほかの人についてですか。」ピリポは口を開き、この聖句から始めて、イエスのことを彼に宣べ伝えた。道を進んで行くうちに、水のある所に來たので、宦官は言った。「ご覧なさい。水があります。私がバプテスマを受けるのに、何かさしつかえがあるでしょうか。」そこでピリポは言った。「もしあなたが心底から信じるならば、よいのです。」すると彼は答えて言った。「私は、イエス・キリストが神の御子であると信じます。」そして馬車を止めさせ、ピリポも宦官も水の中へ降りて行き、ピリポは宦官にバプテスマを授けた。水から上がって來たとき、主の霊がピリポを連れ去られたので、宦官はそれから後彼を見なかったが、喜びながら帰って行った（使徒の働き 8:26-39、訳者注：37節は、新改訳聖書本文では[本節欠如]とされているが、ここでは、その注釈の内容を挿入した）。

靈的に非常に飢え渴いていた為に、神を賛美しようとアフリカからエルサレムを

## 伝道の秘訣

旅し、またイザヤの預言書の巻物の複写の、少なくともその一部を購入していた人に対して神の働きをする為に、ピリポは、神によってその人がイザヤの第五十三章、つまり旧約聖書の中で、キリストがあがないの供え物であるという詳細がもっとも明白に記されている箇所を読んで、イザヤは誰について書いているのかと思い巡らしていた、丁度そのところにやって来て、その彼が読んでいた箇所の説明をしようとするのです！神はその人の心を知っており、ピリポを遣わしました。

### より良い方法 (A Better Way)

私たちがしなくては伝道されないのでは、と思う罪悪感から、手当たり次第に、もしくは体系的に、福音を受け入れにくい人々に近づくよりも、受け入れやすい人々へ聖霊によって導かれる方が、どれ程もっとやりがいがあることでしょうか。以下のことを忘れないでください。あなたが出くわす全ての人は、神によって絶え間なく伝道されてきている人なのです。人々が神を受け入れる用意があるかどうかを図る場合には、全ての人は何らかの方法で罪悪感に対処しているので、私たちは、本人の良心がどのように彼らに働き、決心するよう取り扱っているかを、まず尋ねた方が良いでしょう。

この同じ原則の他の例は、ペテロのミニストリーによって、コルネリオの家が救われたことです。ペテロは超自然的に、このとても受け入れやすい異邦人グループに、福音を宣べ伝える為に導かれました。コルネリオは確かに、施しを与え、祈る生活を通して表されている様に（使徒の働き 10:2参照）、自分の良心に聞いて、神を求めていた人でした。神は彼をペテロと結び付け、彼はペテロのメッセージを心開いて聞き、見事に救われたのです。

私たちは祈り、聖霊が私たちが心の開いている人へ導くよう求めることの方が、私たちの町を四分円に区切り、各家々を訪問する証チームを編成する、大掛かりで、時間を浪費する計画を作るよりもよっぽど賢いことです。もしペテロがエルサレムの宣教戦略会議に参加していたり、ピリポがサマリヤで宣教し続けたりしていたら、コルネリオの家もエチオピア人の宦官も宣教されないままでいたでしょう。

## 弟子をつくる指導者

伝道師や使徒たちは勿論、福音を受け入れやすい人たち、また、そうでない人たちが混在する群衆を前に、宣教するよう導かれます。しかし、宣教する為に遣わされる場所についてさえ、彼らは主を求めるべきです。もう一度言いますが、使徒の働きに見る記録は、聖霊に導かれ、聖霊に満たされた人々が神がその御国を建て上げる働きに協力するものです。初代教会のやり方と、現代の教会のものとは、何と云う違いだったでしょう。そして、何と云う結果の違いでしょう！なぜ成功例の方を真似しないことがありますでしょうか。

### 原則その二 (Principle #2)

この章の最初の部分で見た聖書の原則は、他にはどの様なかたちで、伝道と神の御国の建設における私たちの役割を理解する助けとなっているのでしょうか。

もし神が、その創造の御業、人間に与えた良心、そしてわざわいを通して、全ての人を悔い改めに導くよう十分取り計らっているのなら、福音を宣べ伝える人たちは、それに反するメッセージを伝えない様十分注意する必要があります。しかし、多くの人は伝えてしまっています！彼らの説教は、神が既に罪人たちに言ってわからせようとしている全てのことに真っ向から反しています！彼らの聖書に基づかない恵みのメッセージは、聖さと従順が最終的に永遠の命を得るのに重要ではない、という考えを助長します。彼らは実際はそうではないのに、自分たちが救われていることを今確信しているので、救いの為に悔い改める必要があることを語らず、また、救いは行いによるものではないと（パウロが意図していたこととは全く違う様に曲解し）強調することにより、彼らは実際には神に反する働きをしており、人々を永遠の滅びへと封印するに至る、惑わしの深みへと導いています。神の福音を伝える者たちが、自分たちこそが神を表す代理人だと主張するその神に対して、実際は反する働きをしているとは、何と云う悲劇でしょう！

イエスは「罪の赦しを得させる悔い改め」を宣べ伝える様命令しました（ルカ 24:47）。そのメッセージは、神が罪人の人生の中でずっと言っていることを再確認します。福音を宣べ伝えることで、人々の心にそれが突き刺さり、心が頑なな人た



## 伝道の秘訣

ちを怒らせます。しかし、優しい現代の福音は、どれ程神は人々を愛しているかということ（どの使徒も使徒の働きの中で福音を宣教している時に一度も語らなかったこと）を伝え、神は彼らを怒ってはいないと誤って思わせることとなります。彼らはよく、ただ「イエスを受け入れる」ことだけが必要であると教えられます。実際は、「あなたはイエスを受け入れますか」ではなく、「イエスはあなたを受け入れますか」が質問なのです。その答えは、あなたが悔い改めず、イエスに従い始めないのなら、あなたは神にとって忌まわしいものであり、神の憐みだけが、あなたの地獄への運命を未然に防いでいるのです。

神の恵みを安っぽいものとする現代の福音に焦点を当てる時に、神が権威を与え、国を支配する為に選ばれた指導者たちによって統治されている多くの国々が（そして、これは議論の余地はありません。ダニエル 4:17, 25, 32; 5:21; ヨハネ 19:11; 使徒の働き 12:23; ローマ 13:1参照）、なぜ西洋の宣教師たちに対して完全に閉ざしてしまったのか、思い巡らさずにはられません。それは神が、それらの国々に偽りの福音が入らないようにしている為なのでしょう。

### 原則その三 (Principle #3)

この章の最初に見た二つの原則を学ぶことは、偽宗教に従っている人々を、神はどの様にご覧になっているかについても、私たちがもう少し深く理解できる助けとなります。彼らは真理を一度も聞かされたことがない為に無知で、哀れな人たちなのでしょう。その全ての責任は、彼らに効果的に伝道してこなかった教会にあるのでしょうか。

いいえ、そのような人たちは真理に無知である訳ではありません。彼らは聖書を信じるクリスチャンが知っている全てのことを知っている訳ではないかもしれませんが、神が、その創造の御業を通して、またその人たちに与えた良心を通して、更には彼らに起こるわざわいを通して、ご自身を表しており、彼らはその全てを知っています。例え彼らが一度もクリスチャンに会ったことがなく、また福音を聞いたことがないとしても、彼らは、その人生を通して、神が悔い改める様召しておられるのです。

## 弟子をつくる指導者

更に言うと、彼らは神に対して、心を柔らかくしているか、もしくは固くしているのです。

パウロは未信者の無知について書き、またその理由をも明らかにしました。

そこで私は、主にあって言明し、おごそかに勧めます。もはや、異邦人がむなしい心で歩んでいるように歩んではなりません。彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいのちから遠く離れています。道徳的に無感覚となった彼らは、好色に身をゆだねて、あらゆる不潔な行ないをむさぼるようになっていきます（エペソ 4:17-19）。

異邦人が無知である理由は、「かたくなな心のゆえ」であることに注目してください。パウロはまた、彼らは「道徳的に無感覚となった」と宣言しました。彼は明らかに異邦人の心の状態について話していました。手の皮膚のたこ（訳者注：日本語訳で「無感覚」と訳されている言葉は、*callous*という英語であり、たこという意味もある）は、固いものに柔らかい皮膚がいつも接触していることでできます。たこができた皮膚は硬くなり、感覚が鈍ります。同様に、人々が絶えず神の創造、良心、わざわいを通して与える呼びに反発し続けると、彼らの心はたこの様に固くなり、それは着実に神の呼びかけに対する敏感さを失わせます。これは、統計からも一般的に、人々は年を取るに連れて受け入れ難くなることが示されている理由です。年を取れば取る程、悔い改める可能性が低くなります。賢い伝道師たちは、ターゲットを主に若者に絞っています。

### 不信仰に対する罪悪感 (The Guilt of the unbelieving)

人々が一度もクリスチャンの伝道師を聞いたことがなくても、神は彼らの罪を認めるという更なる証拠として、神は積極的に彼らを裁く、という事実が挙げられます。もし神が彼らの罪の責任を問わなかったなら、神は彼らを罰することはないでしょう。しかし神は彼らを罰するので、私たちは神がその責任を問うことにあって確信が持てます。もし神が彼らに責任を問うならば、彼らがしていることが神を喜ばせていない

## 伝道の秘訣

ことを知らなくてはなりません。

神が悔い改めるよう呼びかけたにもかかわらずそれを拒んだ人たちに、神が罰する方法の一つは、彼らの罪なる欲望に「引き渡す」ことで、彼らが罪の奴隷の深みに入るままにさせることです。パウロはこう書きました。

というのは、彼らは、神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました。

それゆえ、神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡され、そのために彼らは、互いにそのからだをはずかしめるようになりました。それは、彼らが神の真理を偽りと取り換え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。アーメン。

こういうわけで、神は彼らを恥ずべき情欲に引き渡されました。すなわち、女は自然の用を不自然なものに代え、同じように、男も、女の自然な用を捨てて男どうしで情欲に燃え、男が男と恥ずべきことを行なうようになり、こうしてその誤りに対する当然の報いを自分の身に受けているのです。

また、彼らが神を知ろうとしたがらないので、神は彼らを良くない思いに引き渡され、そのため彼らは、してはならないことをするようになりました。彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪たくみとでいっぱい

## 弟子をつくる指導者

なった者、陰口を言う者、そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、わきまのない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。彼らは、そのようなことを行なえば、死罪に当たるという神の定めを知っていながら、それを行なっているだけでなく、それを行なう者に心から同意しているのです（ローマ 1:21-32、一部強調）。

パウロは、人の罪悪感と神の御前にある説明責任という事実を強調したことに注目してください。新しく生まれ変わる体験をまだしていない人たちは「神を知っていないながら」、「神を神としてあがめず、感謝もせず」にいました。彼らは、「神の真理を偽りと取り換え」たので、彼らは神の真理と衝突したに違いありません。従って、人々が更に罪のとりことなると、神は、彼らが最も奇妙で、不自然で、倒錯したことをするに至るまで、止め処もなく悪化するままに彼らをその罪に「引き渡した」のでした。実際には神はこの様に言っています。「ということは、あなたは私に仕える様に、罪に仕えたいのか。ならばそうすればよい。私はあなたを止めない。そしてあなたは確実にあなたの愛する偽の神の奴隷となっていくであろう。」

この様な裁きの形を、神の哀れみの表れとみなす考え方さえ可能ではないか、と私は思います。その考えにあっては、人々がより正道を踏み外し、罪深くなるにつれ、その人たちはそれに気づき、起き上がるであろうと考えることが理にかなっているでしょう。人はなぜ同性愛者たちが、「なぜ私は完全な性的関係を実際持つことができない同性の人に性的魅力を覚えるのだろうか。それはおかしいことだ！」とすることができないのかと、不思議に思います。ある意味で、（彼ら自身が自分たちの性的倒錯を正当化する為によく議論する様に）神が実に「彼らをその様に造られた」と主張できますが、それは、許容範囲の中だけであり、また神は、彼らが悔い改め、神の驚くばかりの憐みを体験できる様に、彼らの目が覚めることを望んでおられる、という理由のみによるのです。

## 伝道の秘訣

その様な自問をすべきなのは同性愛者たちだけではありません。パウロは、神に仕えることを拒む人たちに下る、神の裁きの証拠となる、数多くの人をとりこにする罪について列挙しました。地上にいる人間は皆、自分たちの奇妙な行動について自問すべきです。「なぜ私は自分自身の家族を憎むのか。」「なぜ私は陰口をたたくことに満足を感じるのか。」「なぜ私は更に益々露骨なポルノを見ずにはいられないのだろうか。」神はそのような人たちを皆、彼らの偽の神の奴隷となる様、引き渡してしまいました。

勿論、誰でも、どの時点でも、自分の心を柔らかくし、悔い改め、イエスを信じることができます。地上で最も頑なな罪人たちの中でも、ある人たちは、その様にして、神が罪を洗い聖め、彼らを罪から解放しました！人は息をしている限り、神はまだその人に悔い改める機会を与えていることとなります。

### 言い訳はない (No Excuses)

パウロによると、罪人に言い訳する余地はありません。彼らは、他人を非難するのですから、何が正しいことで、何が間違っていることかを彼らが知っていることを明白にしており、従って、彼らは神の非難を受けるにふさわしいのです。

ですから、すべて他人をさばく人よ。あなたに弁解の余地はありません。あなたは、他人をさばくことによって、自分自身を罪に定めています。さばくあなたが、それと同じことを行なっているからです。 私たちは、そのようなことを行なっている人々に下る神のさばきが正しいことを知っています。 そのようなことをしている人々をさばきながら、自分で同じことをしている人よ。あなたは、自分は神のさばきを免れるのだとでも思っているのですか。 それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか (ローマ 2:1-4)。

パウロは神の辛抱と忍耐の理由は、人々に悔い改める機会を与える為であると言

## 弟子をつくる指導者

いました。更に、パウロは悔い改めて、聖い生活を送っている者たちだけが神の御国を相続することを示しました。

ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現われる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。神は、ひとりひとりに、その人の行ないに従って報いをお与えになります。忍耐をもって善を行ない、栄光と誉れと不滅のものを求める者には、永遠のいのちを与え、党派心を持ち、真理に従わないで不義に従う者には、怒りと憤りを下されるのです。患難と苦悩とは、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、悪を行なうすべての者の上に下り、栄光と誉れと平和は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、善を行なうすべての者の上にあります（ローマ 2:5-10）。

パウロは単に「イエスを救い主として受け入れる」人たちに永遠の命が保証されている、と教える人たちに同意しなかったことは明らかです。むしろ、それは悔い改めて、「忍耐をもって善を行ない、栄光と誉れと不滅のものを求める者」にです。

しかしこれは、人々はキリスト教以外の宗教を実践し続けることができ、しかも、彼らが悔い改めて神に従うならば救われる、という事を含んでいることにならないでしょうか。

いいえ、数多くの理由により、イエスから離れての救いはありません。その理由の一つは、ただイエスだけが罪の奴隷から人々を解放することができる、ということです。

しかし、もし人々が悔い改めたいのなら、彼らがイエスについて一度も聞いたことが無なければ、どうして彼らはイエスを呼び求めることを知るのでしょうか。

全ての人の心を知る神は、心から求める者に、ご自身をお示しになられます。イエスは、「捜しなさい。そうすれば見つかります。」（マタイ 7:7）と約束し、神は全ての人が神を求めることを期待しています（使徒の働き 17:26-27参照）。神はそ

## 伝道の秘訣

の絶え間なく続く神の伝道に応える心を持つ人を見る時、神はその人に、エチオピアの宦官やコルネリオの家にした様に、福音を送るでしょう。神は、タルソ人サウロの改心で証明した様に、教会の関与によって救いが左右されるような制限を受けることも一切ありません。もし誰でも心から求める人に福音を届ける人がいないのならば、神ご自身がその人のところへ行かれます！私は閉鎖された国の人々がイエスの幻を見て救われた、という現代における数多くの事例を聞いています。

### 人が宗教的になる理由 (Why People Are Religious)

偽宗教を行っている人たちの殆どは、純粋に真理を求めている訳ではない、というのは事実です。むしろ、彼らは正当化されること、もしくは自分たちの罪を覆ってくれるものを求めている為に、宗教的です。彼らは自分たちの良心に常に反することを行うので、彼らは宗教という覆いに自分たちを隠します。彼らの宗教深さによって、彼らは地獄行きに値しないと、自分自身で納得しています。このことは、仏教徒、イスラム教徒、ヒンズー教徒について言えると同様に、宗教的な「クリスチャン」（安っぽい恵みを語る福音主義のクリスチャンも含む）についても言えることです。彼らは宗教を行ってはいるのですが、彼らの良心は彼ら自身を非難しています。

仏教徒は仏像の前に、もしくは目の前に威厳をもって座る僧侶の前に、崇敬の念を込めてお辞儀をする時、その人の良心は間違ったことをしていると教えます。ヒンズー教徒が病に侵された、道端の乞食に、この人は前世で罪を犯した為に病んでいるに違いない、と考えて、思いやりを見せられなかったことを正当化する時、その人は良心の呵責を受けます。イスラム教過激派が、アラーの名によって「異教徒」の首をはねる時、その人の良心は、自分の殺意のある偽善に対して叫んでいます。福音主義の「クリスチャン」は地上に宝を積み上げ、定期的にひわいなテレビ番組を見て、他の教会員の陰口をたたきながら、自分は恵みによって救われたと信じていますが、彼の心は彼を非難します。これら全ては、罪をし続けたい人たちで、宗教の嘘を見つけ、それにより罪を犯し続けることができる信じている人たちの例です。生まれ変わりの体験がまだない宗教的な人たちの「義」は、神の期待するものに比べ、遥かに低い

## 弟子をつくる指導者

ものです。

以上のことから、神は、偽の宗教に従う人たちに対して、彼らは一度も真理を聞いたことがない、憐れまれるべき、無知な人々とは考えていません。また、彼らの無知は、教会が彼らに対して効果的に伝道をしていないせいである、とも言っていません。

繰り返しになりますが、神は教会に世界中へ福音を宣べ伝えて欲しいと願っていることを私たちは知っていますが、私たちは、「色づいて、刈り入れるばかりになっている」（ヨハネ 4:35参照）と言われるところはどこなのか、また、神の絶え間ない働きかけの努力に対して、心を柔らかくしてきた為に、福音を受け入れやすくなっている人々はどこにいるのか、私たちは聖霊の導きに従うべきです。

### 原則その四（Principle #4）

私たちがこの章の最初に見た聖書の真理から学べる最後の原則はこれです—もし神が、罪人の心が柔らかくされる希望をもって積極的に彼らを裁くならば、そこには、神の裁きに耐えた後、もしくは他の人がそれに耐えているのを見て、心を柔らかくする罪人がいることを期待すべきです。従って、わざわいの後に、今まで手の届かなかった人たちの心を動かす機会があります。

クリスチャンは、人々が苦しんでいるところで、福音を分かち合う機会を探すべきです。例えば、愛する人を最近亡くした人たちは、神が彼らに聞いて欲しいと思っていることに、もっと心を開くかもしれません。私が牧師として主に仕えていた頃、私はいつも以下の聖書の言葉を思い出して、葬儀で福音を宣言する機会を捕えました—祝宴の家に行くよりは、喪中の家に行くほうがよい。そこには、すべての人の終わりがあり、生きている者がそれを心に留めるようになるからだ（伝道者の書 7:2、一部強調）。

人が病気にかかったり、経済的打撃を受けたり、人間関係が崩されたり、災害に遭ったり、多くの罪の結果とそれに対する裁きによって苦しんでいる時、彼らは、その苦しみは、自分たちが目覚める時として与えられている、ということを知るべきで



## 伝道の秘訣

す。一時的な苦難を通して、神は永遠の裁きから罪人を救おうとしておられるのです。

### まとめ (In Summary)

神がその御国を建て上げる殆どの働きをなさいます。私たちの役割は、神に賢く協力することです。

全ての信者は、暗やみにいる人たちの注意を引く様な聖く、従順な生活を送り、いつでも自分たちの内にある希望について弁護する準備をしているべきです。

神は絶えず創造、良心、わざわいを通して、また時には福音の呼びを通して語りながら、全ての人が心を柔らかくし、悔い改める気になる様、常に働きかけています。

罪人たちは、自分たちが神に逆らっていることを知っており、例え福音を一度も聞いたことがなくても、神の前に説明責任があります。彼らの罪は彼らの心の頑なさの証拠です。彼らが止め処もなく悪化して行き、罪の奴隷とされるのは、彼らに対する神の御怒りの表れです。

宗教的な人々は、必ずしも真理を求めている訳ではありません。彼らはどちらかと言うと、彼らの宗教の嘘を信じることで、彼らの罪を正当化している様です。

神は全ての人の心の状態をご存知です。神は福音を受け入れない人たちのもとにも私たちを導くかもしれませんが、神はどちらかと言うと、福音を受け入れやすい人たちのもとへ私たちを導きます。

神は苦難を通して人々の心を柔らかくしようと働きかけておられるので、私たちは福音を宣言するそれらの機会をつかむべきです。

神は福音を世界中に届けたいと願っていますが、神は私たちが大宣教命令を全うする為に、使徒の働きで描写されている様に、神は私たちに御霊に従って欲しいと願っています。

神は、神を知ることが心から求める者には誰にでもご自身を表します。

神は私たちのメッセージが神のメッセージと調和して欲しいと思っています。

いつか全ての種族の代表が、神の御座の前で礼拝する日が来ます。その目的に向かって、私たちは神に協力して私たちの役割を全て行うべきです。従って、神の民の

### 弟子をつくる指導者

全ては、彼らが出くわす全ての種族の各人にキリストの愛を表すべきです。神はのしもべの何人かに働いて、異なる文化の人々に特になじむようにさせ、教会開拓者たちを送り支援するように、もしくは彼ら自身が行くように、と導くかもしれません。送られる者たちは、そこで弟子をつくり、彼らが弟子をつくる指導者であることを証明すべきです！

## 終わりに (Final Words)

私は神が私たちにこの本をあなたの言語で製本することを可能として下さり、またあなたがその一冊を読むようにして下さったことに大変感謝しています。これがあなたにとっても祝福であったことを願います。もしそうであるならば、そのことを私に書いて、教えていただけますか。私は英語でしか読めませんので、英語で私宛に書いていただくか、もしくは私に手紙を送る前に、誰かに英訳をしていただかなくてはなりません！

私と連絡を取る最も確実な方法は、メールを送っていただくことです。私のメールアドレスは、[tdmm@shepherdserve.org](mailto:tdmm@shepherdserve.org) です。もし電子メールが使えない方は、ぜひ私のミニストリー事務所の住所に手紙を送ってください。但し、あなたがいつこの本を手にするかによって、その住所は変わってしまっている可能性があります。いずれにせよ、2010年はこちらです。Shepherd Serve, P.O.Box 12854, Pittsburgh, PA 15241 USA.

他の教材については、以下のホームページをご覧ください。

[www.ShepherdServe.org](http://www.ShepherdServe.org)



